㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第152集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

矢田遺跡Ⅳ

旧石器・縄文時代と古墳時代住居跡編 (1)

1993

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第152集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

矢田遺跡 Ⅳ

旧石器・縄文時代と古墳時代住居跡編 (1)

1993

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

矢田遺跡（現 吉井インターチェンジ）と甘楽の谷

序

昭和61年度の着工以来、上信越自動車道建設工事はほぼ終了し、この３月いよいよ供用開始を迎えました。矢田遺跡のあります吉井地区も取り付け道路等周辺の整備も完成し、開通を待つばかりとなっています。高速道路開通に伴う地元の期待は想像以上のものがありましょう。

今回の報告は旧石器時代・縄文時代と古墳時代の住居跡が対象となっており、本報告で以下のことにはふれていませんが、矢田遺跡を含むこの地域は、国指定史跡の「多胡碑」や「続日本紀」の関連記事から、「上野国多胡郡八(矢)田郷」にあたるのではないかと推定されておりました。発掘調査の結果、「八田郷」と刻書された紡錘車をはじめ数々の文字資料の出土があり、当初の推定が証明されたという貴重な遺跡であります。

矢田遺跡は吉井インターチェンジに在り、広大な面積を持ち、各時代にわたり多くの遺構が出現したことから、発掘調査は昭和61年度から平成３年度半ばに及ぶ長期間にわたるものでした。したがって、整理事業も平成元年度よりのべ９年という長い期間が設定され、既に報告書を３巻刊行してきました。

本報告書が県民各位・研究者・各教育機関等で広く活用され、この地域の歴史を解明していく一助となることができれば幸いに存じます。

また、発掘調査・整理事業を行うにあたり、日本道路公団・群馬県教育委員会・吉井町教育委員会をはじめ多くの方々からいただきました御指導・御援助に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成５年３月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　小寺弘之

例　　言

1　本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「矢田遺跡（やたいせき）」の発掘調査報告書である。本書は、旧石器・縄文時代と古墳時代住居跡編（1）で、矢田遺跡の調査成果の分冊の4である。

2　矢田遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字矢田の周辺に所在し、大字名を遺跡名に採用している。

3　本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。

4　実際の発掘調査及び整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。

5　調査期間及び担当者

(1)　発掘調査　調査期間　昭和61年4月1日～平成2年8月27日、平成3年11月5日～11月26日

調査担当者　鬼形芳夫（昭和61年度、専門員、現高崎市教育委員会事務局文化財保護係長）
依田治雄（平成3年度、専門員、平成3年度以降課長）
中沢　悟（昭和61年度～平成3年度、専門員）
春山秀幸（昭和62・63年度、調査研究員、現藤岡市立東中学校教諭）
関口功一（昭和63・平成元年度、調査研究員、現桐生市立商業高等学校教諭）
内木真琴（昭和61・62年度、現群馬県立高崎北高等学校教諭）
富田一仁（平成元・2年度、調査研究員）
関口博幸（平成2年度、調査研究員）

(2)　整　理　整理期間　平成4年4月1日～平成5年3月31日、整理担当者　富田一仁

(3)　事　務　常務理事　白石保三郎（昭和61～63年度）、邊見長雄
事務局長　井上唯雄（昭和61・62年度）、松本浩一（昭和63～平成3年度）、近藤　功
管理部長　大沢秋良（昭和61年度）、田口紀雄（昭和62～平成2年度）、佐藤　勉
調査研究部長　上原啓巳（昭和61～63年度）、神保侑史
関越道上越線調査事務所所長　井上　信（昭和61～63年度）、高橋一夫（平成元・2年度）
阿部千明（平成3年4月～11月）、松本浩一（平成3年12月～3月）、吉田　肇
総括次長　片桐光一（昭和61～平成元年度）、大澤友治（平成2・3年度）
次長　原田恒弘（昭和62年度）、徳江　紀（昭和63～平成2年度）
課長　長谷部達雄（昭和61年度）、鬼形芳夫（昭和62～平成2年度）、依田治雄
庶務課　係長代理　黒澤重樹（昭和61～63年度）、宮川初太郎（平成元～2年度）
主任　国定　均（昭和63～平成元年度）、笠原秀樹（平成2・3年度）、吉田有光
臨時職員　山崎郁夫、神戸市四郎、松井留男、町田康子、本城美樹、後閑玲子、田中智恵美、高田千恵、吉田登志子、高橋あゆみ

6　報告書作成関係者

編　集　富田一仁

本文執筆　依田治雄（Ⅰ－1）、内木真琴（Ⅱ－4）、関口博幸（Ⅲ）、富田一仁（前記以外）
中沢　悟・内木真琴・春山秀幸・関口功一・富田一仁（Ⅳ・Ⅴ、分担は、事実記載の

末尾に明示した）

遺構写真　鬼形芳夫、依田治雄、中沢　悟、内木真琴、春山秀幸、関口功一、富田一仁、関口博幸

遺物保存処理　関　邦一（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）
小材浩一（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員）
樋口一之（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員）
土橋まり子（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団非常勤嘱託員）

遺物写真　佐藤元彦（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）

遺物観察　富田一仁、関口博幸（旧石器）

整理補助　遠藤栄子、柿田順子、酒井史恵、下山弥生、堀米弘美、峯岸貞子、上原明子

委託関係　【航空写真】㈱青高館　【遺構測量、遺構・遺物トレース】㈱測設
【石材鑑定】陣内主一氏にそれぞれ委託した。

7　出土遺物・図面は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。

8　報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。（敬称略、50音順）

吉井町教育委員会、石井克巳、井上唯雄、井上　太、岩本次郎、内田憲治、大平　聡、加藤　修、唐沢保之、小林昌二、小森哲也、小森紀男、志村　哲、陣内主一、関　和彦、大工原豊、高橋一夫、田熊清彦、津野　仁、東野治之、仲山英樹、野田嶺志、橋口尚武、平川　南、前沢和之、前原　豊、丸山治雄、宮下健司、宮瀧交二、茂木　努、茂木由行、森田　悌、矢野建一、若狭　徹

9　発掘調査従事者

青木いせ、天田文子、（故）新井克巳、新井幸子、新井すみ子、新井高子、新井まつ子、新井　緑、新井富貴子、新井真弓、飯塚和良、飯塚初代、飯塚　房、伊倉茂登子、井田松寿、今井　好、浦野千代子、江原まさ子、遠藤秀子、大木みさ子、大木みつ、落合君子、鬼形田鶴子、加藤節子、金井すみ江、金井はる、金沢友次、神戸ハツエ、神戸　啓、喜多川源造、木村ハナ子、工藤きみよ、栗原　清、黒沢敦子、黒沢京子、黒沢　治、小嶋八重子、小林愛子、小林きよ子、小林善三、小林初美、佐藤八千代、斎藤友枝、斎藤初子、斎藤英子、斎藤政宏、斎藤美知子、志賀シゲ子、志賀　大、紫藤カヲル、紫藤　孝、篠崎とよ、柴崎太郎、島田八千代、清水桂子、清水千代、白井精一、神保恵子、神保すみ江、神保　進、杉田きくの、鈴木ふさ子、鈴木幸男、高田　嵩、高田三枝子、高橋千恵子、高橋ちよ子、高橋春代、滝沢利子、竹内栄子、建部すみ子、田中みき江、田端春治、佃　満、寺尾克代、中村いち、櫛島静子、櫛島豊続、野口節郎、野口照子、野中正江、長谷川良一、長谷川高子、林　敏子、原口葉子、平田　昇、藤本ひろ子、本間敏子、松本タツノ、松本良子、三ケ島富二郎、三木時一、宮下憲子、村上繁代、望月登代子、百瀬美子、森　利子、森　基司、矢田部喜代美、山崎孝子、湯浅安代、吉田良子、吉田たづ子、（故）吉田一子、若林さく子、若林てい子、若林トヨ子

（敬称略、50音順）

上記以外にも、周辺地域の多くの方々のご協力を受けた。

凡　　例

1　各遺構実測図の縮尺は次の通りである。

（縄文）住居跡　1／30、埋甕・土壙　1／20

（古墳）住居跡　1／60、炉・竈等付属施設1／30を原則に、基準としてスケールを配している。

2　遺構実測図に記した断面基準線等は、いずれも海抜標高を表す。

3　遺構実測図の方位記号は、座標北を示す（国土座標第IX系）。

4　遺物実測図の縮尺は、次の通りである。

（縄文）土器拓本1／3、石鏃1／1、石匙1／2、石斧・剝片石器・磨石類1／3、
石皿・多孔石・石棒1／4

（古墳）甕・甑・壺・鉢・盤1／4、高坏・坏・蓋1／3、石製品・鉄製品1／2

を基本としており、それ以外はその都度縮尺を示した。

5　遺構実測図中のスクリーントーンは下記のことを示す。

（遺構）　遺構下部　焼土　灰　粘土

その他の場合はその都度示す。（なお、焼土に使用したスクリーントーンは繊維土器にも使用した。）

遺構図面に関しては、必要に応じ遺物分布のドット図を作成したが、シンボル・マークは下記のことを示す。

● 土器類　△ 石器類　▲ 鉄器類

6　出土遺物については、遺物観察表を用いて記した。なお遺物番号は、遺物実測図・遺構実測図内遺物番号・遺物観察表遺物番号・写真図版遺物番号に一致する。

7　遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修(財)日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」1988年度版を使用している。

8　住居跡の面積値は、プラニメーターで3回計測し、その平均値を用いている。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表 目 次
図版目次
抄　録

Ⅰ　発掘調査に至る経緯及び経過 …… 3
　1．発掘調査に至る経緯…… 3
　2．調査の方法と経過…… 4
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 7
　1．地理的環境…… 7
　2．歴史的環境…… 7
　3．遺跡の概要…… 8
　4．基 本 層 序……13
Ⅲ　旧石器時代の遺構と遺物……14
　1．概　　要……15
　2．石　　器……15
Ⅳ　縄文時代の遺構と遺物……19
　1．概　　要……19
　2．竪穴住居跡……22
　3．埋　　甕……42
　4．土　　壙……49
　5．遺構外出土遺物……52
　(1) 土　　器
　(2) 石　　器
Ⅴ　古墳時代の遺構と遺物……63
　1．概　　要……63
　2．竪穴住居跡……66
Ⅵ　ま　と　め ……206

発掘報告書抄録
写真図版
付　　図

挿 図 目 次

第 1 図　矢田遺跡調査区及びグリッド配置図…… 4
第 2 図　矢田遺跡と周辺遺跡…… 9
第 3 図　矢田遺跡周辺図……10
第 4 図　基本層序概念図……13
第 5 図　旧石器時代調査全体図……14
第 6 図　1号礫群……15
第 7 図　1号ブロック全体図……16
第 8 図　11次調査区出土の石器(1) ……17
第 9 図　11次調査区出土の石器(2) ……18
第10図　縄文時代の遺構分布図……21
第11図　541号住居跡実測図(1)……22
第12図　541号住居跡実測図(2)……23
第13図　541号住居跡出土遺物実測図(1)……24
第14図　541号住居跡出土遺物実測図(2)……25
第15図　541号住居跡出土遺物実測図(3)……26
第16図　541号住居跡出土遺物実測図(4)……27
第17図　574号住居跡実測図(1)……29
第18図　574号住居跡実測図(2)……30
第19図　574号住居跡実測図(3)及び出土遺物実測図(1) ……31
第20図　574号住居跡出土遺物実測図(2)……32
第21図　574号住居跡出土遺物実測図(3)……33
第22図　574号住居跡出土遺物実測図(4)……34
第23図　574号住居跡出土遺物実測図(5)……35
第24図　574号住居跡出土遺物実測図(6)……36
第25図　578号住居跡実測図 ……38
第26図　578号住居跡出土遺物実測図(1)……39
第27図　578号住居跡出土遺物実測図(2)……40
第28図　1号・2号埋甕実測図……42
第29図　3号・4号埋甕実測図……43
第30図　5号・6号・7号埋甕実測図……44
第31図　1号・2号埋甕出土遺物実測図……45
第32図　3号・4号埋甕出土遺物実測図……46
第33図　5号・7号埋甕出土遺物実測図……47
第34図　1号・2号土壙実測図……49
第35図　3号土壙実測図及び1号土壙出土遺物実測図……50
第36図　2号・3号土壙出土遺物実測図……51
第37図　遺構外出土土器実測図(1) ……54
第38図　遺構外出土土器実測図(2) ……55
第39図　遺構外出土土器実測図(3) ……56
第40図　遺構外出土石器実測図(1) ……57
第41図　遺構外出土石器実測図(2) ……58
第42図　遺構外出土石器実測図(3) ……59
第43図　古墳時代の遺構分布図……65
第44図　43号住居跡実測図……66
第45図　43号住居跡出土遺物実測図……67
第46図　54号住居跡実測図……67
第47図　54号住居跡出土遺物実測図……68
第48図　591号住居跡実測図及び出土遺物実測図 ……69
第49図　643号住居跡実測図 ……70
第50図　643号住居跡出土遺物実測図 ……71
第51図　359号住居跡実測図 ……72
第52図　359号住居跡出土遺物実測図 ……73
第53図　633号住居跡実測図 ……74
第54図　633号住居跡出土遺物実測図(1)……75
第55図　633号住居跡出土遺物実測図(2)……76
第56図　419号住居跡実測図(1)……77
第57図　419号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図……78
第58図　450号住居跡実測図(1)……80
第59図　450号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1) ……81
第60図　450号住居跡実測図(3)及び出土遺物実測図(2) ……82
第61図　453号住居跡実測図(1)……84
第62図　453号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図……85
第63図　462号住居跡実測図(1)……86
第64図　462号住居跡実測図(2)……87
第65図　462号住居跡出土遺物実測図(1)……88
第66図　462号住居跡出土遺物実測図(2)……89
第67図　462号住居跡出土遺物実測図(3)……90
第68図　466号住居跡実測図(1)……92
第69図　466号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1) ……93
第70図　466号住居跡出土遺物実測図(2)……94
第71図　466号住居跡出土遺物実測図(3)……95
第72図　466号住居跡周辺遺構重複関係図 ……97
第73図　467号住居跡実測図(1)……98
第74図　467号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図……99
第75図　469号住居跡実測図(1) ……100
第76図　469号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)……101
第77図　469号住居跡出土遺物実測図(2) ……102
第78図　469号住居跡出土遺物実測図(3) ……103
第79図　478号住居跡実測図(1) ……106
第80図　478号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)……107
第81図　478号住居跡出土遺物実測図(2) ……108
第82図　481号住居跡実測図(1) ……110
第83図　481号住居跡実測図(2) ……111
第84図　481号住居跡出土遺物実測図(1) ……112
第85図　481号住居跡出土遺物実測図(2) ……113
第86図　481号住居跡出土遺物実測図(3) ……114
第87図　498号住居跡実測図(1) ……116
第88図　498号住居跡実測図(2) ……117
第89図　498号住居跡実測図(3)及び出土遺物実測図(1)……118
第90図　498号住居跡出土遺物実測図(2) ……119
第91図　498号住居跡出土遺物実測図(3) ……120
第92図　498号住居跡出土遺物実測図(4) ……121
第93図　498号住居跡出土遺物実測図(5) ……122
第94図　498号住居跡出土遺物実測図(6) ……123
第95図　499号住居跡実測図(1) ……126
第96図　499号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図 ……127
第97図　505号住居跡実測図(1) ……128
第98図　505号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図 ……129
第99図　511号住居跡実測図及び出土遺物実測図……130
第100図　536号住居跡実測図(1) ……131
第101図　536号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図 ……132
第102図　540号住居跡実測図(1) ……134
第103図　540号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図 ……135
第104図　553号住居跡実測図……137
第105図　553号住居跡出土遺物実測図……138
第106図　556号住居跡実測図及び出土遺物実測図……140
第107図　558号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1) ……141
第108図　558号住居跡出土遺物実測図(2) ……142
第109図　561号住居跡実測図(1) ……143
第110図　561号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)……144
第111図　561号住居跡出土遺物実測図(2) ……145
第112図　562号住居跡実測図……146
第113図　562号住居跡出土遺物実測図……147
第114図　564号住居跡実測図……148
第115図　564号住居跡出土遺物実測図……149
第116図　566号住居跡実測図及び出土遺物実測図……150
第117図　567号住居跡実測図及び出土遺物実測図……151
第118図　575号住居跡実測図及び出土遺物実測図……152

第119図　576号住居跡実測図(1) ……153
第120図　576号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図 ……154
第121図　592号住居跡実測図(1) ……156
第122図　592号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)……157
第123図　592号住居跡出土遺物実測図(2) ……158
第124図　609号住居跡実測図……159
第125図　609号住居跡出土遺物実測図……160
第126図　610号住居跡実測図(1) ……161
第127図　610号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図 ……162
第128図　612号住居跡実測図……163
第129図　613号住居跡実測図……164
第130図　613号住居跡出土遺物実測図……165
第131図　615号住居跡実測図(1) ……165
第132図　615号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図 ……166
第133図　619号住居跡実測図(1) ……167
第134図　619号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)……168
第135図　619号住居跡出土遺物実測図(2) ……169
第136図　620号住居跡実測図……170
第137図　620号住居跡出土遺物実測図……171
第138図　623号住居跡実測図……172
第139図　623号住居跡出土遺物実測図……173
第140図　625号住居跡実測図(1) ……174
第141図　625号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図 ……175
第142図　626号住居跡実測図……176
第143図　626号住居跡出土遺物実測図……177
第144図　631号住居跡実測図……178
第145図　631号住居跡出土遺物実測図……179
第146図　632号住居跡実測図(1) ……180
第147図　632号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)……181
第148図　632号住居跡出土遺物実測図(2) ……182
第149図　635号住居跡実測図(1)及び出土遺物実測図(1)……183
第150図　635号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(2)……184
第151図　642号住居跡実測図(1) ……185
第152図　642号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)……186
第153図　642号住居跡出土遺物実測図(2) ……187
第154図　644号住居跡実測図……188
第155図　658号住居跡実測図(1) ……189
第156図　658号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)……190
第157図　658号住居跡出土遺物実測図(2) ……191
第158図　658号住居跡周辺遺構重複関係図……193
第159図　659号住居跡実測図……194
第160図　659号住居跡出土遺物実測図……195
第161図　660号住居跡実測図(1) ……196
第162図　660号住居跡実測図(2) ……197
第163図　660号住居跡出土遺物実測図(1) ……198
第164図　660号住居跡出土遺物実測図(2) ……199
第165図　672号住居跡実測図(1) ……200
第166図　672号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図 ……201
第167図　673号住居跡実測図及び出土遺物実測図……202
第168図　674号住居跡実測図……203
第169図　674号住居跡出土遺物実測図……204
第170図　706号住居跡実測図……204
第171図　706号住居跡出土遺物実測図……205
第172図　595・660号住居跡出土遺物実測図 ……205

表　目　次

第1表　平安時代住居跡一覧表 …… 6
第2表　周辺遺跡一覧表 ……11・12
第3表　矢田遺跡石器・礫一覧表 ……18
第4表　縄文時代遺構一覧表 ……20
第5表　541号住居跡出土遺物観察表……27・28
第6表　574号住居跡出土遺物観察表……37
第7表　578号住居跡出土遺物観察表……41
第8表　1号埋甕出土遺物観察表 ……48
第9表　2号埋甕出土遺物観察表 ……48
第10表　3号埋甕出土遺物観察表 ……48
第11表　4号埋甕出土遺物観察表 ……48
第12表　5号埋甕出土遺物観察表 ……48
第13表　7号埋甕出土遺物観察表 ……48
第14表　1号土壙出土遺物観察表 ……51
第15表　2号土壙出土遺物観察表 ……51
第16表　3号土壙出土遺物観察表 ……51
第17表　遺構外出土遺物観察表 ……60～62
第18表　古墳時代住居跡一覧表 ……64
第19表　43号住居跡出土遺物観察表 ……67
第20表　54号住居跡出土遺物観察表 ……68
第21表　591号住居跡出土遺物観察表……70
第22表　643号住居跡出土遺物観察表……71
第23表　359号住居跡出土遺物観察表……73
第24表　633号住居跡出土遺物観察表……76
第25表　419号住居跡出土遺物観察表……79
第26表　450号住居跡出土遺物観察表……83
第27表　453号住居跡出土遺物観察表……85
第28表　462号住居跡出土遺物観察表……90・91
第29表　466号住居跡出土遺物観察表……95・96
第30表　467号住居跡出土遺物観察表……99
第31表　469号住居跡出土遺物観察表……103～105
第32表　478号住居跡出土遺物観察表……109・110
第33表　481号住居跡出土遺物観察表……114・115
第34表　498号住居跡出土遺物観察表……123～125
第35表　499号住居跡出土遺物観察表 ……127
第36表　505号住居跡出土遺物観察表 ……129
第37表　511号住居跡出土遺物観察表……130・131
第38表　536号住居跡出土遺物観察表 ……133
第39表　540号住居跡出土遺物観察表 ……136
第40表　553号住居跡出土遺物観察表 ……139
第41表　556号住居跡出土遺物観察表 ……140
第42表　558号住居跡出土遺物観察表 ……142
第43表　561号住居跡出土遺物観察表……145・146
第44表　562号住居跡出土遺物観察表 ……147
第45表　564号住居跡出土遺物観察表……149・150
第46表　566号住居跡出土遺物観察表 ……150
第47表　567号住居跡出土遺物観察表 ……151
第48表　575号住居跡出土遺物観察表 ……153
第49表　576号住居跡出土遺物観察表 ……155
第50表　592号住居跡出土遺物観察表……158・159
第51表　609号住居跡出土遺物観察表 ……160
第52表　610号住居跡出土遺物観察表 ……163
第53表　613号住居跡出土遺物観察表 ……165
第54表　615号住居跡出土遺物観察表……166・167
第55表　619号住居跡出土遺物観察表……169・170
第56表　620号住居跡出土遺物観察表 ……171
第57表　623号住居跡出土遺物観察表……173・174
第58表　625号住居跡出土遺物観察表 ……175
第59表　626号住居跡出土遺物観察表 ……177
第60表　631号住居跡出土遺物観察表 ……179

第61表　632号住居跡出土遺物観察表 ……182
第62表　635号住居跡出土遺物観察表 ……184
第63表　642号住居跡出土遺物観察表……187・188
第64表　658号住居跡出土遺物観察表 ……192
第65表　659号住居跡出土遺物観察表 ……195
第66表　660号住居跡出土遺物観察表……199・200
第67表　672号住居跡出土遺物観察表 ……201
第68表　673号住居跡出土遺物観察表 ……203
第69表　674号住居跡出土遺物観察表 ……204
第70表　706号住居跡出土遺物観察表 ……205
第71表　595・660号住居跡出土遺物観察表……205

図　版　目　次

巻頭図版　矢田遺跡(現　吉井インターチェンジ)と甘楽の谷
図版１　矢田遺跡全景航空写真
図版２　第８次調査区航空写真・第７次調査区航空写真
図版３　遺跡遠景・調査風景・多胡蛇黒遺跡遠景
図版４　旧石器(1)
図版５　旧石器(2)・縄文尖頭器
図版６　541号住居跡
図版７　574・578号住居跡
図版８　１・２号埋甕
図版９　３・４・５・６・７号埋甕・１・２・３号土壙
図版10　541・574号住居跡出土土器
図版11　574号住居跡出土土器
図版12　578号住居跡出土土器・１・２・５・７号埋甕
図版13　３号埋甕・１号土壙・遺構外出土土器
図版14　541・574・578号住居跡・１・２号土壙・３号埋甕出土石器
図版15　541・578号住居跡・遺構外出土石器
図版16　43・54・591号住居跡
図版17　643・359・633号住居跡
図版18　419・450・453号住居跡
図版19　453・462号住居跡
図版20　462・466号住居跡
図版21　467・469・478号住居跡
図版22　481・498号住居跡
図版23　498・499号住居跡
図版24　505・511・536・540号住居跡
図版25　540・553・556・558号住居跡
図版26　561・562号住居跡
図版27　564・566・567・575号住居跡
図版28　576・592号住居跡
図版29　609・610・612・613・615号住居跡
図版30　619・620・623・625号住居跡
図版31　625・626・631・632号住居跡
図版32　632・635・642号住居跡
図版33　642・644・658号住居跡
図版34　658・660・672・673・674・706号住居跡
図版35　43・54・591・643・359号住居跡出土土器
図版36　633・419・450号住居跡出土土器
図版37　450・453・462号住居跡出土土器
図版38　462号住居跡出土土器
図版39　462・466号住居跡出土土器
図版40　466・467・469号住居跡出土土器
図版41　469号住居跡出土土器
図版42　478号住居跡出土土器
図版43　481号住居跡出土土器
図版44　481・498号住居跡出土土器
図版45　498号住居跡出土土器
図版46　498号住居跡出土土器
図版47　499・505・511・536・540号住居跡出土土器
図版48　553・556・558号住居跡出土土器
図版49　561・564号住居跡出土土器
図版50　566・567・575・576・592・609号住居跡出土土器
図版51　610・613・615・619・620号住居跡出土土器
図版52　623・625・626・632・635・642号住居跡出土土器
図版53　658・659・660号住居跡出土土器
図版54　660・672・673・674・706号住居跡出土土器
図版55　土錘・臼玉・管玉・紡錘車・砥石
図版56　砥石・鉄製品・文字資料

抄　　録

1　遺跡の概略

本遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字矢田に位置する。本遺跡の発掘調査は、昭和61年４月１日から開始され、平成３年11月26日を以て終了した。鏑川によって生成された東西方向に連なる河岸段丘面は、群馬県下でも有数の遺跡地帯として知られており、本遺跡に隣接する地域にも各時代の遺跡の存在が知られ、徐々にその内容が明らかになりつつある。

本遺跡は、旧石器、縄文、古墳、奈良、平安、中世の遺構が検出された複合遺跡である。これまで本遺跡付近は、北方1.5kmにある「多胡碑」や『続日本紀』との関連から、『和名類聚抄』郷名の「上野国多胡郡八（矢）田郷」に比定されてきた。今回の調査は、史料上の問題としての「八（矢）田郷」について、より具体的に考古学的アプローチが行われたという意義がある。調査の成果には、これに対応する集落の存在、「八田郷」「物部郷長」の線刻のある紡錘車をはじめとする各種の文字資料出土などがあり、調査規模の大きさと相俟って、今後分析が進展すれば、当地の古代史研究の発展に寄与するところ大となるであろう。

2　遺構数量

種　別	時　代	数量	備　考
石器ブロック	旧石器	1	黒曜石製台形様石器他総数12点
礫群	旧石器	1	5点の礫により構成される
竪穴住居跡	縄文中期	3	加曽利Ｅ３、埋甕（屋外）７、土壙が検出されている
	古墳前期	4	遺物は少量である
	古墳中期	2	
	古墳後期～平安	約 740	
掘立柱建物跡		約　20	
住居状遺構		約　30	
溝		約　70	
井戸		約　20	
この他、土器廃棄場２、粘土採掘坑１、小鍛冶３、方形居館址１、ピット多数などがある。また、整理作業の進捗に伴って、総量に若干の上下はあるものと予想される。			

◎本報告は、旧石器時代の石器ブロック・礫群、縄文時代の竪穴住居跡３軒・埋甕７基・土壙３基、古墳時代の竪穴住居跡54軒を対象としている。

3　ま　と　め

調査範囲からは、旧石器時代の遺構・遺物を始め、縄文時代中期の集落の存在が判明した。弥生時代の遺構は知られていないが、古墳時代前期には再び集落が形成される。安定的に集落が営まれるのは同後期からで、奈良・平安時代まで継続する。同様の所見は、吉井町教育委員会調査の隣接する椿谷戸遺跡・柳田遺跡でも得られており、集落の範囲はさらに広がるものと思われる。

今後の整理の成果も含め、より詳細な地域史研究にとっての、膨大な基礎資料の一端が提示されるものと期待される。

矢田遺跡（やたいせき）IV

Ⅰ　発掘調査に至る経緯及び経過

1．発掘調査に至る経緯

上信越自動車道(関越自動車道上越線)は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道で、東京練馬～群馬県藤岡市までは関越自動車道新潟線との併用、藤岡ＪＣから藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・妙義町・松井田町・下仁田町を経て長野県佐久市に至り、長野県内を通過して新潟県上越市までの約280kmの自動車道である。

藤岡市～長野市間の基本計画が昭和47年に決定してから、整備計画策定のための関連公共事業調査(昭和49年)をはじめとし、文化財に関係する調査は昭和55～56年に行われている。昭和49年には基本計画ルートに対する文化財の基本的な考え方、即ち文化財保護法の遵守・指定文化財の扱い・文化財に対しては県教委と協議すること等を示し、昭和55～56年にかけての調査は想定されるルートを中心に埋蔵文化財包蔵地の面積を約100万㎡とした。以後、日本道路公団による計画は進捗し、昭和56～57年にかけて路線の発表があった。昭和59年11月、道路公団より県教委に対し分布調査の依頼があり、それをうけ文化財保護課は調査を実施、同60年３月、発掘想定面積を約100万㎡とする回答を行っている。その後、上越線地域埋蔵文化財調査計画の策定が行われ、調査実施年度は昭和61～66年の６年間(後、修正があり昭和65年度＝平成２年度までの５年間に変更)、藤岡市～富岡市の約76万㎡を群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当し、他は市町村で調査会を組織し実施することになった。

昭和61年４月、県埋蔵文化財調査事業団は多野郡吉井町南陽台に、上越線の埋蔵文化財発掘調査を担当する「関越道上越線調査事務所」を開所し調査に入った。

矢田遺跡は、羽田倉遺跡・田篠遺跡・内匠下高瀬遺跡と同じく昭和61年当初から調査を行っている。吉井インターチェンジにあたる当遺跡は、インター中心部・それにつながる東側本線部分と西側本線部分及び料金所方向に向かう北側部分の約90,000㎡にわたる広大な面積を占めるが、地形等からみて一つの遺跡としたものである。調査期間は約５年を見込み、インター中心部から北側方面、そしてインター東側本線部分へと進む大まかな計画を立て、建設工事の進展があればそれぞれに対応することで公団と協議を行った。

調査はＳＴＡ№109～111にかけてのインターにつながる東側部分から開始された。進捗につれ次々と住居跡が出現し、大規模な集落跡が展開することが確実となった。最終的に古墳時代後期から平安時代に至る竪穴住居跡を中心に740軒余を調査した。

矢田遺跡の整理は遺物・遺構ともに厖大な量であることから、のべ９年の期間が必要であるとし、平成元年度より毎年継続して行うこととした。整理の基本方針として、地域を区切ることが困難なため、時代別(地域を加味する)に実施し、最終整理で全体をまとめることとしている。

今年度で４年間整理作業を実施し、本年度は旧石器・縄文時代と古墳時代の住居跡が対象となっている。

2．調査の方法と経過

1　調査の方法

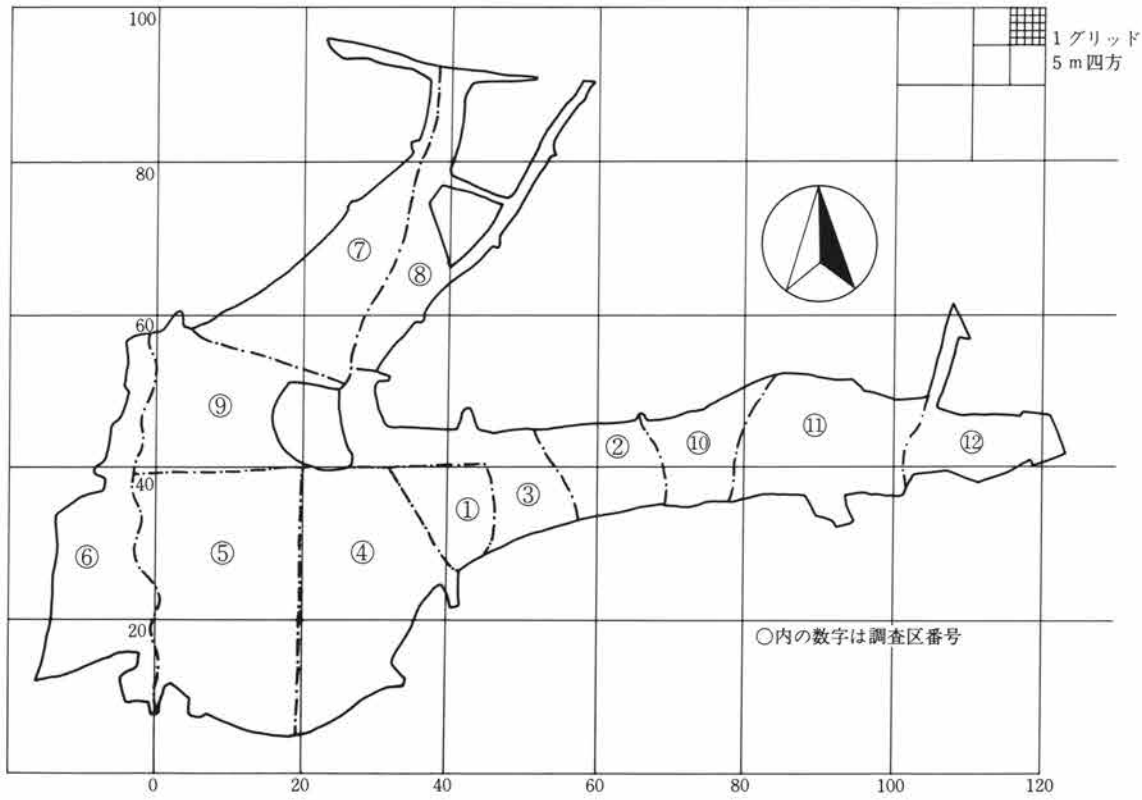
本調査区は、吉井インター・チェンジ予定地域及び、その前後の本線部分よりなる。建設工事用測量杭のＳＴＡ№106～113がほぼ矢田遺跡の調査範囲に該当する。この範囲内を、調査区南西端の国家座標Ｘ＝＋26.800，Ｙ＝－75.000を原点として5m四方のグリッドを設定した。グリッドの設定水準点の移動は、(株)測設が実施した。なお発掘調査は、地形及び道路等の条件から、便宜的に第1次調査区～第12次調査区に区分し、ほぼこれに応じて進行した。

2　調査の経過

①発掘調査

発掘調査は1986～91年度の都合六年度に亘って行われたが、未買収地の取得状況との関連や、全体の調査工程との関係で若干の前後関係があり、中山（多胡蛇黒）遺跡等の調査を行っていた時期などもある。従って、調査自体に丸六年を費やした訳ではないが、「調査日誌」だけでもＢ５ファイル５冊にもなり、残念ながらかなりの部分を削除せざるを得なかった。以下、「調査日誌（抄録）」を掲出してみる。

調　査　日　誌（抄）
◎1986年度の調査
5月21日　現場作業の開始、第１次調査区の表土掘削開始。
　29日　発掘作業員の雇用を始める。
6月２日　第１次調査区の調査を開始する。



第１図　矢田遺跡調査区及びグリッド配置図

7月1日　第1次調査区と並行して、第2次調査区の調査を開始する。
9月10日　第1・2次調査区の空撮を行う。
22日　第4次調査区の調査を開始する。
10月6日　第3次調査区の調査を開始する。
24日　第2次調査区の調査を終了する。
12月11日　第3・4次調査区の空撮を行う。
1月9日　第4次調査区79号住居跡から「八田郷」と線刻された石製紡錘車が出土する。
3月12日　第4次調査区の空撮を行う。
14日　現地見学会(～15日)、2日間で1200名程の見学者が訪れる。
25日　1986年度の調査を終了する。
◎1987年度の調査
4月15日　1987年度の調査を開始する。
5月8日　第4次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
6月11日　第4次調査区188号住居跡から「八中寸」の文字瓦が出土する。
10月2日　第4次調査区の空撮を行う。
7日　第5次調査区の調査を開始する。
11月6日　吉井町郷土資料館特別展開催に伴い、矢田遺跡出土の文字瓦を展示する。
1月21日　第4次調査区の調査を終了する。
3月8日　第5次調査区の空撮を行う。
12日　現地見学会(～13日)、2日間で655人程が見学に訪れる。
25日　1987年度の調査を終了する。
◎1988年度の調査
4月15日　1988年度の調査を開始する。
6月7日　第6次調査区の調査を開始する。
7月19日　第7次調査区の調査を開始する。
10月8日　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団創立10周年記念事業の一環として、本遺跡において遺跡見学会を実施する。
総数7685名にのぼる見学者が訪れる。
27日　第5次調査区の空撮を行う。
11月7日　第5次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
14日　第6次調査区の旧河川・石組遺構の調査を終了する。
12月1日　第5次調査区の調査を進める。
18日　第10次調査区の調査を開始する。
2月13日　第8次調査区の表土掘削を開始する。
23日　第7次調査区の空撮を行う。
28日　第9次調査区の表土掘削を開始する。
3月24日　1988年度の調査を終了する。
◎1989年度の調査
4月10日　1989年度の調査を開始する。
7月10日　第7次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
9月26日　第8次調査区(北側部分)の空撮を行う。
12月21日　第8次調査区の空撮を行う。
22日　第9次調査区の679号住居跡から「物ア(部)・一八」と線刻された石製紡錘車が出土する。
1月8日　第8次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
2月27日　第11次調査区の表土掘削を開始する。
3月9日　第9次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
23日　1989年度の調査を終了する。
◎1990年度の調査
4月9日　1990年度の調査を開始する。
5月1日　第11次調査区の728号住居跡から「八田」と線刻された石製紡錘車が検出される。
11日　第8・10次調査区の空撮を行う。
14日　矢田遺跡の調査と並行して中山遺跡の表土掘削を開始する。
16日　第8次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
21日　第10次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
6月18日　第11次調査区の空撮を行う。
20日　第11次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
21日　第11次調査区の50―88グリッドＡＴ層下から、矢田遺跡で初めて黒曜石製の台形様石器が1点検出される。
7月2日　第11次調査区に330㎡の旧石器本調査区を設定して、本日より6日まで調査を行う。
ＡＴ層下からチャート・安山岩製の台形様石器3点を含む総数12点の石器が検出された。
8月27日　第12次調査区の空撮を行う。未買収地関連で調査不能の地点を残して調査を中断し、多胡蛇黒（中山）遺跡の調査に入る。
◎1991年度の調査
11月5日　未買収地関連の調査を開始する。
12日　旧石器試掘調査を開始する。
26日　空撮を行う。矢田遺跡の全調査を終了する。

②整理作業

本年度の整理作業は、前年度の作業をうけて平成４年４月１日から、吉井町南陽台の上越線事務所内の整理棟で、担当１名・補助員７名で行われた。その概要は以下の通りである。

４月上旬	整理作業諸準備
４月中旬～６月下旬	遺物の分類・接合及び復元、鉄器保存処理
	遺構図面修正、遺物写真撮影
７月上旬～10月下旬	土器・石製品・鉄製品実測、拓本
	トレース（遺構・遺物）外注
11月上旬～１月下旬	レイアウト、図面・写真版下作成、石材鑑定
	原稿執筆、遺物観察表作成
２月８日	入札
２月10日	入稿
２月中旬以降	校正・収蔵等諸作業

なお、過去３年間に整理した平安時代の住居跡の所属年代については、第１表を参照されたい。今後の整理の進捗によって若干変動があると思われるが、編年基準は概ね以下の通りである。

９世紀前半代……須恵器坏の底部の小型化。コ字状口縁土師器甕の出現。

９世紀後半代……須恵器埦の高台貼付以後。

10世紀前半代……羽釜の出現。

10世紀後半代……土師質土器の出現。

第１表　平安時代住居跡一覧表

9C前半					9C後半					10C前半					10C後半					その他			
75	83	91	98	122	1	3	12	13	23	4	16	21	33	48	8	36	40	46	55	47	57	69	73
145	158	163	234	331	39	42	51	52	63	50	60	64	70	71	78	79	94	126	130	190	203	207	223
354	355	357	364	367	66	74	86	87	97	72	76	85	90	92	133	140	141	177	181	264	275	311	313
459	513	600	622	679	118	123	137	142	143	99	101	109	113	115	182	183	198	211	216	335	430	465	512
704	705				144	154	188	189	225	121	124	125	132	134	221	230	268	274	276	525	534	586	621
					227	229	260	263	287	135	138	139	146	151	277	282	290	294	300	720	747		
					289	296	297	298	309	184	186	191	200	201	308	314	316	318	320				
					337	339	343	353	356	205	206	208	209	212	324	334	383	384	398				
					358	372	386	391	402	218	219	226	228	231	403	408	428	519	590				
					406	410	415	418	421	233	235	236	237	240									
					425	435	451	476	477	244	249	257	261	265									
					483	495	514	526	535	266	269	270	271	272									
					549	554	563	585	595	280	281	284	285	288									
					624	646	647	651	652	292	293	306	317	340									
					653	656	670	675	676	374	377	379	400	407									
					697	711	716			424	426	434	449	454									
										457	461	464	475	479									
										482	515	517	530	531									
										532	568	570	596	608									
										654	657	661	662	663									
										664	667	684	709										
22軒					78軒					104軒					45軒					22軒			

II　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

群馬県は関東地方北西部の内陸に位置しており、周囲に新潟県・長野県・埼玉県・栃木県・福島県が接している。地形的には、北部及び西部が山地をなしており、中央部から東部にかけてが平野部である。

矢田遺跡は、群馬県南西部の多野郡吉井町大字矢田字天王原他に所在する。本遺跡の北方には鏑(かぶら)川が東流する。この鏑川は長野県境に源を発し、甘楽郡南牧村、下仁田町、富岡市、甘楽町、多野郡吉井町を経て、藤岡市上落合付近で鮎川を合わせ、高崎市倉賀野町で利根川支流の烏（からす）川に合流する。鏑川右岸域においては顕著な河岸段丘が発達しており、大きく分けて上位と下位の段丘面に分けられる。河床面からの比高は、下位段丘面で10～15mを、上位段丘面で50～60mを測る。この段丘面は各時代を通じて様々な土地利用がなされてきたが、現在は下位段丘面が水田として、上位段丘面が主に桑畑として耕地利用されている。

本遺跡は上位段丘面上の多胡(たご)丘陵東部に位置し、西は西谷川、東は土合川に挟まれた南北にのびる台地上に存在し、標高は150～160m前後を測る。この台地も実際には細かい侵食をうけ、南北や東西方向の小支谷が形成され、複雑な地形を呈している。なお調査の結果、西谷川の旧河川流路が確認されている。

2．歴史的環境

鏑川流域、特に上位段丘面は分布調査等により、濃密な遺跡の分布地帯として従来から知られていたが、大規模な発掘調査が行われたのは、昭和61年度に開始された関越道上越線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によってである。ここでは、周辺地域の発掘調査された遺跡を中心に概観することにとどめたい。(第２図は国土地理院発行の『上野吉井』『藤岡』『高崎』『富岡』25,000分の1を、第３図は吉井町役場発行の『吉井町都市計画図18・22』2,500分の１を原図として使用している)

旧石器時代

矢田遺跡をはじめとして、甘楽町の白倉下原遺跡・天引向原遺跡・天引狐崎遺跡や、吉井町の長根安坪遺跡(４)・多胡蛇黒遺跡(11)・多比良追部野遺跡(13)などがある。出土層位としては、ＡＴ層下から出土した遺跡が多い。

縄文時代

当該期の遺跡は、鏑川の両岸に分布が認められるが、時期により異なる様相を呈している。草創期・早期の遺構は確認されていないが、草創期では、矢田遺跡で尖頭器、藤岡市の竹沼遺跡(20)で有舌尖頭器等が出土している。早期では、吉井町の多比良追部野遺跡で撚糸文土器、入野遺跡(14)で押型文土器、西場脇遺跡(６)で田戸下層式土器、神保植松遺跡(８)で条痕文土器が出土している。前期の遺跡は、上位段丘面を中心に認められる。神保富士塚遺跡・神保植松遺跡では前期後半の諸磯ｂ式期の、入野遺跡・黒熊遺跡群(15)の黒熊第５遺跡では諸磯ｃ式期の住居跡が確認されている。中期の遺跡は、上位段丘面のみならず下位段丘面にも広がりを見せ、数量的にも著しく増加する傾向が窺える。また、鏑川左岸域では、富岡丘陵南部の高所にも土器の分布が知られている。黒熊八幡遺跡では、中期前半の五領ケ台式期の、長根安坪遺跡などで中期中葉の勝坂式期の住居跡が確認されている。中期後半の加曽利Ｅ式期の段階、特に加曽利Ｅ３・Ｅ４式期に

なると住居跡の確認された遺跡数が増加する。本遺跡の住居跡・埋甕等の遺構は加曽利Ｅ３式期に属するものと思われる。後期から晩期になると、全体的に遺跡数の減少する傾向が認められる。

弥生時代

中期の遺構としては、神保富士塚遺跡・神保植松遺跡で完形に近い土器を伴う土壙が確認されている。住居跡では、神保植松遺跡、富岡市の小塚遺跡・内匠日影周地遺跡・南蛇井増光寺遺跡で確認されている。後期になると遺跡数の増加が顕著で、その立地も多様化する。本遺跡に隣接する川内遺跡(12)では、住居跡や方形周溝墓が、長根安坪遺跡などでも住居跡が確認されている。

古墳時代

前期の遺跡は、本遺跡をはじめ、長根安坪遺跡・竹沼遺跡・折茂東遺跡(９)で住居跡が確認されている。中期に関しては、確認された遺跡は少なく、遺構・遺物もまた少ない。本遺跡・多比良追部野遺跡・折茂東遺跡などがある。後期の遺跡は、面的にも量的にも飛躍的に増大する。特に鏑川右岸の上位段丘面上を中心に濃密に分布し、約250軒の住居跡が確認されている本遺跡のほか、大規模集落が多く確認されている。なお、周辺の古墳に関しては、『神保下條遺跡』1992(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団を参照されたい。

奈良・平安時代

上越線関連だけでも、古墳時代後期に引き続き、多比良追部野遺跡・長根羽田倉遺跡・神保富士塚遺跡・多胡蛇黒遺跡・黒熊八幡遺跡(17)等多くの集落遺跡が認められる。また、窯跡としては、本遺跡背後の丘陵に瓦・須恵器を生産する吉井・藤岡窯跡群がある。

ところで、群馬県下では天仁元年（1108年）降下とされる浅間Ｂテフラに覆われた水田遺構が各地で発見されているが、鏑川流域でも条里型の方画地割りに規制されたと思われる水田を始め、長根羽田倉遺跡・黒熊八幡遺跡では谷戸を利用した水田遺構が確認されている。

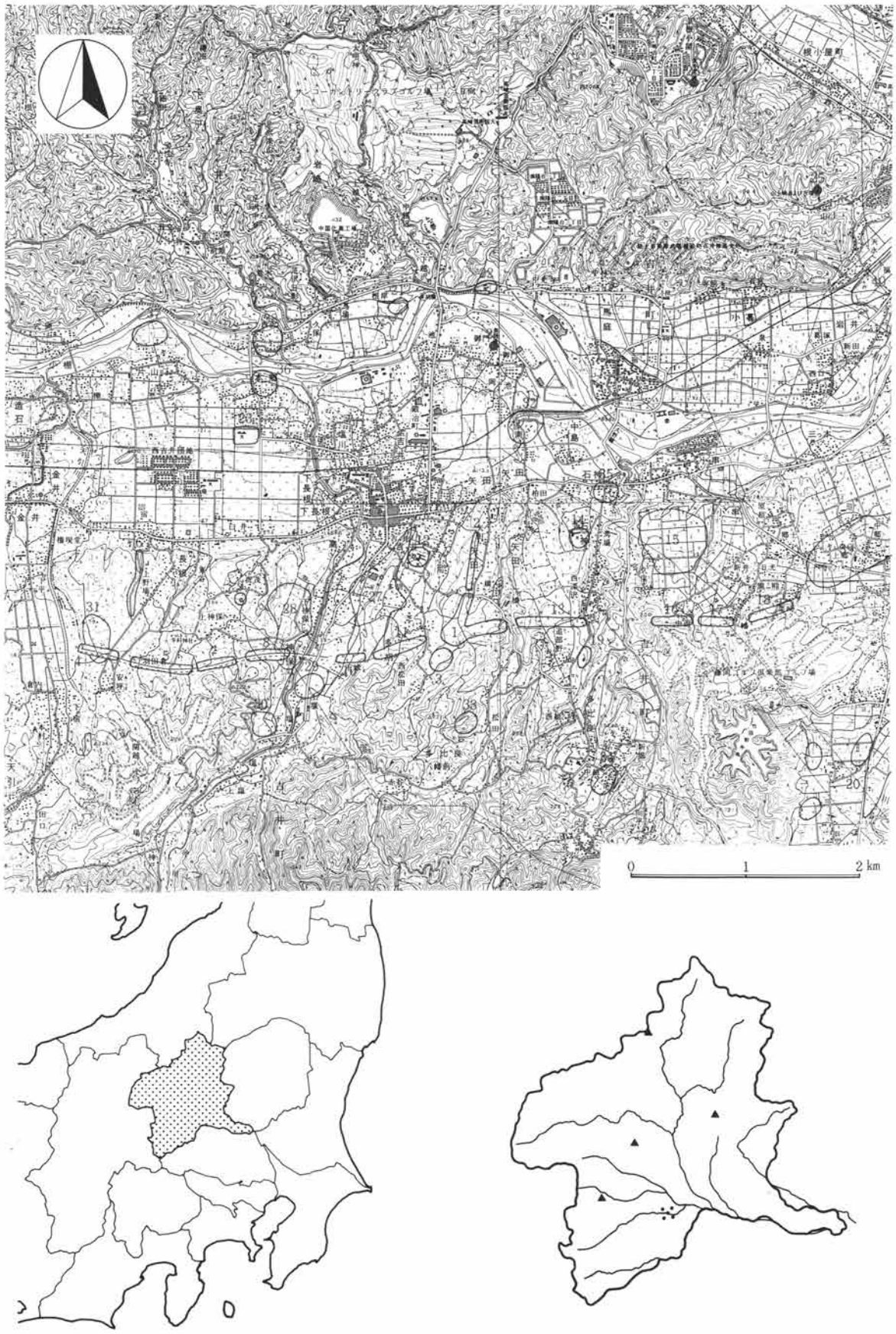
また、矢田遺跡の北方1.5kmの下位段丘面には、多胡碑(24)が所在する。『多胡碑』は、『山ノ上碑』(25)・『金井沢碑』(26)と合わせて「上野三碑」と呼称されているが、当該期の金石文は全国的にも稀であるのにもかかわらず、これら三碑が近接して所在することは、本地域の特色と言える。

なお、自然地理的環境及び中世以降の歴史的環境については、次年度以降の報告書で適宜取り上げる予定である。

３．遺 跡 の 概 要

矢田遺跡は、抄録でもふれたように旧石器、縄文、古墳、奈良・平安、中世の遺構・遺物が確認された複合遺跡であるが、遺跡の所在するローム台地上で積極的に展開されたのは、主に居住域としての利用であった。調査範囲では、縄文時代中期後半の集落が確認されている。空白期間をへて、再び集落が営まれるのは古墳時代前期になってからである。中期にも住居跡が認められるが、安定的に集落が営まれるのは同後期からで、奈良・平安時代まで継続する。現時点では、平安時代に属する住居跡と、縄文時代及び一部の古墳時代の住居跡の整理が終了したのみで、住居以外の遺構の分析や集落の時期的展開など、詳細は今後の整理の進捗を待たねばならないが、鏑川流域でも有数の集落遺跡であることが判明している。

今年度対象分の旧石器時代と縄文時代及び古墳時代の遺構・遺物の概要については、別項で述べる。



第２図　矢田遺跡と周辺遺跡

川内
椿谷戸
石井田2号橋
石井田
中谷
石井田1号橋
豊ッ橋
天皇橋
上谷
天王原
西井停車場線
日向4号橋
日向1号橋
地蔵
矢田
矢田配水池
馬場跡
日向3号橋
松田1号橋
松田
天久二沢
0
200m

第3図　矢田遺跡周辺図

第２表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
1	矢田遺跡	多野郡吉井町矢田	本報告	『矢田遺跡』1990『矢田遺跡II』1991 『矢田遺跡III』1992 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
2	椿谷戸遺跡	多野郡吉井町矢田	縄文時代中期の住居跡・土壙 古墳時代前期・後期の住居跡 奈良・平安時代の住居跡、中世の土壙	『椿谷戸遺跡　発掘調査報告書』 1989　吉井町教育委員会
3	柳田遺跡	多野郡吉井町多胡	古墳時代後期の住居跡 奈良・平安時代の住居跡	『柳田遺跡　発掘調査報告書』1989 吉井町教育委員会
4	長根安坪遺跡	多野郡吉井町長根	縄文時代の住居跡・土壙・配石遺構、弥生時代の住居跡、古墳時代前期・後期の住居跡、古墳初頭の方形周溝墓、後期の古墳(安坪古墳群に属す)	
5	長根羽田倉遺跡	多野郡吉井町長根	縄文時代の落とし穴、弥生時代の土壙、古墳時代前期～平安時代の住居跡、古墳後期の祭祀遺構、平安の水田跡、江戸天明３年以前の畠跡など	『長根羽田倉遺跡』1990 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
6	西場脇・長根宿遺跡	多野郡吉井町長根	古墳時代前期の住居跡、奈良時代の遺物集中地、平安時代の住居跡	『西場脇・長根宿遺跡』1987 吉井町教育委員会
7	神保富士塚遺跡	多野郡吉井町神保	旧石器の石器・礫、縄文の住居跡・土壙・弥生の土壙、古墳前期・後期の住居跡、奈良・平安の住居跡、江戸の小竪穴遺構	
8	神保植松遺跡	多野郡吉井町神保	縄文前期の住居跡・包含層、弥生の住居跡、古墳の住居跡・方形周溝墓・古墳、奈良・平安の住居跡、中世城郭（植松城）の主郭など	
9	折茂東遺跡	多野郡吉井町長根	弥生後期の住居跡・方形周溝墓、古墳前・中・後期と平安の住居跡	『東沢遺跡　折茂東遺跡』1987 吉井町教育委員会
10	神保下條遺跡	多野郡吉井町神保	弥生中期の土壙、古墳前期・奈良の住居跡、古墳（多胡古墳群に属する）、中世末の館跡 江戸天明３年以前の水田・畠跡	『神保下條遺跡』1992 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
11	多胡蛇黒遺跡	多野郡吉井町多胡	旧石器時代の石器・礫、古墳時代後期～平安時代の住居跡など	
12	川内遺跡	多野郡吉井町川内	弥生後期の住居跡・方形周溝墓、古墳～奈良・平安の住居跡など	『川内遺跡発掘調査報告書』1982 吉井町教育委員会
13	多比良追部野遺跡	多野郡吉井町多比良	古墳時代中期・後期住居跡、奈良・平安時代の住居跡、ＡＴ層下の旧石器ユニット	
14	入野遺跡	多野郡吉井町多比良	縄文・弥生・古墳前期・後期の住居跡、中世の墓壙など、群馬県の土師器編年の学史的遺跡	『入野遺跡』1959『入野遺跡』1985 『入野遺跡III』1986 吉井町教育委員会
15	黒熊遺跡群	多野郡吉井町黒熊	縄文時代前期・中期の住居跡、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代前期・後期～奈良・平安時代の住居跡など	『黒熊遺跡群発掘調査報告書』(1)～(5)など 1981～1985 吉井町教育委員会
16	黒熊中西遺跡	多野郡吉井町黒熊	古墳時代末期～平安時代後期の住居跡、平安時代の寺院跡・道路状遺構など	『黒熊中西遺跡(１)』1992 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
17	黒熊八幡遺跡	多野郡吉井町黒熊	旧石器、縄文の住居跡・埋設土器、奈良・平安の住居跡、平安天仁元年以前の水田跡、江戸の屋敷跡など	
18	黒熊栗崎遺跡	多野郡吉井町黒熊	古墳後期～奈良・平安時代の住居跡など	
19	東沢遺跡	多野郡吉井町多比良	古墳時代後期～奈良・平安時代の住居跡など	『東沢遺跡　折茂東遺跡』1987 吉井町教育委員会
20	竹沼遺跡	藤岡市西平井・緑埜	縄文時代中期の住居跡・土壙、弥生時代の住居跡・土壙、古墳時代前期・後期の住居跡・滑石工房跡など	『Ｆ１　竹沼遺跡』1978 藤岡市教育委員会

II　遺跡の立地と環境

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
21	富岡遺跡	多野郡吉井町岩崎	縄文時代中期包含層、平安時代の住居跡	『富岡遺跡』1989 吉井町教育委員会
22	川福遺跡	多野郡吉井町馬庭	奈良・平安時代住居跡、土錘49点出土	『川福遺跡』1986 吉井町教育委員会
23	道六神遺跡	多野郡吉井町本郷	中・近世溝、平安時代の住居跡	『道六神遺跡』1986 吉井町教育委員会
24	多胡碑	多野郡吉井町池	和銅4年(711)の多胡郡設置の記念碑とされる、上野三碑のひとつ	
25	山ノ上碑及び古墳	高崎市山名町	天武9年(681)長利僧によって母のために建立された墓誌	
26	金井沢碑	高崎市根小屋町	神亀3年(726)佐野三家一族で祖先・父母の菩提のために信仰を表明した石碑	
27	多胡古墳群	多野郡吉井町多胡・神保	古墳時代後期を中心とした群集墳、上毛古墳総覧では91基をあげている	『神保下條遺跡』1992 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
28	神保古墳群	多野郡吉井町神保	古墳時代後期の群集墳、上毛古墳総覧では63基をあげている	
29	塩I古墳群	多野郡吉井町塩	古墳時代後期の群集墳、上毛古墳総覧では10基をあげている	
30	塩II古墳群	多野郡吉井町塩	古墳時代後期の群集墳、上毛古墳総覧では12基をあげている	
31	安坪古墳群	多野郡吉井町長根	古墳時代後期の群集墳、上毛古墳総覧では44基をあげている	
32	塚原古墳群	多野郡吉井町池	古墳時代後期の群集墳、上毛古墳総覧では44基をあげている	『蛇塚古墳』1987 吉井町教育委員会
33	山ノ神古墳群	多野郡吉井町多比良	古墳時代後期の群集墳、上毛古墳総覧では7基をあげている	
34	中ノ原古墳群	多野郡吉井町多比良	古墳時代後期の群集墳、上毛古墳総覧では10基をあげている	
35	祝神古墳群	多野郡吉井町多比良	古墳時代後期の群集墳、上毛古墳総覧では11基をあげている	
36	本郷古墳群	多野郡吉井町本郷	古墳時代後期の群集墳、上毛古墳総覧では21基をあげている	
37	片山古墳群	多野郡吉井町片山	古墳時代後期の群集墳、上毛古墳総覧では7基をあげている	平成3年、片山1号墳を調査
38	岩崎古墳群	多野郡吉井町岩崎	古墳時代後期の群集墳、上毛古墳総覧では6基をあげている	
39	白石古墳群	藤岡市白石	中期から後期にかけての大型前方後円墳と後期の群集墳からなり、終末期古墳も含む	戦前から現在まで多くの発掘調査が実施されている
40	山名古墳群	高崎市山名町	後期の前方後円墳と群集墳から構成されている	平成元年、円墳1基を調査し、歯のある人物埴輪出土

4．基　本　層　序

矢田遺跡は、前章で述べたように鏑川右岸の上位段丘上に位置している。南から北へ向かって緩やかな傾斜で下る段丘面では、表土の耕作土の堆積が薄く、これを除去すると直ちにいわゆる関東ローム層が現れる。これは段丘を浸食・分断する谷部への土砂の流出に加えて、広い段丘上は通年日照度が高く、冬季は西方から甘楽の谷を吹き抜ける「浅間おろし」の影響による、風化・浸食作用が大きいことに起因している。

本遺跡の基本土層は以下に示すとおりである。

第Ⅰ層　いわゆる表土。黒褐色を呈する耕作土であり、多量の浅間A軽石（Ap-Ap）を含有する。層厚は地点により大きく異なり、尾根上では50cm以上を測るが、傾斜部では10cm以下である。

第Ⅱ層～第Ⅶ層は、いわゆる関東ローム層である。

第Ⅱ層　明黄褐色ローム層。層厚は平均20cmほどである。浅間板鼻黄色軽石（As-Yp）を含み、特に下部では密度が高く一部ブロック状を成す。全体に粒子は粗く、粘性は弱い。

第Ⅲ層　暗黄褐色ローム層。層厚は平均40cmである。白色細粒子(径2～3㎜）を若干含む。第Ⅱ層に比して粒子は細かく粘性をもつ。

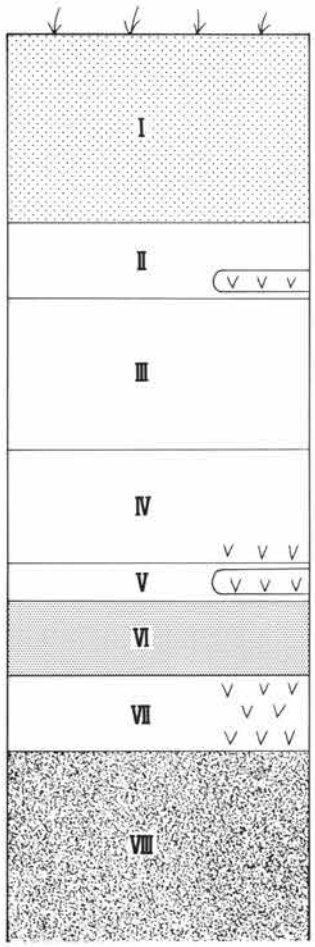
第Ⅳ層　暗黄褐色ローム層。層厚は平均30cmを測る。第Ⅲ層に比較して粒子が粗く、下部には浅間板鼻褐色軽石（As-Bp）を含む。

第Ⅴ層　明黄褐色ローム層。浅間板鼻褐色軽石がブロック状に多量に含まれ、非常に堅緻である。層厚は平均10cmである。

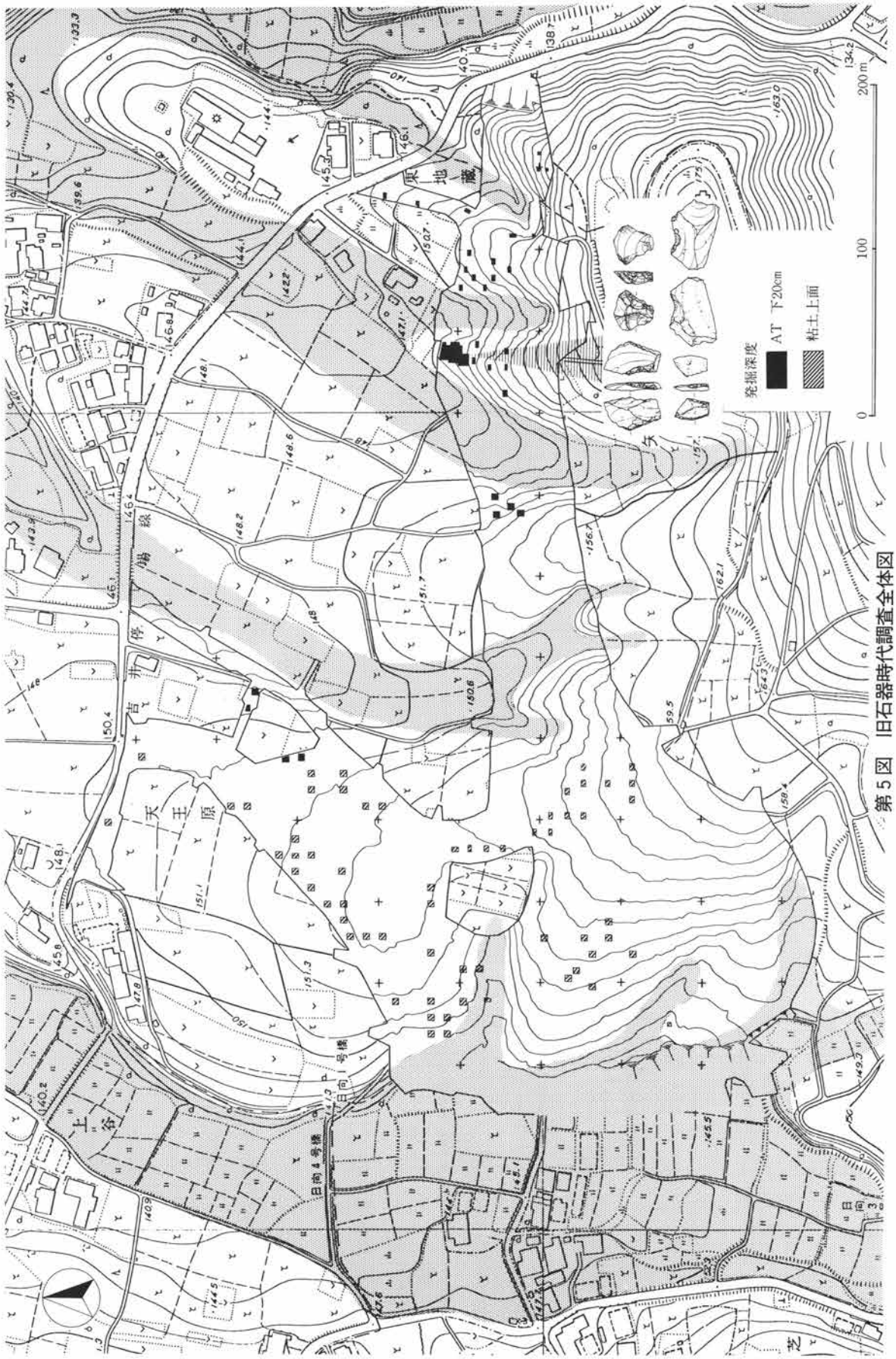
第Ⅵ層　暗褐色ローム層。層厚は平均20cmを測る。少量の浅間室田軽石（As-Mp）を含みやや粘性をもつ。いわゆる暗色帯に類する状況を示すが赤城山麓の暗色帯とは対応しない。

第Ⅶ層　浅間室田軽石を主とする層である。上半部は橙褐色、下半部は乳白色を呈する。通水層であり、非常に多量の水分を含む。層厚は30cmほどである。

第Ⅷ層　暗褐色粘土層。本層は、非常に厚く堆積しており、下部は基盤層になる。本層上部に姶良丹沢パミスとみられるガラス質の火山灰が認められる。



第４図　基本層序概念図



第5図　旧石器時代調査全体図

Ⅲ　旧石器時代の遺構と遺物

1．概　　要

旧石器時代の遺構・遺物は遺跡東端の11次調査区のＡＴ下の粘土層から、ブロック（１号ブロック）と礫群（１号礫群）が各１カ所出土した。出土地点は後背部に丘陵が迫る上位段丘面の最奥部で、２本の小支谷の谷頭部に挟まれた小舌状台地である。

１号ブロック石器群は、この小舌状台地に広がる僅かな平坦部の径10m程の範囲内から散漫に出土し、さらにそれらは中央部に空閑部をもって分布していた(第７図)。総数12点の石器により構成され、その内訳は台形様石器３点、石核１点、剥片８点である。また、１号礫群は１号ブロックの南東部に隣接して出土し、５点の礫によって構成されている。出土地点周辺部は傾斜がきついため、ローム層の堆積が薄く、室田軽石層（ＭＰ）上層までローム層が流失している部分もあり、さらに１号礫群南東部では平安時代住居の掘り方がＡＴ下まで及んでいた。

なお、旧石器時代の遺構・遺物が出土した11次調査区の東側には、矢田川を挟んで東岸台地上に多比良追部野遺跡が位置し、そこではＡＴ下から黒曜石を中心とした石器群が出土している。

2．石　　器

台形様石器（第８図１～３）

１．ガラス質安山岩製で、薄手の横長剥片を素材とする。左右両側縁及び基部の三カ所が折断によって整形され、さらにこの折断面を打面として平坦な調整加工が左側縁背面側と右側縁主要剥離面側に施される。

２．黒曜石製で、厚みのある寸詰まりの縦長剥片を素材とし、急角度なブランティングによる調整加工が右側縁に施される。この結果、左右対称の形状がかたちづくられる。背面と打面に残る自然面の在り方から母岩は比較的小振りであったことが推測される。

３．チャート製で、寸詰まりの縦長剥片を素材とする。左右両側縁に連続したブランティングによる調整加工が施される。基部は折断されており、これによって打面は除去されている。

石核（第８図４）

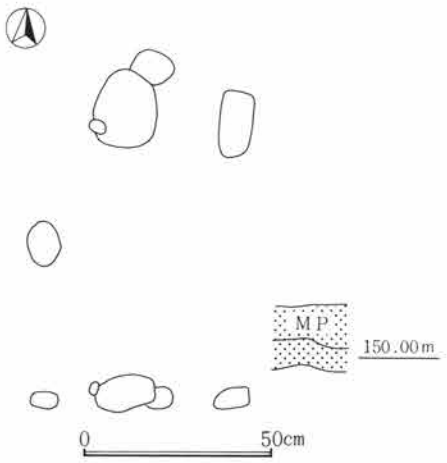
４．ガラス質安山岩製で、分割された横長剥片を素材としている。剥片生産は素材主要剥離面を切るように展開している。

剥片（第８・９図５～11、13）

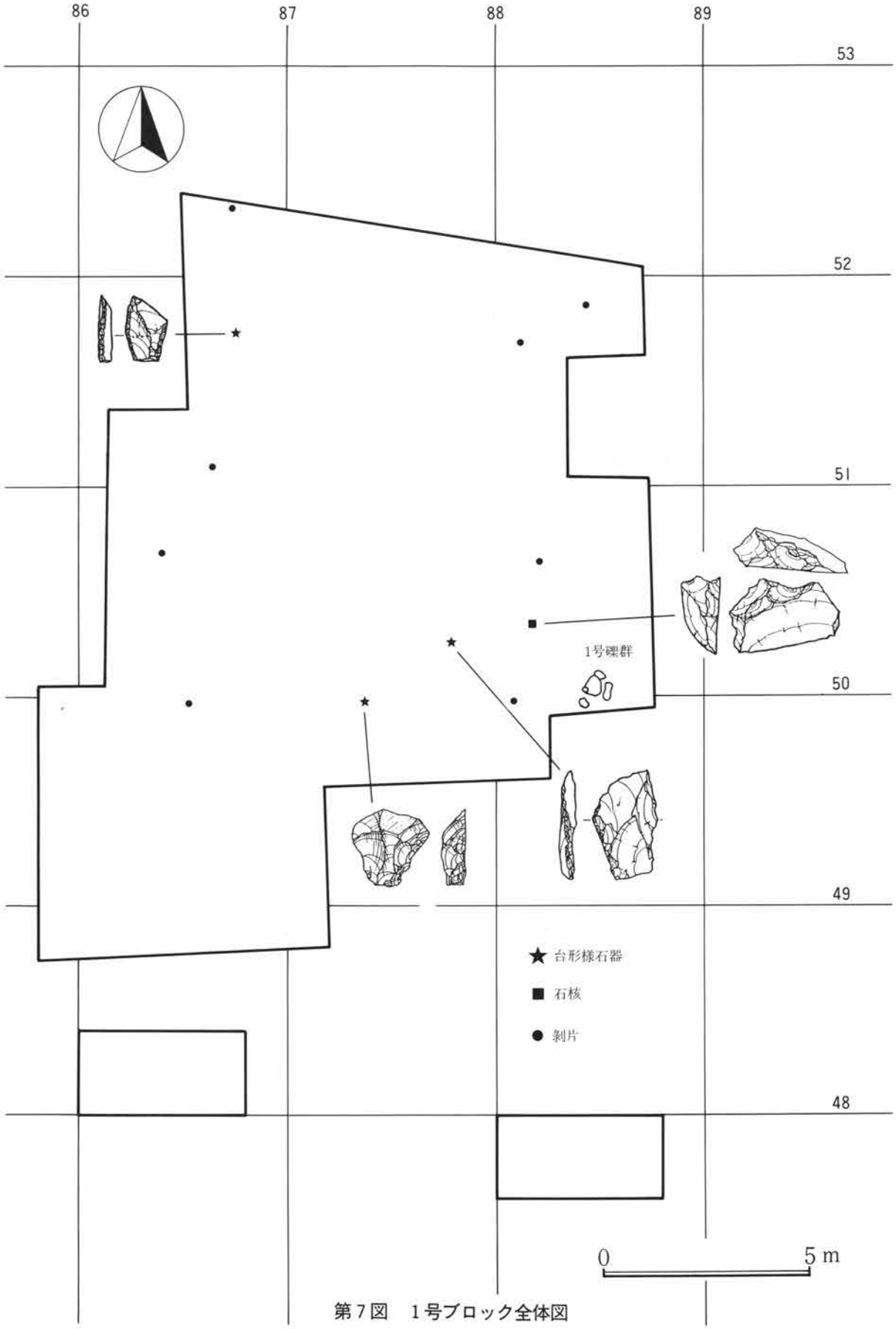
５・６はチャート製の横長剥片、７はチャート製の寸詰まりの縦長剥片、11は硬質泥岩製の幅広の縦長剥片である。13はガラス質安山岩製の横長剥片である。

石刃（第９図12）

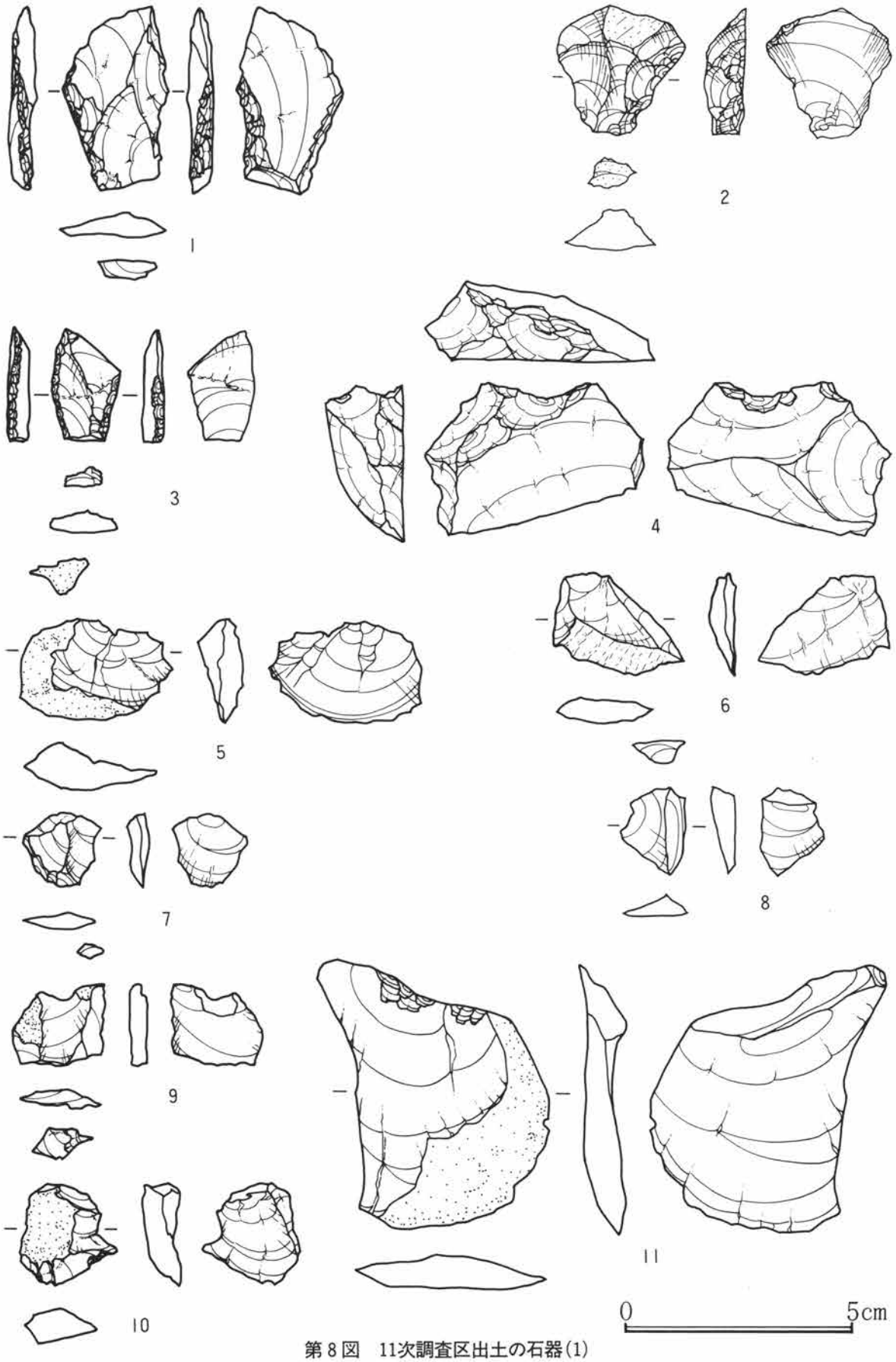
12．ガラス質安山岩製の石刃で、打面調整が施される。11次調査区の表土より出土。



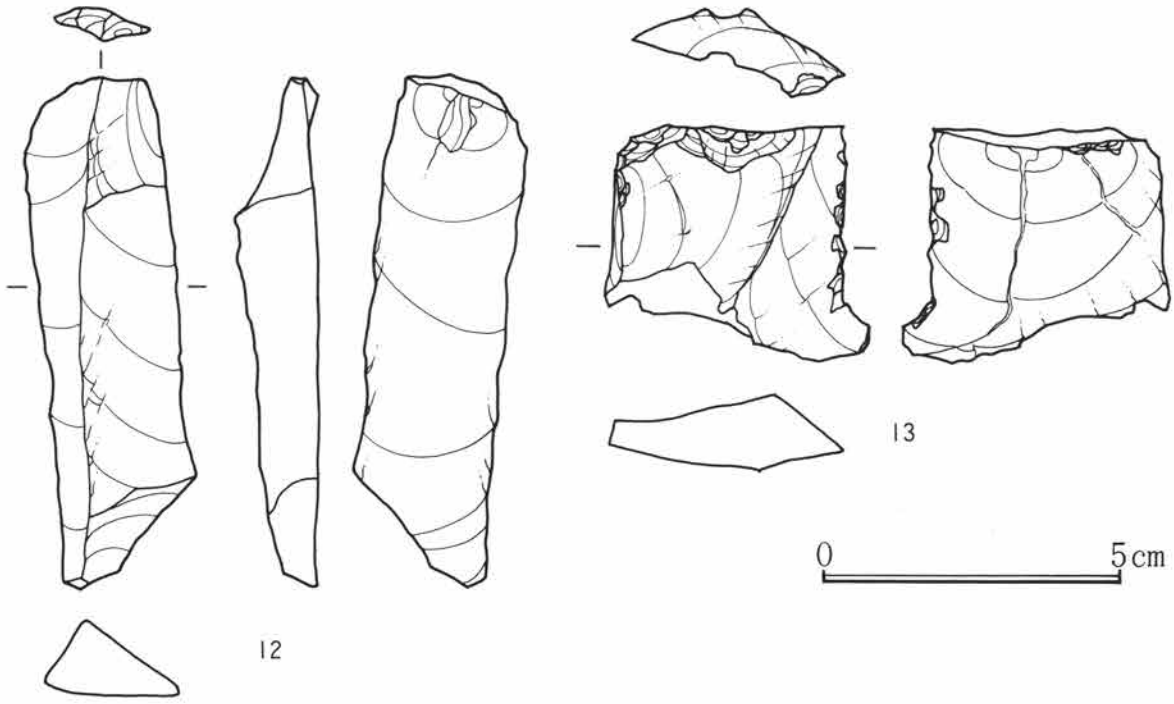
第６図　１号礫群



第７図　１号ブロック全体図



第８図　11次調査区出土の石器(1)



第９図　11次調査区出土の石器(2)

第３表　矢田遺跡石器・礫一覧表

番号	器種	折断面	石材	母岩番号	ブロック	接合	X	Y	No	N-S (cm)	E-W (cm)	標高 (m)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量(g)	挿図番号
1	剝片		チャート	Ch-1	外		45	83	1	443	306	154.41	2.2	3.4	1.0	5.71	8図－5
2	剝片		硬質泥岩	HMs-1	1		50	87	1	22	235	149.20	3.9	5.3	1.1	18.69	8図－11
3	台形様石器		黒曜石	Ob-1	1		50	88	1	7	318	149.01	2.8	2.8	0.9	5.28	8図－2
4	剝片		ガラス質安山岩	GAn-1	1		50	89	1	2	326	148.87	1.9	1.4	0.5	0.86	8図－8
5	礫		チャート	－	1礫群		50	89	2	28	268	148.75	4.7	3.4	3.1	56.00	
6	剝片		チャート	Ch-2	1		51	87	1	154	300	148.67	1.6	1.8	0.5	1.02	8図－7
7	台形様石器	○	ガラス質安山岩	GAn-2	1		51	88	1	396	103	148.86	4.0	2.4	0.6	4.85	8図－1
8	剝片	○	ガラス質安山岩	GAn-3	1		51	89	1	160	395	148.64	1.7	2.1	0.4	1.64	8図－9
9	石核	○	ガラス質安山岩	GAn-4	1		51	89	2	324	400	148.86	3.3	4.9	1.7	23.04	8図－4
10	礫		－	－	1礫群		51	89	3	494	254	148.80	－	－	－		
11	礫		安山岩	－	1礫群		51	89	4	490	246	148.67	25.5	16.4	12.7	380.00	
12	礫		安山岩	－	1礫群		51	89	5	478	240	148.76	8.4	7.3	3.3	285.00	
13	礫		安山岩	－	1礫群		51	89	6	490	216	148.71	17.1	8.8	6.3	1,055.00	
14	剝片		チャート	Ch-3	1		52	87	1	470	192	149.50	2.3	2.9	0.6	2.80	8図－6
15	台形様石器		チャート	Ch-4	1		52	87	2	138	104	148.22	2.4	1.5	0.5	1.71	8図－3
16	剝片		ガラス質安山岩	GAn-5	1		52	89	1	163	422	148.31	1.8	2.5	0.6	2.20	
17	剝片		ガラス質安山岩	GAn-6	1		52	89	2	70	165	148.39	3.8	4.5	1.4	21.80	9図－13
18	剝片		硬質泥岩	HMs-2	1		53	87	1	320	136	147.88	1.2	1.1	0.3	0.48	
19	剝片		ガラス質安山岩	GAn-7	－		表	採					2.1	2.0	0.7	3.06	8図－10
20	石刃		ガラス質安山岩	GAn-8	－		表	採					8.4	2.4	1.3	27.20	9図－12

Ⅳ　縄文時代の遺構と遺物

1．概　　要

縄文時代の遺構は、調査範囲北側の第７次調査区・第８次調査区のローム台地上の平坦面で確認されている。確認された遺構は、加曽利Ｅ３式期を主体として、住居跡３軒、埋甕７基、土壙３基である。

これらの遺構分布は調査区北側に位置しており、一定の分布域が想定される。地形と遺構分布との関連は、東西を小支谷によって侵食された舌状台地のほぼ中央に遺構が検出されており、その中でも住居跡は、埋甕や土壙に比べ舌状台地西側を意識的に選地したかのような場所に立地している。この舌状台地は、西側及び先端が発掘調査区域外であるため、この区域にも縄文時代の遺構が広がっていたようである。実際に矢田遺跡北側に隣接し、矢田遺跡において縄文時代の遺構が検出された同じ舌状台地上に位置する椿谷戸遺跡から重複関係にある加曽利Ｅ３式期の住居跡が検出されていることが、このことを裏付けている。

さて、矢田遺跡及び隣接する地区の加曽利Ｅ３式期における様相は、調査区域外に同期の遺構が仮に存在するとしても、少なくとも中央広場を有し環状に多くの住居が分布するいわゆる「定型的大規模集落」とは異なったものであることが理解されよう。検出された僅かな住居跡が比較的離れた位置に存在し、しかも時期が限定していることは「定型的大規模集落」に足る要素がなんら見いだせないと理解される。従来より矢田遺跡のように時間的に限定され、規模の小さい集落遺跡は、前述した拠点的な「定型的大規模集落」から派生した衛星的集落とする理解が一般的であったようである。「定型的大規模集落」が継続的な定住地であれば、このような解釈も成り立ち得るが近年の研究動向においては否定的な考え方も提示されている。いずれにしても、解釈を先行するのではなく、細分型式期における様相を明らかにすることが望まれるのではなかろうか。そのような意味からも、矢田遺跡における縄文時代の集落を単純に「小規模集落」として位置付けることは避けることにする。

以下、各遺構について、その概要を述べる（第４表・第10図参照）。なお、遺構外の遺物については別項で述べる。

住 居 跡

第７次調査区から541号住居跡・574号住居跡・578号住居跡が、やや離れた位置で確認された。残存状況は不良で、特に578号住居跡は、床面を検出できず、調査区外にかかるため完掘できなかった。出土遺物としては、541号住居跡から出土した「ジョッキ」型の深鉢や、578号住居跡から出土した局部磨製石鏃などがある。遺物の出土状態で興味深いのは541号住居跡で、住居壁近くの床面直上から２個体の完形土器が出土しており、竪穴住居跡に遺棄された遺物検出例として貴重である。所属時期は、いずれの住居跡も中期後半の加曽利Ｅ３式期に該当するものと思われる。３軒の分布の状況から判断すると、集落の範囲は、調査区西側に広がっていたものと思われる。

埋　甕

第７次調査区から１号・２号・３号・４号・６号埋甕が、第８次調査区から５号・７号埋甕が出土している。このうち、比較的良好に確認されたのは１号・３号・５号埋甕である。いずれも単独の屋外施設で、時期は加曽利Ｅ３式期に該当するものと思われる。

土　　壙

第７次調査区から３基確認された。形状は、楕円形または不整形を呈するが、底面は比較的平坦であった。出土遺物としては、１号土壙からは曽利式期と加曽利Ｅ３式期に該当するものと思われる土器片が各２点と打製石斧１点、２号土壙からは石皿１点、３号土壙から加曽利Ｅ３式期に該当するものと思われる土器片が１点出土している。

なお、前述した椿谷戸遺跡からは、住居跡以外に、阿玉台式期の土壙群と集石が確認されている。

第４表　縄文時代遺構一覧表

住 居 跡

住居No.	位　　置	平面形	規模(cm)	面積(m²)	壁高(cm)	主軸方向	炉	柱穴	周溝	備　　考
541	77—32	円形	300×303	5.84	27	—	地床炉	○	—	
574	73・74—28	円形？	408×393	11.59以上	15	N—29°—W	石囲炉	○	○	
578	73.71—26	不明	？×？	4.28以上	—	—	—	○	—	南隅に埋甕

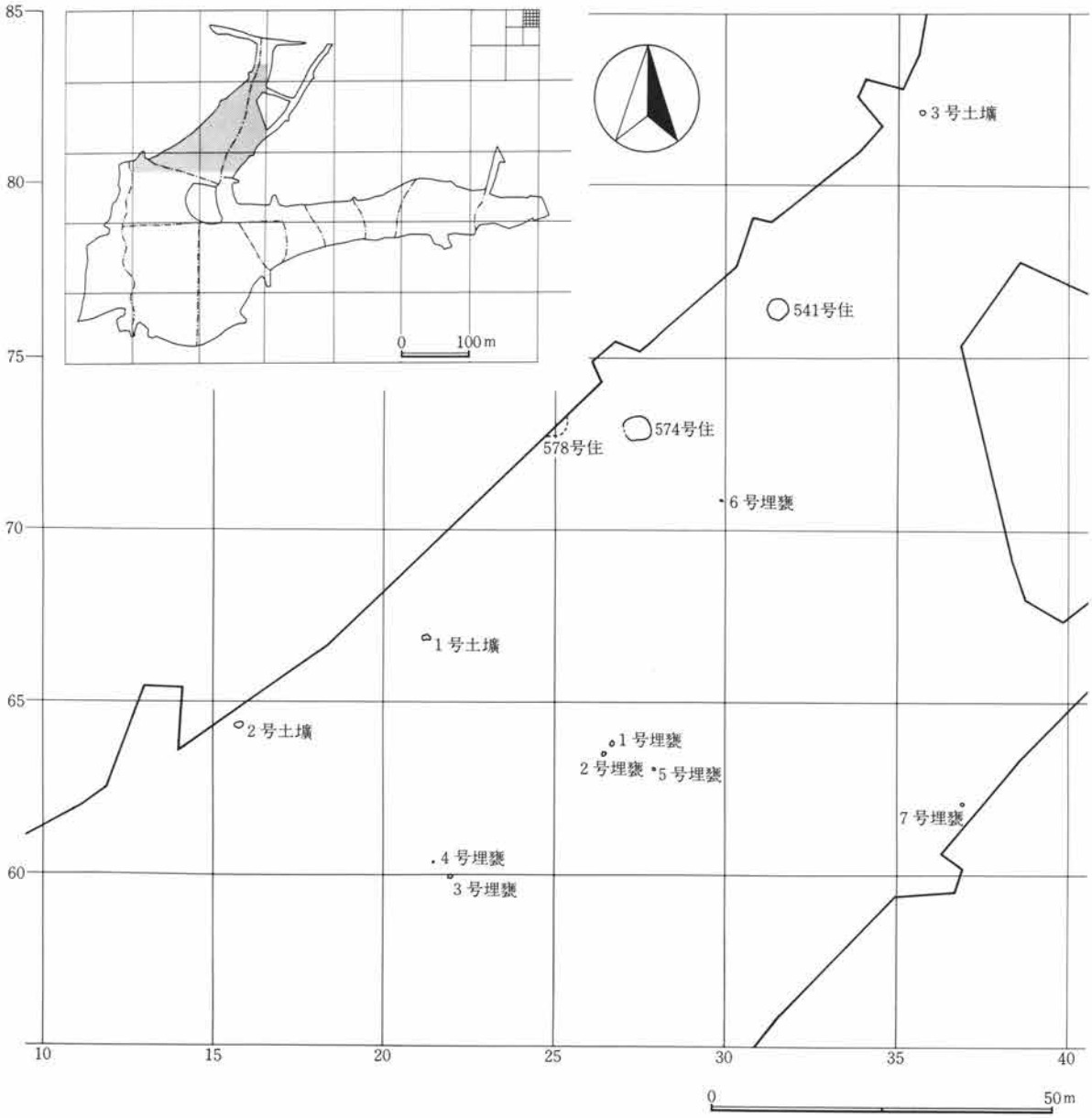
埋　甕

埋甕No.	位　　置	規模(cm)	深さ(cm)	備　　考
1	64—27	74×73	25	逆位に埋設
2	64—27	73×62	35	逆位に埋設カ
3	60・61—22・23	78×78	54	正位に埋設
4	61—22	？×？	9	底部を打ち欠いて正位に埋設カ
5	64—28	61×55	34	逆位に埋設
6	71—30	37×？	16	底部を打ち欠いて正位に埋設カ
7	63—37	44×43	26	２個体出土

※規模・深さは掘り方の計測値

土　　壙

土壙No.	位　　置	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備　　考
1	67—22	楕円形	91×85	37	２基の土壙と重複カ
2	65—16	楕円形	125×113	21	
3	83—36	不整形	80×74	21	



第10図　縄文時代の遺構分布図

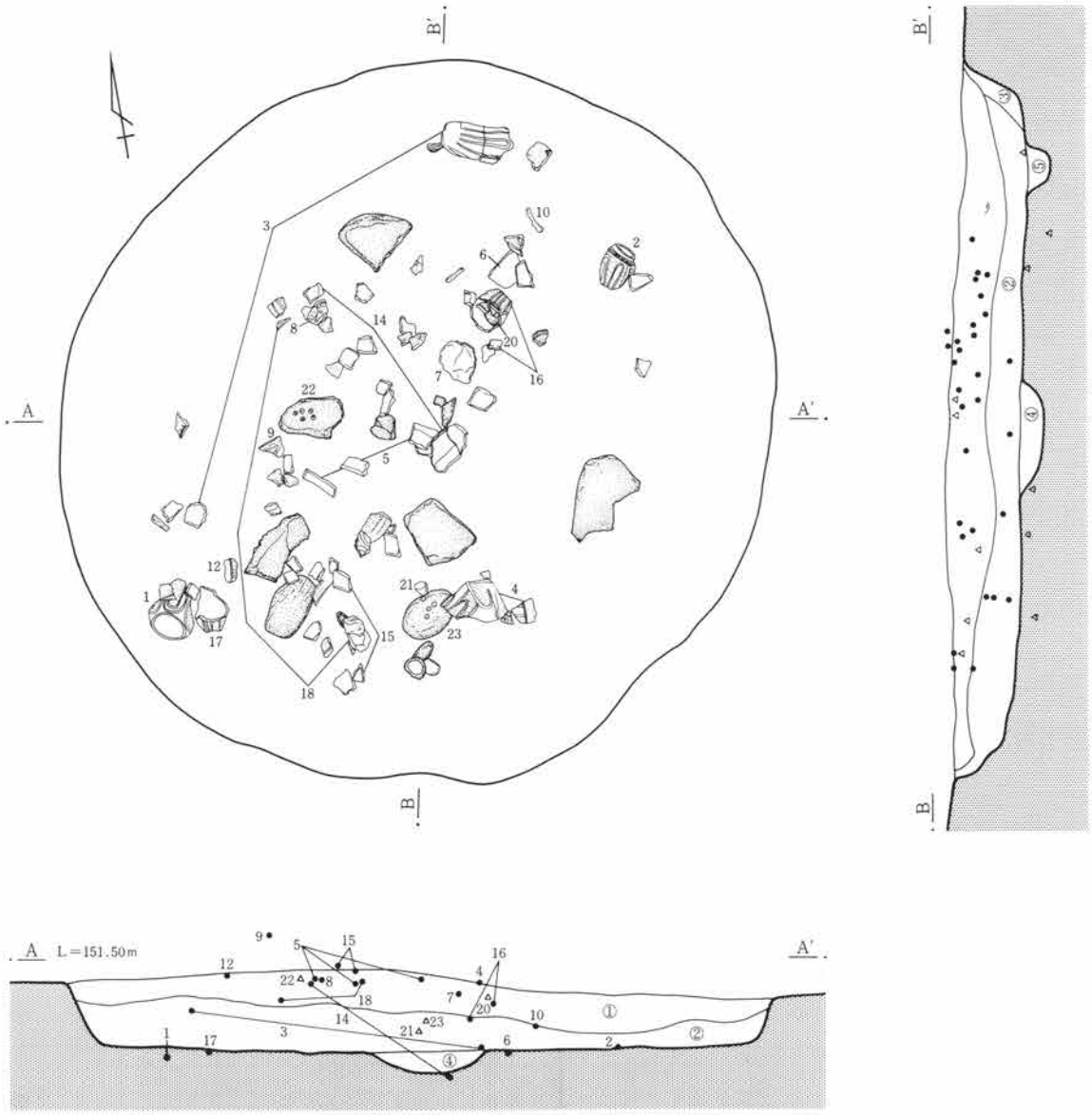
2．竪穴住居跡

541号住居跡（第11～16図、第５表、図版６・10・14・15）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、77―32グリッドに単独で位置する。本遺跡で検出された縄文時代に属する住居跡３軒の中では最北端に位置する。位置関係としては、574号住居跡（縄文）が南西方向約23mに、578号住居跡（縄文）も同方向約32mに所在する。

平面形は、東西３m00cm・南北３m03cmを測る円形を呈する。確認面からの壁高は最大で30cmを測り、緩やかに立ち上がる。

床面は、中央部周辺及び南西方向がやや低いが、ほぼ平坦であった。中央部に硬化面を形成していたが、



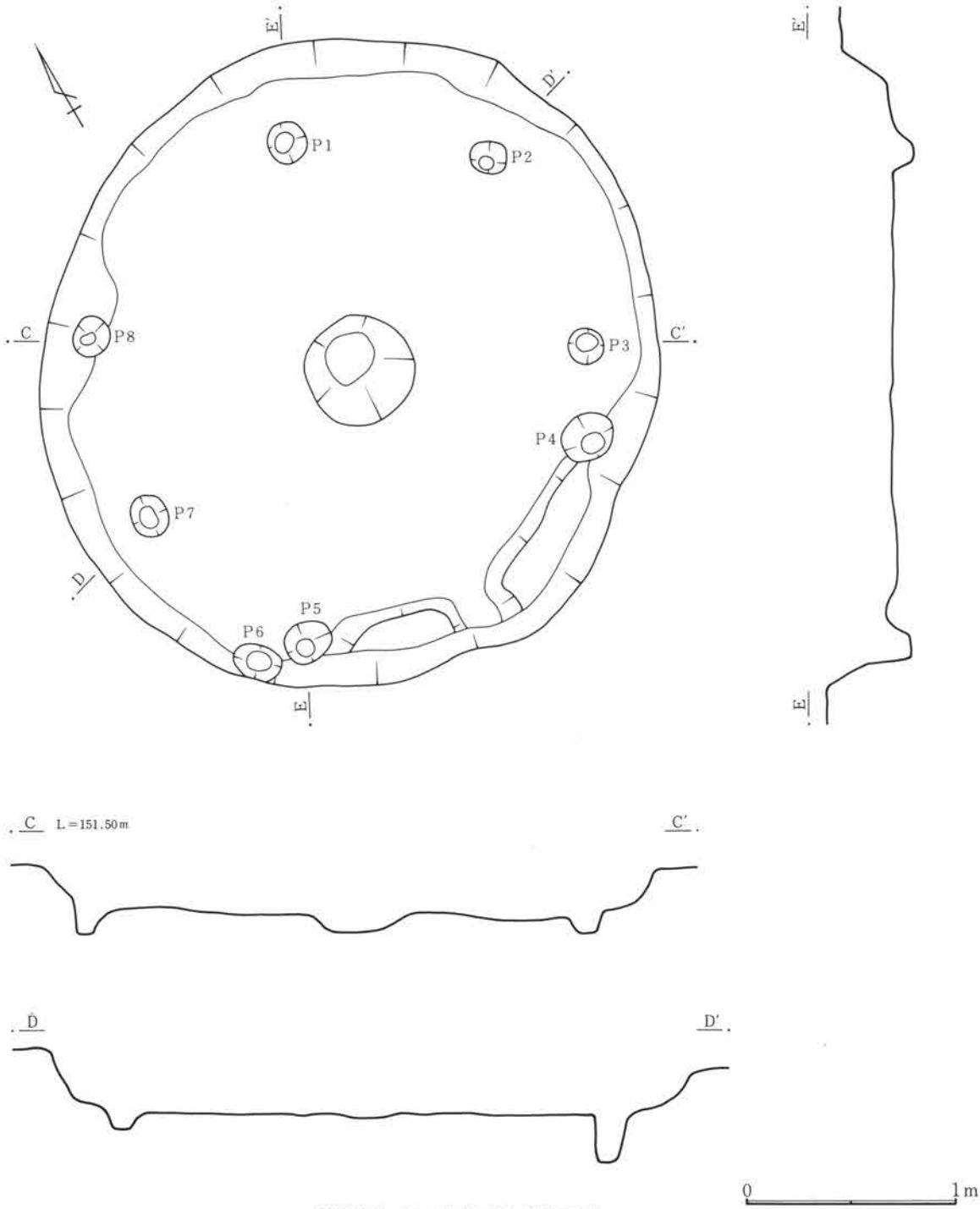
（541号住居跡）
①黒褐色土層　ローム粒（～３㎜）を含む。
②黒褐色土層　①層に類するが、炭化物を多く含む。
③暗褐色土層　ローム粒を多く含む。
④黒褐色土層　②層に類するが、僅かに焼土粒を含む。
⑤暗褐色土層　ローム粒・炭化物を少量含む。

第11図　541号住居跡実測図(1)

周辺はやや軟弱であった。

炉跡は、床面中央部で確認された。径51cm・深さ９cmの掘り込みをもつ地床炉であった。掘り込みの上層には、焼土粒が僅かに認められた。

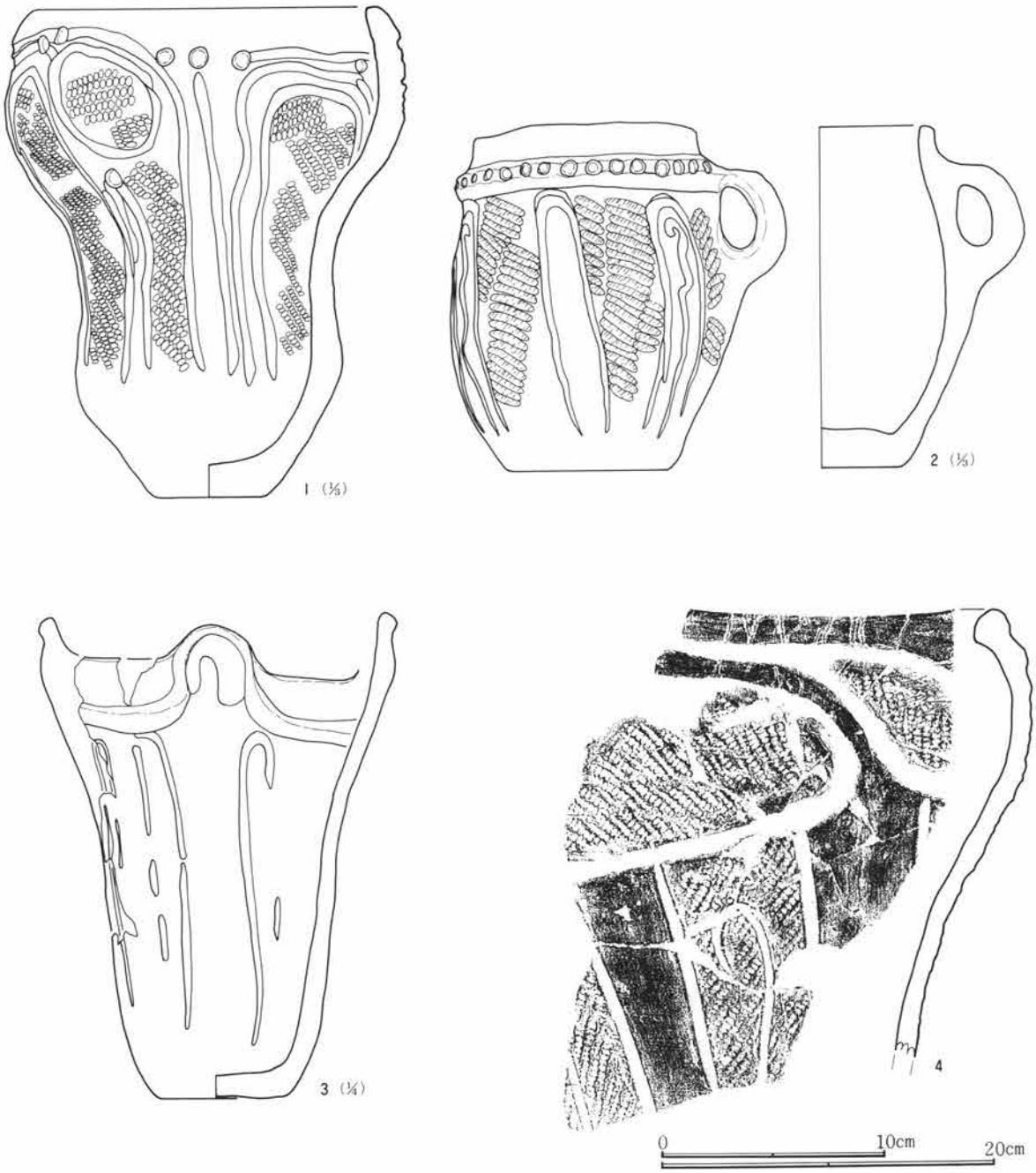
柱穴状のピットは、八箇所で確認されている。それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が18×10cm、Ｐ２が15×25cm、Ｐ３が17×12cm、Ｐ４が25×18cm、Ｐ５が22×12cm、Ｐ６が24×16cm、Ｐ７が21×12cm、Ｐ８が18×13cmを測る。内部には、いずれもローム粒・炭化物を少量含む暗褐色土が堆積していた。また南壁周



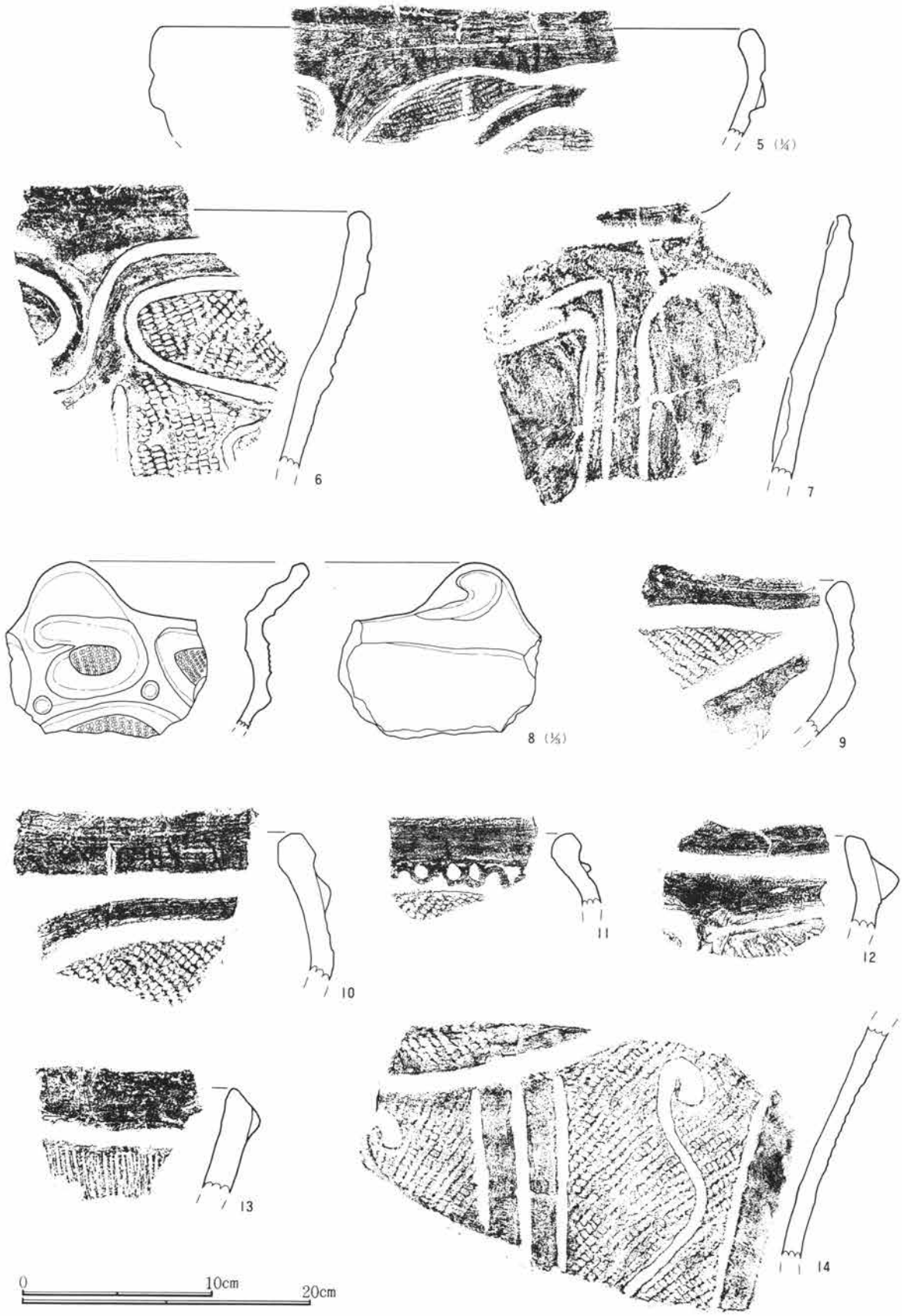
第12図　541号住居跡実測図(2)

辺には、床面より10cm程高く、上面が平坦な地山の掘り残しが確認された。その性格・機能等については不明であるが、あるいはプランの誤認による掘り過ぎであるかもしれない。なお、壁溝等の付属施設については確認されていない。

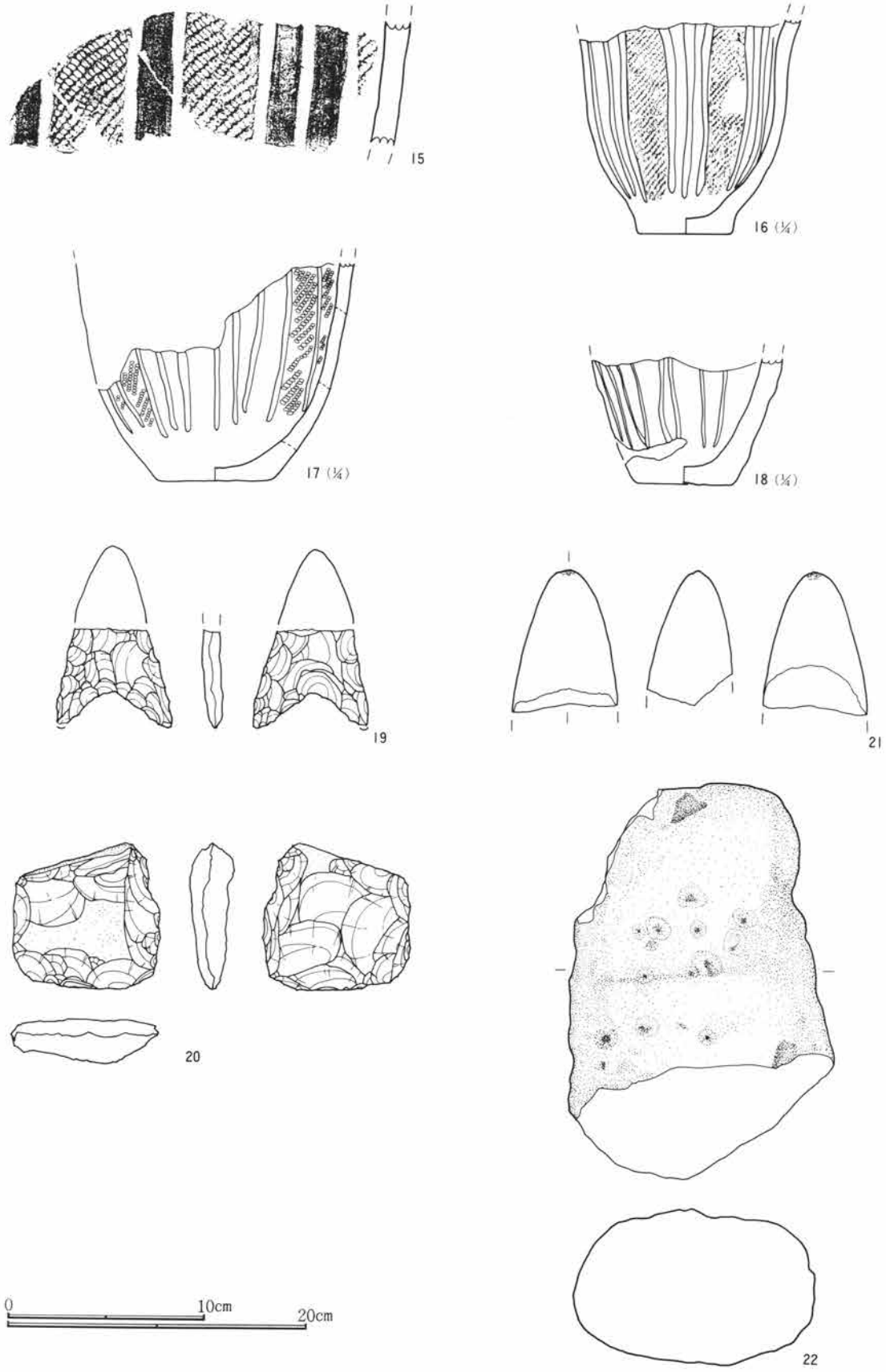
遺物は、住居中央部を中心に多量に出土している。垂直分布（礫と図化できない土器破片は、B－B′に示した）からは、以下の傾向が指摘できる。床面の高い位置からは、接合しない土器破片が多量に、やや高い位置からは、少量の土器破片と石器が出土している。床面直上からは、残存率の高い土器や大型の石器が少量出土している。そうした中では、東西壁際の床面直上から横転した状態で出土した深鉢１・２が注意される。（春山）



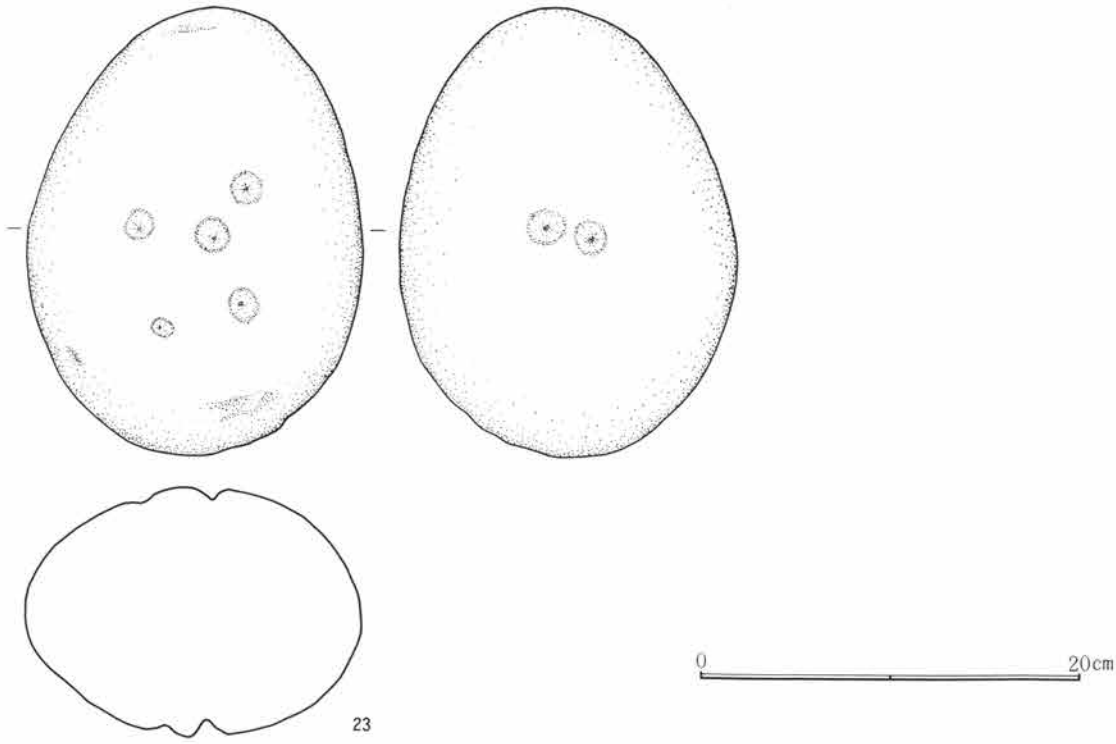
第13図　541号住居跡出土遺物実測図(1)



第14図　541号住居跡出土遺物実測図(2)



第15図　541号住居跡出土遺物実測図(3)



第16図　541号住居跡出土遺物実測図(4)

第５表　541号住居跡出土遺物観察表

土　　器

挿図番号 図版番号	器　種 部　位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器　形　・　文　様　の　特　徴　等	備　　考
13－１ 10	深　　鉢 ほぼ完形	床面直上	①粗、砂粒　②普通　③暗赤褐色	棒状工具による刺突及び沈線によって、文様を描出。原体０段多条ＬＲ単節斜縄文を施す。	内面に炭化物付着 加曽利Ｅ３式期
13－２ 10	深　　鉢 ほぼ完形	床面直上	①細、砂粒　②良好　③褐色	橋状把手を１箇所貼付。刺突を付した隆帯が巡る。胴部は逆Ｕ字状の区画内に蛇行懸垂文。区画外は原体Ｌ無節縄文。	ジョッキ型土器 加曽利Ｅ３式期
13－３ 10	深　　鉢 口～底部⅔	床面直上	①粗、砂粒　②やや不良　③明黄褐色	４単位（２単位欠損）の舌状突起を有す。口縁部は低い隆帯による区画。胴部逆Ｕ字状の沈線を垂下。	加曽利Ｅ３式期
13－４ 10	深　　鉢 口～底部片	床面＋28	①普、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	口縁部は隆帯と沈線によって文様を描出。胴部は２本の沈線と蕨手状の沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
14－５	深　　鉢 口縁部片	床面＋28	①普、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	口縁部は隆帯と沈線によって文様を描出。原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
14－６	深　　鉢 口縁部片	床面直上	①普、石英・砂粒　②良好　③浅黄色	口縁部は隆帯と沈線によって文様を描出。胴部は２本の沈線と蛇行懸垂文。原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
14－７ 10	深　　鉢 口縁部片	床面＋23	①粗、石英・砂粒　②やや不良　③鈍い黄橙色	波状口縁を呈する。舌状突起の一部を欠損。口縁部に沈線が巡る。胴部逆Ｕ字状の区画。	加曽利Ｅ３式期
14－８ 10	深　　鉢 口縁部片	床面＋30	①普、砂粒　②良好　③鈍い褐色	口縁部に舌状の突起を貼付する。棒状工具による刺突を施す。隆帯と沈線によって文様を描出。原体ＲＬＲの複節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
14－９	深　　鉢 口縁部片	床面＋38	①細、砂粒　②良好　③鈍い褐色	口縁部に隆帯と沈線によって文様を描出。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
14－10	深　　鉢 口縁部片	床面＋10	①普、片岩を少量含む　②良好　③鈍い黄褐色	口縁部に隆帯と沈線によって文様を描出。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
14－11	深　　鉢 口縁部片	覆土	①普、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	隆帯を貼付した後、交互刺突を施す。原体ＲＬＲの複節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
14－12	深　　鉢 口縁部片	床面＋31	①細、雲母・砂粒　②良好　③鈍い褐色	口縁部に隆帯と沈線によって文様を描出。原体Ｌの無節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
14－13	深　　鉢 口縁部片	覆土	①普、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	口縁部に隆帯が巡る。櫛歯状工具による条線を施す。	加曽利Ｅ３式期

挿図番号 図版番号	器　種 部　位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器形・文様の特徴等	備　考
14—14 10	深　鉢 胴部片	床面－11	①細、砂粒　②良好　③鈍い橙色	口縁部は沈線による区画。胴部は３本の沈線と蛇行懸垂文。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
15—15	深　鉢 胴部片	床面＋33	①細、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	２～３本単位の平行沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
15—16 10	深　鉢 胴～底部片	床面＋13	①細、砂粒　②良好　③明黄褐色	２～３本単位の平行沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
15—17	深　鉢 胴～底部片	床面直上	①細、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	２～３本単位の平行沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
15—18 10	深　鉢 底部片	床面＋21	①普、砂粒　②やや不良　③橙色	２本単位の沈線を垂下。	加曽利Ｅ３式期

石　器

挿図番号 図版番号	器　種	出土状態	計測値（cm・g） 長・幅・厚・重	形状・特徴等	備　考
15—19 15	石　鏃	覆土	長　1.6　幅　1.9 厚　0.34　重（0.95）	凹基無茎。	先端・脚部一部欠損　玻璃質安山岩
15—20 14	剥片石器 ？	床面＋22	長　7.2　幅　7.3 厚　2.2　重　135	片面及び側面に自然面を残す。	熱変成岩
15—21 14	磨製石斧	床面＋８	長　7.0　幅　5.2 厚　4.1　重　189		刃部欠損 輝緑岩
15—22 14	多孔石	床面＋30	長　26.1　幅　17.6 厚　11.8　重　6200	表裏両面に多数の凹み。	欠損 砂岩
16—23 14	多孔石	床面＋12	長　23.4　幅　17.9 厚　13.0　重　6800	表裏両面に円錐形の凹み７箇所。	流紋岩

574号住居跡（第17～24図、第６表、図版７・10・11・14）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、73・74—28グリッドに位置する。重複関係としては、573号住居跡（奈良）に西壁の一部を破壊される。北東方向約23mの位置に前出の541号住居跡（縄文）が、西側約８mの位置に578号住居跡（縄文）が所在する。

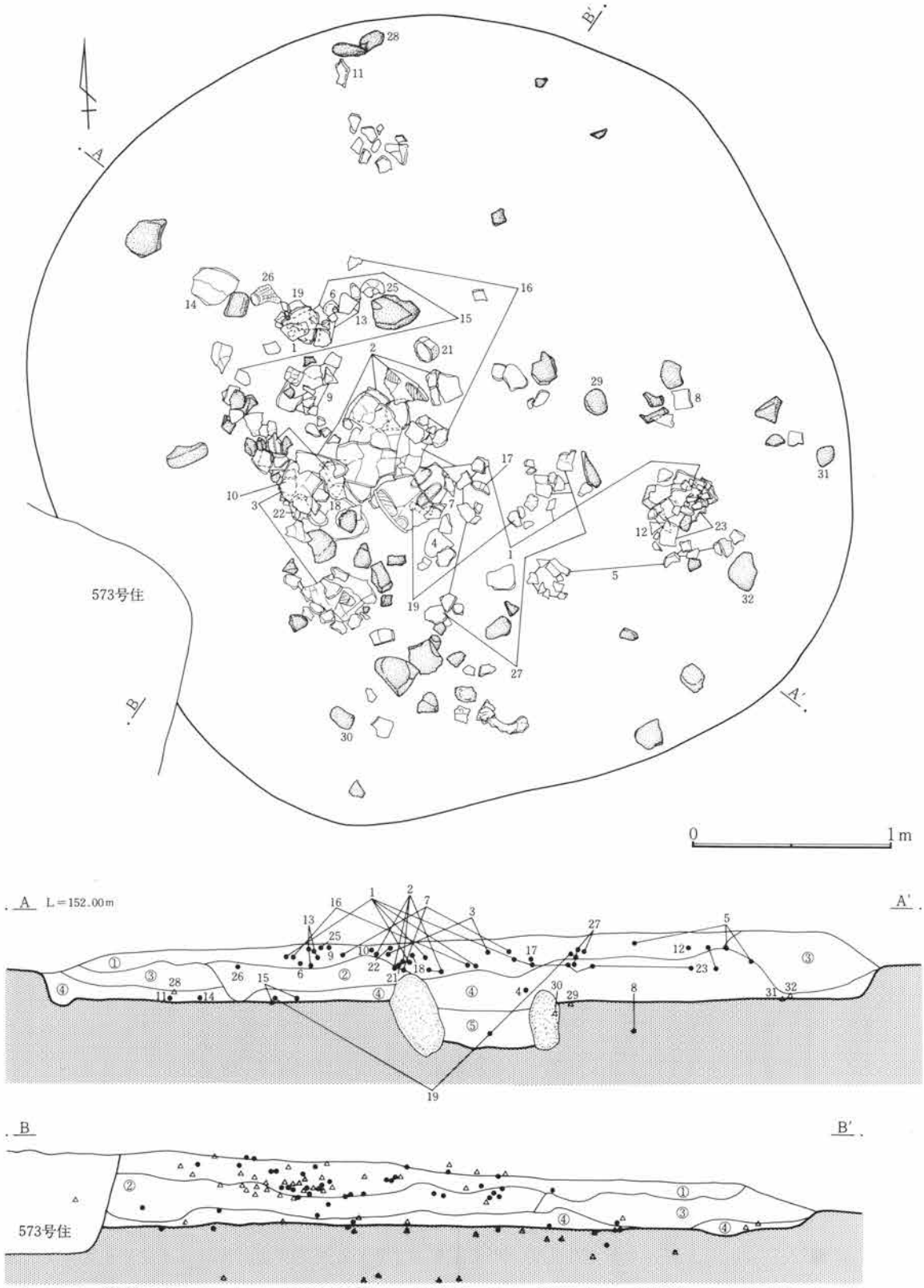
規模は、東西４m08cm・南北３m93cmを測る。平面形は円形または隅丸方形を呈していたものと思われるが、詳細は不明である。確認面からの壁高は最大でも15cm程度で、残存状況は不良であった。

床面はほぼ平坦で、中央部に明瞭な硬化面を形成していた。

炉跡は、方形に組まれた石囲炉であり、床面中央部で比較的良好に確認された。規模は長軸86cm・短軸75cm・深さ18cmを測る。炉跡から想定される主軸方向はＮ—37°(53°)—Ｗ（Ｅ）を示す。内部には焼土粒が少量認められたが、炉石の焼土化はさほど顕著ではなかった。

柱穴状のピットは七箇所で確認された。それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が32×42cm、Ｐ２が30×27cm、Ｐ３が36×56cm、Ｐ４が36×48cm、Ｐ５が36×40cm、Ｐ６が35×53cm、Ｐ７が26×27cmを測る。位置・深さ等の諸状況から、主柱穴はＰ１・３・５・６が該当すると思われる。内部には、地山の崩落土以外にローム粒を少量含む暗褐色土が堆積していた。壁溝については、一部を除きほぼ全周する。規模は、幅10～15cm・深さ６～10cmを測る。

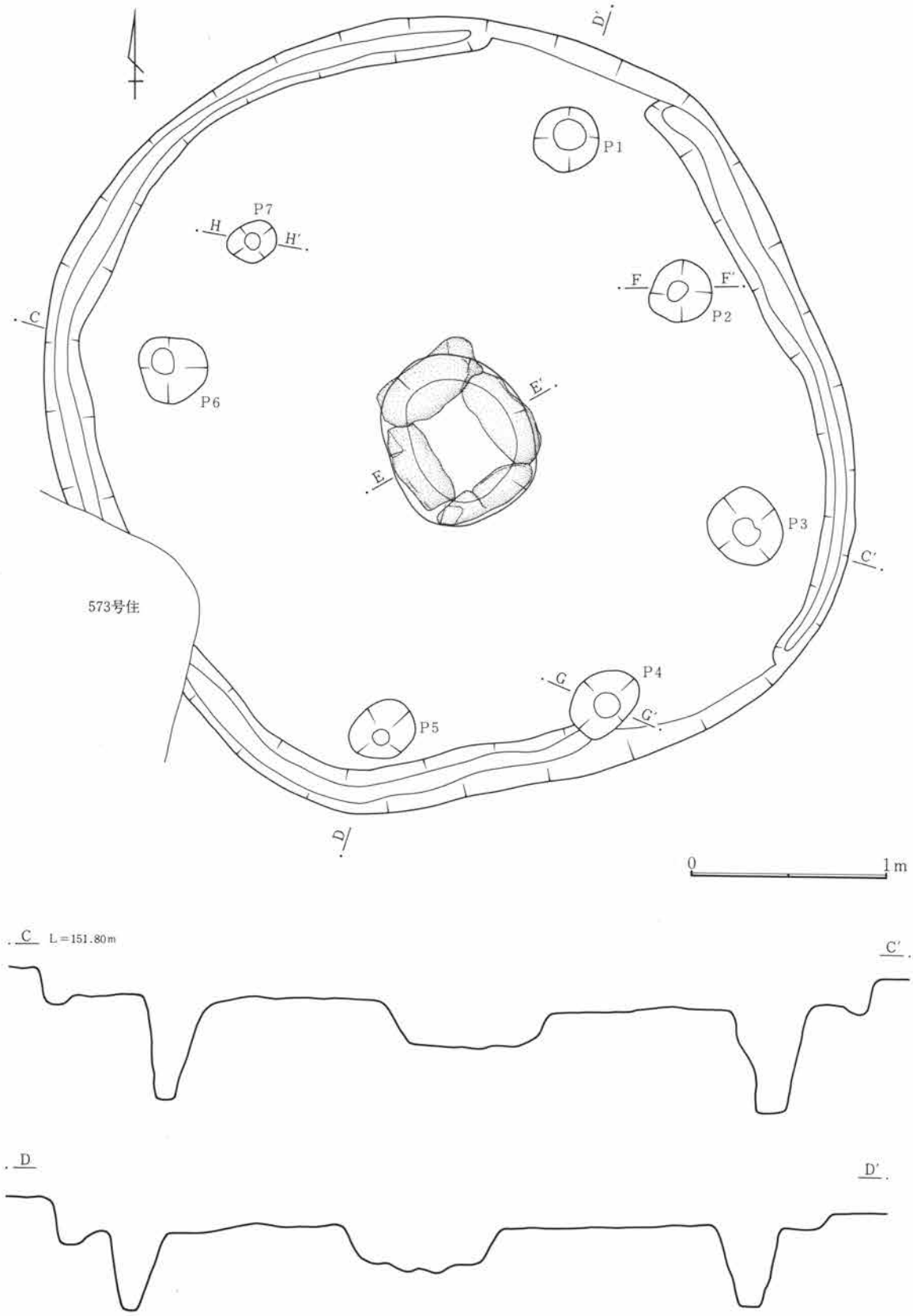
遺物は、住居中央部やや西寄りを中心に多量に分布する。垂直分布（礫と図化できない土器破片は、Ｂ—Ｂ′に示した）を見ると、床面から浮いた状態で出土している土器の多さが目立つ。深鉢１・２・３はいずれもこの位置の出土である。床面直上からは、深鉢11・14・15が凹み石29・31及び石皿32と炉跡を挟み対称的に出土している。（関口功）



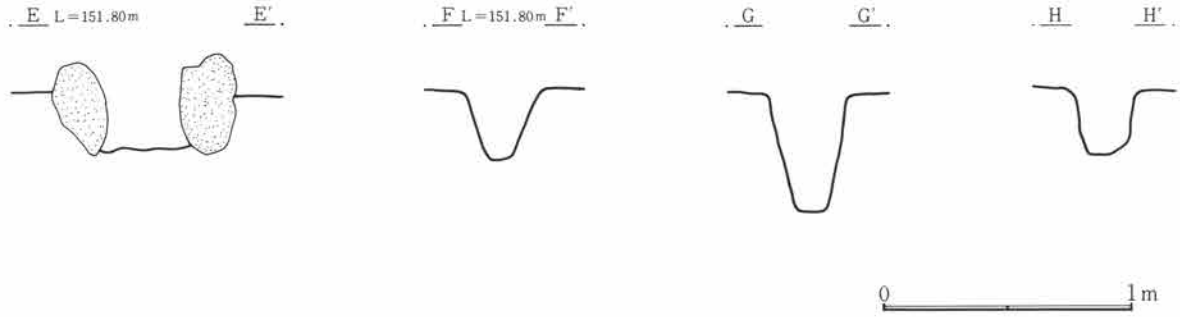
（574号住居跡）

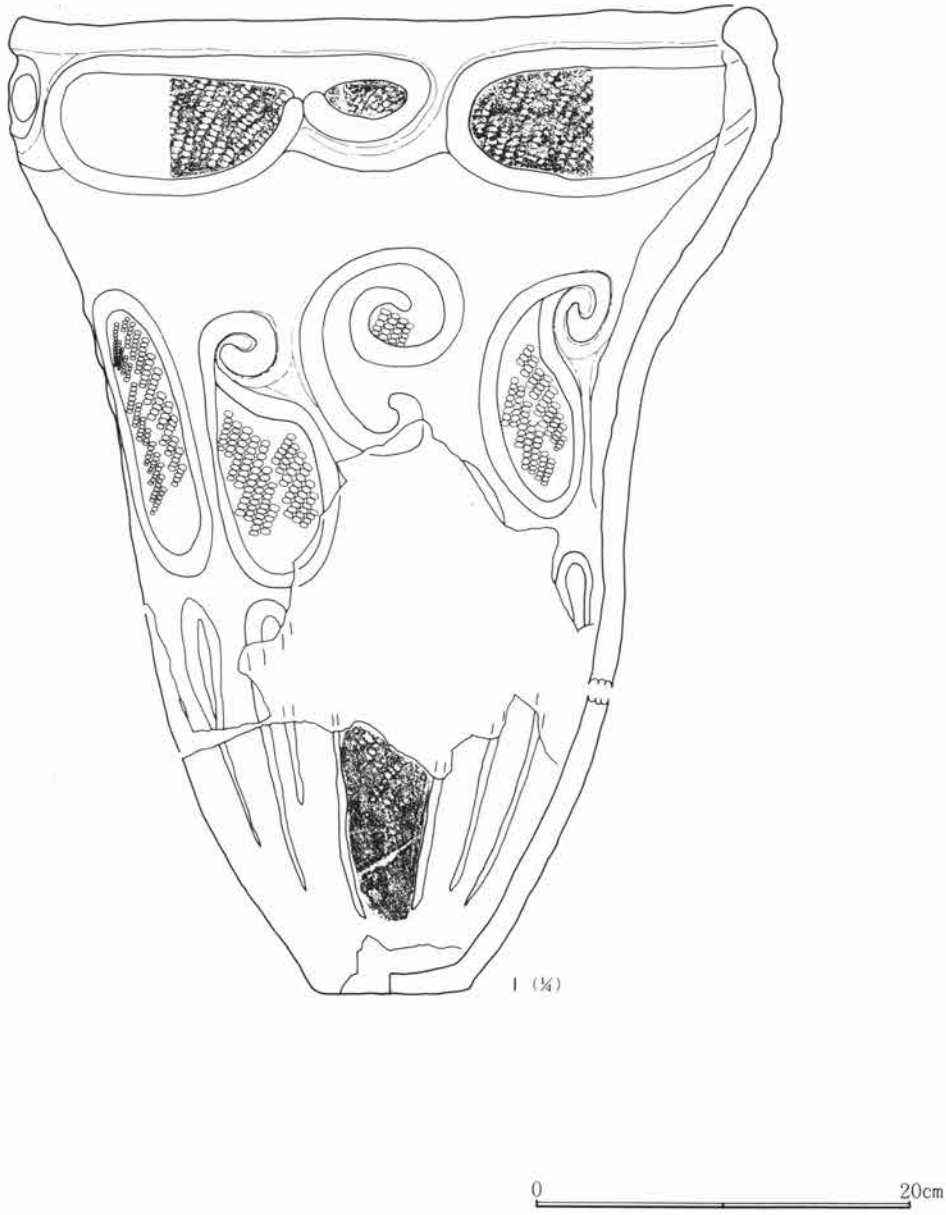
①暗褐色土層　焼土粒・軽石・ローム粒を多く含み、締まりに欠ける。
②暗褐色土層　軽石・ローム粒を稀に含み、締まっている。
③暗褐色土層　ローム粒・炭化物を稀に含む。
④暗褐色土層　ロームブロックを稀に含み、締まっている。
⑤暗褐色土層　焼土粒を少量含む。

第17図　574号住居跡実測図(1)

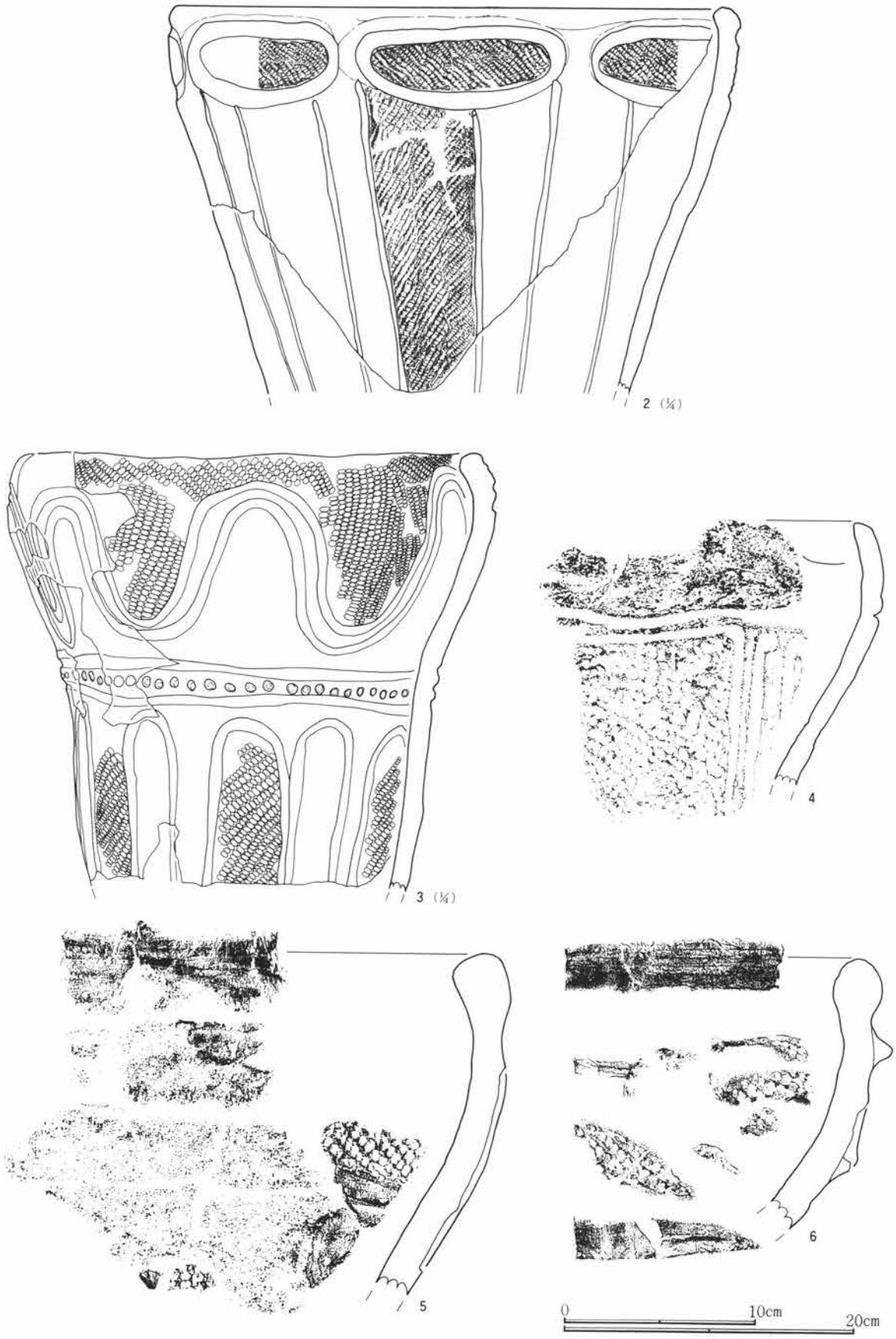


第18図　574号住居跡実測図(2)

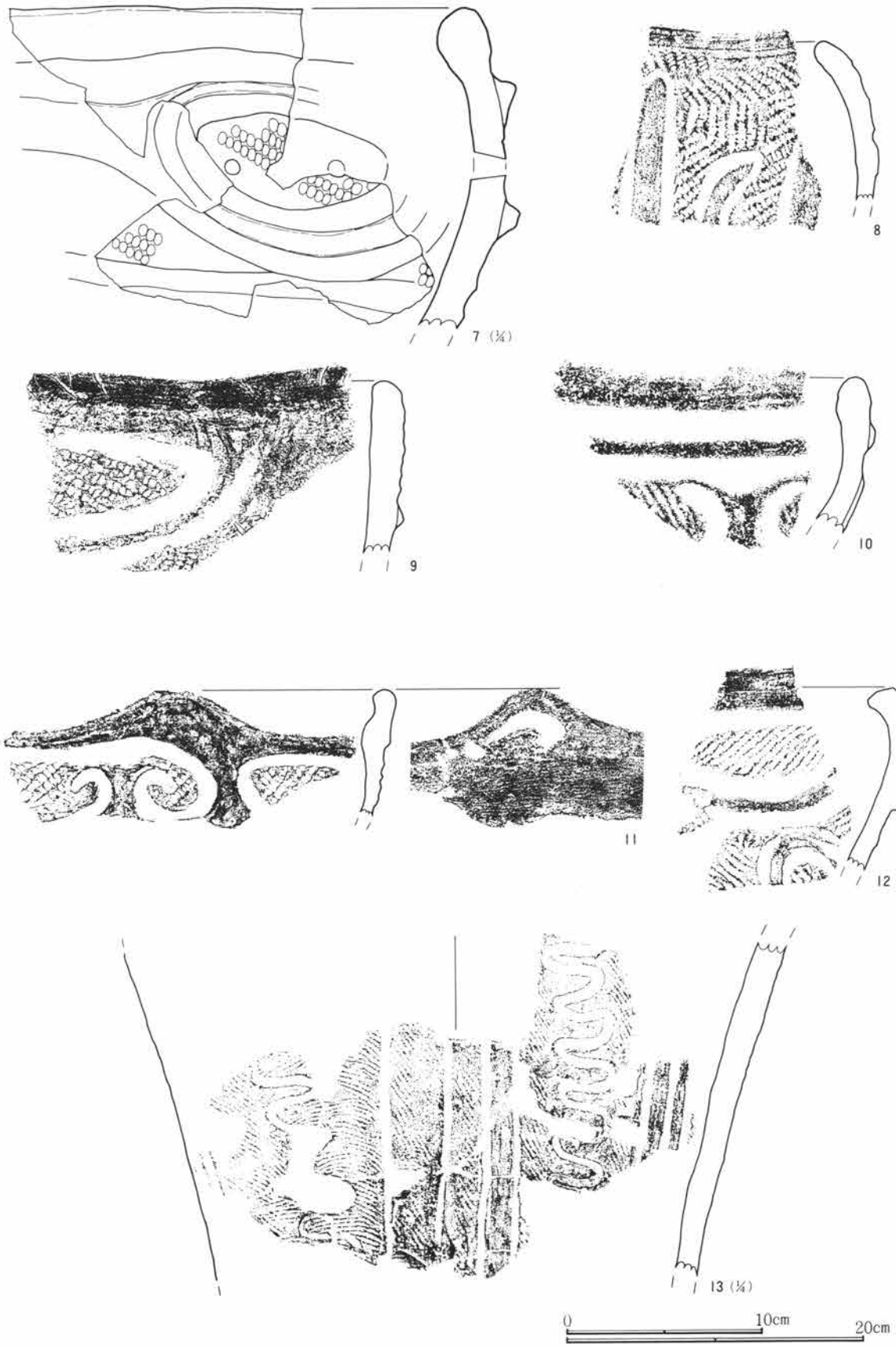




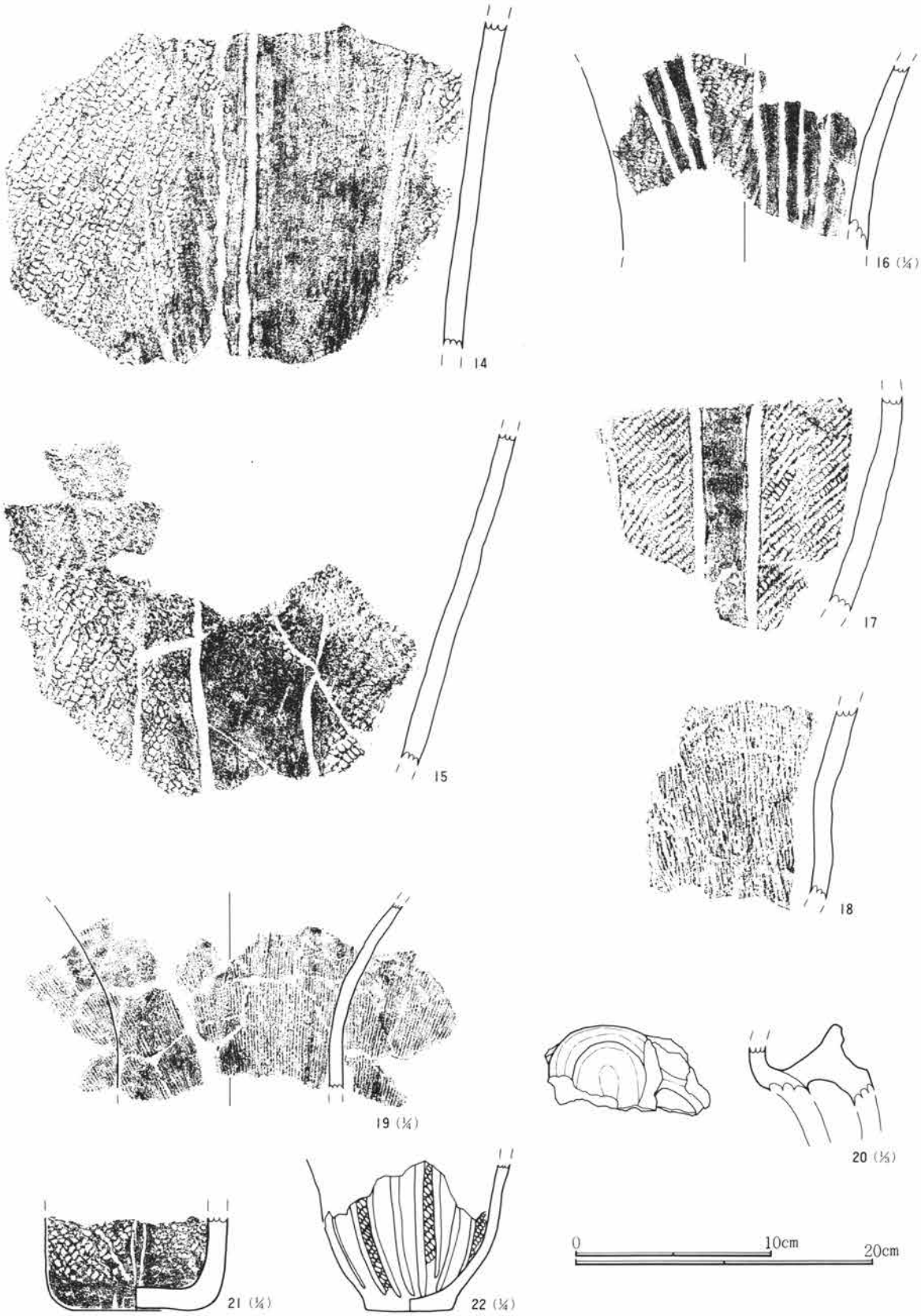
第19図　574号住居跡実測図(3)及び出土遺物実測図(1)



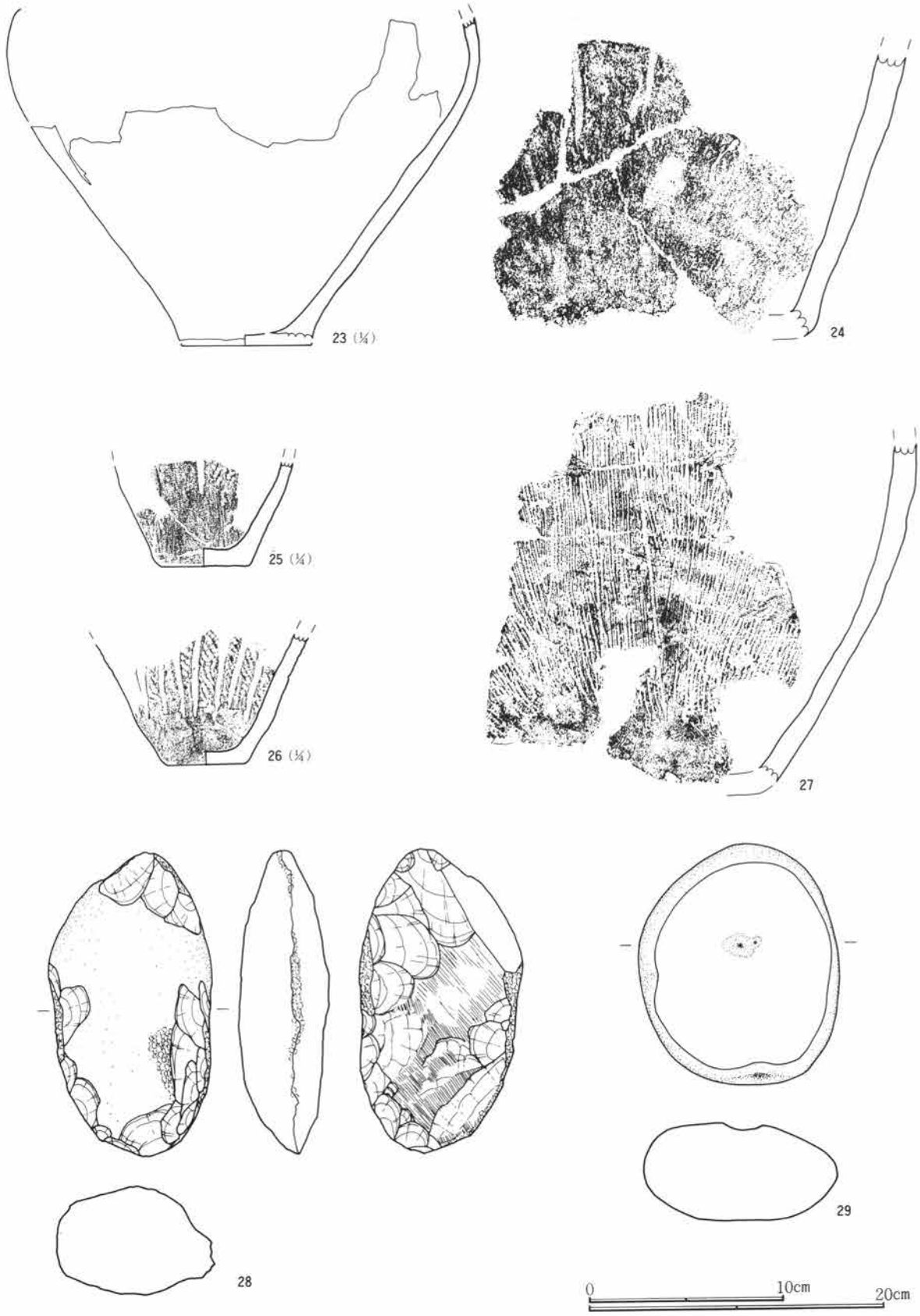
第20図　574号住居跡出土遺物実測図(2)



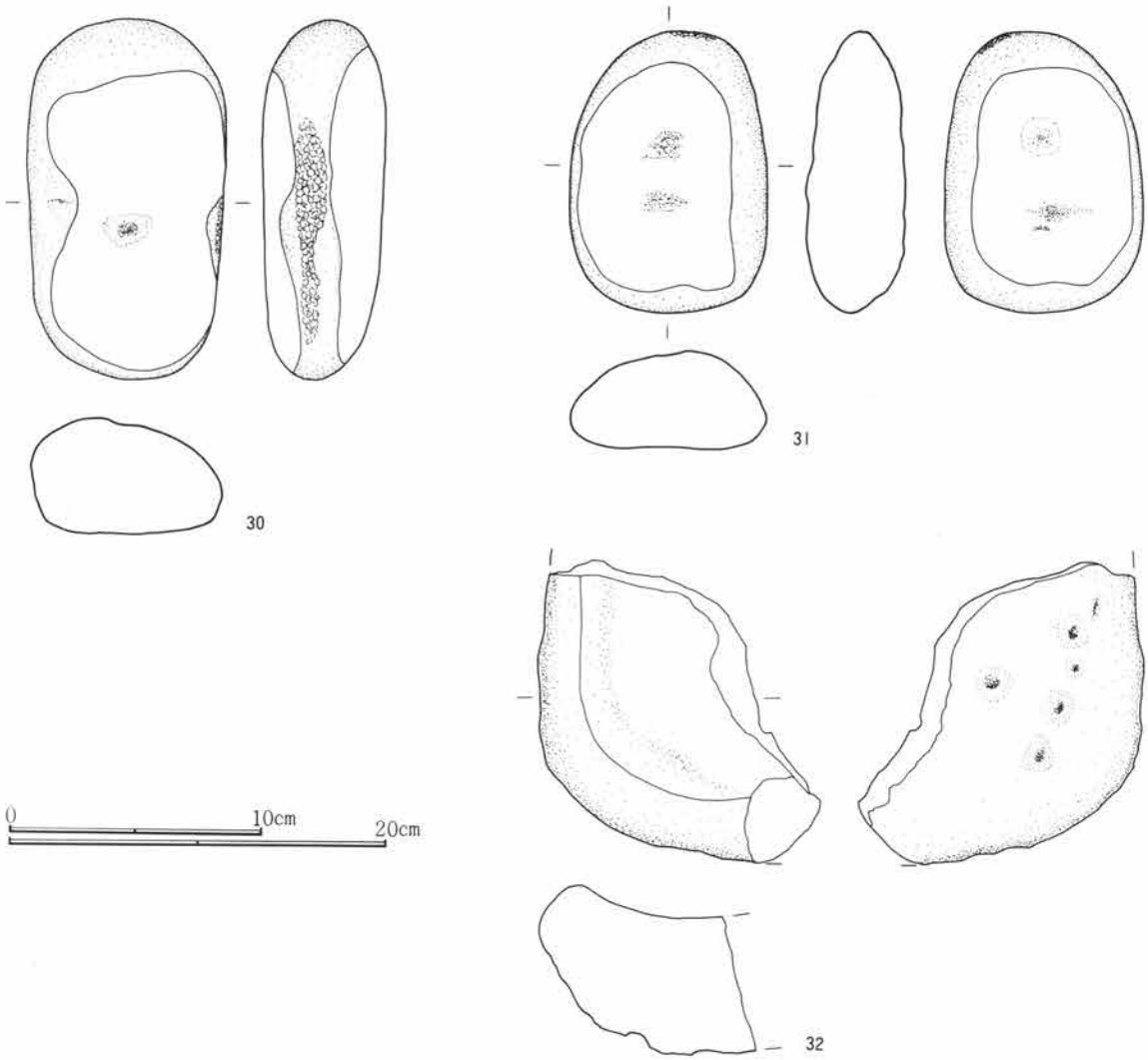
第21図　574号住居跡出土遺物実測図(3)



第22図　574号住居跡出土遺物実測図(4)



第23図　574号住居跡出土遺物実測図(5)



第24図　574号住居跡出土遺物実測図(6)

第６表　574号住居跡出土遺物観察表

土　　器

挿図番号 図版番号	器　種 部　位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器形・文様の特徴等	備　　考
19－１ 10	深　鉢 口～底部片	床面＋17	①普、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	口縁部を隆帯と沈線による渦巻文と楕円状の区画文で４単位に構成。胴部上半は凹線による区画。胴部下半は逆Ｕ字状の沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
20－２ 10	深　鉢 口～底部片	床面＋16	①普、雲母・砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	口縁部は沈線による楕円状の区画文。胴部は２本単位の沈線を垂下。原体ＲＬ単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
20－３ 10	深　鉢 口～胴部	床面＋24	①普、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	胴部上半に２本の波状沈線を巡らす。胴部中程に２本の沈線を巡らせ刺突を付す。胴部下半に逆Ｕ字状の沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
20－４ 11	深　鉢 口縁部片	床面＋６	①粗、砂粒　②普通　③橙色	舌状突起を貼付する。胴部蕨手状の懸垂文。原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
20－５	深　鉢 口～胴部片	床面＋20	①粗、雲母・砂粒　②良好　③褐色	原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	剝離が著しい 加曽利Ｅ３式期
20－６ 11	深　鉢 口縁部片	床面＋19	①普、雲母粒を多く含む　②良好　③鈍い褐色	口縁部は隆帯と沈線によって文様を描出。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	剝離が著しい 加曽利Ｅ３式期

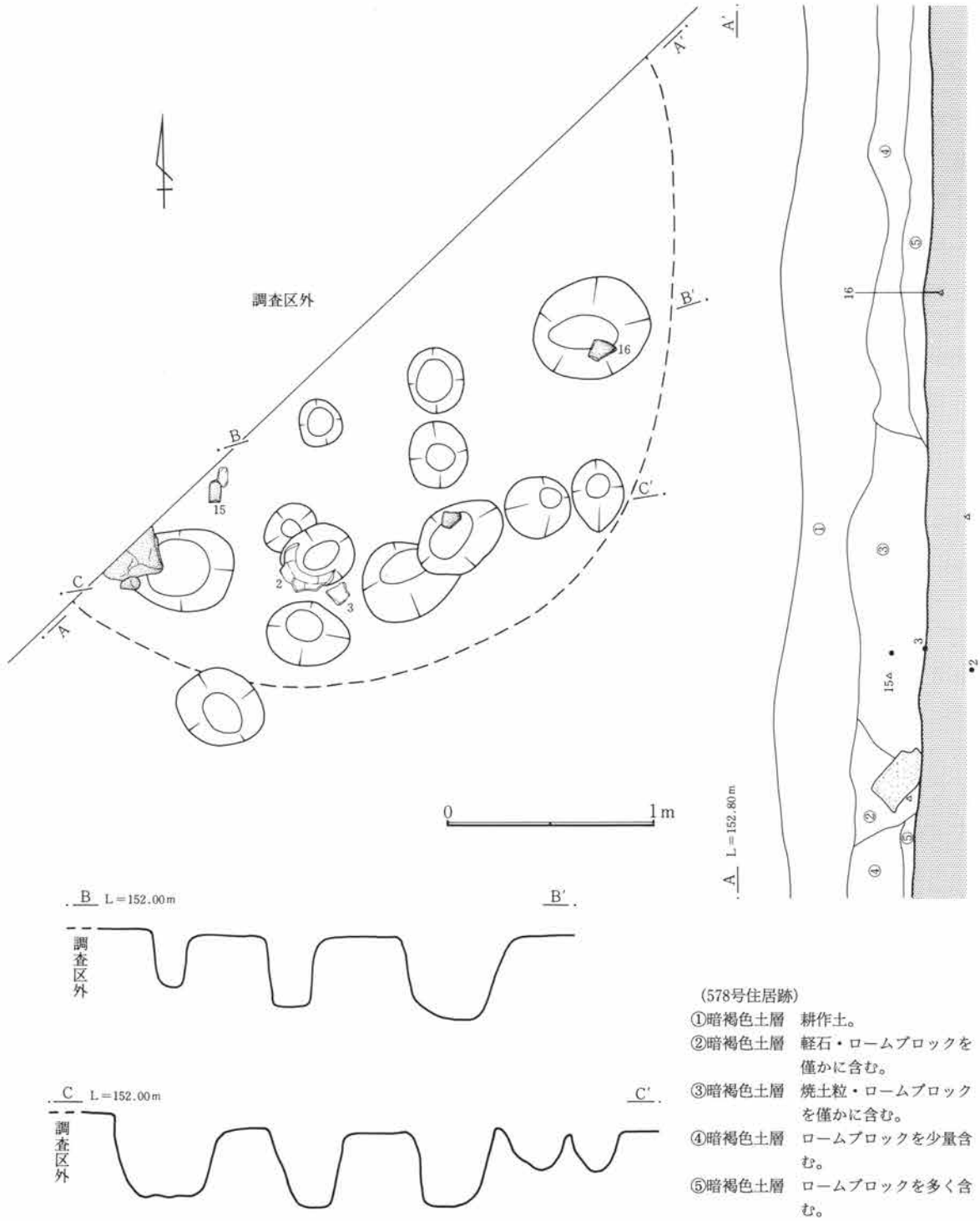
挿図番号 図版番号	器種 部位	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴等	備考
21－7 11	深鉢 口縁部片	床面＋16	①普、雲母粒を少量含む ②良好 ③鈍い赤褐色	口縁部は隆帯と沈線によって文様を描出。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。1対の補修孔が残存。	加曽利Ｅ３式期
21－8 11	深鉢 口縁部片	床面－14	①普、砂粒 ②良好 ③明黄褐色	棒状工具による沈線文。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
21－9 11	深鉢 口縁部片	床面＋27	①粗、砂粒 ②良好 ③鈍い褐色	口縁部に隆帯と沈線によって文様を描出。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
21－10	深鉢 口縁部片	床面＋26	①粗、砂粒 ②良好 ③鈍い黄橙色	口縁部に隆帯と沈線によって文様を描出。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
21－11 11	深鉢 口縁部片	床面直上	①普、片岩・雲母粒 ②良好 ③外面褐色 内面明黄褐色	内面に文様を施した舌状突起を貼付する。口縁部に隆帯と沈線によって文様を描出。原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
21－12 11	深鉢 口縁部片	床面＋27	①細、砂粒 ②良好 ③鈍い黄褐色	口縁部に隆帯と沈線によって文様を描出。原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
21－13 11	深鉢 胴部片	床面＋19	①普、砂粒 ②良好 ③浅黄橙色	胴部に沈線と蛇行懸垂文。原体Ｌの無節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
22－14	深鉢 胴部片	床面直上	①普、雲母粒を多く含む ②良好 ③褐色	胴部に沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
22－15	深鉢 胴部片	床面直上	①粗、雲母・砂粒 ②普通 ③鈍い黄橙色	胴部に沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
22－16	深鉢 胴部片	床面＋19	①普、石英・雲母粒 ②良好 ③鈍い橙色	胴部に沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
22－17 11	深鉢 胴部片	床面＋21	①細、砂粒 ②良好 ③鈍い橙色	胴部に２本単位の沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
22－18 11	深鉢 胴部片	床面＋24	①普、砂粒 ②普通 ③鈍い褐色	櫛歯状工具による条線を施す。	加曽利Ｅ３式期
22－19 11	深鉢 胴部片	床面－16	①粗、雲母砂粒 ②良好 ③鈍い黄橙色	櫛歯状工具による条線を施す。	加曽利Ｅ３式期
22－20 11	深鉢 把手部片	覆土	①普、砂粒 ②良好 ③鈍い黄褐色	把手の一部。隆帯と凹線によって文様を描出。	加曽利Ｅ３式期
22－21 11	深鉢 底部	床面＋18	①粗、砂粒 ②良好 ③鈍い褐色	沈線を垂下。原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
22－22 11	深鉢 底部片	床面＋26	①普、雲母・砂粒 ②良好 ③鈍い赤褐色	３本単位の平行沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
23－23 11	深鉢 胴～底部片	床面＋17	①粗、雲母砂粒 ②良好 ③鈍い橙色	無文。	加曽利Ｅ３式期
23－24	深鉢 胴～底部片	覆土	①普、雲母・砂粒 ②普通 ③橙色	沈線を垂下。	加曽利Ｅ３式期
23－25	深鉢 底部片	床面＋27	①普、砂粒 ②良好 ③鈍い褐色	棒状工具による沈線を垂下。原体不明の縄文を施す。	摩耗が著しい 加曽利Ｅ３式期
23－26 11	深鉢 底部片	床面＋17	①細、砂粒 ②良好 ③鈍い黄橙色	沈線を垂下。原体Ｌの無節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
23－27 11	深鉢 胴部片	床面＋19	①細、石英・砂粒 ②良好 ③鈍い黄橙色	櫛歯状工具による条線を施した後、２本単位の沈線を垂下。	加曽利Ｅ３式期

石　器

挿図番号 図版番号	器種	出土状態	計測値（cm・g） 長・幅・厚・重	形状・特徴等	備考
23－28 14	磨製石斧	床面＋5	長 15.4 幅 8.3 厚 5.5 重 1000	片面に自然面を残す。側面に敲打痕が残る。	未製品 輝緑岩
23－29 14	凹み石	床面直上	長 12.1 幅 10.2 厚 4.9 重 825	表裏両面に凹み２箇所。両面に研磨面。	安山岩
24－30 14	凹み石	床面－6	長 14.2 幅 7.9 厚 4.6 重 800	片面に凹み１箇所。研磨面より凹みが新しい。側面に敲打痕。	硬砂岩
24－31 14	凹み石	床面直上	長 11.0 幅 7.9 厚 3.9 重 535	表裏両面に不明瞭な凹み４箇所。凹みより研磨面が新しい。端部に敲打痕。	硬砂岩
24－32 14	石皿	床面直上	長 16.0 幅 11.1 厚 8.9 重 2100	裏面に凹み５箇所。	欠損 砂岩

578号住居跡（第25～27図、第７表、図版７・12・14・15）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、73・74―25・26グリッドに位置する。周辺には、東側約８ｍの位置に574号住居跡（縄文）が、やや離れて北東方向約32ｍに578号住居跡（縄文）が所在する。住居跡の分布は、西側の調査区外に広がる可能性があるものと思われる。残存状況は極めて不良で、明瞭な壁の



第25図　578号住居跡実測図

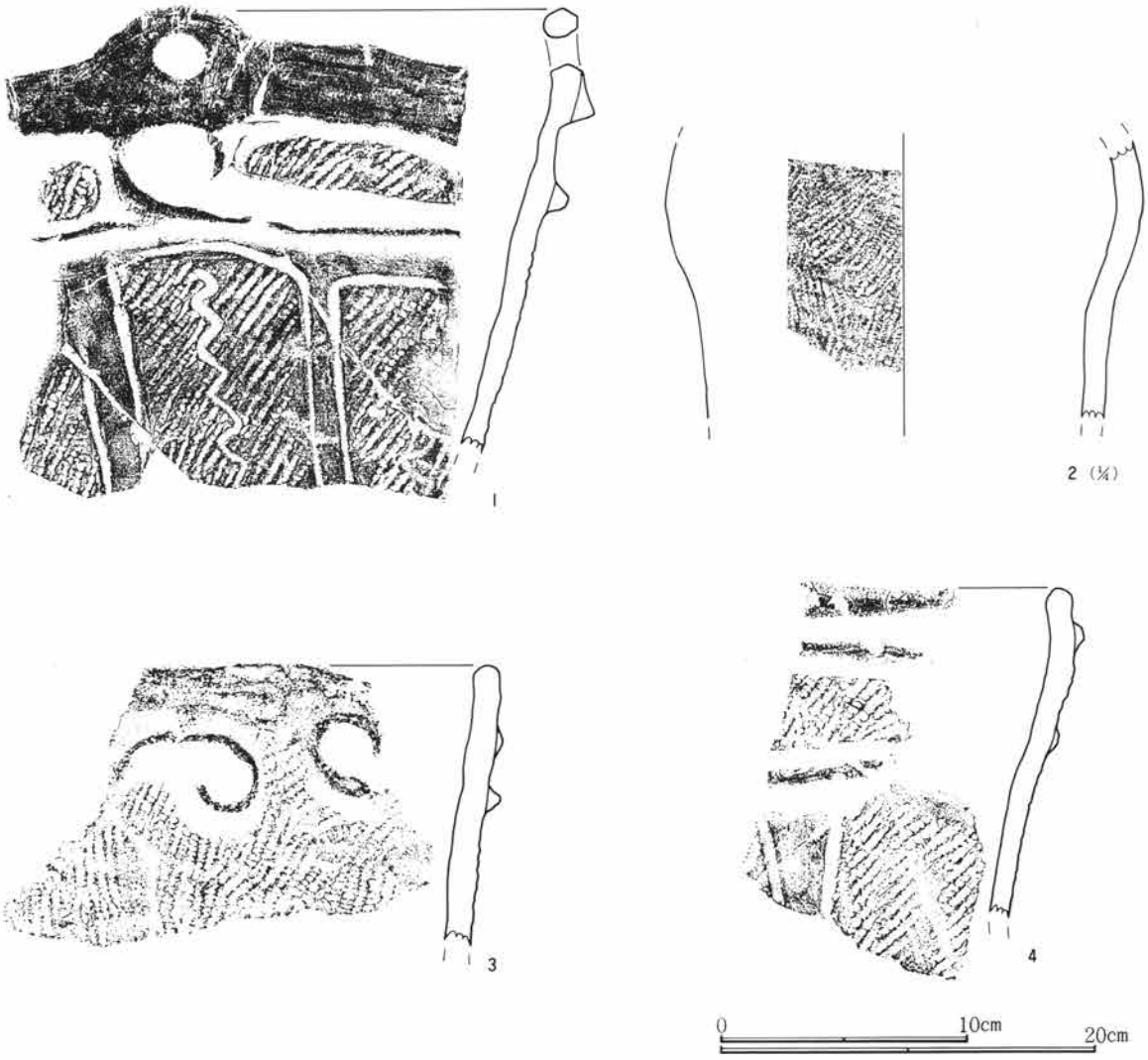
立ち上がりは確認できなかった。

調査区外にかかるため、プラン確認にやや不安が残るが、若干の掘り込みと部分的に残存する貼床状の硬化面から推定すると、本来の形状は円形を呈していたものと思われる。

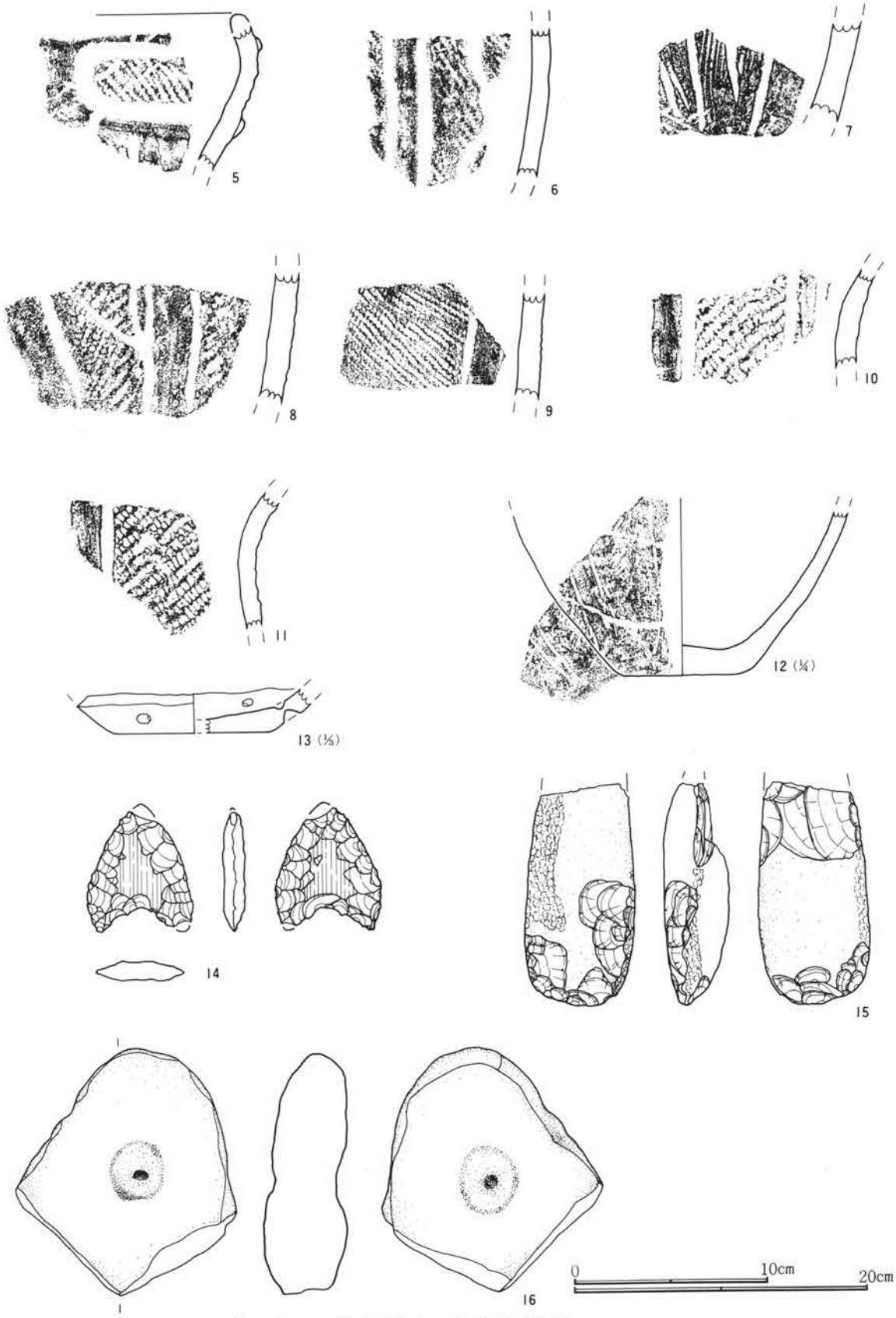
炉跡に関する情報は全く得られていない。

ピットは多数検出されているが、規則性は認められず、個々の性格・機能等についても不明である。また、壁溝等その他の付属施設についても、確認されていない。

遺物は、覆土中から接合しない土器の小破片が少量出土している（垂直分布のA－A′に番号のないドットは礫と図化できない土器破片である）。そうした中で、住居跡南側と思われる位置から埋甕が逆位で一個体確認された。埋設されていたのは、口縁部と胴部下半が欠損した深鉢１である。なお、内部から焼土粒は確認されておらず、土器も加熱を受けていなかった。また、埋甕の周辺からは、深鉢３が出土している。土器以外では、局部磨製石鏃14、磨製石斧の未製品15、凹み石16が各１点出土している。（関口功）



第26図　578号住居跡出土遺物実測図(1)



第27図　578号住居跡出土遺物実測図(2)

第７表　578号住居跡出土遺物観察表

土　　器

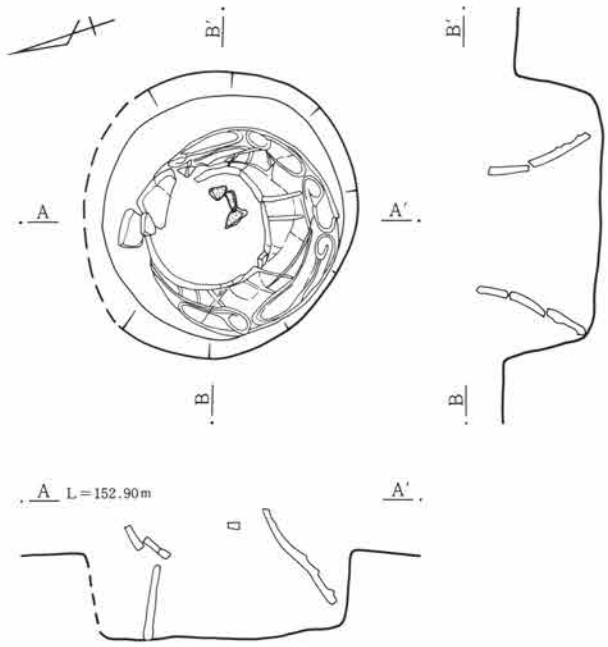
挿図番号 図版番号	器　種 部　位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器　形　・　文　様　の　特　徴　等	備　　考
26－１ 12	深　　鉢 口～胴部片	覆土	①普、雲母・砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	環状の舌状突起を貼付。口縁部に隆帯と沈線による文様を描出。胴部は逆Ｕ字状の沈線による区画内に蛇行懸垂文。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
26－２ 12	深　　鉢 口～胴部片	床面－22	①普、雲母・砂粒　②良好　③褐色	原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
26－３ 12	深　　鉢 口～胴部片	床面直上	①普、雲母粒を多量に含む　②良好　③鈍い褐色	舌状突起の一部欠損。隆帯による渦巻文を貼付した後、原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
26－４ 12	深　　鉢 口縁部片	覆土	①細、雲母粒　②良好　③鈍い褐色	口縁部に隆帯と沈線によって文様を描出。胴部に沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
27－５ 12	深　　鉢 口縁部片	覆土	①普、雲母・片岩を含む　②良好　③鈍い橙色	口縁部に隆帯と沈線によって文様を描出。胴部に沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
27－６	深　　鉢 胴部片	覆土	①普、雲母・砂粒　②良好　③明黄褐色	２本単位の沈線と蛇行懸垂文。原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
27－７	深　　鉢 胴部片	覆土	①普、石英・片岩を含む　②良好　③鈍い黄橙色	沈線を垂下。櫛歯状工具による条線を施す。蛇行懸垂文を施文する。	加曽利Ｅ３式期
27－８	深　　鉢 胴部片	覆土	①普、石英・片岩　②良好　③鈍い橙色	沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
27－９	深　　鉢 胴部片	覆土	①普、石英粒　②良好　③鈍い褐色	沈線を垂下。原体０段多条ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
27－10	深　　鉢 胴部片	覆土	①普、砂粒　②良好　③明黄褐色	沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
27－11	深　　鉢 胴部片	覆土	①普、砂粒　②良好　③明黄褐色	沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
27－12	深　　鉢 底部片	覆土	①普、雲母粒　②普通　③鈍い橙色	沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
27－13 12	浅　　鉢 底部片	覆土	①普、砂粒　②良好　③鈍い褐色	無文、底部から大きく開く器形。	内外面から穿孔するが未貫通 加曽利Ｅ３式期

石　　器

挿図番号 図版番号	器　種	出土状態	計測値（cm・g） 長・幅・厚・重	形　状　・　特　徴　等	備　　考
27－14	石　　鏃	覆土	長（2.1）　幅　1.8 厚　0.3　重　1.3	凹基無茎。局部磨製石鏃。	先端・脚部一部欠損　黒曜石
27－15 14	磨製石斧	床面＋16	長（11.2）　幅　5.7 厚　3.3　重　335	側面に敲打痕。	基部欠損 輝緑岩
27－16 14	凹み石	床面－８	長　12.5　幅　11.4 厚　4.3　重　540	表裏両面に凹み２箇所。	欠損 砂岩

3．埋　　甕

1号埋甕(第28・31図、第8表、図版8・12)



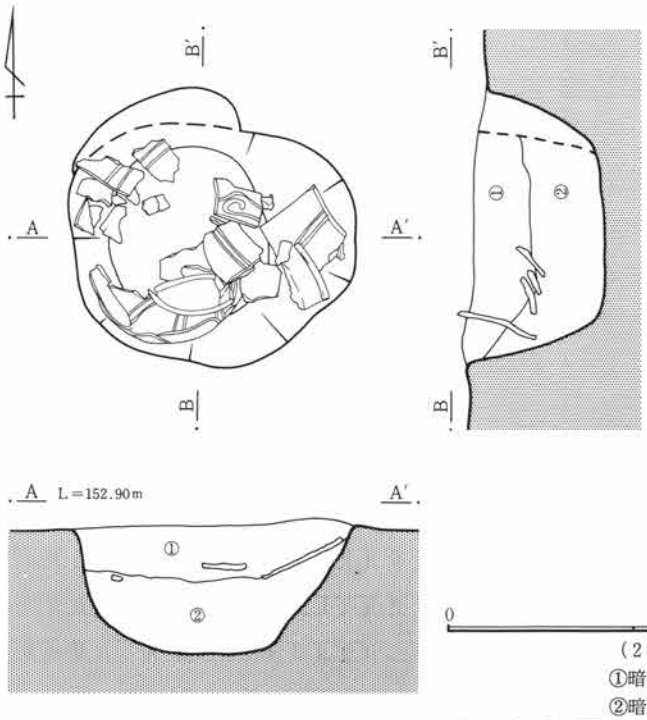
本埋甕は、第7次調査区中央部の平坦面にあり、64—27グリッドに位置する。南西約1m20cmの位置に2号埋甕が、南東約6m50cmの位置に5号埋甕が所在する。検出面は、隣接する2号埋甕より6cm程低い。

埋設されていた土器は、胴下半部が打ち欠かれた口縁部50cmを測る大型の深鉢で、南側からの圧力でやや傾いた逆位で埋設されていた。残存状況は比較的良好であった。

内部に礫が3点認められるが、焼土粒は確認されておらず、土器も加熱を受けていない。本埋甕は単独の屋外埋甕であるものと思われる。(春山)

0　　1m

2号埋甕(第28・31図、第9表、図版8・12)



本埋甕は、第7次調査区中央部の平坦面にあり、64—27グリッドに位置する。北東約1m20cmの位置に前出の1号埋甕が所在する。

埋設されていた土器は、胴下半部が打ち欠かれた口縁部40cmを測る大型の深鉢で、逆位で埋設されていた。北側の大部分が破損・散乱した状態で出土した。

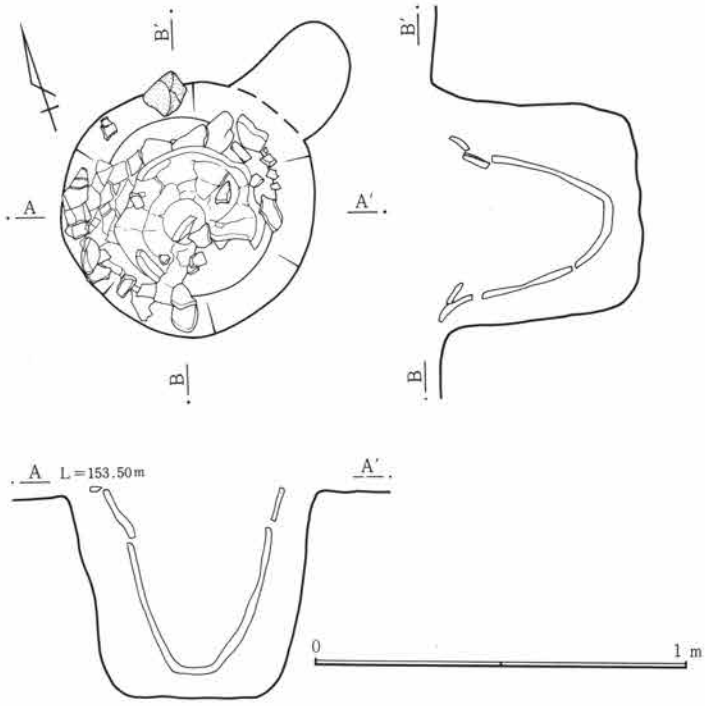
内部の確認面から1cm低い位置からは、黒曜石のフレイクが出土している。焼土粒は確認されておらず、土器も加熱を受けていない。本埋甕は単独の屋外埋甕であるものと思われる。(春山)

0　　1m

(2号埋甕)
①暗褐色土層　ローム粒を多く含む。
②暗褐色土層　①層に比し、黒味がかる。ローム粒を少量含む。

第28図　1号・2号埋甕実測図

3号埋甕（第29・32図、第10表、図版9・13・14）

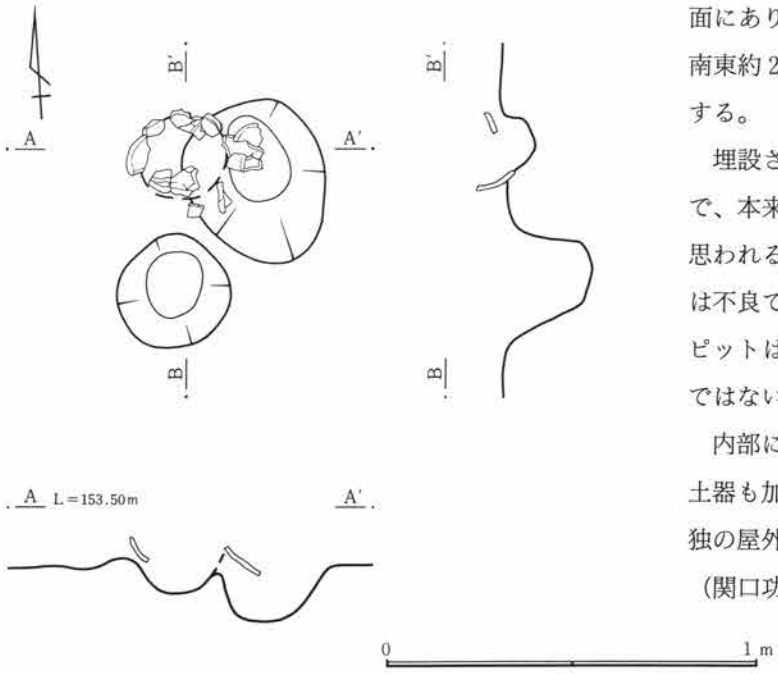


本埋甕は、第7次調査区中央部の平坦面にあり、60・61—22・23グリッドに位置する。北西約2m50cmの位置に4号埋甕が所在する。検出面は、4号埋甕より12cm高い。

埋設されていた土器は、大型の深鉢で口縁部が打ち欠かれ、正位で埋設されていた。重複するピットの底面からは、古墳時代後期に属する土師器甕の口縁部破片が出土し、周辺に接合する胴上部破片が多く出土していることから、後世の攪乱や削平を受けたものと思われる。

内部に剝片石器が1点認められたが、焼土粒は確認されておらず、土器も加熱を受けていない。本埋甕は単独の屋外埋甕であるものと思われる。（春山）

4号埋甕（第29・32図、第11表、図版9）



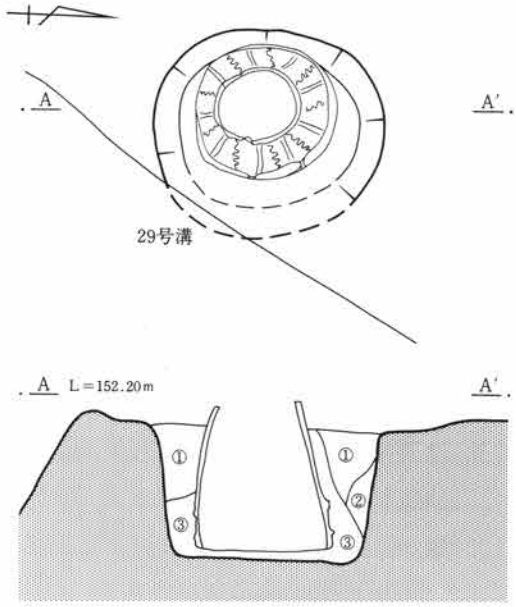
本埋甕は、第7次調査区中央部の平坦面にあり、61—22グリッドに位置する。南東約2m50cmの位置に3号埋甕が所在する。

埋設されていた土器は、1個体の深鉢で、本来は正位に埋設されていたものと思われる。ピットに破壊され、残存状況は不良であった。なお、隣接する二基のピットは、覆土の状況から当該期のものではないものと思われる。

内部には、焼土粒は確認されておらず、土器も加熱を受けていない。本埋甕は単独の屋外埋甕であるものと思われる。（関口功）

第29図　3号・4号埋甕実測図

5号埋甕（第30・33図、第12表、図版9・12）



本埋甕は、第8次調査区に接する第7次調査区の平坦面にあり、64—28グリッドに位置する。北西約6m50cm～7mの位置に1号・2号埋甕が、所在する。29号溝に破壊される。

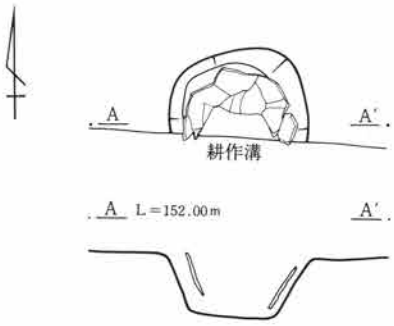
埋設されていた土器は、胴下半部が打ち欠かれた口縁部37cmを測る深鉢で、逆位に埋設されていた。

内部に焼土粒は認められないが、二次加熱による炭化物が外面に付着していた。本埋甕は単独の屋外埋甕と思われる。（中沢）

0　1m

（5号埋甕）
①黒褐色土層　ローム粒を多く含む。
②暗褐色土層　ローム粒・ロームブロックを多く含む。
③暗褐色土層　ローム粒を多く含む。

6号埋甕（第30図、図版9）



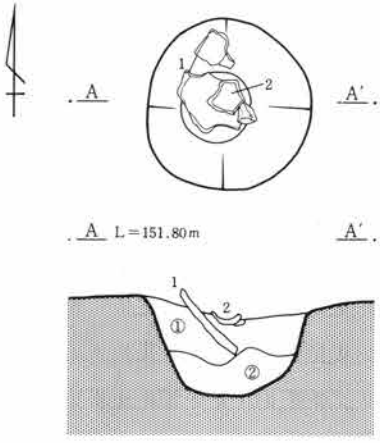
本埋甕は、第7次調査区中央の平坦面にあり、71—30グリッドに位置する。

風化が著しく、図化できないが、本来は底部を打ち欠いて正位に埋設されていたものと思われる。周辺にピットが多数存在することから、住居跡の可能性も否定できない。

なお、内部に焼土粒は認められず、土器も加熱を受けていない。（関口功）

0　1m

7号埋甕（第30・33図、第13表、図版9・12）



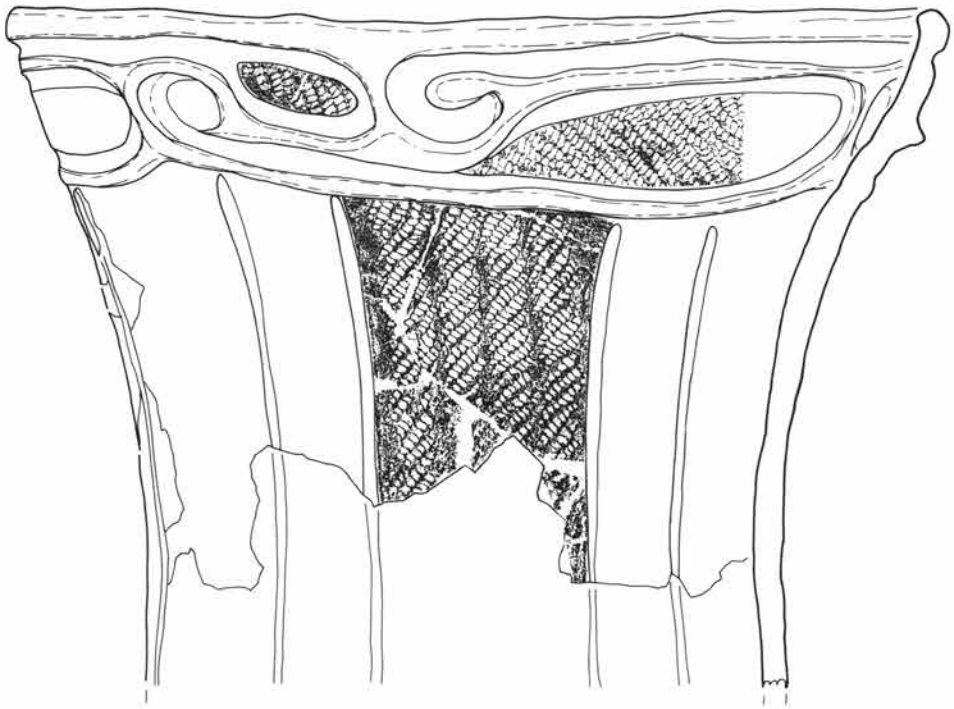
本埋甕は、第8次調査区中央部の平坦面にあり、63—37グリッドに位置する。表土が薄く、残存状況は極めて不良であった。

本来は、底部を打ち欠いた深鉢が埋設されていたものと思われる。口縁部の欠損は後世の削平によるものであろう。内部から深鉢1個体分の底部破片が出土している。なお、焼土粒は確認されておらず、土器も加熱を受けていない。（中沢）

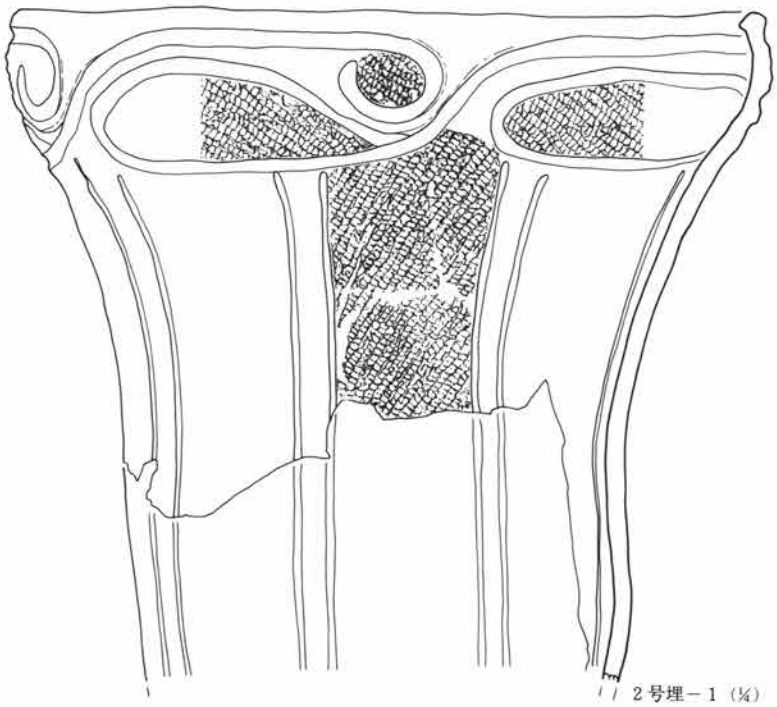
0　1m

（7号埋甕）
①黒褐色土層　白色軽石・ローム粒を少量含む。
②暗褐色土層　ローム粒・ロームブロックを多く含む。

第30図　5号・6号・7号埋甕実測図



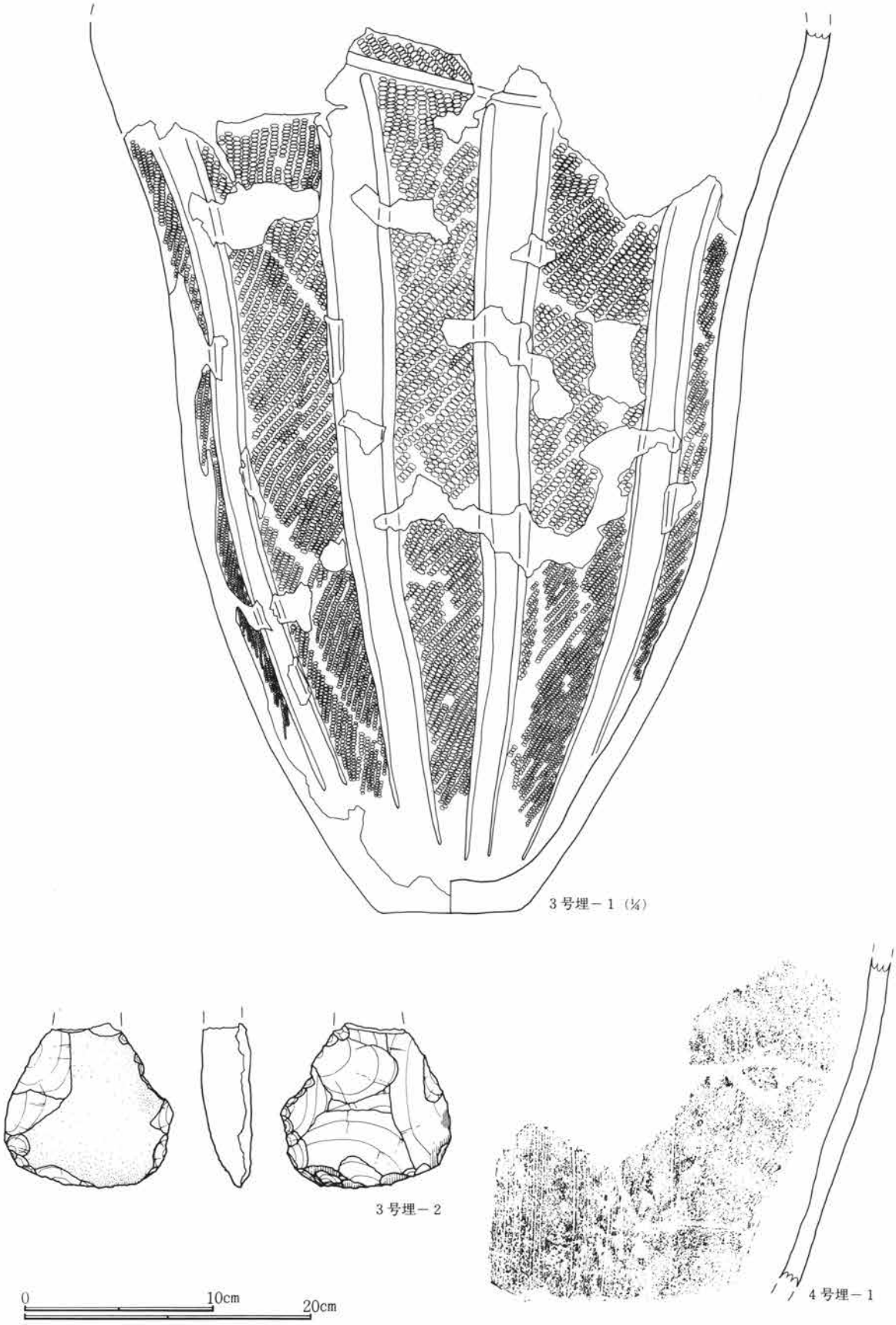
1号埋－1（¼）



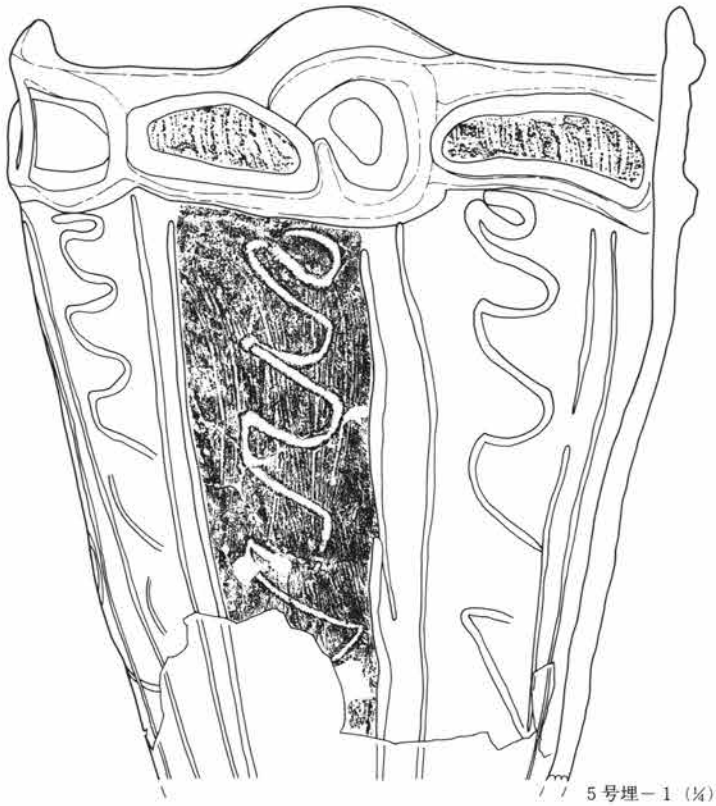
2号埋－1（¼）

0　20cm

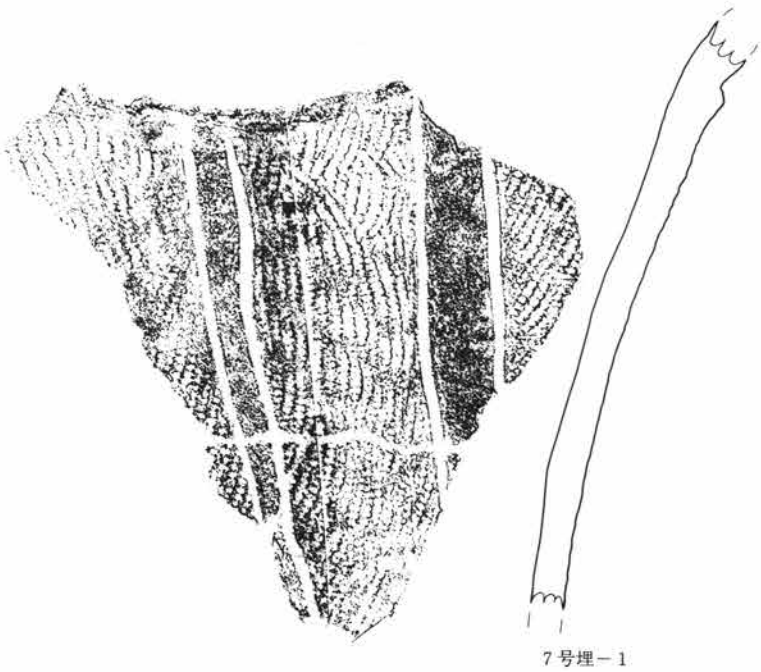
第31図　1号・2号埋甕出土遺物実測図



第32図　3号・4号埋甕出土遺物実測図



5号埋－1（¼）



7号埋－1

7号埋－2（¼）

0　10cm　20cm

第33図　5号・7号埋甕出土遺物実測図

第８表　１号埋甕出土遺物観察表

土　　器

挿図番号 図版番号	器　種 部　位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器　形　・　文　様　の　特　徴　等	備　　考
31－１ 12	深　　鉢 口～胴部	逆位状態	①普、雲母粒を多く含む　②良好　③橙色	口縁部を隆帯と沈線による渦巻文と楕円状の区画文で３単位に構成。胴部を２本単位の沈線により７単位に構成。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期

第９表　２号埋甕出土遺物観察表

土　　器

挿図番号 図版番号	器　種 部　位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器　形　・　文　様　の　特　徴　等	備　　考
31－１ 12	深　　鉢 口～胴部	逆位状態	①普、雲母粒を多く含む　②良好　③明黄褐色	口縁部を渦巻文と楕円状の区画文で５単位に構成。胴部に２本単位の沈線により９単位に構成。原体ＲＬＲの複節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期

第10表　３号埋甕出土遺物観察表

土　　器

挿図番号 図版番号	器　種 部　位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器　形　・　文　様　の　特　徴　等	備　　考
32－１ 13	深　　鉢 胴～底部	正位状態	①普、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	口縁部に凹線による文様を描出。胴部に２本単位の凹線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期

石　　器

挿入番号 図版番号	器　種	出土状態	計測値（cm・g） 長・幅・厚・重	形　状　・　特　徴　等	備　　考
32－２ 14	剝片石器	覆土	長　8.4　幅　8.7 厚　2.5　重　205	刃部に使用による摩耗痕。	安山岩

第11表　４号埋甕出土遺物観察表

土　　器

挿図番号 図版番号	器　種 部　位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器　形　・　文　様　の　特　徴　等	備　　考
32－１	深　　鉢 胴部片	正位状態 ？	①普、砂粒　②良好　③明黄褐色	櫛歯状工具による条線を施す。２本単位の沈線を垂下。	摩耗が著しい。 加曽利Ｅ３式期

第12表　５号埋甕出土遺物観察表

土　　器

挿図番号 図版番号	器　種 部　位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器　形　・　文　様　の　特　徴　等	備　　考
33－１ 12	深　　鉢 口～胴部	逆位状態	①普、砂粒　②普通　③鈍い黄褐色	口縁部を渦巻文と楕円状の区画文で４単位に構成。胴部を２本単位の沈線により９単位に構成。櫛歯状工具による条線を施した後、蛇行懸垂文を施す。	加曽利Ｅ３式期

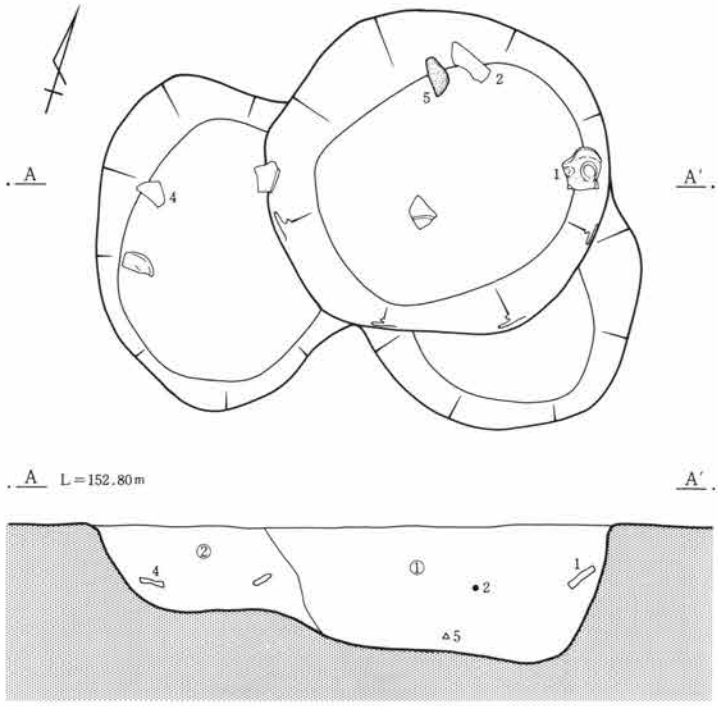
第13表　７号埋甕出土遺物観察表

土　　器

挿図番号 図版番号	器　種 部　位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器　形　・　文　様　の　特　徴　等	備　　考
33－１ 12	深　　鉢 胴部片	斜位状態 ？	①普、雲母粒を多く含む　②良好　③褐色	口縁部に隆帯と沈線による文様を描出。胴部に２本単位の沈線を垂下。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
33－２ 12	深　　鉢 底　　部	正位状態 ？	①普、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	沈線を垂下。原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期

4．土　　壙

1号土壙（第34・35図、第14表、図版9・13・14）



本土壙は、第7次調査区中央部の平坦面にあり、67—22グリッドに位置する。少なくとも二時期以上に亘る可能性は否定できないが、分別が困難であるので、遺物は一括して扱うこととする。

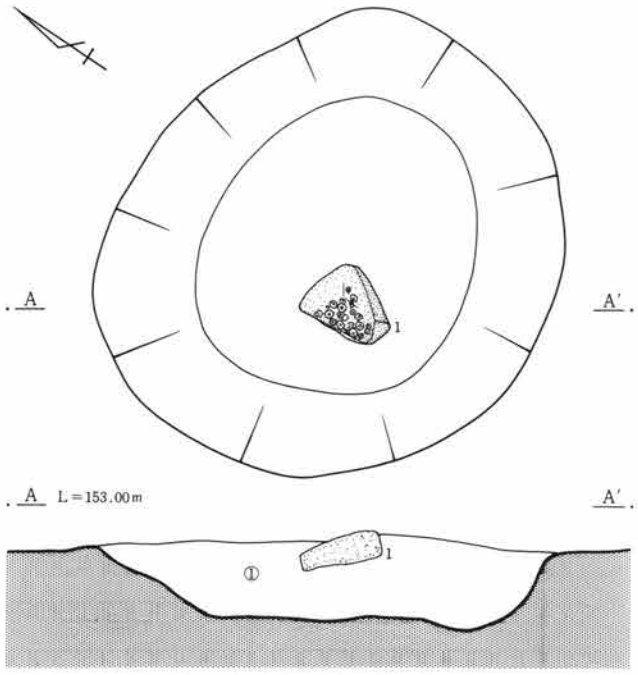
平面形は、径91×85cmを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは最大で37cmを測る。

遺物は、土器4点と打製石斧が1点出土している。（関口功）

（1号土壙）
①暗褐色土層　ロームブロック・軽石をやや多く含む。
②暗褐色土層　ロームブロックを稀に含む。

0　1m

2号土壙（第34・36図、第15表、図版9・14）



本土壙は、第7次調査区中央部西寄りの平坦面にあり、65—16グリッドに位置する。

平面形は、径125×113cmを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは最大で21cmを測る。

遺物は、底面から浮いた状態で石皿が1点出土している。（関口功）

（2号土壙）
①暗黄褐色土層　ロームブロックを稀に含む。

0　1m

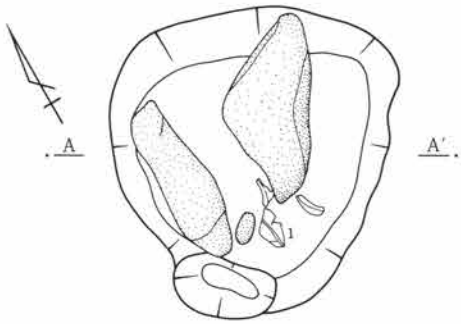
第34図　1号・2号土壙実測図

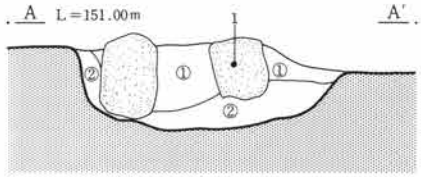
3号土壙（第35・36図、第16表、図版9）

本土壙は、第7次調査区北寄りの平坦面にあり、83―36グリッドに位置する。縄文時代に属する遺構としては、最北端に所在する。

平面形は、径80×74cmを測る不整形を呈する。確認面からの深さは最大で21cmを測る。南西隅に小ピットが重複するが、詳細は不明である。

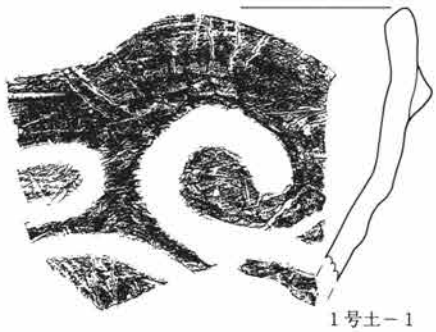
内部からは、大小3点の礫が認められるほか、深鉢が1点出土した。（中沢）

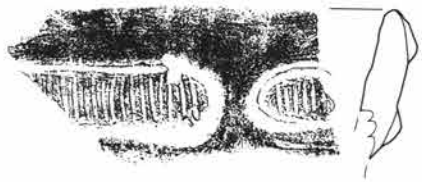




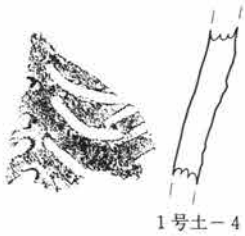
（3号土壙）
①黒褐色土層　ローム粒を稀に含む。
②暗褐色土層　ローム粒を主体とした層。

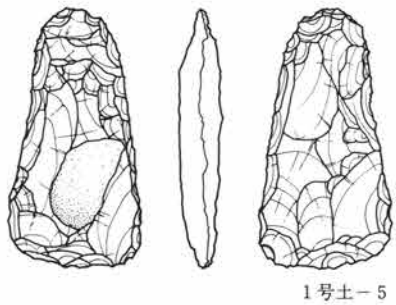
0　1m


1号土－1


1号土－2

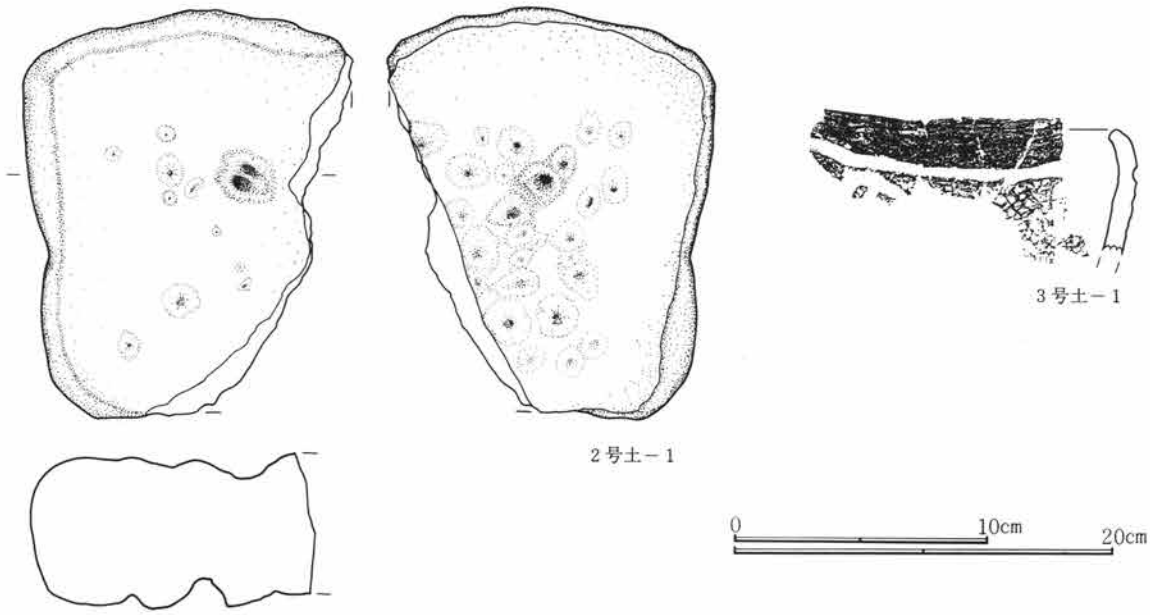
1号土－3


1号土－4


1号土－5

0　10cm

第35図　3号土壙実測図及び1号土壙出土遺物実測図



第36図　2号・3号土壙出土遺物実測図

第14表　1号土壙出土遺物観察表

土　器

挿図番号 図版番号	器種 部位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器形・文様の特徴等	備考
35－1 13	深鉢 口縁部片	底面＋20	①普、石英・砂粒　②良好　③鈍い黄褐色	口縁部に隆帯と凹線による文様を描出。胴部に沈線を垂下。原体ＬＲの単節斜縄文を施した後、全面磨き。	加曽利Ｅ３式期
35－2 13	深鉢 口縁部片	底面＋21	①普、石英粒・パミス　②良好　③明黄褐色	口縁部に隆帯と沈線による文様を描出。区画内に沈線を充塡。	曽利式期
35－3	壺？ 胴部片	覆土	①普、雲母粒・パミス　②良好　③鈍い黄褐色	口縁部に隆帯と凹線による文様を描出。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
35－4 13	深鉢 胴部片	底面＋7	①普、石英粒　②良好　③褐色	棒状工具により綾杉状の文様を描出。	曽利式期

石　器

挿図番号 図版番号	器種	出土状態	計測値（cm・g） 長・幅・厚・重	形状・特徴等	備考
35－5 14	打製石斧	底面＋6	長　10.2　幅　5.3 厚　1.8　重　102	撥形。表面に自然面を残す。	安山岩

第15表　2号土壙出土遺物観察表

石　器

挿図番号 図版番号	器種	出土状態	計測値（cm・g） 長・幅・厚・重	形状・特徴等	備考
36－1 14	石皿	底面＋13	長　21.5　幅　17.5 厚　8.8　重　4100	表裏両面に多数の凹み。	砂岩

第16表　3号土壙出土遺物観察表

土　器

挿図番号 図版番号	器種 部位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器形・文様の特徴等	備考
36－1	深鉢 口縁部片	底面＋17	①普、砂粒　②良好　③褐色	口縁部に沈線を巡らす。原体不明の縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期

5．遺構外出土遺物

本項では、縄文時代の遺構から出土しなかった土器・石器のうち、特徴的なものを中心に報告する。遺構外出土遺物には、縄文時代以外の遺構から出土した縄文時代の遺物も含んでいる。総量に占める各遺物の時期的関係については数量として示すことができなかったが、土器に関しては時期的な特徴を意識して図化した。小破片が多く土器の文様構成を伺い知ることができる資料は皆無に近い。遺構外出土土器の傾向は、当然のことかも知れないが検出された縄文時代の遺構のほとんどが加曽利Ｅ３式期であることを反映して、曽利式系も含め遺構とほぼ同時期のものが量的主体を占めていた。一方、全体の量に占める割合は少ないものの前期末葉や加曽利Ｅ出現期の土器が出土していることが興味深い。特に、群馬県内を見わたしても竪穴住居の検出例が少ない十三菩提式期の土器群の存在は、前期終末期における居住のありかたを考えるうえでも示唆に富むものではなかろうか。

⑴　土器（第37～39図、第17表、図版13）

草創期～前期前半

本遺跡では出土していない。

前期後半～中期初頭

前期後半に該当するものと思われる土器片で図化しえたのは、黒浜式期が２点、諸磯b(新)式期が１点の計３点である。このうち、１は緻密な連続爪形文を施しており黒浜式後半の様相を呈している。

前期末葉諸磯ｃ(新)式期～中期初頭五領ケ台式期に該当すると思われる土器片10点を図化した。このうち５・６は細い竹管の使用が特徴的である。また７・９・10は半截竹管状工具による平行沈線と三角印刻文が特徴的で、中部地方及び北陸地方に系譜を求めることができよう。12は縄文地文に結節浮線文を施した、いわゆる十三菩提式の特徴を示す土器である。前述した７・９・10もほぼ同時期と思われ、前期末葉の複雑な土器様相の一端を示す資料である。13は口唇部に縄文原体圧痕を施しており、その系譜を在地の土器群に求めることは不可能かもしれない。

中期前半～後期前半

中期前半では、阿玉台式期（？）２点、勝坂式期３点を図化した。

中期後半に該当する土器片は22点図化した。前述した理由により曽利式系も含め大半が加曽利Ｅ３式期に帰属する。この中の加曽利Ｅ式系土器は、縄文と伴に条線を地文として施したものが少量見受けられるが、大半は、口縁部文様を凹線と低い隆帯で描出し、胴部に懸垂する無文を持ち充塡縄文を特徴とするものが主体を占める。また、加曽利Ｅ式出現期の土器片や加曽利Ｅ４式期の土器片も若干出土している。

後期前半としては称名寺式期や堀之内式期の土器片を３点図化した。

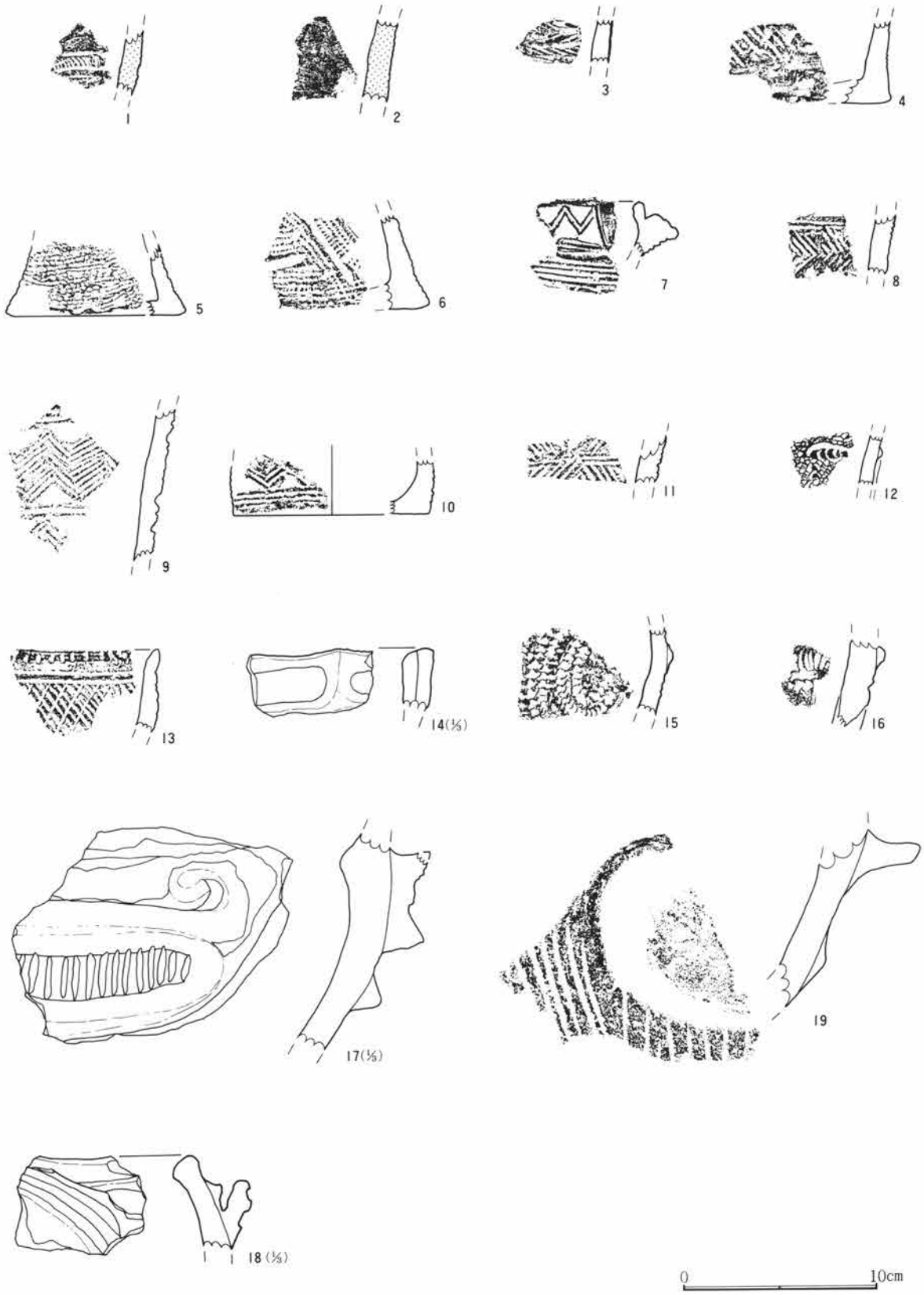
後期後半～晩期

本遺跡では出土していない。

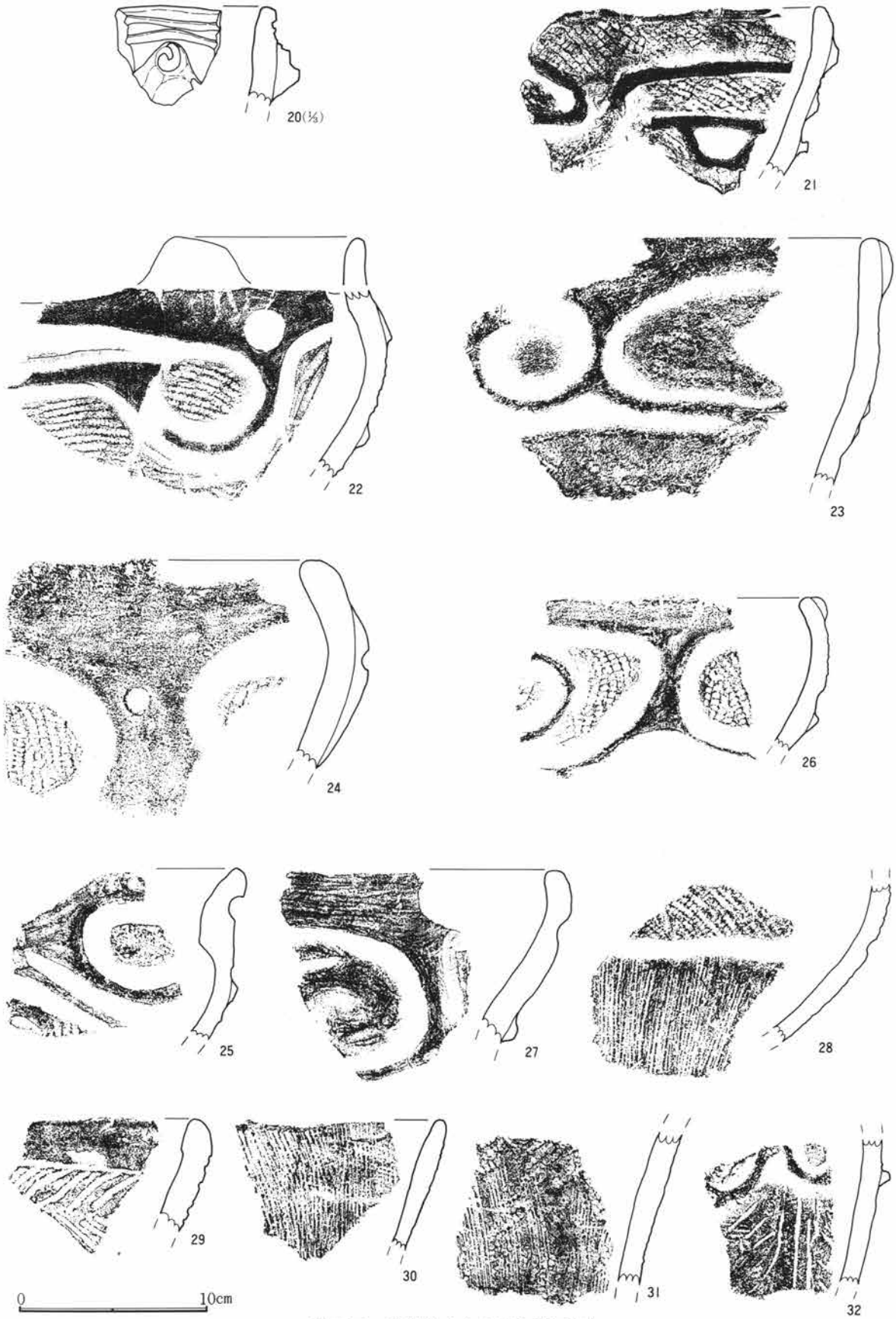
⑵　石器（第40～42図、第17表、図版15）

いわゆる定形的な石器については網羅できたものと考えている。出土した石器の中で帰属時期の特定できるものは草創期の尖頭器１点のみであるが、土器の出土傾向から推定すると、加曽利Ｅ３式期に帰属するものが多いものと思われる。

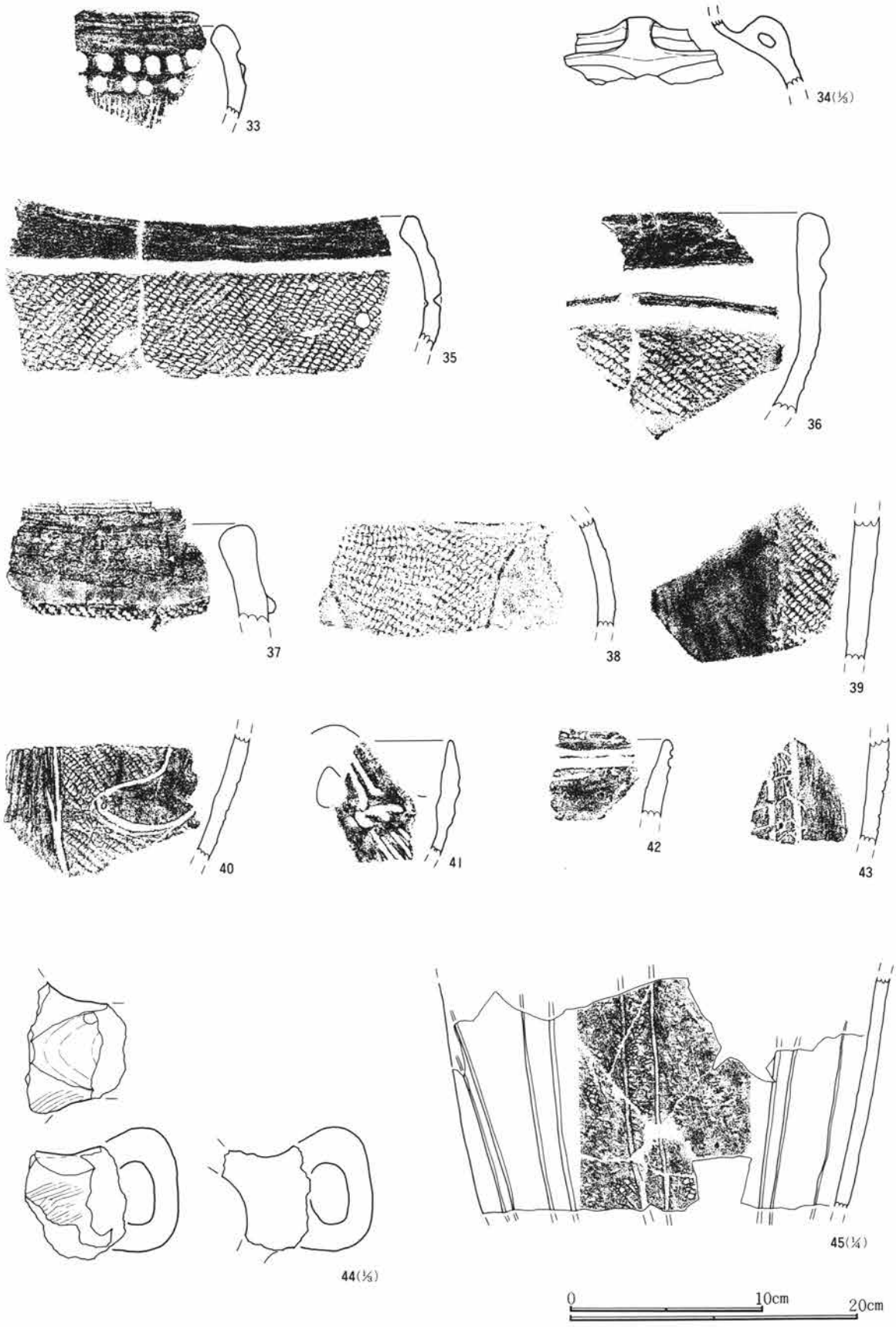
図化した石器は、尖頭器１点、石鏃４点、石匙１点、打製石斧３点、磨製石斧４点、加工痕のある剝片石器２点、砥石１点、石皿４点、凹み石１点、石棒１点の合計22点である。このうち、75―36グリッドで出土した石皿２点は、時代は特定できないが、縄文の遺構を巻き込んだ風倒木痕の可能性が強い黒色土中から出土している。



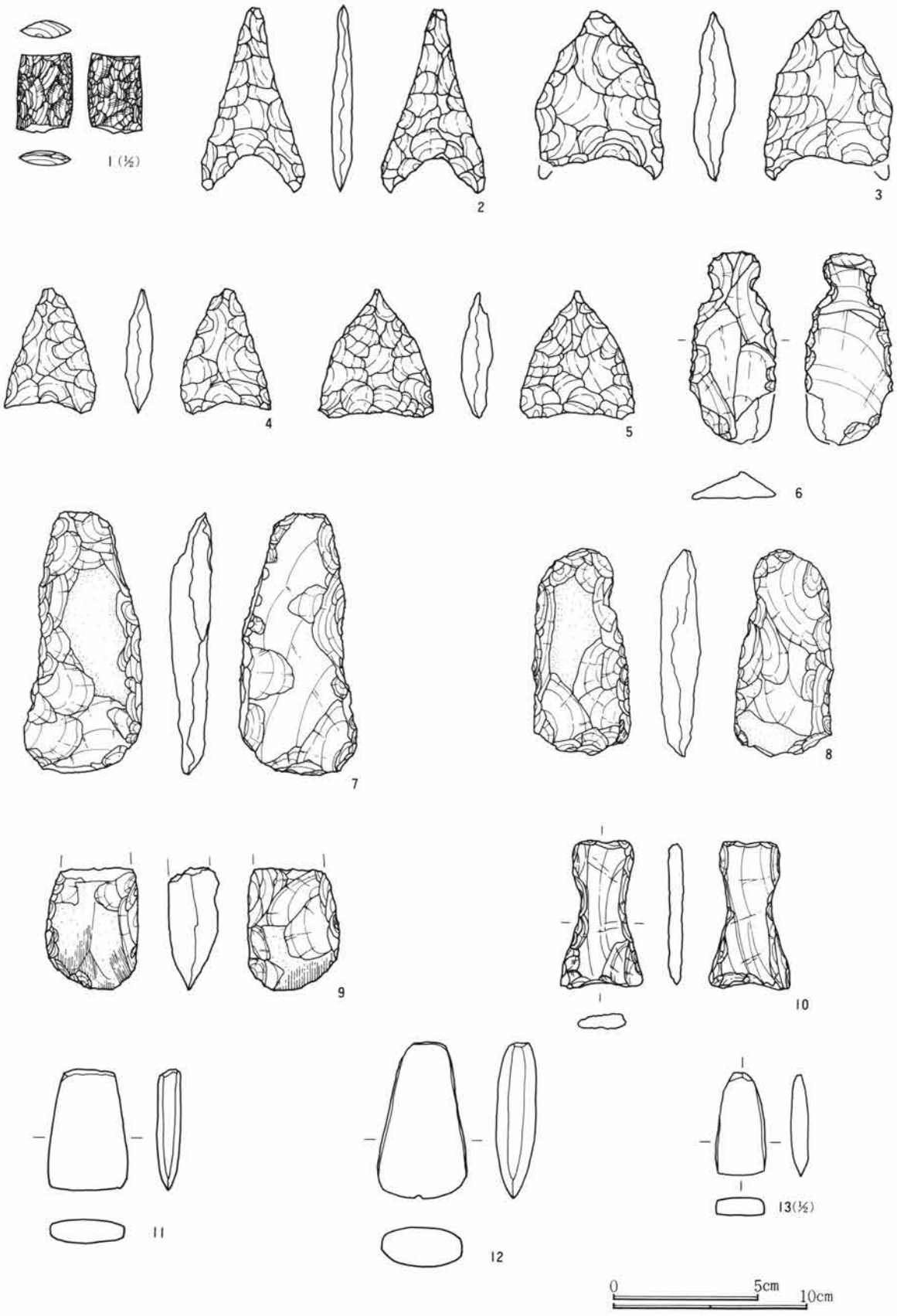
第37図　遺構外出土土器実測図(1)



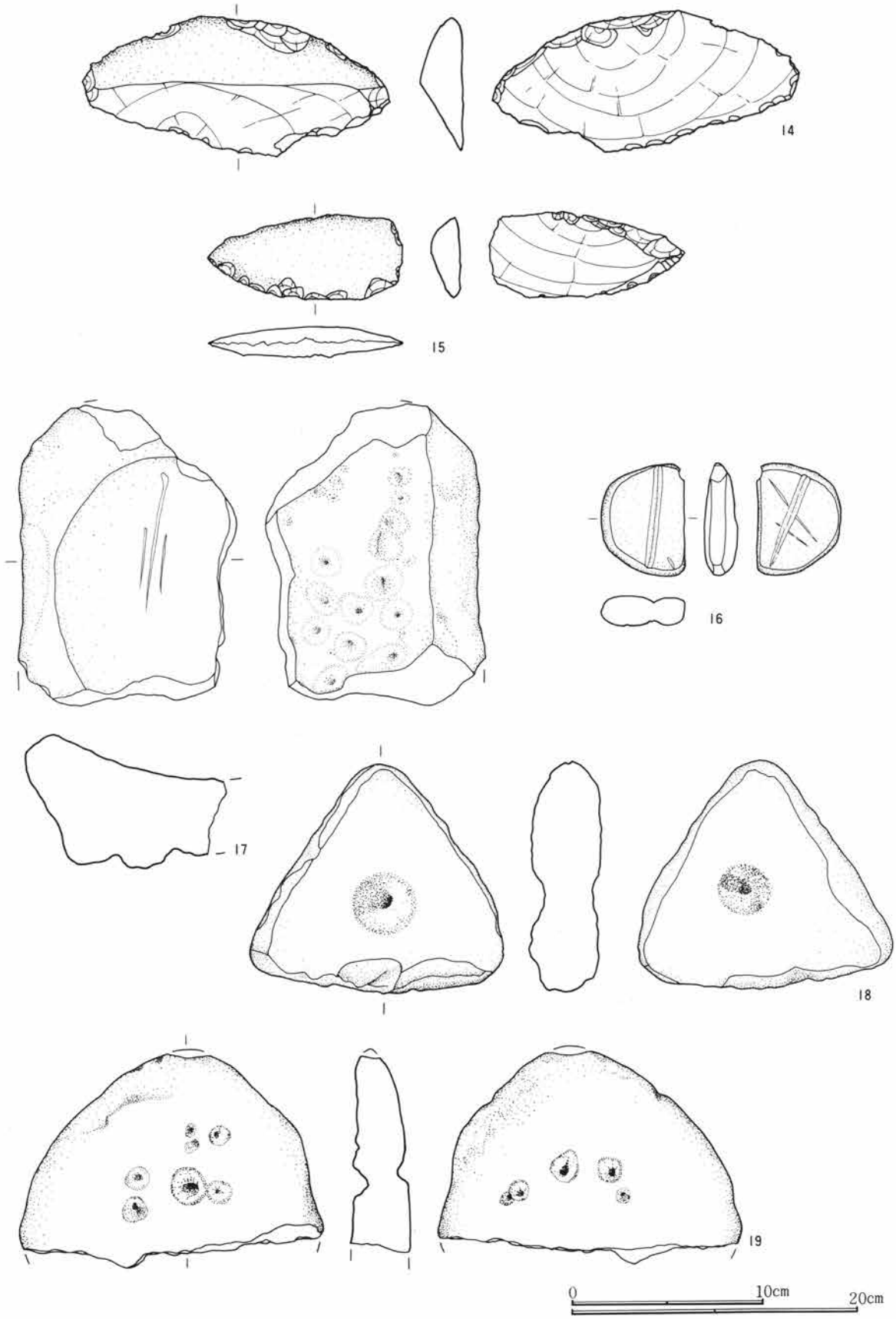
第38図　遺構外出土土器実測図(2)



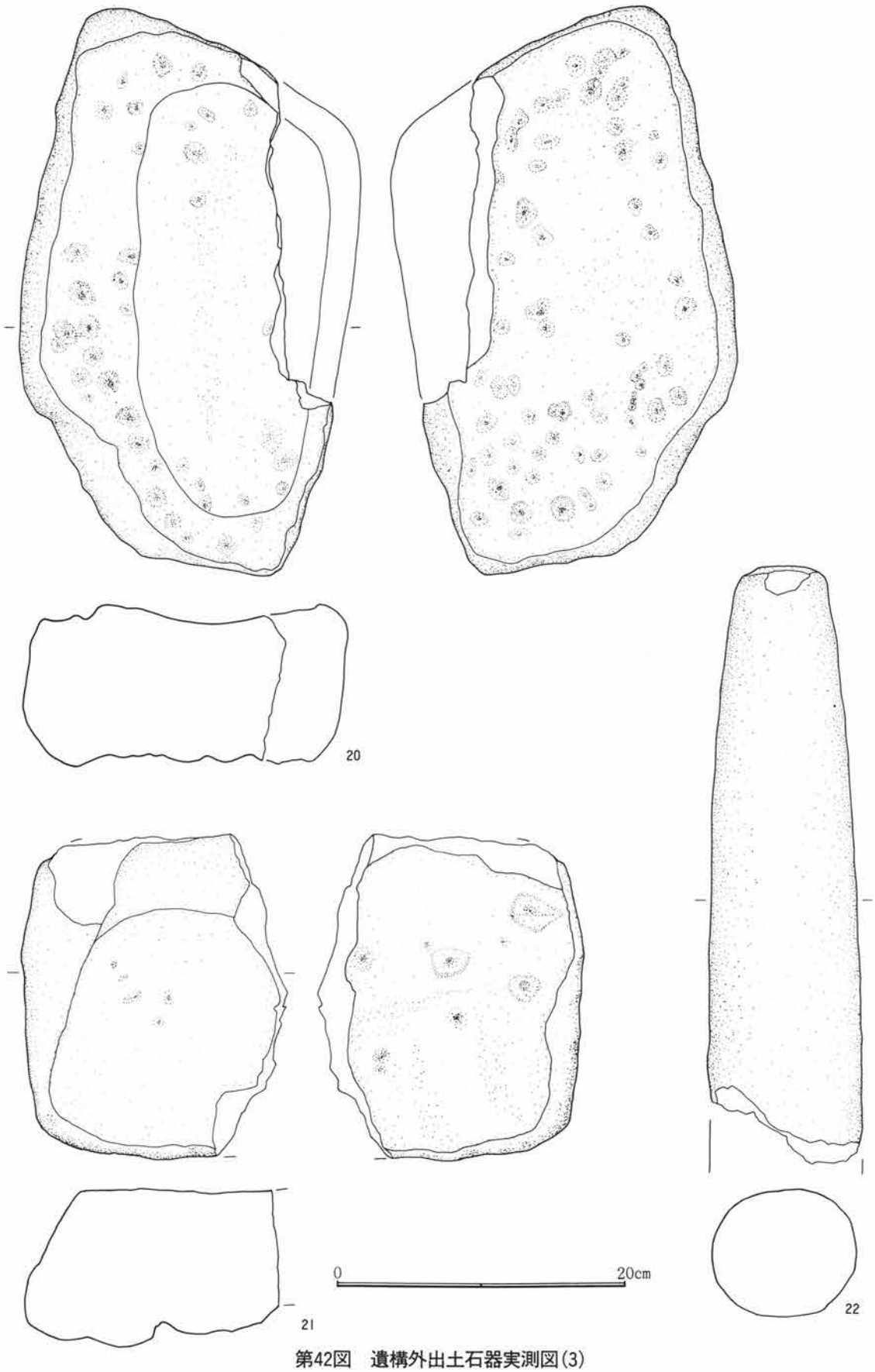
第39図　遺構外出土土器実測図(3)



第40図　遺構外出土石器実測図(1)



第41図　遺構外出土石器実測図(2)



第42図　遺構外出土石器実測図(3)

第17表　遺構外出土遺物観察表

土　　器

挿図番号 図版番号	器種 部位	出土状態	①胎土　②焼成　③色調	器形・文様の特徴等	備考
37－1 13	深鉢 胴部片	626号住居 覆土	①普、繊維を少量含む　②良好　③外面褐色　内面橙色	半截竹管状工具による連続化形文を施す。	黒浜式期
37－2 13	深鉢 胴部片	53－92G	①普、繊維・砂粒　②良好　③鈍い橙色	原体不明の縄文を施す。外面が摩耗。	黒浜式期
37－3 13	深鉢 胴部片	561号住居 覆土	①普、砂粒　②良好　③橙色	矢羽根状の刻みを付した浮線文を貼付する。	諸磯b(前)式期
37－4 13	深鉢 底部片	527号住居 覆土	①普、片岩・石英粒　②良好　③鈍い橙色	半截竹管状工具による沈線文。	十三菩提式～五領ヶ台式期
37－5 13	深鉢 底部片	503号住居 覆土	①普、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	3本1組の細い竹管を連続刺突して文様を描出する。	諸磯c式～十三菩提式期
37－6 13	深鉢 底部片	456号住居 覆土	①普、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	半截竹管状工具による連続爪形文を施文。棒状工具による沈線も施す。	十三菩提式期
37－7 13	深鉢 口縁部片	64－12G	①普、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	口縁が強く屈曲する。半截竹管状工具による平行沈線を施し、口縁上面には三角印刻文。	十三菩提式期
37－8 13	深鉢 胴部片	440号住居 覆土	①粗、砂粒　②良好　③外面橙色　内面黒褐色	半截竹管状工具による沈線文。	十三菩提式期
37－9 13	深鉢 胴部片	48－10G	①粗、砂粒　②良好　③鈍い橙色	半截竹管状工具による沈線文と三角印刻文を施す。	十三菩提式期
37－10 13	深鉢 底部片	456号住居 覆土	①粗、砂粒　②良好　③鈍い橙色	半截竹管状工具による平行沈線と三角印刻文を施す。	十三菩提式期
37－11 13	深鉢 胴部片	64－28G	①粗、砂粒　②良好　③鈍い橙色	半截竹管状工具による沈線文と、棒状工具による沈線文を施す。	十三菩提式期
37－12 13	深鉢 胴部片	463号住居 覆土	①普、砂粒　②良好　③明赤褐色	原体0段多条LR単節斜縄文を施した後に、結節浮線文を貼付する。	十三菩提式期
37－13 13	深鉢 口縁部片	62－14G	①普、砂粒　②良好　③明赤褐色	口唇部に原体Lの縄文を押捺。半截竹管状工具による斜位の平行沈線を施した後、箆状工具による平行沈線を施す。	五領ヶ台式期
37－14 13	深鉢 口縁部片	39－73G	①粗、片岩を多く含む　②良好　③鈍い褐色	口縁部に低い隆帯による窓枠状の区画を施す。	阿玉台Ⅰ式期か
37－15	深鉢 胴部片	48－75G	①普、砂粒　②良好　③外面橙色　内面褐灰色	低い曲隆帯を貼付した後、ペン先状のY刺突文連続を充塡する。	勝坂式期
37－16 13	深鉢 胴部片	81－39G	①普、パミスを少量含む　②良好　③鈍い橙色	ペン先状の連続刺突文及び幅広の竹管文を施す。	勝坂式期
37－17 13	深鉢 口縁部片	535号住居 覆土	①普、雲母粒　②良好　③鈍い黄橙色	幅広の隆帯で主文様を描出し、区画内を棒状工具による短沈線を充塡する。	阿玉台Ⅳ式期か
37－18 13	深鉢 口縁部片	74－37G	①普、雲母粒　②良好　③鈍い褐色	棒状工具による沈線を2本付した隆帯を貼付する。	加曽利E式出現期
37－19 13	深鉢 胴部片	458号住居 覆土	①普、雲母粒　②良好　③橙色	隆帯によって渦巻文を描出の後、棒状工具による沈線を施す。	勝坂式期
38－20 13	深鉢 口縁部片	489号住居 覆土	①普、砂粒　②良好　③鈍い赤褐色	口縁上部に棒状工具による沈線を施す。口縁は隆帯を弧状に貼付すると思われ、連結部には渦巻文を施す。	加曽利E式出現期
38－21 13	深鉢 口縁部片	504号住居 覆土	①普、砂粒　②良好　③鈍い黄橙色	幅広の隆帯を貼付し主文様を描出した後、原体0段多条LR単節斜縄文を施す。	加曽利E式出現期
38－22 13	深鉢 口縁部片	71－38G	①普、雲母粒　②良好　③明赤褐色	口縁に舌状の突起を貼付する。口縁部は低い隆帯及び凹線によって文様を描出。原体LRの単節斜縄文を施す。	加曽利E3式期

挿図番号 図版番号	器種 部位	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴等	備考
38—23 13	深鉢 口縁部片	443号住居 覆土	①普、石英粒 ②良好 ③明黄褐色	低い隆帯と凹線によって文様を描出する。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。外面が摩耗。	加曽利Ｅ３式期
38—24 13	深鉢 口縁部片	576号住居 覆土	①普、雲母粒を多く含む ②良好 ③暗褐色	低い隆帯と凹線によって文様を描出する。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
38—25 13	深鉢 口縁部片	46—74G	①普、片岩・石英粒 ②良好 ③褐色	口縁に舌状の突起を貼付する。低い隆帯と凹線によって文様を描出する。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
38—26 13	深鉢 口縁部片	553号住居 覆土	①普、石英・砂粒 ②良好 ③明黄褐色	低い隆帯と凹線によって文様を描出する。原体ＲＬの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
38—27 13	深鉢 口縁部片	527号住居 覆土	①普、石英粒 ②良好 ③鈍い橙色	低い隆帯と凹線によって文様を描出する。原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期
38—28 13	浅鉢？ 胴部片	456号住居 覆土	①普、砂粒 ②良好 ③明黄褐色	口縁部には０段多条原体ＲＬの単節斜縄文を施す。凹線の下部には、櫛歯状工具による条線を施す。	加曽利Ｅ３式期
38—29 13	深鉢 口縁部片	561号住居 覆土	①粗、砂粒 ②良好 ③外面灰褐色 内面鈍い褐色	棒状工具による矢羽根状の沈線文を施す。	曽利式系
38—30 13	深鉢 口縁部片	67—23G	①普、雲母粒 ②良好 ③外面褐色 内面暗褐色	櫛歯状工具による条線を施す。	加曽利Ｅ３～Ｅ４式期か
38—31 13	深鉢 胴部片	91—38G	①普、砂粒 ②良好 ③明赤褐色	６本１組の条線を施した後、原体ＲＬの単節縄文を施す。	加曽利Ｅ３～Ｅ４式期
38—32 13	深鉢 胴部片	46—72G	①普、石英・雲母粒 ②良好 ③鈍い黄褐色	口縁部には隆帯を貼付する。胴部は、原体ＬＲの単節斜縄文を施した後、棒状工具による綾杉状の沈線文。	曽利式系か
39—33 13	深鉢 口縁部片	49—73G	①普、石英粒 ②良好 ③橙色	口縁に２列の刺突が巡る。胴部は条線文。	加曽利Ｅ４式期
39—34 13	壺 胴部片	605号住居 覆土	①普、片岩・砂粒 ②良好 ③鈍い黄橙色	胴上部に橋状の把手を貼付する。胴部は凹線によって文様を描出する。	加曽利Ｅ３～Ｅ４式期
39—35 13	深鉢 口縁部片	48—75G	①普、砂粒 ②良好 ③暗褐色	口縁に凹線を巡らした後、原体ＲＬの単節斜縄文を施す。穿孔途中の補修を有する。	加曽利Ｅ４式期
39—36 13	深鉢 口縁部片	443号住居 覆土	①普、石英粒を少量含む ②良好 ③鈍い黄褐色	低い隆帯と凹線によって文様を描出。原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ４式期
39—37 13	深鉢 口縁部片	72—30G	①普、砂粒を多く含む ②良好 ③橙色	原体ＲＬの単節斜縄文を付した隆帯を巡らした後、垂下させる。	加曽利Ｅ４式期
39—38 13	深鉢 胴部片	44—72G	①普、片岩・雲母粒 ②良好 ③明黄褐色	断面三角の微隆起によって文様を描出した後、原体ＬＲの単節斜縄文を充塡する。	加曽利Ｅ４式期
39—39 13	深鉢 胴部片	48—75G	①普、石英粒 ②良好 ③鈍い黄橙色	低い隆帯の垂下。原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ４式期
39—40 13	深鉢 胴部片	47—75G	①普、片岩を多く含む ②良好 ③明黄褐色	棒状工具による沈線で文様を描出。原体ＬＲの単節斜縄文を施す。	称名寺Ⅱ～堀之内Ⅰ式期か
39—41 13	深鉢 口縁部片	667号住居 覆土	①普、石英粒・片岩・パミス ②良好 ③鈍い褐色	環状を呈する把手を口縁に貼付する。内外面に、棒状工具による沈線を施す。	堀之内Ⅰ式期
39—42 13	深鉢 口縁部片	498号住居 覆土	①普、砂粒 ②良好 ③橙色	口縁に、棒状工具による沈線を巡らせる。	堀之内Ⅰ式期
39—43 13	深鉢 胴部片	643号住居 覆土	①普、パミス ②良好 ③鈍い黄橙色	棒状工具による沈線を施した後、篦状工具による刻みを施す。	時期不明
39—44 13	？ 把手部片 ？	591号住居 覆土	①普、砂粒を多く含む ②良好 ③外面橙色 内面褐灰色	環状を呈する把手か。原体Ｌの無節斜縄文を施す。	勝坂～加曽利Ｅ式期
39—45 13	深鉢 胴部片	554号住居 覆土	①普、石英・砂粒 ②良好 ③明黄褐色	棒状工具による沈線を垂下した後、原体Ｌの無節斜縄文を施す。	加曽利Ｅ３式期

石　　器

挿図番号 図版番号	器　種	出土状態	計測値（cm・g） 長・幅・厚・重	形　状　・　特　徴　等	備　　考
40－1	尖頭器	600号住居覆土	長 (2.7)　幅 1.9 厚 0.6　重 4.76	入念な押圧剥離によって両面に調整加工を施す。	上下欠損 黒曜石
40－2 15	石　鏃	467号住居覆土	長 3.1　幅 1.8 厚 0.35　重 1.3	凹基無茎。	石鉄鉱珪岩
40－3 15	石　鏃	561号住居覆土	長 2.85　幅 2.2 厚 0.7　重 3.3	凹基無茎。	脚部一部欠損 玻璃質安山岩
40－4 15	石　鏃	561号住居覆土	長 2.1　幅 1.6 厚 0.45　重 1.2	無茎。	玻璃質安山岩
40－5 15	石　鏃	591号住居覆土	長 2.15　幅 1.95 厚 0.5　重 1.9	平基に近いがやや彎入する。無茎。	チャート
40－6 15	石　匙	592号住居覆土	長 6.6　幅 3.0 厚 0.9　重 16.3	体部は縦長を呈する。	欠損 チャート
40－7 15	打製石斧	619号住居覆土	長 13.3　幅 6.1 厚 2.1　重 177	撥形か。	安山岩
40－8 15	打製石斧	600号住居覆土	長 10.6　幅 5.1 厚 2.0　重 130	撥形か。	熱変成岩
40－9 15	磨製石斧	72－30G	長 (6.2)　幅 4.8 厚 2.6　重 90	刃部に使用痕。	基部欠損 熱変成岩
40－10 15	打製石斧	596号住居覆土	長 7.5　幅 4.2 厚 0.7　重 35	分銅形を呈する。	絹雲母石墨片岩
40－11	磨製石斧	72－30G	長 6.2　幅 4.1 厚 1.2　重 63	丁寧な研磨が施される。	輝緑岩
40－12	磨製石斧	76－38G	長 8.0　幅 4.6 厚 2.1　重 130	丁寧な研磨が施される。	角閃岩
40－13 15	磨製石斧	643号住居覆土	長 3.5　幅 1.2 厚 0.6　重 6	丁寧な研磨が施される。	一部欠損 滑石
41－14	剝片石器	51－92G	長 15.9　幅 7.1 厚 2.3　重 220	使用による剝離が認められる。縁辺を中心に加工が施される。	熱変成岩
41－15	剝片石器	71－47G	長 10.1　幅 4.4 厚 1.6　重 65	使用による剝離が認められる。縁辺を中心に加工が施される。	熱変成岩
41－16 15	砥　石	628号住居覆土	長 5.8　幅 4.4 厚 1.7　重 45	有溝砥石。全面使用。	砂岩
41－17 15	石　皿	624号住居覆土	長 (20.7)　幅 (15.4) 厚 9.4　重 3200	表面に線条痕有り。裏面に凹み多数。	欠損 砂岩
41－18 15	凹み石	419号住居覆土	長 11.3　幅 13.2 厚 3.6　重 565	表裏凹み２箇所。	砂岩
41－19 15	石　皿	596号住居覆土	長 (13.5)　幅 22.0 厚 4.1　重 1500	表裏両面に凹み12箇所。	欠損 砂岩
42－20	石　皿	75－36G	長 38.8　幅 (21.7) 厚 11.1　重 11900	表裏両面に凹み多数。	欠損 砂岩
42－21	石　皿	75－36G	長 (22.3)　幅 (18.4) 厚 11.0　重 5200	裏面に明瞭な凹み。	欠損 砂岩
42－22	石　棒	44－74G	長 (41.0)　幅 10.6 厚 8.8　重 6900	全面に丁寧な研磨が施される。	欠損 点紋緑泥片岩

V　古墳時代の遺構と遺物

1．概　　要

本遺跡は、調査対象面積が約90,000㎡にのぼるため、調査範囲を便宜的に第１次調査区～第12次調査区に区分している（第１図参照）。このうち、西縁の第６次調査区（西谷川旧流路）以外の全ての調査区で住居跡が確認されている。本遺跡で確認された住居跡の総数は740軒以上にのぼるが、そのうち古墳時代に属するものと思われる住居跡は約250軒である。古墳時代の住居跡の分布を見ると、台地中央部の第４次・５次・７次・８次調査区や、傾斜の緩やかな第９次調査区で重複・密集して確認されているが、小支谷が入り、複雑な地形を呈する東側の第11次・12次調査区では、ほとんど確認されていない。今回は第７次調査区、第８次調査区の北半部を中心に54軒を報告の対象としている。内訳は前期４軒・中期２軒・後期48軒である。来年度以降、随時第７次・第８次調査区の南半部から報告する予定である。なお、整理の関係上、古墳・奈良・平安という時代区分を採用しているため、７世紀代に属する住居跡も古墳時代に含んでいることを付言しておく。以下、今回報告する住居跡の概要について述べる（第43図・第18表参照）。

古墳時代前期に属するものと思われる住居跡は、本遺跡全体で４軒確認されている。43号住居跡・54号住居跡・591号住居跡・643号住居跡がこれにあたる。このうち591号住居跡と643号住居跡は第８次調査区北側で近接して所在するが、43号住居跡と54号住居跡は、第８次調査区南側の第４次・第３次調査区で離れて所在している。他に、第２次調査区の43-57グリッドに所在する19号住居跡から前期に属するものと思われる土師器甕の胴部破片が一点出土しているが、前期の住居跡とするには積極的な根拠に欠けるので４軒とした。いずれの住居跡も残存状況は極めて不良で、炉跡が確認されたのは591号住居跡のみである。遺物は、極めて少なく、石田川式期のＳ字状口縁を呈する台付甕の破片を中心に少量出土している程度である。

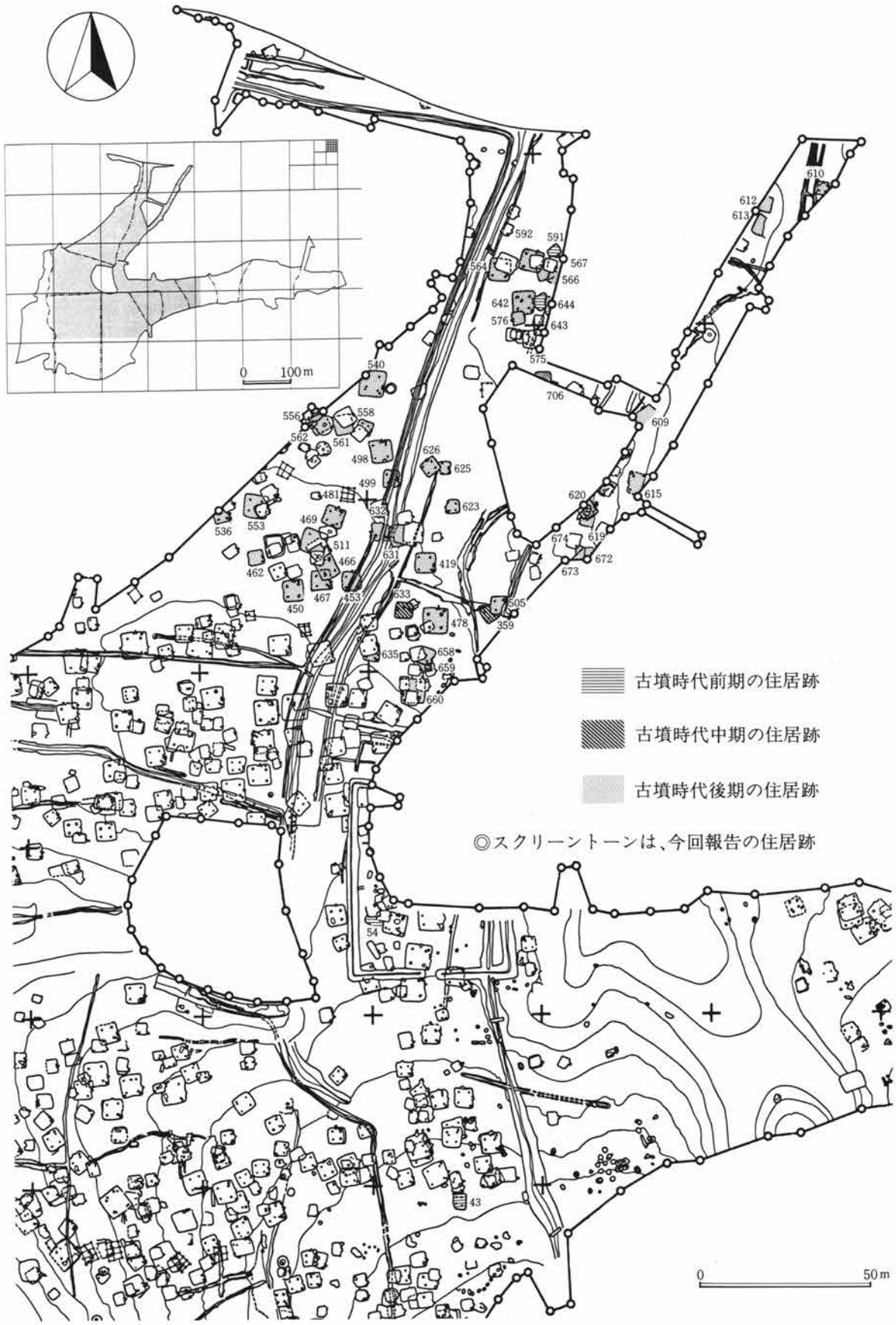
古墳時代中期に属するものと思われる住居跡は、いずれも南関東編年の和泉期に該当するもので、本遺跡全体で359号住居跡と633号住居跡の２軒が確認された。２軒とも煮沸・炊飯施設は、破壊等により明瞭ではない。遺物は、359号住居跡では土師器高坏を中心に、633号住居跡では土師器甕を中心に出土している。

古墳時代後期に属すると思われる住居跡は、南関東編年の鬼高期に該当する48軒を対象としているが、掘り込みも深く、比較的残存状況は良好であった。形状は、前期及び中期の住居跡が、歪んだ方形または長方形を呈するのに対し、後期の住居跡は、比較的整った方形または長方形を呈し、主柱穴も良好に確認される例が多い。規模は概ね一辺が４～７m前後であるが、７mを越える大型の住居跡も認められている。また、450号住居跡では建て替えが、498号・505号・620号・632号・660号住居跡では造り替えの竈の痕跡が認められることから、後期の住居跡は１軒あたりの存続年数は比較的長いようである。遺物は、土器類・石器類が中心で鉄器は極めて少ない。土器では、土師器甕類・坏類が多量に出土しているが、本遺跡も鏑川流域の他の遺跡同様、須恵器の出土は極めて少ない。今回報告する中で見るべきものは、553号住居跡から出土した須恵器高坏のみである。特殊な遺物としては、498号住居跡から土師器の匙が２個体出土している。また、少量ではあるが、縄文時代の土器片、中・近世の陶磁器が混入している。

なお、住居跡の記述については、住居跡の位置、周囲の住居跡の状況、切り合い関係、規模、竈(炉)、貯蔵穴、柱穴、遺物の出土状況等を基本事項とし、重複が著しい住居跡に関しては随時重複関係図で説明を加えた。また、遺物については遺物実測図の後に観察表を付し、出土位置等を示している。

第18表　古墳時代住居跡一覧表

住居No.	平面形	規模(cm)	面積(m²)	壁高(cm)	主軸方向	竈	貯蔵穴	柱穴	周溝	備　　考
43	長方形	372×465	14.09以上	24	N－ 3°－E	—	—	○	—	
54	—	—	6.84以上	—	N－ 23°－E	—	—	—	—	
591	長方形	384×312	9.77以上	25	N－ 34°－W	炉	—	—	—	
643	長方形	453×432	13.34以上	31	N－ 25°－W	—	○?	○	—	
359	—	? ×474	15.53以上	23	N－ 59°－E	—	○	○	—	
633	長方形	513×480	21.15以上	18	N－ 9°－E	炉	○	—	—	
419	正方形	591×600	30.22	36	N－ 97°－E	東竈	○	○	—	
450	正方形	606×618	31.86	44	N－ 2°－W	北竈	○	○	—	建て替えありカ
453	正方形	558×564	26.12	40	N－ 1°－W	北竈	○	○	—	
462	長方形	480×450	17.68	44	N－ 82°－E	東竈	○	—	—	
466	—	615×642	34.94	55	N－ 20°－W	北竈?	○	○	○	
467	—	606×591	22.86以上	47	N－ 93°－E	東竈	○	○	—	
469	長方形	726×696	46.49	35	—	—	—	○	—	
478	長方形	711×756	51.08	49	N－ 0°－E	北竈	○	○	○	
481	長方形	612×570	30.47	50	N－ 28°－E	北竈	○	○	○	
498	正方形	651×660	38.77	55	N－ 7°－W	北竈	○	○	—	竈造り替えありカ
499	長方形	483×516	21.11	36	N－ 94°－E	東竈	○	○	—	
505	長方形	? ×504	19.55以上	35	N－ 0°－E	北竈2	○	○	—	竈造り替えありカ
511	長方形	408×363	11.88以上	25	N－ 68°－E	東竈?	—	—	—	
536	—	507× ?	14.90以上	41	N－ 76°－E	東竈	○	○	—	
540	正方形	759×780	49.41以上	62	N－102°－E	東竈	○	○	—	
553	正方形	690×669	31.12以上	55	N－100°－E	東竈?	—	○	—	
556	—	? × ?	1.40以上	22	—	—	○?	—	—	
558	長方形	465×420	10.26以上	31	N－116°－E	東竈	○	○	—	
561	正方形	570×573	14.49以上	57	N－ 82°－E	東竈	○	○	—	
562	長方形	534×519	6.35以上	40	N－ 64°－E	—	—	—	—	
564	正方形	651×660	22.64以上	18	N－104°－E	東竈?	○?	○	—	
566	—	? × ?	6.03以上	20	N－ 19°－E	—	—	—	—	
567	—	? ×477	11.07以上	17	N－ 72°－E	—	—	○	—	
575	—	483× ?	9.00以上	41	N－ 90°－E	東竈	—	—	—	
576	正方形	375×378	11.84	49	N－ 92°－W	西竈	○	—	—	
592	長方形	672×630	24.80以上	24	N－ 15°－E	北竈	○	○	—	
609	—	? × ?	19.35以上	27	N－ 34°－W	—	—	○	—	
610	長方形	336×387	10.31以上	34	N－ 19°－E	北竈	○	○	—	
612	—	? ×459	9.18以上	18	N－114°－E	—	—	—	—	
613	—	? ×594	17.10以上	15	N－ 32°－E	—	—	○?	—	
615	—	? ×648	23.54以上	24	N－ 79°－W	西竈	○	○	—	
619	—	? × ?	28.13以上	29	N－ 80°－W	西竈	○?	○	—	
620	—	486× ?	16.92以上	13	N－148°－E	南竈?	○	○	—	竈造り替えありカ
623	長方形	381×402	13.91	30	N－ 92°－W	西竈	○	○	—	
625	長方形	333×393	11.30	34	N－ 87°－E	東竈	—	○?	—	
626	長方形	492×465	19.98	40	N－ 33°－W	北竈	○	○	—	
631	—	? ×648	18.27以上	36	N－ 11°－W	—	—	○	—	
632	正方形	519×522	24.23	60	N－ 79°－W	西竈	○	○	—	竈造り替え2回ありカ
635	—	486× ?	8.48以上	35	N－ 97°－E	東竈	○	○	—	
642	正方形	651×657	37.64以上	36	N－ 88°－E	東竈	○	○	—	
644	—	? ×642	4.30以上	29	—	—	—	—	—	
658	正方形	462×489	13.93以上	48	N－107°－E	東竈	○	—	—	
659	—	489× ?	9.70以上	34	N－ 86°－E	東竈?	○	○	—	
660	正方形	720×729	37.67以上	34	N－ 89°－W	西竈	○	○	○	竈造り替えありカ
672	—	? × ?	5.13以上	38	N－ 3°－E	—	—	—	—	
673	—	? × ?	5.49以上	33	N－ 41°－E	—	—	—		
674	—	? × ?	2.93以上	33	N－ 3°－E	—	—	—		
706	—	? × ?	0.81以上	25	N－ 10°－E	—	—	—		



第43図　古墳時代の遺構分布図

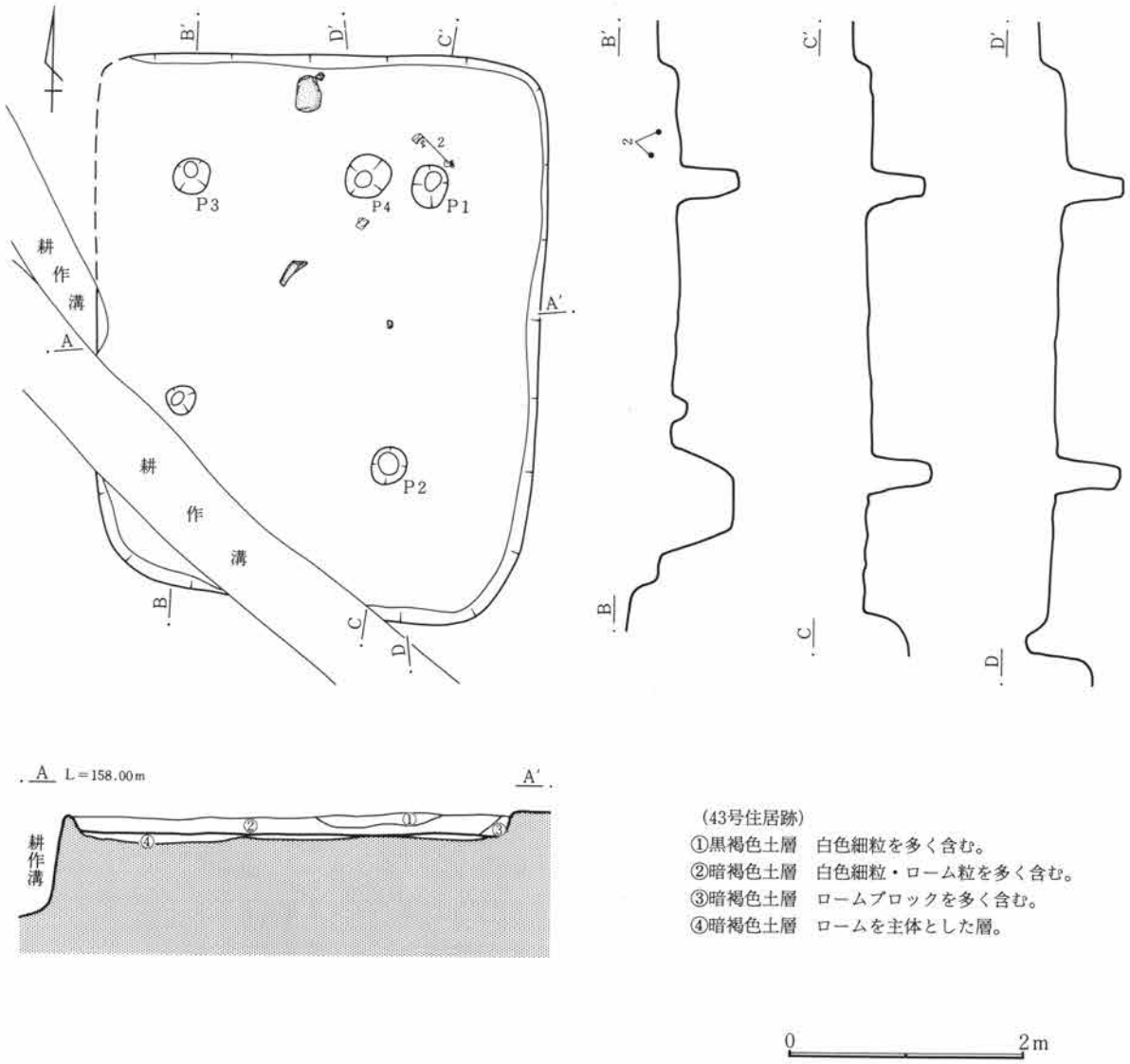
2．竪穴住居跡

43号住居跡（第44・45図、第19表、図版16・43）

本住居跡は、第４次調査区東側の緩斜面にあり、28・29―34・35グリッドに単独で位置する。北側には古墳時代後期の住居跡がまとまって所在するが、南側は各時代を通じて遺構の空閑地になっている。古墳時代前期の住居跡に限れば、最南端に位置する。

耕作溝による破壊が著しく、残存状況は不良であるが、平面形は東西３m72cm・南北４m65cmを測る歪んだ長方形を呈する。主軸方向はN―3°―Eを示すものと思われる。確認面からの壁高は最大で24cmを測る。床面中央部は、黄褐色ローム（地山）を直接叩き締めており、基本的には掘り方は認められないものと思われる。

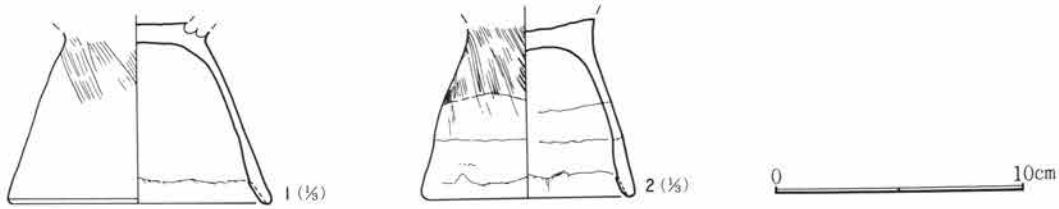
炉跡・貯蔵穴・周溝等の付属施設については確認されていないが、ピットが五箇所で確認された。このうちＰ１～Ｐ４が径30～36cm・深さ48～54cmと同様な形状・規模をもつ。Ｐ２とＰ３は主柱穴であった可能性が高いが、Ｐ１とＰ４に関してはどちらが主柱穴であるか不明である。他に耕作溝に破壊された主柱穴が１



第44図　43号住居跡実測図

箇所あったものと思われる。

遺物は極めて少なく、また個体の残存率も低い。図化できたのは台付甕の脚部２点のみである。（内木）



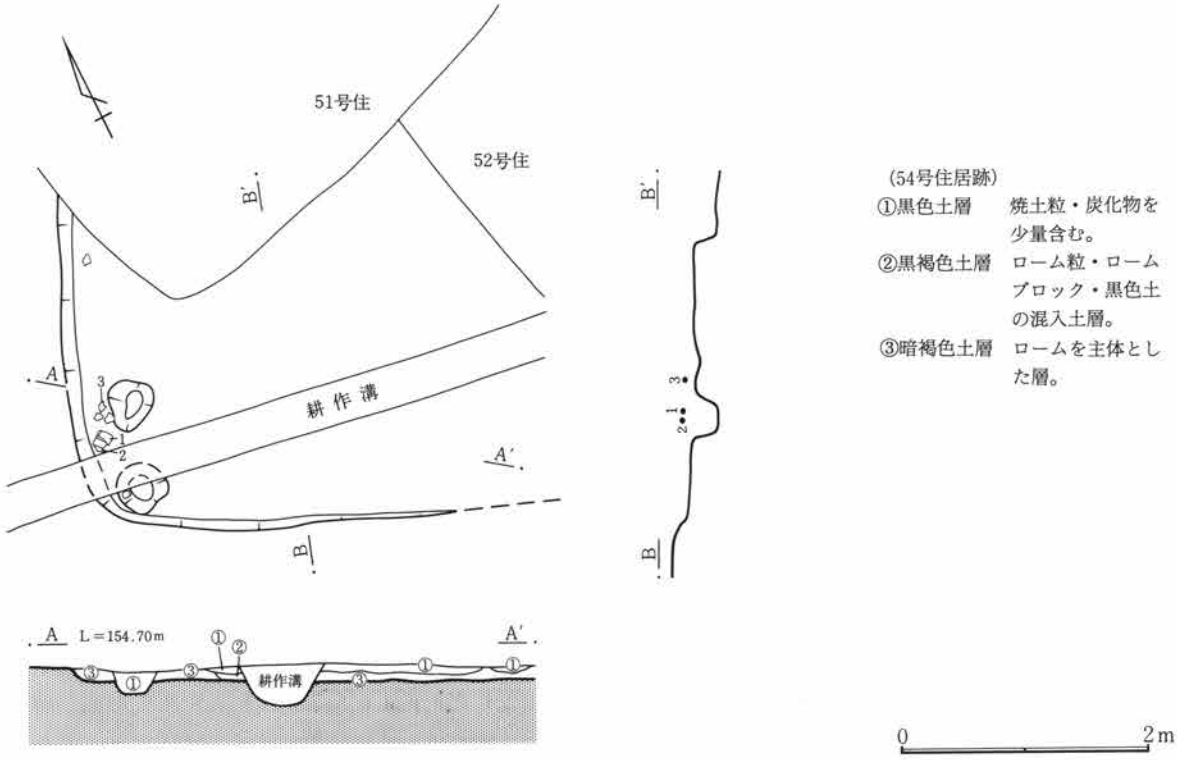
第45図　43号住居跡出土遺物実測図

第19表　43号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
45— 1 35	土師器 台付甕	覆土 台部¾残存	口　— 高　— 底　10.5	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③明黄褐色	外面　斜めハケ成形後、指ナデ。下端ヨコナデ 内面　ナデ後、下端折り返し指押え。	
45— 2 35	土師器 台付甕	床面＋７ 台部½残存	口　— 高　— 底　(8.2)	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　斜めハケ成形後、指ナデ。 内面　ナデ後、下端折り返し指押え。	

54号住居跡（第46・47図、第20表、図版16・35）

本住居跡は、第３次調査区北西部の平坦面にあり、46—30・31グリッドに位置する。重複関係としては、52号住居跡（平安）、続いて51号住居跡（平安）に北壁を、耕作溝によって南西隅を破壊されている。南側約



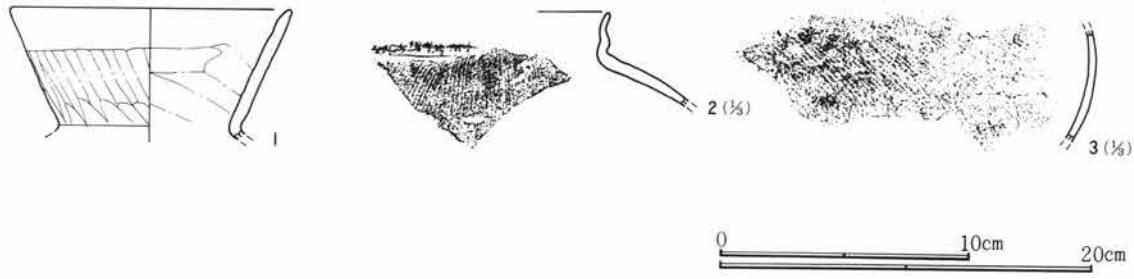
第46図　54号住居跡実測図

80mの地点に前出の43号住居跡が所在する。

残存状況は極めて不良で、床面が殆ど流出した状態で確認された。したがって平面形は不明である。僅かに残る西壁と南壁の立ち上がりから想定される主軸方向は、N—23°—Eを示すものと思われる。確認面からの掘り込みは最大で10cm程度であった。

ピットについては二箇所で確認されているが、その性格・機能等については不明である。炉跡・貯蔵穴・主柱穴・壁溝等の付属施設については、確認されていない。

遺物は南西隅のピット周辺から出土しているが、種類が乏しい上、個々の残存率も低い。図化できた3点はいずれもほぼ同じレベルから出土した。(中沢)



第47図　54号住居跡出土遺物実測図

第20表　54号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
47—1 35	土師器 壺	床面直上 口縁部破片	口　15.0 高　— 底　—	①普、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	外面　ヘラナデ後、ヨコナデ。 内面　ヘラナデ。	
47—2	土師器 甕	床面直上 口～頸部片	口　— 高　— 底　—	①普、細砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。 内面　ナデ。	外面に煤付着
47—3	土師器 甕	床面直上 破片	口　— 高　— 底　—	①普、細砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	外面　ハケメ。 内面　ナデ。	外面に煤付着

591号住居跡（第48図、第21表、図版16・35）

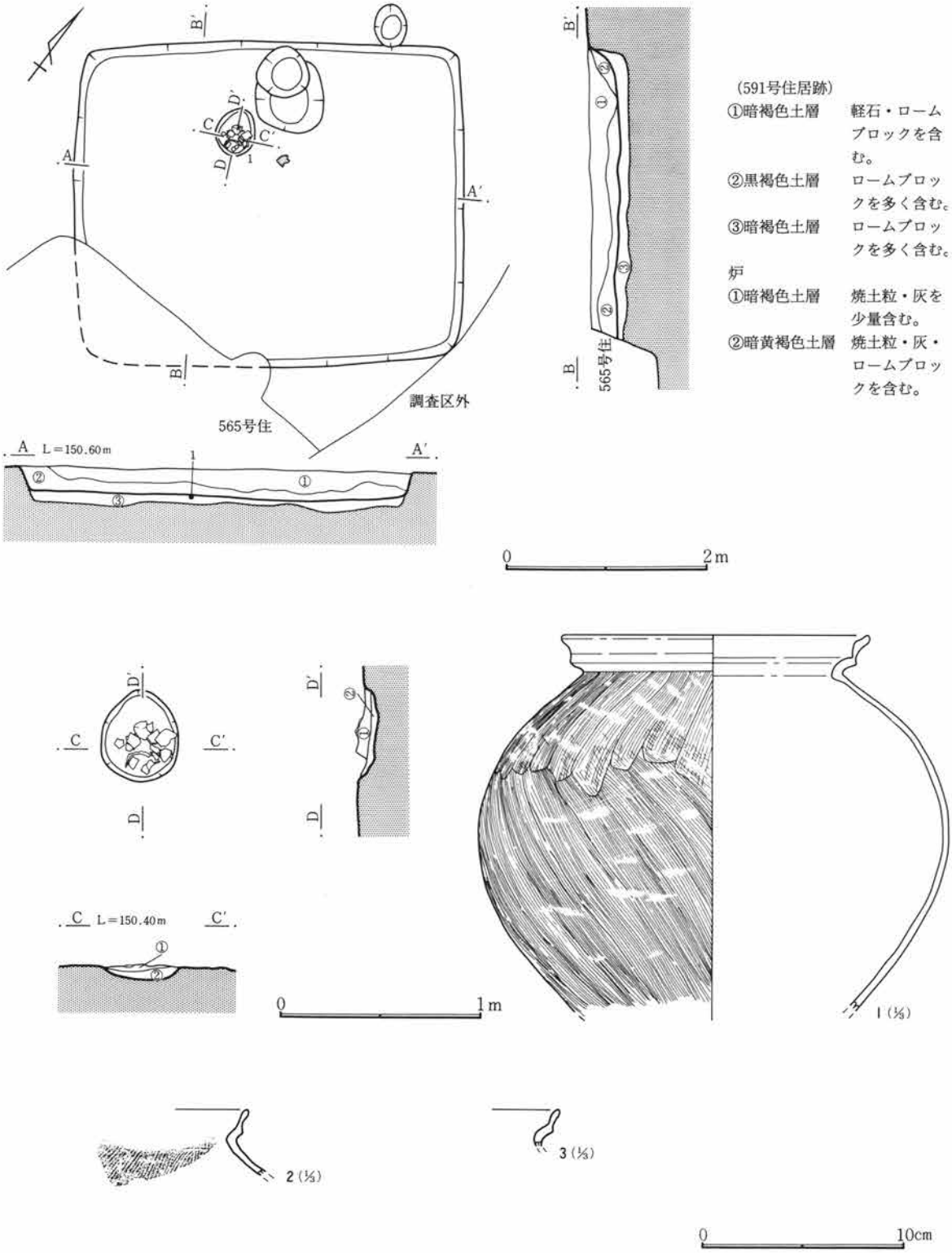
本住居跡は、第8次調査区北寄りの平坦面にあり、85—42グリッドに位置する。重複関係としては、565号住居跡(奈良)に南西隅を破壊される。調査区外近くに所在する為、詳細は不明であるが、南側は住居跡の分布が密であるが、北側は遺構の空閑地になっている。同時期の住居跡に限れば最北端に所在する。

規模は、東西3m84cm・南北3m12cmを測り、比較的整った長方形を呈する。主軸方向はN—34°—Wを示す。確認面からの壁高は最大で25cmを測る。床面には、炉跡周辺を中心に全体に貼床を施していたと思われるが、明瞭な硬化面ではなかった。

ピットは二時期に亘るものが検出されている。そのうち新しい方のピットは、径52×44cm・深さ30cmを測るが、その性格・機能等については不明である。貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設についても確認されていない。

炉跡は地床炉であり、住居中央部やや北寄りに認められた。規模は径45×37cmを測る。焼土粒とともに炭化物が厚さ12cm程存在していた。

遺物は極めて少なく、覆土から出土した甕の口縁部破片２点と、炉跡から出土した甕の合計３点のみであった。（関口功）



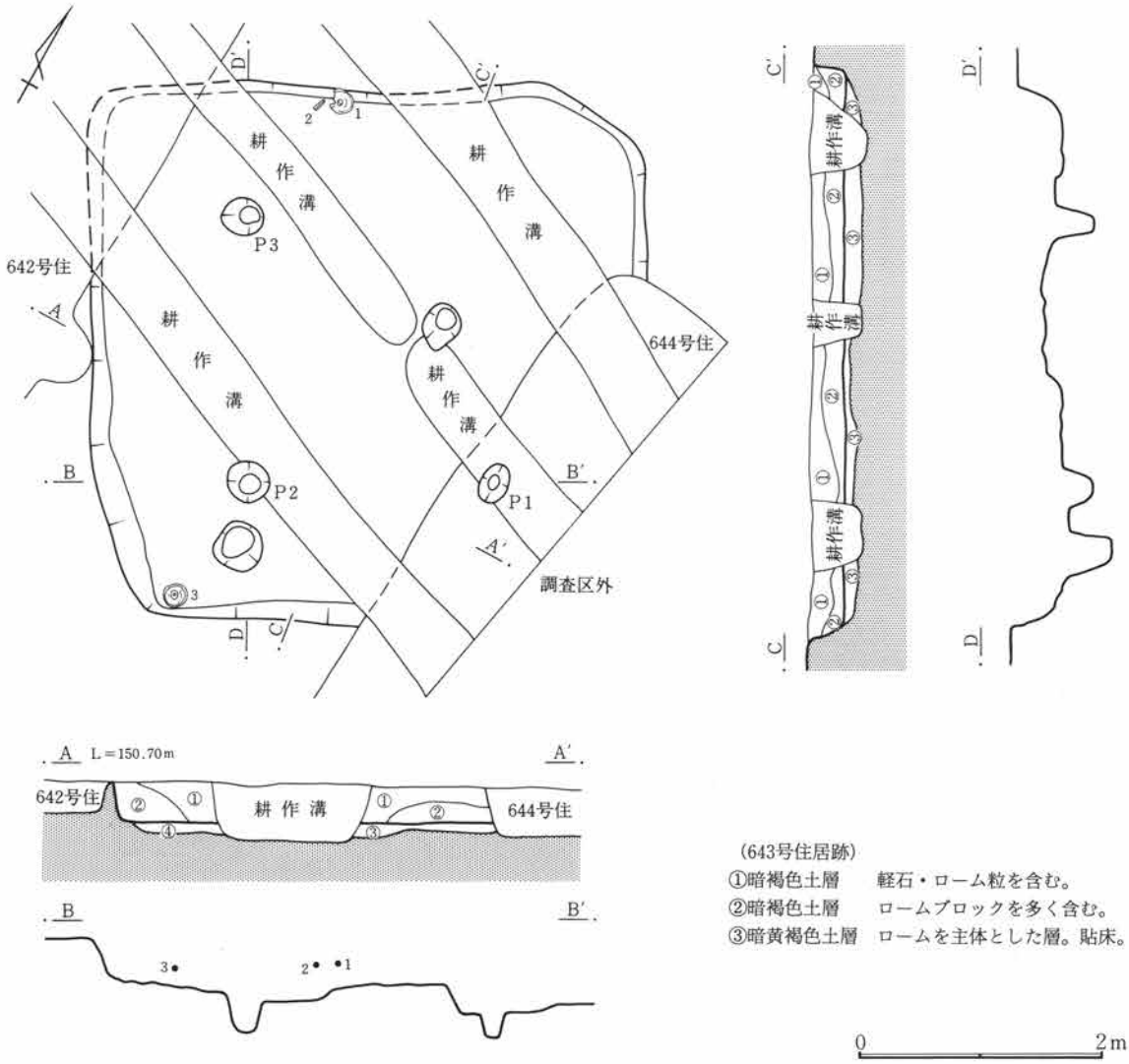
第48図　591号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第21表　591号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
48—1 35	土師器 甕	床面直上 ½残存	口 (15.0) 高 — 底 —	①普、細砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。頸〜胴部ハケメ。 内面　ナデ。	外面口縁〜胴上半に煤付着
48—2	土師器 甕	覆土 口縁部破片	口 — 高 — 底 —	①普、細砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。 内面　ナデ。	
48—3	土師器 甕	覆土 口縁部破片	口 — 高 — 底 —	①普、細砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。 内面　ナデ。	

643号住居跡（第49・50図、第22表、図版17・35）

本住居跡は、第8次調査区北寄りの平坦面にあり、82—41グリッドに位置する。前出の591号住居跡の南側約10mに所在する。重複関係としては、642号住居跡（古墳）と644号住居跡（古墳）に北西及び南東隅を破壊されるほか、三条の耕作溝が斜めに走る。したがって本住居跡本来の覆土は僅かなものであった。

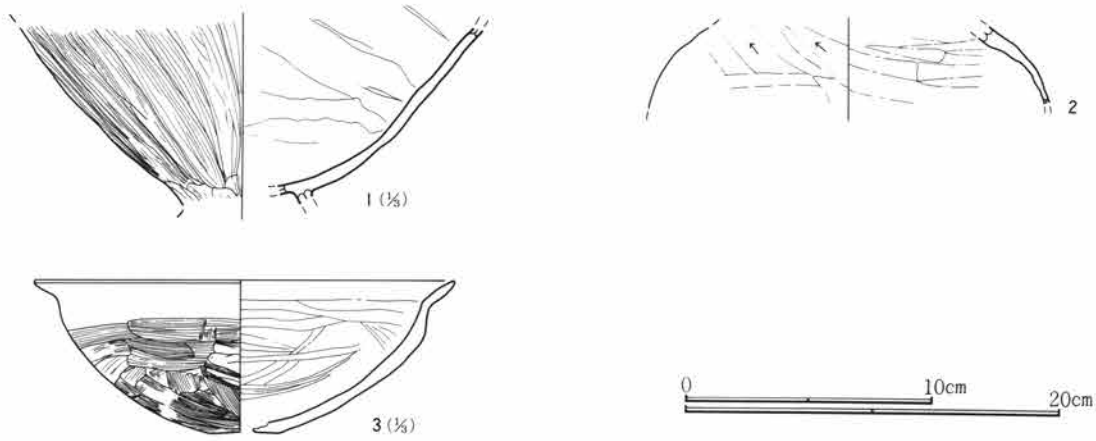


第49図　643号住居跡実測図

平面形は東西４m53cm・南北４m32cmを測る比較的整った長方形を呈し、主軸方向はN—25°—Wを示す。確認面からの壁高は最大で31cmを測る。床面には全面に貼床を施すが、特に住居中央部付近に明瞭な硬化面が認められた。

ピットは五箇所で確認された。主柱穴は、Ｐ１～Ｐ３が該当するものと思われる。規模は径30～33cm・深さ42～46cmを測る。残りの主柱穴は、耕作溝によって破壊された可能性が高い。貯蔵穴はＰ２近くの径41cm・深さ59cmを測るピットが該当するものと思われるが確証はない。焼土粒の散布はもとより、炉跡・壁溝等の付属施設については確認されていない。

遺物は極めて少なく、図化できたのは壁際から出土した３点のみである。いずれも床面から10cm前後高い位置で確認された。このうち土師器鉢は、底部が意図的に穿孔されており、甑として転用された可能性がある。（関口功）



第50図　643号住居跡出土遺物実測図

第22表　643号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
50— 1 35	土師器 台付甕	床面＋12 胴部破片	口　— 高　— 底　—	①普、細砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い褐色	外面　胴部下半ハケメ。 内面　ヘラナデ。	
50— 2	土師器 甕	床面＋12 胴部破片	口　— 高　— 底　—	①粗、石英粒多 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
50— 3 35	土師器 鉢	床面＋８ ほぼ完形	口　16.8 高　6.0 底　2.7	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ハケメ。 内面　ナデ後、ヘラミガキ。	焼成後、底部を穿孔

359号住居跡（第51・52図、第23表、図版17・35）

本住居跡は、第８次調査区中央部の緩斜面にあり、64—37・38グリッドに位置する。重複関係としては、505号住居跡（古墳）続いて46号・47号溝に住居跡の北東部分を中心に大きく破壊されている。東側に南北方向の48号・49号溝が走るが、周囲の住居跡の分布は希薄である。

残存状況は極めて不良で、南北方向は４m74cmを測るものの、東西方向の長さは不明である。不確定な要素が伴うが、主軸方向はN—59°—Eを示すものと思われる。確認面からの壁高は最大で23cmを測り、緩やかに

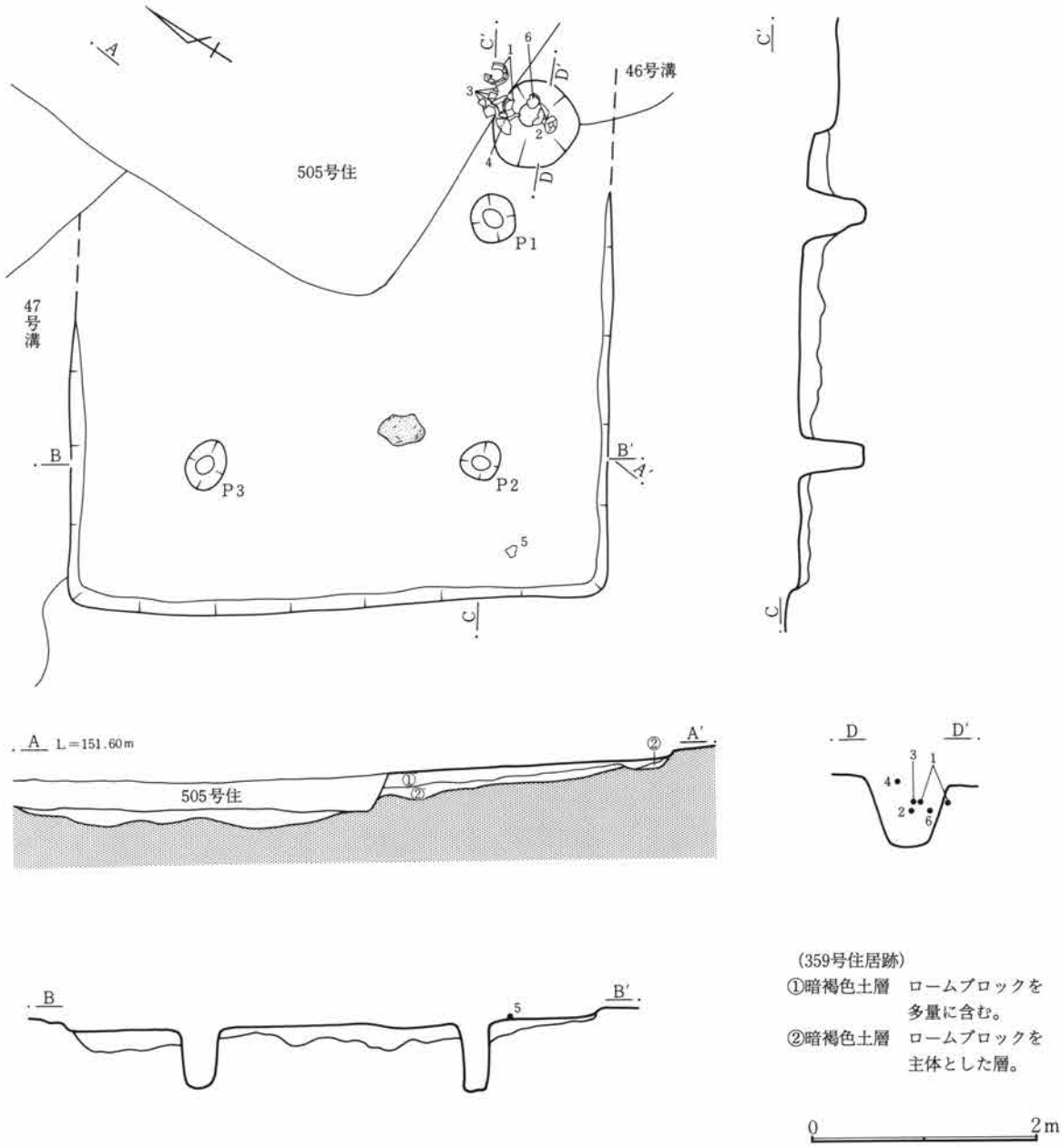
立ち上がる。床面は、住居中央部を中心に貼床を施す。

竈は確認されていないが、505号住居跡に破壊された北東方向の位置にあったものと思われる。

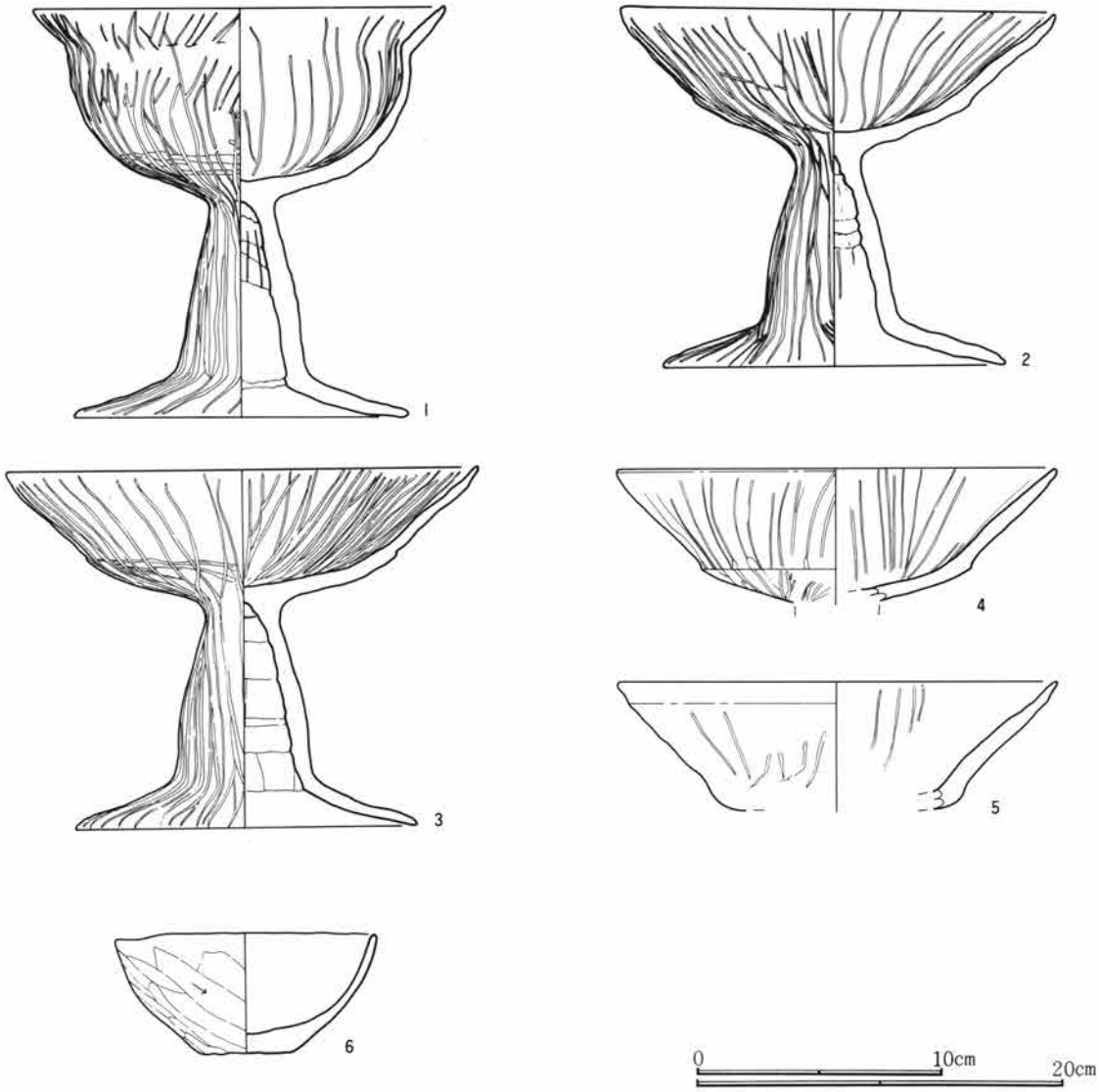
貯蔵穴は、径75×72cm・深さ63cmを測るピットが該当するものと思われる。

主柱穴は3箇所で確認された。規模は、P1が径42cm・深さ54cm、P2が径36cm・深さ58cm、P3が径45cm・深さ53cmを測る。残りの主柱穴は確認できなかった。

遺物は貯蔵穴を中心に分布するが、種類に乏しく、全体量も少ない。土師器高坏は大きく二種類に分けることができる。一つは坏部が内稜をもち、口縁部が外折する形態のものと、坏底部に稜をもつものとがある。他に床面中央やや南西の位置に作業台と思われる上部が平坦な石が埋設されていた。(富田)



第51図　359号住居跡実測図



第52図　359号住居跡出土遺物実測図

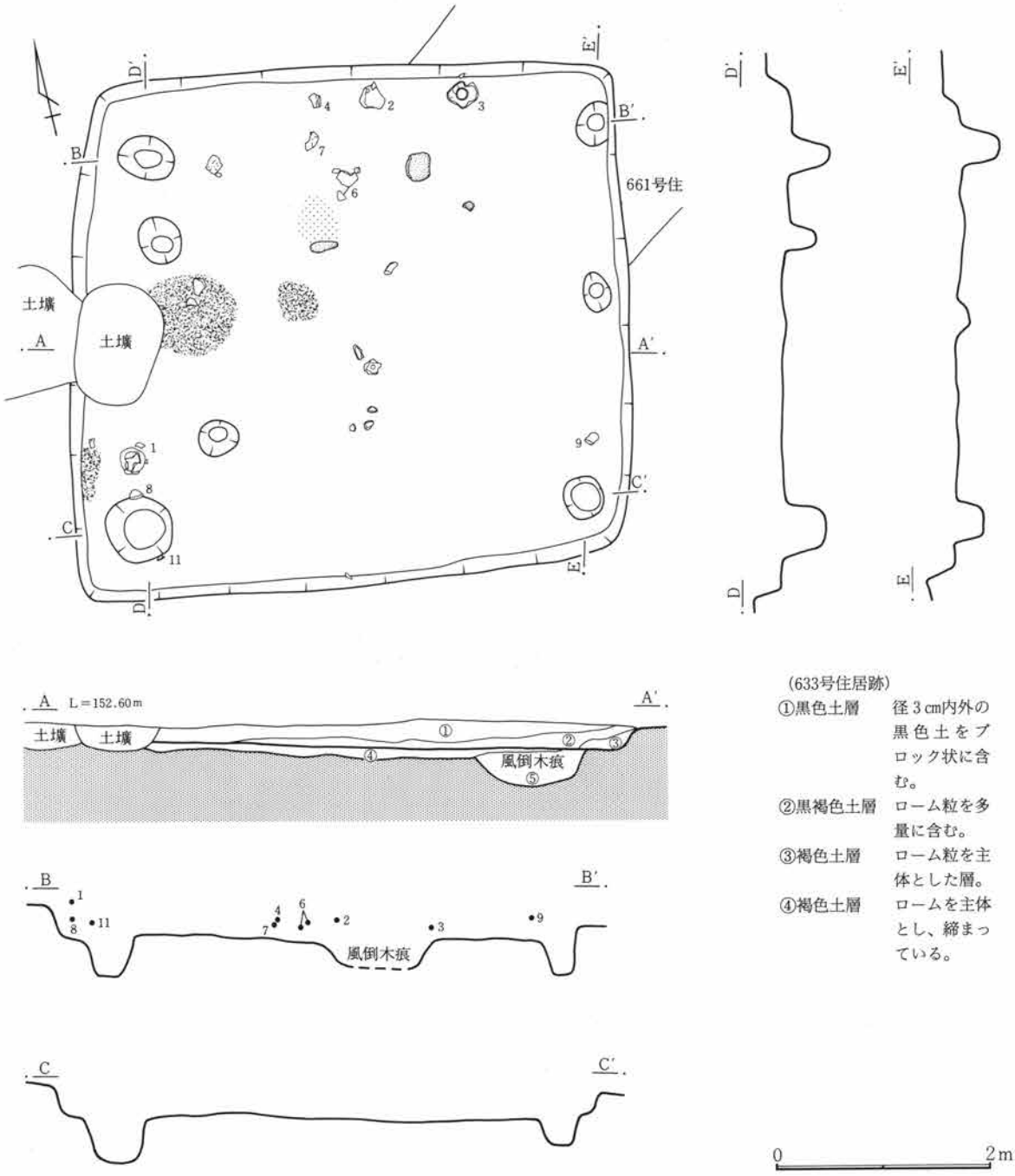
第23表　359号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
52－1 35	土師器 高　坏	貯蔵穴内 床面－34 ほぼ完形	口　17.0 高　16.4 底　13.8	①普、石英・細砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	口縁部ヨコナデ。坏部内外面と脚部外面ヘラミガキ。	
52－2 35	土師器 高　坏	貯蔵穴内 床面－41 ほぼ完形	口　18.0 高　14.3 底　14.0	①普、石英粒多 ②酸化焔、やや硬質 ③橙色	口縁部ヨコナデ。坏部内外面と脚部外面に放射状ヘラミガキ。	
52－3 35	土師器 高　坏	貯蔵穴内 床面－34 ½残存	口　(19.4) 高　14.5 底　(13.8)	①普、石英粒多 ②酸化焔、やや硬質 ③橙色	口縁部ヨコナデ。坏部内外面と脚部外面ヘラミガキ。	
52－4	土師器 高　坏	床面－16 坏部¼残存	口　18.0 高　－ 底　－	①普、石英粒多 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	口縁部ヨコナデ。内外面共に放射状ヘラミガキ。	
52－5	土師器 高　坏	床面＋6 坏部破片	口　(18.0) 高　－ 底　－	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。ヘラミガキ。 内面　ナデ後、ヘラミガキ。	
52－6 35	土師器 鉢	貯蔵穴内 床面－41 ¾残存	口　14.3 高　6.5 底　5.0	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	

633号住居跡（第53～55図、第24表、図版17・36・56）

本住居跡は、第８次調査区中央部の平坦面にあり、64―32・33グリッドに位置する。661号住居跡（平安）に北東隅を、土壙（平安）に西壁を中心に破壊される。南側には平安時代と古墳時代後期に属する住居跡が南北に連なるように重複・密集しているが、他の三方向については、分布密度が極めて低く、かなり広い空地状態を呈していたと思われる。

平面形は、東西５m13cm・南北４m80cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN―9°―Eを示す。床面には貼床を施していたと思われるが、風倒木痕上に構築された為、あまり明瞭ではなかった。



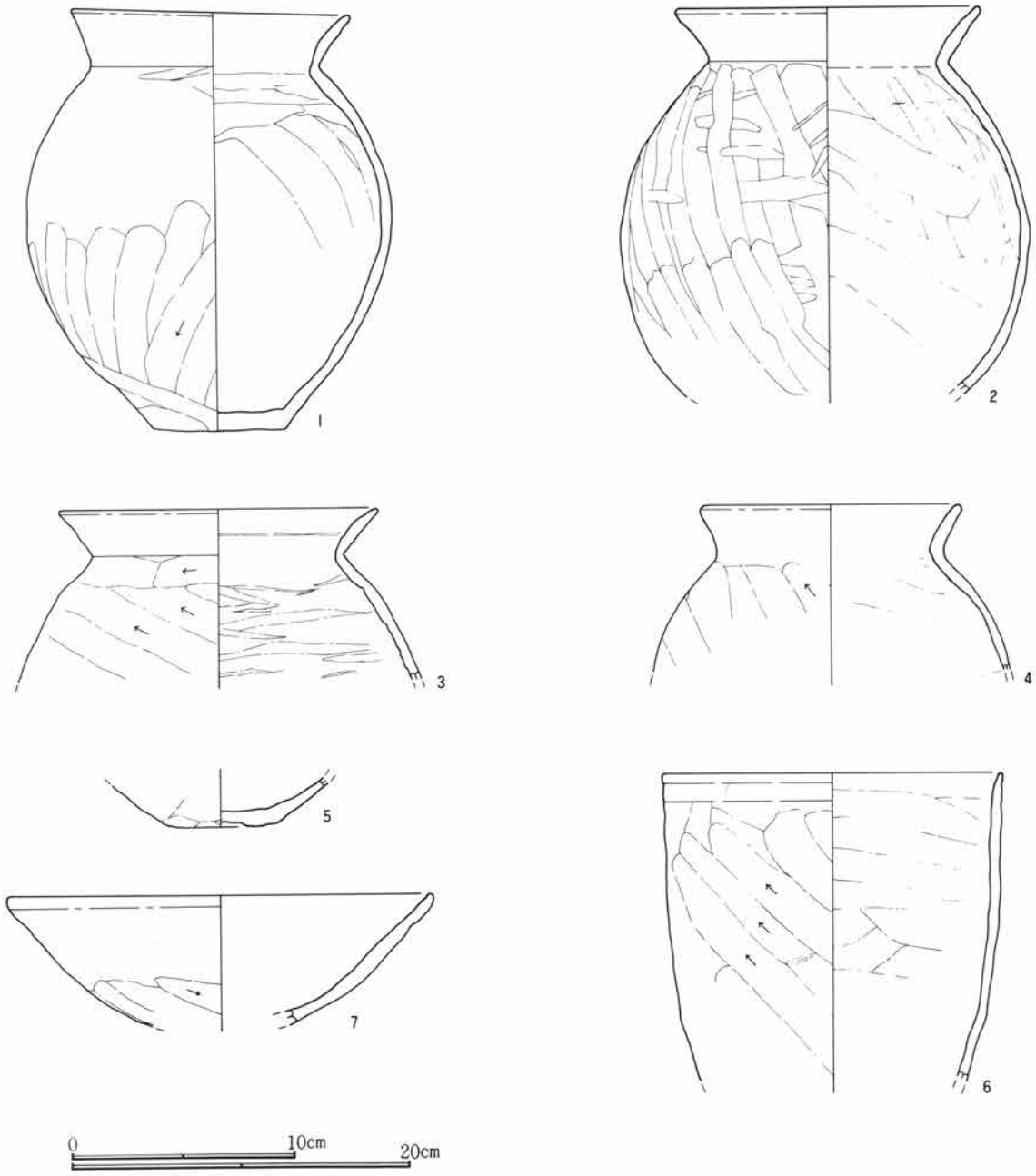
第53図　633号住居跡実測図

住居中央部やや北側の位置に径43×36cmの範囲が焼土化しており、これが炉跡と思われる。また粘土が三箇所に分布するが、あるいは竈の痕跡かもしれない。

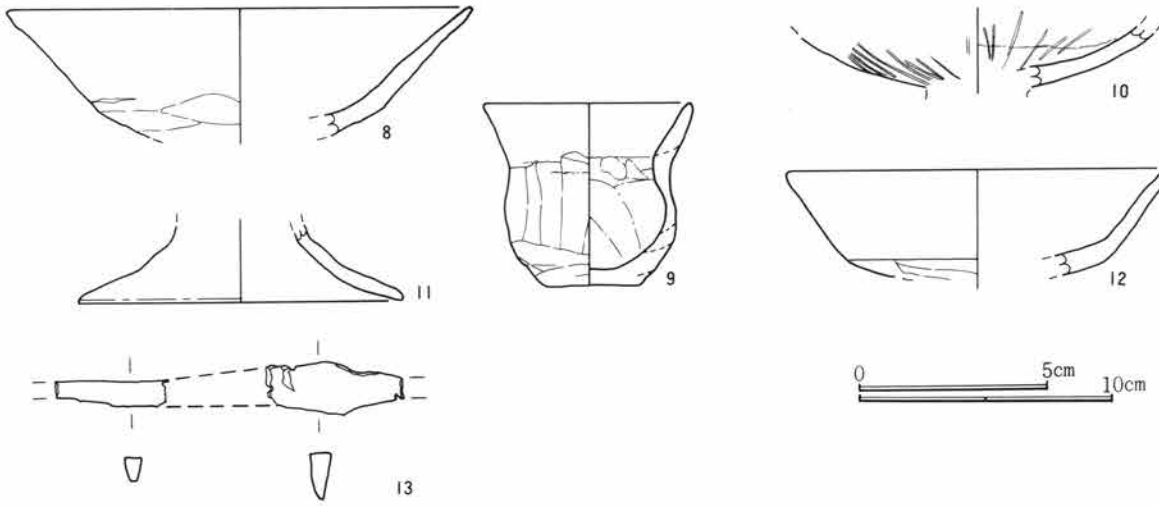
貯蔵穴は、南西隅の径60cm・深さ48cmを測るピットが該当するものと思われる。

主柱穴は確認されていない。東壁沿いにピット列が認められるが、これらは、住居の上屋構造、あるいは周壁保護にかかわる可能性があるかもしれない。壁溝等の付属施設も確認されていない。

遺物は時期の異なるものも含まれる。鉄器については661号住居跡に属するものであろう。(中沢)



第54図　633号住居跡出土遺物実測図(1)



第55図　633号住居跡出土遺物実測図(2)

第24表　633号住居跡出土遺物観察表

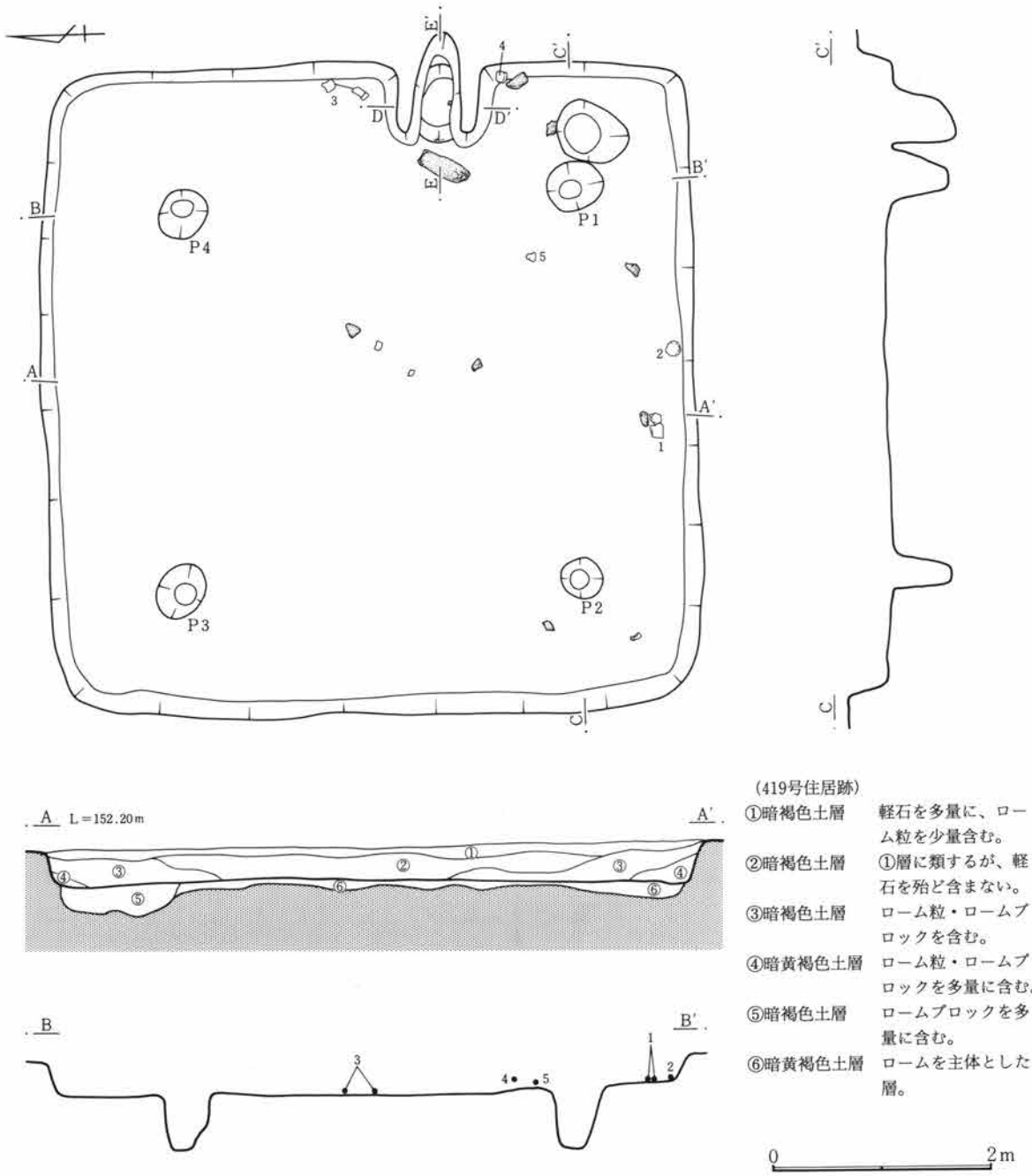
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備考
54—1 36	土師器 甕	床面+23 ほぼ完形	口 16.3 高 24.4 底 7.8	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部下半ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
54—2 36	土師器 甕	床面+5 ⅓残存	口 (17.6) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
54—3 36	土師器 甕	床面−3 口〜胴部片	口 (18.6) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
54—4	土師器 甕	床面+5 口〜胴部片	口 (14.8) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
54—5	土師器 甕	覆土 底部破片	口 — 高 — 底 (5.0)	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
54—6 36	土師器 甕？	床面直上 口〜胴部片	口 (19.9) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
54—7 36	土師器 高坏？	床面直上 ¼残存	口 (18.8) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
55—8	土師器 高坏？	床面+7 ¼残存	口 (18.6) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
55—9 36	土師器 小型壺	床面+5 完形	口 8.3 高 6.2 底 3.8	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。 内面　ナデ。	
55—10	土師器 高坏	覆土 坏部破片	口 — 高 — 底 —	①普、石英粒多 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い赤褐色	外面　ヘラケズリ後、ヘラミガキ。 内面　ナデ後、ヘラミガキ。	
55—11	土師器 高坏	床面+4 脚部破片	口 — 高 — 底 (12.8)	①普、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	内外共ヨコナデ。	
55—12	土師器 坏	覆土 破片	口 (15.3) 高 — 底 —	①普、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	摩滅が著しい
55—13 56	鉄製品 刀子	覆土 破片	長 (9.2)　幅 1.4 厚 0.6　重 5.9			

419号住居跡（第56・57図、第25表、図版18・36）

本住居跡は、第８次調査区中央部の平坦面にあり、66・67—34グリッドに単独で位置する。南側約10mの位置に前出の633号住居跡が47号溝を挟んで所在する。

平面形は東西５m91cm・南北６m00cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN—97°—Eを示す。 確認面からの壁高は、最大で36cmを測る。床面には、ロームブロックを主とした厚さ5cm程度の貼床を施す。掘り方は住居中央部を浅く、縁辺部を深く掘り込んでいた。特に北壁付近の掘り込みは顕著であった。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅45cm・奥行102cm・深さ33cmを測る。焚口部から燃焼部にかけてややく

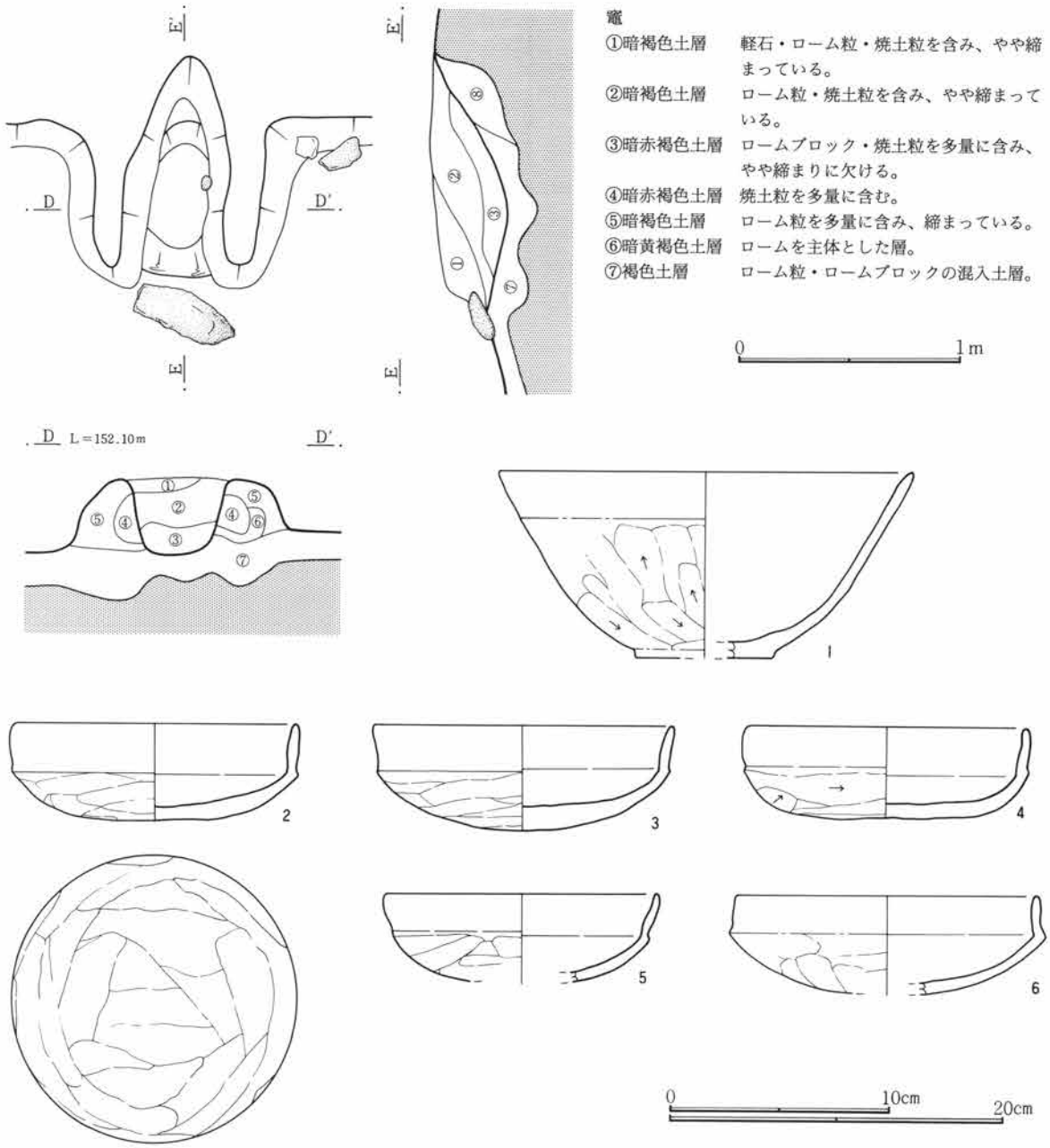


第56図　419号住居跡実測図(1)

ぼみ、煙道部は緩やかに立ち上がる。竈内に遺物は認められないが、燃焼部右よりの位置に支脚と思われる長さ30cm程度の絹雲母石墨片石（1.0kg）と、竈前に天井石と思われる石材が落ちた状態で確認された。　貯蔵穴は、径63×51cm・深さ60cmを測り楕円形を呈する。

ピットは四箇所で確認された。住居外形の対角線上にあり、いずれも主柱穴と思われる。それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が51×57、Ｐ２が36×54、Ｐ３が42×51、Ｐ４が45×57を測る。なお、壁溝等の付属施設については確認されなかった。

遺物は少なく、散漫に分布する。南壁付近の床面上から大型の土師器鉢と土師器坏が出土している程度である。（中沢）



第57図　419号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第25表　419号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
57－1 36	土師器 鉢	床面＋6 ¼残存	口 (24.6) 高 (11.0) 底 (8.1)	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
57－2 36	土師器 坏	床面＋10 ほぼ完形	口 12.6 高 4.3 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
57－3 36	土師器 坏	床面直上 ⅔残存	口 13.4 高 4.6 底 丸底	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
57－4 36	土師器 坏	床面＋10 ½残存	口 (12.4) 高 4.1 底 丸底	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
57－5 36	土師器 坏	床面＋7 ¼残存	口 (12.0) 高 — 底 —	①普、黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
57－6	土師器 坏	覆土 破片	口 (13.4) 高 — 底 —	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

450号住居跡（第58～60図、第26表、図版18・36・37）

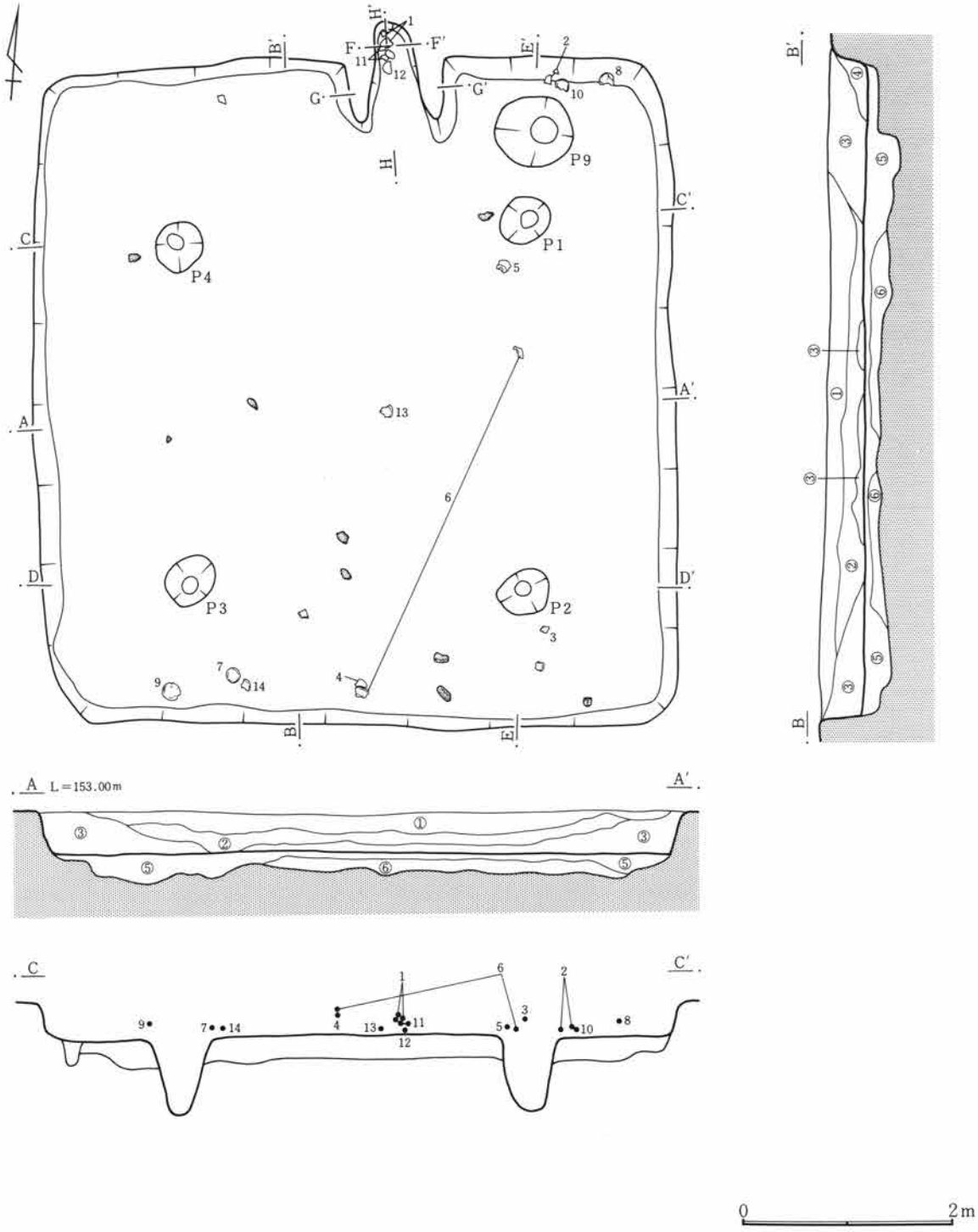
本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、65・66—26グリッドに単独で位置する。すぐ北側には451号住居跡(平安)が竈の煙道部に接する形で所在するほか、古墳時代後期の住居跡が重複密集しているが、南側は各時代を通じて遺構の空閑地になっている。

平面形は東西６m06cm・南北は６m18cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN—2°—Wを示す。残存する壁高は南壁周辺で最大44cmを測る。床面には、ロームブロックを主とした貼床が施されており、堅く叩き締められていた。特に住居中央部から竈周辺は堅緻であった。掘り方調査によって、現存する住居跡より小規模な住居跡の壁の立ち上がりが確認されたことから、建て替えが行われたものと思われる。ピットは合計10基が検出されているが、このうちＰ１～４・Ｐ９は住居廃絶時に、現存する住居跡で使用されていたものであろう。主柱穴はＰ１～８が該当するものと思われる。規模（径×深さcm）は、Ｐ１が51×66、Ｐ２が42×60、Ｐ３が51×75、Ｐ４が48×72を測る。Ｐ５～10は床下から検出されたため、詳細は不明である。Ｐ９が建て替え後の、Ｐ10が建て替え前の貯蔵穴であろう。また、壁溝等の付属施設は確認されていないが、西壁やや北寄りの位置に幅24cm・長さ210cm・深さ20cmを測る溝状の掘り込みが認められた。断面形はU字状を呈し、覆土はロームブロックを主体とした暗褐色土であった。

竈は北壁中央やや東寄りにあり、幅48cm・奥行114cm・深さ39cmを測る。火床面は焚口よりややくぼんでおり、堅く焼き締まっている。焼土粒の散布や貯蔵穴の位置等から建て替え前の竈も、建て替え後の竈と同様、北壁中央付近にあったものと思われる。

貯蔵穴は、竈右脇にあり、径72×63cm・深さ54cmを測る楕円形を呈する。建て替え前の貯蔵穴はＰ１に切られてあまり明瞭ではないが、本来は方形を呈していたと思われる。

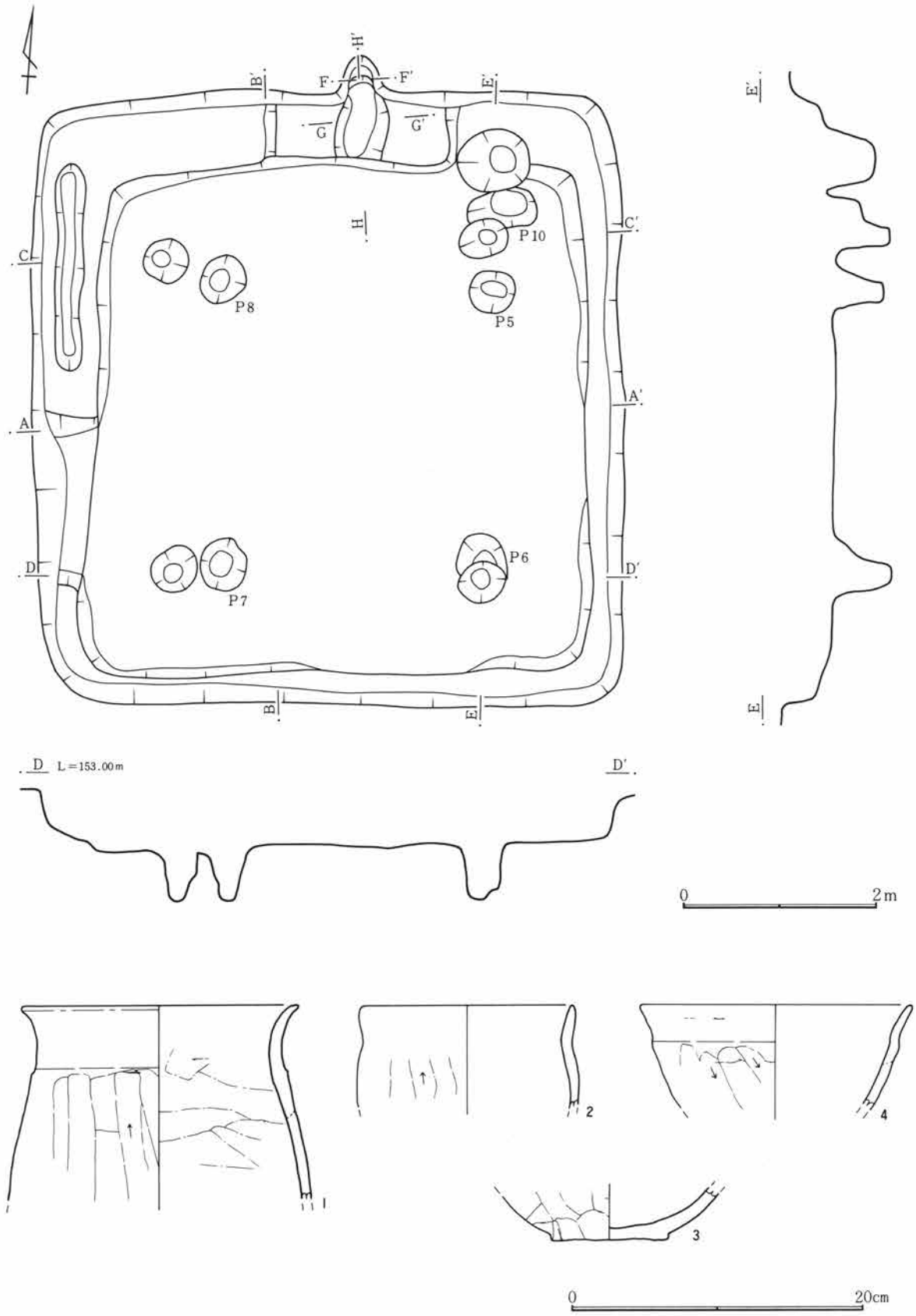
遺物は、竈内・貯蔵穴周辺と南壁付近に分布する。竈内から出土した土師器甕・坏は破損後二次的な加熱を受けていることから竈用材であったと思われる。その他の遺物は、床面よりやや高い位置で出土したものが大部分である。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩２個、輝緑岩・緑簾緑泥片岩各１個（計1.5kg）が検出されている。（春山）



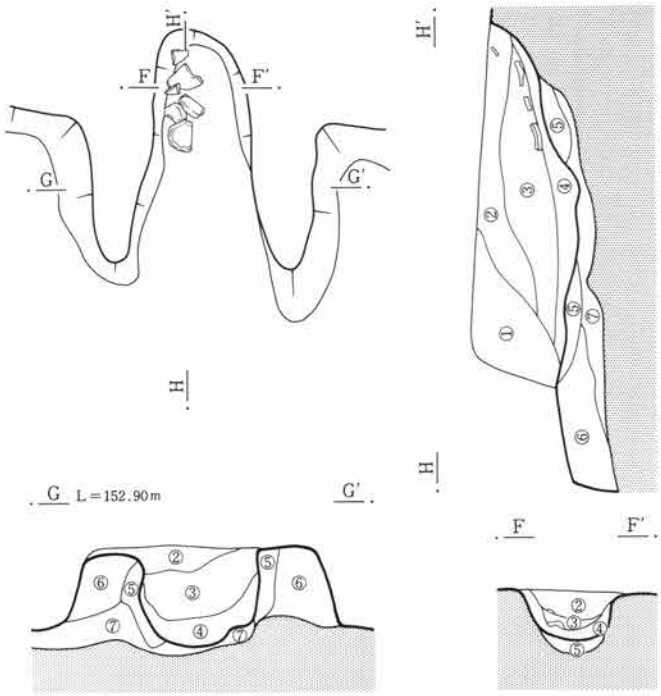
（450号住居跡）

①暗褐色土層　軽石・ローム粒を含む。
②黒褐色土層　①層に比し、軽石・ローム粒を多く含む。
③暗褐色土層　②層に比し、軽石・ローム粒を多く含む。
④暗褐色土層　ロームブロックを多量に含む。
⑤暗黄褐色土層　ロームブロックを主体とした層。
⑥暗褐色土層　ロームブロックを多量に、焼土粒を少量含む。

第58図　450号住居跡実測図(1)



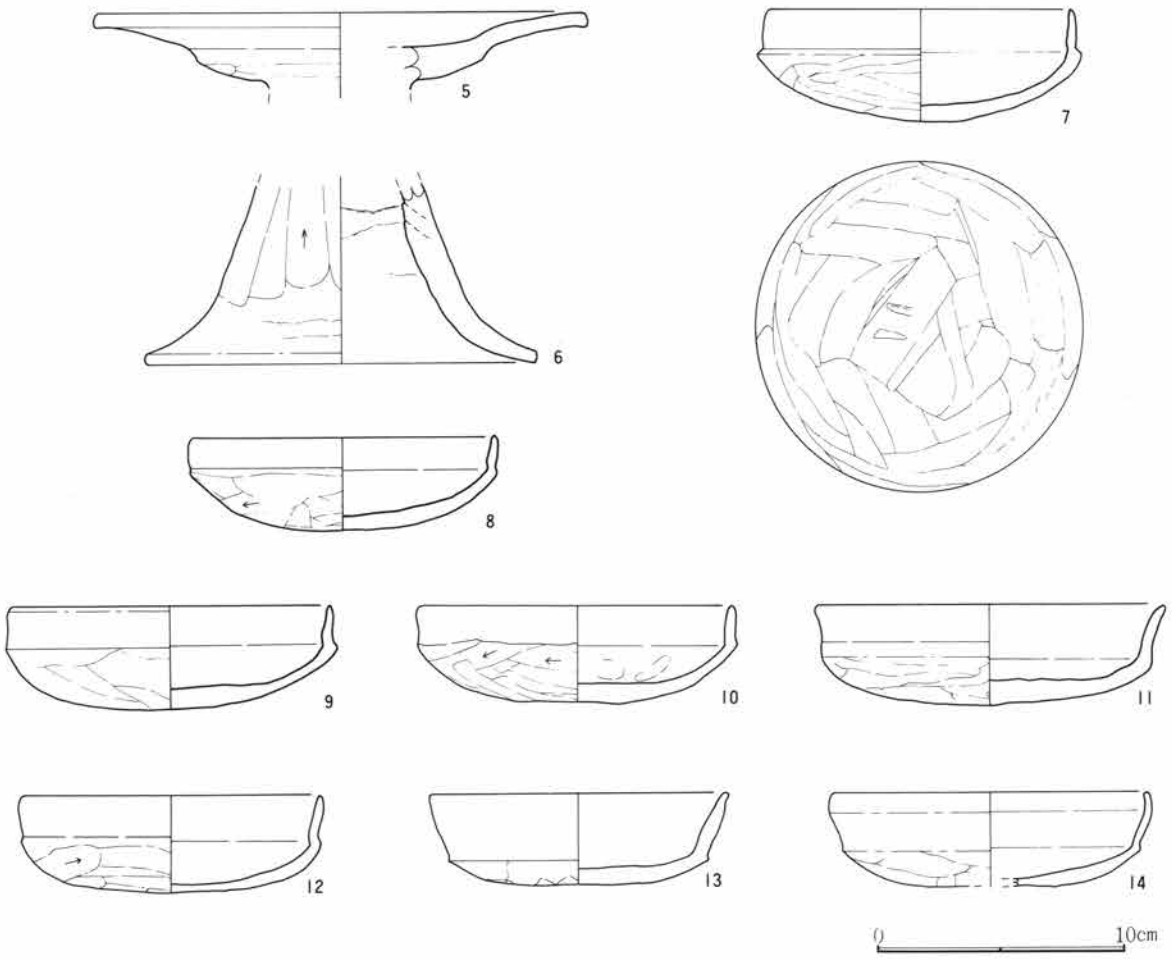
第59図　450号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



竈

①暗褐色土層	軽石・ローム粒を多量に含む。
②黒褐色土層	焼土粒・炭化物・ローム粒を多量に含む。
③暗赤褐色土層	焼土粒・ローム粒を多量に、炭化物を少量含む。
④赤褐色土層	焼土粒を主体とした層。
⑤暗褐色土層	焼土粒・ローム粒を多量に含む。
⑥暗褐色土層	焼土粒・ロームブロックを少量含む。
⑦暗黄褐色土層	ロームブロックを多量に、焼土粒を少量含む。

0　1m



第60図　450号住居跡実測図(3)及び出土遺物実測図(2)

第26表　450号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
59－1 36	土師器 甕	床面＋16 破片	口 (19.6) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	二次火熱を受ける
59－2	土師器 小型甕	床面＋6 破片	口 (14.6) 高 — 底 —	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	摩滅が著しい
59－3	土師器 甕	床面＋17 破片	口 — 高 — 底 (8.0)	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　胴部下半ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
59－4	土師器 鉢	床面＋21 破片	口 (18.6) 高 — 底 —	①普、雲母粒 ②酸化焔、硬質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	外面に煤付着
60－5 36	土師器 高坏	床面＋9 坏部破片	口 (19.4) 高 — 底 —	①普、雲母粒 ②酸化焔、硬質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
60－6 36	土師器 高坏	床面＋25 脚部破片	口 — 高 — 底 (15.6)	①粗、石英・砂粒 ②酸化焔、硬質 ③鈍い橙色	外面　縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
60－7 37	土師器 坏	床面＋10 ほぼ完形	口 12.0 高 4.5 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、やや硬質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 ヘラ圧痕。 内面　ナデ。	
60－8 37	土師器 坏	床面＋14 ほぼ完形	口 12.2 高 3.7 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
60－9 37	土師器 坏	床面＋13 ¾残存	口 12.9 高 4.1 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
60－10 37	土師器 坏	床面＋5 ¾残存	口 12.4 高 3.9 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。 内面　ナデ。	
60－11 37	土師器 坏	竈内＋12 ¾残存	口 13.9 高 4.0 底 丸底	①普、石英・砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	二次火熱を受ける
60－12 37	土師器 坏	竈内＋7 ½残存	口 (12.0) 高 3.8 底 丸底	①普、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、やや硬質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	二次火熱を受ける
60－13	土師器 坏	床面＋8 ¼残存	口 (12.6) 高 3.6 底 丸底	①細、雲母粒少 ②酸化焔、硬質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
60－14	土師器 坏	床面＋10 ¼残存	口 (12.8) 高 — 底 —	①普、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、やや硬質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

453号住居跡（第61・62図、第27表、図版18・19・37）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、66—29・30グリッドに位置する。南西から北東方向に抜ける29号・30号溝に床面を、耕作溝に竈を破壊される。

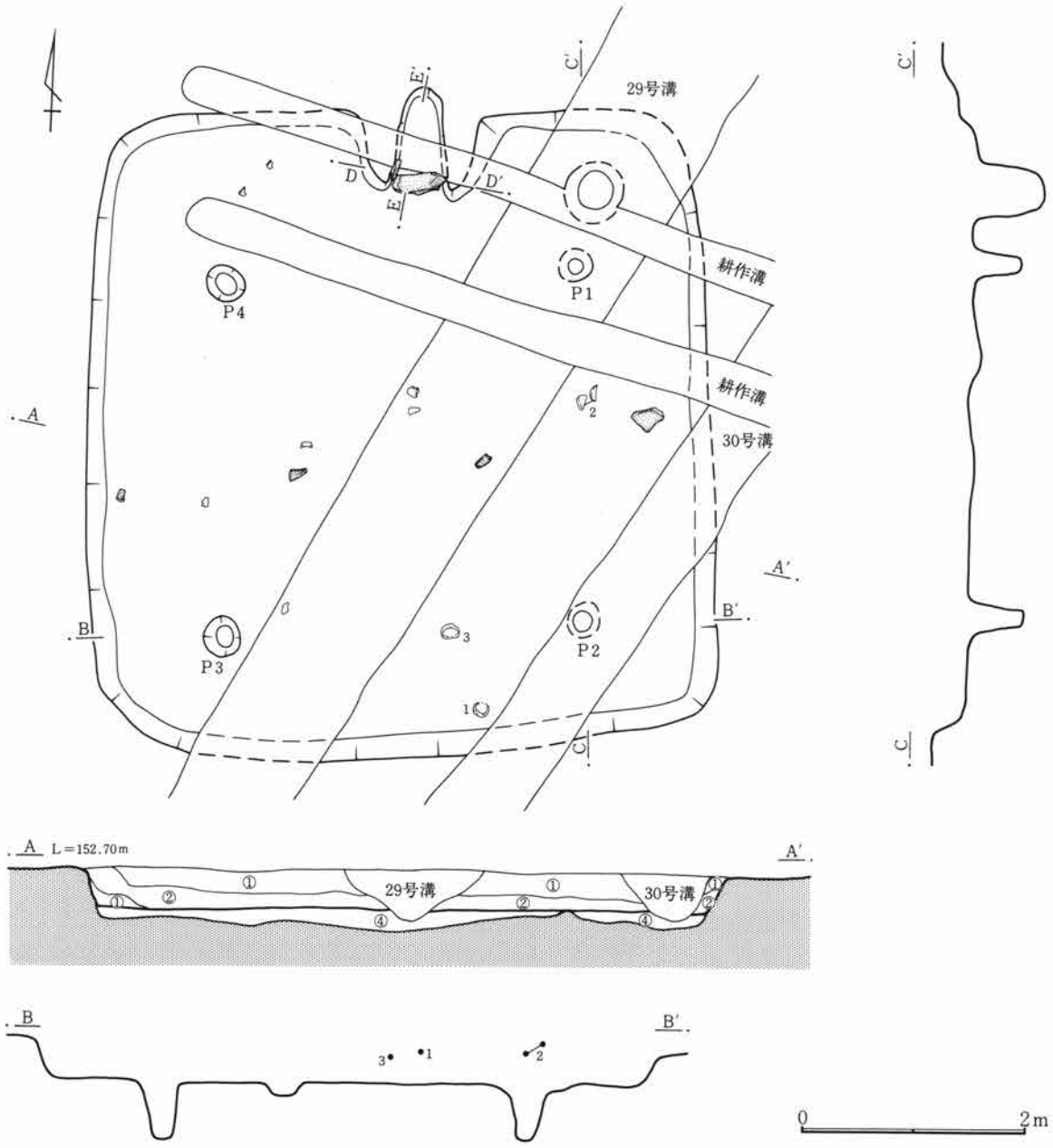
平面形は東西５m58cm・南北５m64cmを測る正方形を呈するものと思われ、主軸方向はN—1°—Wを示す。確認面からの壁高は最大で40cmを測るが、残存状況は不良である。床面には、ロームブロックを主とした貼床が施されていた。主柱穴は四箇所で確認されており、それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が30×42、Ｐ２が30×48、Ｐ３が36×54、Ｐ４が36×38を測る。壁溝等の付属施設は確認されていない。

上記の理由により不確定な要素が伴うが、竈は北壁ほぼ中央にあり、幅39cm・奥行93cm・深さ36cmを測る。左袖石と落下した状態の天井石が確認された。燃焼部は比較的平坦であり、煙道部は緩やかに立ち上がって

いたものと思われる。

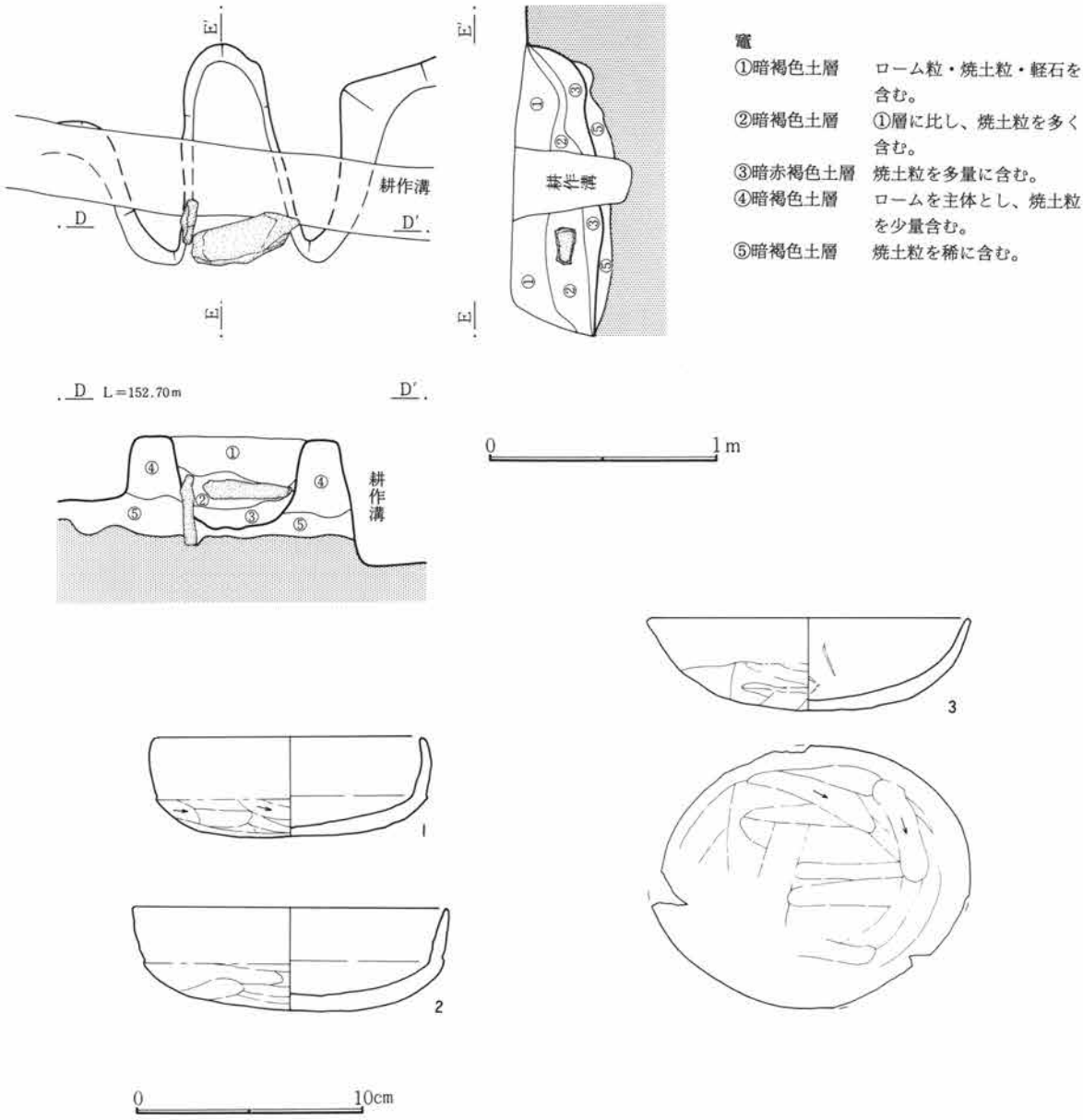
貯蔵穴は竈右脇にあり、径51cm・深さ63cmを測る。

遺物の全体量は少なく、種類に乏しい。土師器甕類も僅かに出土しているが、いずれも接合しない小破片であった。そうした中で図化できたのは、土師器坏の3点のみである。垂直分布を見ると、いずれも床面より20数cm高い位置で出土している。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩1個（0.2kg）が検出されている。（春山）



（453号住居跡）
①暗褐色土層　ローム粒を多量に、軽石を少量含む。
②暗褐色土層　ロームブロックを多量に含む。
③褐色土層　ロームブロックを多量に含む。やや粘性あり。
④暗黄褐色土層　ロームブロックを多量に含み、締まっている。

第61図　453号住居跡実測図(1)



竈
①暗褐色土層　ローム粒・焼土粒・軽石を含む。
②暗褐色土層　①層に比し、焼土粒を多く含む。
③暗赤褐色土層　焼土粒を多量に含む。
④暗褐色土層　ロームを主体とし、焼土粒を少量含む。
⑤暗褐色土層　焼土粒を稀に含む。

第62図　453号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第27表　453号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
62—1 37	土師器 坏	床面+27 ほぼ完形	口 11.8 高 4.3 底 丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
62—2 37	土師器 坏	床面+26 ¾残存	口 13.6 高 4.5 底 丸底	①粗、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	吸炭により黒色を呈する
62—3 37	土師器 坏	床面+23 ほぼ完形	口 13.9 高 4.0 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ヨコナデ。ヘラ圧痕。	外面に煤付着

462号住居跡（第63～67図、第28表、図版19・20・37・38・39）

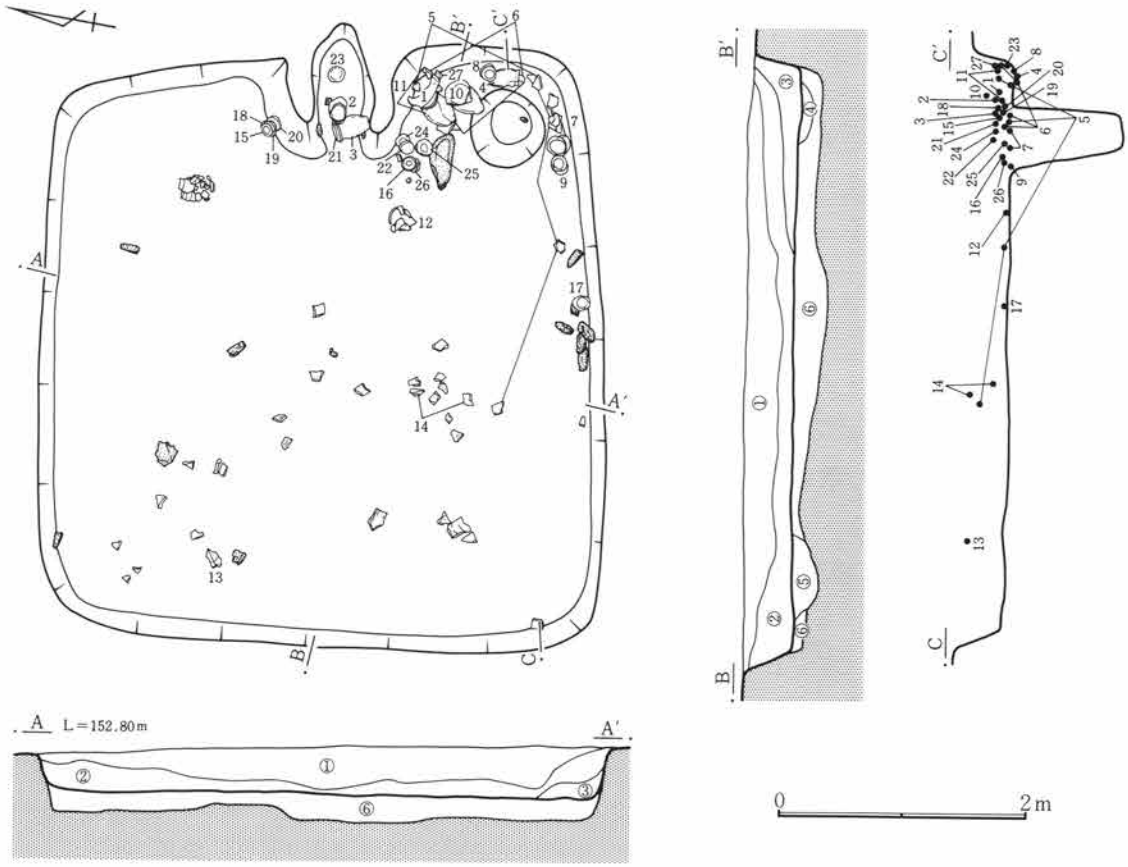
本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、67―24グリッドに単独で位置する。東側には、古墳時代後期と奈良時代を中心とする住居跡が重複・密集する。

平面形は東西４m80cm・南北４m50cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN―82°―Eを示す。確認面からの壁高は最大で44cmを測る。床面には、ロームブロックを主とした貼床が施されていた。床下には、住居中央部から南西隅にかけて、掘り込みが認められるが、柱穴・壁溝等の付属施設については、確認されていない。

竈は東壁ほぼ中央にあり、幅33cm・奥行106cm・深さ33cmを測る。燃焼部は皿状にややくぼみ、煙道部は緩やかに立ち上がる。支脚及び両袖石が遺存していた。天井石は竈右脇に落下している板状の石材が、該当するものと思われる。

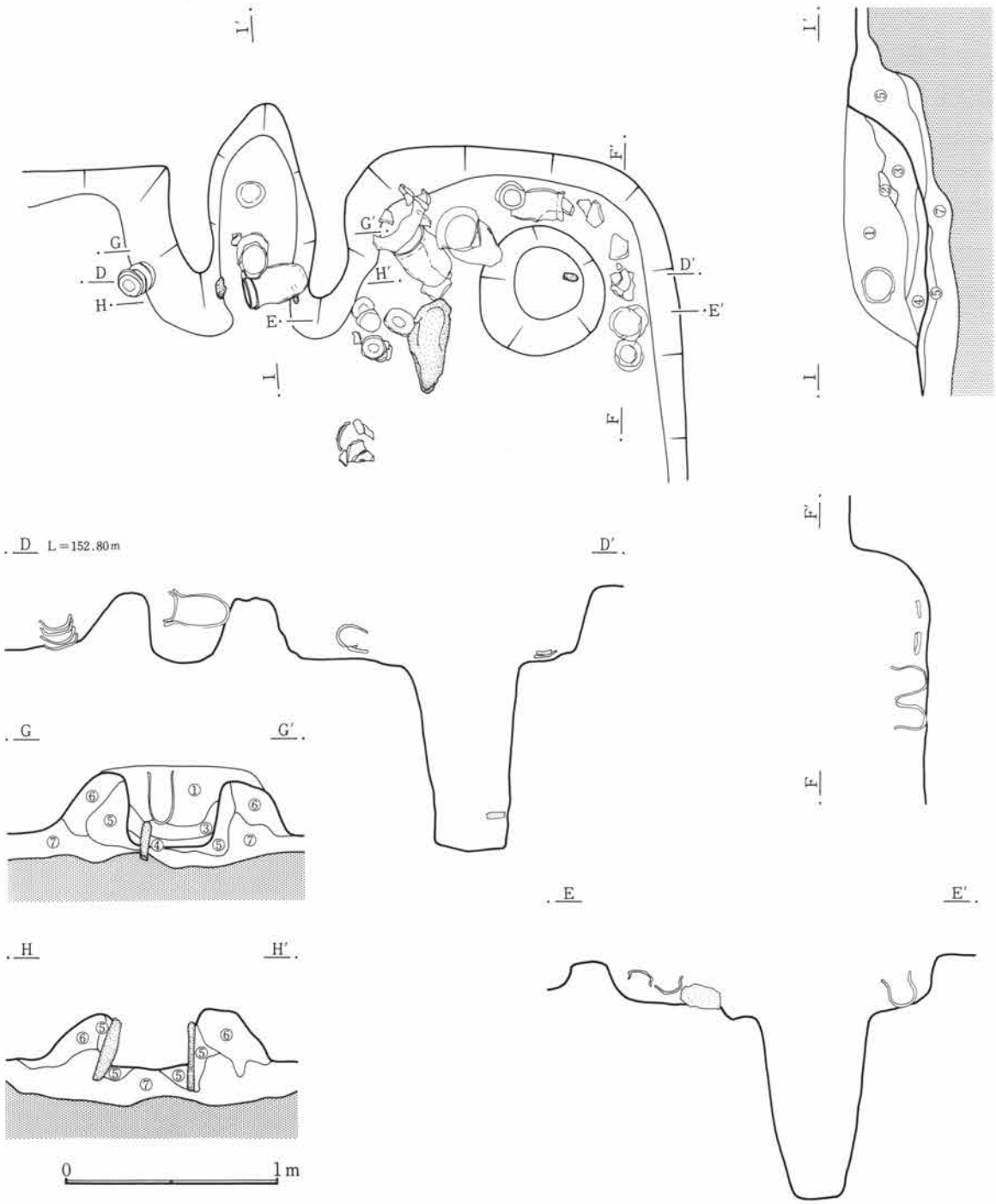
貯蔵穴は竈右脇にあり、径57cm・深さ90cmを測る円形を呈する。断面形状は逆台形状で、底面は平坦であった。覆土には、下層にローム主体、上層にローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が堆積し、住居廃絶後自然堆積したものと思われる。

遺物は竈と貯蔵穴付近に多く分布する。竈内からは、土師器甕・坏がそれぞれ２点出土している。竈左袖からは、正位の状態で上から15・18・19・20の順に土師器坏が重なって出土した。貯蔵穴周辺では、東壁から南壁際にかけて、土師器の小型甕８・７・９が正位で出土した。いずれも使用時の状況を示すものと言え



第63図　462号住居跡実測図(1)

よう。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩6個、緑簾緑泥片岩2個、点紋絹雲母石墨片岩1個（計6.1kg）が検出されている。（中沢）



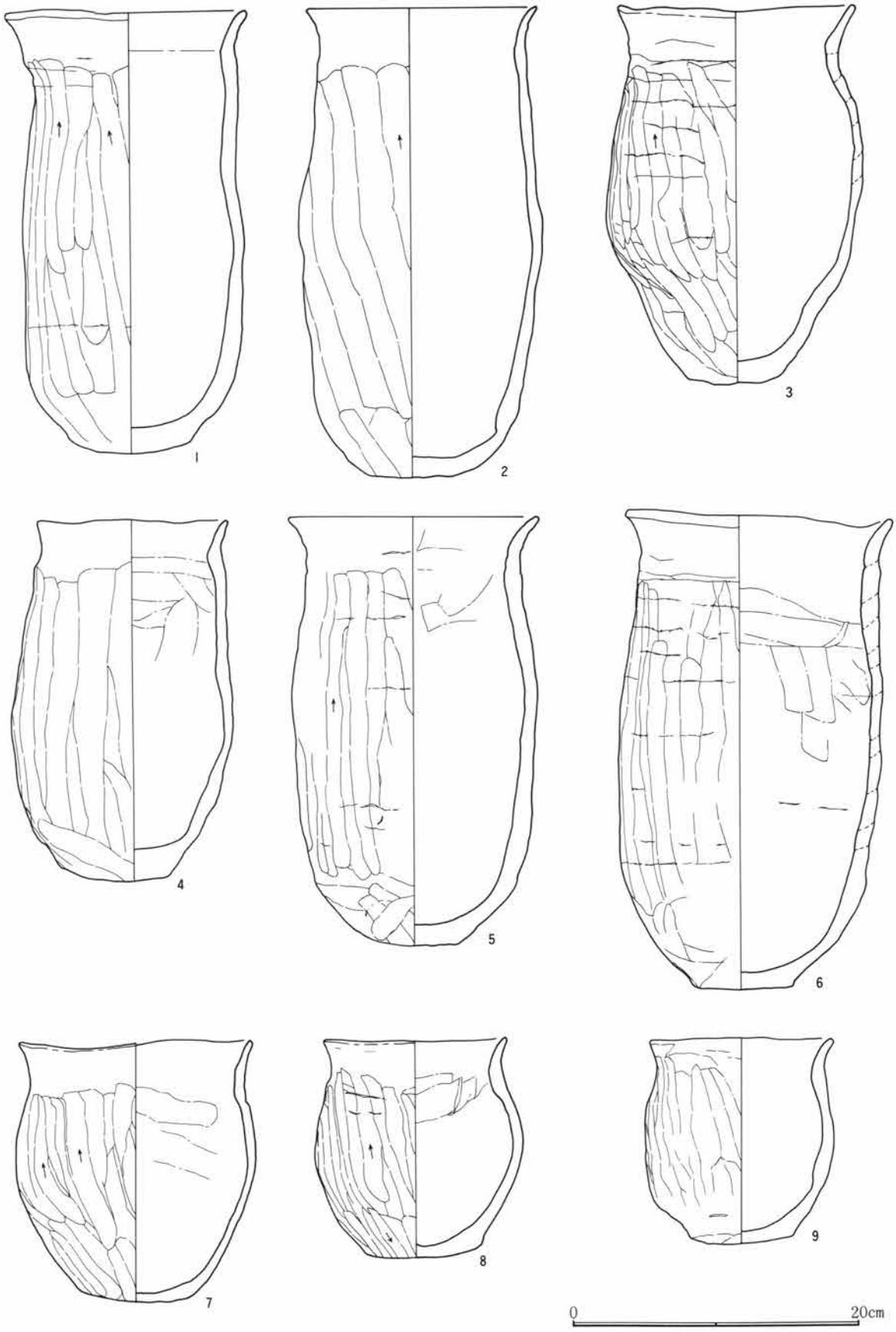
（462号住居跡）

①黒褐色土層　1㎜内外の白色軽石粒を多量に、ローム粒を少量含む。
②黒褐色土層　ローム粒・ローム小ブロックを多く含む。
③暗褐色土層　②層に比し、ローム粒・ローム小ブロックを多く含む。
④黒褐色土層　焼土粒を少量含む。
⑤暗黄褐色土層　ローム粒を多量に含み、締まりに欠ける。
⑥暗黄褐色土層　ロームを主体とした層。

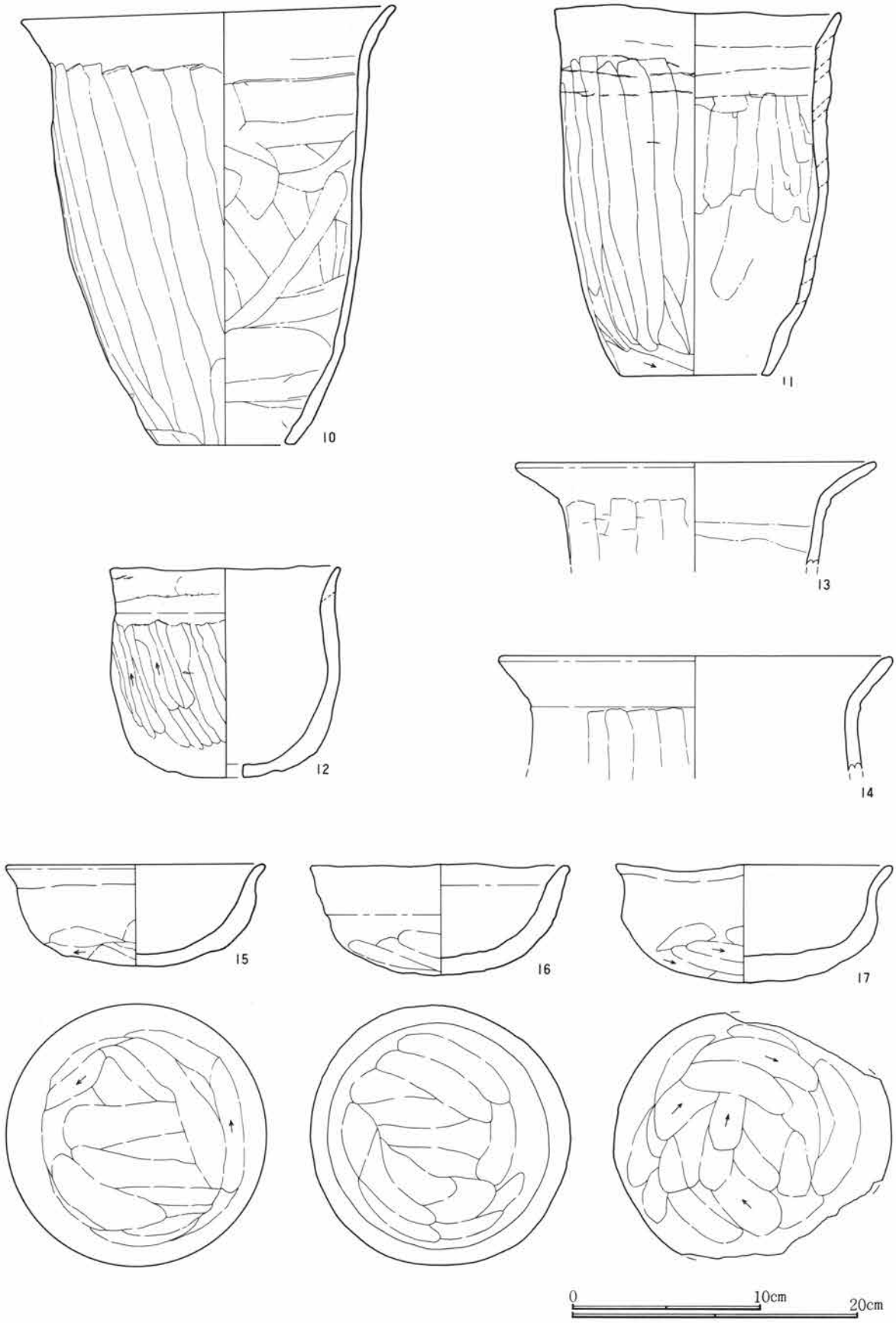
竈

①赤色土層　焼土粒・焼土ブロックを主体とした層。
②赤色土層　焼土ブロック。崩落土。
③赤色土層　焼土粒を主体とした層。
④暗褐色土層　焼土粒を少量含む。
⑤赤色土層　焼土粒を主体とし、ローム粒を少量含む。
⑥黒褐色土層　ローム粒・ローム小ブロックを主体とした層。
⑦褐色土層　ロームを主体とした層。

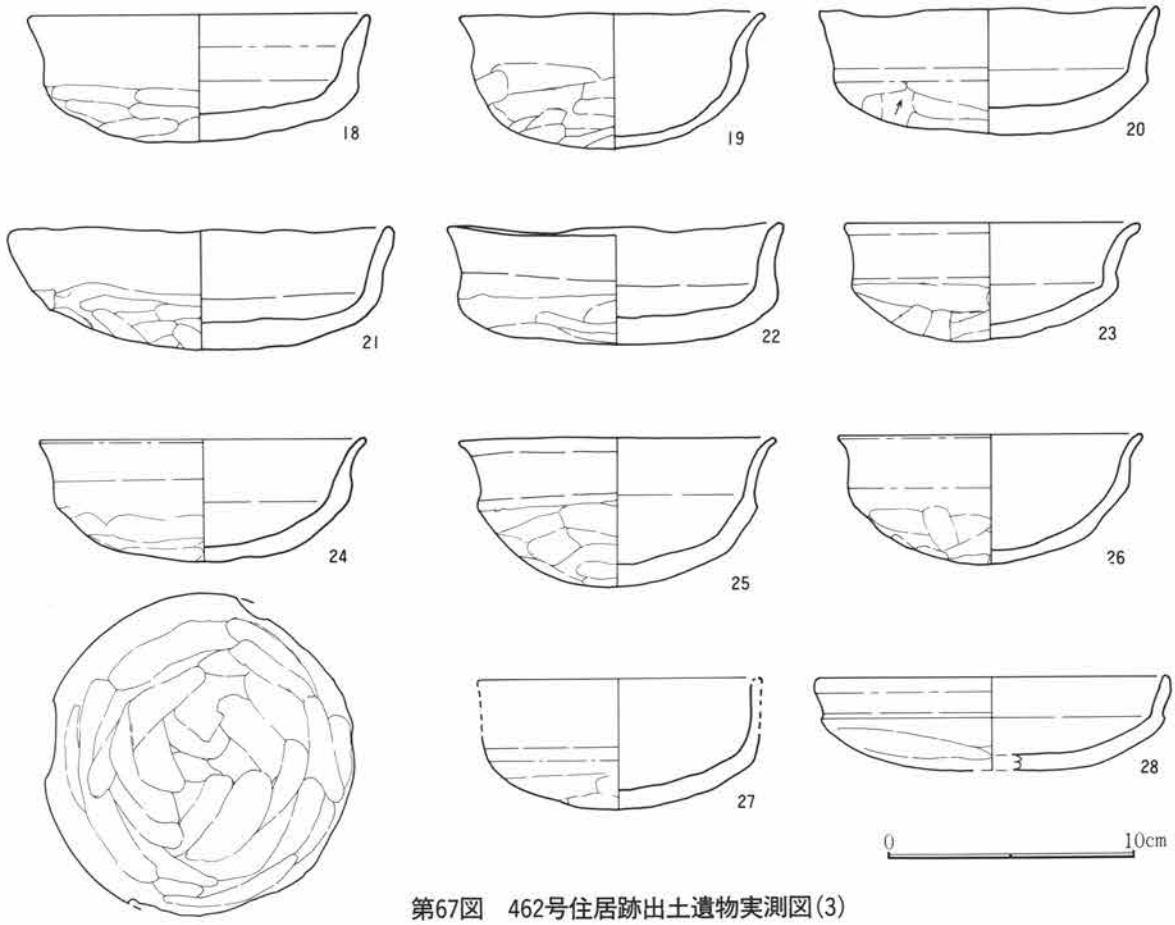
第64図　462号住居跡実測図(2)



第65図　462号住居跡出土遺物実測図(1)



第66図　462号住居跡出土遺物実測図(2)



第67図　462号住居跡出土遺物実測図(3)

第28表　462号住居跡出土遺物観察表

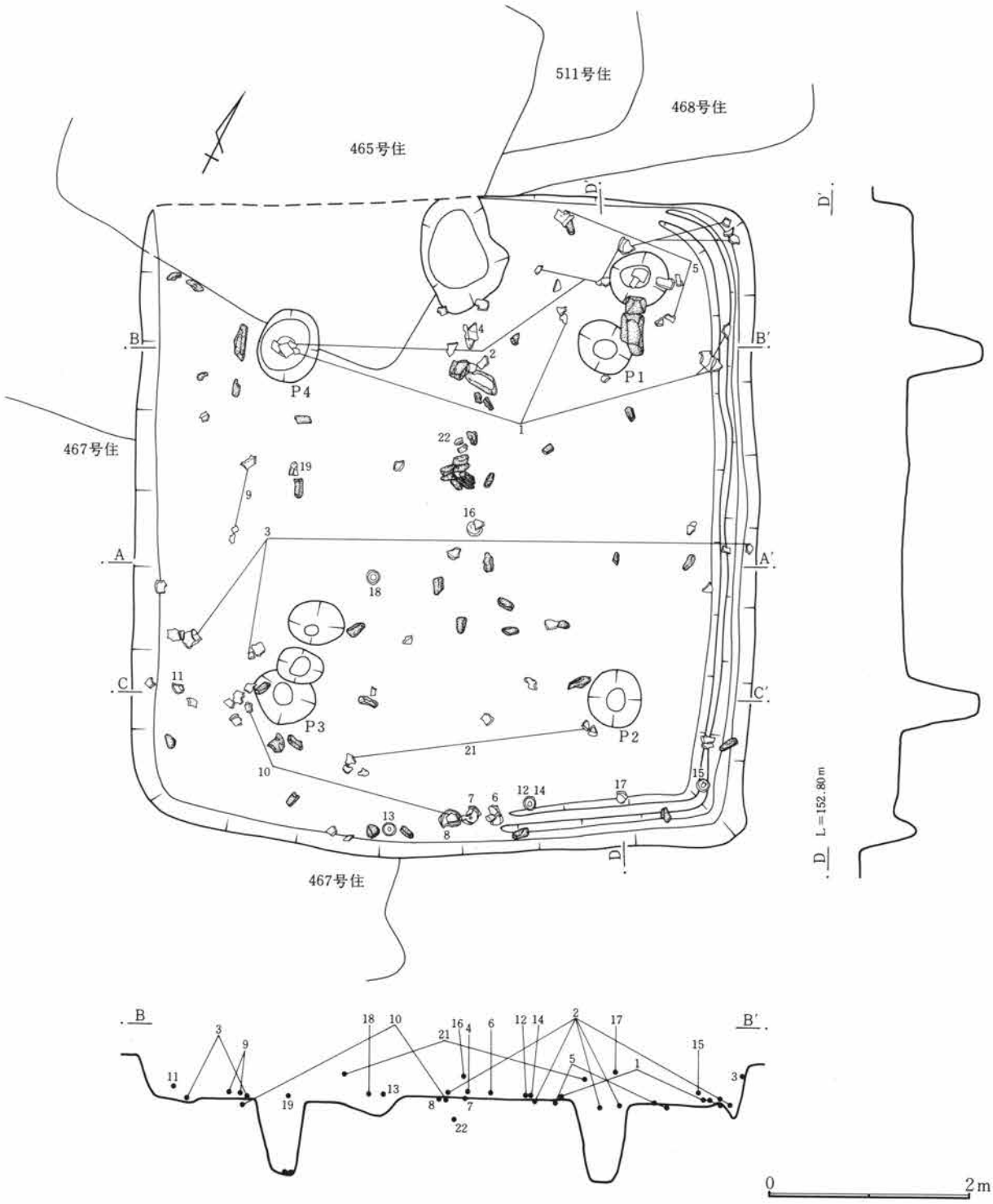
挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
65－1 37	土師器 甕	床面＋6 ⅔残存	口　16.7 高　30.5 底　8.4	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	胴部下半に粘土付着
65－2 37	土師器 甕	竈内＋8 ほぼ完形	口　15.7 高　32.3 底　5.9	①粗、小石 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
65－3 38	土師器 甕	竈内＋9 ほぼ完形	口　16.3 高　25.6 底　6.7	①粗、雲母・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
65－4 38	土師器 甕	床面－8 ほぼ完形	口　13.2 高　24.8 底　5.5	①粗、小石 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
65－5 38	土師器 甕	床面直上 ⅓残存	口　(17.4) 高　29.7 底　6.1	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
65－6 37	土師器 甕	床面－8 ⅔残存	口　18.1 高　33.2 底　7.1	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
65－7 38	土師器 小型甕	床面－5 ほぼ完形	口　16.2 高　17.8 底　7.6	①粗、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
65－8 37	土師器 小型甕	床面－6 完形	口　12.8 高　14.8 底　6.8	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
65－9 38	土師器 小型甕	床面－4 ¾残存	口 12.7 高 14.1 底 6.9	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
66－10 38	土師器 甑	床面＋16 ほぼ完形	口 25.6 高 30.5 底 9.4	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
66－11 38	土師器 甑	床面＋3 完形	口 19.8 高 25.1 底 10.1	①粗、雲母・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
66－12 37	土師器 小型甑	床面直上 ¾残存	口 16.1 高 13.5 底 —	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	穿孔径2.3cm
66－13	土師器 甕	床面＋30 破片	口 (25.3) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
66－14 37	土師器 甕	床面＋9 破片	口 (27.6) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	二次火熱を受ける
66－15 38	土師器 坏	床面＋7 完形	口 13.5 高 5.3 底 丸底	①粗、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
66－16 39	土師器 坏	床面直上 完形	口 13.5 高 5.7 底 丸底	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
66－17 39	土師器 坏	床面直上 ¾残存	口 14.3 高 6.1 底 丸底	①普、黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
67－18 38	土師器 坏	床面＋6 完形	口 13.6 高 5.0 底 丸底	①普、砂粒 ②酸化焔、硬質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
67－19 38	土師器 坏	床面＋4 ほぼ完形	口 12.2 高 5.3 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
67－20 38	土師器 坏	床面直上 完形	口 13.5 高 5.0 底 丸底	①粗、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
67－21 38	土師器 坏	竈内＋9 ほぼ完形	口 15.8 高 4.9 底 丸底	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	歪みが著しい
67－22 39	土師器 坏	床面＋10 ほぼ完形	口 13.4 高 4.7 底 丸底	①普、黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
67－23 39	土師器 坏	竈内直上 ほぼ完形	口 11.8 高 4.4 底 丸底	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
67－24 39	土師器 坏	床面＋7 ¾残存	口 (13.0) 高 4.8 底 丸底	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
67－25 39	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.8 高 5.9 底 丸底	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
67－26 39	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.2 高 5.1 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、やや軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
67－27	土師器 坏	床面＋7 ⅓残存	口 (11.5) 高 5.1 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
67－28	土師器 坏	覆土 ¼残存	口 (14.0) 高 — 底 丸底	①普、石英粒多 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

466号住居跡（第68～72図、第29表、図版20・39・40）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、66・67―28グリッドに位置する。重複関係としては、467号住居跡（古墳）の北東隅を切って構築されるが、468号住居跡（奈良）続いて465号住居跡（平安）に北東隅を中心に破壊される。

上記の理由により、詳細な規模は明らかではないが、東西方向６m15cm・南北方向６m42cmを測るものと思



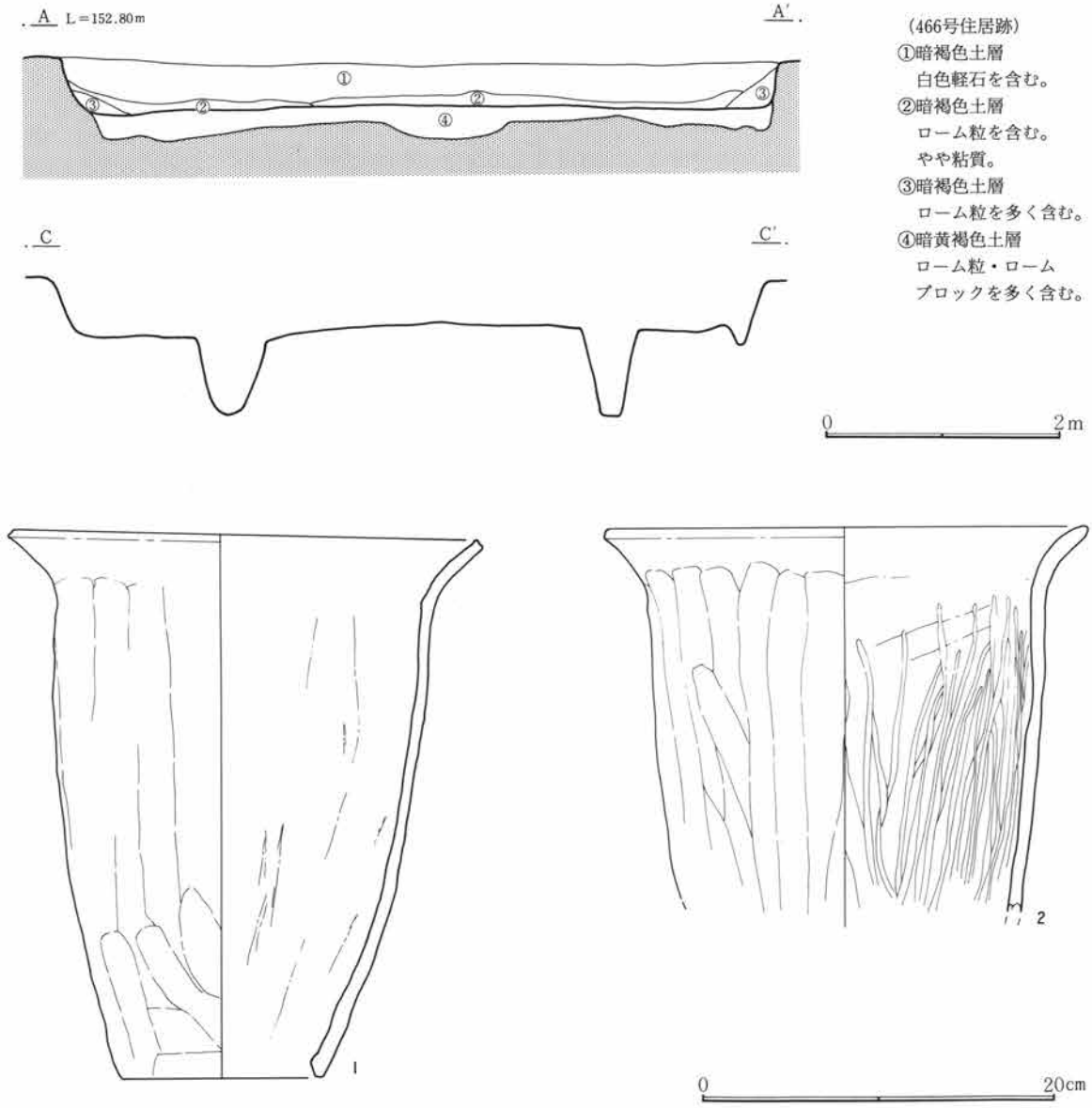
第68図　466号住居跡実測図(1)

われる。主軸方向はN—20°—Wを示す。残存する壁高は最大で55cmを測る。床面には、ロームブロックを主とした貼床が施されていた。主柱穴は四箇所で確認されており、それぞれの規模（径×深さcm）は、P 1が54×78、P 2が57×72、P 3が60×72、P 4が72×75を測る。壁溝は北東隅から南東隅にかけて確認された。

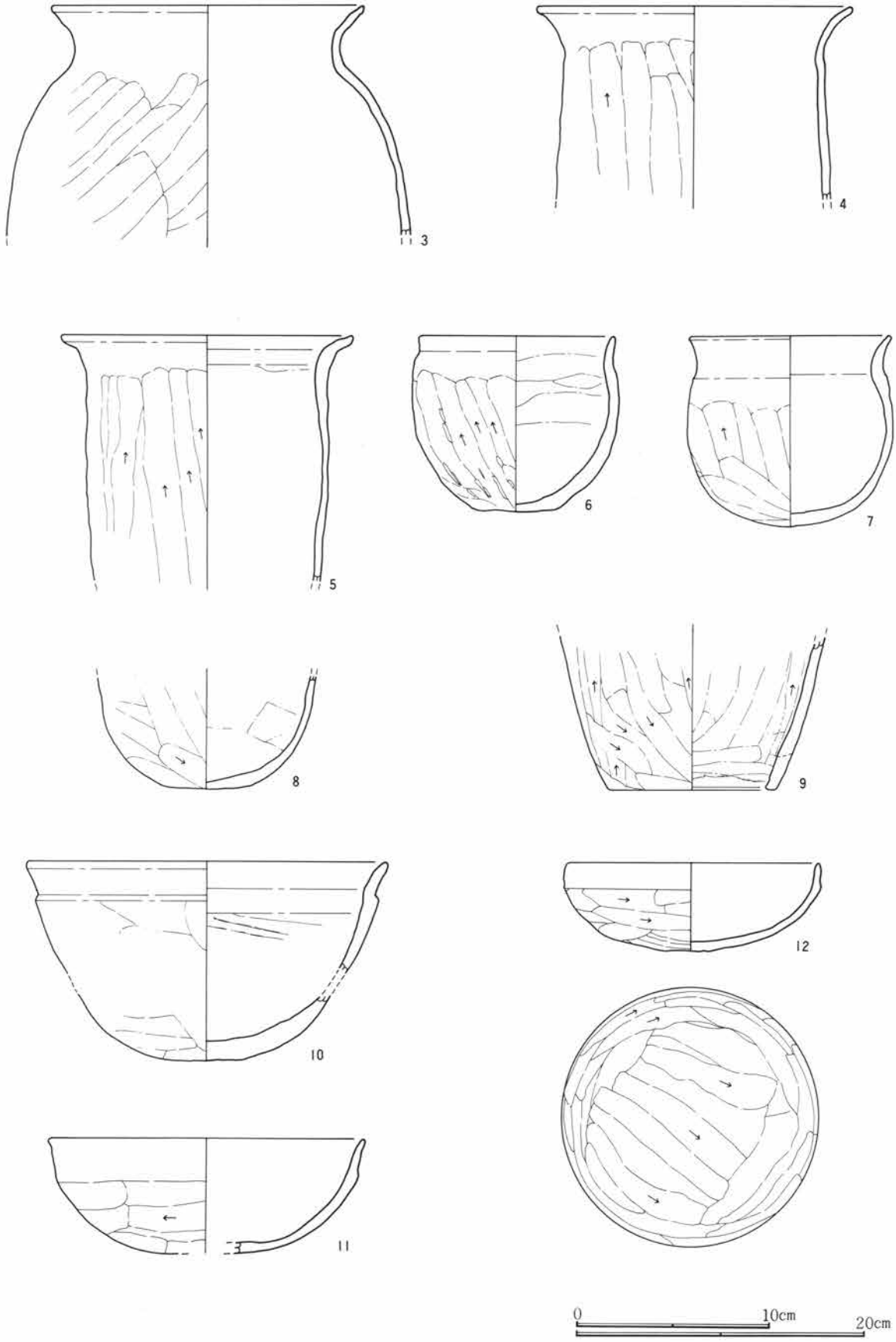
竈は北壁にあったと思われるが破壊され、掘り方調査によって幅114×66cm・深さ 8 cmを測るくぼみが痕跡として確認されたのみである。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径57×51cm・深さ114cmを測る。

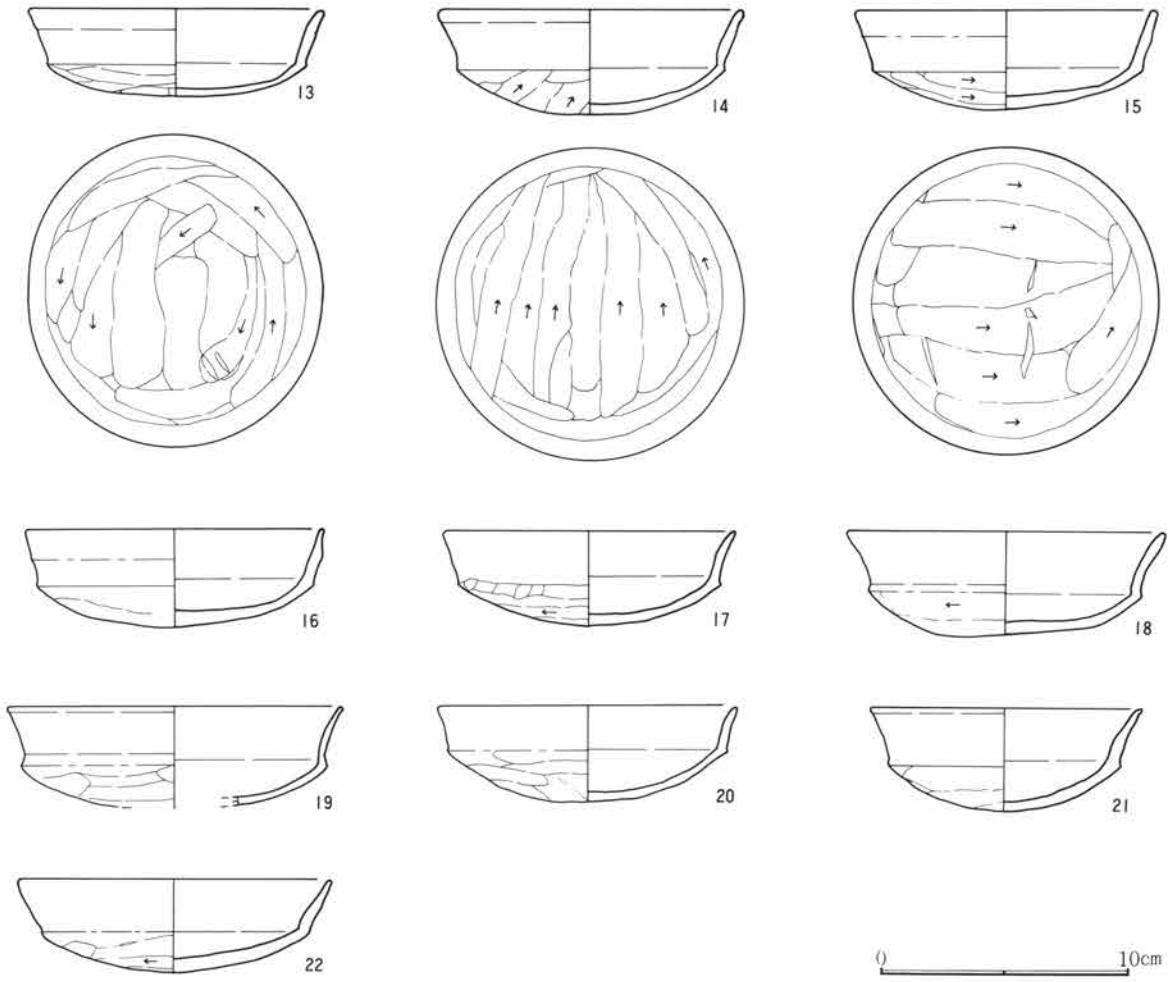
遺物は、床面状に一様に分布するが、南壁際から完形の土師器坏が多く出土している。他に、薦編石状の絹雲母石墨片岩17個、緑簾緑泥片岩 8 個、点紋絹雲母石墨片岩 4 個、絹雲母石墨緑泥片岩 2 個、絹雲母片岩・流紋岩・点紋緑簾緑泥片岩・点紋緑泥片岩・石墨緑泥片岩・絹雲母緑泥片岩各 1 個（計16.8kg）が検出されている。（春山）



第69図　466号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第70図　466号住居跡出土遺物実測図(2)



第71図　466号住居跡出土遺物実測図(3)

第29表　466号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
69－1 39	土師器 甑	床面－78 ⅔残存	口 26.3 高 31.0 底 11.2	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
69－2 39	土師器 甑	床面－78 ⅓残存	口 26.8 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ後、ヘラミガキ。	
70－3 39	土師器 甕	床面－2 破片	口 (21.4) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
70－4 39	土師器 甕	床面＋4 破片	口 (21.5) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
70－5 39	土師器 甕	床面－10 破片	口 (20.0) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
70－6 39	土師器 小型甕	床面＋5 ¾残存	口 13.4 高 12.0 底 5.7	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
70－7 39	土師器 小型甕	床面－2 ½残存	口 (13.8) 高 12.5 底 丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
70－8 40	土師器 甕	床面－3 破片	口 — 高 — 底 6.2	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
70－9	土師器 甑	床面直上 破片	口 — 高 — 底 11.5	①粗、パミス・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ後、粗いミガキ。	
70—10	土師器 鉢	床面－9 破片	口 (24.6) 高 (13.6) 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
70—11 40	土師器 坏	床面＋7 ⅓残存	口 (16.2) 高 — 底 丸底	①普、黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
70—12 40	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.0 高 4.5 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
71—13 40	土師器 坏	床面直上 完形	口 11.6 高 3.4 底 丸底	①普、雲母・砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内黒
71—14 40	土師器 坏	床面直上 完形	口 12.0 高 4.1 底 丸底	①普、石英・雲母粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
71—15 40	土師器 坏	床面＋7 完形	口 11.8 高 3.9 底 丸底	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 ヘラ圧痕。 内面　ナデ。	
71—16 40	土師器 坏	床面＋20 完形	口 11.8 高 3.9 底 丸底	①普、石英粒少 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	外面に煤付着
71—17 40	土師器 坏	床面＋26 ほぼ完形	口 11.7 高 3.7 底 丸底	①普、黒色鉱物粒少 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
71—18 40	土師器 坏	床面直上 完形	口 12.6 高 4.1 底 丸底	①普、細砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
71—19	土師器 坏	床面直上 ⅓残存	口 (13.3) 高 — 底 —	①粗、黒色鉱物粒少 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
71—20	土師器 坏	覆土 ½残存	口 (12.0) 高 3.8 底 丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
71—21	土師器 坏	床面＋18 ¼残存	口 (10.7) 高 4.1 底 丸底	①普、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
71—22 40	土師器 坏	床面－22 ⅓残存	口 (12.5) 高 3.8 底 丸底	①普、パミス ②酸化焔、やや軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

参考までに、各住居跡の所属年代及び床面レベルを整理すれば次のようになる。(第72図参照)

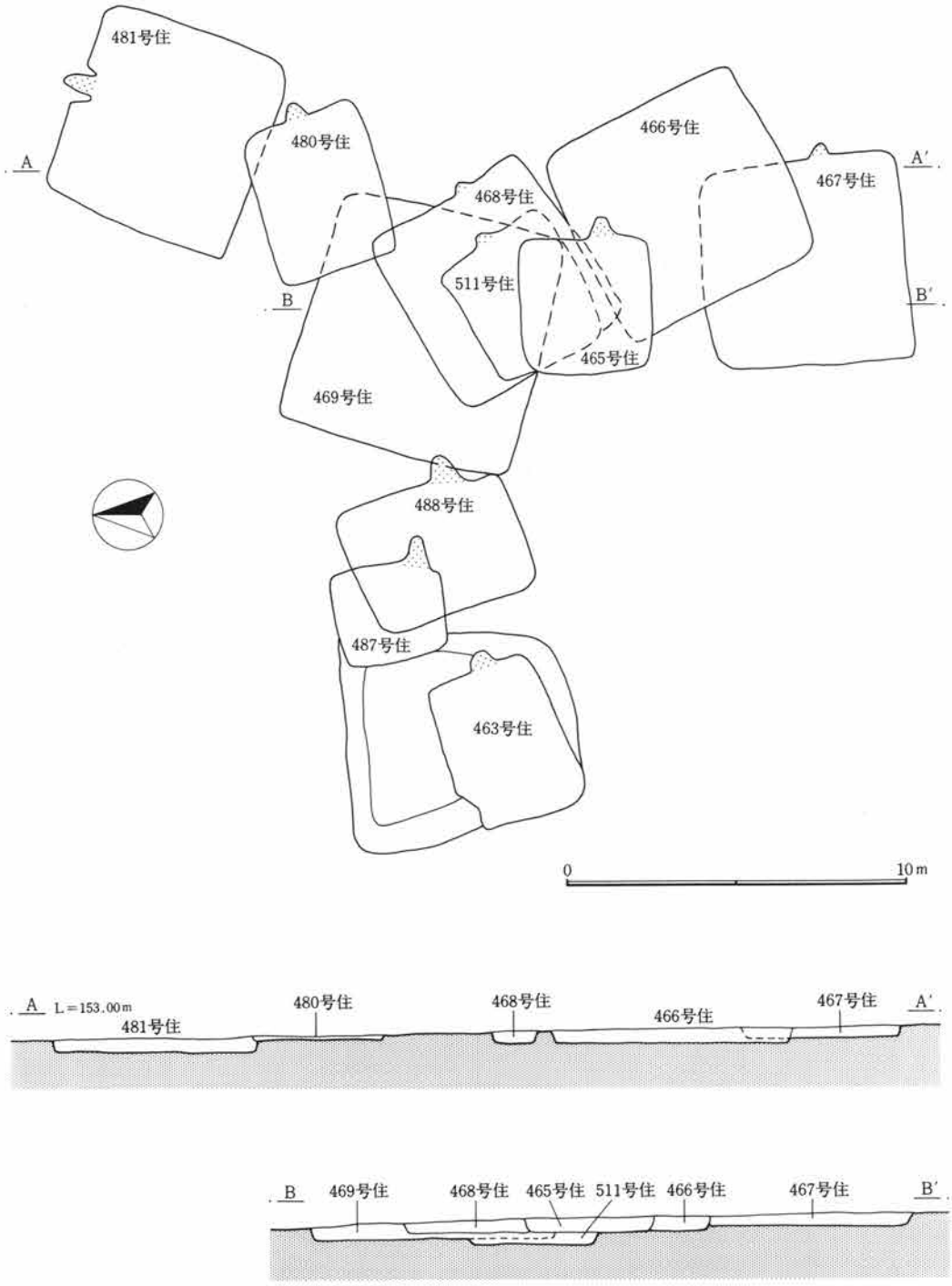
◎古墳時代……466号住居跡（152.00m)、467号住居跡（152.22m)、469号住居跡（151.84m)、481号住居跡（151.80m)、511号住居跡（151.70m)

◎奈良時代……463号住居跡（152.20m)、468号住居跡（152.03m)、480号住居跡（152.15m)、487号住居跡（152.25m)、488号住居跡（151.97m)

◎平安時代……465号住居跡（152.10m）

◎時期不明……竪穴状遺構（463号住と487号住と重複）

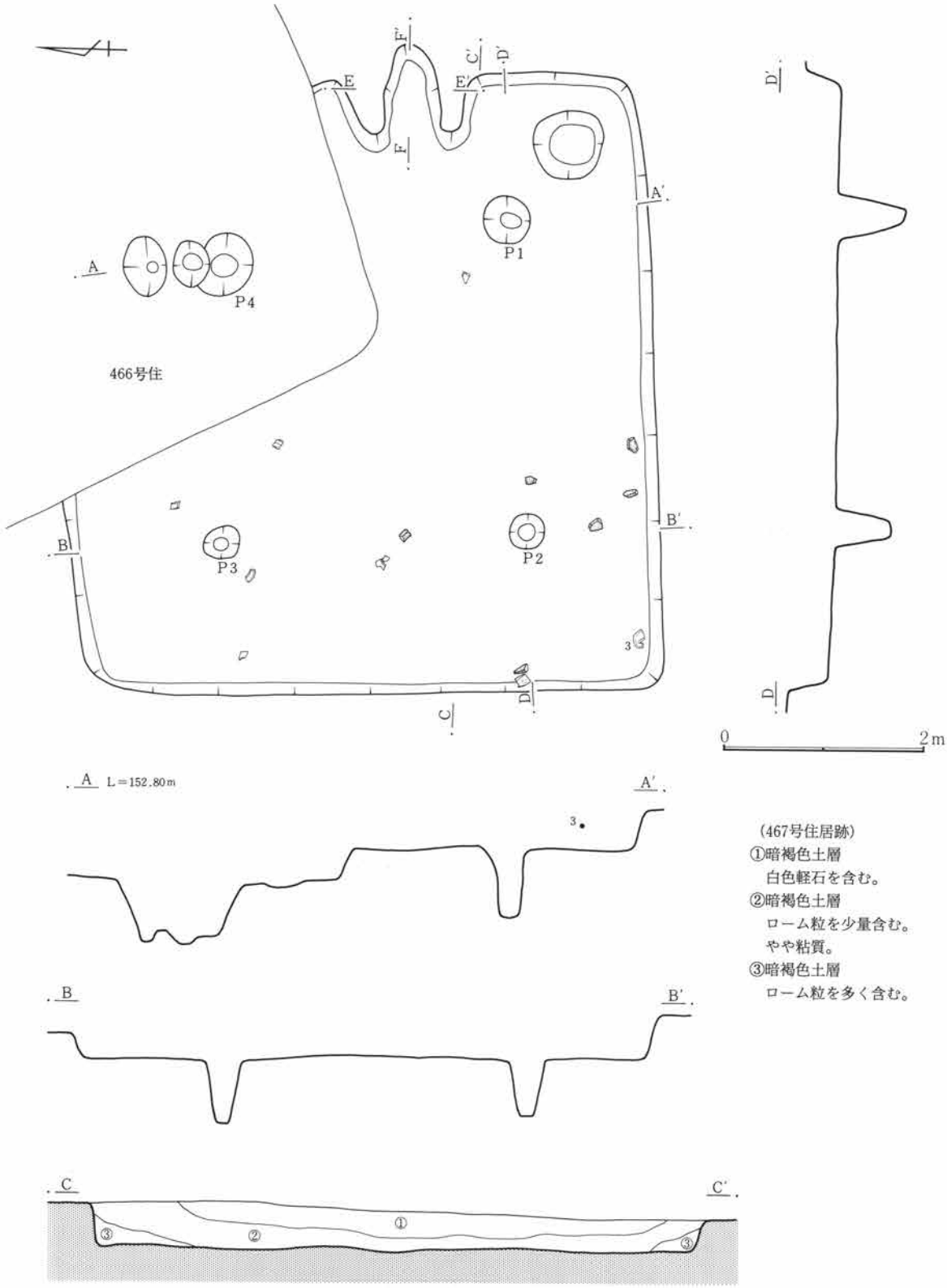
今年度は古墳時代を対象としているが（465号住は『矢田遺跡Ⅲ』で報告済み）、奈良時代・時期不明については次年度以降報告する予定である。



第72図　466号住居跡周辺遺構重複関係図

467号住居跡（第73・74図、第30表、図版21・40・55）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、65・66―28グリッドに位置する。466号住居跡（古墳）に北東部分を破壊される（第72図参照）。規模は東西６m06cm・南北５m91cmを測り、主軸方向はN―93°―E



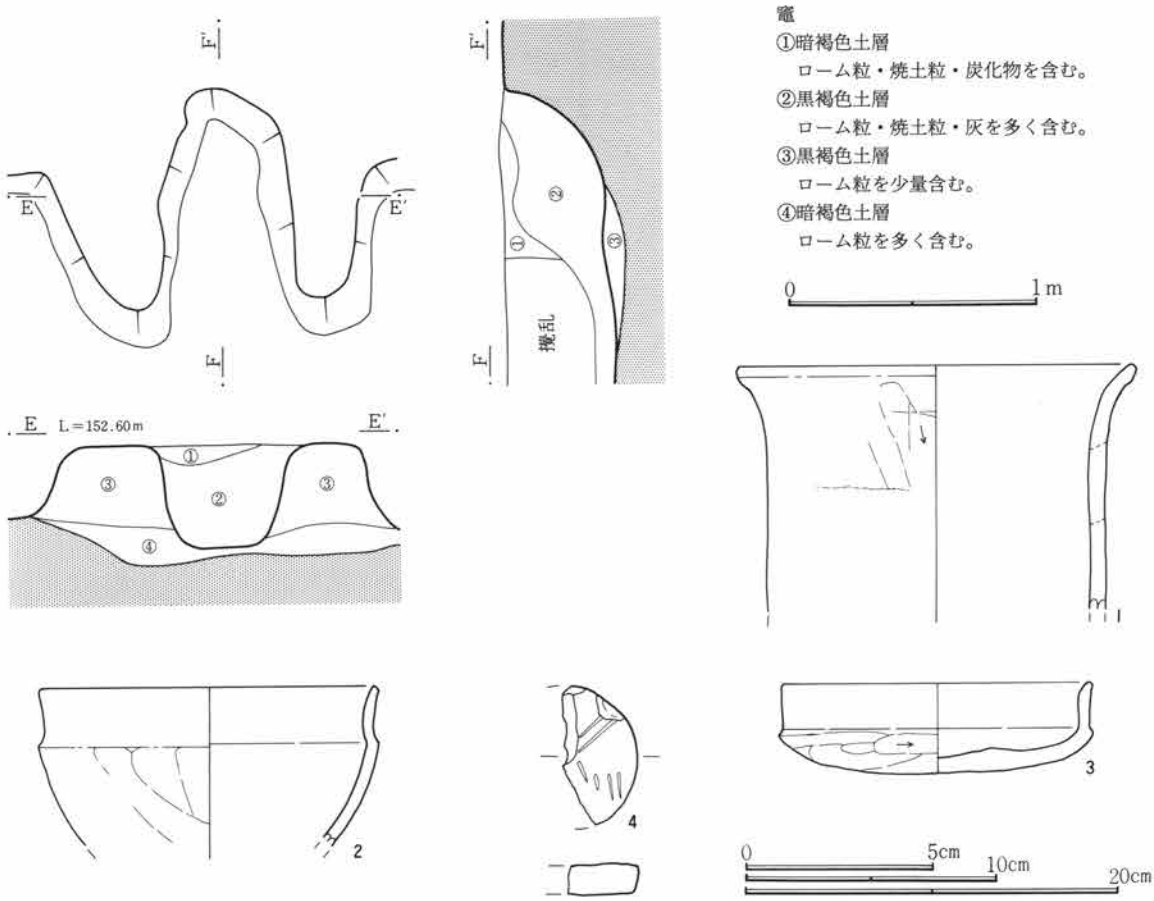
第73図　467号住居跡実測図(1)

を示す。壁高は最大で47cmを測る。床面には貼床が施されていた。主柱穴は四箇所で確認されており、規模（径×深さcm）は、Ｐ１が48×66、Ｐ２が39×54、Ｐ３が39×60を測る。Ｐ４は、466号住のＰ３と重なっており、偶然か意図的なものかは不明である。壁溝等の付属施設は、検出されていない。

竈は東壁にあり、幅33cm・奥行102cm・深さ39cmを測る。

貯蔵穴は、径69×69cm・深さ70cmを測る。形状は方形を呈していたものと思われる。

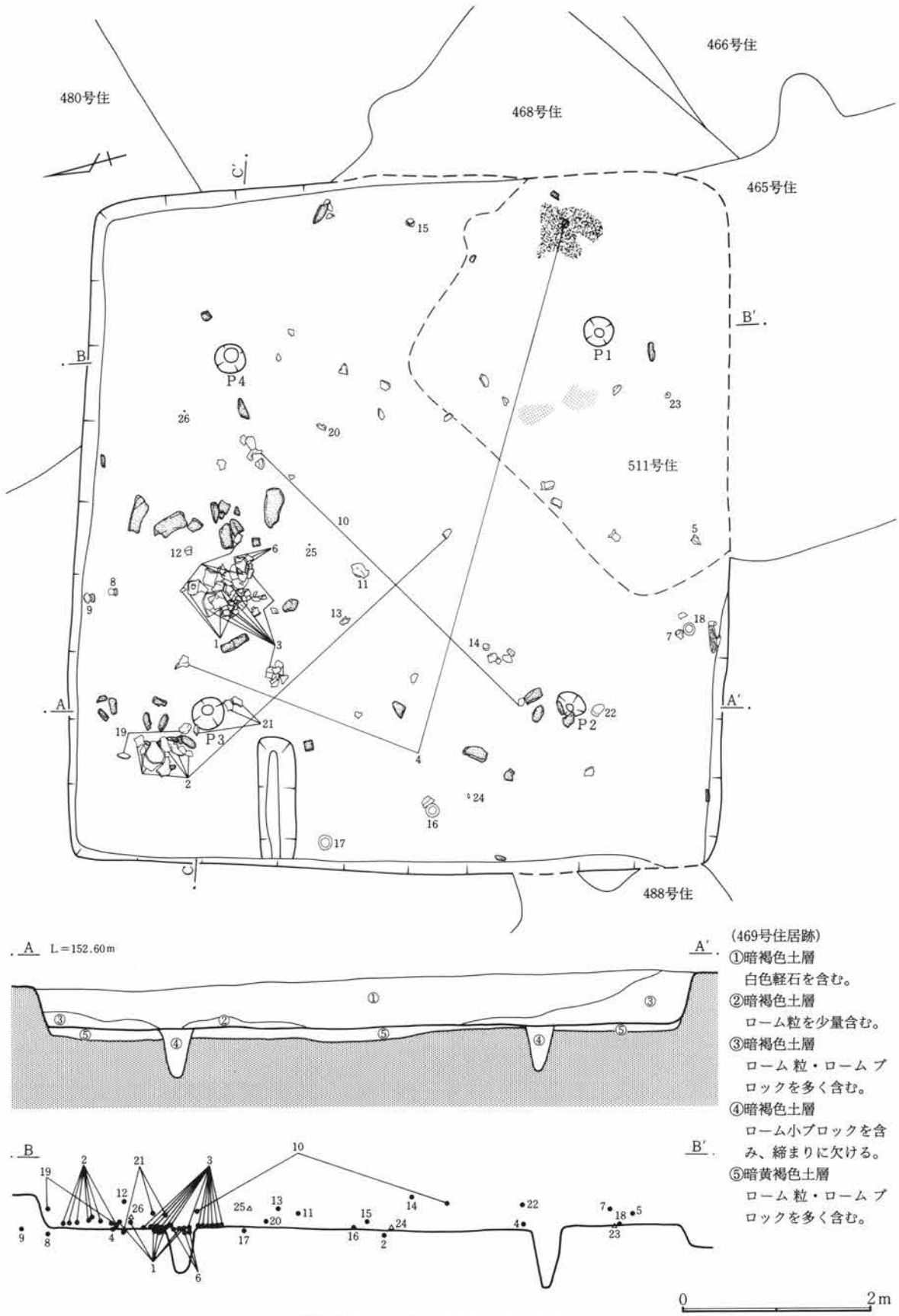
遺物は少なく、出土位置の明らかなのは、土師器坏１点のみである。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩２個、点紋絹雲母石墨片岩・チャート各１個（計2.2kg）が検出されている。（春山）



第74図　467号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第30表　467号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
74－1 40	土師器 甕	不明 破片	口 (21.0) 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③灰褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
74－2 40	土師器 鉢	覆土 破片	口 (17.8) 高　－ 底　－	①普、石英粒少 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
74－3 40	土師器 坏	床面＋22 ½残存	口 (12.2) 高　3.6 底　丸底	①普、パミス・白色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
74－4 55	石製品 紡錘車	覆土 ½残存	径　(4.4/4.0)　孔径(0.65) 厚　0.8　重　9.7		側面と広面に製作時の擦痕。	滑石片岩



第75図　469号住居跡実測図(1)

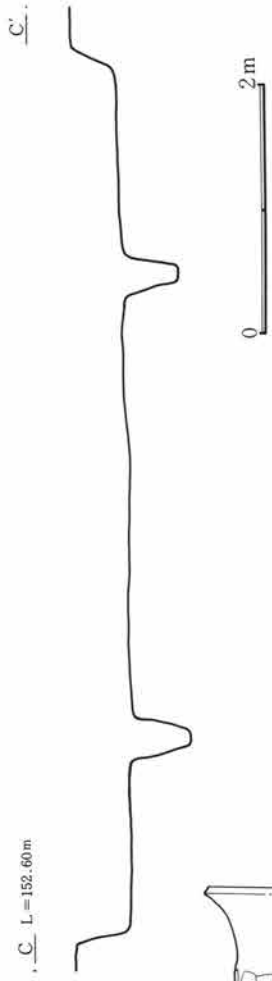
469号住居跡（第75～78図、第31表、図版21・40・41・55）

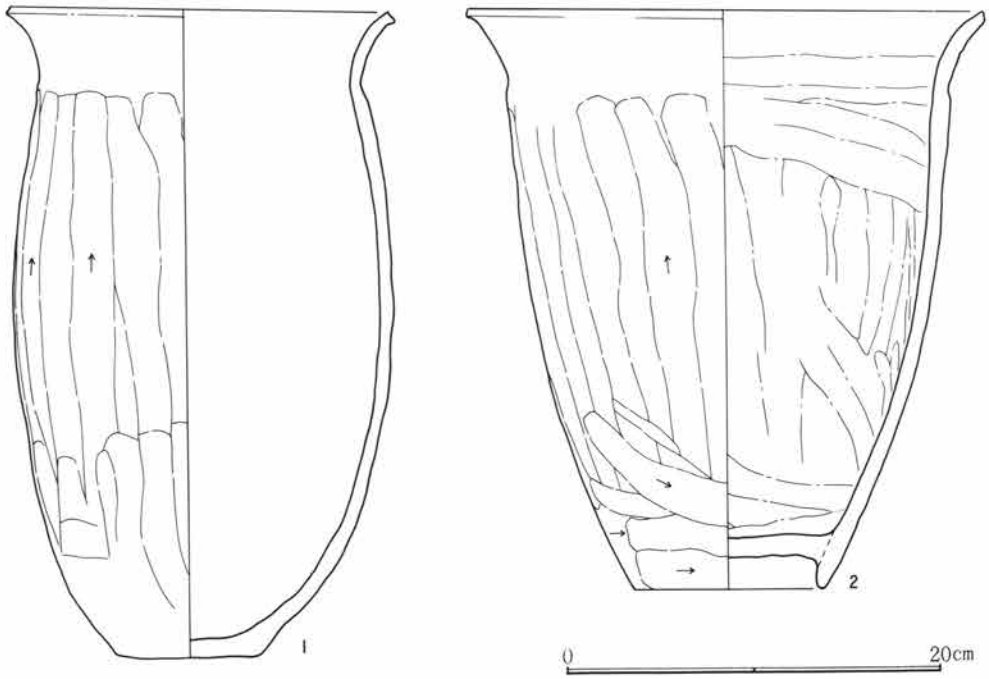
本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、68―27•28グリッドに位置する。南東隅を中心に465号住居跡（平安）•468号住居跡（奈良）•511号住居跡（古墳）が重複し、480号住居跡（奈良）が北東隅を、488号住居跡（奈良）が南西隅をかすめる。（第72図参照）

平面形は、東西７m26cm・南北６m96cmを測る長方形を呈するものと思われる。主軸方向は、N―109°―Eを示す。確認面からの壁高は最大で35cmを測る。床面には、ロームブロックを主とした貼床を全面に施していたと思われ、468号住と重複する部分以外からは、明瞭に確認された。また、511号住と重複する部分には、粘土・炭化物の散布が認められた。主柱穴は、四箇所で確認されており、それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が30×60、Ｐ２が27×48、Ｐ３が33×54、Ｐ４が30×48を測る。掘り方調査時に、Ｐ４付近から西壁に伸びる間仕切り溝が確認された。規模は、幅37cm・長さ126cm・深さ10cmを測る。覆土にはロームを主とした暗黄褐色土が堆積していた。

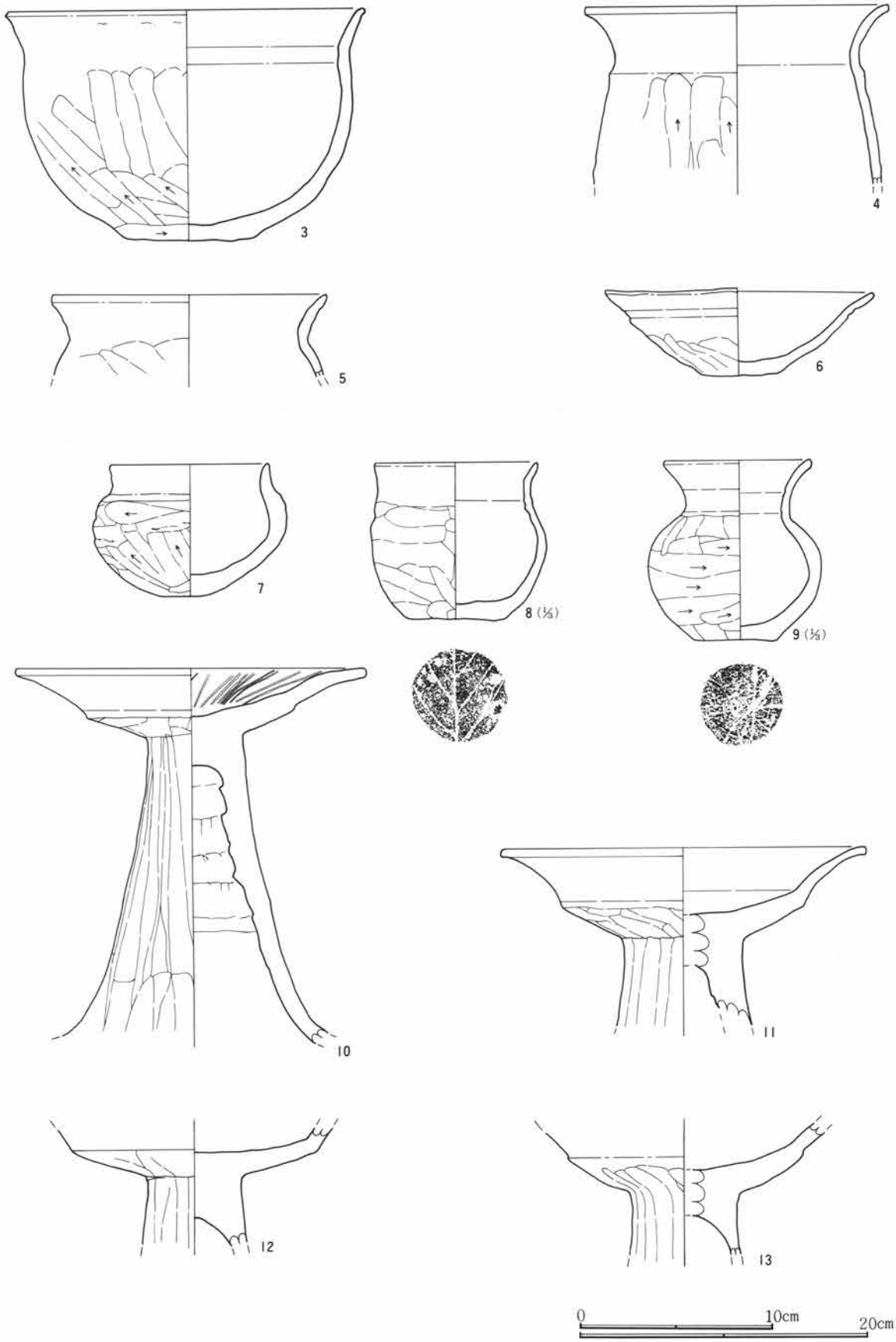
竈の正確な位置は不明であるが、東竈であった可能性が高い。貯蔵穴に関する情報も、得られていない。

遺物は床面中央北壁寄りから多く出土し、種類も比較的豊富である。完形品としては、北壁際から出土した小型甕８・小型壺９や西壁際から出土した坏16・17がある。石器は、紡錘車や臼玉が出土している。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩５個、点紋緑泥片岩２個、点紋絹雲母緑泥片岩・点紋緑簾緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・絹雲母緑泥石墨片岩・流紋岩各１個（計6.1kg）が検出されている。（春山）

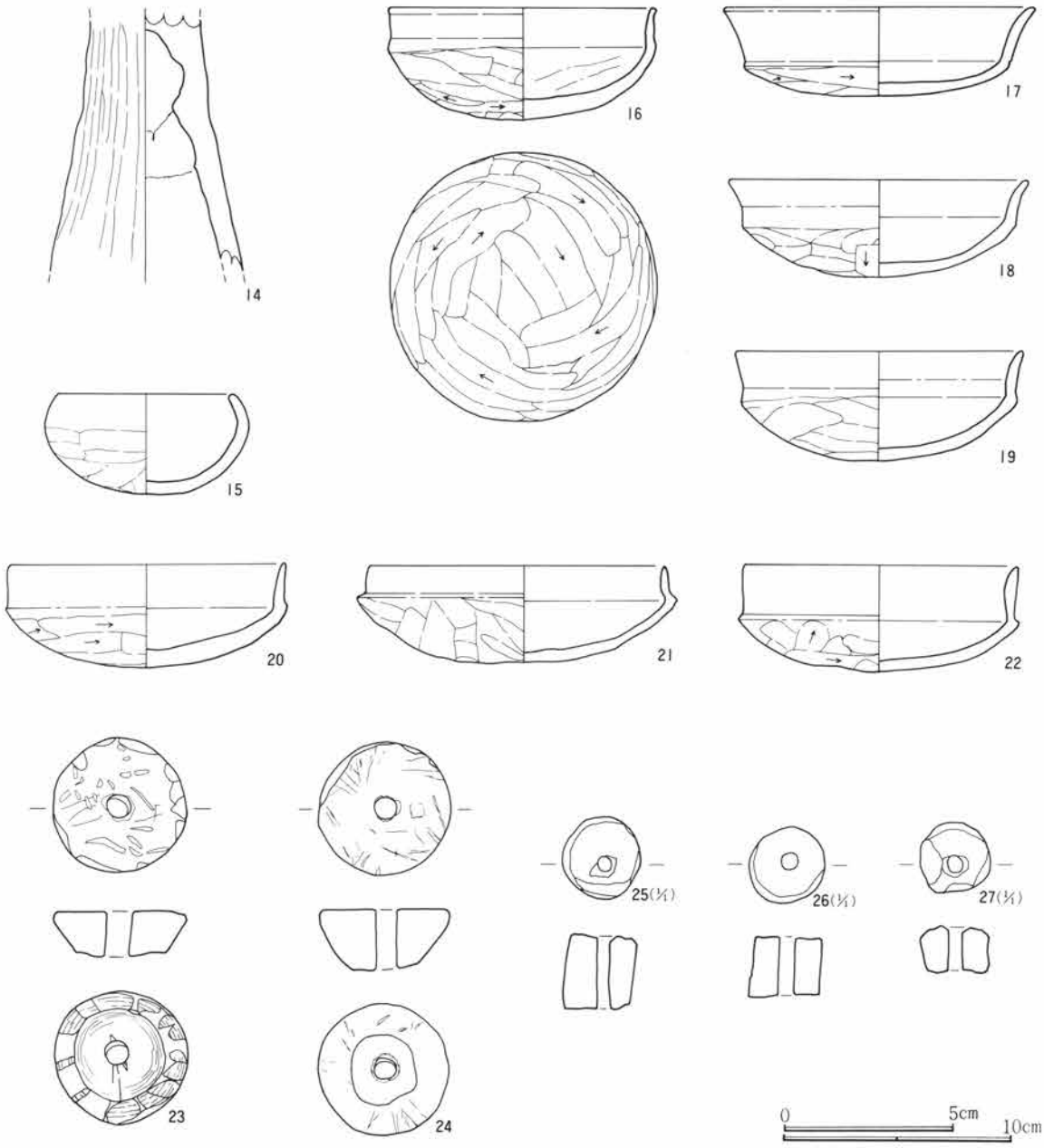




第76図　469号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第77図　469号住居跡出土遺物実測図(2)



第78図　469号住居跡出土遺物実測図(3)

第31表　469号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備考
76— 1 41	土師器 甕	床面直上 ¾残存	口 20.3 高 34.7 底 7.5	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
76— 2 40	土師器 甑	床面＋7 ほぼ完形	口 27.3 高 31.0 底 10.1	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半横ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	桟状作り出し1本あり
77— 3 41	土師器 鉢	床面直上 ¾残存	口 24.6 高 15.7 底 8.8	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	胴部に煤付着
77— 4 41	土師器 甕	床面＋2 破片	口 (20.8) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
77－5	土師器 甕	床面＋15 小破片	口 (18.2) 高 — 底 —	①普、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
77－6 41	土師器 鉢　？	床面直上 ½残存	口 18.5 高 6.0 底 5.6	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
77－7 41	土師器 短頸壺	床面＋39 ¾残存	口 11.0 高 9.0 底 丸底	①普、雲母・白色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半横下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
77－8 41	土師器 小型甕	床面－4 完形	口 8.4 高 8.4 底 4.5	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	底部に木葉痕あり
77－9 41	土師器 小型壺	床面＋2 完形	口 7.6 高 9.2 底 4.3	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	底部に木葉痕あり
77－10 41	土師器 高　坏	床面＋19 ¾残存	口 18.0 高 — 底 —	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。坏体～脚部ヘラケズリ。 内面　坏部放射状ヘラミガキ。	坏部内外面に煤付着
77－11 41	土師器 高　坏	床面＋14 坏部½残存	口 (18.8) 高 — 底 —	①普、雲母・白色鉱物粒 ②酸化焔、硬質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。坏体～脚部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
77－12	土師器 高　坏	床面＋29 破片	口 — 高 — 底 —	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、硬質 ③鈍い黄橙色	外面　坏体～脚部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
77－13	土師器 高　坏	床面＋20 破片	口 — 高 — 底 —	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い黄橙色	外面　坏体～脚部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
78－14 41	土師器 高　坏	床面＋31 脚部破片	口 — 高 — 底 —	①普、黒色鉱物粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い黄橙色	外面　ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
78－15 41	土師器 坏	床面＋7 ¾残存	口 4.8 高 7.8 底 丸底	①普、石英粒少 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
78－16 41	土師器 坏	床面直上 完形	口 11.6 高 4.9 底 丸底	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
78－17 41	土師器 坏	床面－2 完形	口 13.6 高 3.9 底 丸底	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
78－18 41	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.1 高 4.2 底 丸底	①普、石英・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
78－19 41	土師器 坏	床面＋5 ¾残存	口 12.6 高 4.8 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
78－20 41	土師器 坏	床面＋9 ½残存	口 (12.2) 高 4.5 底 丸底	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
78－21 41	土師器 坏	床面直上 ¾残存	口 (13.0) 高 4.3 底 丸底	①普、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
78－22	土師器 坏	床面＋24 ¼残存	口 (12.0) 高 4.7 底 丸底	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、硬質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
78－23 55	石製品 紡錘車	床面直上 完形	径 3.9/2.7 厚 1.3	孔径 0.7 重 31.6	側面に製作時の擦痕。広面・狭面ともに弱い磨滅。狭面の孔から同心円状にやや窪む。	滑石片岩
78－24 55	石製品 紡錘車	床面直上 完形	径 3.9/2.0 厚 1.8	孔径 0.6 重 37.1	全面的に磨滅。	滑石片岩
78－25 55	石製品 臼　玉	床面＋20	径 1.1 厚 1.1	孔径 0.2 重 2.7	側面はやや斜め方向に研磨。上・下面は扁平に近づけようと調整されている。	滑石片岩

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
78－26 55	石製品 臼　玉	床面＋10	径　1.1 厚　0.9	孔径　0.2 重　2.0	側面はやや斜め方向に研磨。上・下面ともに平らに調整されている。	滑石片岩
78－27 55	石製品 臼　玉	覆土	径　1.0 厚　0.7	孔径　0.2 重　1.2	側面は斜め方向に荒い研磨。上・下面は扁平に近づけようと調整されている。	滑石片岩

478号住居跡（第79～81図、第32表、図版21・42・55）

本住居跡は、第８次調査区中央部の平坦面にあり、63・64－34・35グリッドに位置する。切り合い関係としては、477号住居跡（平安）に西壁の一部を破壊される。北側に47号溝、東側に48号・49号溝が走り、西側から南側にかけては、古墳時代後期と平安時代を中心とする住居跡がまとまって所在する。

平面形は、東西７m11cm・南北７m56cmを測る比較的整った長方形を呈し、主軸方向はN－0°－Eを示す。今回報告する住居跡で両辺とも７mを超えるのは、本住居跡の他には540号住居跡と660号住居跡の２軒のみである。確認面からの壁高は最大で49cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床下の掘り込みは、約20cm程である。床面には、黒色土とロームブロックの混合土で貼床を施しており、竈前から南壁中央部にかけて特に堅緻であった。

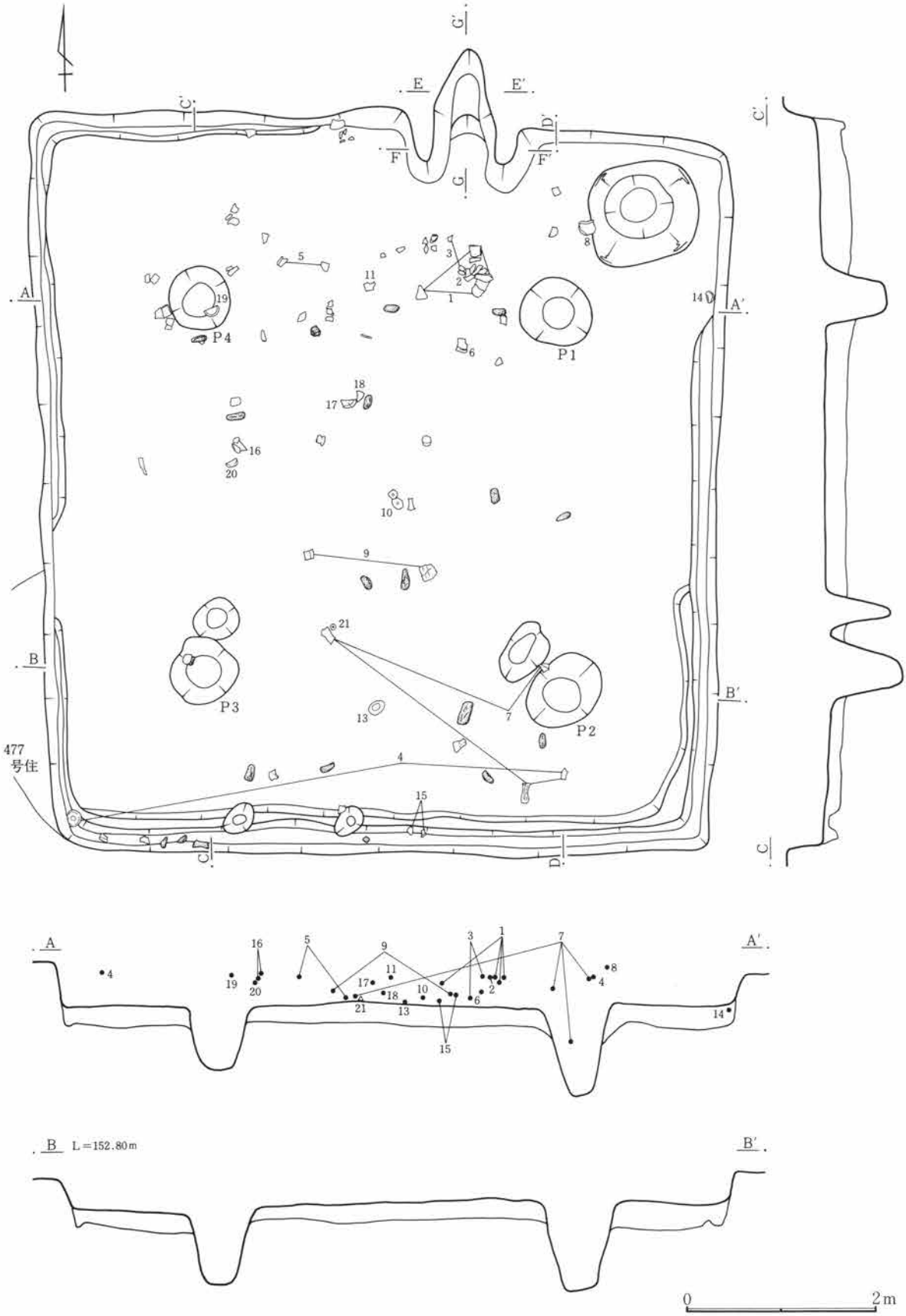
主柱穴は、住居外形の対角線上から四箇所確認された。それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が75×96、Ｐ２が84×84、Ｐ３が72×78、Ｐ４が66×66を測る。主柱穴間の寸法は、Ｐ１～Ｐ２が397cm、Ｐ２～Ｐ３が375cm、Ｐ３～Ｐ４が388cm、Ｐ４～Ｐ１が376cmを測る。Ｐ２とＰ３に隣接する２基のピットは、掘り方調査時に確認された。深さは、それぞれ隣接するＰ２及びＰ３と同規模であった。また、南壁際から径30cm・深さ20～24cmを測る２基のピットが並列した状態で確認されているが、出入り口施設に伴う支柱穴の可能性がある。

壁溝は竈・貯蔵穴周辺を除きほぼ住居内を全周する。深さは概ね10～15cm程であった。東壁南半部から南西隅にかけては、土堤状の地山の掘り残しが認められた。

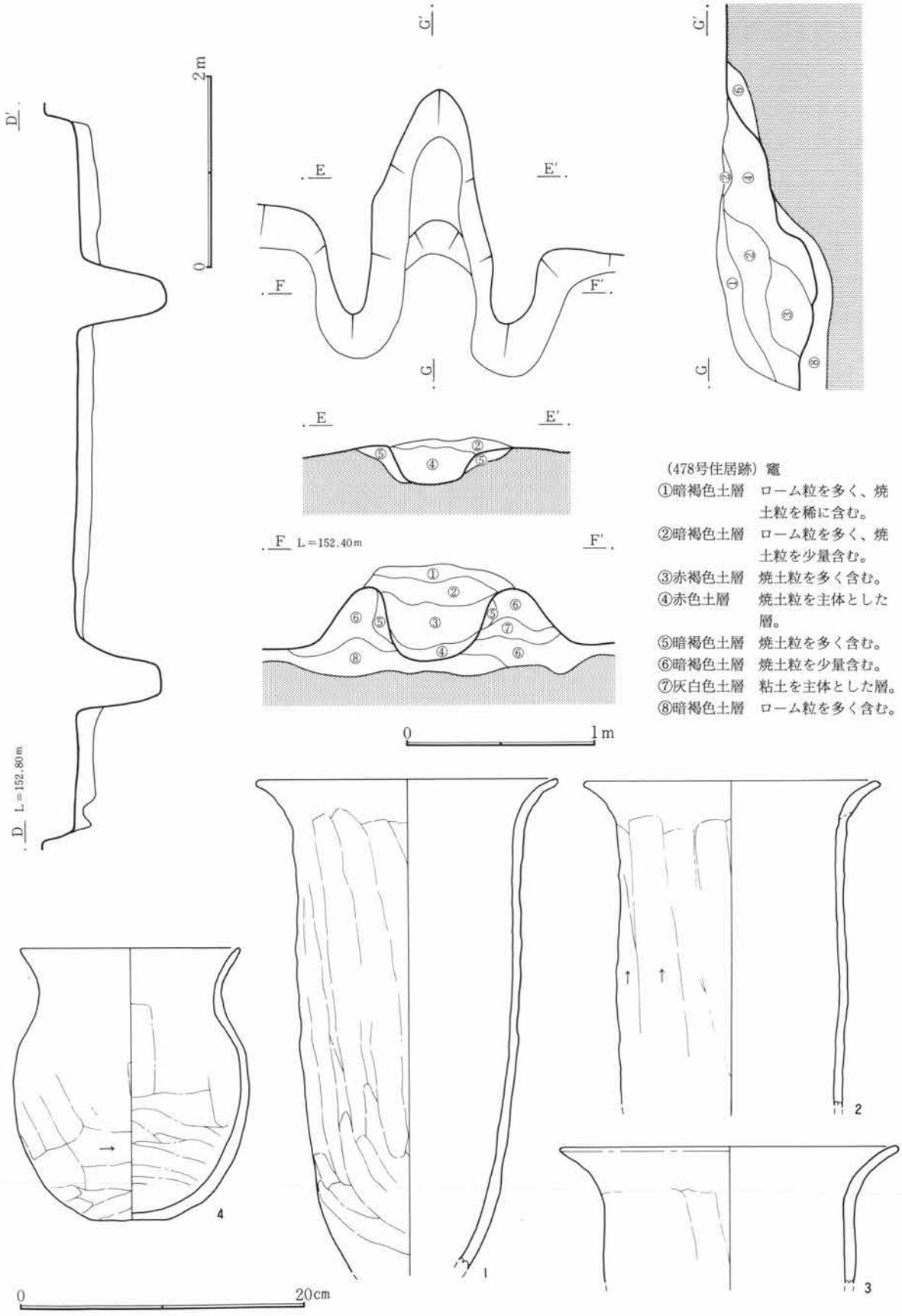
竈は北壁中央やや東寄りにあり、幅54cm・奥行147cm・深さ48cmを測る。燃焼部は床面よりややくぼみ、内部には、天井部が崩落したと思われる焼土ブロックが堆積していた。煙道部は燃焼部より一段高く、66cm程住居外に張り出す。袖は灰白色粘土を芯材に、暗褐色土で覆って構築されていたものと思われる。

貯蔵穴は、竈右脇の北東隅で検出された。径72×63cm・深さ100cmを測る円形を呈する。底面は平坦で、径は28cmであった。上縁部に蓋受けを想定させる径111×102のくぼみが認められた。覆土上層には、炭化物を少量含んでいた。

遺物は、竈前を中心に床面中央から南壁にかけて散漫に分布する。個体の残存率は低く、殆どが接合しない破片である。垂直分布にはばらつきが認められ、注意を要する。土師器坏13は、焼成後に底部内面から穿孔されているが、その機能・用途は不明である。土器以外では、石製紡錘車が１点出土している。（中沢）

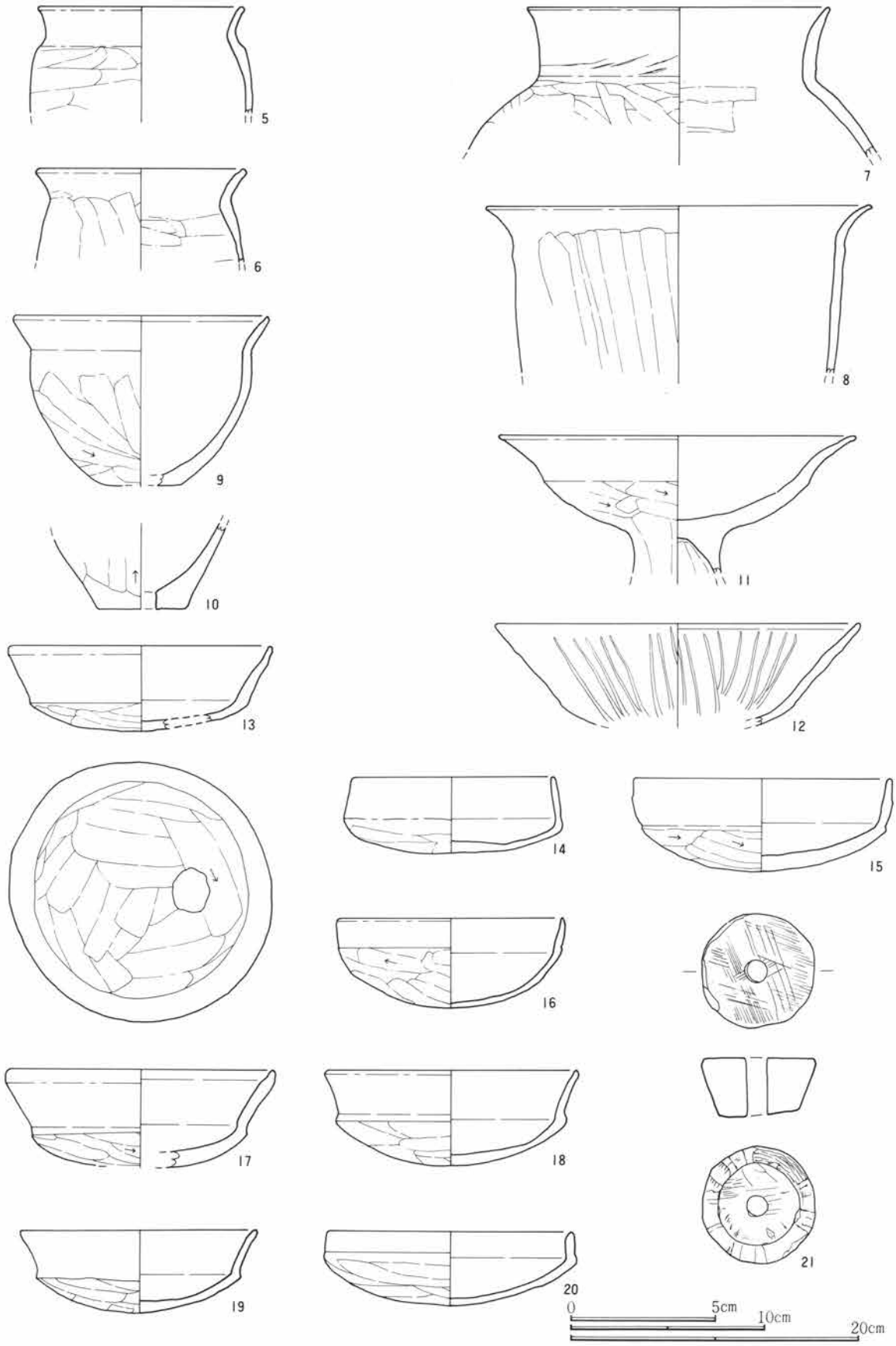


第79図　478号住居跡実測図(1)



（478号住居跡）竈
①暗褐色土層　ローム粒を多く、焼土粒を稀に含む。
②暗褐色土層　ローム粒を多く、焼土粒を少量含む。
③赤褐色土層　焼土粒を多く含む。
④赤色土層　焼土粒を主体とした層。
⑤暗褐色土層　焼土粒を多く含む。
⑥暗褐色土層　焼土粒を少量含む。
⑦灰白色土層　粘土を主体とした層。
⑧暗褐色土層　ローム粒を多く含む。

第80図　478号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

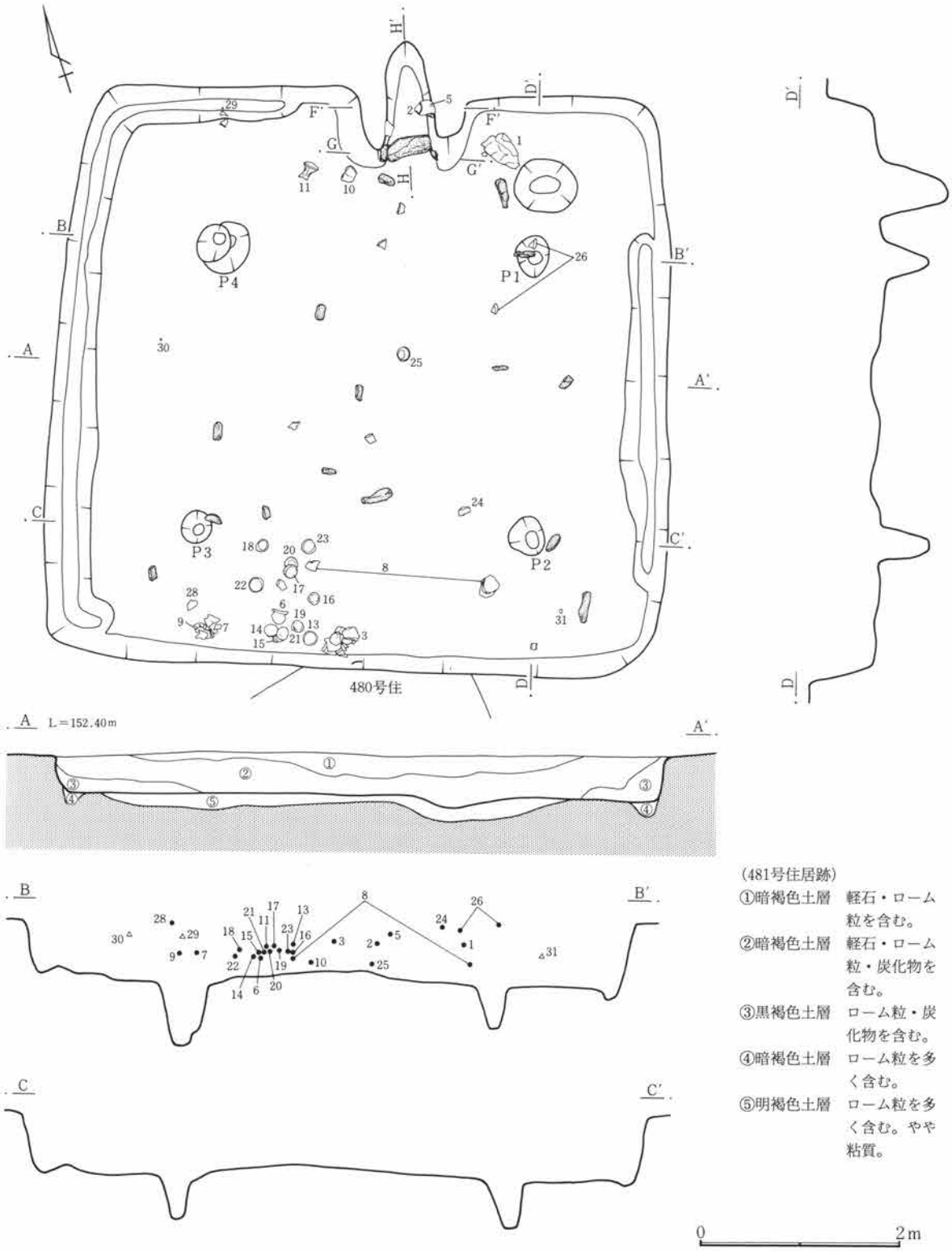


第81図　478号住居跡出土遺物実測図(2)

第32表　478号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備考
80－1 42	土師器 甕	床面＋24 ½残存	口 (20.8) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
80－2 42	土師器 甕	床面＋31 破片	口 (20.2) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
80－3 42	土師器 甕	床面＋30 破片	口 (23.4) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
80－4 42	土師器 小型甕	床面＋30 ⅓残存	口 (15.2) 高 18.9 底 5.1	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	摩滅が著しい
81－5 42	土師器 小型甕	床面＋30 破片	口 (14.0) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。 内面　ナデ。	
81－6 42	土師器 小型甕	床面＋15 破片	口 (14.2) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
81－7 42	土師器 甕	床面＋11 破片	口 20.7 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部横ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
81－8 42	土師器 甑	床面＋40 破片	口 16.4 高 － 底 －	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
81－9 42	土師器 小型甑 ？	床面＋12 ½残存	口 (17.4) 高 (11.6) 底 (5.1)	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
81－10 42	土師器 甑	床面＋10 破片	口 － 高 － 底 5.8	①普、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い黄橙色	外面　胴部下半ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
81－11 42	土師器 高坏	床面＋30 坏部¼残存	口 (18.3) 高 － 底 －	①普、黒色鉱物粒 ②酸化焔、硬質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。坏体～脚部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
81－12	土師器 高坏	覆土 破片	口 (18.7) 高 － 底 －	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	内外面共　ナデ後ヘラミガキ。	
81－13 42	土師器 坏	床面＋4 完形	口 13.5 高 4.4 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	焼成後の穿孔あり
81－14 42	土師器 坏	床面－3 ¾残存	口 10.5 高 3.8 底 丸底	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内面に黒漆が付着
81－15 42	土師器 坏	床面＋7 ½残存	口 13.1 高 4.7 底 丸底	①普、石英粒多 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	二次火熱を受ける
81－16 42	土師器 坏	床面＋11 ほぼ完形	口 11.6 高 4.6 底 丸底	①普、石英粒多 ②酸化焔、軟質 ③黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
81－17 42	土師器 坏	床面＋25 ½残存	口 13.8 高 － 底 －	①普、石英粒多 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
81－18	土師器 坏	床面＋16 ½残存	口 (13.0) 高 4.9 底 丸底	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
81－19 42	土師器 坏	床面＋34 ½残存	口 (12.2) 高 4.3 底 丸底	①普、黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
81－20 42	土師器 坏	床面＋26 ½残存	口 12.8 高 3.7 底 丸底	①普、雲母・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土	②焼成	③色調	成・整形技法の特徴	備　考
81−21 55	石製品 紡錘車	床面＋8 完形	径 厚	3.9/2.8 2.0	孔径 重	0.7 48.0	全面的に磨滅。	滑石片岩



第82図　481号住居跡実測図(1)

481号住居跡（第82～86図、第33表、図版22・43・44・55）

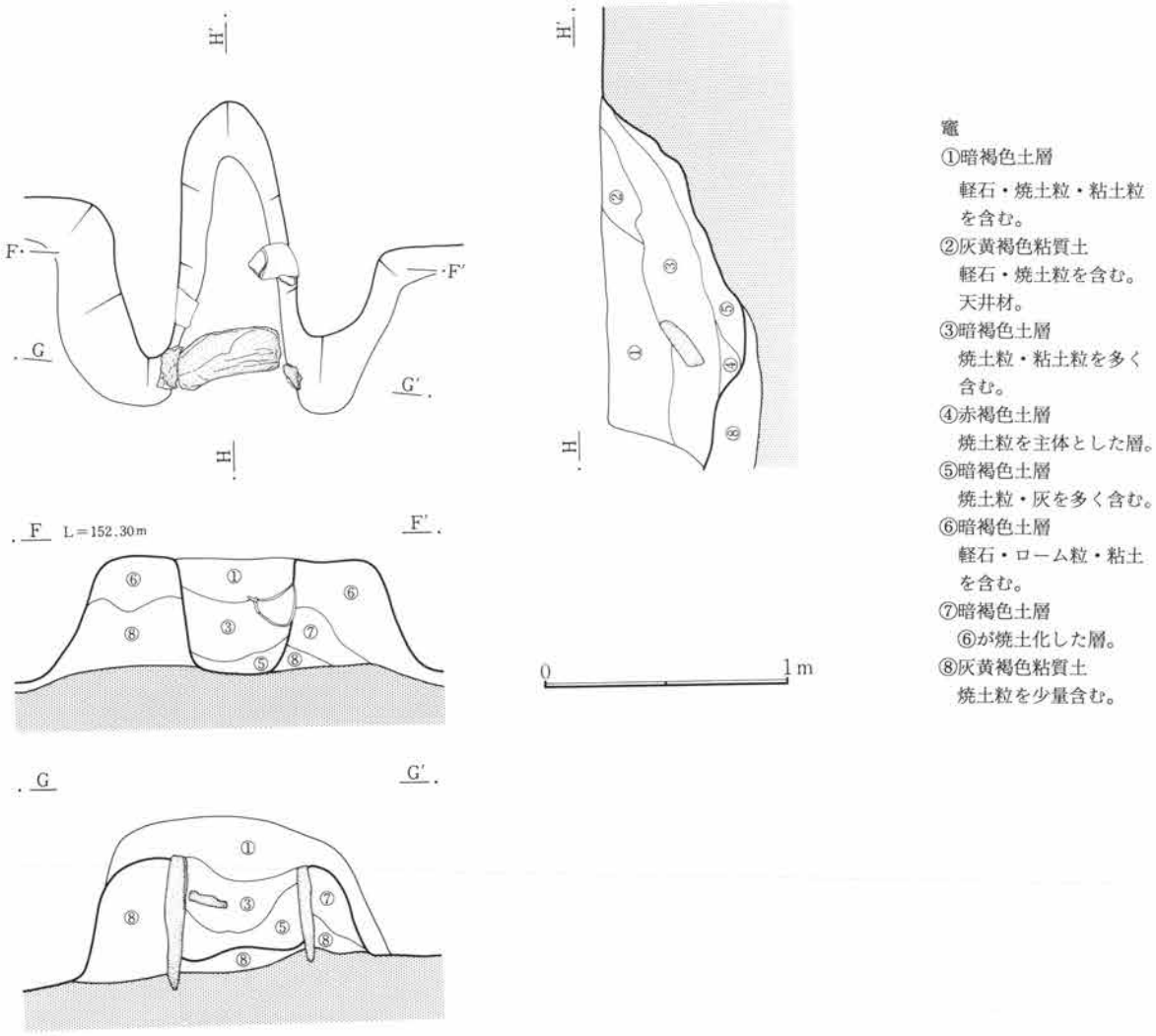
本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、69・70―28・29グリッドに位置する。480号住居跡（奈良）に南壁の一部を破壊される。本住居以南は、一連の重複住居群となっている。（第72図参照）

平面形は東西６m12cm・南北５m70cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN―26°―Eを示す。確認面からの壁高は最大で50cmを測る。床面には貼床を施すが、特に中央部で明瞭な硬化面が検出された。主柱穴は四箇所で確認されており、それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が39×66、Ｐ２が36×66、Ｐ３が27×60、Ｐ４が39×84を測る。掘り方調査時に、壁溝は東壁際中央部と竈左脇の北壁際から南西隅にかけて良好に検出された。幅は21～36cmであるが、深さは東壁際の壁溝の方が10cm程深くて25cmを測る。

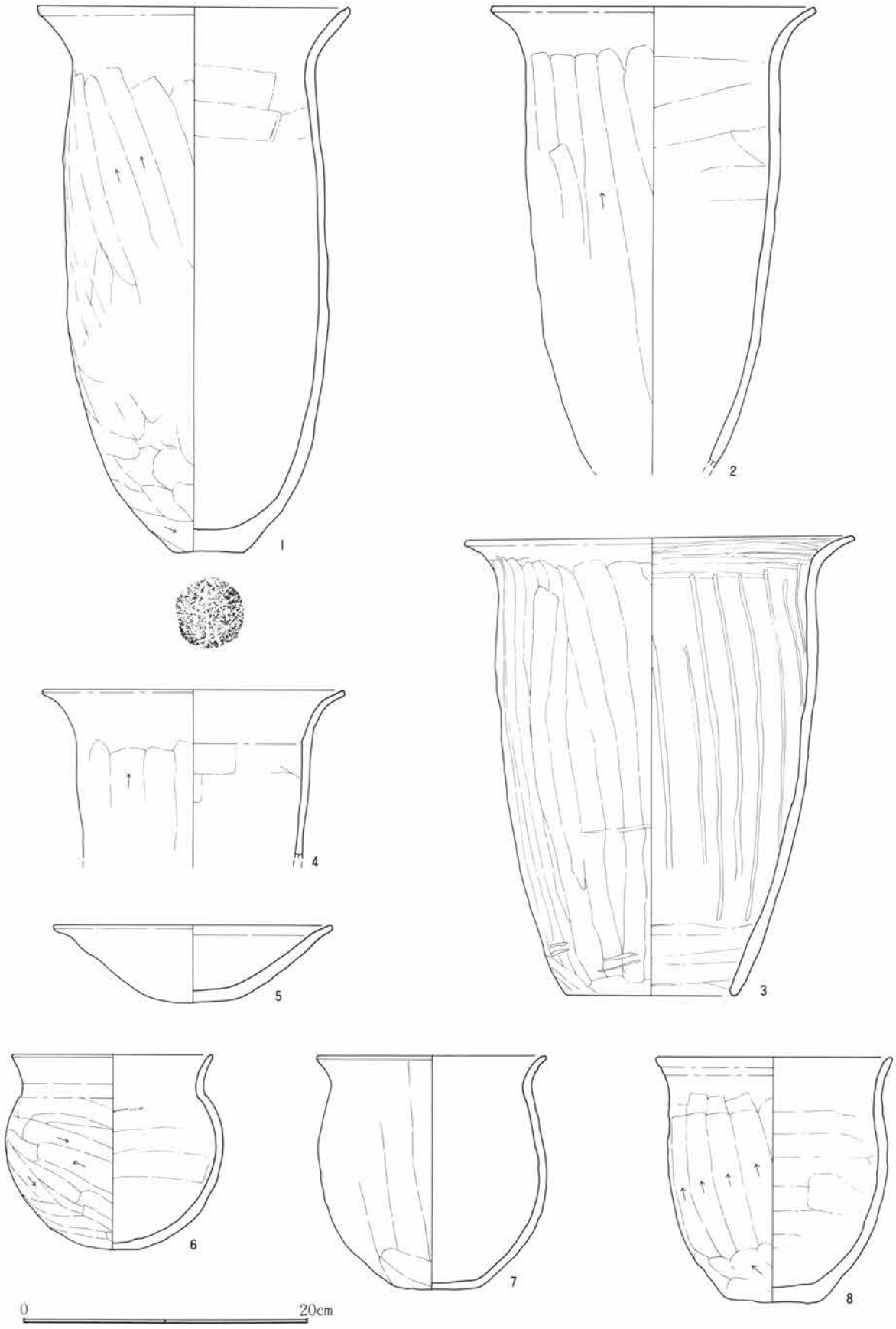
竈は北壁中央やや南寄りにあり、幅42cm・奥行126cm・深さ57cmを測る。両袖石と天井石と思われる石材が遺存していた。

貯蔵穴は、径60×51cm・深さ84cmを測る楕円形を呈する。

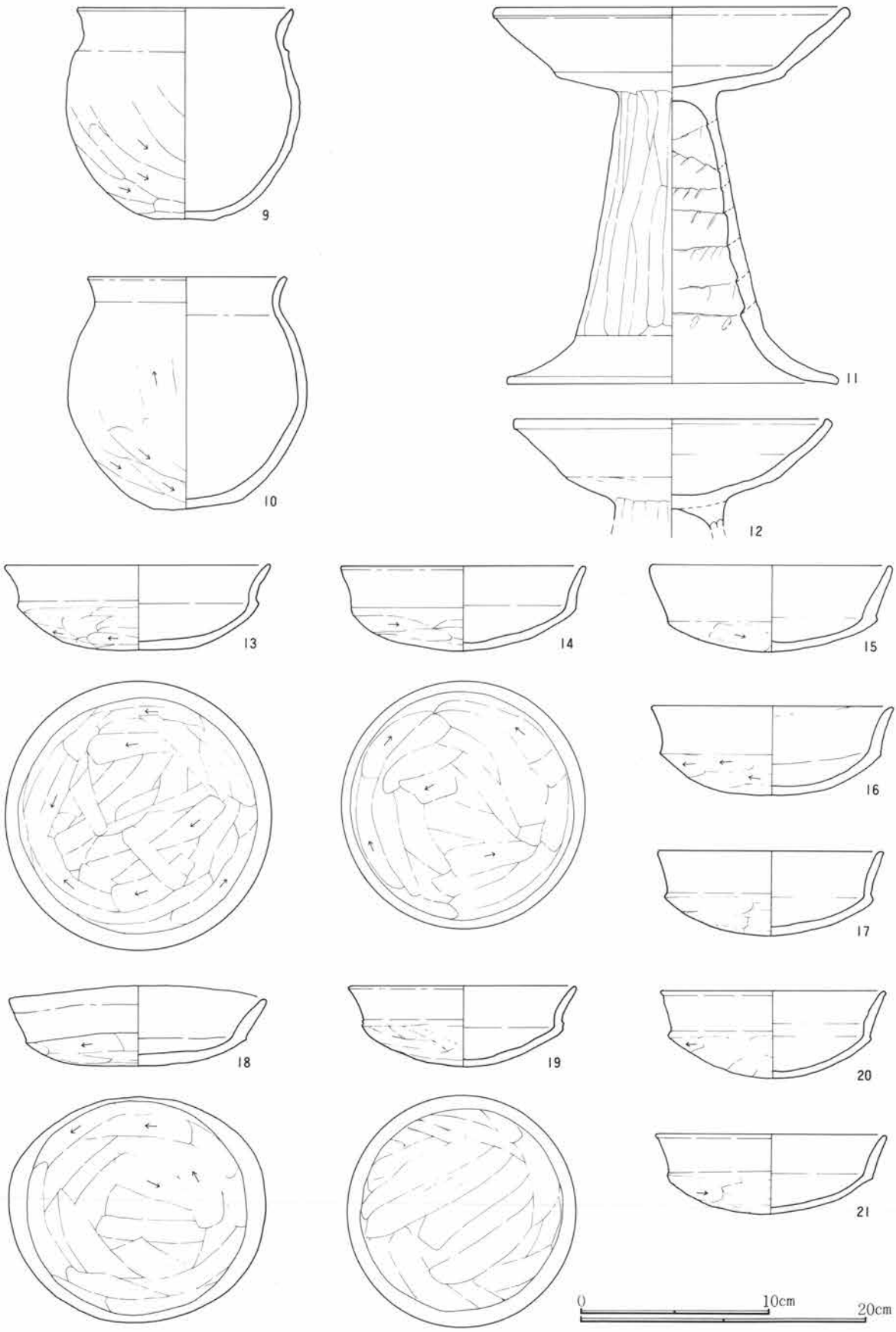
遺物は、竈と南壁周辺を中心に分布する。特に南壁際からは、今回報告する中では最も多くの完形品の坏が認められた。土器以外では、管玉１点と臼玉２点が出土している。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩７個、点紋絹雲母石墨片岩・点紋石墨緑泥片岩・絹雲母石墨緑泥片岩各１個（計5.1kg）が検出されている。（春山）



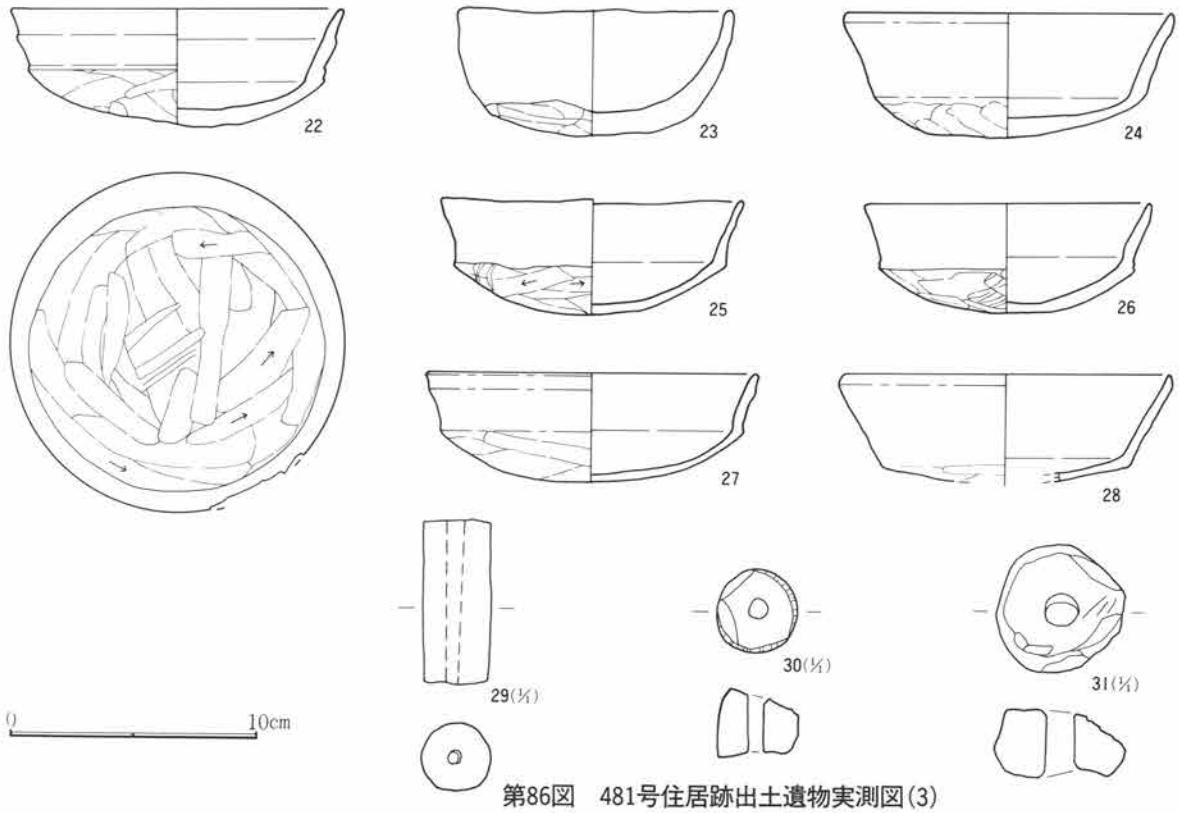
第83図　481号住居跡実測図(2)



第84図　481号住居跡出土遺物実測図(1)



第85図　481号住居跡出土遺物実測図(2)



第86図　481号住居跡出土遺物実測図(3)

第33表　481号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
84—1 43	土師器 甕	床面－3 3/4残存	口　21.4 高　37.7 底　5.0	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
84—2 43	土師器 甕	竈内＋17 破片	口　(22.6) 高　— 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
84—3 43	土師器 甑	床面＋19 3/4残存	口　26.9 高　31.9 底　11.7	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　口縁部～胴部上半ヘラミガキ。底部ヘラケズリ。	
84—4 43	土師器 甕	竈内覆土 破片	口　(21.0) 高　— 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
84—5 43	土師器 鉢　？	竈内＋25 3/4残存	口　19.4 高　5.4 底　丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリカ。 内面　ナデ。	摩滅が著しい
84—6 43	土師器 小型甕	床面直上 完形	口　14.0 高　13.5 底　4.7	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い浅黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半横下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
84—7 43	土師器 小型甕	床面＋24 3/4残存	口　15.4 高　16.2 底　5.5	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③明赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
84—8 43	土師器 小型甕	床面－2 3/4残存	口　16.3 高　17.0 底　6.5	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
85—9 43	土師器 小型甕	床面＋6 ほぼ完形	口　14.9 高　14.5 底　6.0	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	摩滅が著しい
85—10 43	土師器 小型甕	床面－2 1/2残存	口　(13.9) 高　16.1 底　6.0	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	摩滅が著しい

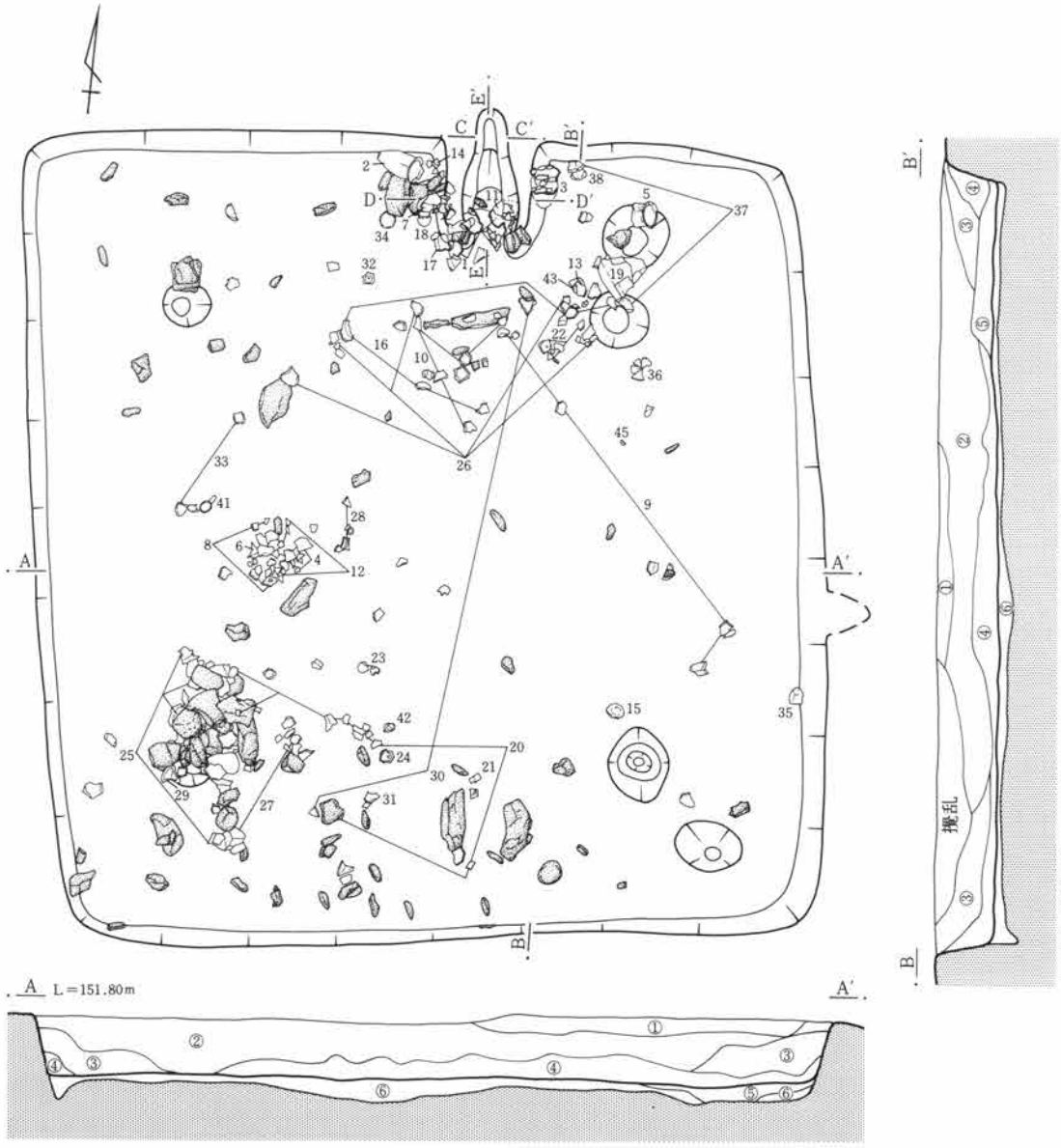
挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
85—11 43	土師器 高　坏	床面＋12 ¾残存	口 (18.4) 高 19.3 底 17.1	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。坏体～脚部へラケズリ。 内面　ナデ。	
85—12 43	土師器 高　坏	覆土 坏部¾残存	口 16.2 高 — 底 —	①普、石英粒多 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。坏体～脚部へラケズリ。 内面　ナデ。	
85—13 44	土師器 坏	床面＋14 完形	口 13.8 高 4.6 底 丸底	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
85—14 44	土師器 坏	床面直上 完形	口 12.8 高 4.3 底 丸底	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	内面に黒漆付着カ
85—15 44	土師器 坏	床面＋6 完形	口 12.5 高 4.5 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
85—16 44	土師器 坏	床面＋5 ほぼ完形	口 12.5 高 4.6 底 丸底	①普、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
85—17 44	土師器 坏	床面＋12 完形	口 11.8 高 4.3 底 丸底	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
85—18 44	土師器 坏	床面＋11 完形	口 13.4 高 4.2 底 丸底	①普、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
85—19 44	土師器 坏	床面＋9 完形	口 11.8 高 4.2 底 丸底	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
85—20 44	土師器 坏	床面＋8 完形	口 11.6 高 4.5 底 丸底	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
85—21 44	土師器 坏	床面＋8 完形	口 12.0 高 4.1 底 丸底	①普、石英粒少 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
86—22 44	土師器 坏	床面＋4 ほぼ完形	口 13.1 高 4.5 底 丸底	①粗、石英・雲母粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	口縁部の内外面に一部煤付着
86—23 44	土師器 坏	床面＋8 完形	口 10.8 高 5.0 底 丸底	①粗、小石 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
86—24 44	土師器 坏	床面＋33 ¾残存	口 13.2 高 4.8 底 丸底	①普、石英粒多 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
86—25 44	土師器 坏	床面－3 ほぼ完形	口 12.0 高 4.5 底 丸底	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
86—26 44	土師器 坏	床面＋32 ¾残存	口 11.4 高 4.3 底 丸底	①普、石英粒少 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
86—27	土師器 坏	覆土 ¼残存	口 13.2 高 4.2 底 丸底	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
86—28 44	土師器 坏	床面＋35 ¾残存	口 (13.0) 高 — 底 —	①普、褐色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。 内面　ナデ。	
86—29 55	石製品 管　玉	床面＋22 完形	径 0.9　孔径 0.25/0.13 長 2.16　重 3.4		上面から一方向の穿孔。両端部は平らで長軸に対してほぼ直角。比較的丁寧なつくり。	玉髄（碧玉）
86—30 55	石製品 臼　玉	床面＋24	径 1.1　孔径 0.2 厚 0.9　重 1.5		側面はやや斜め方向に研磨。上面は剝離か。下面は平らに調整。	滑石片岩
86—31 55	石製品 臼　玉	床面＋8	径 1.7　孔径 0.4 厚 0.9　重 3.4		側面は部分的にほぼ縦方向の研磨。上・下面は扁平に近づけようと調整されている。	滑石片岩

498号住居跡（第87～94図、第34表、図版22・23・44・45・46・55）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、73・74―31・32グリッドに単独で位置する。周囲には、やや離れて古墳時代後期の小規模な住居跡が散在的に分布する。

平面形は、東西６m51cm・南北６m60cmを測る正方形を呈する。主軸方向はN―7°―Wを示す。確認面からの壁高は最大で55cmを測る。床面には、中央部を中心に薄く貼床を施していた。

主柱穴は四箇所で確認されており、それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が48×66、Ｐ２が60×66、Ｐ３が42×66、Ｐ４が39×72を測る。他にＰ３とＰ４の中間から径35cm・深さ45cmを測るピットが確認されている。掘り方調査時に、住居西側を中心に壁溝と間仕切り溝が良好に確認された。床面からの深さは壁溝が８～21cmで凹凸が目立つ。間仕切り溝は、北東隅付近の２条が20cm、南西隅付近の２条が10cmを測る。



（498号住居跡）

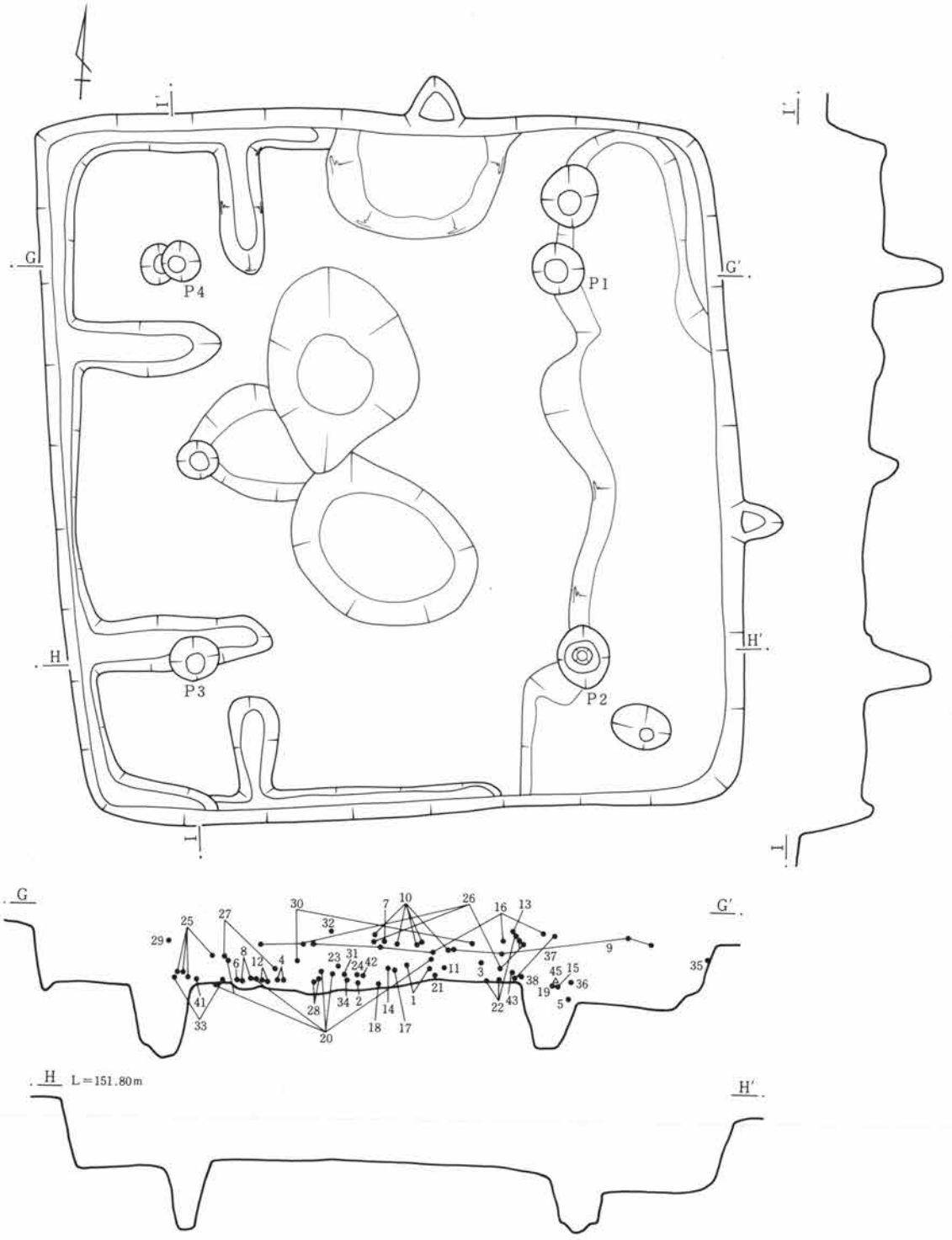
①暗褐色土層　ローム細粒を多く含む。
②暗褐色土層　炭化物・ローム細粒を含む。
③暗褐色土層　ロームブロックを含む。
④暗黄褐色土層　ロームブロック・炭化物を含む。
⑤暗褐色土層　ロームブロック・焼土粒・灰を含む。
⑥黄褐色土層　ロームを主体とし、締まっている。

0　2m

第87図　498号住居跡実測図(1)

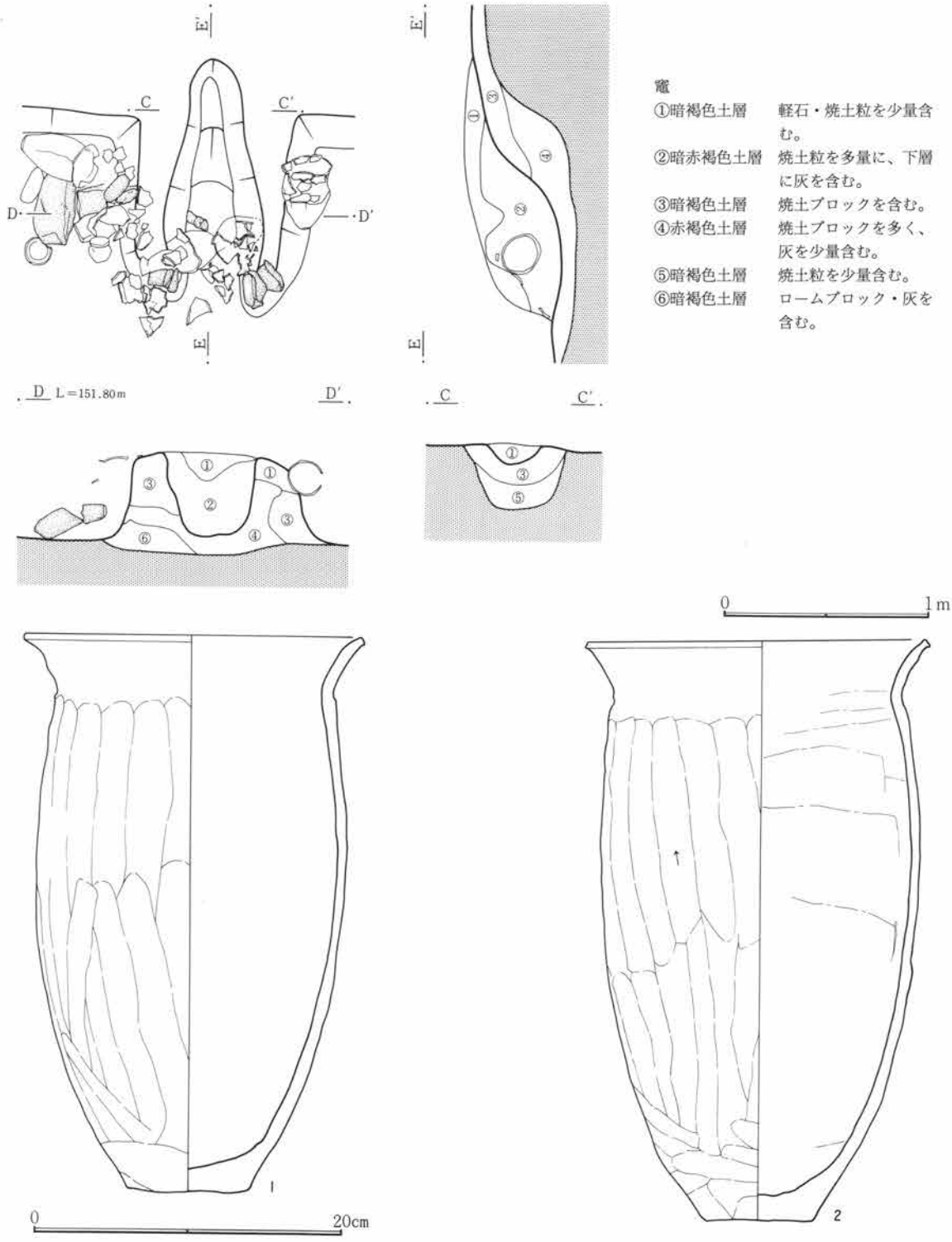
竈は北壁中央やや東寄りにあり、幅40cm・奥行き123cm・深さ39cmを測る。両袖石が遺存する他、左袖寄りに支脚が倒れた状態で認められた。東壁にも竈の痕跡が認められた。新旧関係は東竈→北竈であると思われる。

貯蔵穴は北東隅にあり、径57×54cm・深さ93cmを測る円形を呈する。東竈に伴う貯蔵穴は南東隅にあり、径54×40cm・深さ98cmを測る。

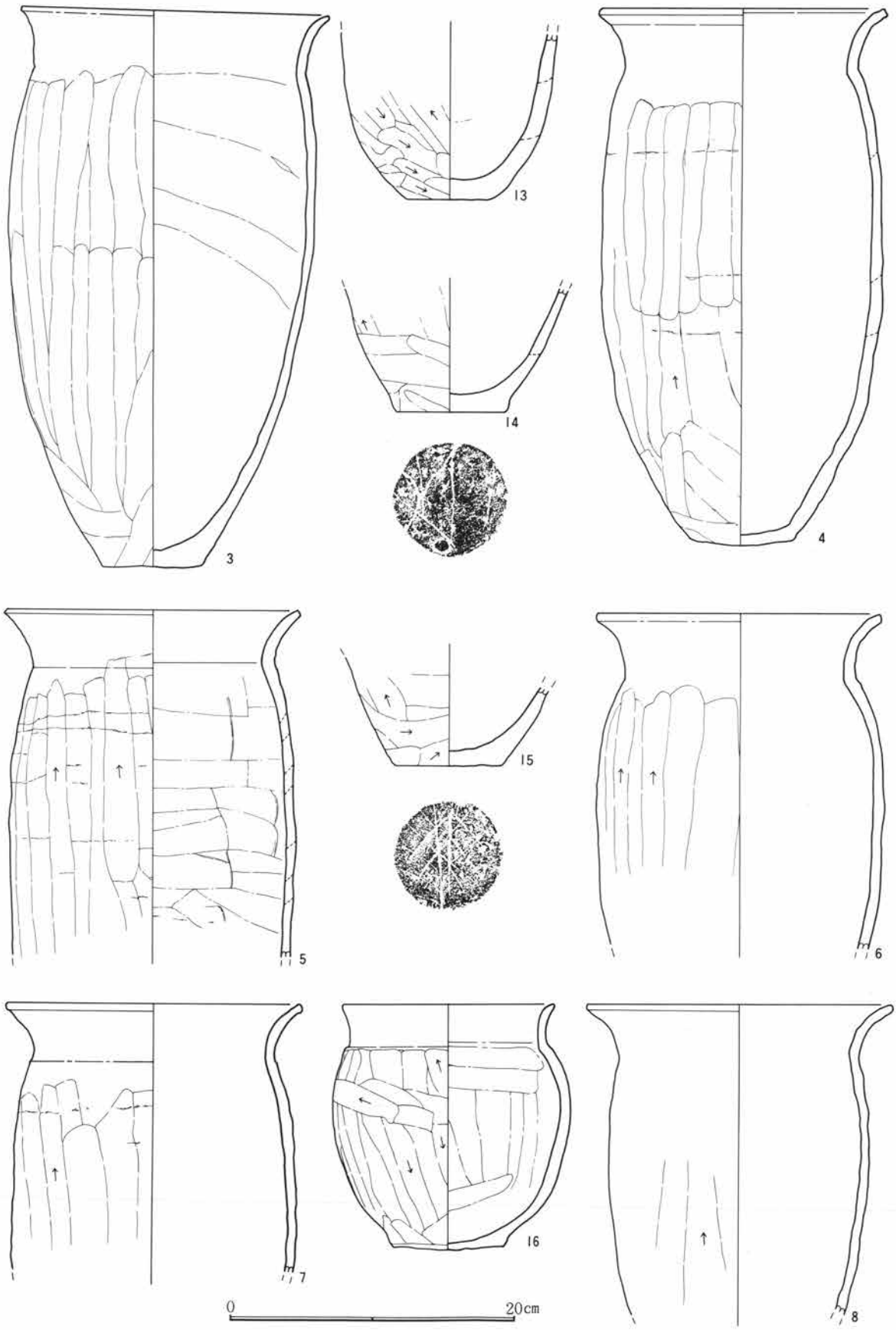


第88図　498号住居跡実測図(2)

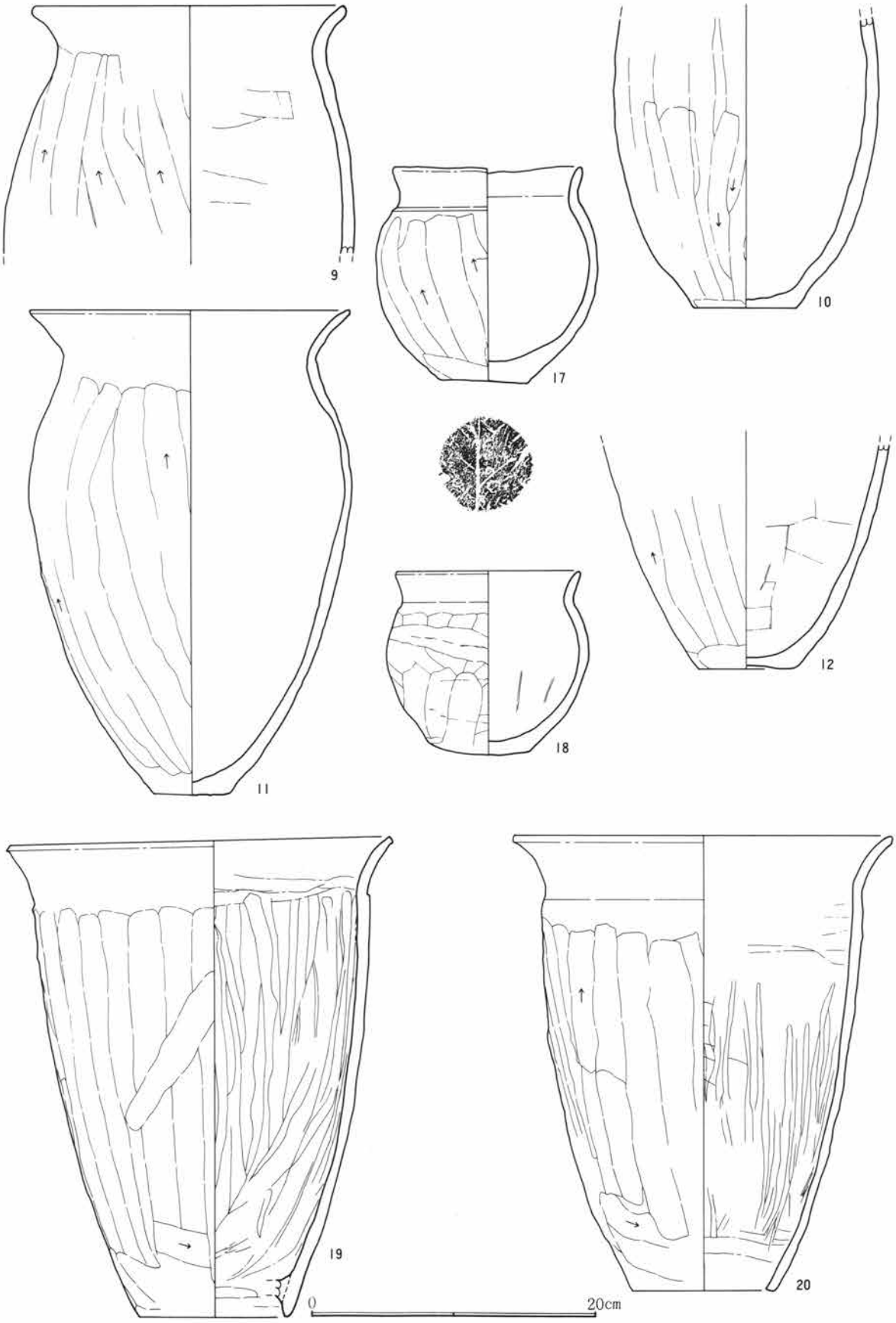
遺物は、竈周辺と南西隅付近を中心に多量に出土し、種類も豊富である。竈内からは、左側に甕１、右側に甕11が傾いた状態で出土した。特殊な遺物としては匙41・42がある。土器以外には、石製紡錘車と臼玉が各１点出土している。他に、薦編石状の絹雲母石墨片岩13個、緑簾緑泥片岩・点紋緑泥片岩各２個、安山岩・硬砂岩・点紋緑簾緑泥片石岩各１個（計16.6kg）が検出されている。（関口功）



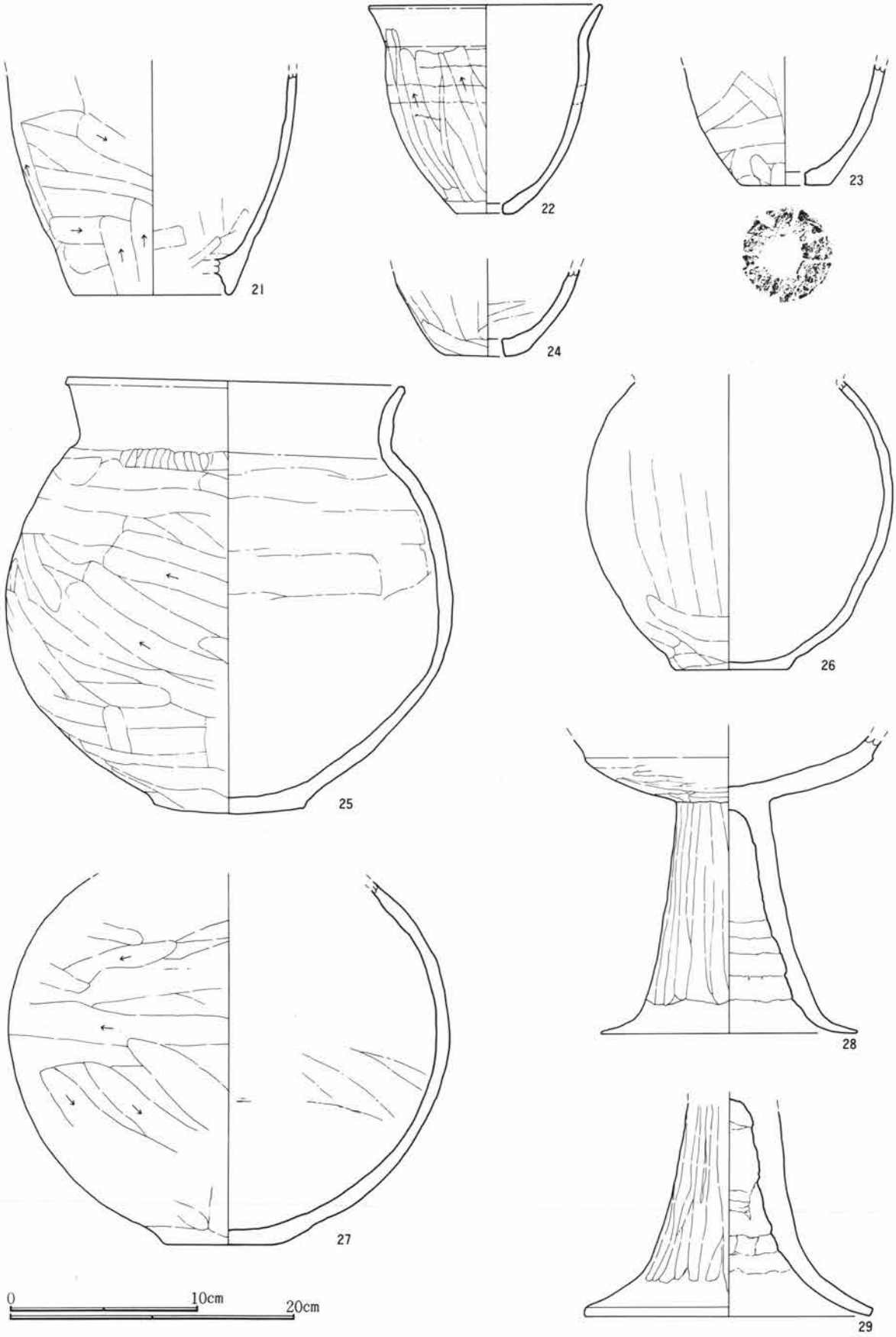
第89図　498号住居跡実測図(3)及び出土遺物実測図(1)



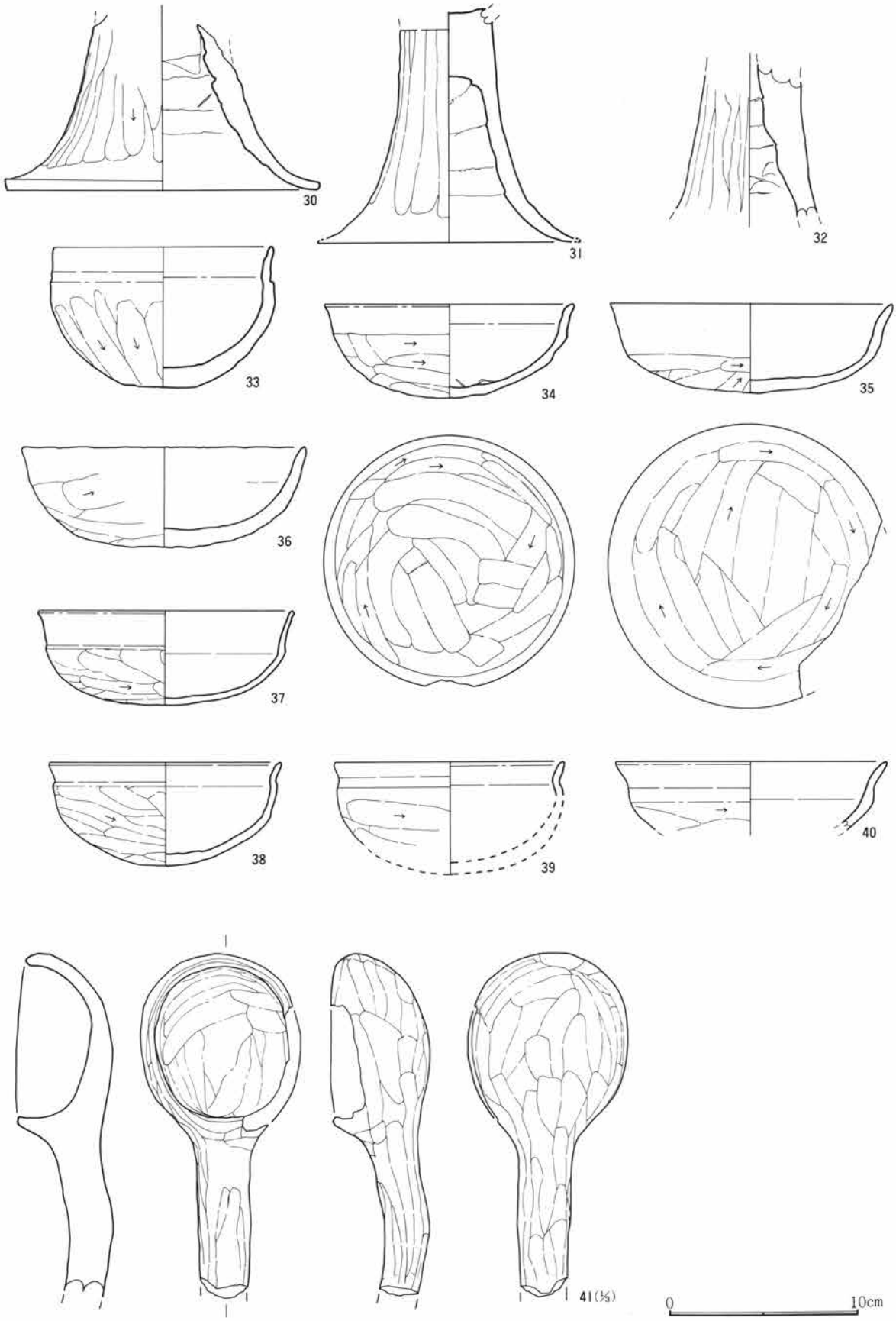
第90図　498号住居跡出土遺物実測図(2)



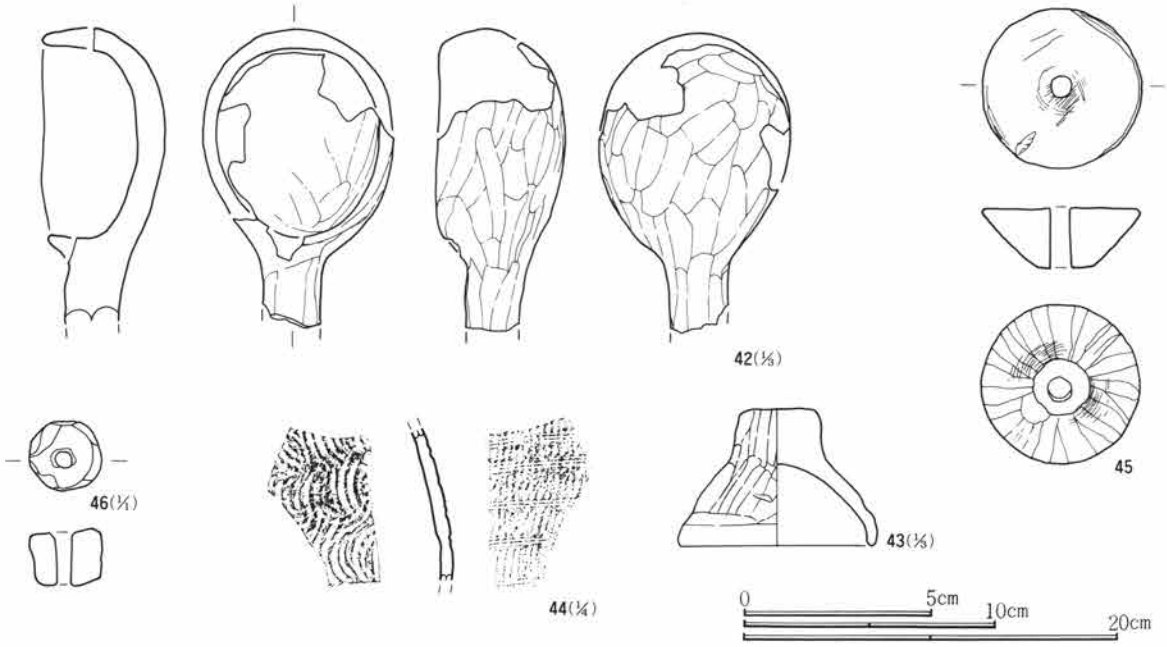
第91図　498号住居跡出土遺物実測図(3)



第92図　498号住居跡出土遺物実測図(4)



第93図　498号住居跡出土遺物実測図(5)



第94図　498号住居跡出土遺物実測図(6)

第34表　498号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
89－1 44	土師器 甕	竈内＋11 ほぼ完形	口 21.6 高 36.2 底 7.8	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
89－2 44	土師器 甕	床面＋14 ほぼ完形	口 21.6 高 37.2 底 6.9	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
90－3 45	土師器 甕	床面＋18 ¾残存	口 21.1 高 38.5 底 6.6	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラケズリ。	
90－4	土師器 甕	床面＋2 ½残存	口 (19.6) 高 37.0 底 7.3	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
90－5	土師器 甕	貯蔵穴内 －15 ½残存	口 10.3 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
90－6	土師器 甕	床面－2 ¼残存	口 (20.0) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
90－7	土師器 甕	床面＋36 ¼残存	口 20.4 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
90－8	土師器 甕	床面－2 破片	口 (21.0) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
91－9	土師器 甕	床面＋26 破片	口 21.4 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
91－10	土師器 甕	床面＋29 破片	口 — 高 — 底 7.0	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄橙色	外面　胴部下半縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
91－11	土師器 甕	竈内＋13 ¾残存	口 (22.5) 高 33.5 底 5.4	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
91—12	土師器 甕	床面－2 破片	口　— 高　— 底　6.5	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄橙色	外面　胴部下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
90—13	土師器 甕	床面＋44 破片	口　— 高　— 底　6.1	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　胴部下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
90—14	土師器 甕	床面＋10 破片	口　— 高　— 底　7.4	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　胴部下半ヘラケズリ。 内面　ナデ。	底部に木葉痕あり
90—15	土師器 甕	床面－3 破片	口　— 高　— 底　7.4	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　胴部下半ヘラケズリ。 内面　ナデ。	底部に木葉痕あり
90—16 45	土師器 甕	床面＋25 ⅔残存	口　14.8 高　17.0 底　7.6	①普、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
91—17 45	土師器 小型甕	床面＋9 ¾残存	口　13.0 高　15.0 底　6.2	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	底部に木葉痕あり
91—18 45	土師器 小型甕	床面－4 完形	口　12.8 高　12.7 底　6.7	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
91—19 45	土師器 甑	床面－5 ほぼ完形	口　26.6 高　33.3 底　10.4	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ後、ミガキ。	桟状作り出し欠損
91—20 45	土師器 甑	床面－2 ¾残存	口　26.4 高　31.6 底　10.0	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ後、ヘラミガキ。	
92—21	土師器 甑	床面＋5 破片	口　— 高　— 底　(10.9)	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	桟状作り出し欠損
92—22 45	土師器 小型甑	床面直上 ¾残存	口　16.3 高　14.3 底　4.0	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半横ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
92—23	土師器 甑	床面＋11 破片	口　— 高　— 底　6.2	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	一部被熱による風化
92—24	土師器 甑	床面＋4 破片	口　— 高　— 底　5.0	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
92—25 45	土師器 甕	床面直上 ⅔残存	口　23.1 高　30.1 底　10.4	②粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	外面胴部に煤多量に付着
92—26	土師器 甕	床面＋11 破片	口　— 高　— 底　(7.8)	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
92—27	土師器 甕	床面＋7 破片	口　— 高　— 底　9.0	①粗、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
92—28 46	土師器 高坏	床面－3 ⅓残存	口　— 高　— 底　—	①普、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　坏体～脚部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
92—29 46	土師器 高坏	床面＋34 破片	口　— 高　— 底　14.7	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　脚部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
93—30 46	土師器 高坏	床面＋16 脚部破片	口　— 高　— 底　16.2	①普、雲母・白色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　脚部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
93—31 46	土師器 高坏	床面直上 脚部破片	口　— 高　— 底　(13.7)	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　脚部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
93—32 46	土師器 高　坏	床面＋43 脚部破片	口　— 高　— 底　—	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　脚部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
93—33 46	土師器 坏　？	床面－2 ¾残存	口　11.4 高　7.2 底　4.1	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
93—34 46	土師器 坏	床面直上 完形	口　12.9 高　4.9 底　丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内面底部にヘラ圧痕
93—35 46	土師器 坏	床面＋23 ほぼ完形	口　14.8 高　4.6 底　丸底	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
93—36 46	土師器 坏	床面直上 ¾残存	口　14.6 高　5.2 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	被熱による風化が著しい
93—37 46	土師器 坏	床面＋4 ¾残存	口　13.2 高　4.9 底　丸底	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③明黄褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
93—38 46	土師器 坏	床面＋4 ½残存	口　(12.0) 高　5.4 底　丸底	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
93—39 46	土師器 坏	覆土 ¼残存	口　(12.0) 高　— 底　—	①普、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③明黄褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
93—40 46	土師器 坏	覆土 破片	口　(14.1) 高　— 底　—	①粗、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
93—41 46	土師器 匙　？	床面－2 破片	長　(17.7) 幅　(8.1) 高　5.1	①粗、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　ヘラケズリ。 内面　指ナデ。	
94—42 46	土師器 匙　？	床面＋4 破片	長　(11.7) 幅　(7.6) 高　5.1	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　ヘラケズリ。 内面　指ナデ。	
94—43 46	土師器 ？	床面＋7 ½残存	口　7.8 高　5.4 底　3.0	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い浅黄色	外面　ヘラケズリか。 内面　ナデ。	外面上部に煤付着
94—44	須恵器 大　甕	覆土 胴小破片	口　— 高　— 底　—	①細、殆どなし ②還元焔、硬質 ③灰色	外面　平行叩き。 内面　当具痕。	
94—45 55	石製品 紡錘車	床面直上 完形	径　4.2/1.5 厚　1.6	孔径　0.6 重　30.3	側面及び広面に製作時の擦痕。広面に使用痕とみられる磨滅がわずかに認められる。	滑石片岩
94—46 55	石製品 臼　玉	覆土	径　1.0 厚　0.7	孔径　0.2 重　1.2	側面は部分的にやや斜め方向に研磨。上・下面は扁平に近づけようと調整されている。	滑石片岩

499号住居跡（第95・96図、第35表、図版23・47）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、72—32グリッドに位置する。南北方向に走る36号・42号溝が住居中央部を横断する。なかでも36号溝（奈良カ）には床面下まで掘り抜かれている。

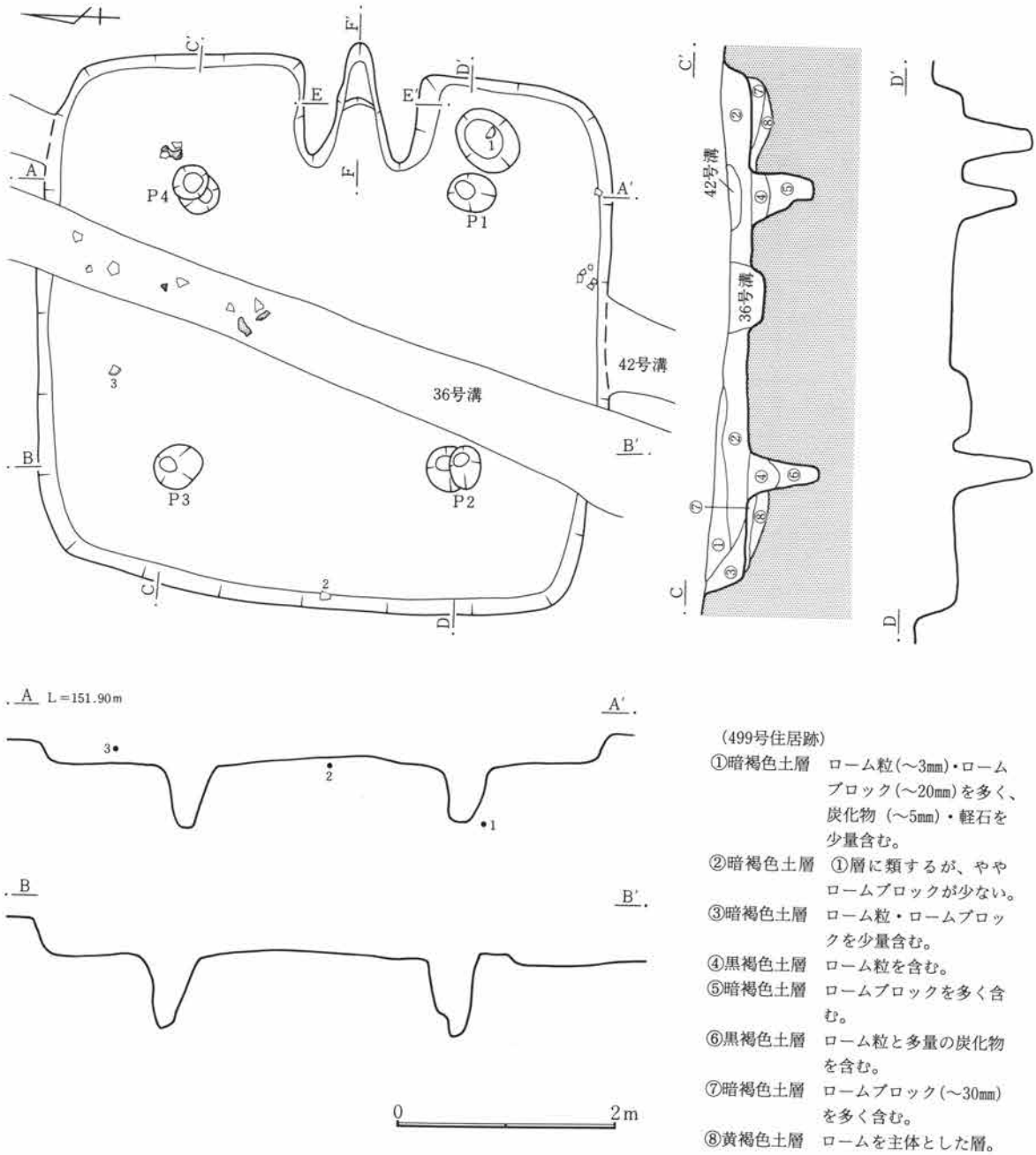
平面形は、東西４m83cm・南北は５m16cmを測る。主軸方向はN—94°—Eを示す。確認面からの壁高は最大で36cmを測る。床面には、貼床を施したと思われるが、あまり明瞭ではない。床下には、図示していないが、西壁から南壁にかけて幅１m程のＬ字状を呈する浅い掘り込みが認められた。

主柱穴は、住居外形の対角線上から四箇所確認された。それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が42×48、Ｐ２が33×66、Ｐ３が45×60、Ｐ４が33×54を測る。覆土には、Ｐ４を除き、炭化物が多く含まれていた。壁溝等の付属施設は確認されていない。

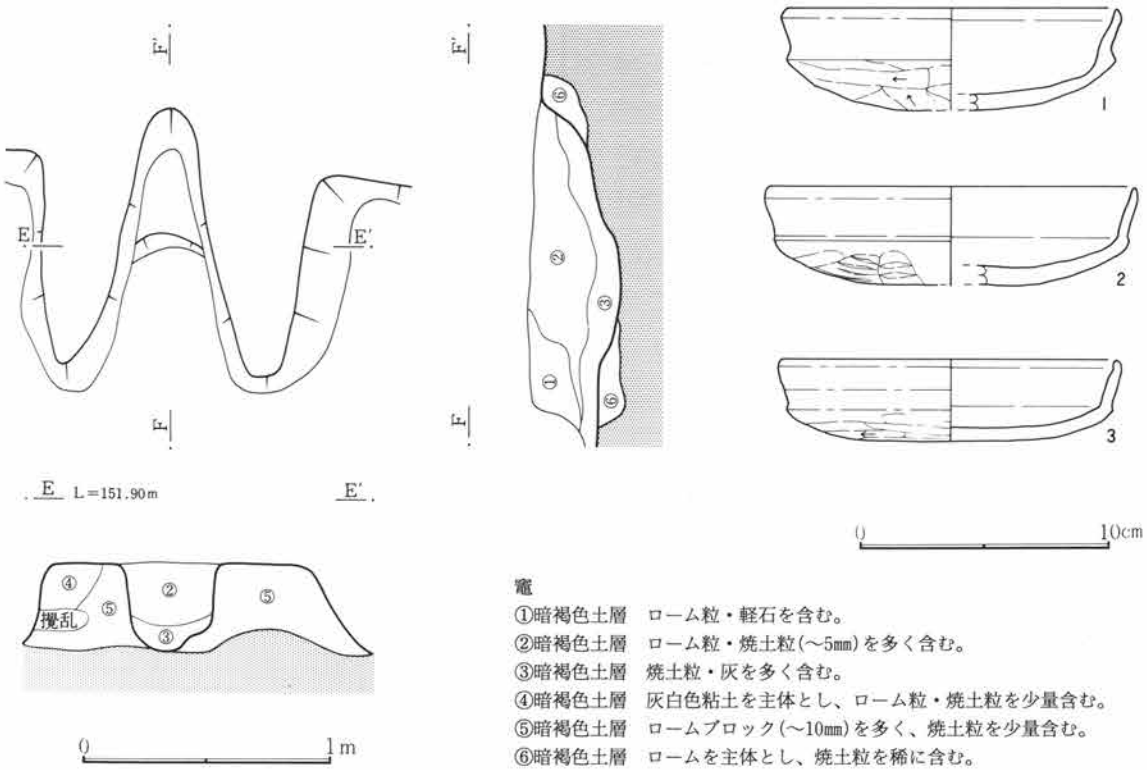
竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅35cm・奥行111cm・深さ33cmを測る。燃焼部は床面よりややくぼみ、焼土粒・灰が比較的多く残っていた。煙道部は緩やかに立ち上がる。袖部は攪乱を受けるが、粘土を芯材として、構築されたものと思われる。

貯蔵穴は、竈右脇の径63×51cm・深さ60cmを測るピットが該当すると思われる。覆土上層には、焼土粒・炭化物を含んでいた。

遺物の全体量は極めて少なく、個体の残存率も低い。図化できたのは、土師器坏の小破片３点のみである。（春山）



第95図　499号住居跡実測図(1)



竈
①暗褐色土層　ローム粒・軽石を含む。
②暗褐色土層　ローム粒・焼土粒(～5mm)を多く含む。
③暗褐色土層　焼土粒・灰を多く含む。
④暗褐色土層　灰白色粘土を主体とし、ローム粒・焼土粒を少量含む。
⑤暗褐色土層　ロームブロック(～10mm)を多く、焼土粒を少量含む。
⑥暗褐色土層　ロームを主体とし、焼土粒を稀に含む。

第96図　499号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第35表　499号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
96－1 47	土師器 坏	貯蔵穴内 ＋49 ½残存	口 (13.1) 高　－ 底　丸底	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
96－2	土師器 坏	床面直上 破片	口 (14.6) 高　－ 底　－	①普、パミス ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
96－3	土師器 坏	床面＋15 ¼残存	口 (13.4) 高　3.2 底　丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

505号住居跡（第97・98図、第36表、図版24・47・55）

本住居跡は、第８次調査区中央部の緩斜面にあり、64・65—38グリッドに位置する。重複関係としては、359号住居跡(古墳)を切って構築されるが、47号溝に南西隅を、46号溝に東壁を大きく破壊される。表土の流失と相俟って、残存状況は不良であった。

上記の理由により、東西方向は不明であるが、南北方向は５m04cmを測る。本来の形状は、東西方向を長辺とする長方形であったと思われる。主軸方向は、N—0°—Eを示す。確認面からの壁高は北西隅付近で35cmを測る。床面については、住居中央部のローム層を生活面とほぼ同じレベルで掘り残し、主柱穴と周壁の間をやや深く掘り込んだ後に、貼床を施していたものと思われる。

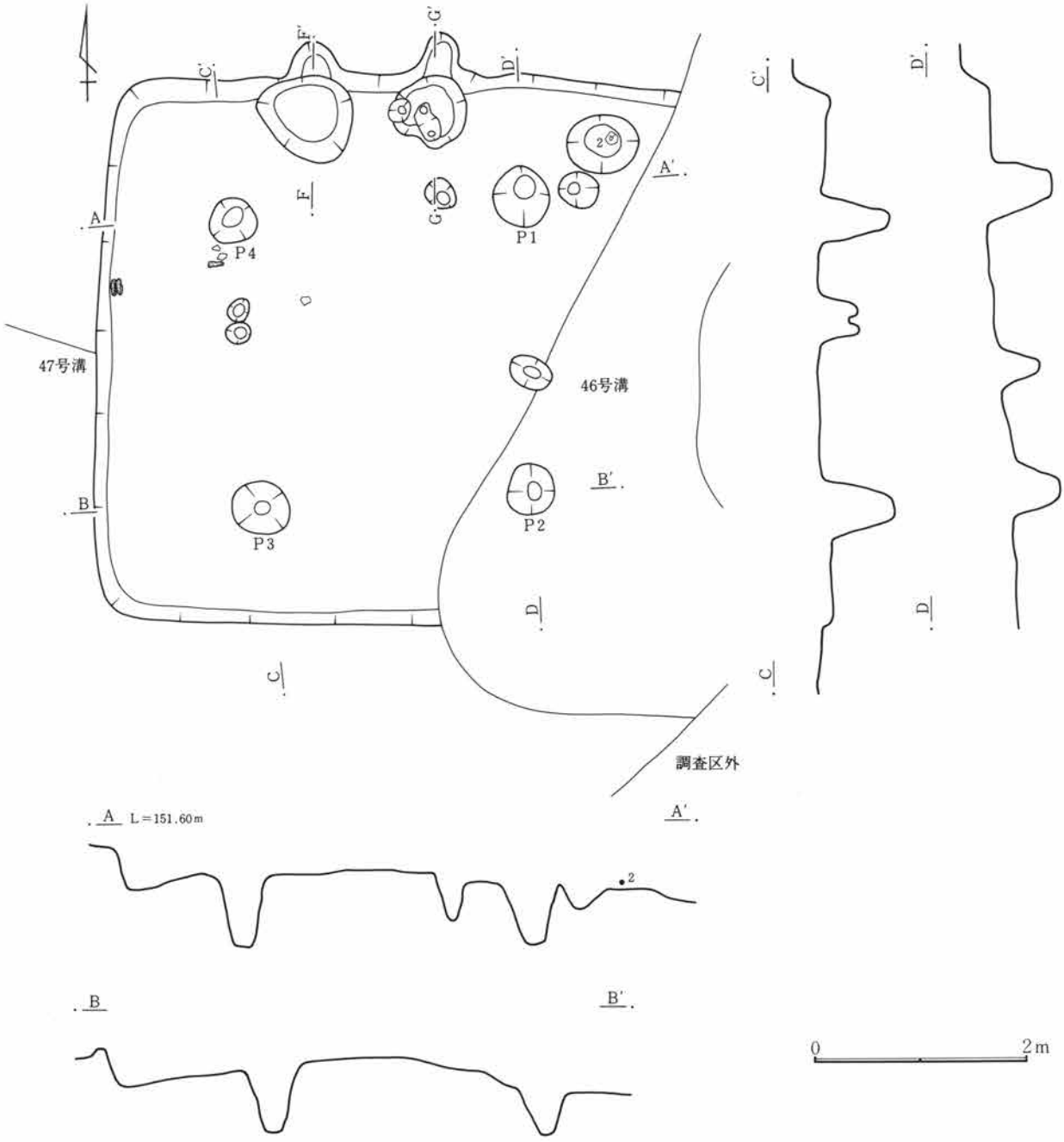
主柱穴については、四箇所で確認されており、それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が57×60、Ｐ２が48×42、Ｐ３が54×66、Ｐ４が45×66を測る。それ以外にも、柱穴状のピットが数箇所で確認されているが、

その性格・機能等については不明である。壁溝については、確認されていない。

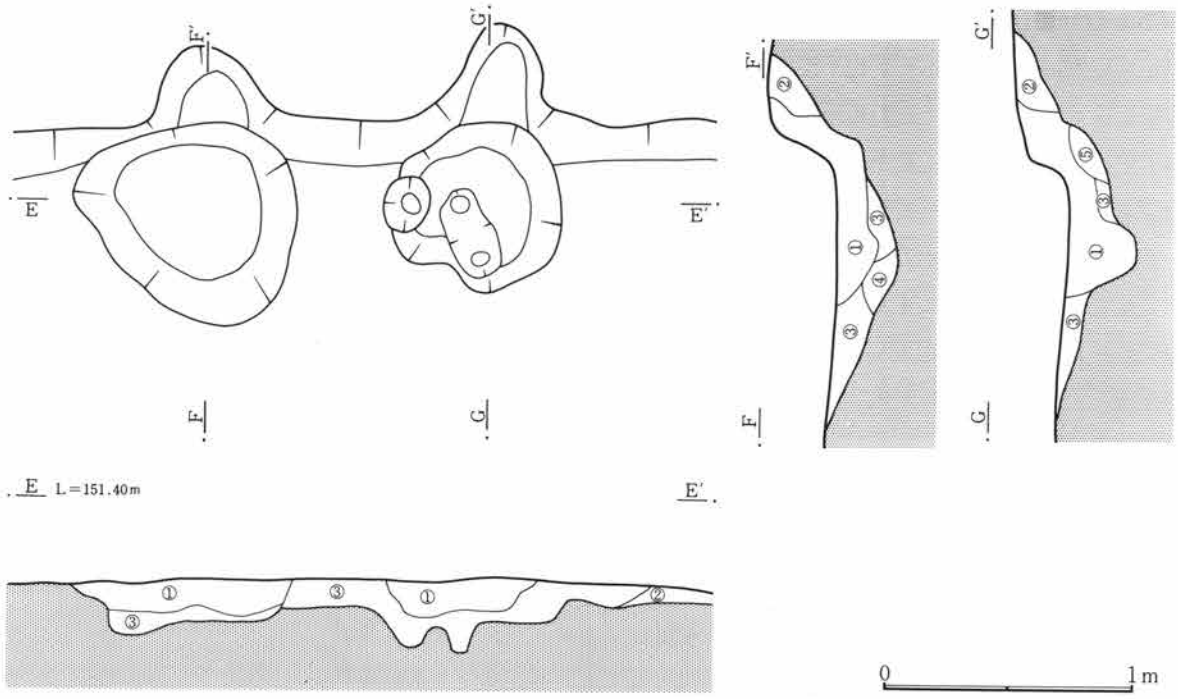
竈は北壁で二箇所確認されたが、痕跡程度であった。いずれも焼土化は充分ではなく、両袖は遺存していなかった。新旧関係については、不明とせざるを得ない。

貯蔵穴は、径66×54cm・深さ72cmを測る北東隅のピットが該当するものと思われる。

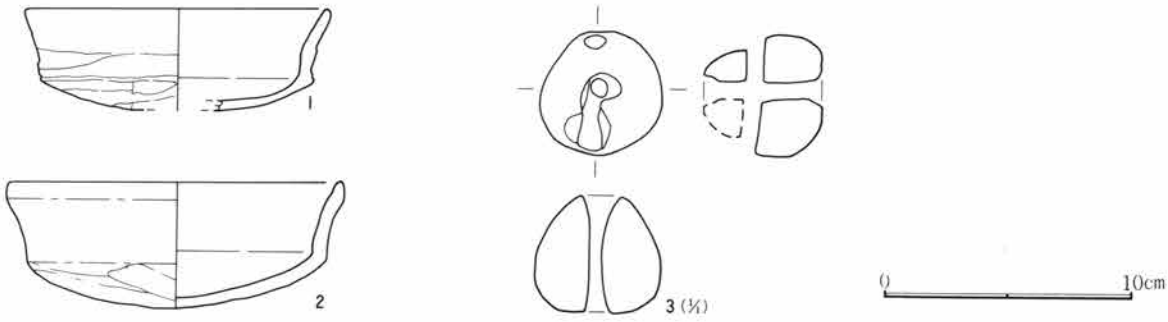
遺物は極めて少なく、種類に乏しい。土師器坏２点と土玉１点が出土している。(中沢)



第97図　505号住居跡実測図(1)



(505号住居跡) 竈
①黒褐色土層　ローム粒・ロームブロック・焼土粒を含む。
②褐色土層　ローム粒・ロームブロックを含む。
③褐色土層　②層に類するが、やや色調は暗い。
④黒褐色土層　①層に類するが、焼土粒を殆ど含まない。
⑤暗褐色土層　灰褐色に近い粘質ローム粒を多く含む。



第98図　505号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

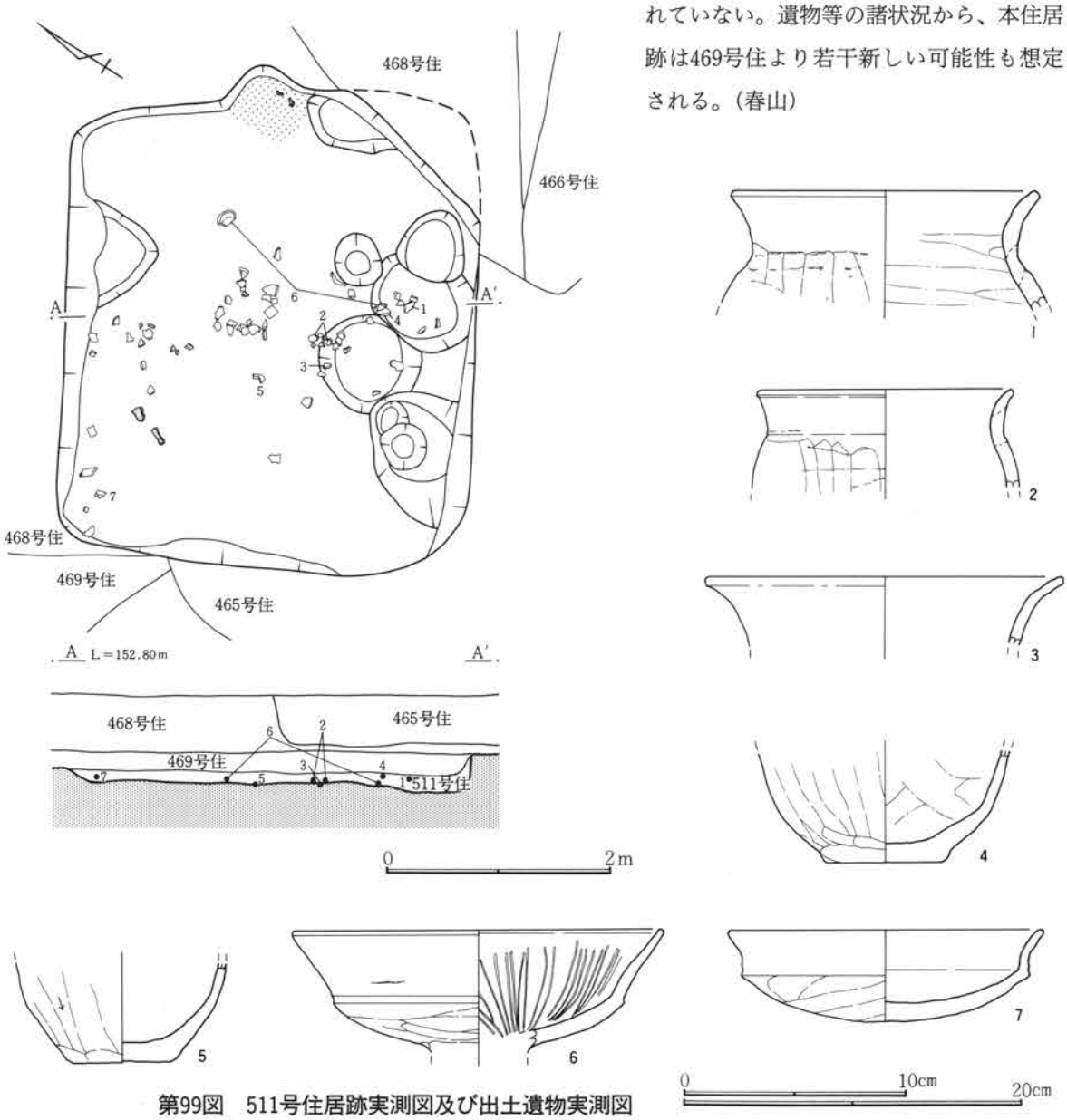
第36表　505号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
98－1 47	土師器 坏	覆土 ½残存	口 12.1 高 — 底 —	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。 内面　ナデ。	内面吸炭により黒色を呈する
98－2 47	土師器 坏	貯蔵穴内 －9 ほぼ完形	口 13.4 高 5.0 底 丸底	①普、石英・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
98－3 55	土玉	覆土 破片	径 1.6 孔径 0.2 重 3.6	①普、細砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	焼成前に二方向から穿孔。	一部欠損

511号住居跡（第99図、第37表、図版24・47）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、67・68—27・28グリッドに位置する。465号住居跡（平安）・468号住居跡（奈良）・469号住居跡（古墳）と重複するために残存状況は不良であった。（72図参照）　不確定な要素が伴うが、平面形は東西４m08cm・南北３m63cmを測る長方形を呈するものと思われる。主軸方向はN—68°—Eを示す。残存する壁高は最大で25cmを測る。床面は465号・468号住居跡に部分的に掘り抜かれていたため、明瞭には確認されなかった。

竈と思われる位置には、多量の焼土粒が分布し、掘り込みが若干認められる程度である。貯蔵穴は確認されていない。遺物等の諸状況から、本住居跡は469号住より若干新しい可能性も想定される。（春山）



第99図　511号住居跡実測図及び出土遺物実測図

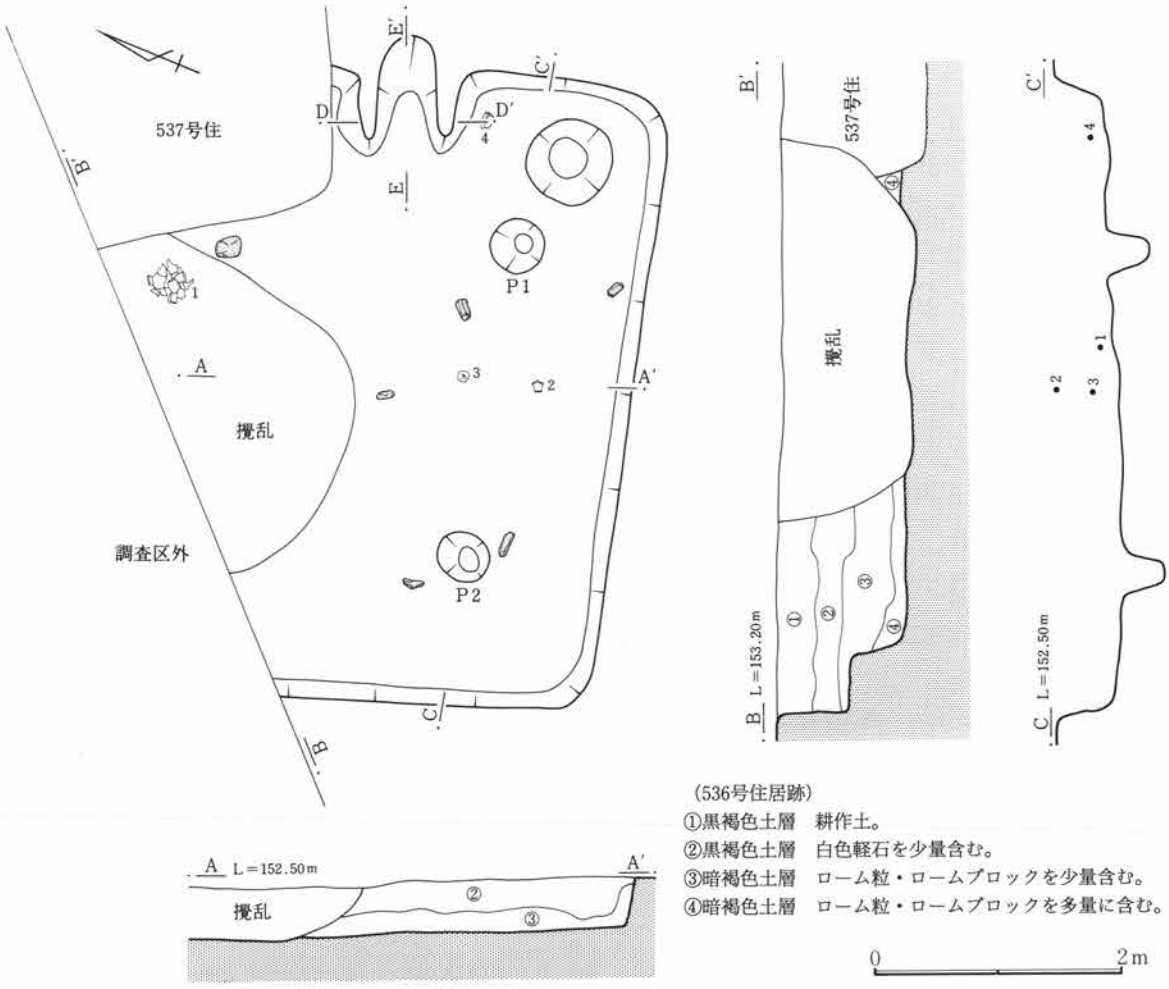
第37表　511号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
99—1 47	土師器 甕	床面＋6 破片	口 (18.0) 高　— 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
99－2 47	土師器 小型甕	床面＋4 破片	口 (15.0) 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
99－3	土師器 甕	床面直上 破片	口 (21.0) 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③浅黄橙色	内外面共に口縁部ヨコナデ。	
99－4 47	土師器 甕	床面＋8 破片	口　－ 高　－ 底　6.8	①普、白色・褐色鉱物粒 ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
99－5	土師器 甕	床面直上 破片	口　－ 高　－ 底　5.8	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　胴部下半ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
99－6 47	土師器 高　坏	床面直上 坏部½残存	口 (16.4) 高　－ 底　－	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、硬質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ後、ヘラミガキ。	
99－7 47	土師器 坏	底面＋7 ⅔残存	口 (14.0) 高　4.0 底　丸底	①普、パミス・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

536号住居跡（第100・101図、第38表、図版24・47・56）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、69・70—22グリッドに位置する。537号住居跡（奈良）に竈左脇を床面下まで掘り抜かれ、現代のものと思われる攪乱を受ける。



第100図　536号住居跡実測図(1)

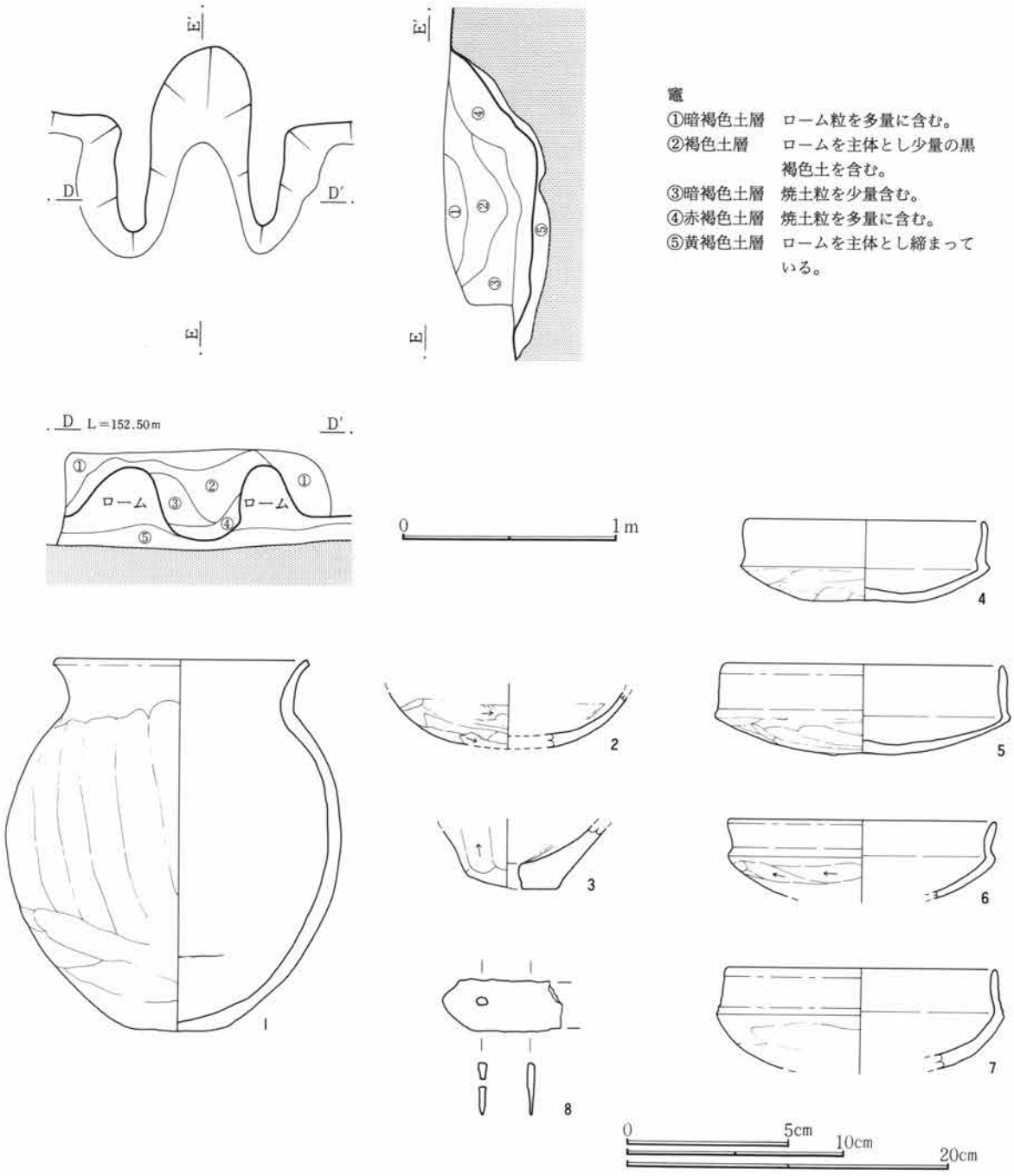
調査区外にかかるため、南北方向は不明であるが、東西方向は5m07cmを測る。主軸方向はN－76°－Eを示す。確認面からの壁高は最大で41cmを測る。基本的に掘り方はなく、黄褐色ローム（地山）を叩き締めて床面としていたと思われる。

主柱穴は二箇所で確認され、規模（径×深さcm）は、P1が45×36、P2が42×45を測る。

竈は東壁にあり、幅36cm・奥行96cm・深さ39cmを測る。

貯蔵穴は、径66×66cm・深さ59cmを測る円形を呈する。

遺物は少なく、種類に乏しい。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩3個、絹雲母片岩1個（計2.8kg）が検出されている。（中沢）



第101図　536号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第38表　536号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
101－1 47	土師器 甕	床面直上 ¾残存	口 (15.4) 高 22.8 底 5.5	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
101－2 47	土師器 甕	床面＋37 破片	口 — 高 — 底 丸底	①普、黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③明黄褐色	外面　ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
101－3 47	土師器 甑	床面＋7 破片	口 — 高 — 底 5.5	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③橙色	外面　ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
101－4 47	土師器 坏	床面＋7 ½残存	口 (11.0) 高 3.8 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内外面共に黒漆付着カ
101－5 47	土師器 坏	覆土 ⅓残存	口 (12.8) 高 4.2 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内外面共に黒漆付着カ
101－6	土師器 坏	覆土 破片	口 (12.4) 高 — 底 —	①普、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内外面共に黒漆付着カ
101－7	土師器 坏	覆土 破片	口 (12.4) 高 — 底 —	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内面吸炭により黒色を呈する
101－8 56	鉄製品 ？	覆土	長 (3.6)　幅 1.6 厚 0.2　重 2.1			手鎌カ

540号住居跡（第102・103図、第39表、図版24・25・47・55）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、77・78—30・31グリッドに単独で位置する。今回報告する住居跡としては最大規模である。東側に541号住居跡（縄文）が隣接する。

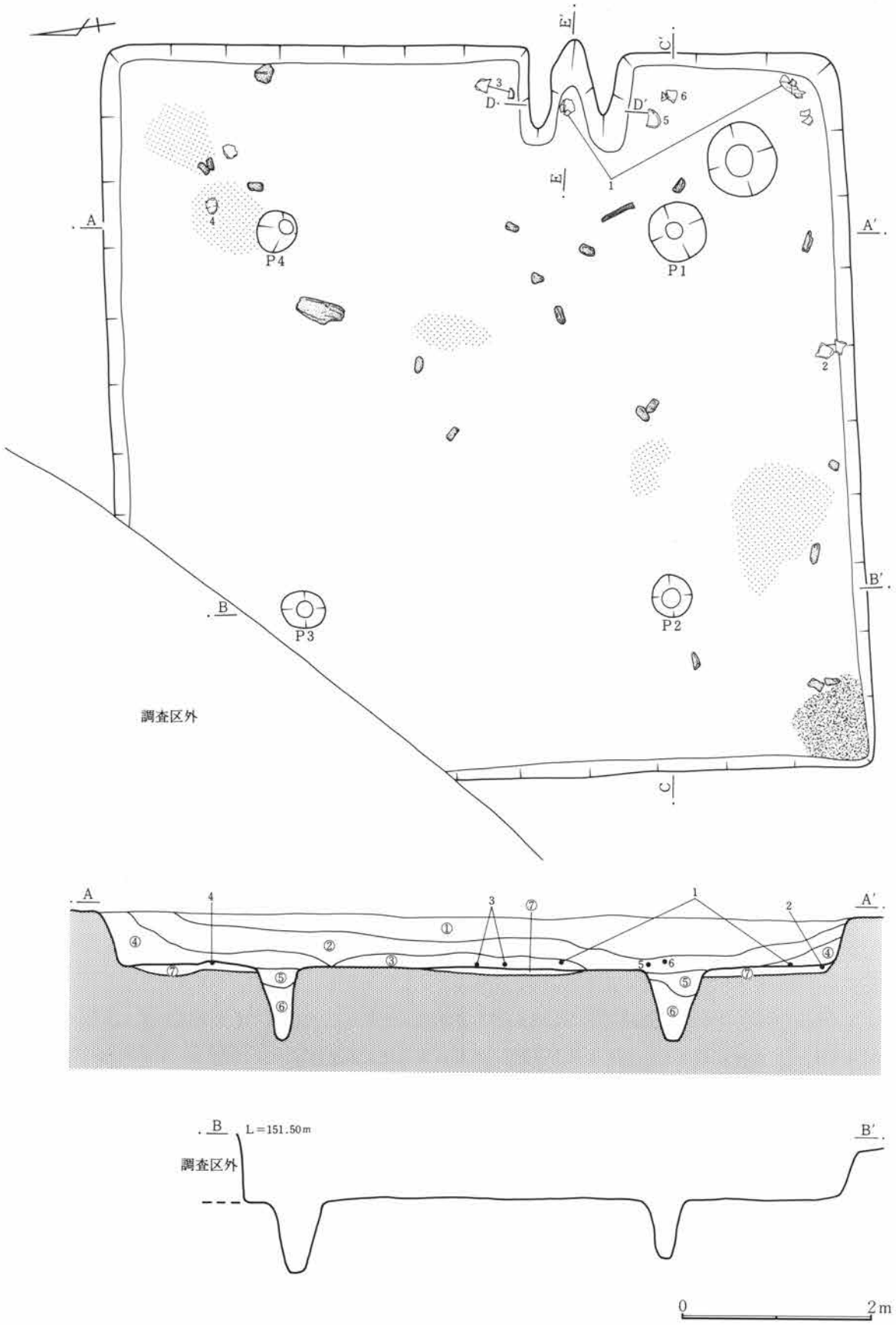
一部調査区外にかかるが、平面形は東西７m59cm・南北７m80cmを測る正方形を呈していたものと思われる。主軸方向はN—102°—Eを示す。確認面からの壁高は最大で62cmを測る。基本的に掘り方はなく、黄褐色ローム（地山）を叩き締めて床面としていたと思われる。床面には、炭化物を多量に含む焼土粒の散布が一直線上に並んで認められる他、Ｐ１付近からは炭化材も出土している。以上のことから本住居跡は、消失家屋の可能性もあるものと思われる。また、南西隅からは厚さ12cm程の粘土塊が一箇所出土している。混入物の殆ど認められない灰白色粘土であった。

主柱穴は、四箇所で明瞭に確認された。それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が60×72、Ｐ２が45×60、Ｐ３が45×72、Ｐ４が45×72を測る。柱穴間の寸法は、Ｐ１～Ｐ２が379cm、Ｐ２～Ｐ３が378cm、Ｐ３～Ｐ４が396cm、Ｐ４～Ｐ１が406cmを測る。なお、壁溝等の付属施設については検出されていない。

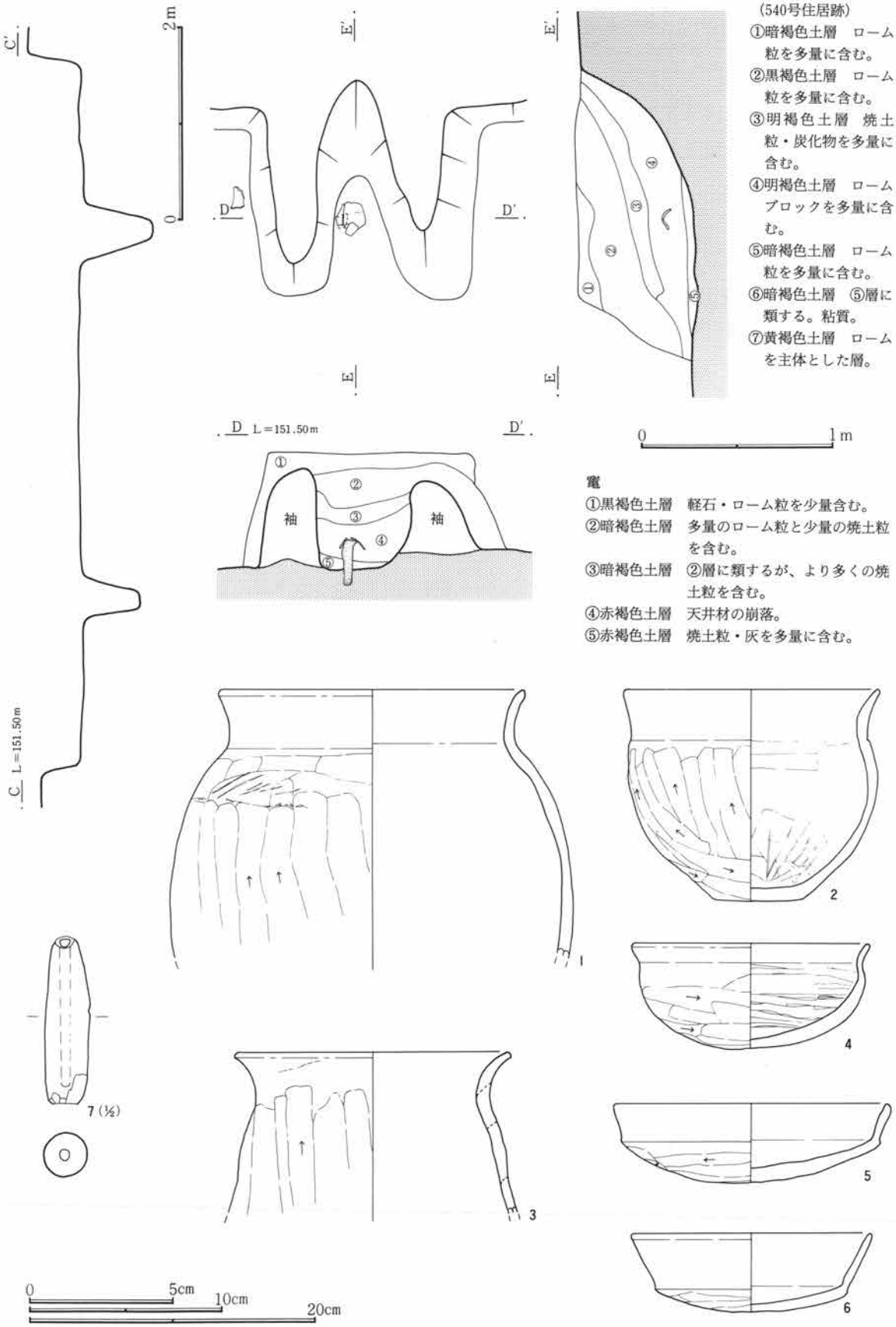
竈は東壁の南寄りにあり、幅48cm・奥行111cm・深さ60cmを測る。燃焼部には、据えられた状態で支脚が遺存していた。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径75×72cm・深さ90cmを測る円形を呈する。

遺物は竈周辺を中心に分布する。全体量は少ないが、床面に近い位置で出土しているものが大部分である。球胴形の甕１は、胴上部破片が支脚の上から、口縁部が南東隅から出土した。覆土中ではあるが、土錘７も認められる。他に、薦編石状の絹雲母石墨片岩９個、点紋絹雲母石墨片岩・緑簾緑泥片岩各１個が検出されている。（春山）



第102図　540号住居跡実測図(1)



(540号住居跡)
①暗褐色土層　ローム粒を多量に含む。
②黒褐色土層　ローム粒を多量に含む。
③明褐色土層　焼土粒・炭化物を多量に含む。
④明褐色土層　ロームブロックを多量に含む。
⑤暗褐色土層　ローム粒を多量に含む。
⑥暗褐色土層　⑤層に類する。粘質。
⑦黄褐色土層　ロームを主体とした層。

竈
①黒褐色土層　軽石・ローム粒を少量含む。
②暗褐色土層　多量のローム粒と少量の焼土粒を含む。
③暗褐色土層　②層に類するが、より多くの焼土粒を含む。
④赤褐色土層　天井材の崩落。
⑤赤褐色土層　焼土粒・灰を多量に含む。

第103図　540号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第39表　540号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
103－1 47	土師器 甕	床面＋5 破片	口　21.1 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、硬質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
103－2 47	土師器 小型甕	床面＋4 ½残存	口　17.6 高　14.7 底　6.2	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ後、ヘラミガキ。	
103－3 47	土師器 甕	床面直上 破片	口　(19.4) 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
103－4 47	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口　12.2 高　5.4 底　丸底	①普、黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ後、ミガキ。	
103－5 47	土師器 坏	床面＋4 ⅔残存	口　14.2 高　4.1 底　丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
103－6 47	土師器 坏	床面＋7 ½残存	口　12.4 高　4.0 底　丸底	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
103－7 55	土錘	覆土 ほぼ完形	長　5.7　径　1.5 孔径　0.4 重　13.8	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	棒状工具巻き付け。	未製品

553号住居跡（第104・105図、第40表、図版25・48）

本住居跡は、第7次調査区中央部の平坦面にあり、70・71—24グリッドに位置する。554号住居跡（平安）が北東隅をかすめ、552号住居跡（奈良）・551号住居跡（奈良）がそれぞれ北東隅・東壁を中心に破壊する。調査区外に隣接するため、詳細は不明であるが、周囲には奈良時代に属するものと思われる住居跡が比較的多く分布する。

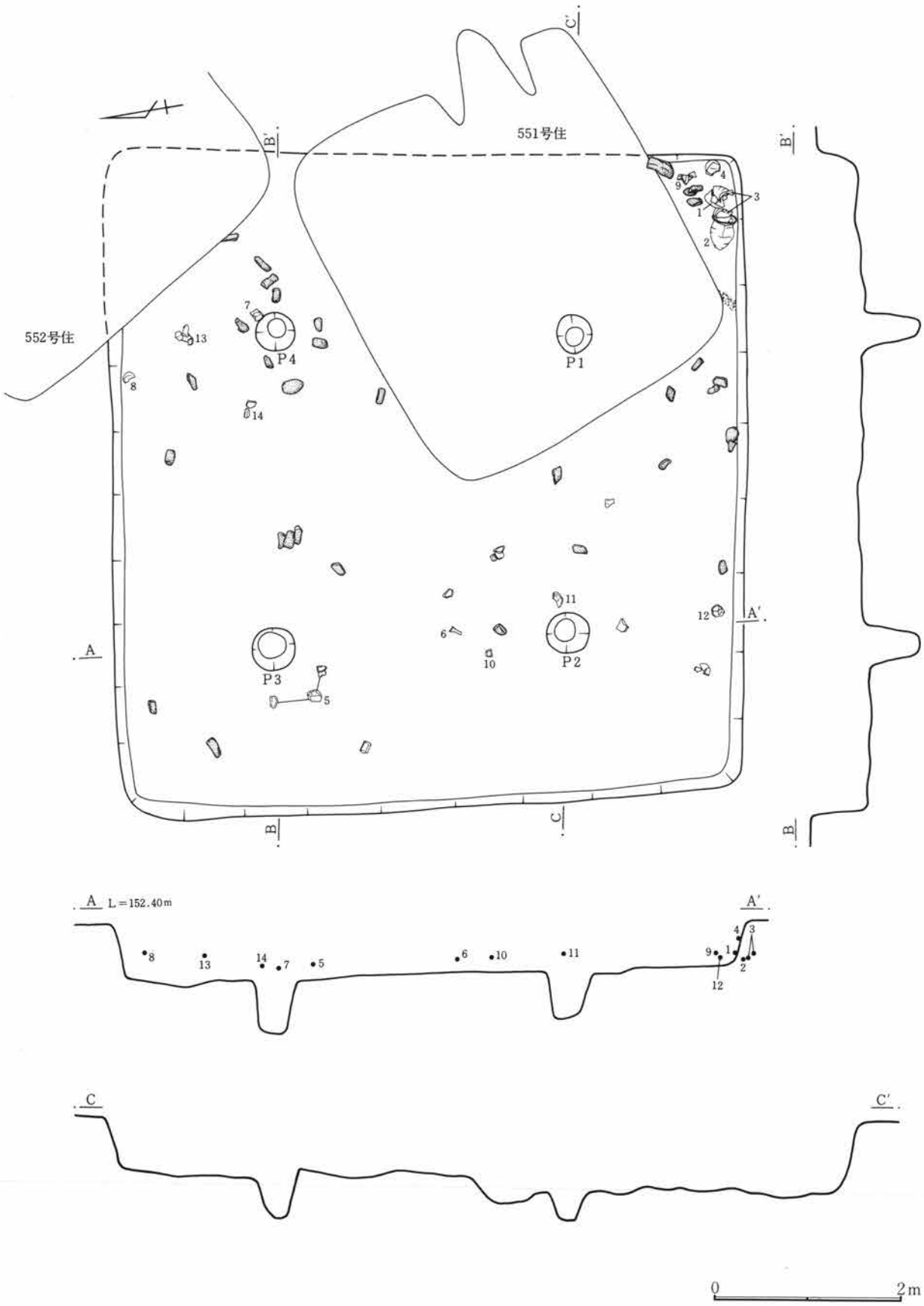
平面形は僅かに残る東壁から東西6m90cm・南北6m69cmを測る正方形を呈するものと思われる。主軸方向はN—100°—Eを示す。確認面からの壁高は最大で55cmを測る。基本的には、黄褐色ローム（地山）を直接叩き締めて床面としていたと思われる。北壁周辺に比べ、南壁周辺のレベルがやや高い。また、北東隅付近に粘土の分布が認められるが、詳細は不明である。

主柱穴は四箇所で確認されており、それぞれの規模（径×深さcm）は、P1が39×57、P2が45×54、P3が45×69、P4が42×72を測る。柱穴間の寸法は、P1～P2が310cm、P2～P3が312cm、P3～P4が336cm、P4～P1が315cmを測る。壁溝等の付属施設については、検出されていない。

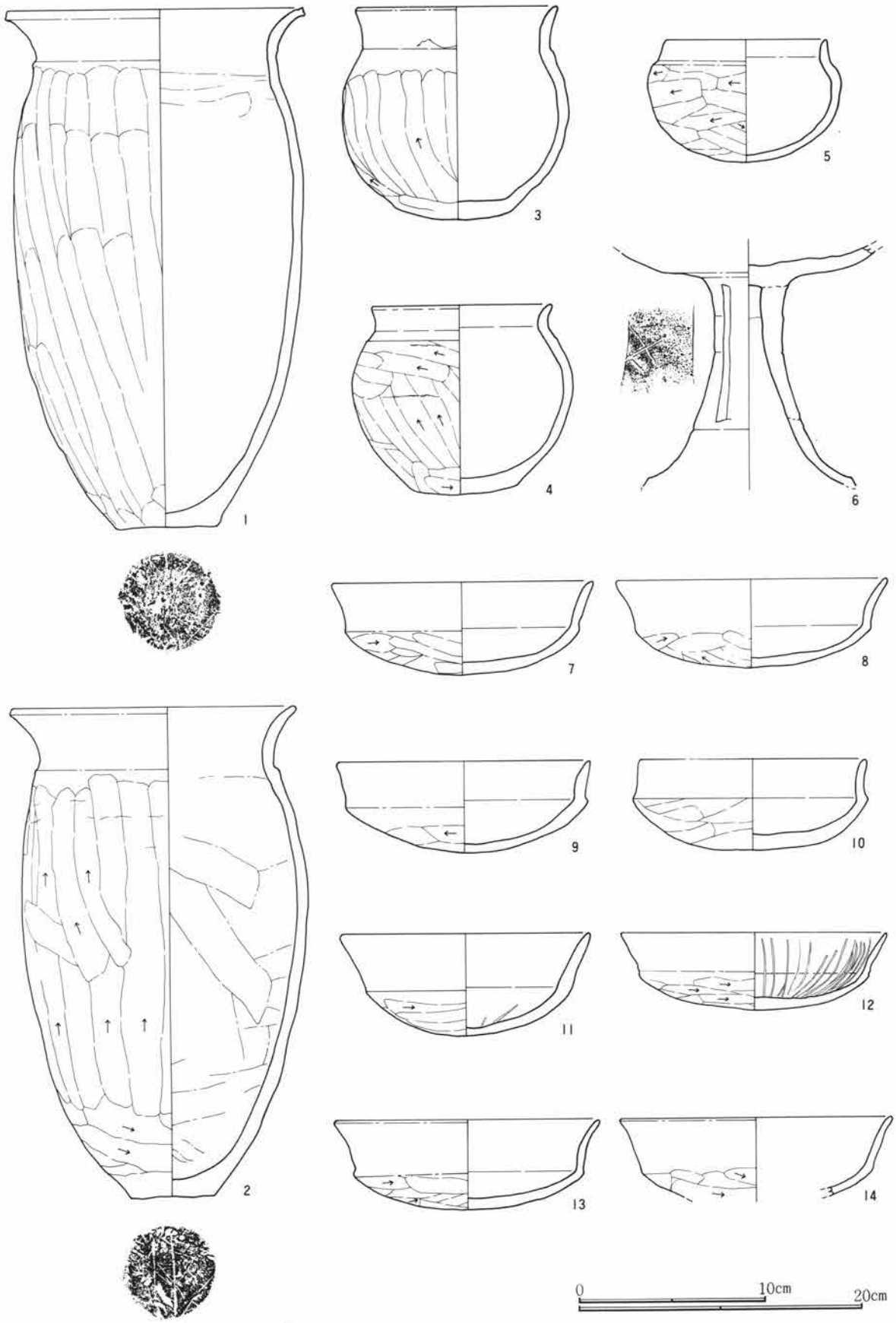
竈は東壁にあったと思われるが、破壊を受け現存しない。用材と思われる石材が、南東隅付近から出土している程度で痕跡すら留めていない。

貯蔵穴は南東隅付近にあったと思われるが、確認されなかった。

遺物は南東隅を中心に分布するが、全体量はやや少ない。そうした中では、須恵器高坏6の出土は、本遺跡全体からみても少なく、注目される。他に、薦編石状の絹雲母石墨片岩5個、緑簾緑泥片岩2個、点紋絹雲母石墨片岩・点紋緑簾緑泥片岩・輝緑岩各1個（計9.5kg）が検出されている。（関口功）



第104図　553号住居跡実測図



第105図　553号住居跡出土遺物実測図

第40表　553号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
105－1 48	土師器 甕	床面＋2 完形	口 20.8 高 36.0 底 6.9	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	底部に木葉痕あり 粘土多量に付着
105－2 48	土師器 甕	床面＋8 ¾残存	口 19.8 高 35.2 底 6.1	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ	底部に木葉痕あり
105－3 48	土師器 小型甕	床面＋8 ⅔残存	口 14.3 高 14.6 底 8.3	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
105－4 48	土師器 小型甕	床面＋29 ½残存	口 (12.7) 高 13.1 底 7.0	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
105－5 48	土師器 短頸壺	床面直上 ¾残存	口 11.3 高 8.4 底 丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
105－6 48	須恵器 高　坏	床面＋7 ⅓残存	口 — 高 — 底 —	①細、白色鉱物粒 ②還元焔、硬質 ③褐灰色	ロクロ成形。	脚部三面に一段の透しありカヘラ書あり
105－7 48	土師器 坏	床面直上 ¾残存	口 13.7 高 4.8 底 丸底	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
105－8 48	土師器 坏	床面＋13 ¾残存	口 14.2 高 4.5 底 丸底	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
105－9 48	土師器 坏	床面直上 ¾残存	口 13.4 高 4.7 底 丸底	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③灰黄褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
105－10 48	土師器 坏	床面＋10 ⅔残存	口 12.0 高 4.7 底 丸底	①普、パミス・砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
105－11 48	土師器 坏	床面＋12 ¾残存	口 13.2 高 5.3 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
105－12	土師器 坏	床面＋9 ¾残存	口 (13.9) 高 4.0 底 丸底	①普、石英粒多 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ後、ミガキ。	
105－13	土師器 坏	床面＋9 ¾残	口 14.0 高 4.7 底 丸底	①普、パミス・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
105－14	土師器 坏	床面直上 ¼残存	口 (14.2) 高 — 底 —	①普、黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	

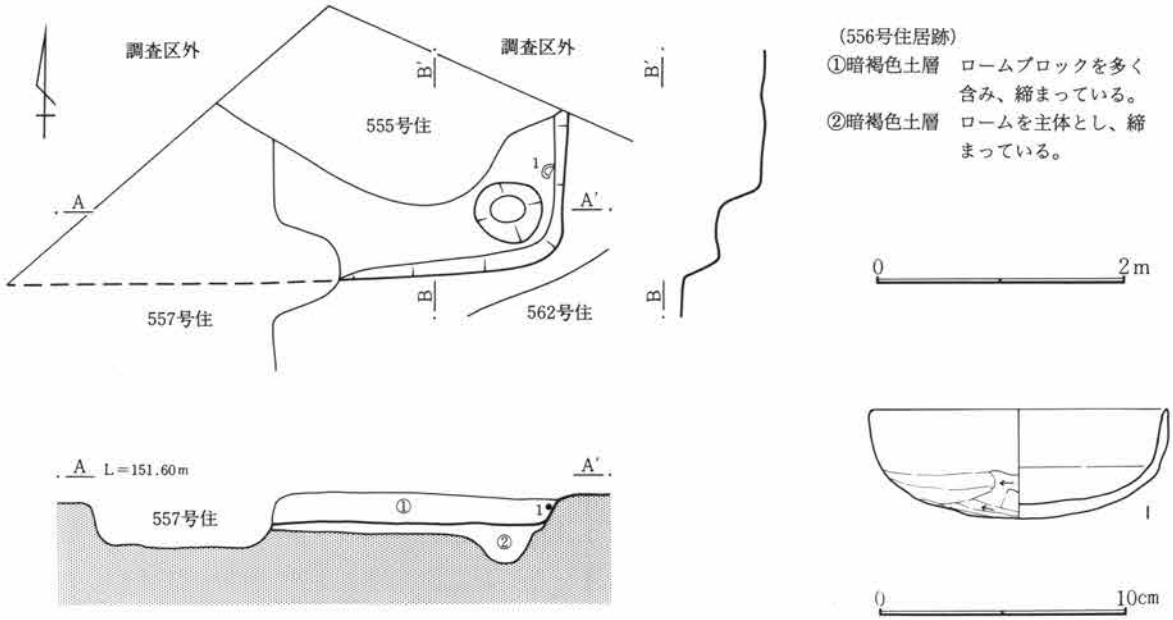
556号住居跡（第106図、第41表、図版25・48）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、74—28グリッドに位置する。切り合い関係としては、557号住居跡（奈良）、続いて555号住居跡（奈良）に破壊される。

調査区外にかかることや、破壊が著しい為、平面形は不明である。残存する壁高は最大で22cmを測る。床面の状況は、上記の理由により明瞭ではない。竈・柱穴・壁溝については、検出されていない。

南東隅から径54×48cm・深さ30cmを測るピットが一基検出されており、貯蔵穴の可能性もあるが、確証はない。

遺物は、図化した土師器坏1点が出土したのみである。積極的な根拠に欠けるが、切り合い関係や土器から古墳時代の住居跡と認定した。（関口功）



第106図　556号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第41表　556号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
106－1 48	土師器 坏	床面＋8 ¾残存	口　12.0 高　4.3 底　丸底	①普、パミス ②酸化焔、普通 ③浅黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	

558号住居跡（第107・108図、第42表、図版25・48・55）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、74・75—30・31グリッドに位置する。重複関係としては、559号住居跡（奈良）に南西隅を中心に床下まで掘り込まれている。周囲には、縄文・古墳・奈良時代の住居跡が比較的多く所在するが、平安時代の住居跡は認められない。

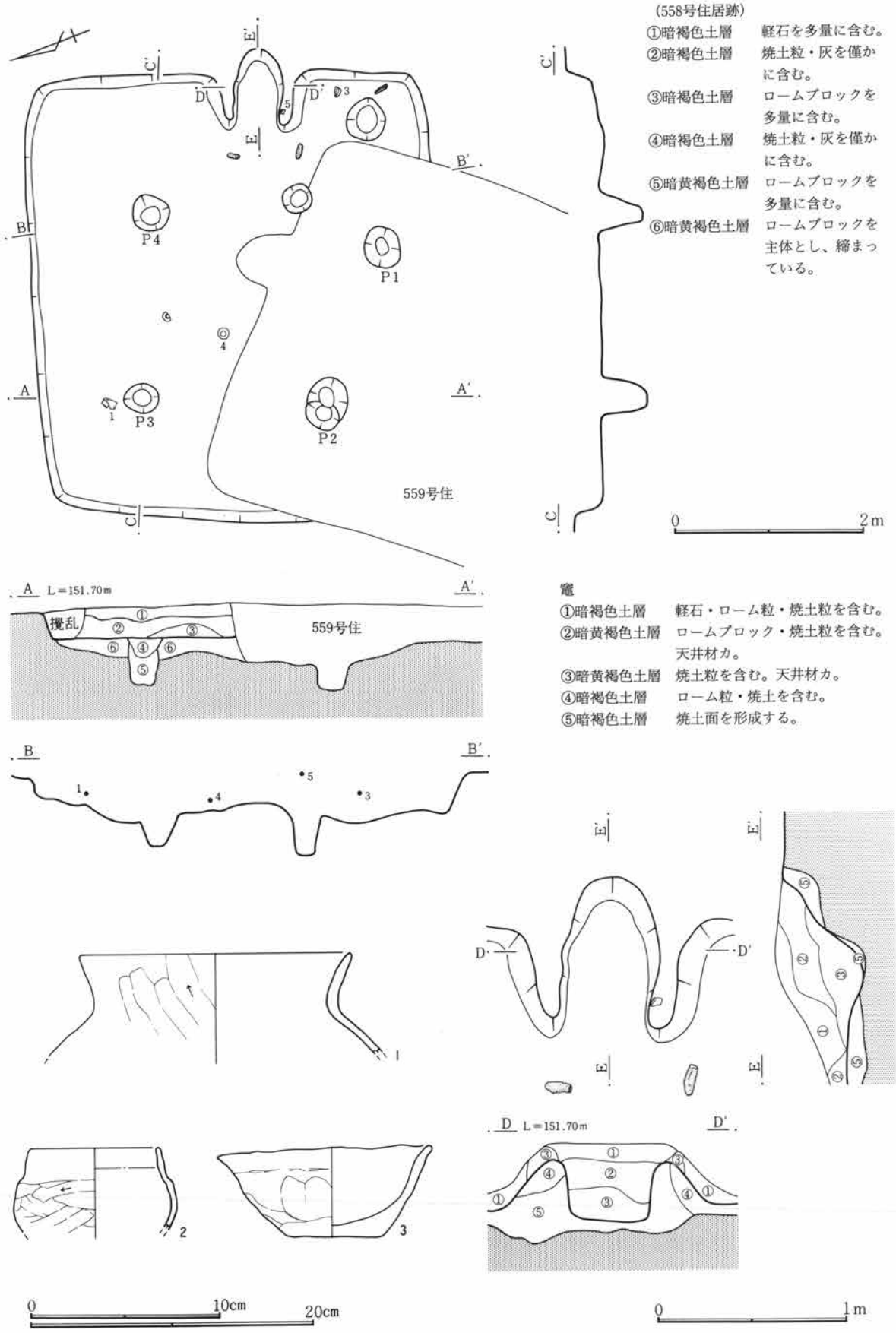
平面形は東西４m65cm・南北４m20cmを測る歪んだ長方形を呈し、主軸方向はN—116°—Eを示す。確認面からの壁高は最大で31cmを測る。床面には、ロームブロックを主とした貼床を厚く施していたものと思われる。

柱穴状のピットは、四箇所で確認されている。それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が30×54、Ｐ２は現状で36×30、Ｐ３が33×48、Ｐ４が36×48を測る。このうち、Ｐ２～Ｐ４については、主柱穴であると思われる。Ｐ３とＰ４の覆土上層には、焼土粒・炭化物が含まれていた。壁溝等の付属施設については、検出されていない。

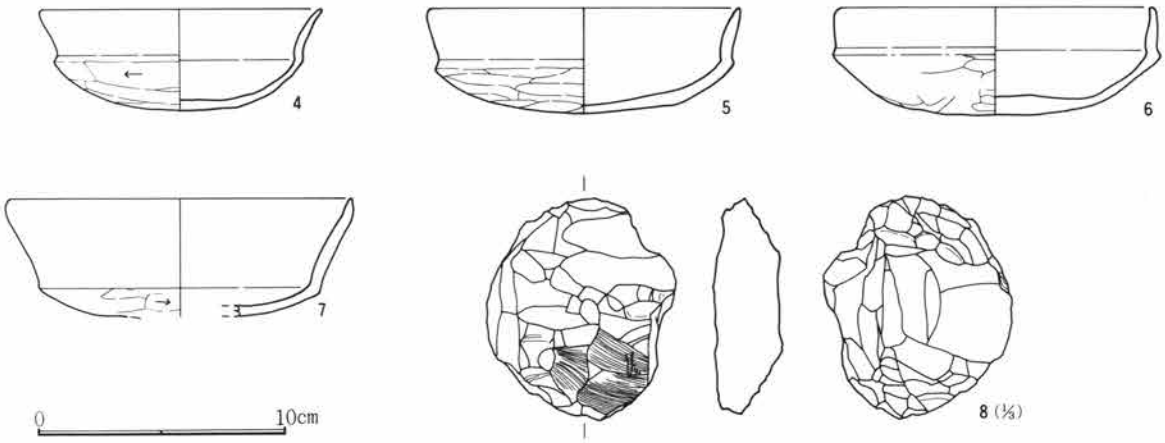
竈は東壁やや南寄りにあり、幅42cm・奥行87cm・深さ42cmを測る。燃焼部は焚口部に比べややくぼみ、煙道部は緩やかに立ち上がる。火床面の焼土化は著しく、明瞭な硬化面を形成していた。

貯蔵穴は、径42×39cm・深さ40cmを測る円形を呈する。

遺物は少なく、種類に乏しい。一部時期の異なるものも含み注意を要する。土器以外では、覆土中ではあるが、石製紡錘車の未製品が出土している。（関口功）



第107図　558号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)



第108図　558号住居跡出土遺物実測図(2)

第42表　558号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
107－1	土師器 甕	床面＋8 破片	口 (19.0) 高 － 底 －	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。口縁～胴部ヘラケズリ 内面　ナデ。	
107－2 48	土師器 短頸壺	覆土 破片	口 (9.0) 高 － 底 －	①細、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
107－3 48	土師器 坏　？	床面＋7 完形	口 11.2 高 4.8 底 4.9	①粗、石英・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部指押え。 内面　ナデ。	
108－4 48	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 11.2 高 4.0 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
108－5	土師器 坏	床面＋27 ½残存	口 12.4 高 4.1 底 丸底	①普、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
108－6	土師器 坏	覆土 ½残存	口 (12.6) 高 4.2 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内外面共に黒漆が付着カ
108－7	土師器 坏	覆土 破片	口 (13.8) 高 － 底 －	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
108－8 55	石製品 紡錘車	覆土	長 8.7　幅 7.5 厚 2.6　重 23.9		数箇所に工具痕が認められる。	蛇紋岩 未製品

561号住居跡（第109～111図、第43表、図版26・49）

本住居跡は、第7次調査区中央部の平坦面にあり、74・75—29・30グリッドに位置する。559号住居跡(奈良)に南東隅を、560号住居跡(奈良)に北半部を、11号井戸に西壁の一部を破壊される。

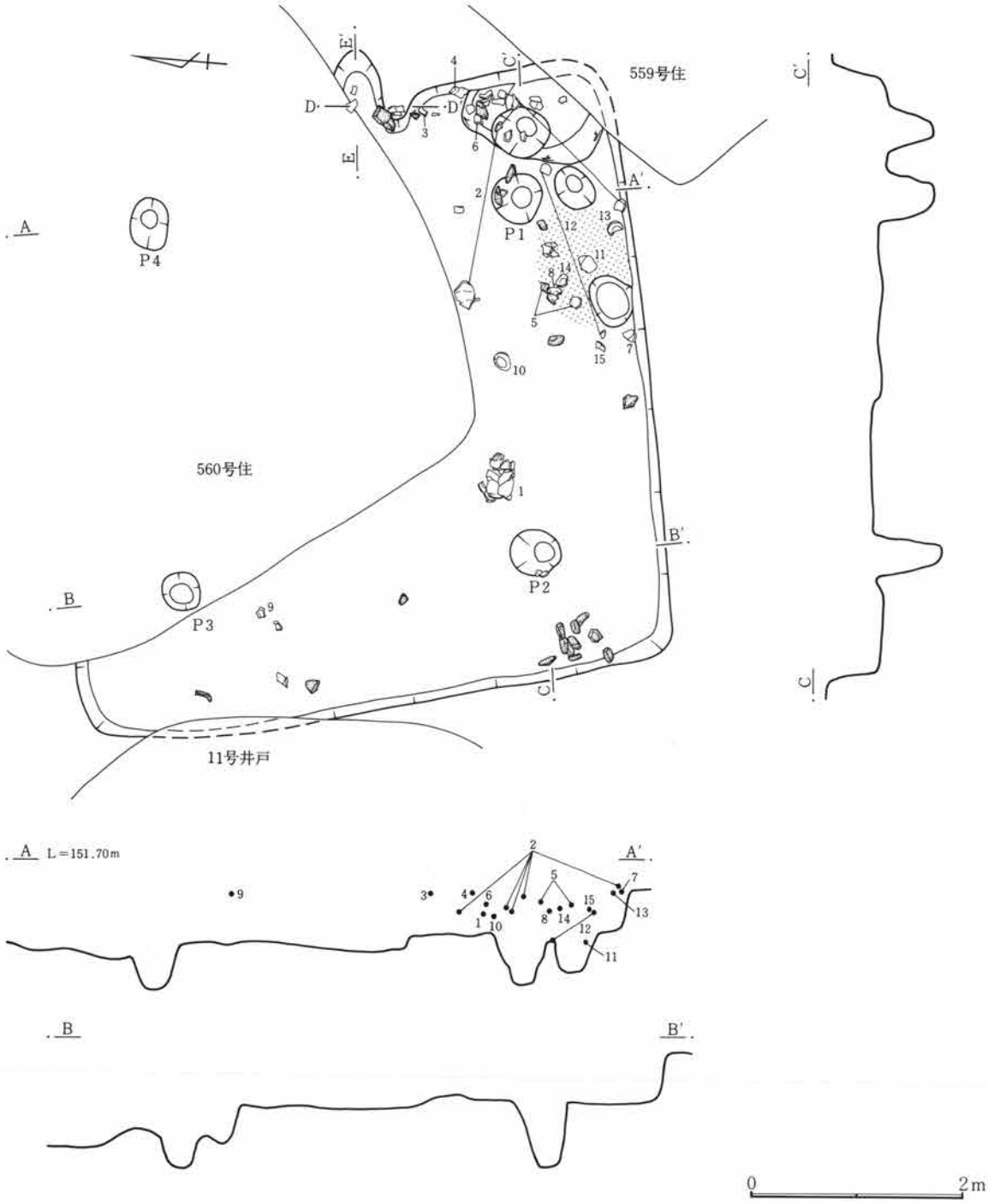
平面形は、東西5m70cm・南北5m73cmを測る正方形を呈していたものと思われる。主軸方向はN—82°—Eを示す。壁高は最大で57cmを測る。床面には、貼床を施すが、破壊のために全容は明らかではない。

主柱穴は四箇所で確認されており、それぞれの規模（径×深さcm）は、P1が48×66、P2が48×72、P3が現状で39×30、P4が現状で48×42を測る。他にP1周辺と南壁際から、柱穴状のピットが二基確認されている。規模（径×深さcm）は、42×54、40×40を測る。焼土粒の散布も認められるがその性格は不詳である。また、壁溝等その他の付属施設については、検出されていない。

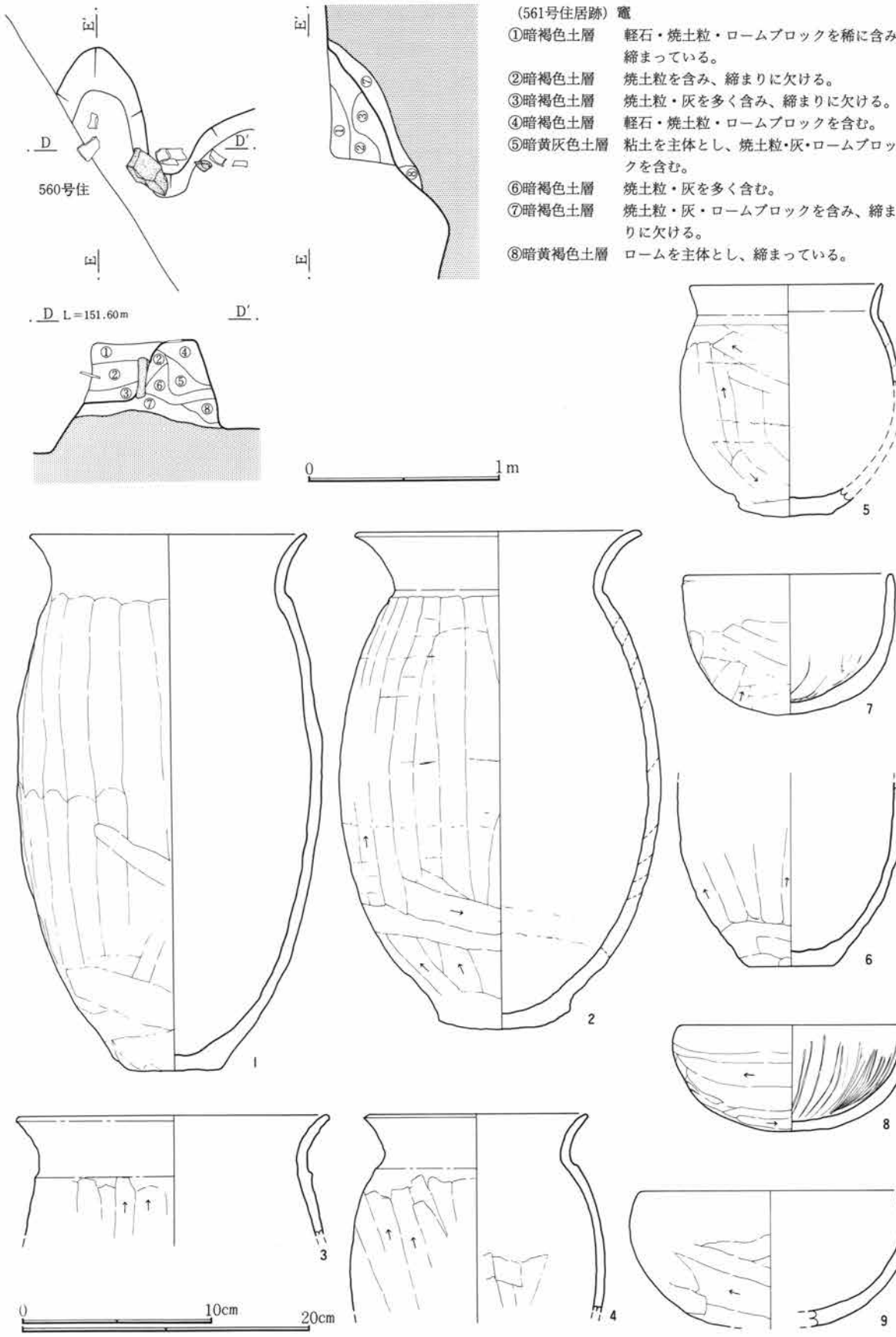
竈は東壁ほぼ中央と推定される位置にある。右袖の位置に袖石が遺存するものの、破壊を被り本来の構造は明らかではない。

貯蔵穴は、径48×45cm・深さ66cmを測る円形を呈する。

遺物は、貯蔵穴を中心に分布する。甕類では、胴部中位に膨らみをもつものや、坏類では、半球形を呈するものや比較的大型のものなどが出土している。他に、薦編石状の絹雲母石墨片岩５個、点紋絹雲母石墨片岩２個、石墨絹雲母片岩１個（計5.5kg）が検出されている。（関口功）



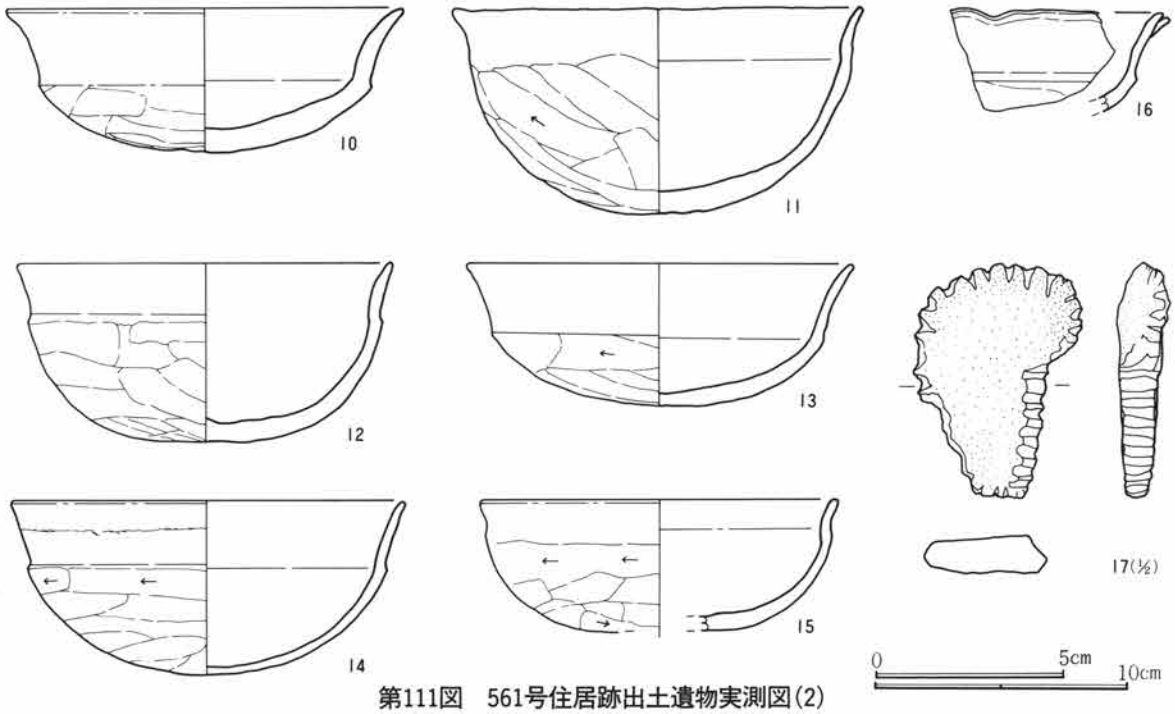
第109図　561号住居跡実測図(1)



（561号住居跡）竈

①暗褐色土層　軽石・焼土粒・ロームブロックを稀に含み、締まっている。
②暗褐色土層　焼土粒を含み、締まりに欠ける。
③暗褐色土層　焼土粒・灰を多く含み、締まりに欠ける。
④暗褐色土層　軽石・焼土粒・ロームブロックを含む。
⑤暗黄灰色土層　粘土を主体とし、焼土粒・灰・ロームブロックを含む。
⑥暗褐色土層　焼土粒・灰を多く含む。
⑦暗褐色土層　焼土粒・灰・ロームブロックを含み、締まりに欠ける。
⑧暗黄褐色土層　ロームを主体とし、締まっている。

第110図　561号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

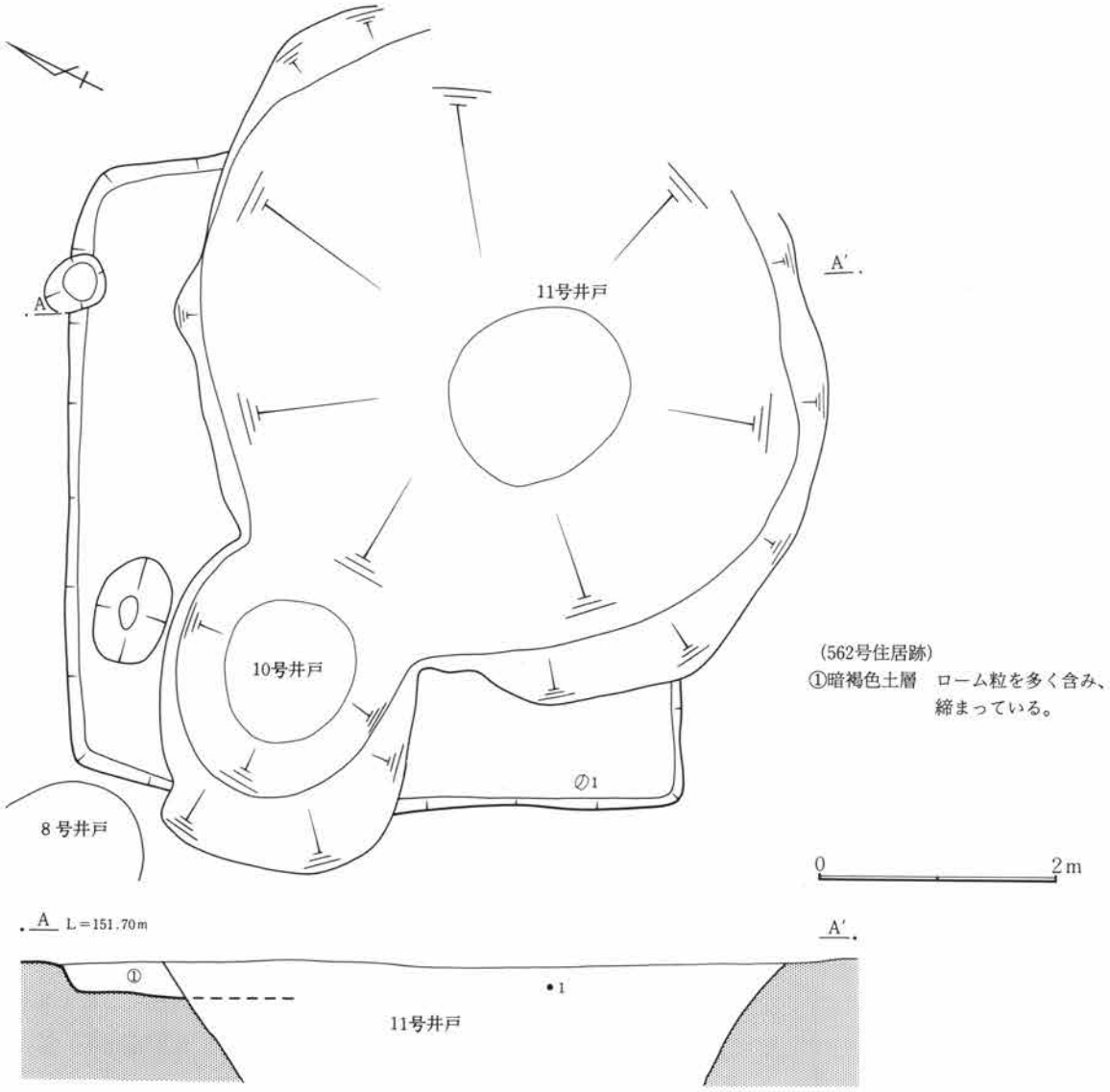


第111図　561号住居跡出土遺物実測図(2)

第43表　561号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
110－1 49	土師器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 18.8 高 36.7 底 6.3	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
110－2 49	土師器 甕	床面直上 ¼残存	口 (19.6) 高 34.3 底 9.1	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
110－3	土師器 甕	床面＋19 破片	口 (21.4) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、硬質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
110－4	土師器 甕	床面＋19 破片	口 (15.2) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
110－5 49	土師器 小型甕	床面直上 ¼残存	口 13.3 高 15.9 底 6.5	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
110－6	土師器 甕	床面＋8 破片	口 — 高 — 底 5.8	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い赤褐色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
110－7 49	土師器 坏　？	床面＋21 ¾残存	口 10.3 高 7.1 底 丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内面底部にヘラ圧痕あり
110－8 49	土師器 坏	床面直上 ¾残存	口 11.8 高 5.5 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③明黄褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　放射状ヘラミガキ。	
110－9	土師器 坏	床面＋18 破片	口 (13.6) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
111－10	土師器 坏	床面－2 ほぼ完形	口 15.7 高 5.6 底 丸底	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
111－11	土師器 坏	床面－26 ⅔残存	口 (16.2) 高 8.0 底 丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
111—12 49	土師器 坏	床面－25 ⅔残存	口 (14.8) 高 7.1 底 丸底	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
111—13 49	土師器 坏	床面＋19 ⅔残存	口 15.2 高 5.6 底 丸底	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
111—14 49	土師器 坏	床面＋4 ⅓残存	口 (15.6) 高 6.8 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
111—15	土師器 坏	床面直上 ¼残存	口 (14.2) 高 — 底 丸底	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。 内面　ナデ。	
111—16	土師器 坏	覆土 破片	口 — 高 — 底 —	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。 内面　ナデ。	口縁部を片口状に作る
111—17 56	石製品 ?	覆土	長 5.2　幅 4.5 厚 1.3　重 23.5			砂岩



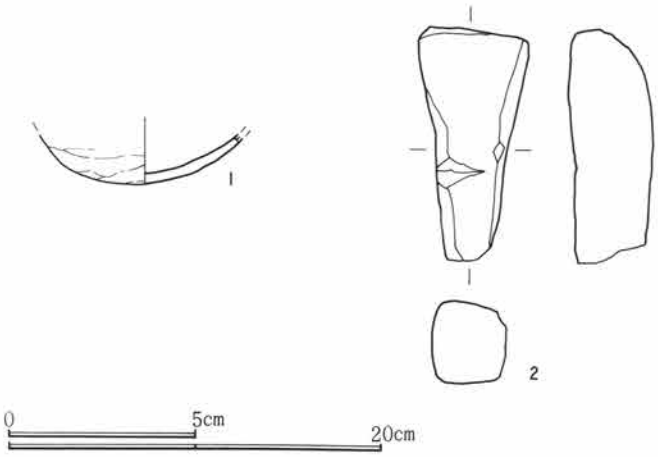
第112図　562号住居跡実測図

562号住居跡（第112・113図、第44表、図版26・55）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、75―27・28グリッドに位置する。10号・11号井戸に破壊され、残存状況は不良である。

上記の理由により、不確定な要素が伴うが東西方向５m34cm・南北方向５m19cmを測るものと思われる。主軸方向はN―64°―Eを示す。壁高は最大で40cmを測る。基本的に掘り方はなく、黄褐色ローム（地山）を直接叩き締めて床面としていたものと思われる。掘り方調査時に住居内から、径90×60cm・深さ30cmを測るピットが検出されたのみで、竈・貯蔵穴・柱穴・壁溝に関する情報は得られていない。

遺物は極めて少なく、残存率も低い。古墳時代の住居跡とするには、積極的な根拠に乏しいと言わざるを得ない。（関口功）



第113図　562号住居跡出土遺物実測図

第44表　562号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
113―1	土師器 甕　？	床面＋５ 破片	口　― 高　― 底　―	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
113―2 55	石製品 砥　石	覆土	長　6.2　幅　2.9 厚　2.3　重　45.0		中砥。	流紋岩

564号住居跡（第114・115図、第45表、図版27・49）

本住居跡は、第８次調査区北寄りの平坦面にあり、83・84―38・39グリッドに位置する。切り合い関係としては、563号住居跡(平安)に東壁から北壁にかけて破壊される。周囲には、東側に奈良時代や古墳時代前・後期の住居跡が重複・密集して所在する。西側には、35号・44号溝をはじめとする数状の溝が南北に走る。北側と南側は各時代を通じて遺構の空閑地になっている。

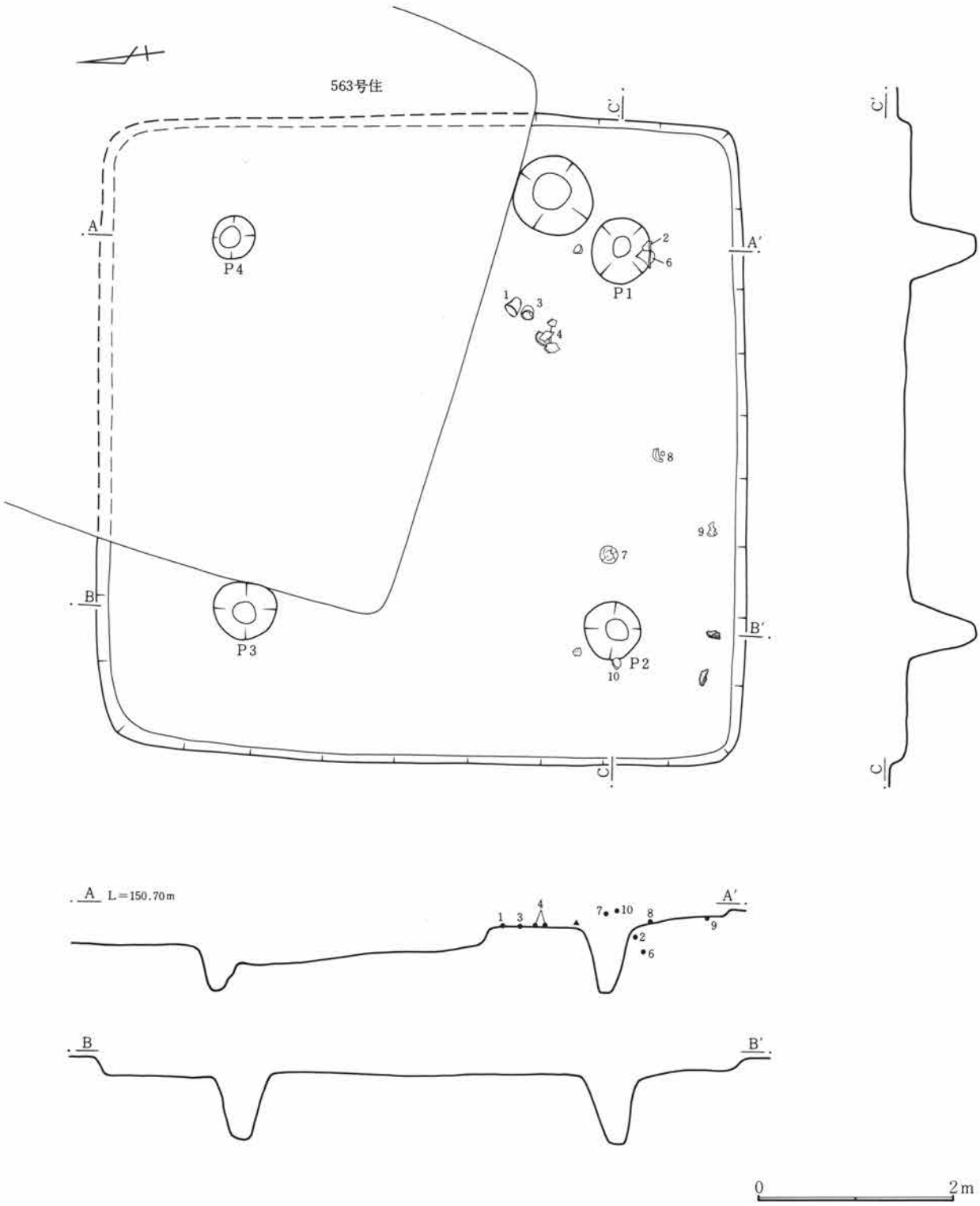
不確定な要素が伴うが、平面形は東西６m51cm・南北６m60cmを測る正方形を呈していたものと思われる。主軸方向はN―104°―Eを示す。表土の流失が著しく、確認面からの壁高は最大で18cmを測る程度で残存状況は不良であった。破壊を蒙るため全容は明らかではないが、床面にはロームブロックを主とした貼床を施していたものと思われる。

主柱穴は四箇所で確認されており、それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が66×66、Ｐ２が57×66、Ｐ３が60×66、Ｐ４が現状で45×42を測る。柱穴間の寸法は、Ｐ１～Ｐ２が384cm、Ｐ２～Ｐ３が378cm、Ｐ３～Ｐ４が380cm、Ｐ４～Ｐ１が393cmを測る。なお、竈・壁溝等の付属施設については、検出されていないが、竈は、本来東壁にあったものと思われる。

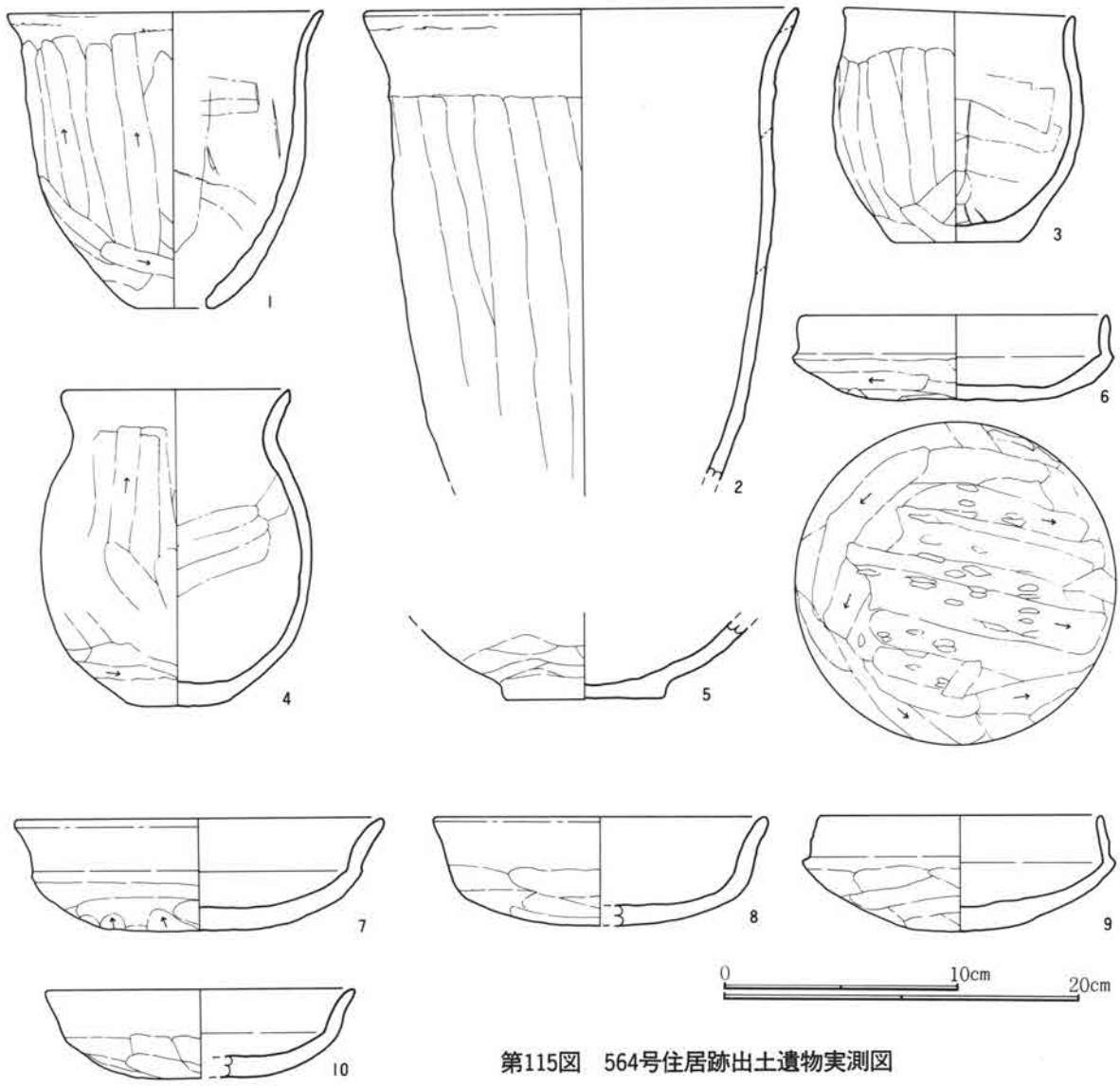
貯蔵穴は、Ｐ１近くの径84×78cm・深さ75cmを測るピットが該当するものと思われるが、位置的に若干の疑問が残る。

遺物の全体量は少なく、住居南半部に散漫に分布するが、個体の残存率はやや高い。垂直分布を見ると、

床面に近い位置で出土したものが多い。土師器の小型甑1や小型甕3・4が、いずれも床面直上から近接して出土している。(関口功)



第114図　564号住居跡実測図



第115図　564号住居跡出土遺物実測図

第45表　564号住居跡出土遺物観察表

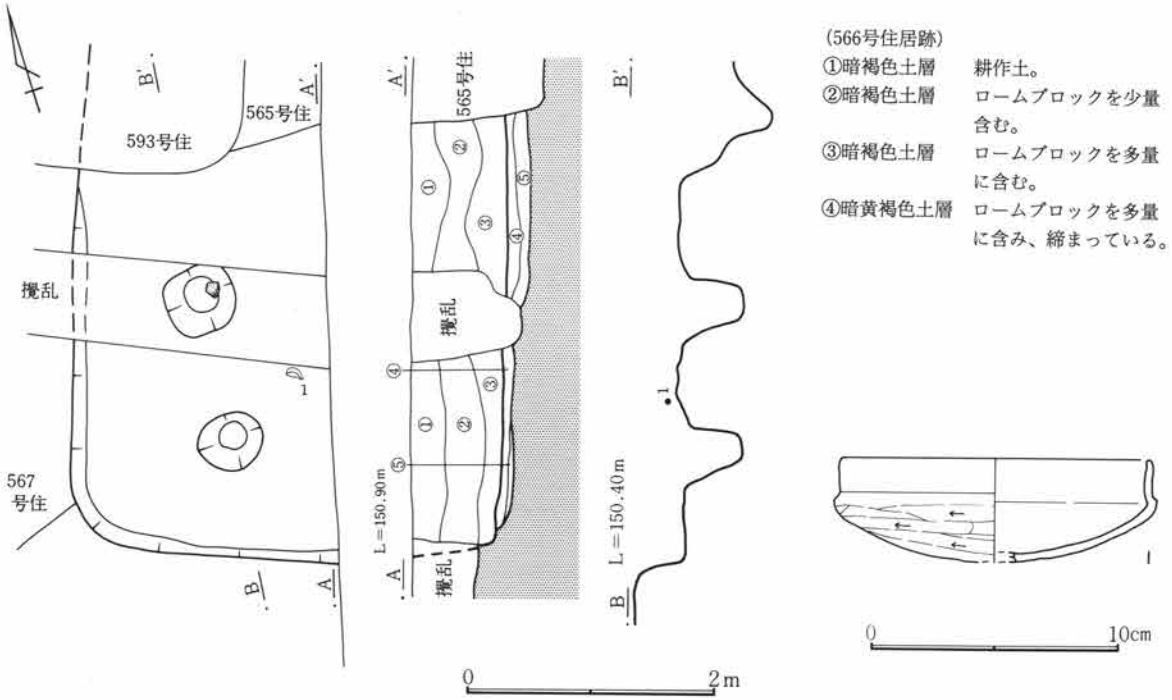
挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
115— 1 49	土師器 小型甑	床面直上 完形	口 17.6 高 16.4 底 4.5	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
115— 2 49	土師器 甑	床面－12 破片	口 (24.2) 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
115— 3 49	土師器 小型甕	床面直上 ¾残存	口 12.8 高 12.8 底 6.8	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
115— 4 49	土師器 小型甕	床面直上 ½残存	口 (12.9) 高 17.7 底 5.8	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
115— 5	土師器 甕	覆土 破片	口 — 高 — 底 (8.9)	①粗、砂粒 ②酸化焔、硬質 ③鈍い黄橙色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
115— 6 49	土師器 坏	床面－27 完形	口 12.8 高 3.5 底 丸底	①普、パミス・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	外面底部にヘラ圧痕あり

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
115－7 49	土師器 坏	床面＋11 ほぼ完形	口　15.4 高　4.7 底　丸底	①普、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
115－8 49	土師器 坏	床面直上 ½残存	口　(14.0) 高　(4.5) 底　丸底	①普、パミス・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
115－9	土師器 坏	床面＋7 ½残存	口　(11.8) 高　4.8 底　丸底	①普、パミス ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
115－10	土師器 坏	床面＋13 ¼残存	口　(13.0) 高　(3.7) 底　丸底	①普、石英粒多 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

566号住居跡（第116図、第46表、図版27・50）

本住居跡は、第８次調査区北寄りの平坦面にあり、83－42グリッドに位置する。重複関係としては、567号住居跡（古墳）を切って構築されるが、565号住居跡（奈良）、続いて593号住居跡（奈良）に破壊される。　平面形は不明であるが、僅かに残る西壁と南壁から想定される主軸方向はN－19°－Eを示す。確認面からの壁高は最大で20cmを測る。床面には貼床を施す。掘り方調査時にピットが二基検出されたのみで付属施設等は確認されていない。

遺物は極めて少なく、土師器坏が１点出土したのみである。（関口功）



第116図　566号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第46表　566号住居跡出土遺物観察表

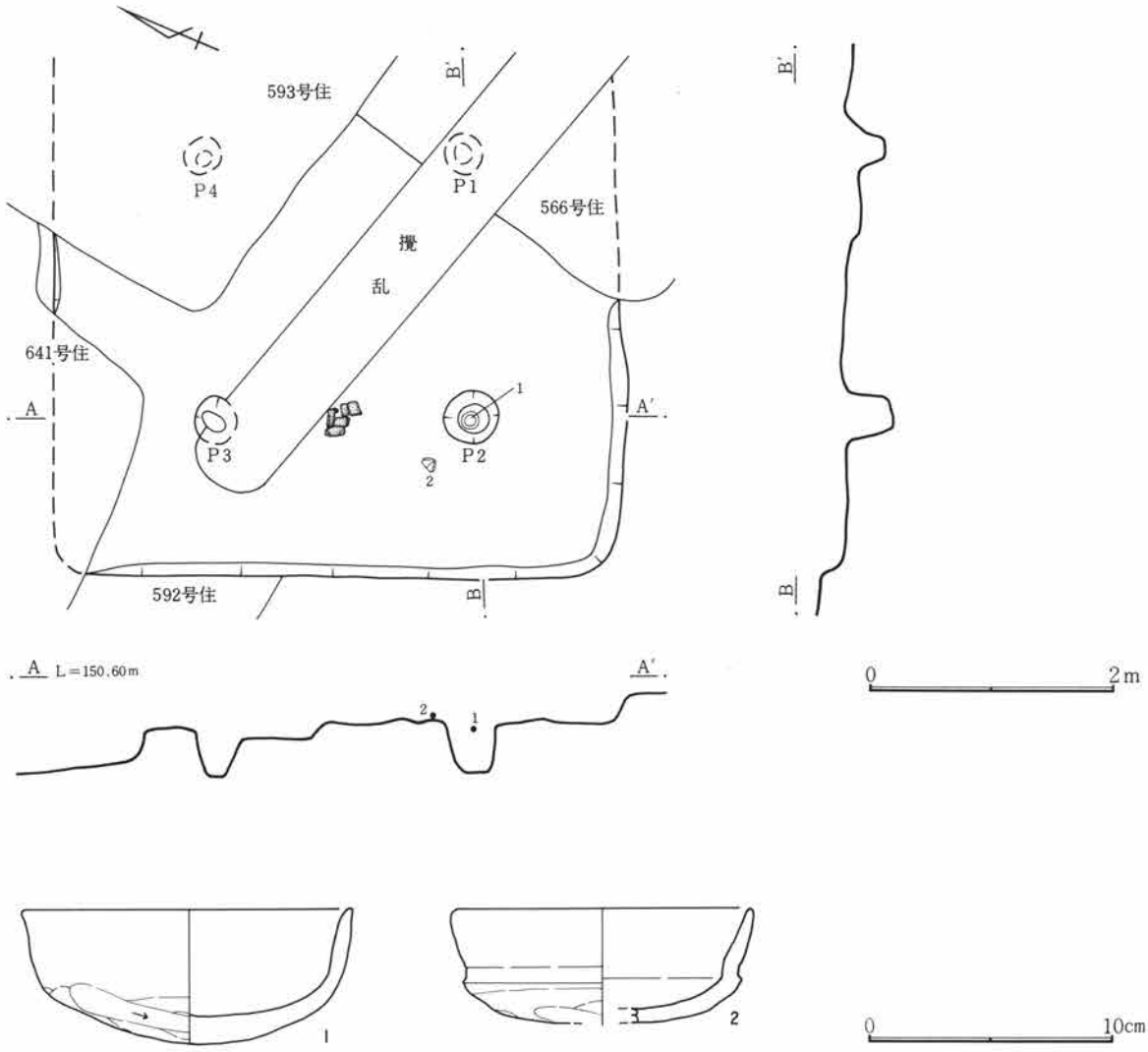
挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
116－1 50	土師器 坏	床面＋9 ⅓残存	口　(12.4) 高　－ 底　丸底	①普、パミス ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

567号住居跡（第117図、第47表、図版27・50）

本住居跡は、第８次調査区北寄りの平坦面にあり、83・84—41グリッドに位置する。重複関係としては、前出の566号住居跡（古墳）、592号・593号・641号住居跡（奈良）に破壊される。

東西方向は不明であるが、南北方向は4m77cmを測り、主軸方向はN—72°—Eを示すものと思われる。壁高は最大で17cmを測る。床面には貼床を施す。掘り方調査時に、主柱穴と思われるピットが四基確認された。比較的残りのよいＰ２が径44cm・深さ45cm、Ｐ３が径36cm・深さ36cmを測る。

遺物は極めて少なく、図化できたのは、土師器坏２点のみである。（関口功）



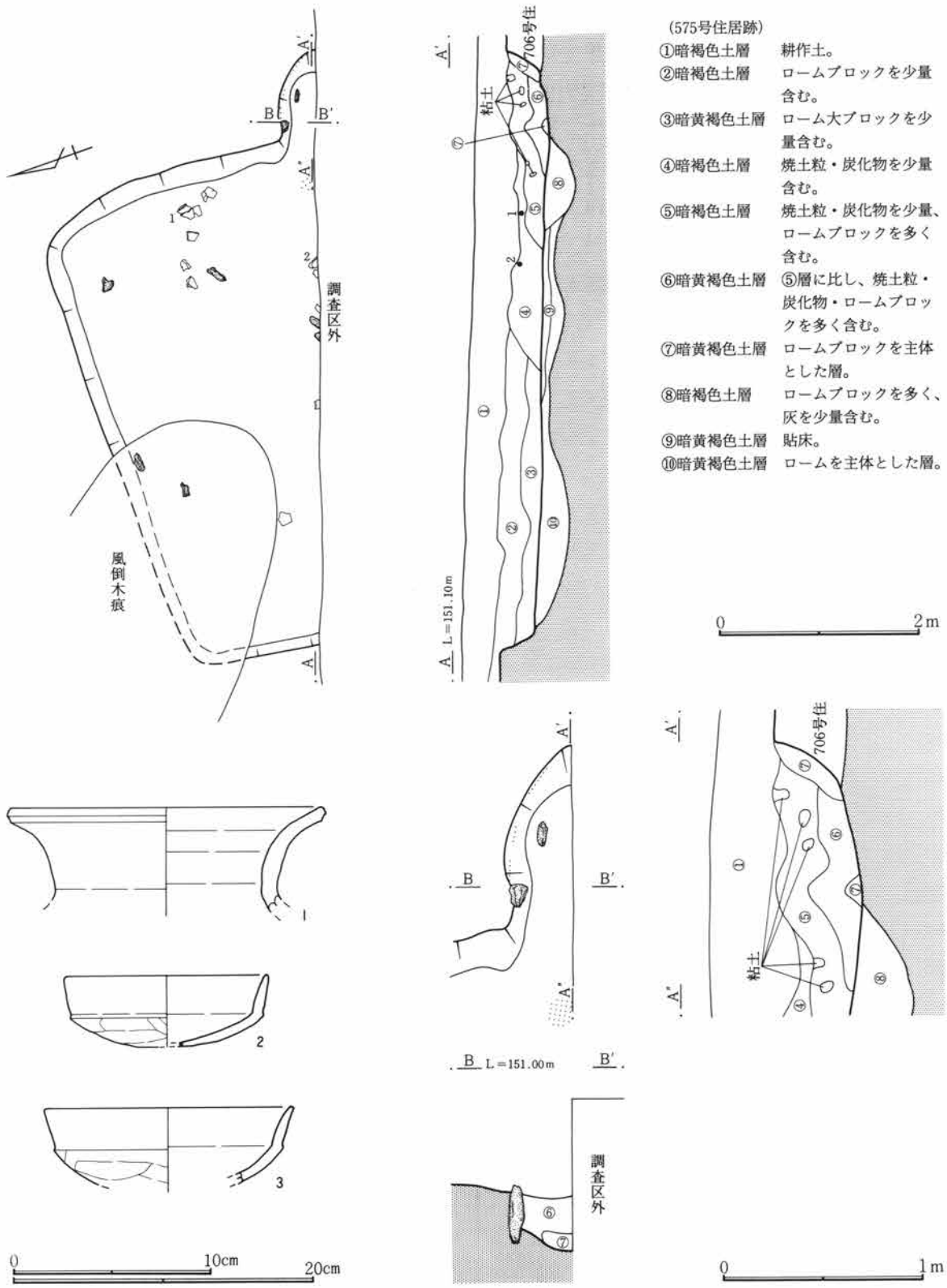
第117図　567号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第47表　567号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
117—1 50	土師器 坏	ピット内 —3 完形	口 13.3 高 5.5 底 丸底	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
117—2 50	土師器 坏	床面直上 ⅓残存	口 (12.2) 高 — 底 丸底	①普、パミス・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	

575号住居跡（第118図、第48表、図版27・50）

本住居跡は、第８次調査区北寄りの平坦面にあり、77・78—41グリッドに位置する。重複関係としては、706号住居跡（古墳）を切って構築される。



第118図　575号住居跡実測図及び出土遺物実測図

調査区外にかかるため、南北方向は不明であるが、東西方向は4m83cmを測り、主軸方向はN－90°－Eを示す。確認面からの壁高は最大で41cmを測る。床面には、竈前を中心に貼床を施す。貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設については、確認されていない。

竈は東壁にあるが、上記の理由により詳細は不明である。燃焼部左側に石材が遺存するほか、内部上層に径5cm内外の粘土粒を含む暗褐色土が堆積していた。

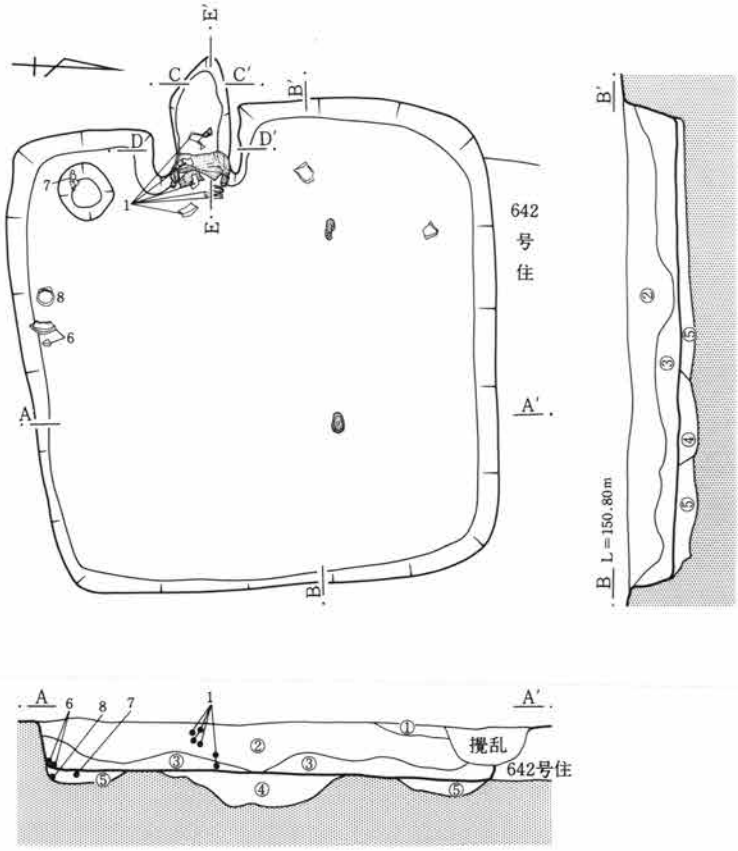
遺物は竈前を中心に分布するが、種類に乏しく、個体の残存率も低い。（富田）

第48表　575号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
118－1 50	須恵器 甕	床面＋24 破片	口 (20.8) 高 － 底 －	①普、白色鉱物粒 ②還元焔、硬質 ③灰黄褐色	外面　口縁部ヨコナデ。 内面　ナデ。	奈良カ
118－2	土師器 坏	床面＋26 ¼残存	口 (10.0) 高 － 底 －	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
118－3	土師器 坏	覆土 破片	口 (12.2) 高 － 底 －	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

576号住居跡（第119・120図、第49表、図版28・50）

本住居跡は、第8次調査区北寄りの平坦面にあり、81—39・40グリッドに位置する。642号住居跡（古墳）を切って構築される。北側には、奈良時代や古墳時代前・後期の住居跡が重複・密集し、南側には、奈良・平安時代の住居跡が重複・密集している。



規模は東西3m75cm・南北3m78cmを測るが、竈右脇の西壁が若干張り出していた。主軸方向はN—92°—Wを示す。確認面からの壁高は最大で49cmを測り、残存状況は比較的良好である。床面には、竈前を中心にロームブロックを主とした貼床を施す。柱穴・壁溝等の付属施設については、確認されていない。

竈は西壁中央やや南寄りにあり、幅31cm・奥行108cm・深さ48cmを測る。

（576号住居跡）
①黒褐色土層　軽石・ローム粒を多く含む。
②暗褐色土層　軽石を少量含む。
③暗褐色土層　ローム粒を多く、焼土粒・灰・軽石を少量含む。
④暗褐色土層　ロームブロックを少量、灰を稀に含む。
⑤暗黄褐色土層　ロームを主体とした層。

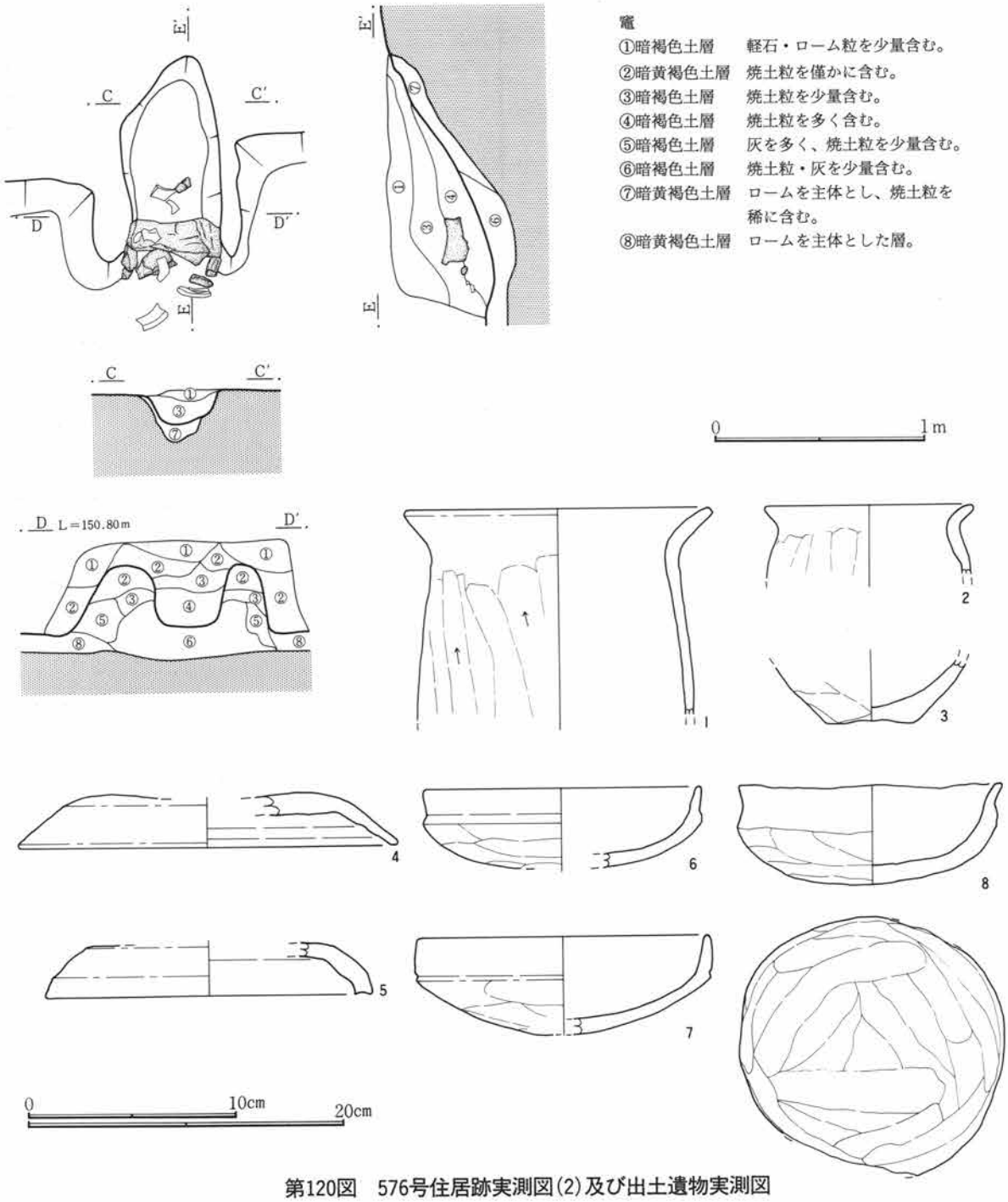
0　2m

第119図　576号住居跡実測図(1)

両袖の先端には袖石が遺存し、天井石と思われる石材が破損・落下した状態で認められた他、支脚と思われる石材が据えられた状態で出土した。焚口部から燃焼部にかけてはややくぼみ、燃焼部は緩やかに立ち上がる。

貯蔵穴は竈左脇にあり、径45×39cm・深さ62cmを測る円形を呈する。

遺物は、竈周辺を中心に分布する。量的には並であるが、種類に乏しく、個体の残存率も低い。竈内からは土師器甕1が、貯蔵穴上層からは土師器坏7が、南壁際からは土師器6・8が出土している。須恵器蓋？も認められるが、流れ込みの可能性が高いものと思われる。(関口功)



第120図　576号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第49表　576号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
120－1 50	土師器 甕	竈内直上 破片	口 (19.0) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
120－2	土師器 小型甕	覆土 破片	口 (13.0) 高 － 底 －	①普、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
120－3	土師器 甕	覆土 破片	口 － 高 － 底 5.6	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　胴部下半ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
120－4 50	須恵器 蓋　？	覆土 破片	口 (17.7) 高 － 底 －	①細、白色鉱物粒 ②還元焔、硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形。天井部回転ヘラケズリ。	奈良カ
120－5	須恵器 蓋　？	覆土 破片	口 (15.4) 高 － 底 －	①普、白色鉱物粒多 ②還元焔、硬質 ③黄灰色	ロクロ成形。	外面　自然釉
120－6 50	土師器 坏	床面直上 ½残存	口 13.0 高 － 底 －	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
120－7 50	土師器 坏	床面－4 ½残存	口 (13.7) 高 － 底 －	①普、パミス・砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内面吸炭により黒色を呈する
120－8 50	土師器 坏	床面－4 ほぼ完形	口 12.2 高 4.7 底 丸底	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

592号住居跡（第121～123図、第50表、図版28・50）

本住居跡は、第８次調査区北寄りの平坦面にあり、84・85—40・41グリッドに位置する。切り合い関係としては、641号住居跡（奈良）に東壁から住居中央部にかけて床下まで掘り抜かれていた。南側には住居跡が重複・密集するが、北側は遺構の空閑地になっている。

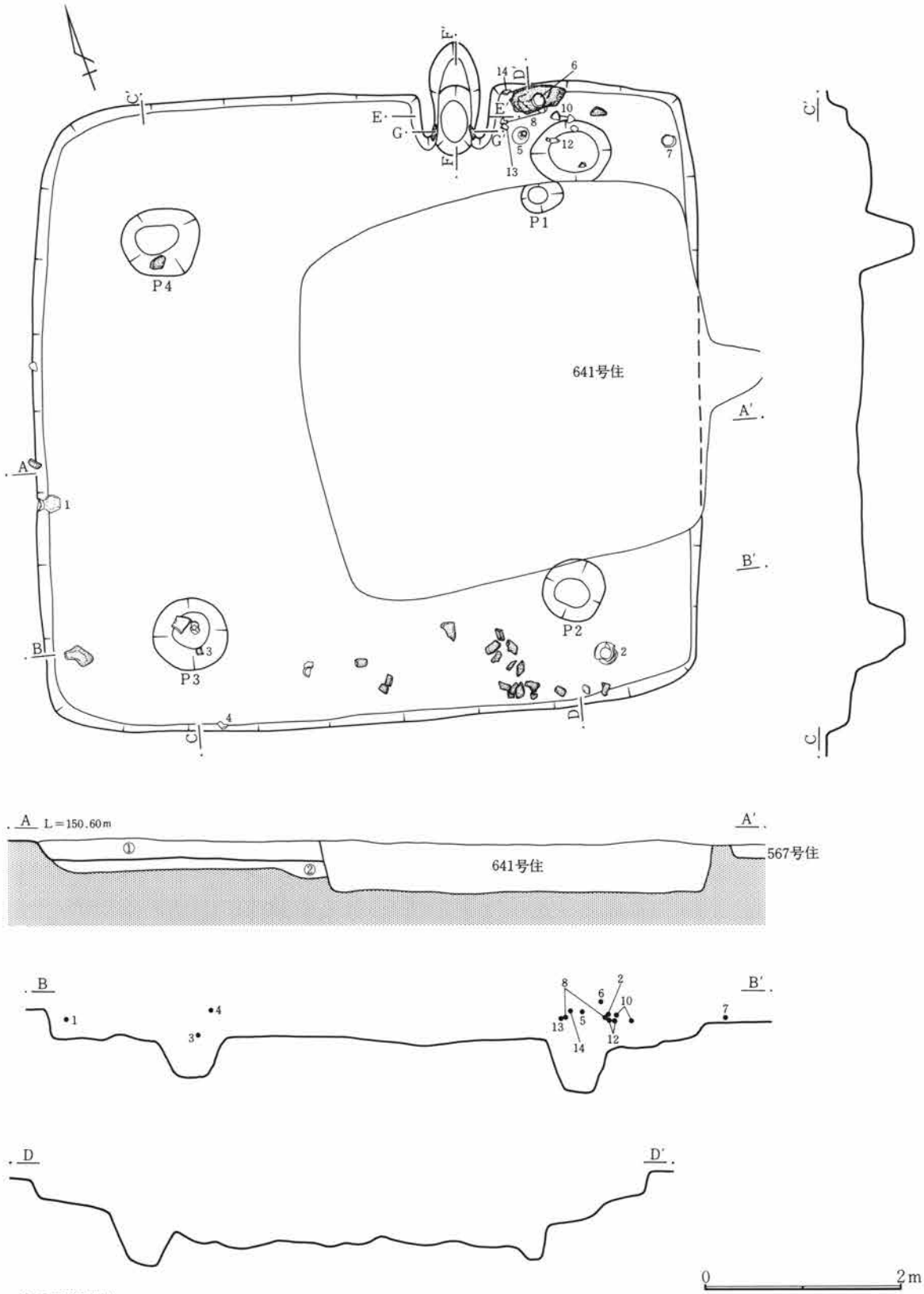
平面形は、東西６m72cm・南北６m30cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN－15°－Eを示す。確認面からの壁高は最大で24cmを測る。床面には、ロームブロックを主とした貼床を施していたものと思われるが、上記の理由により、その全容は明らかではない。

主柱穴は、掘り方調査時に確認されたＰ１も含め、四箇所で確認された。Ｐ１を除くそれぞれの規模(径×深さcm)は、Ｐ２が63×66、Ｐ３が72×54、Ｐ４が78×66を測る。柱穴間の寸法は、Ｐ１～Ｐ２が399cm、Ｐ２～Ｐ３が384cm、Ｐ３～Ｐ４が393cm、Ｐ４～Ｐ１が384cmを測る。なお、壁溝等の付属施設については、確認されていない。

竈は北壁中央やや東寄りにあり、幅33cm・奥行102cm・深さ33cmを測る。両袖の先端に石材が遺存するほかは、原位置を保つと思われる石材の遺存はないが、天井石と思われる石材が竈右脇から出土している。燃焼部はすり鉢状にくぼみ、煙道部は緩やかに立ち上がる。

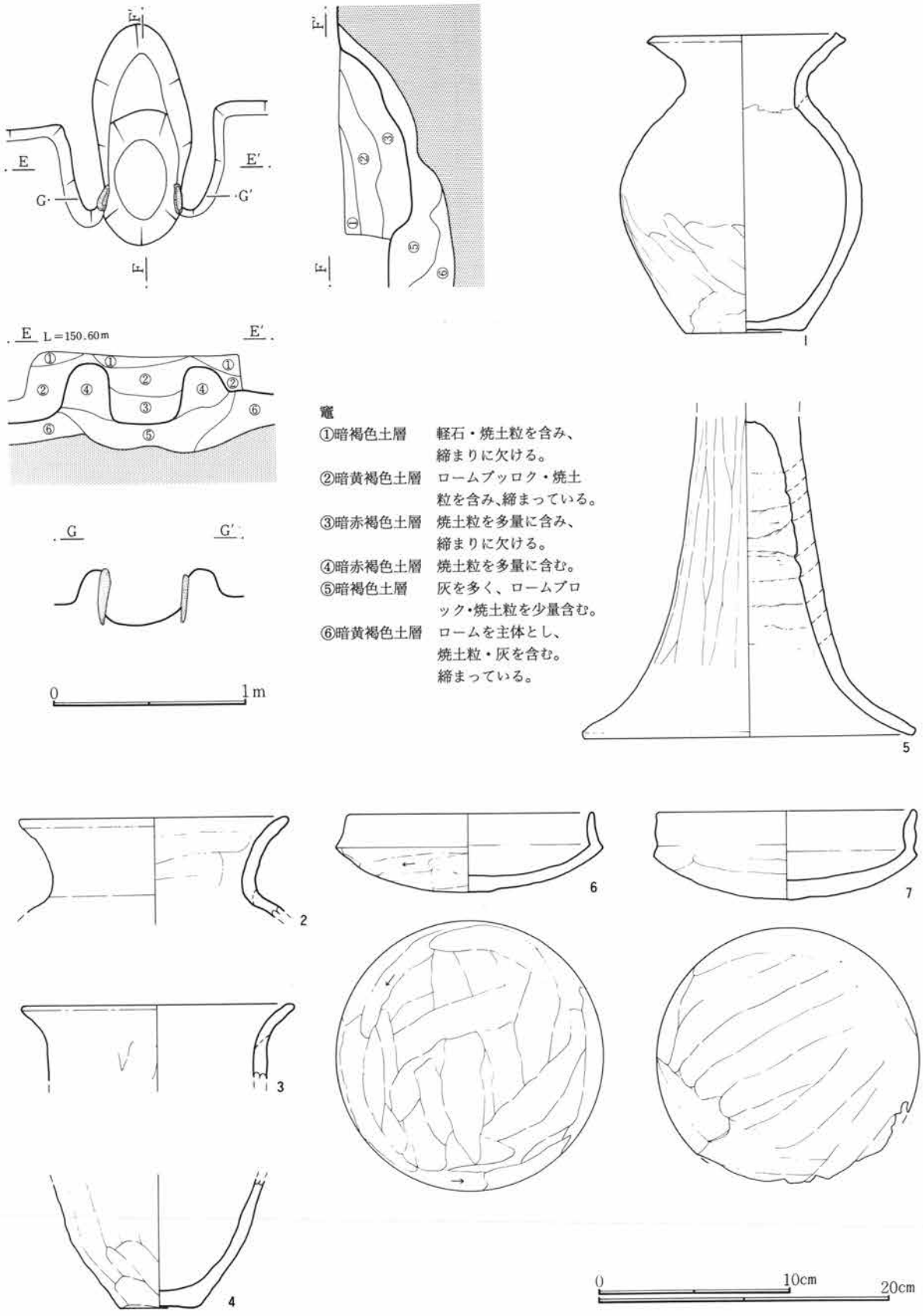
貯蔵穴は竈右脇にあり、径81×63cm・深さ79cmを測る楕円形を呈する。

遺物の全体量は少なく、個体の残存率も低い。竈右脇からは、土師器高坏の脚部５や土師器坏６が正位で出土しているが、西壁際から出土した須恵器壺１も注意される。また覆土中ではあるが、鉄製品も出土している。他に、薦編石状の絹雲母石墨片岩15個、輝緑岩２個、点紋絹雲母石墨片岩１個（計9.5kg）が検出されている。(関口功)

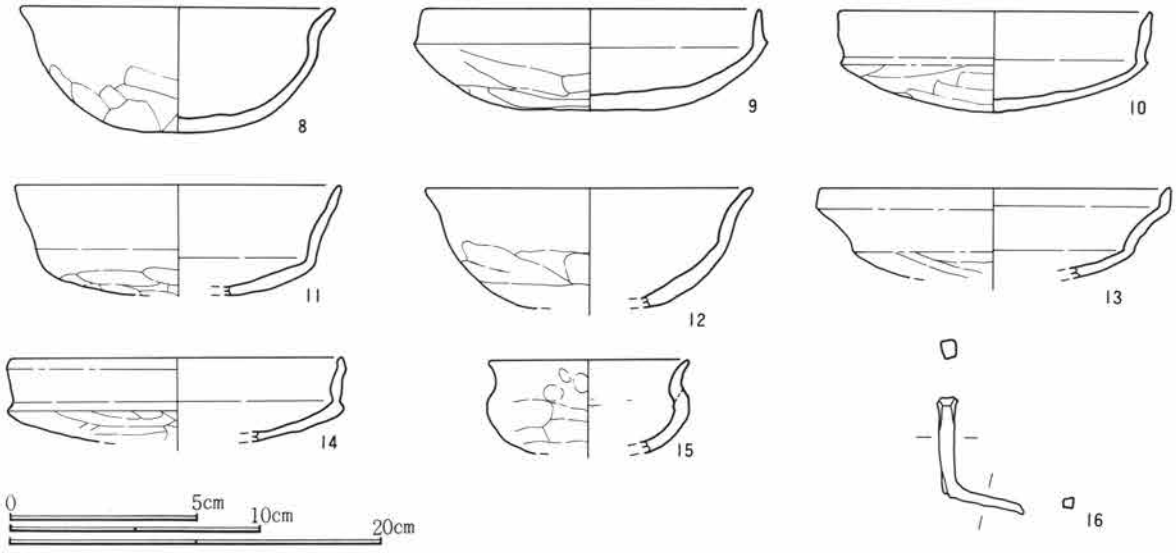


(592号住居跡)
①暗褐色土層　ロームブッロクを多く含む。
②暗黄褐色土層　ロームを主体とした層。

第121図　592号住居跡実測図(1)



第122図　592号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第123図　592号住居跡出土遺物実測図(2)

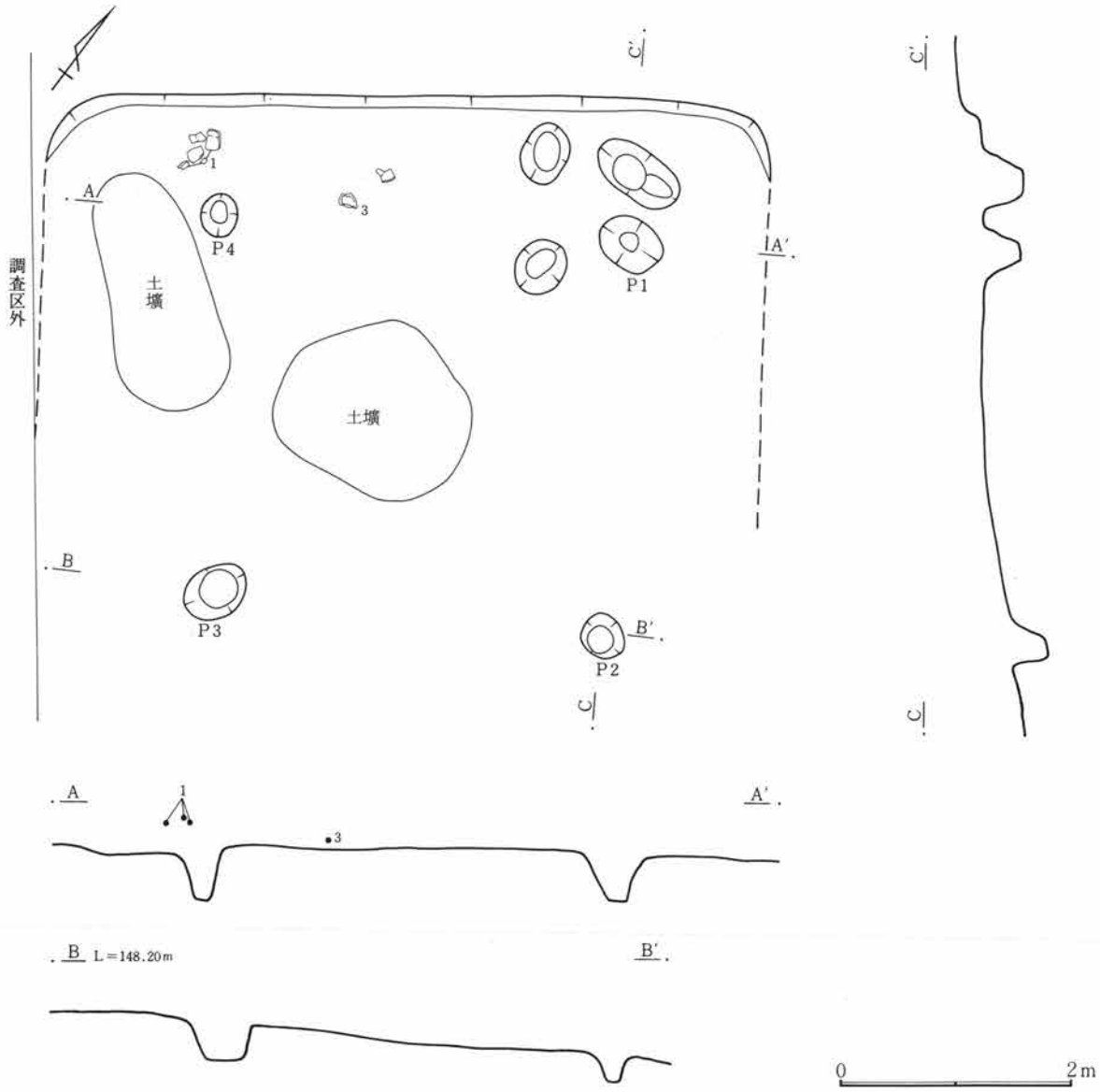
第50表　592号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
122－1 50	須恵器 壺	床面直上 ¾残存	口 (12.5) 高 20.1 底 (8.3)	①普、白色・褐色鉱物粒 ②酸化焔、硬質 ③褐灰色、一部鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部下半斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
122－2 50	土師器 甕	床面＋5 破片	口 (18.2) 高 － 底 －	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。 内面　ヘラナデ。	
122－3	土師器 甕	床面－13 破片	口 (18.4) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、硬質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
122－4	土師器 甕	床面＋11 破片	口 5.1 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、硬質 ③暗灰黄色	外面　胴部下半ヘラケズリ。 内面　ナデ。	粘土多量に付着
122－5 50	土師器 高坏	床面＋7 ½脚部	口 － 高 － 底 16.8	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③明黄褐色	外面　脚部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
122－6 50	土師器 坏	床面＋16 ほぼ完形	口 12.6 高 4.0 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
122－7 50	土師器 坏	床面直上 ¾残存	口 13.2 高 4.5 底 丸底	①普、パミス ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
123－8 50	土師器 坏	床面直上 ⅔残存	口 12.4 高 4.9 底 丸底	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
123－9	土師器 坏	覆土 ⅓残存	口 (13.4) 高 4.0 底 －	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
123－10 50	土師器 坏	床面直上 ½残存	口 (12.4) 高 4.0 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	吸炭により一部黒変
123－11 50	土師器 坏	覆土 ¼残存	口 (13.0) 高 － 底 －	①普、パミス・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
123－12	土師器 坏	床面直上 ⅓残存	口 (13.0) 高 － 底 －	①普、石英粒多 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
123—13	土師器 坏	床面直上 破片	口 (13.8) 高　— 底　—	①普、白色鉱物粒少 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
123—14	土師器 坏	床面＋7 破片	口 (13.2) 高　— 底　—	①普、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。 内面　ナデ。	
125—15 50	土師器 短頸壺	覆土 破片	口 (10.5) 高　— 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	外面に指頭圧痕
123—16 56	鉄製品 ?	覆土	長　—　幅　0.4 厚　0.4　重　1.9			

609号住居跡（第124・125図、第51表、図版29・50）

本住居跡は、第8次調査区北東寄りの緩斜面にあり、75—47グリッドに単独で位置する。表土が流失した上に、涌水が著しく、残存状況は極めて不良で、掘り方に近い状態で確認された。東側は南北方向の比較的

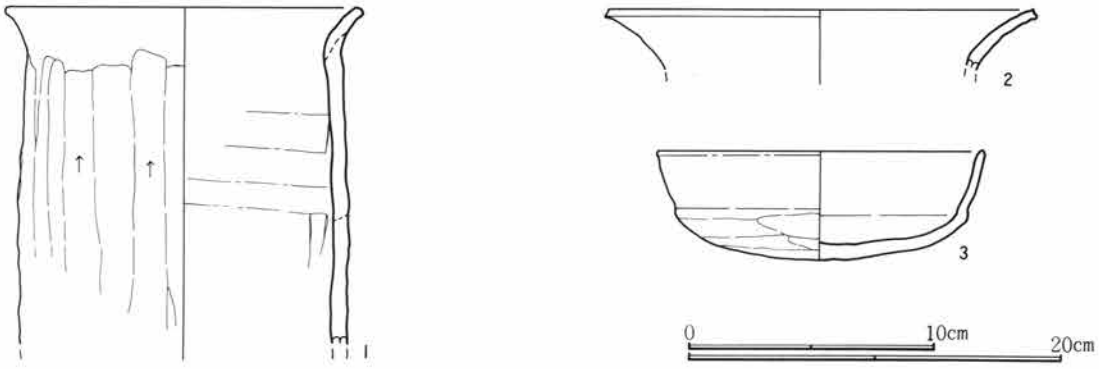


第124図　609号住居跡実測図

大きな支谷が走る。

平面形は東西・南北方向とも不明であるが、僅かに残る北壁から主軸方向はN－34°－Wを示すものと思われる。残存する北壁は最大で27cmを測る。床面は、ロームブロックを主とした暗褐色土で構築されていたものと思われる。掘り方調査時に、柱穴状のピットが七箇所で確認された。このうち主柱穴は、位置・形状等からＰ１～Ｐ４が該当するものと思われる。それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が57×42、Ｐ２が現状で36×24、Ｐ３が57×42、Ｐ４が36×42を測る。貯蔵穴については、Ｐ１の北側に隣接するピットが該当するものと思われるが、確証はない。なお、竈に関する情報は全く得られていない。

遺物は、北壁付近を中心に分布するが、極めて少ない。（富田）



第125図　609号住居跡出土遺物実測図

第51表　609号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
125－1 50	土師器 甕	床面＋22 破片	口 (18.0) 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
125－2	土師器 甕	覆土 破片	口 (22.6) 高　－ 底　－	①粗、石英・砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	内外面共口縁部ヨコナデ。	
125－3 50	土師器 坏	床面＋8 ⅔残存	口　13.0 高　4.3 底　丸底	①普、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内面吸炭により黒色を呈する

610号住居跡（第126・127図、第52表、図版29・51）

本住居跡は、第８次調査区北東端の緩斜面にあり、88・89―57・58グリッドに位置する。南北方向の54号溝が南西隅をかすめる。今回報告する住居跡の中では最北端に位置し、しかも最も低いレベルに所在する。東側には南北方向の比較的大きな支谷が走る。

一部調査区外にかかるが、平面形は東西３m36cm・南北３m87cmを測る長方形を呈していたものと思われる。主軸方向はN－19°－Eを示す。確認面からの壁高は最大で34cmを測る。床面には、ロームブロックを主とした貼床を施す。特に竈前は明瞭な硬化面を形成していた。

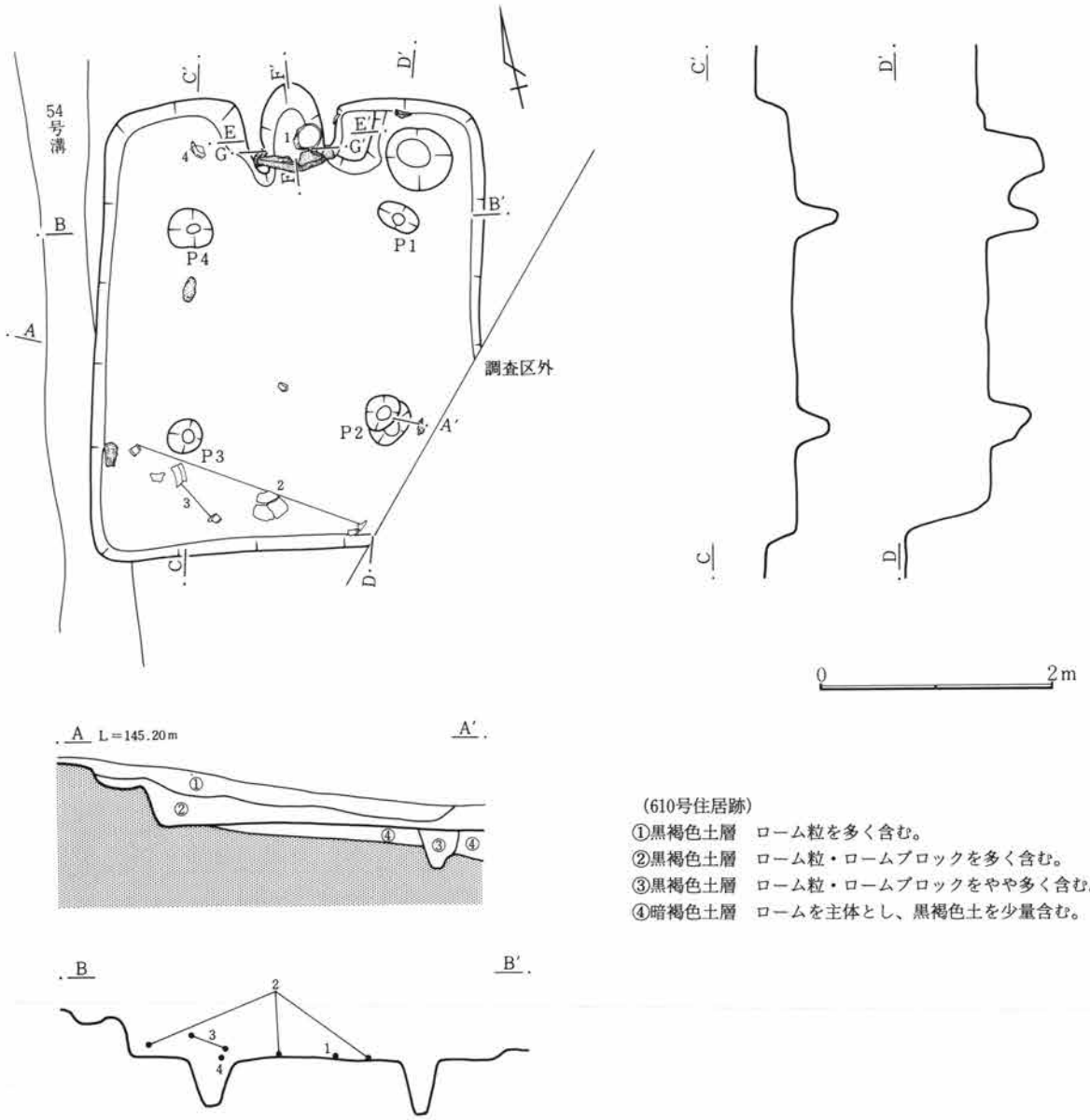
主柱穴は、住居外形の対角線上から四箇所確認された。覆土はローム粒・ロームブロックをやや多く含む黒褐色土であった。それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が36×48、Ｐ２が33×36、Ｐ３が33×24、Ｐ４が39×36を測る。Ｐ２については二時期に亘る可能性がある。柱穴間の寸法は、Ｐ１～Ｐ２が165cm、Ｐ２～Ｐ

3が168cm、P 3～P 4が174cm、P 4～P 1が175cmを測る。壁溝等の付属施設については、確認されていない。

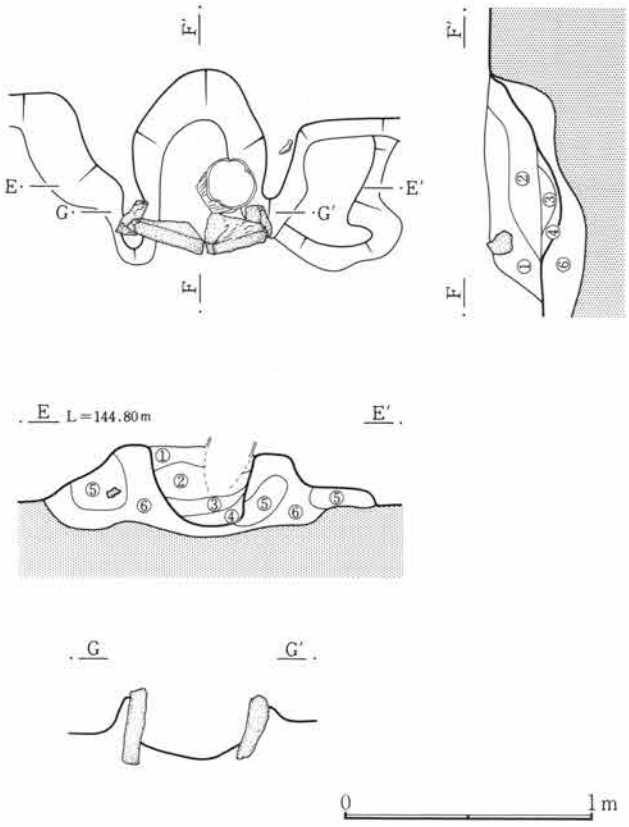
竈は北壁ほぼ中央にあり、幅39cm・奥行75cm・深さ30cmを測る。両袖石が遺存するほか、天井石と思われる石材が、破損した状態で出土した。竈右脇には貯蔵穴を画するような、床面より5～10cm程高く上面が平坦な段状の施設が認められた。粘土を主体とすることから、右袖の一部である可能性も想定される。燃焼部はややくぼみ、煙道部は緩やかに立ち上がる。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径60×51cm・深さ50cmを測る円形を呈する。覆土には、柱穴同様の黒褐色土が堆積していた。

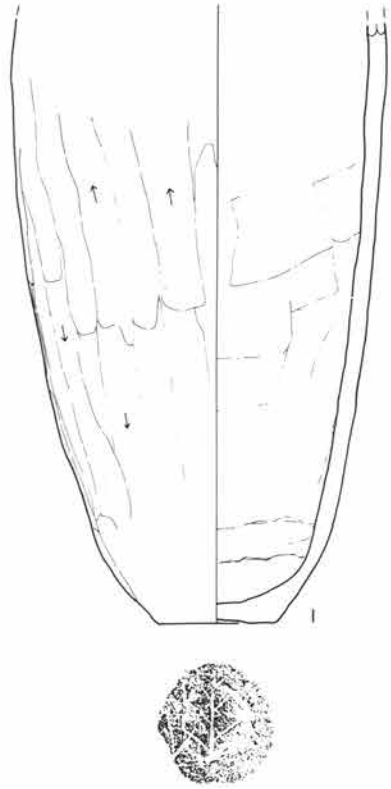
遺物は、竈周辺及び南壁周辺を中心に分布するが、全体量は少なく、個体の残存率も低い。竈内からは土師器甕1が出土している。土師器坏は同じ形態のもの3点が出土している。(中沢)



第126図　610号住居跡実測図(1)



竈
①黒褐色土層　ローム粒を少量、焼土粒を稀に含む。
②暗褐色土層　径5cmの焼土ブロックを含む。
③赤色土層　焼土を主体とした層。
④黒色土層　灰を多く含む。
⑤灰白色土層　粘土を多量に含む。
⑥暗褐色土層　ロームを主体とし、黒褐色土を含む。



第127図　610号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第52表　610号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
127－1 51	土師器 甕	竈内直上 ¾残存	口　－ 高　－ 底　6.4	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い黄橙色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	胴部下半に粘土多量に付着 底部に木葉痕あり
127－2 51	土師器 甕	床面＋4 破片	口（19.8） 高　－ 底　－	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。頸～胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
127－3 51	土師器 甕	床面＋12 破片	口（15.7） 高　－ 底　－	①粗、パミス・石英粒 ②酸化焔、やや軟質 ③黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
127－4 51	土師器 坏	床面＋6 ¾残存	口　12.4 高　4.6 底　丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
127－5	土師器 坏	覆土 破片	口（13.0） 高　－ 底　－	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
127－6	土師器 坏	覆土 破片	口（14.8） 高　4.5 底　－	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

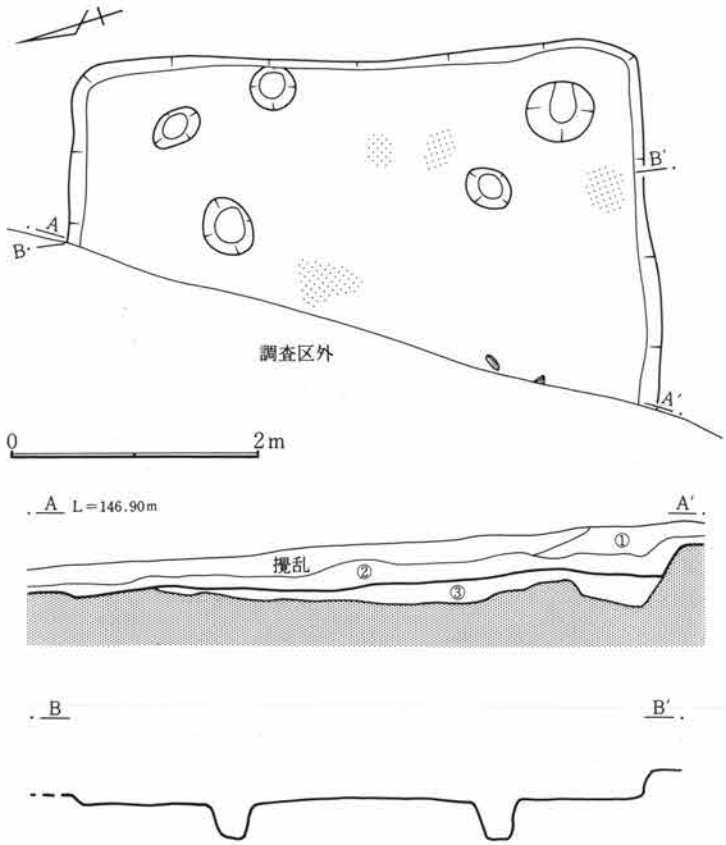
612号住居跡（第128図、図版29）

本住居跡は、第８次調査区北東端の緩斜面にあり、87―54グリッドに単独で位置する。南側には613号住居跡（古墳）が隣接する。表土の流出が著しく、残存状況は不良であった。

東西方向は不明であるが、南北方向は４m59cmを測り、主軸方向はN-114°-Eを示す。壁高は最大で18cmを測る。床面はロームと暗褐色土の混合土で構築されており、焼土粒の散布が認められた。

ピットは五箇所で確認されたが、主柱穴・貯蔵穴の特定は困難であった。また、竈に関する情報は得られていない。

遺物は、古墳時代後期に属する土師器甕・坏が少量出土しているが、小破片で図化できない。（中沢）



（612号住居跡）
①黒褐色土層　耕作土。
②暗褐色土層　ロームブロックを多量に含む。
③暗黄褐色土層　ロームを主体とした層。

第128図　612号住居跡実測図

613号住居跡（第129・130図、第53表、図版29・51・56）

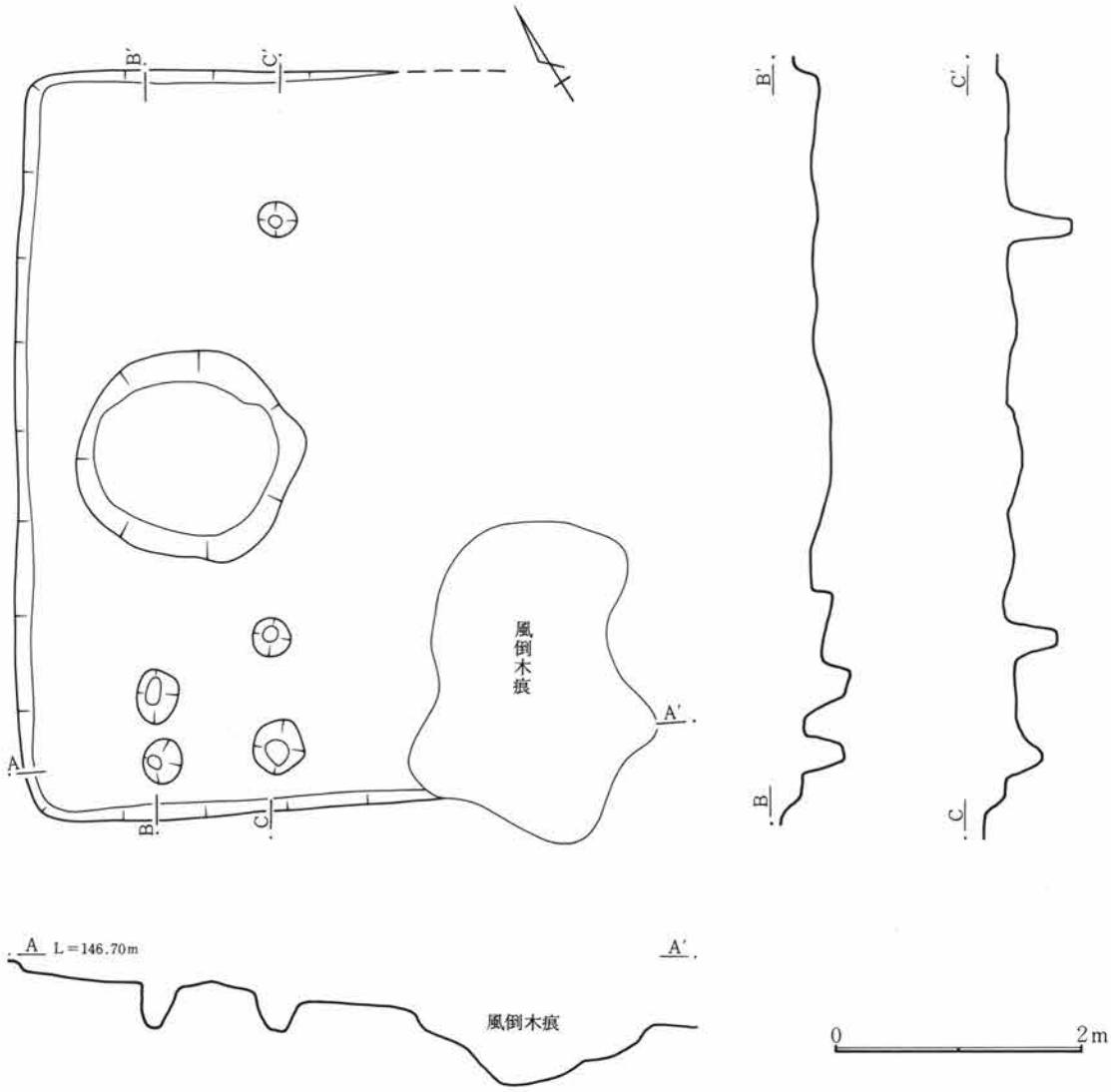
本住居跡は、第８次調査区北東端の緩斜面にあり、86•87—54グリッドに単独で位置する。北側に612号住居跡（古墳）が、南側に611号住居跡（奈良）が隣接する。表土の流失が著しく、残存状況は極めて不良で、掘り方に近い状態で確認された。

東西方向は不明であるが、南北方向は５m94cmを測り、主軸方向はN—32°—Eを示す。北西西隅付近の掘り込みは最大で18cmを測る。床面については明瞭に確認されていない。

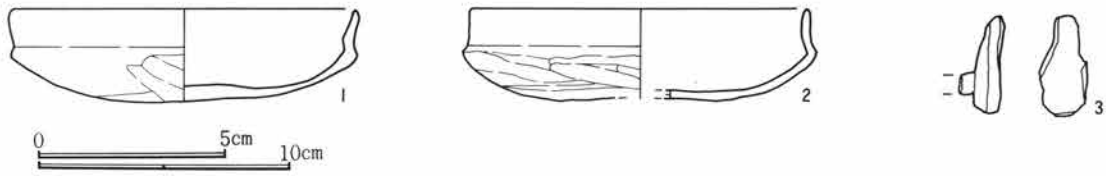
ピットは六箇所で確認された。このうち最大のものは、径186×162cm•深さ20cmを測る。その他の五基は、いずれも柱穴状のピットであるが、主柱穴の特定は困難であった。

竈・貯蔵穴等に関する情報は得られていない。

遺物は極めて少なく、個体の残存率も低い。いずれも覆土中からの出土であるが、平底気味の土師器坏１・２や、鉄製品３がある。（富田）



第129図　613号住居跡実測図



第130図　613号住居跡出土遺物実測図

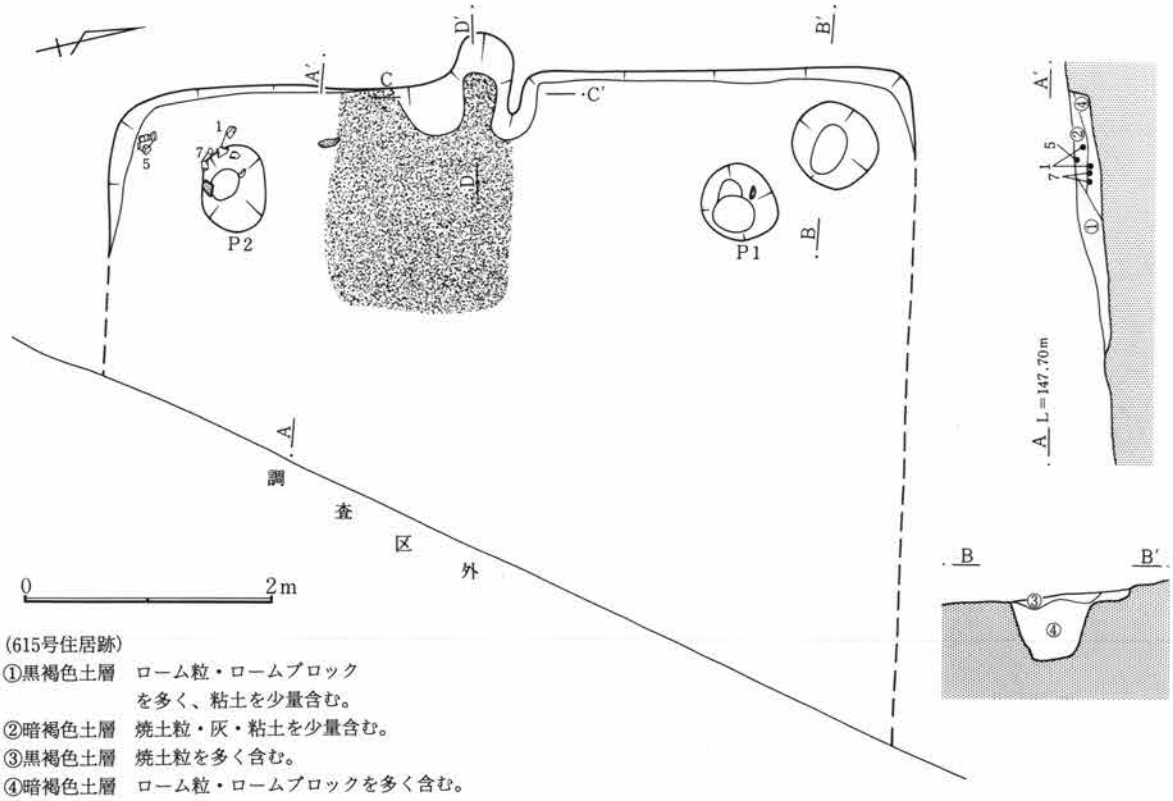
第53表　613号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
130— 1	土師器 坏	覆土 ¼残存	口 (11.8) 高 3.6 底 丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
130— 2 51	土師器 坏	覆土 ¼残存	口 (13.4) 高 — 底 —	①普、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。 内面　ナデ。	
130— 3 56	鉄製品	覆土	長 (2.7)　幅 (1.2) 厚 (0.7)　重 4.9			馬具（鈴具）？

615号住居跡（第131・132図、第54表、図版29・51）

本住居跡は、第８次調査区北東寄りの緩斜面にあり、71・72—46・47グリッドに単独で位置する。東側には、南北方向の支谷が所在し、それに関係する黒色土中で竈付近を中心に確認された。

表土の流失が著しく、東西方向は不明であるが、僅かに残る壁の立ち上がりから南北方向は６m48cmを測



(615号住居跡)
①黒褐色土層　ローム粒・ロームブロックを多く、粘土を少量含む。
②暗褐色土層　焼土粒・灰・粘土を少量含む。
③黒褐色土層　焼土粒を多く含む。
④暗褐色土層　ローム粒・ロームブロックを多く含む。

第131図　615号住居跡実測図(1)

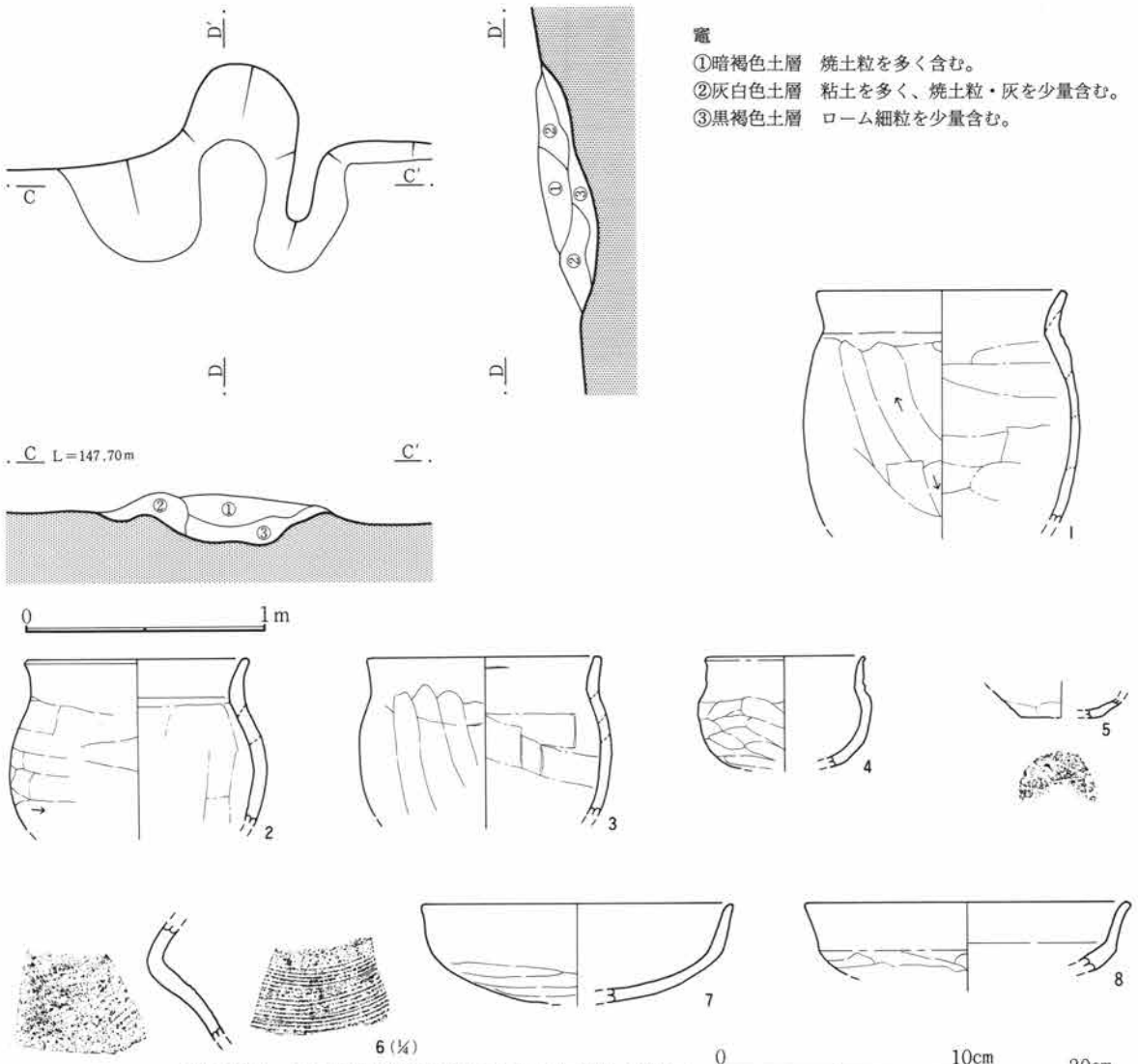
り、主軸方向はN－79°－Wを示す。確認面からの壁高は最大で24cmを測る。床面は、地山黒色土を叩き締めて構築されていたものと思われる。

主柱穴と思われるピットが二箇所で確認されており、規模（径×深さcm）はＰ１が60×76、Ｐ２が51×62を測る。壁溝等の付属施設については確認されていない。

竈は西壁中央やや南寄りにあり、構築材と思われる粘土が崩落した状態で確認された。

貯蔵穴は、北西隅にある径66×66cm・深さ60cmを測るピットが該当するものと思われる。

遺物は、南西隅付近を中心に分布するが、全体量は少なく、個体の残存率も低い。（富田）



第132図　615号住居跡実測図(2)出土遺物実測図

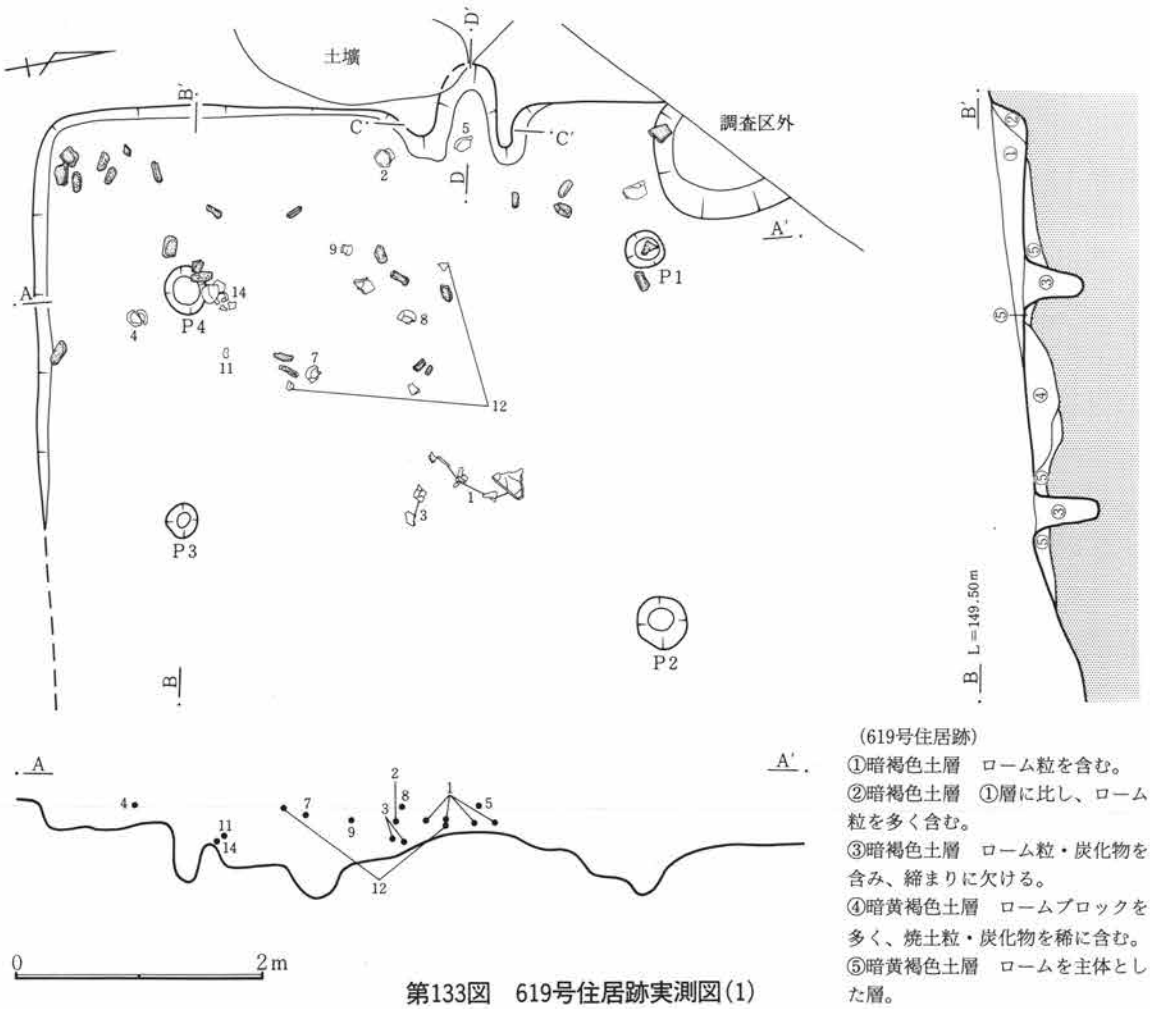
第54表　615号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
132－1 51	土師器 小型甕	床面－12 破片	口（13.5） 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
132－2	土師器 小型甕	貯蔵穴 覆土 破片	口（12.3） 高　－ 底　－	①粗、雲母・砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
132－3	土師器 小型甕	ピット覆土 破片	口 (13.0) 高　－ 底　－	①粗、石英・砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
132－4 51	土師器 短頸壺	覆土 破片	口 (8.8) 高　－ 底　－	①普、石英・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
132－5	土師器 小型甕	床面－2 破片	口　－ 高　－ 底 (4.2)	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
132－6 51	須恵器 甕	覆土 破片	口　－ 高　－ 底　－	①普、白色鉱物粒 ②還元焔、硬質 ③黄灰色	ロクロ成形。	
132－7	土師器 坏	床面－13 破片	口 (12.8) 高　－ 底　－	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
132－8	土師器 坏	覆土 破片	口 (13.4) 高　－ 底　－	①普、パミス ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

619号住居跡（第133～135図、第55表、図版30・51）

本住居跡は、第８次調査区北東寄りの緩斜面にあり、69・70―43・44グリッドに位置する。重複関係としては、620号住居跡（古墳）を切って構築されたものと思われる。



（619号住居跡）
①暗褐色土層　ローム粒を含む。
②暗褐色土層　①層に比し、ローム粒を多く含む。
③暗褐色土層　ローム粒・炭化物を含み、締まりに欠ける。
④暗黄褐色土層　ロームブロックを多く、焼土粒・炭化物を稀に含む。
⑤暗黄褐色土層　ロームを主体とした層。

第133図　619号住居跡実測図(1)

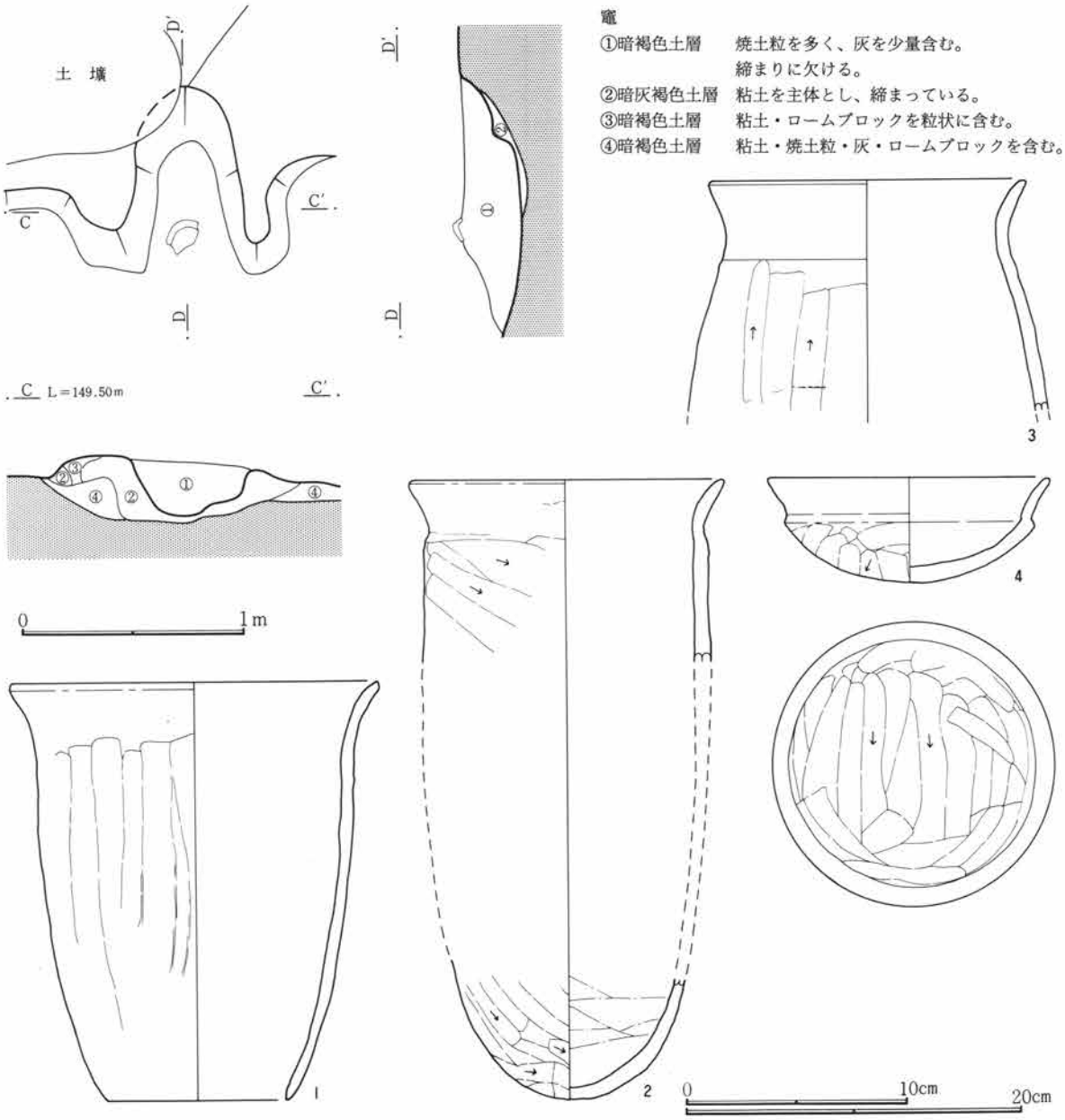
一部調査区外にかかるのと表土の流失が著しいために、平面形は不明であるが、竈から想定される主軸方向はN—80°—Wを示す。壁高は南西隅付近で、最大29cmを測る。大部分が620号住居跡の覆土中にかかるため、明瞭な貼床は検出されなかった。

ピットは四箇所で確認された。それぞれの規模（径×深さcm）は、P１が29×56、P２が40×56、P３が24×54、P４が39×42を測る。このうちP１・P２・P４が主柱穴に該当するものと思われる。壁溝等の付属施設については、確認されていない。

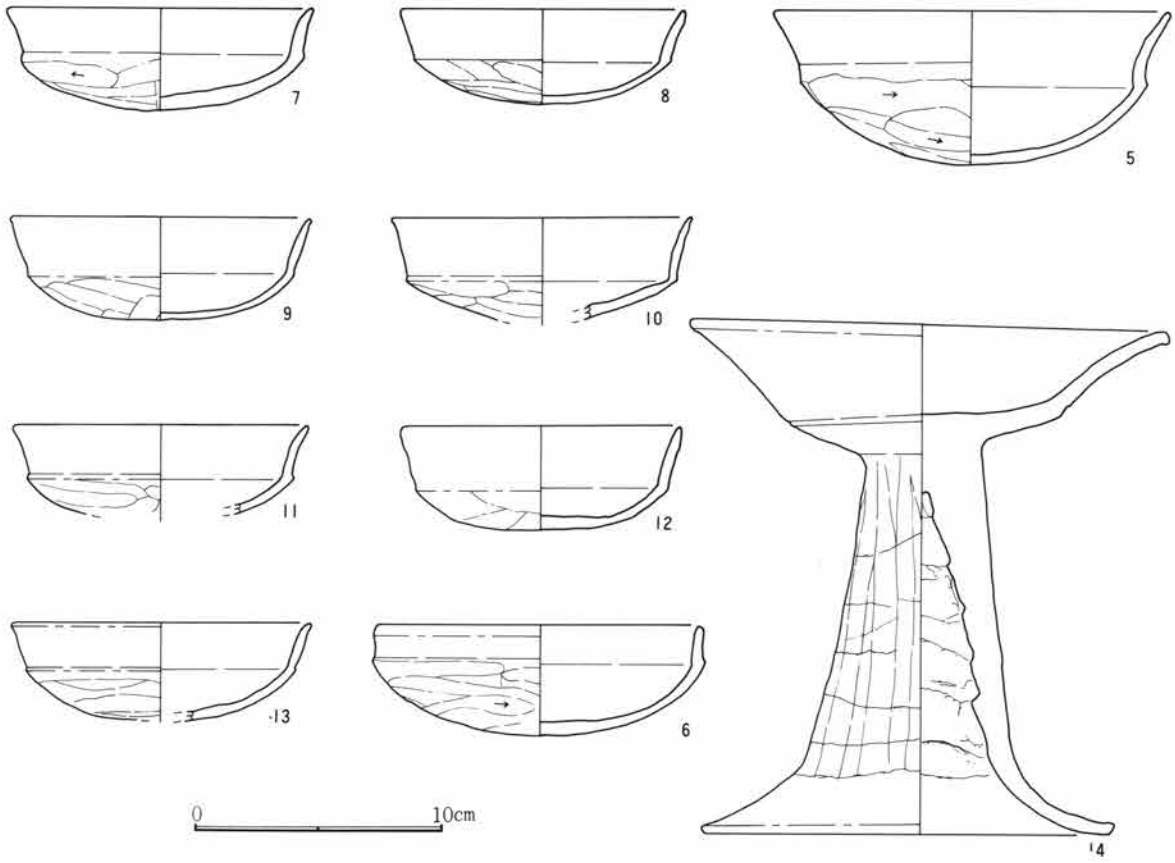
竈は西壁にあり、幅45cm・奥行81cm・深さ27cmを測る。

貯蔵穴は調査区外にかかるピットが該当するものと思われる。

遺物は竈周辺に散漫に分布するが、種類に乏しく、個体の残存率も低い。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩８個、点紋絹雲母石墨片岩３個、安山岩・流紋岩・熱変成岩各１個（計6.3kg）が検出されている。（関口功）



第134図　619号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第135図　619号住居跡出土遺物実測図(2)

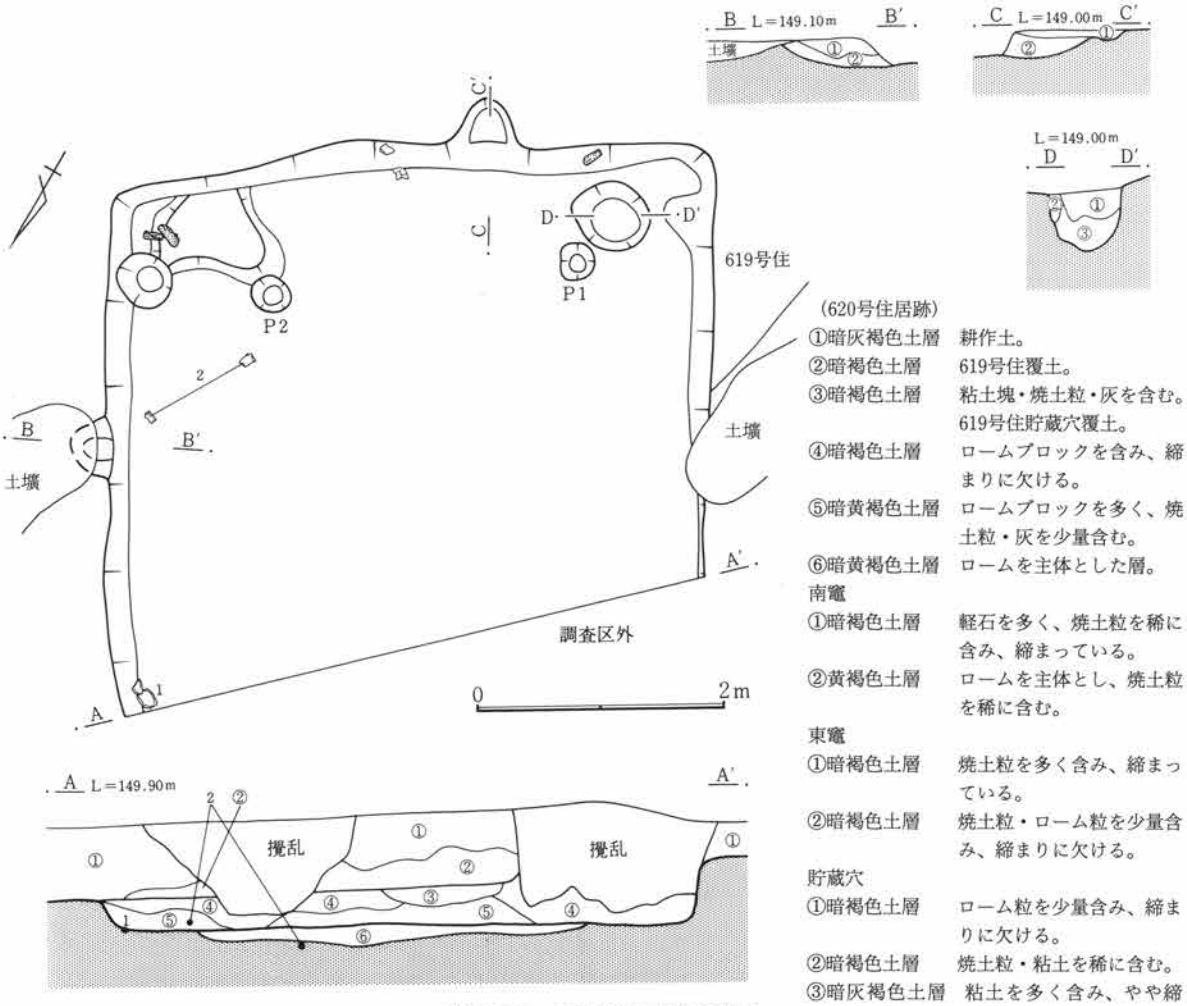
第55表　619号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
134－1 51	土師器 甑	床面直上 ⅓残存	口 (21.8) 高 24.6 底 (10.6)	①粗、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
134－2 51	土師器 甕	床面直上 破片	口 (18.8) 高 (36.5) 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③明赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
134－3	土師器 甕	床面－16 破片	口 (18.6) 高　— 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
134－4 51	土師器 坏	床面＋15 ほぼ完形	口 12.4 高 4.6 底 丸底	①普、パミス ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
135－5 51	土師器 坏	床面＋12 ½残存	口 15.6 高 6.0 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
135－6 51	土師器 坏	覆土 ⅓残存	口 (13.1) 高 4.4 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
135－7 51	土師器 坏	床面＋6 ⅔残存	口 12.2 高 4.0 底 丸底	①粗、石英・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
135－8 51	土師器 坏	床面＋11 ⅔残存	口 11.4 高 3.7 底 丸底	①普、パミス・黒色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
135－9	土師器 坏	床面直上 ¼残存	口 (11.9) 高 4.0 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面 口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面 ナデ。	
135－10	土師器 坏	覆土 ¼残存	口 (12.0) 高 － 底 －	①普、白色・褐色鉱物粒 ②酸化焔、やや硬質 ③橙色	外面 口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。 内面 ナデ。	
135－11	土師器 坏	床面－10 破片	口 (11.7) 高 － 底 －	①普、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面 口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。 内面 ナデ。	
135－12	土師器 坏	床面直上 破片	口 (11.0) 高 4.1 底 丸底	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面 口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面 ナデ。	
135－13	土師器 坏	覆土 ¼残存	口 (11.9) 高 － 底 －	①普、褐色鉱物粒 ②酸化焔、硬質 ③鈍い橙色	外面 口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。 内面 ナデ。	
135－14 51	土師器 高　坏	床面－14 ¾残存	口 19.0 高 20.2 底 16.0	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	外面 口縁部ヨコナデ。坏体～脚部へラケズリ。 内面 ナデ。	

620号住居跡（第136・137図、第56表、図版30・51）

本住居跡は、第８次調査区北東寄りの緩斜面にあり、69･70―43･44グリッドに位置する。619号住居跡（古墳）に住居跡の大部分を破壊されたために、掘り方に近い状態で確認された。



(620号住居跡)
①暗灰褐色土層　耕作土。
②暗褐色土層　619号住覆土。
③暗褐色土層　粘土塊・焼土粒・灰を含む。619号住貯蔵穴覆土。
④暗褐色土層　ロームブロックを含み、締まりに欠ける。
⑤暗黄褐色土層　ロームブロックを多く、焼土粒・灰を少量含む。
⑥暗黄褐色土層　ロームを主体とした層。

南竈
①暗褐色土層　軽石を多く、焼土粒を稀に含み、締まっている。
②黄褐色土層　ロームを主体とし、焼土粒を稀に含む。

東竈
①暗褐色土層　焼土粒を多く含み、締まっている。
②暗褐色土層　焼土粒・ローム粒を少量含み、締まりに欠ける。

貯蔵穴
①暗褐色土層　ローム粒を少量含み、締まりに欠ける。
②暗褐色土層　焼土粒・粘土を稀に含む。
③暗灰褐色土層　粘土を多く含み、やや締まっている。

第136図　620号住居跡実測図

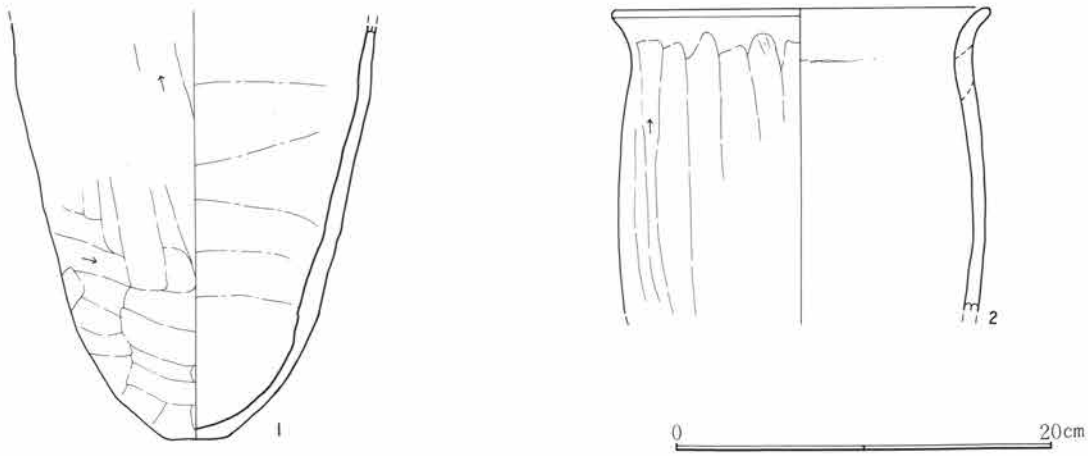
一部調査区外にかかるため、南北方向は不明であるが、東西方向は4m86cmを測る。南東寄りに位置する竈から想定される主軸方向は、N—148°—Eを示す。残存する壁高は最大で13cmを測る。破壊が著しいため断定はできないが、床面は黄褐色土ローム（地山）を直接叩き締めて構築されたものと思われる。

南壁を画する掘り込みとピット四基が検出されているが、このうちＰ１とＰ２が主柱穴と思われる。規模（径×深さcm）は、Ｐ１が30×32、Ｐ２が33×28を測る。壁溝等の付属施設については確認されていない。

竈の痕跡は二箇所で確認された。残存状況から東竈→南竈の関係と思われる。

南竈に伴う貯蔵穴は南西隅の径57×54cm・深さ45cmを測るピットが該当するものと思われる。東竈に伴う貯蔵穴については、明瞭には確認されていない。

遺物は少なく、個体の残存率も低い。（関口功）



第137図　620号住居跡出土遺物実測図

第56表　620号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
137—1 51	土師器 甕	床面直上 破片	口　— 高　— 底　2.8	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③明赤褐色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
137—2	土師器 甕	床面—14 破片	口（20.1） 高　— 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

623号住居跡（第138・139図、第57表、図版30・52・56）

本住居跡は、第８次調査区中央部の平坦面にあり、70—35・36グリッドに単独で位置する。周囲の住居跡の分布は散在的である。

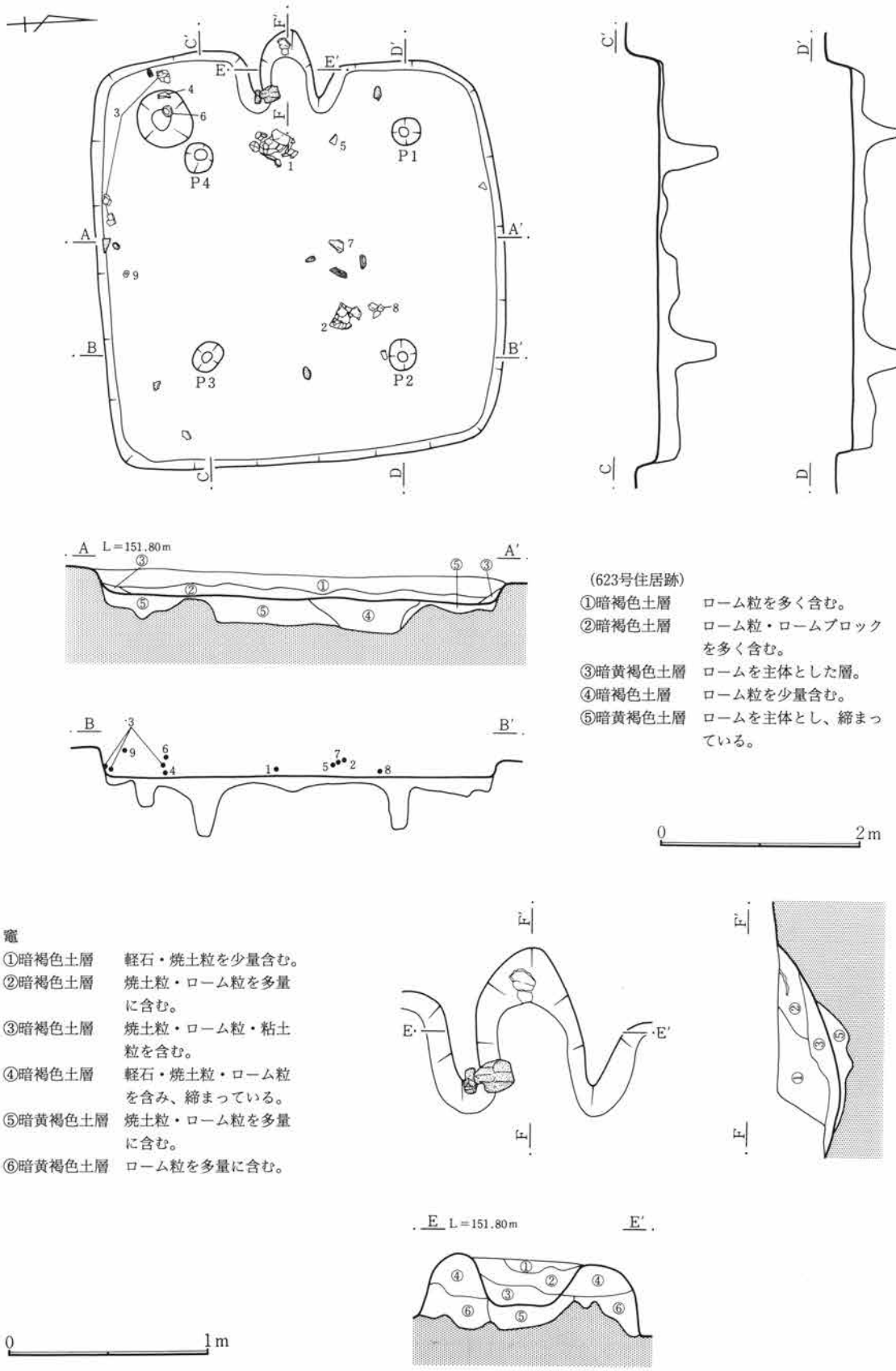
規模は東西３m81cm・南北４m02cmを測るが、竈左脇の西壁が若干張り出している。主軸方向はN—92°—Wを示す。確認面からの壁高は最大で30cmを測る。床面には、竈前を中心に貼床を施す。

主柱穴は四箇所で確認され、規模（径×深さcm）は、Ｐ１が27×48、Ｐ２が30×54、Ｐ３が30×63、Ｐ４が30×54を測る。壁溝等の付属施設については、確認されていない。

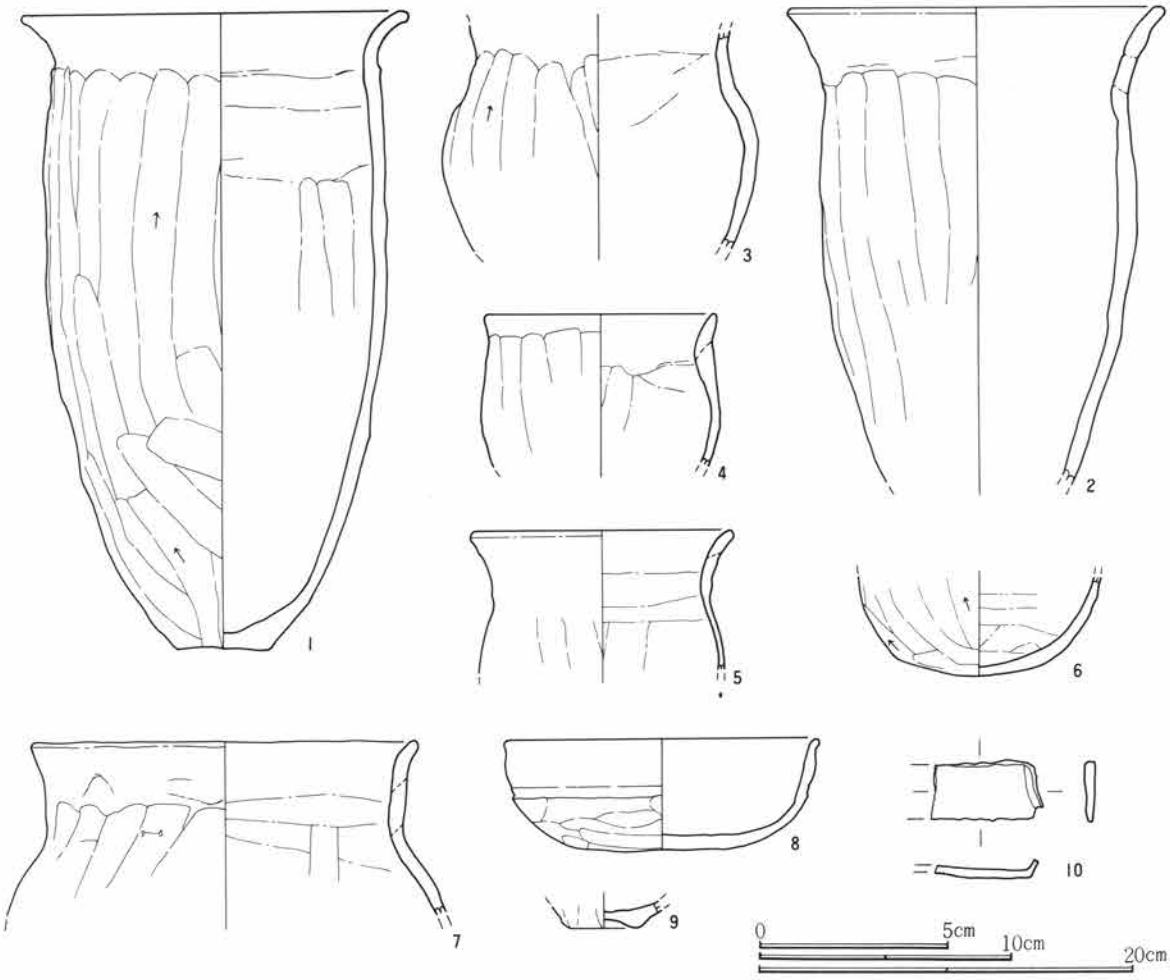
竈は西壁中央やや南寄りにあり、幅39cm・奥行81cm・深さ33cmを測る。左袖の先端に破損した石材が認められるものの、構築材と見られるものが殆ど検出されていない。

貯蔵穴は竈左脇にあり、径60×54cm・深さ66cmを測る円形を呈する。

遺物は竈前・貯蔵穴付近を中心に分布する。覆土中ではあるが、鉄製品も出土している。（関口功・富田）



第138図　623号住居跡実測図



第139図　623号住居跡出土遺物実測図

第57表　623号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
139－1 52	土師器 甕	床面＋5 ほぼ完形	口　19.9 高　33.6 底　5.0	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
139－2	土師器 甕	床面＋14 ⅓残存	口　(19.6) 高　— 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
139－3	土師器 小型甕	床面＋6 ½残存	口　— 高　— 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
139－4 52	土師器 小型甕	床面直上 ¼残存	口　(12.2) 高　— 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	摩滅が著しい
139－5	土師器 小型甕	床面＋10 破片	口　(13.8) 高　— 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	摩滅が著しい
139－6	土師器 甕	床面＋9 破片	口　— 高　— 底　丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　胴部下半～底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
139－7 52	土師器 甕	床面＋12 破片	口　(20.5) 高　— 底　—	①粗、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
139－8 52	土師器 坏	床面＋5 ⅓残存	口 (12.4) 高 4.4 底 丸底	①普、石英・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
139－9	土師器 小型甕 ?	床面＋23 破片	口 — 高 — 底 4.0	①粗、白色鉱物粒多 ②酸化焔、軟質 ③黄橙色	外面　ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
139－10 56	鉄製品 ?	覆土	長 (3.0)　幅 1.6 厚 0.3　重 (2.9)			

625号住居跡（第140・141図、第58表、図版30・31・52）

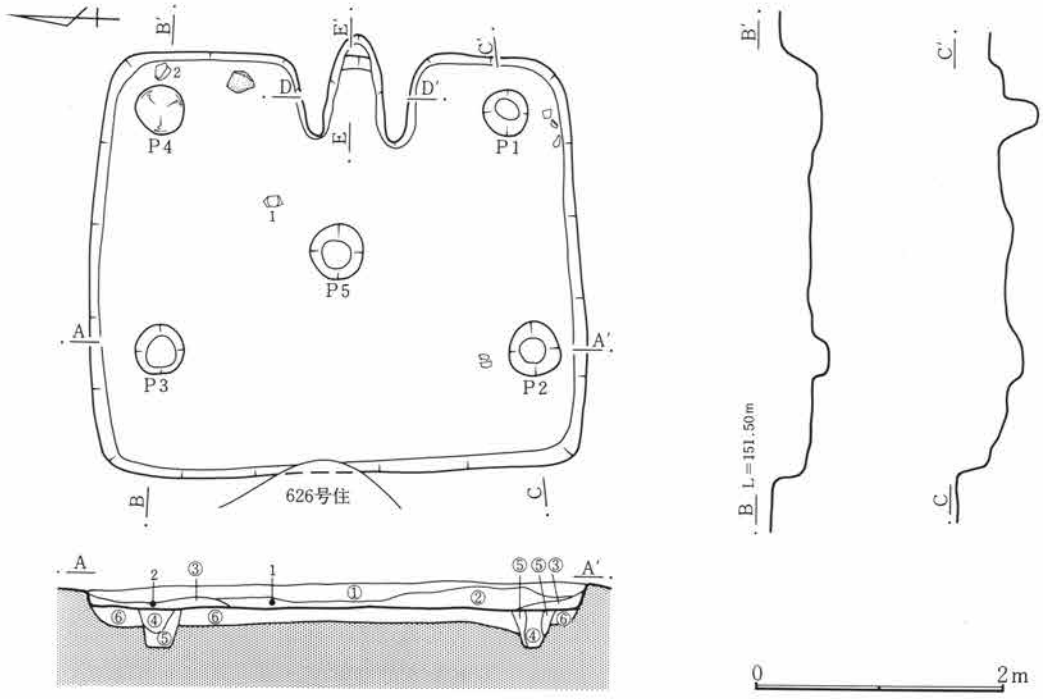
本住居跡は、第8次調査区中央部の平坦面にあり、72—35グリッドに位置する。重複関係としては626号住居跡（古墳）に西壁中央が若干破壊される。

平面形は東西3m33cm・南北3m93cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN—87°—Eを示す。確認面からの壁高は最大で34cmを測る。床面には、竈前を中心に貼床を施す。

ピットは五箇所で確認された。P4については疑問が残るが、規模（径×深さcm）はP1が36×40、P2が45×30、P3が39×30、P4が37×8、P5が42×66を測る。貯蔵穴・周溝等の付属施設については確認されていない。

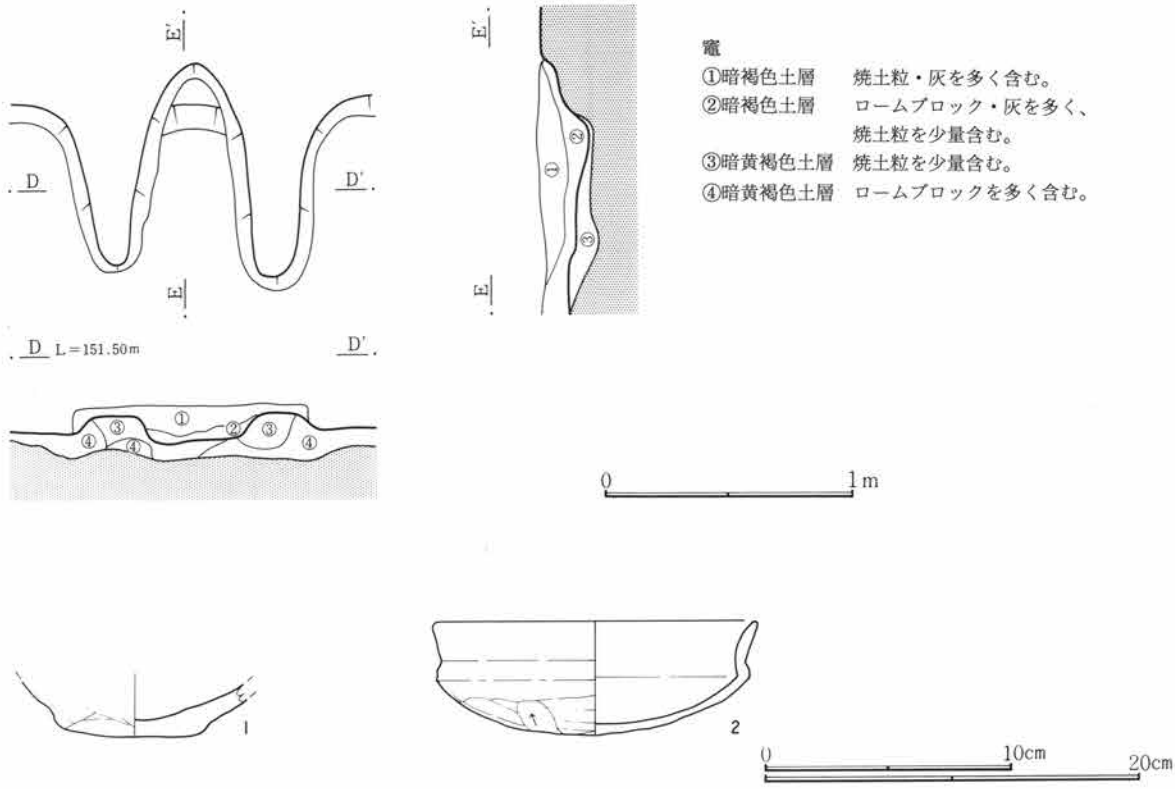
竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅39cm・奥行87cm・深さ20cmを測るが、残存状況は不良である。

遺物は少なく、図化できたのは僅かに2点である。（関口功）



（625号住居跡）
①暗褐色土層　軽石を多く含む。
②暗褐色土層　ロームブロックを含む。
③暗褐色土層　ロームブロックを多く含む。
④暗黄褐色土層　ローム粒・ロームブロックを多く含む。
⑤暗褐色土層　炭化物を稀に含む。
⑥暗褐色土層　ロームブロックを多く含む。

第140図　625号住居跡実測図(1)



第141図　625号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第58表　625号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
141－1	土師器 甕	床面直上 破片	口　— 高　— 底　8.0	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い褐色	外面　胴部下半へラケズリ。 内面　ナデ。	
141－2 52	土師器 坏	床面直上 ½残存	口　12.8 高　4.5 底　丸底	①普、白色鉱物粒 ②酸化焔、やや硬質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	

626号住居跡（第142・143図、第59表、図版31・52）

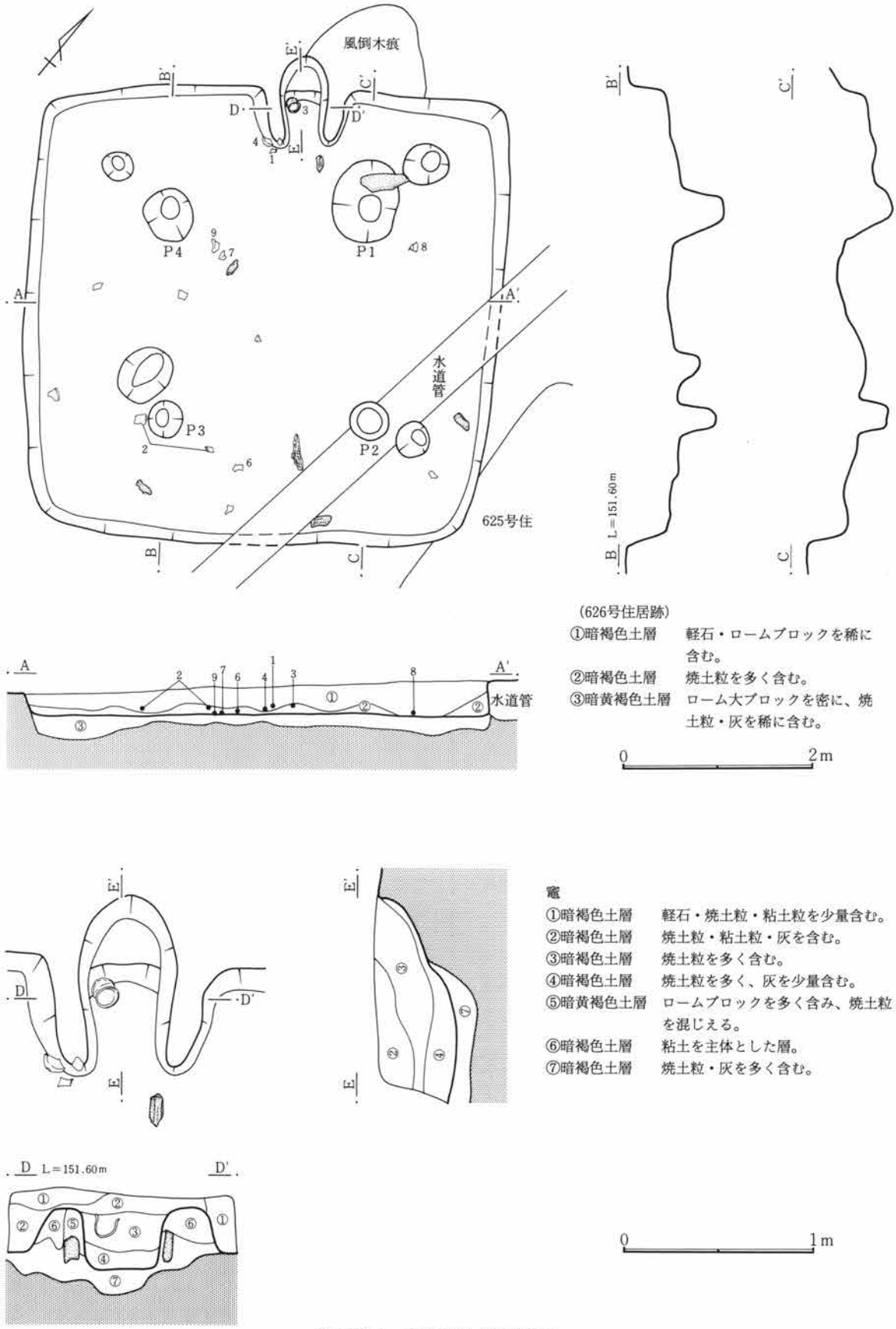
本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、72・73—34・35グリッドに位置する。前出の625号住居跡（古墳）の西壁を一部掘り込んで構築され、水道管敷設に伴う攪乱を受ける。

平面形は、東西４m92cm・南北４m65cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN—33°—Wを示す。確認面からの壁高は最大で40cmを測る。床面には、竈前を中心に貼床を施す。

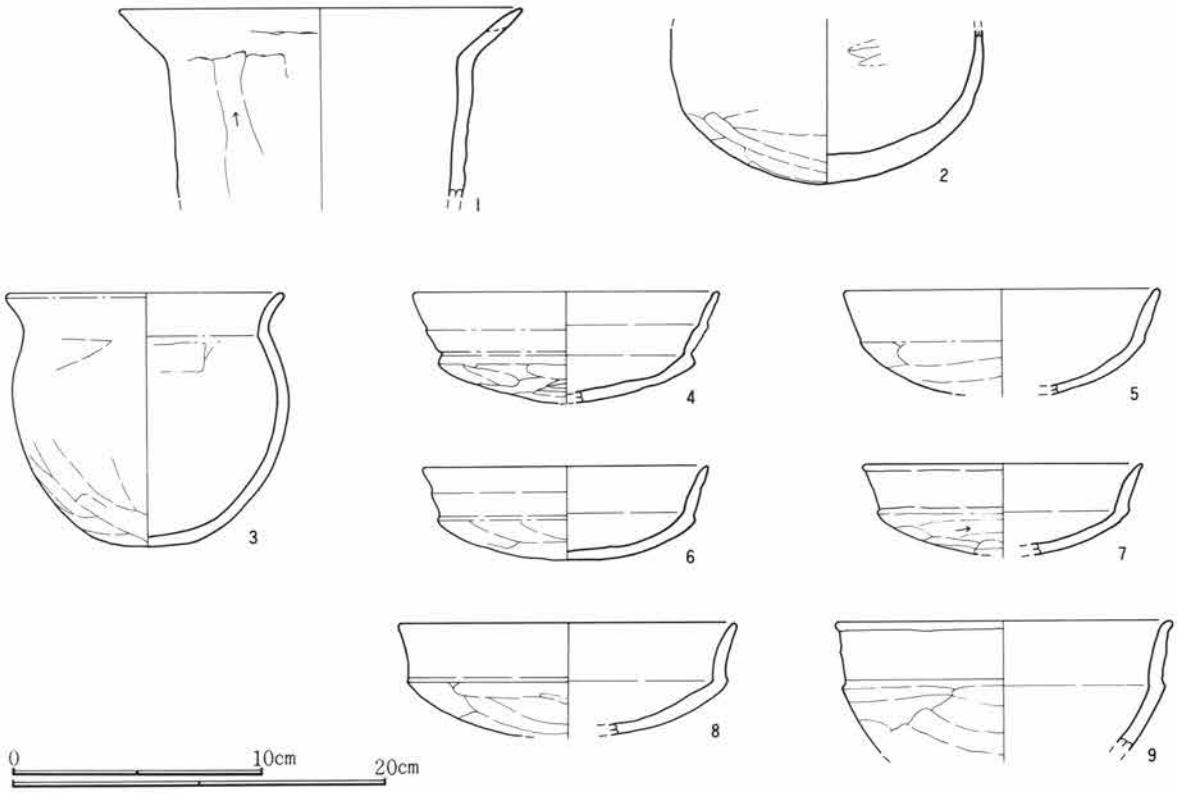
主柱穴は四箇所で確認され、規模（径×深さcm）はＰ１が84×54、Ｐ２が現状で39×32、Ｐ３が36×51、Ｐ４が54×60を測る。風倒木痕を切って構築されたＰ１は、本来は小規模なものであろう。他に柱穴状のピットも認められるがその機能等については不詳である。壁溝等の付属施設については、確認されていない。

竈は北壁中央やや東寄りにあり、幅40cm・奥行93cm・深さ42cmを測る。両袖内部には石材が遺存していた。貯蔵穴は竈右脇にある径45×41cm・深さ104cmを測るピットが該当するものと思われる。

遺物は、土師器の小型甕３や口縁部に段を有する土師器坏４などが出土している。他に、炭化材や薦編石状の絹雲母石墨片岩・点紋絹雲母石墨片岩各１個（計0.8kg）が検出されている。（関口功）



第142図　626号住居跡実測図



第143図　626号住居跡出土遺物実測図

第59表　626号住居跡出土遺物観察表

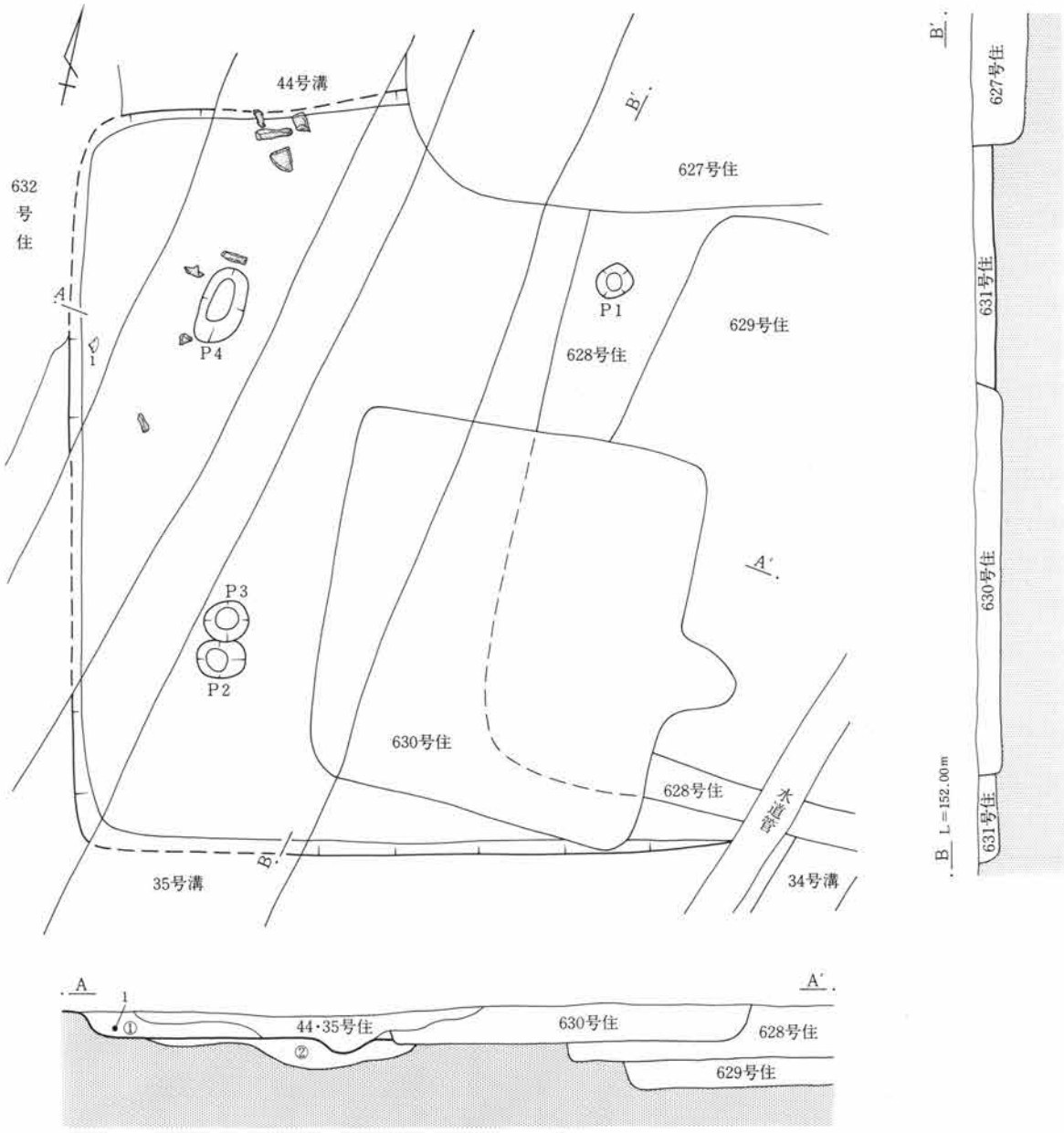
挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
143－1	土師器 甑　？	床面＋9 破片	口 (21.4) 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
143－2	土師器 甕　？	床面＋7 破片	口　－ 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③橙色	外面　体～底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
143－3 52	土師器 小型甕	竈内＋9 ¾残存	口　14.7 高　13.4 底　丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	摩滅が著しい
143－4 52	土師器 坏	竈内＋5 ¼残存	口 (12.2) 高　－ 底　丸底	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
143－5 52	土師器 坏	覆土 ¼残存	口 (12.5) 高　－ 底　丸底	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
143－6	土師器 坏	床面＋4 破片	口 (11.9) 高　3.7 底　丸底	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
143－7	土師器 坏	床面直上 破片	口 (10.0) 高　－ 底　丸底	①普、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
143－8	土師器 坏	床面直上 破片	口 (13.2) 高　－ 底　丸底	①普、黒色鉱物粒 ②酸化焔、やや硬質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
143－9	土師器 坏	床面直上 破片	口 (13.2) 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

631号住居跡（第144・145図、第60表、図版31）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、68・69—32グリッドに位置する。627号・628号・629号住居跡（奈良）・630号住居跡（平安・未報告）に破壊されるほか、35号溝・44号溝が南北方向に縦断する。632号住居跡（古墳）との切り合い関係は不明瞭であった。

東西方向は不明であるが、僅かに残る北壁と南壁から南北方向は６m48cmを測り、主軸方向はN—11°—Wを示すものと思われる。確認面からの壁高は最大で36cmを測る。床面には貼床が施されていたと思われるが、破壊が著しく明瞭には確認されなかった。

ピットは四箇所で確認された。それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が33×58、Ｐ２が42×54、Ｐ３が



（631号住居跡）
①暗褐色土層　軽石を多く含む。
②暗褐色土層　焼土粒を少量含む。

0　2m

第144図　631号住居跡実測図

36×54、Ｐ４が72×45を測る。Ｐ４は楕円形を呈するが本来は円形を呈していたものと思われる。主柱穴の可能性が高いと思われるが詳細は不明である。また、竈・貯蔵穴・壁溝等の付属施設については、確認されていない。

遺物は極めて少なく、個体の残存率も低い。図化した遺物はいずれも小破片であった。(関口功)

第145図　631号住居跡出土遺物実測図

第60表　631号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
145－1	土師器 甕	床面＋8 破片	口 (22.0) 高　－ 底　－	①粗、パミス・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
145－2	土師器 坏	覆土 破片	口 (13.6) 高　－ 底　－	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③褐灰色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内外面共吸炭により黒色を呈する

632号住居跡（第146～148図、第61表、図版31・32・52）

本住居跡は、第７次調査区中央部の平坦面にあり、68･69―31グリッドに位置する。631号住居跡(古墳)と重複するが、631号住居跡の時期を特定できる確実な遺物も認められず、切り合い関係も不明瞭であるので新旧関係は不明である。また、29号・30号溝が南北方向を縦断するが床面までには及んでいない。

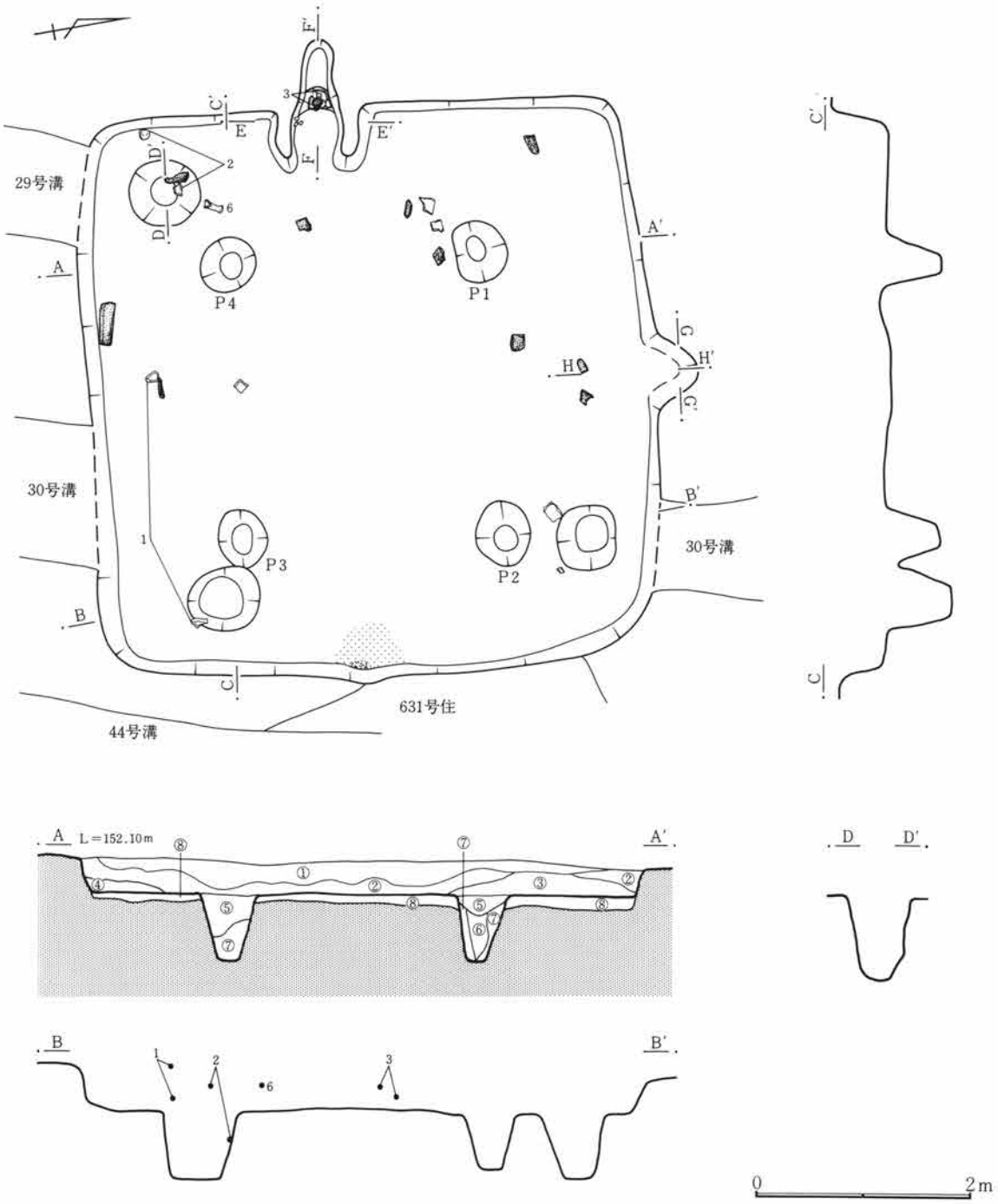
平面形は東西５m19cm・南北５m22cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN―79°―Wを示す。確認面からの壁高は最大で60cmを測る。床面には、ロームを主とした貼床が施されていた。

主柱穴は四箇所確認されており、それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が54×60、Ｐ２が57×66、Ｐ３が51×60、Ｐ４が51×60を測る。柱穴間の寸法はＰ１～Ｐ２が265cm、Ｐ２～Ｐ３が240cm、Ｐ３～Ｐ４が252cm、Ｐ４～Ｐ１が228cmを測る。壁溝等の付属施設については確認されていない。

竈は痕跡も含め、西壁･北壁･東壁の三箇所で確認された。廃棄時の竈は西壁やや南寄りにあり、幅40cm･奥行120cm(屋外長60cm)･深さ54cmを測る。燃焼部は焚口よりややくぼみ、煙道部は緩やかに立ち上がる。内部からは、用材と思われる石材と土師器坏３が破損した状態で出土した。北竈は構築時の掘り込みが認められた。燃焼部から煙道部の焼土化が顕著で長期間使用されたものと思われる。東竈については焼土粒・灰が散布し、住居外に掘り込みが若干認められることから竈の痕跡と認定した。北竈と東竈の前後関係は不明である。

貯蔵穴も三箇所で確認されており、西竈に伴うものは径66×60cm・深さ75cmを測る円形を呈し、北竈に伴うものは、径57×54cm・深さ72cmを測る方形を呈する。東竈に伴う貯蔵穴は、やや方形気味で径69×63cm・深さ72cmを測る。

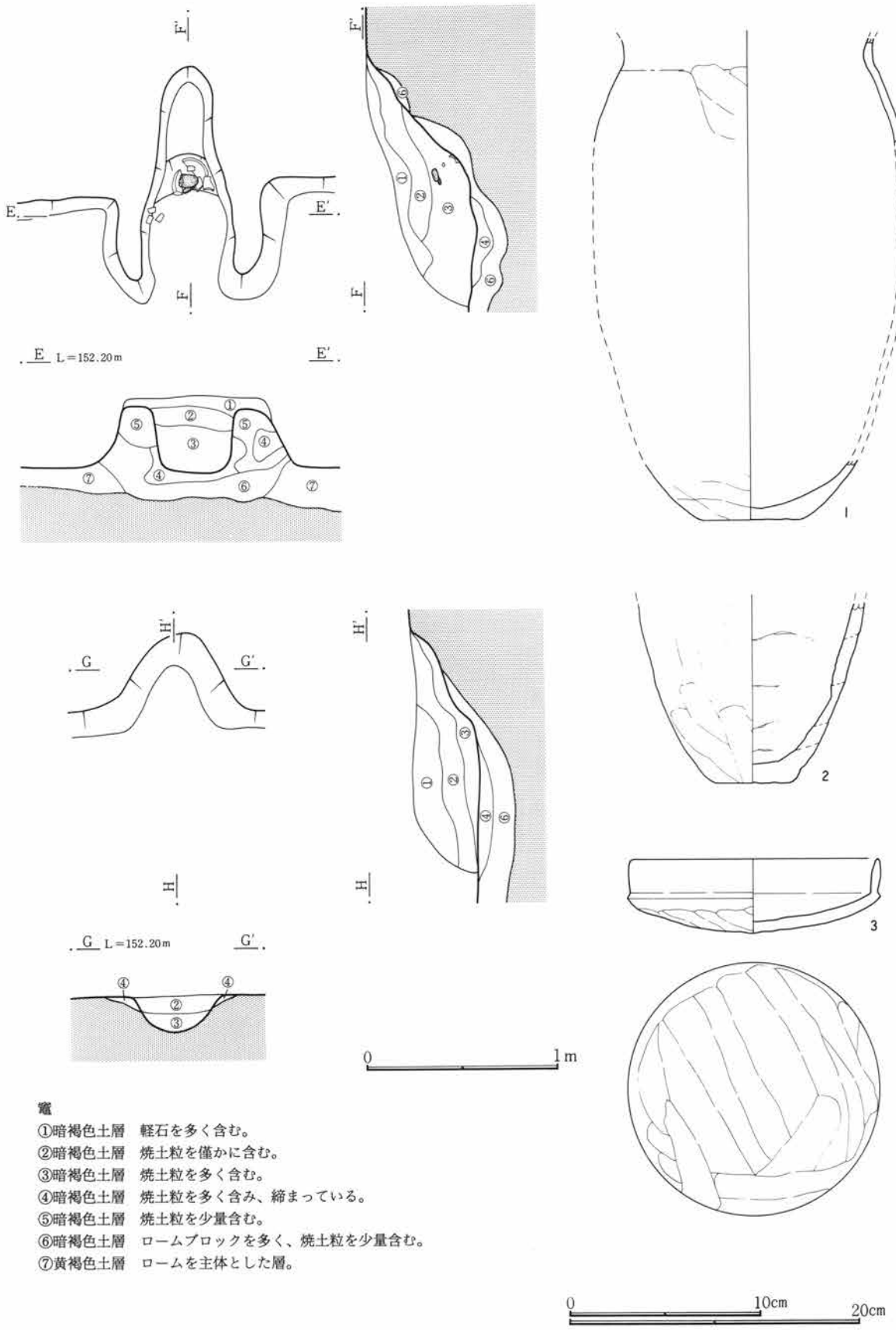
遺物は西竈周辺を中心に分布するが、個体の残存率は低い。直立気味の口縁部をもつ土師器の坏などが出土している。(関口功・富田)



(632号住居跡)

①暗褐色土層　軽石を多く含む。
②暗黄褐色土層　ロームブロックを多く含む。
③暗褐色土層　ローム細粒を多く、焼土粒・炭化物を少量含む。
④暗黄褐色土層　ロームブロック・焼土粒を多く含む。
⑤暗褐色土層　ロームブロックを少量含む。
⑥暗黄褐色土層　焼土粒を少量含む。
⑦暗黄褐色土層　ローム細粒を多く含む。
⑧黄褐色土層　ロームを主体とした層。

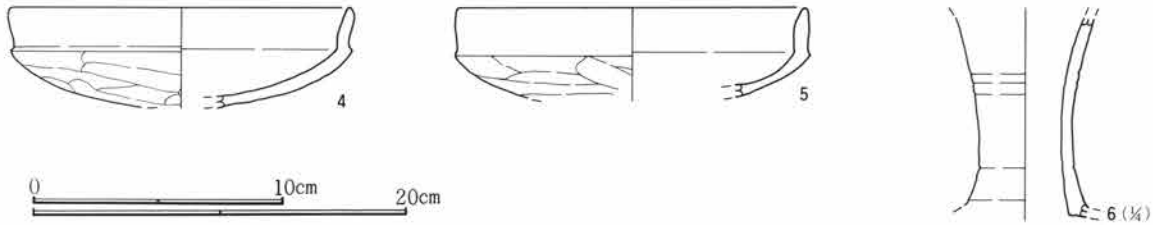
第146図　632号住居跡実測図(1)



竈

①暗褐色土層　軽石を多く含む。
②暗褐色土層　焼土粒を僅かに含む。
③暗褐色土層　焼土粒を多く含む。
④暗褐色土層　焼土粒を多く含み、締まっている。
⑤暗褐色土層　焼土粒を少量含む。
⑥暗褐色土層　ロームブロックを多く、焼土粒を少量含む。
⑦黄褐色土層　ロームを主体とした層。

第147図　632号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第148図　632号住居跡出土遺物実測図(2)

第61表　632号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
147－1	土師器 甕	床面直上 破片	口　－ 高　－ 底　(6.8)	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内面黒色を呈する
147－2	土師器 甕	貯蔵穴内 －38 破片	口　－ 高　－ 底　5.0	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
147－3 52	土師器 坏	竈内直上 ほぼ完形	口　12.7 高　3.7 底　丸底	①普、石英粒少 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
148－4	土師器 坏	覆土 破片	口　(13.5) 高　－ 底　丸底	①粗、石英粒多 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
148－5	土師器 坏	覆土 破片	口　(14.0) 高　－ 底　－	①普、褐色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内外面共黒色を呈する
148－6 52	須恵器 長頸壺	床面＋14 頸部片	口　－ 高　－ 底　－	①普、黒色鉱物粒 ②還元焔、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	自然釉

635号住居跡（第149・150図、第62表、図版32・52）

本住居跡は、第８次調査区中央部の平坦面にあり、61・62—31グリッドに位置する。636号住居跡（奈良）に住居跡北半部を床下まで掘り込まれている。南側には、古墳時代後期に属する比較的大型の住居跡が多く所在し、東側には、古墳時代後期と平安時代を中心とする住居跡が重複・密集する。

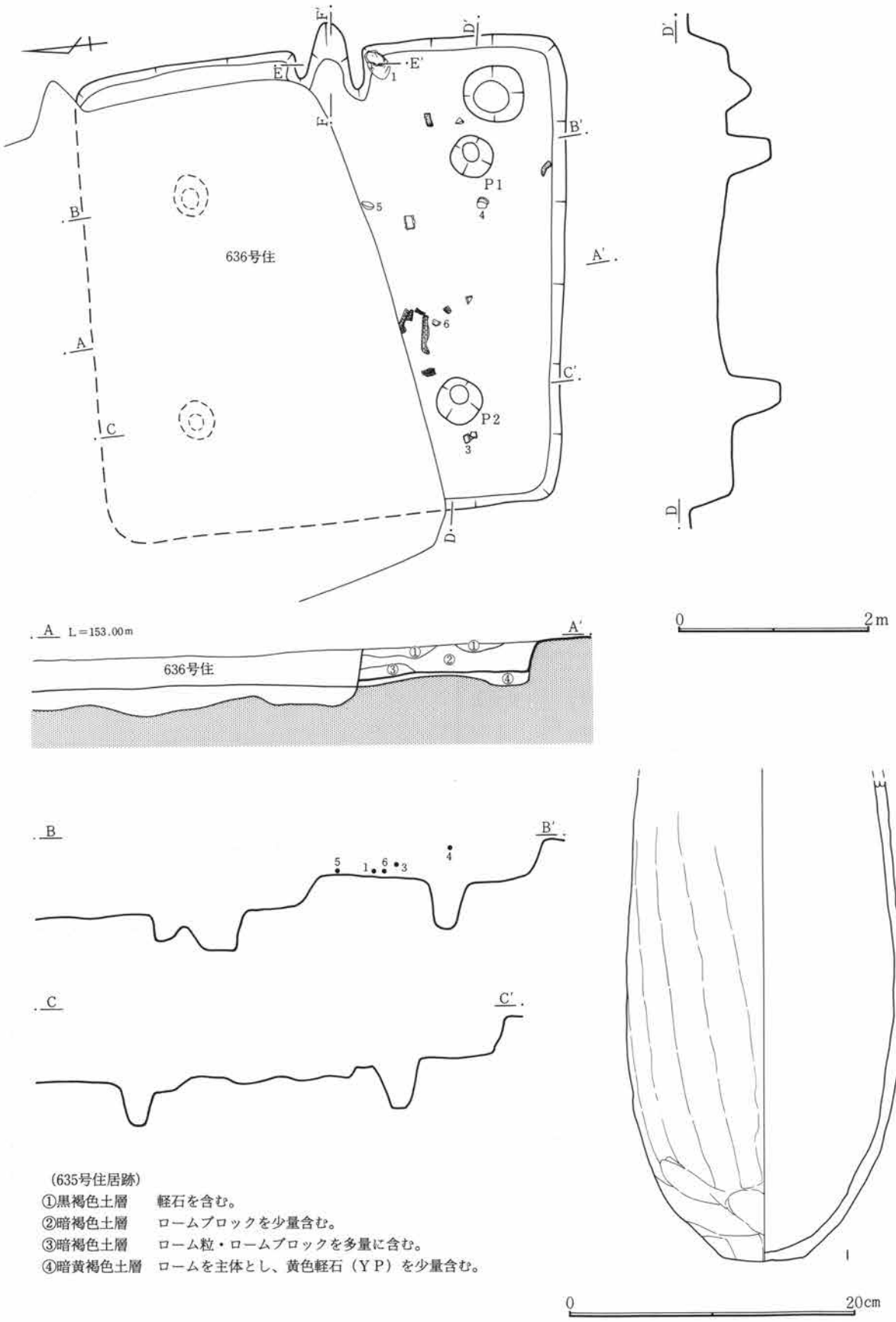
上記の理由により、南北方向は不明であるが、東西方向は４m86cm測る。主軸方向はN—97°—Eを示すものと思われる。確認面からの壁高は最大で35cmを測る。床面には貼床を施していたと思われるが、その全容は明らかではない。

主柱穴は、二箇所で確認された。それぞれの規模（径×深さcm）は、Ｐ１が45×54、Ｐ２が48×60を測る。掘り方調査によって、Ｐ１・Ｐ２に対応すると思われる柱穴状のピットが二箇所で確認された。

竈は東壁ほぼ中央にあり、幅38cm・奥行81cm・深さ30cmを測る。袖部は焼土粒とロームブロックの混合土で構築されていた。燃焼部内部には、天井部の崩落土と思われる焼土粒・ロームブロック・粘土粒の混合土が堆積していた。

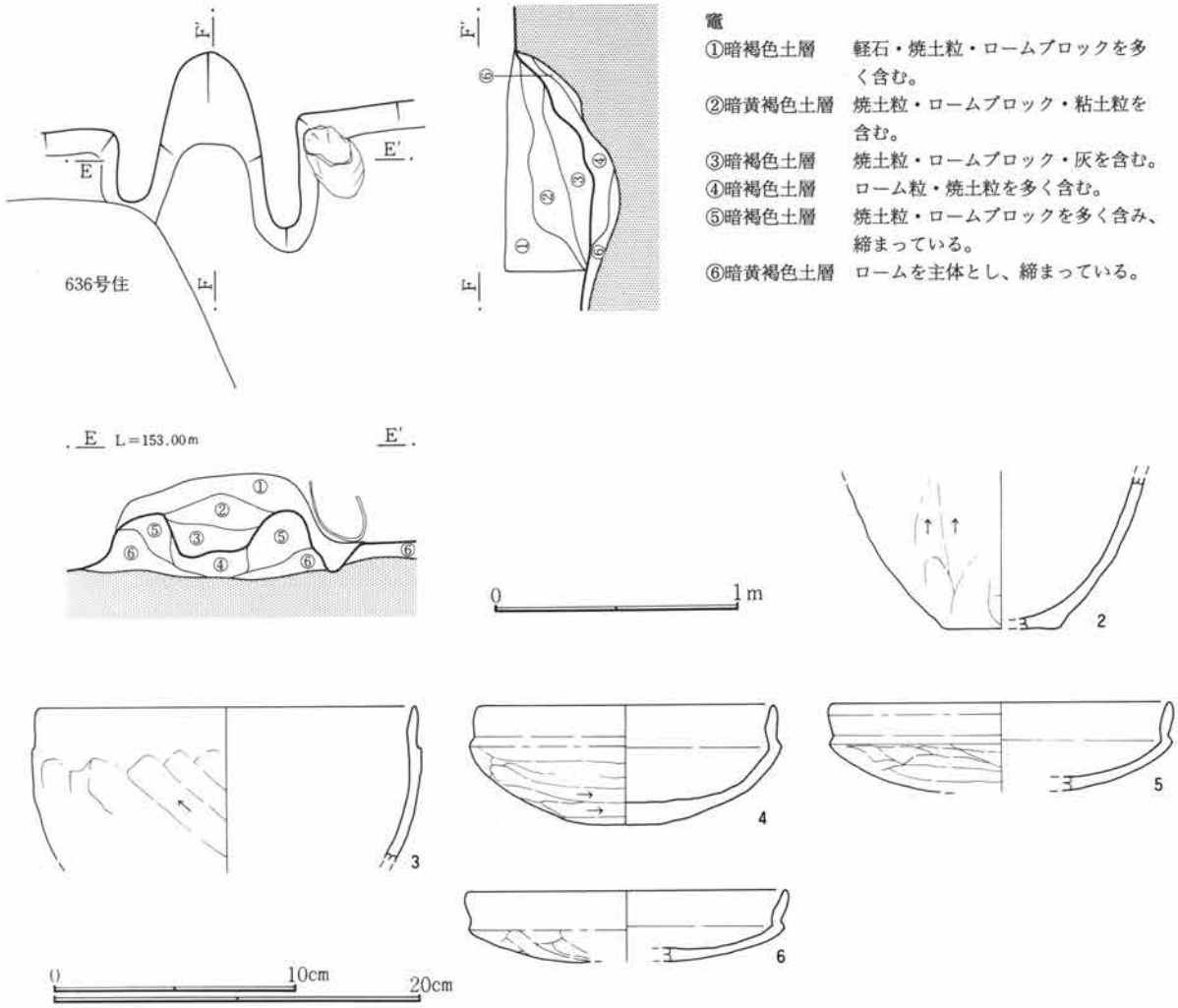
貯蔵穴は竈右脇にあり、径63×57cm・深さ36cmを測る。断面形状は擂鉢状を呈し、覆土には焼土粒を僅かに含んでいた。

遺物は床面上に散漫に分布する。全体量は少なく、個体の残存率も低い。床面中央の南西寄りの位置からは炭化材が出土している。（関口功・富田）



(635号住居跡)
①黒褐色土層　軽石を含む。
②暗褐色土層　ロームブロックを少量含む。
③暗褐色土層　ローム粒・ロームブロックを多量に含む。
④暗黄褐色土層　ロームを主体とし、黄色軽石（ＹＰ）を少量含む。

第149図　635号住居跡実測図(1)及び出土遺物実測図(1)



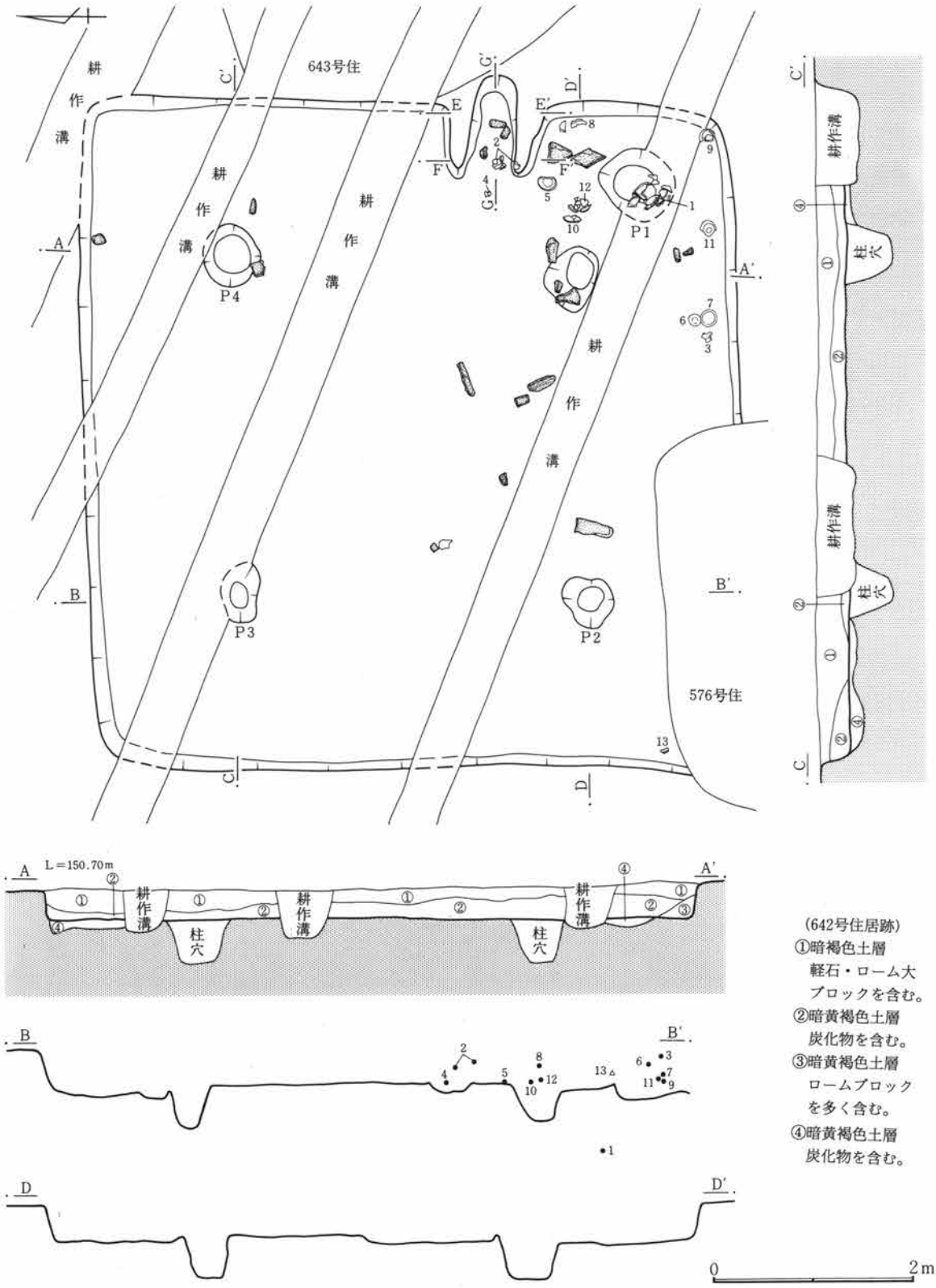
第150図　635号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(2)

第62表　635号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備考
149－1	土師器 甕	床面直上 ⅔残存	口　－ 高　－ 底　5.6	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
150－2	土師器 甕	覆土 破片	口　－ 高　－ 底　(6.3)	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
150－3 52	土師器 鉢	床面＋10 破片	口　(20.6) 高　－ 底　－	①粗、石英・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
150－4 52	土師器 坏	床面＋26 ⅓残存	口　(12.2) 高　4.8 底　丸底	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
150－5	土師器 坏	床面直上 ⅓残存	口　(13.8) 高　－ 底　－	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
150－6	土師器 坏	床面直上 破片	口　(13.0) 高　－ 底　－	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

642号住居跡（第151～153図、第63表、図版32・33・52・55・56）

本住居跡は、第８次調査区北寄りの平坦面にあり、81・82―40グリッドに位置する。643号住居跡（古墳）を切って構築されるが、576号住居跡（古墳）に南西隅を破壊される。図化していないが、竈のみ検出された



第151図　642号住居跡実測図(1)

747号住居跡（平安）にも北東隅の覆土を中心に破壊されていたものと思われる。

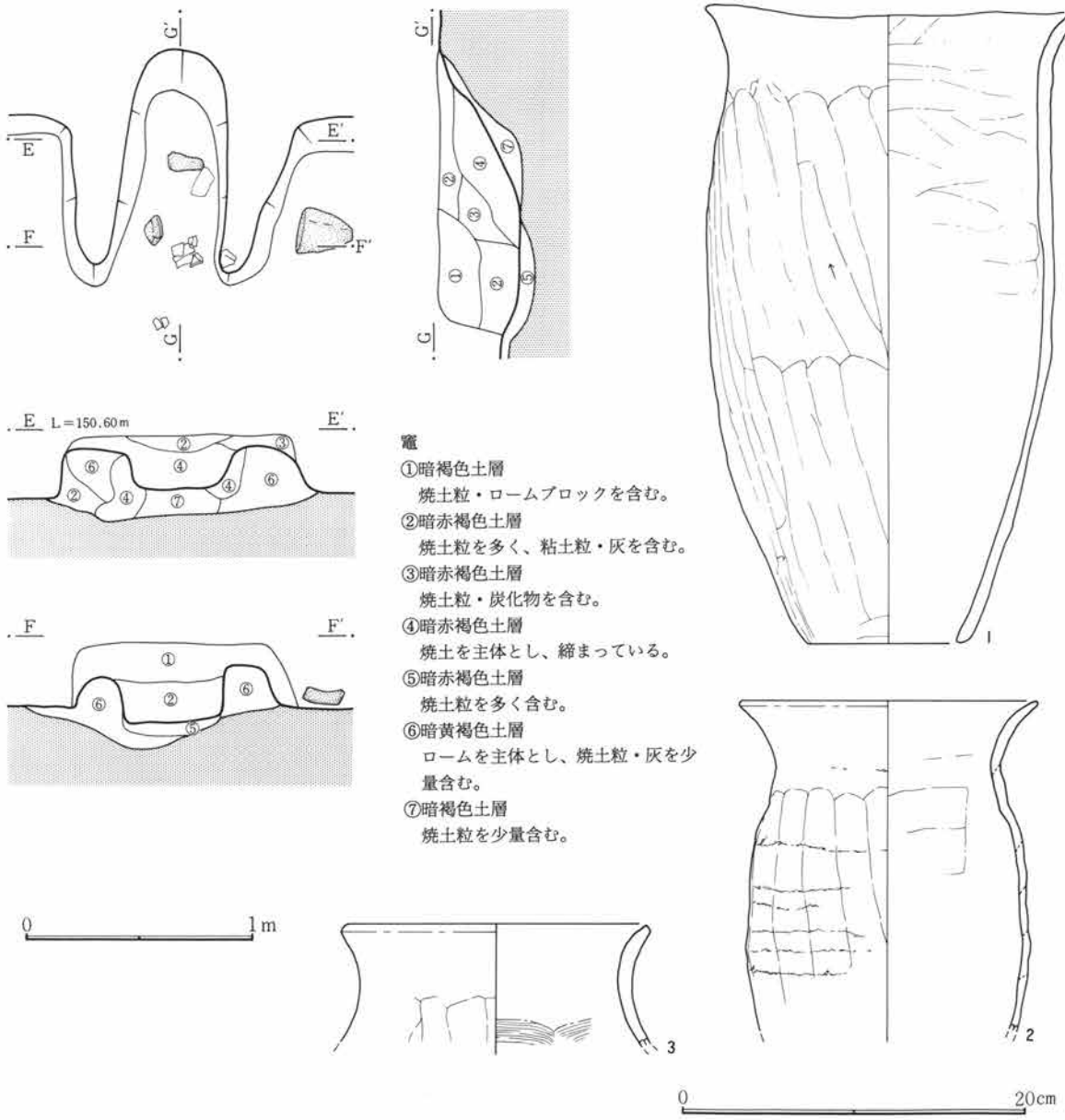
平面形は、東西６m51cm・南北は６m57cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-88°-Eを示す。確認面からの壁高は最大で36cmを測る。床面は、住居中央部を掘り残して黄色ローム（地山）を叩き締め、縁辺部を浅く掘り込んだ後に、ロームブロックを主とした暗黄褐色土を客土して構築されたものと思われる。

主柱穴は四箇所で確認されており、規模（径×深さcm）は、Ｐ１が60×42、Ｐ２が51×42、Ｐ３が57×42、Ｐ４が60×42を測る。壁溝等の付属施設については確認されていない。

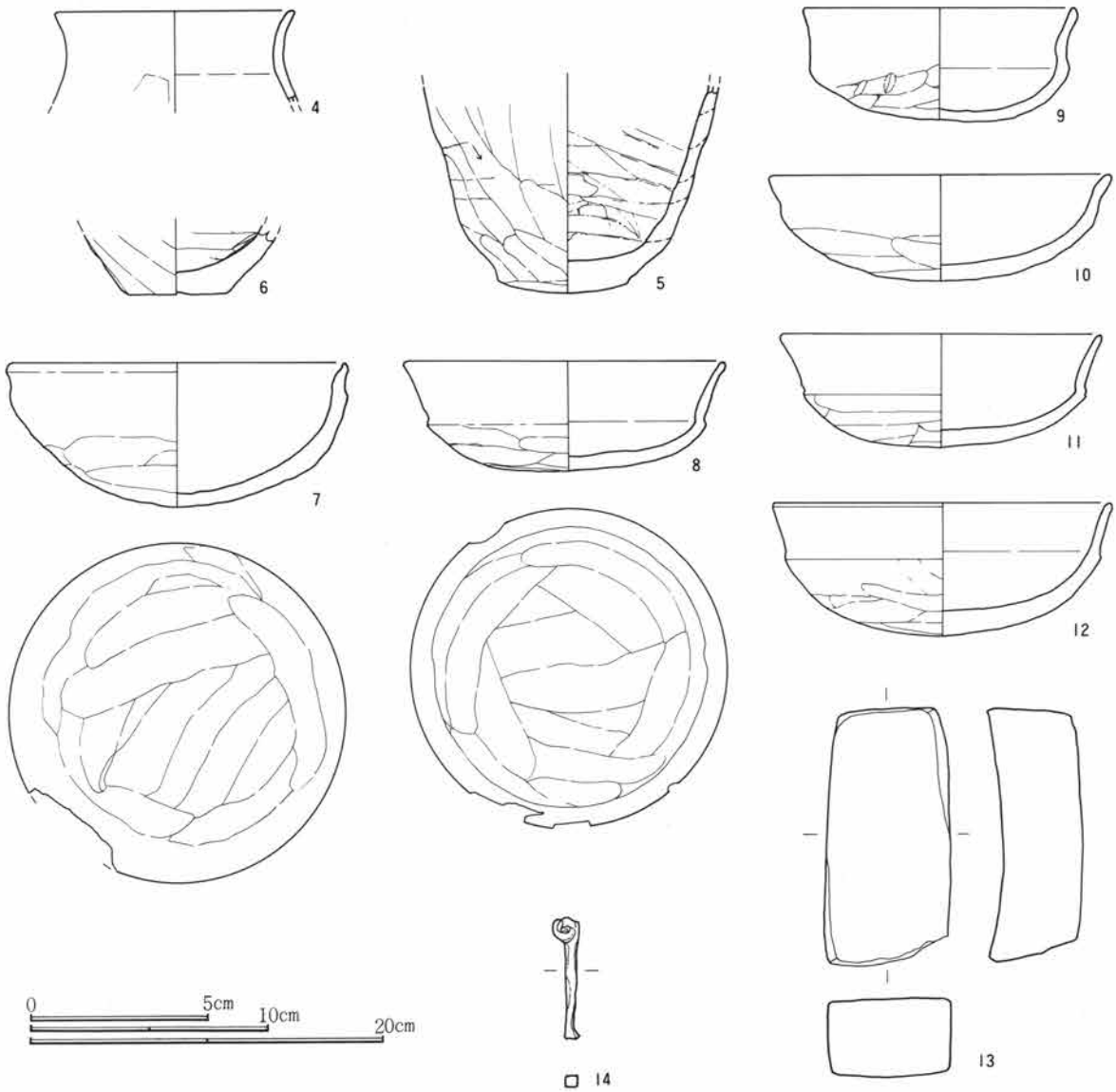
竈は東壁中央の南寄りにあり、幅42cm・奥行102cm・深さ34cmを測る。焚口から燃焼部にかけてややくぼみ、煙道部は緩やかに立ち上がる。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径75×66cm・深さ71cmを測る円形を呈する。

遺物は竈・貯蔵穴周辺に分布する。土器以外には、砥石や鉄製品が出土している。（関口功）



第152図　642号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第153図　642号住居跡出土遺物実測図(2)

第63表　642号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
152－1 52	土師器 甑	貯蔵穴内 －67 ほぼ完形	口 21.1 高 36.6 底 8.6	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
152－2 52	土師器 甕	竈内＋14 破片	口 (17.1) 高 － 底 －	①粗、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	外面に粘土付着
152－3	土師器 甕	床面＋25 破片	口 (17.4) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ハケメ。	
153－4	土師器 甕	床面直上 破片	口 (13.4) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③褐色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
153－5	土師器 甕	床面直上 破片	口 － 高 － 底 7.2	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　胴部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	

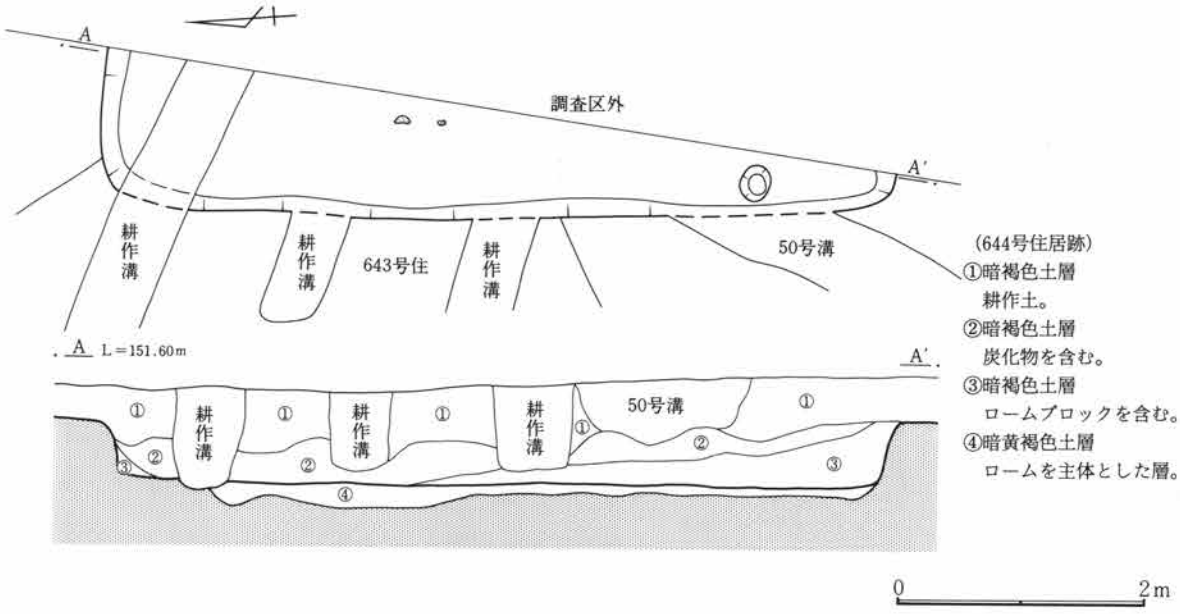
挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
153－6	土師器 甕	床面＋18 破片	口　－ 高　－ 底　5.2	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　胴部下半ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
153－7 52	土師器 坏	床面＋8 ほぼ完形	口　14.2 高　6.0 底　丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
153－8 52	土師器 坏	床面＋16 ほぼ完形	口　13.4 高　4.8 底　丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
153－9 52	土師器 坏	床面直上 ¾残存	口　11.3 高　4.7 底　丸底	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
153－10	土師器 坏	床面直上 ⅔残存	口　14.4 高　4.6 底　丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
153－11 52	土師器 坏	床面直上 ¾残存	口　13.4 高　4.7 底　丸底	①粗、パミス・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
153－12 52	土師器 坏	床面直上 ½残存	口　(14.1) 高　5.5 底　丸底	①粗、パミス・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
153－13 55	石製品 砥　石	床面＋7	長　7.3　幅　3.5 厚　2.7　重　110		中砥。	流紋岩
153－14 56	鉄製品 ?	覆土	長　(3.4)　幅　0.4 厚　0.3　重　1.8			

644号住居跡（第154図、図版33）

本住居跡は、第８次調査区北寄りの平坦面にあり、82—41グリッドに位置する。643号住居跡(古墳)を切って構築される。50号溝による破壊や三条の耕作溝による攪乱を受ける。

調査区外にかかるため、東西方向は不明であるが、南北方向は６m42cmを測る。確認面からの壁高は最大で29cmを測る。竈・貯蔵穴等に関する情報は全く得られていない。

遺物は小破片で図化できない。古墳時代の住居跡とするには、積極的な根拠に欠ける。(関口功)



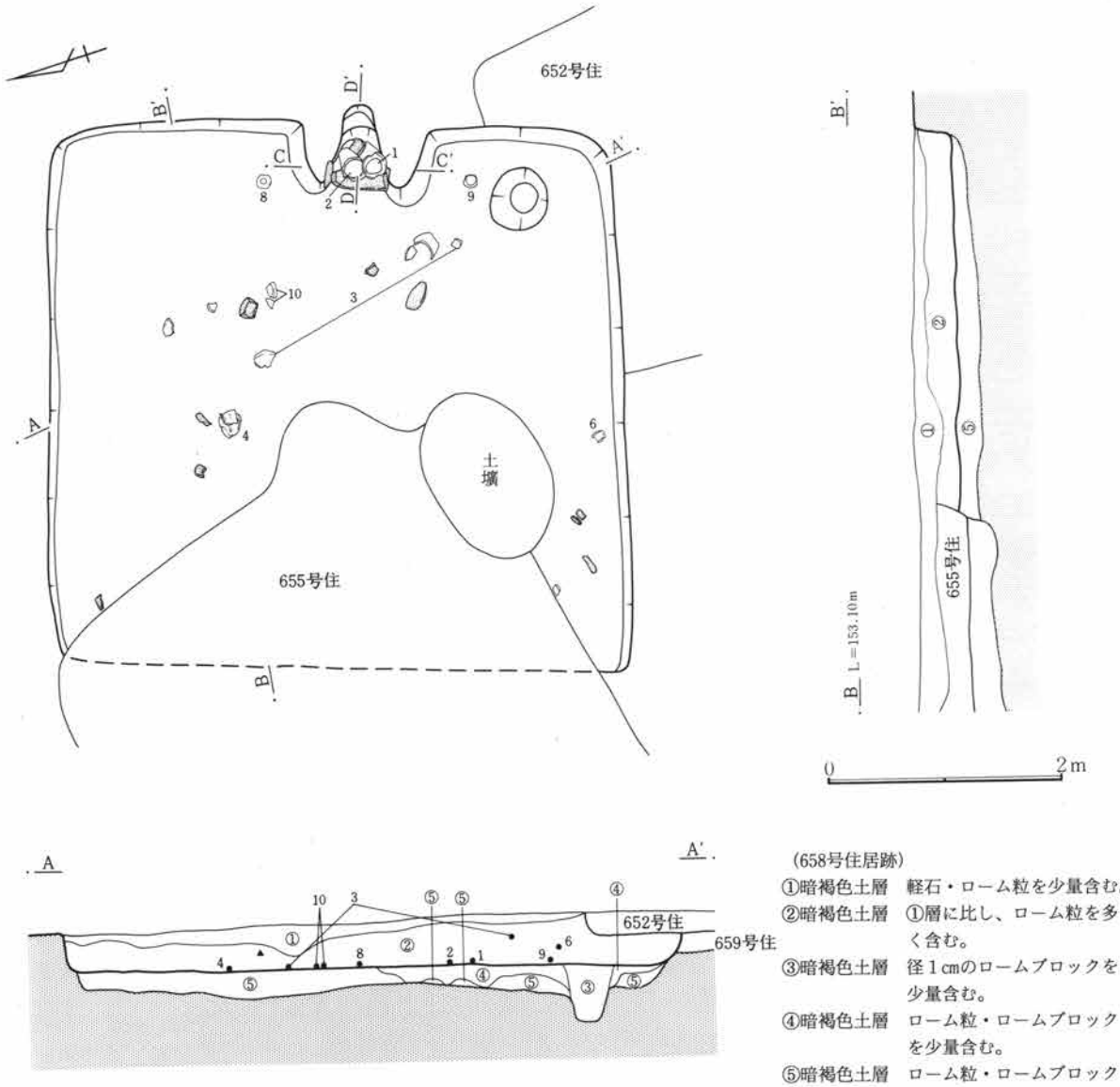
第154図　644号住居跡実測図

658号住居跡（第155・157図、第64表、図版33・34・53）

本住居跡は、第８次調査区中央部の平坦面にあり、61・62―34グリッドに位置する。659号住居跡（古墳）を切って構築するが、655号住居跡（奈良）に南壁を破壊され、652号住居跡（平安）が南東隅の一部を破壊する。一連の重複住居群の北側に位置する。(158図参照)

平面形は不確定な要素を伴うが、東西４m62cm・南北４m89cmを測る正方形に近いものと思われる。主軸方向はN―107°―Eを示す。確認面からの壁高は最大で48cmを測る。床面には、竈前を中心に厚く貼床を施す。柱穴・壁溝の付属施設については、確認されていない。

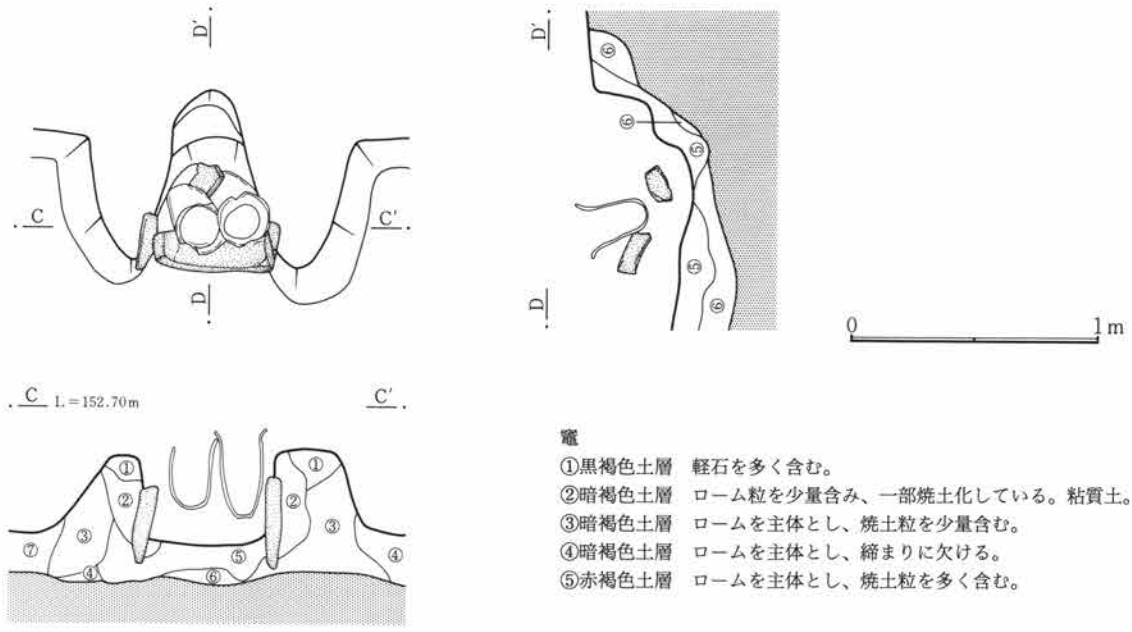
竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅42cm・奥行84cm・深さ39cmを測る。残存状況は比較的良好で、焚口には両袖石と天井石が遺存し、燃焼部には土師器甕１・２が架けた状態で出土した。支脚に該当すると思われる土器・石材は出土していない。袖部はロームを主体に粘土を貼って構築されたものと思われる。火床面の焼土化は顕著であった。燃焼部から煙道部にかけては、段をなして立ち上がる。

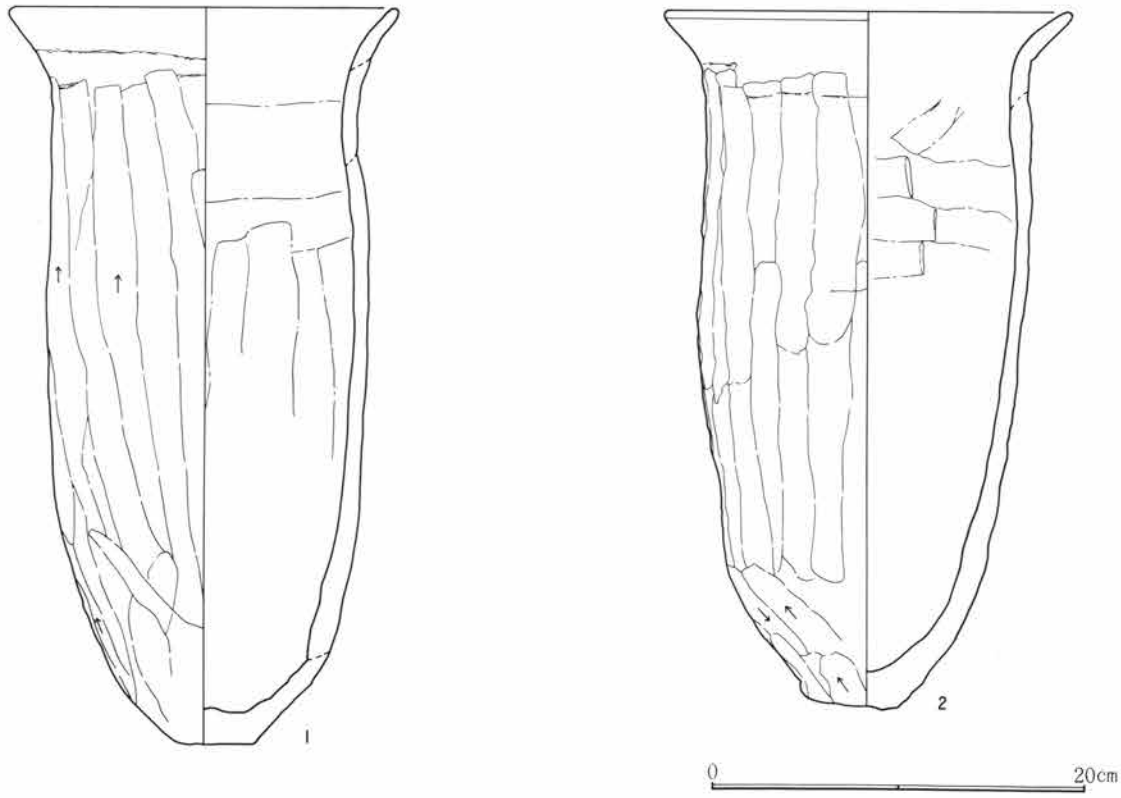


第155図　658号住居跡実測図(1)

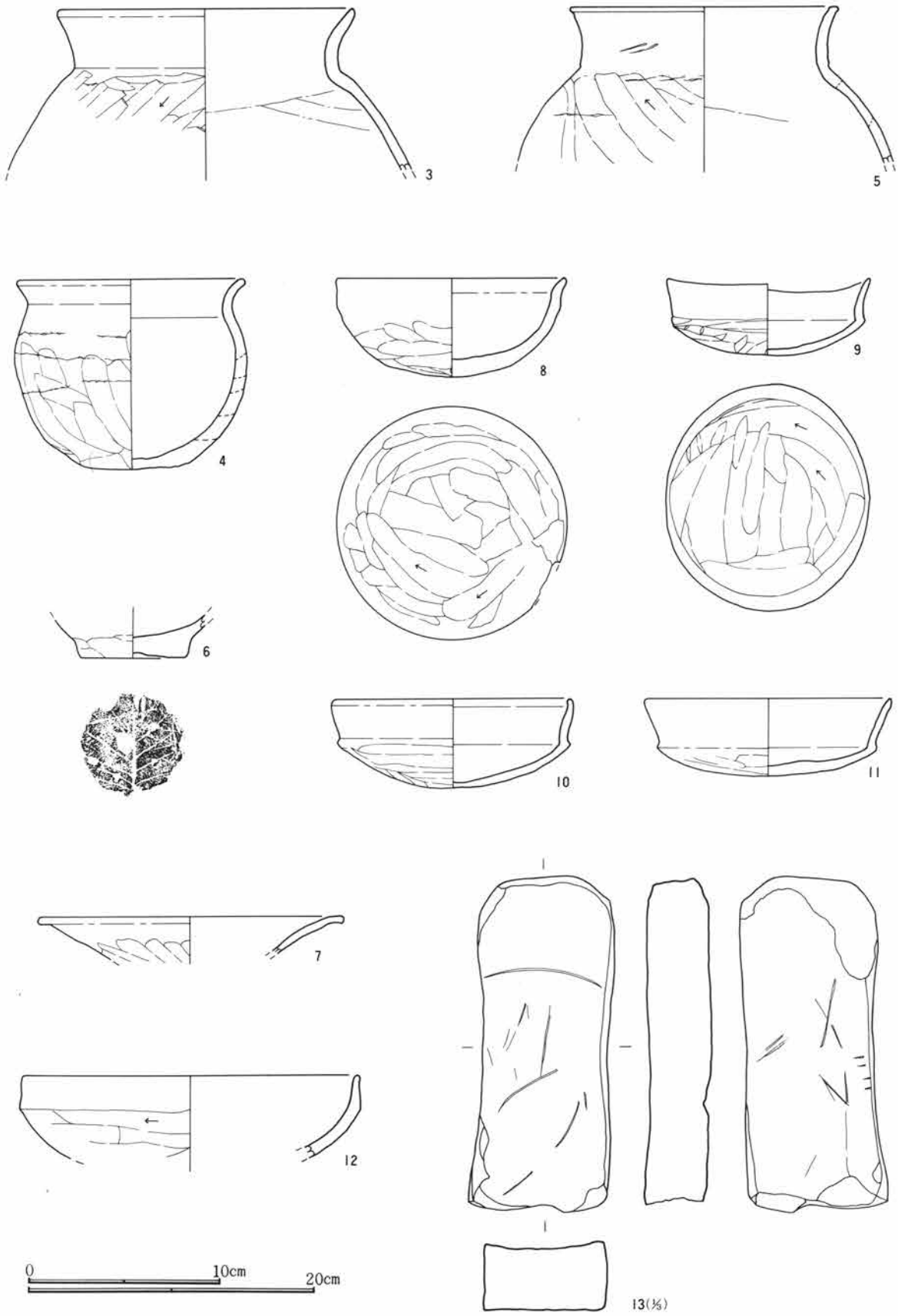
貯蔵穴は竈右脇にあり、径51×48cm・深さ48cmを測る円形を呈する。

遺物は竈前を中心に分布する。土器以外では砥石13が出土しているが、流れ込みの可能性が高い。他に、薦編石状の絹雲母石墨片岩４個、緑簾緑泥片岩２個、輝緑岩１個が検出されている。(中沢)





第156図　658号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第157図　658号住居跡出土遺物実測図(2)

第64表　658号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
156－1 53	土師器 甕	竈内＋4 ほぼ完形	口　20.3 高　39.0 底　4.1	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	胴部下半に粘土付着
156－2 53	土師器 甕	竈内＋4 ¾残存	口　21.8 高　36.9 底　5.2	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦下半斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	粘土多量に付着
157－3 53	土師器 甕	床面直上 破片	口　20.4 高　－ 底　－	①粗、石英粒多 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
157－4 53	土師器 小型甕	床面直上 ほぼ完形	口　15.6 高　13.1 底　7.8	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部斜めヘラケズリ。 内面　ナデ。	
157－5	土師器 甕	覆土 破片	口　(18.6) 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部斜めヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
157－6 53	土師器 甕	床面＋15 破片	口　－ 高　－ 底　7.2	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
157－7	土師器 高　坏	覆土 坏部破片	口　(15.8) 高　－ 底　－	①粗、雲母・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内面に煤付着
157－8 53	土師器 坏	床面＋4 ほぼ完形	口　11.8 高　5.1 底　丸底	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
157－9 53	土師器 坏	床面＋5 完形	口　10.4 高　4.0 底　丸底	①普、パミス・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	歪みが著しい
157－10 53	土師器 坏	床面直上 ⅔残存	口　12.6 高　4.6 底　丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	底部黒色を呈する
157－11	土師器 坏	覆土 ⅓残存	口　(12.8) 高　4.0 底　丸底	①粗、雲母・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
157－12 53	土師器 坏	覆土 破片	口　(17.6) 高　－ 底　－	①粗、雲母・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
157－13 56	石製品 砥　石	覆土	長　17.1　幅　7.2 厚　3.4　重　765		中砥。	流紋岩

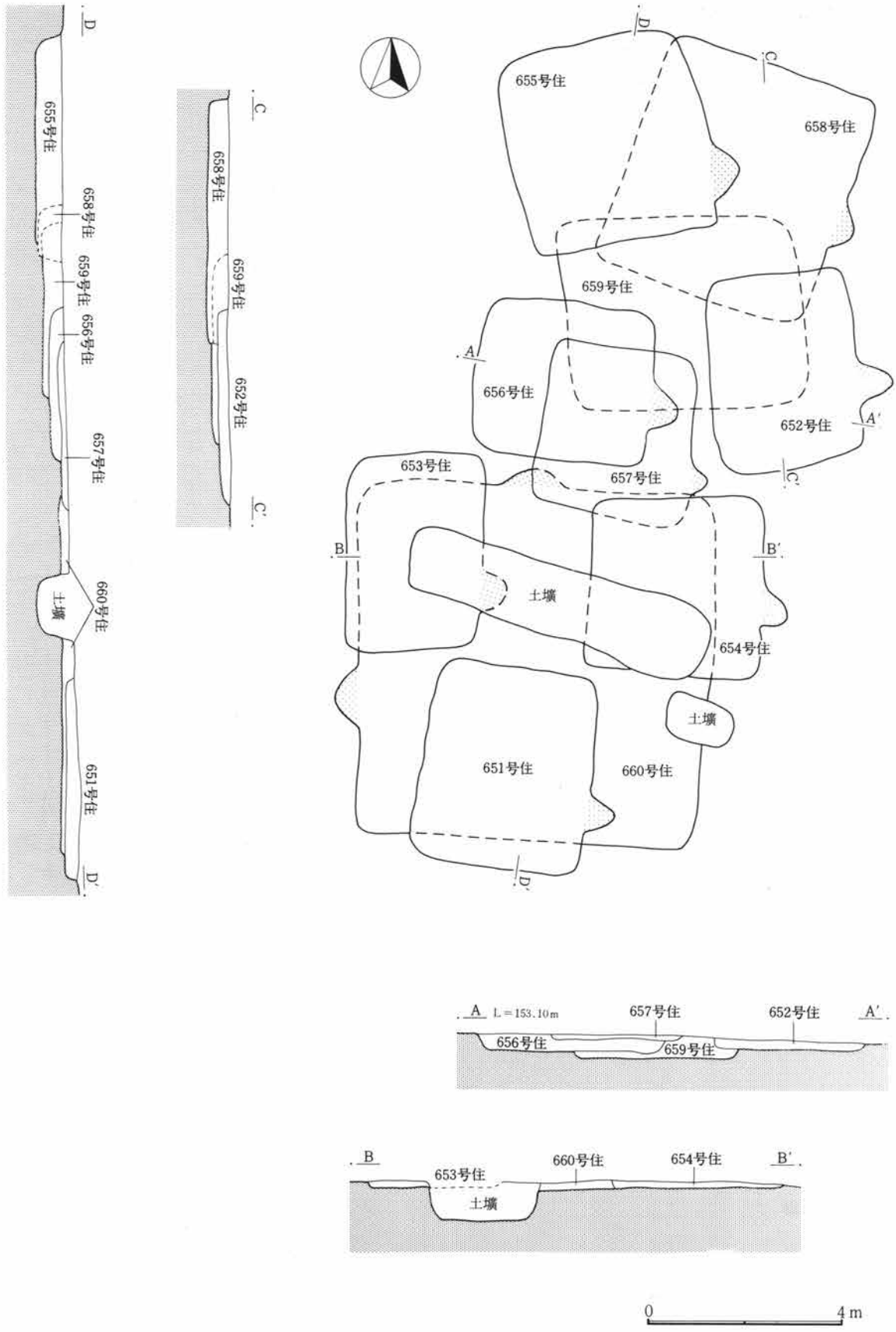
参考までに、各住居跡の所属年代を整理すれば以下のようになる。(第158図参照)

◎古墳時代……658号住居跡、659号住居跡、660号住居跡

◎奈良時代……655号住居跡

◎平安時代……651号住居跡、652号住居跡、653号住居跡、654号住居跡、656号住居跡、657号住居跡

今年度は古墳時代を対象としているが(平安時代は『矢田遺跡III』で報告済み)、奈良時代については次年度以降報告する予定である。



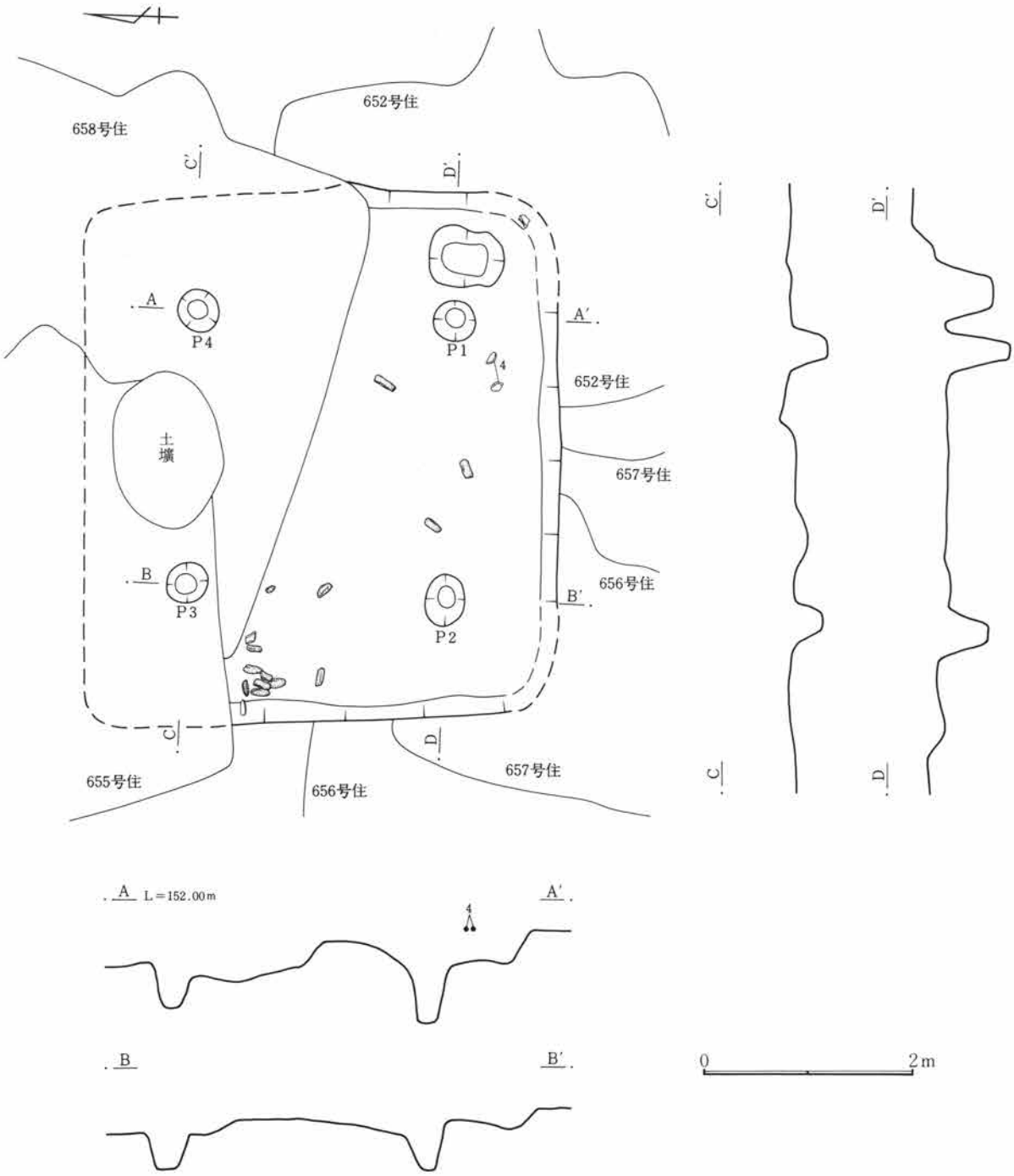
第158図　658号住居跡周辺遺構重複関係図

659号住居跡（第159・160図、第65表、図版53）

本住居跡は、第８次調査区中央部の平坦面にあり、61―33･34グリッドに位置する。658号住居跡(古墳)・655号住居跡（奈良）・652号・656号・657号住居跡（平安）に破壊される。(第158図参照)

南北方向は不明であるが、東西方向は４m89cmを測る。主軸方向はN―86°―Eを示すものと思われる。残存する壁高は最大で34cmを測る。床面には、ロームブロックを主とした貼床を施す。

主柱穴は四箇所で確認されており、規模（径×深さcm）は、Ｐ１が39×60、Ｐ２が48×52、Ｐ３が現状で



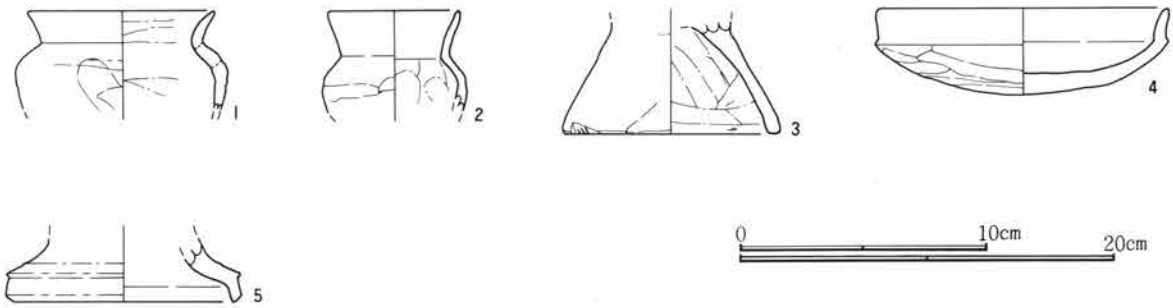
第159図　659号住居跡実測図

39×35、Ｐ４が現状で42×43を測る。壁溝等の付属施設については、確認されていない。

竈は東壁にあった可能性が高いものと思われる。

貯蔵穴は、南東隅付近にある径69×54cm・深さ74cmを測るピットが該当するものと思われる。平面形状は方形を呈する。

遺物は少なく、個体の残存率も低い。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩６個、緑簾緑泥片岩４個、流紋岩１個（計5.0kg）が検出されている。（富田）



第160図　659号住居跡出土遺物実測図

第65表　659号住居跡出土遺物観察表

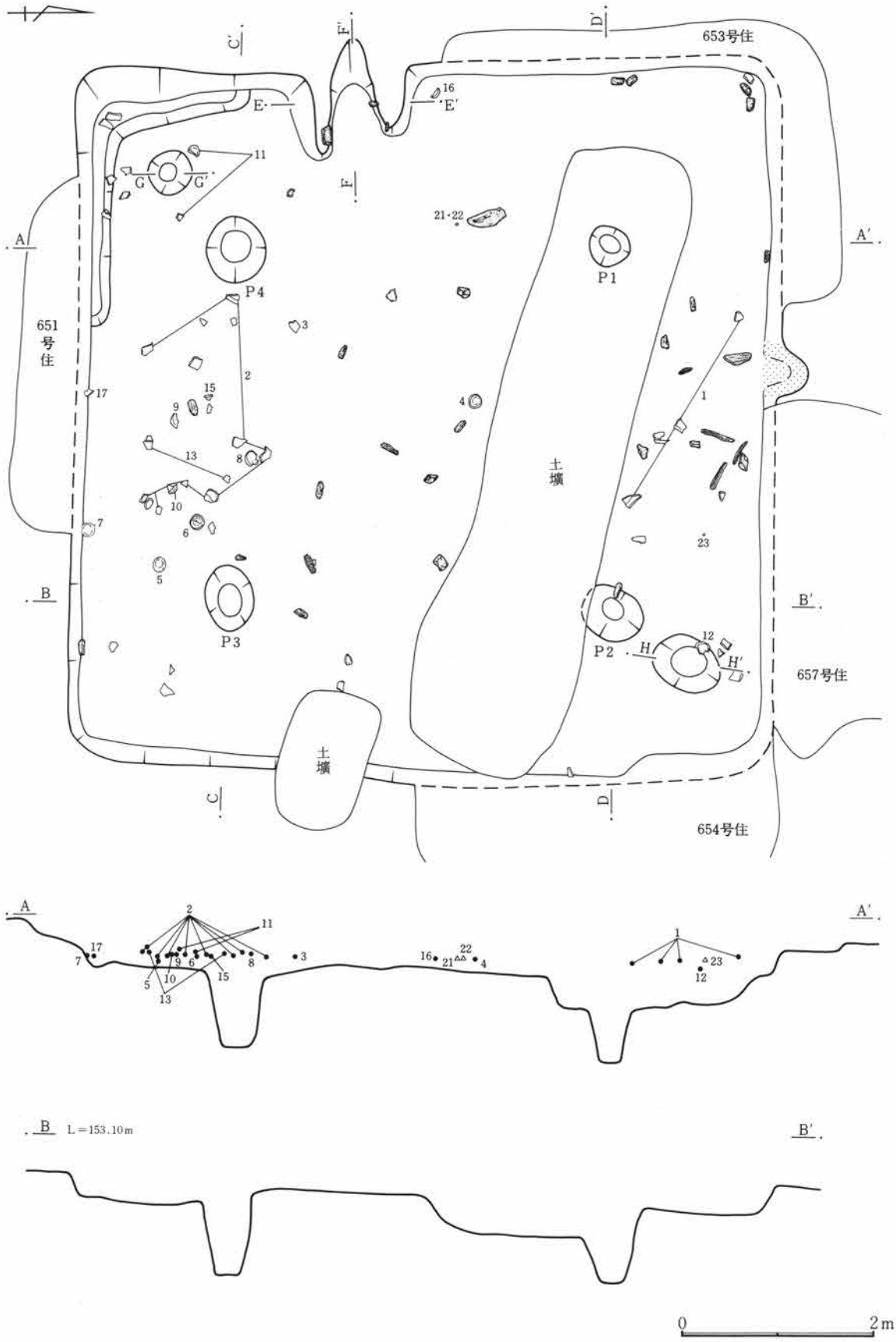
挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
160－１ 53	土師器 小型壺	覆土 破片	口 (10.0) 高　－ 底　－	①粗、石英・砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。 内面　ナデ。	
160－２ 53	土師器 小型壺	覆土 破片	口 (6.9) 高　－ 底　－	①粗、パミス・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	内面指頭圧痕
160－３ 53	土師器 台付甕	覆土 脚部破片	口　－ 高　－ 底 (11.6)	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　脚部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
160－４ 53	土師器 坏	床面直上 ¾残存	口 11.6 高 3.4 底 丸底	①普、石英・白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
160－５ 53	須恵器 高　坏	覆土 脚部破片？	口　－ 高　－ 底 (8.7)	①細、殆ど含まない ②還元焔、硬質 ③灰色	ロクロ成形	歪みは焼成時 自然釉

660号住居跡（第161～164図、第66表、図版34・53・54・55・56）

本住居跡は、第８次調査区中央部の平坦面にあり、59・60—33・34グリッドに位置する。一連の重複住居群の南側に所在する。（第158図参照）

規模は東西７m20cm・南北７m29cmを測る。西竈から想定される主軸方向はN—89°—Wを示す。確認面からの壁高は最大で34cmを測る。床面には、ロームブロックと暗褐色土の混合土で貼床を施す。

主柱穴は四箇所で明瞭に確認されており、規模（径×深さcm）は、Ｐ１が現状で40×54、Ｐ２が57×102、Ｐ３が66×96、Ｐ４が66×93を測る。柱穴間の寸法はＰ１～Ｐ２が372cm、Ｐ２～Ｐ３が391cm、Ｐ３～Ｐ４が361cm、Ｐ４～Ｐ１が383cmを測る。壁溝は南西隅付近で確認された。規模は幅18～25cm・深さ16～22cmを測る。

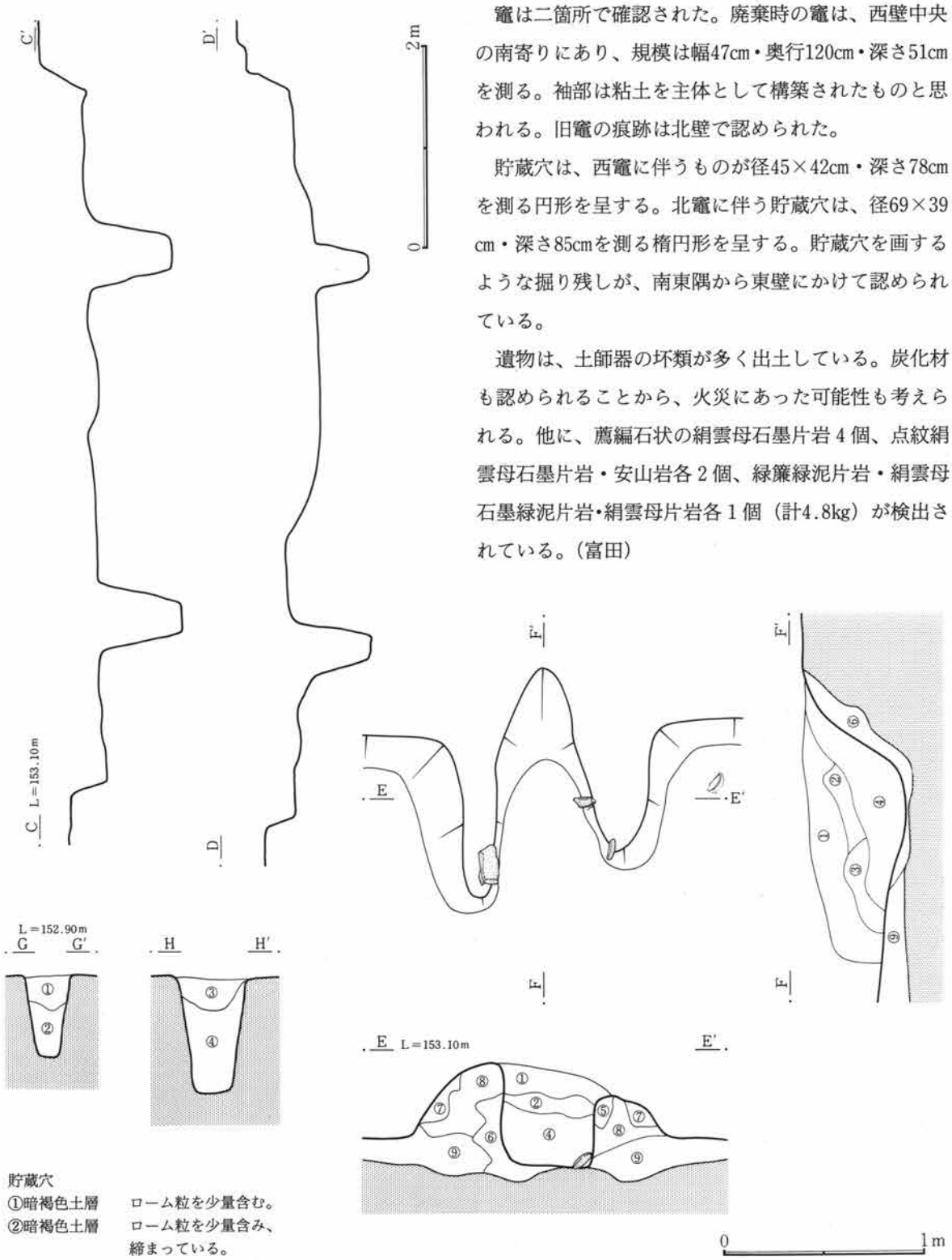


第161図　660号住居跡実測図(1)

竈は二箇所で確認された。廃棄時の竈は、西壁中央の南寄りにあり、規模は幅47cm・奥行120cm・深さ51cmを測る。袖部は粘土を主体として構築されたものと思われる。旧竈の痕跡は北壁で認められた。

貯蔵穴は、西竈に伴うものが径45×42cm・深さ78cmを測る円形を呈する。北竈に伴う貯蔵穴は、径69×39cm・深さ85cmを測る楕円形を呈する。貯蔵穴を画するような掘り残しが、南東隅から東壁にかけて認められている。

遺物は、土師器の坏類が多く出土している。炭化材も認められることから、火災にあった可能性も考えられる。他に、薦編石状の絹雲母石墨片岩4個、点紋絹雲母石墨片岩・安山岩各2個、緑簾緑泥片岩・絹雲母石墨緑泥片岩・絹雲母片岩各1個（計4.8kg）が検出されている。（富田）



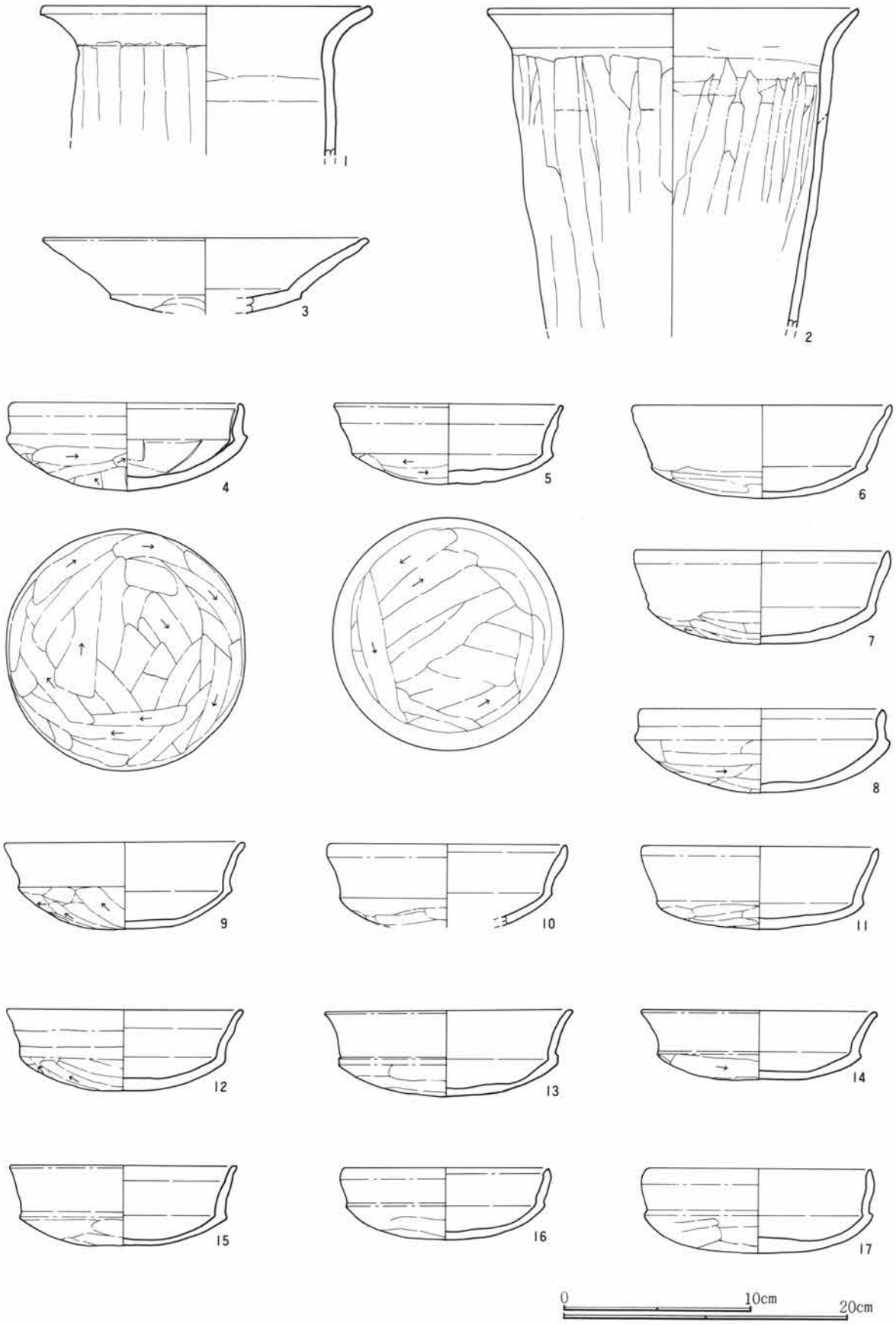
貯蔵穴

①暗褐色土層	ローム粒を少量含む。
②暗褐色土層	ローム粒を少量含み、締まっている。
③暗黄褐色土層	ロームブロックを多量に、焼土粒・炭化物を少量含む。
④暗褐色土層	ローム粒・ロームブロックを多量に含む。

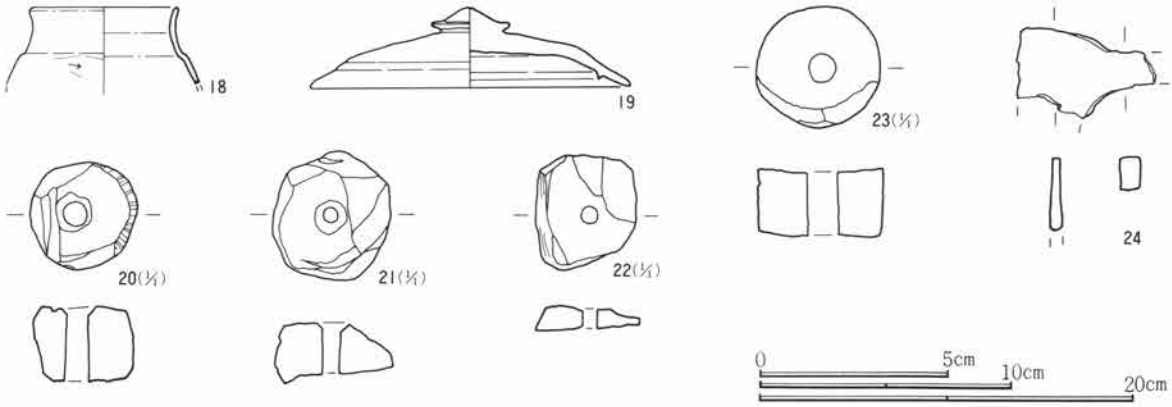
（660号住居跡）竈

①暗褐色土層	ローム粒・焼土粒・軽石を少量含む。
②暗黄褐色土層	ローム粒・焼土粒を含む。
③暗黄褐色土層	ローム粒・焼土粒・粘土粒を含む。
④赤色土層	焼土ブロック。
⑤赤色土層	焼土化が著しい。
⑥赤褐色土層	焼土粒を多く含む。
⑦黒褐色土層	焼土粒を多く含む。粘質土。
⑧茶褐色土層	焼土粒を少量含む。粘質土。
⑨黒褐色土層	焼土粒を少量含む。

第162図　660号住居跡実測図(2)



第163図　660号住居跡出土遺物実測図(1)



第164図　660号住居跡出土遺物実測図(2)

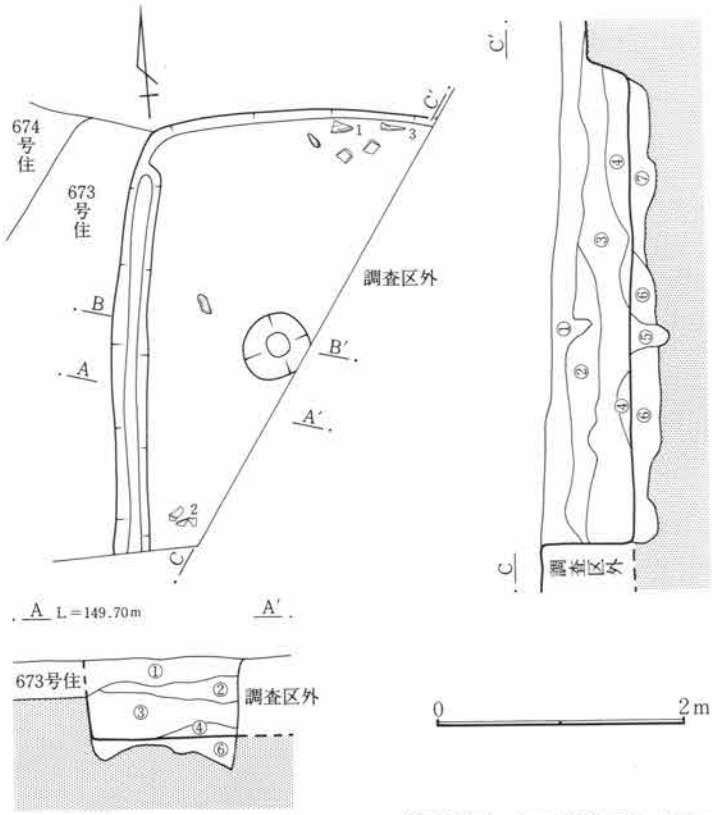
第66表　660号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
163－1 53	土師器 甕	床面－4 破片	口 22.8 高 — 底 —	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
163－2 53	土師器 甑	床面直上 破片	口 (25.8) 高 — 底 —	①粗、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ後、粗いヘラミガキ。	破損後、熱を受ける
163－3 54	土師器 高　坏	床面直上 坏部破片	口 (17.0) 高 — 底 —	①粗、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　坏部口縁ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
163－4 54	土師器 坏	床面直上 完形	口 12.2 高 4.4 底 丸底	①粗、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ヘラナデ。	
163－5 54	土師器 坏	床面－3 ほぼ完形	口 12.0 高 4.1 底 丸底	①普、石英粒少 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
163－6 54	土師器 坏	床面直上 完形	口 13.6 高 4.8 底 丸底	①粗、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
163－7 54	土師器 坏	床面直上 完形	口 13.4 高 4.8 底 丸底	①普、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
163－8 54	土師器 坏	床面＋4 ほぼ完形	口 12.8 高 4.3 底 丸底	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
163－9 54	土師器 坏	床面直上 ⅔残存	口 12.5 高 4.5 底 丸底	①普、黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
163－10 54	土師器 坏	床面直上 ½残存	口 12.4 高 — 底 —	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い褐色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
163－11 54	土師器 坏	床面＋5 ½残存	口 12.4 高 4.3 底 丸底	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
163－12 53	土師器 坏	床面－10 ⅔残存	口 12.2 高 4.2 底 丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
163－13	土師器 坏	床面＋4 ¾残存	口 12.8 高 4.4 底 丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
163－14	土師器 坏	覆土 ½残存	口 (12.4) 高 3.6 底 丸底	①粗、褐色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
163—15	土師器 坏	床面直上 ⅓残存	口 (11.9) 高 4.6 底 丸底	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
163—16	土師器 坏	床面直上 ½残存	口 (10.8) 高 3.7 底 丸底	①粗、白色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	摩滅が著しい
163—17	土師器 坏	床面直上 ¼残存	口 (12.0) 高 4.4 底 丸底	①粗、雲母・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部へラケズリ。 内面　ナデ。	
164—18 53	土師器 短頸壺	覆土 破片	口 (7.8) 高 — 底 —	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。 内面　ナデ。	
164—19 54	須恵器 蓋	覆土 完形	摘 3.1 高 3.1 口 12.8	①粗、砂粒 ②還元焔、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、天井部回転ヘラケズリ。 摘貼付。	
164—20 55	石製品 白玉	覆土	径 1.4 厚 1.0	孔径 0.3 重 3.3		滑石片岩
164—21 55	石製品 白玉	床面直上	径 1.6 厚 0.8	孔径 0.2 重 2.7		滑石片岩
164—22 55	石製品 白玉	床面直上	径 1.4 厚 0.3	孔径 0.2 重 1.0		滑石片岩
164—23 55	石製品 白玉	床面直上	径 1.7 厚 0.9	孔径 0.4 重 3.9		滑石片岩
164—24 56	鉄製品 刃子	覆土	長 (3.6) 厚 0.3	幅 (2.2) 重 8.1		

672号住居跡（第165・166図、第67表、図版34・54）

本住居跡は、第８次調査区北東寄りの緩斜面にあり、67—43グリッドに位置する。673号住居跡（古墳）を切って構築される。



詳細な規模は不明であるが、北壁と西壁から想定される主軸方向はN-3°-Eを示す。確認面からの壁高は最大で38cmを測る。床面には、ロームブロックを主とした貼床を施す。覆土には人為的に投げ込まれた土層が堆積していた。

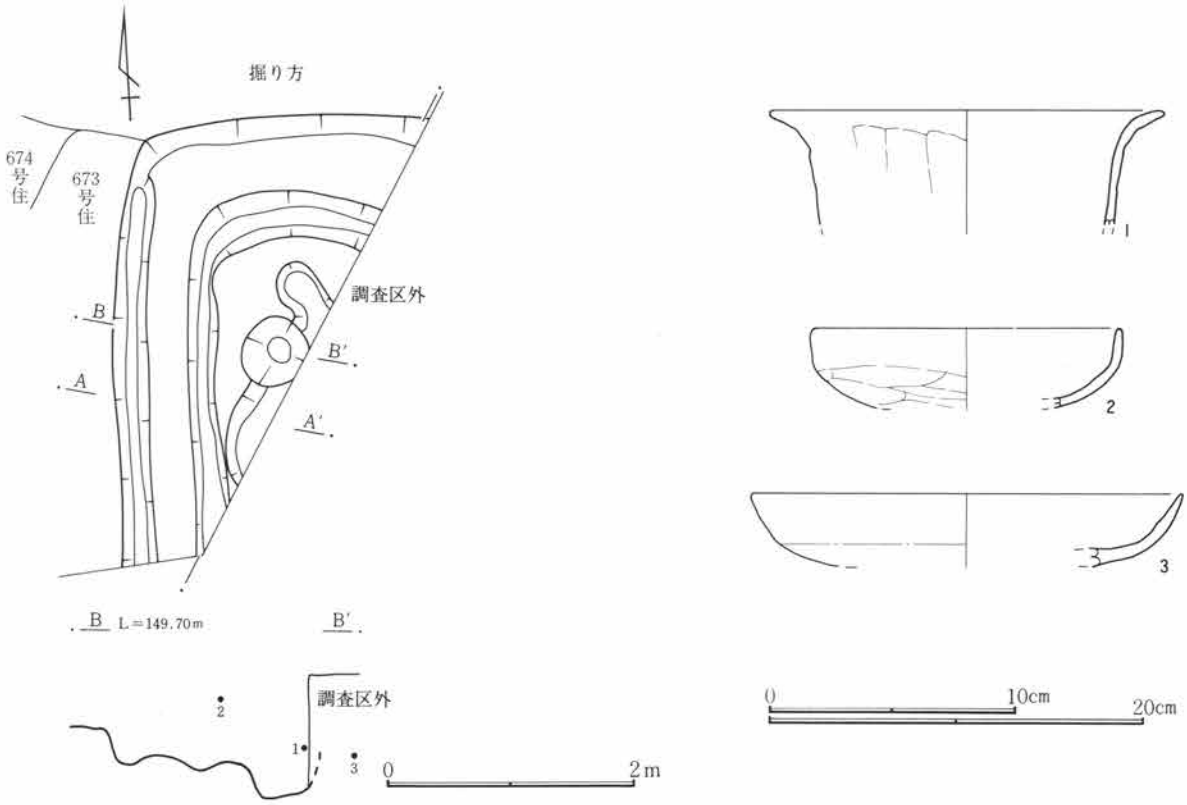
柱穴状のピットが一基確認された他、壁溝が西壁で確認された。規模は幅18cm・深さ20cmを測る。掘り方調査時には、溝状の掘り込みが認められたが、その性格は不明である。竈・貯蔵穴等の付属施

（672号住居跡）
①暗褐色土層　軽石を多く含む。耕作土。
②暗褐色土層　ロームブロック・軽石を少量含む。
③暗黄褐色土層　ローム大ブロック・焼土ブロック・炭化物を含む。
④暗褐色土層　焼土粒・炭化物・粘土粒を含む。
⑤暗褐色土層　④層に類する。
⑥暗黄褐色土層　粘土粒を多く含む。
⑦暗黄褐色土層　ローム大ブロックを少量含む。

第165図　672号住居跡実測図(1)

設については確認されていない。

遺物から判断すると古墳時代とするには問題が残る。（関口功）



第166図　672号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第67表　672号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
166－1 54	土師器 甕	床面＋6 破片	口 (21.0) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③明赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部縦ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
166－2 54	土師器 坏	床面＋44 ⅓残存	口 (12.1) 高 － 底 －	①粗、雲母・砂粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
166－3 54	須恵器 盤	床面直上 小破片	口 (23.0) 高 － 底 －	①粗、砂粒 ②還元焔、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	奈良？

673号住居跡（第167図、第68表、図版34・54・56）

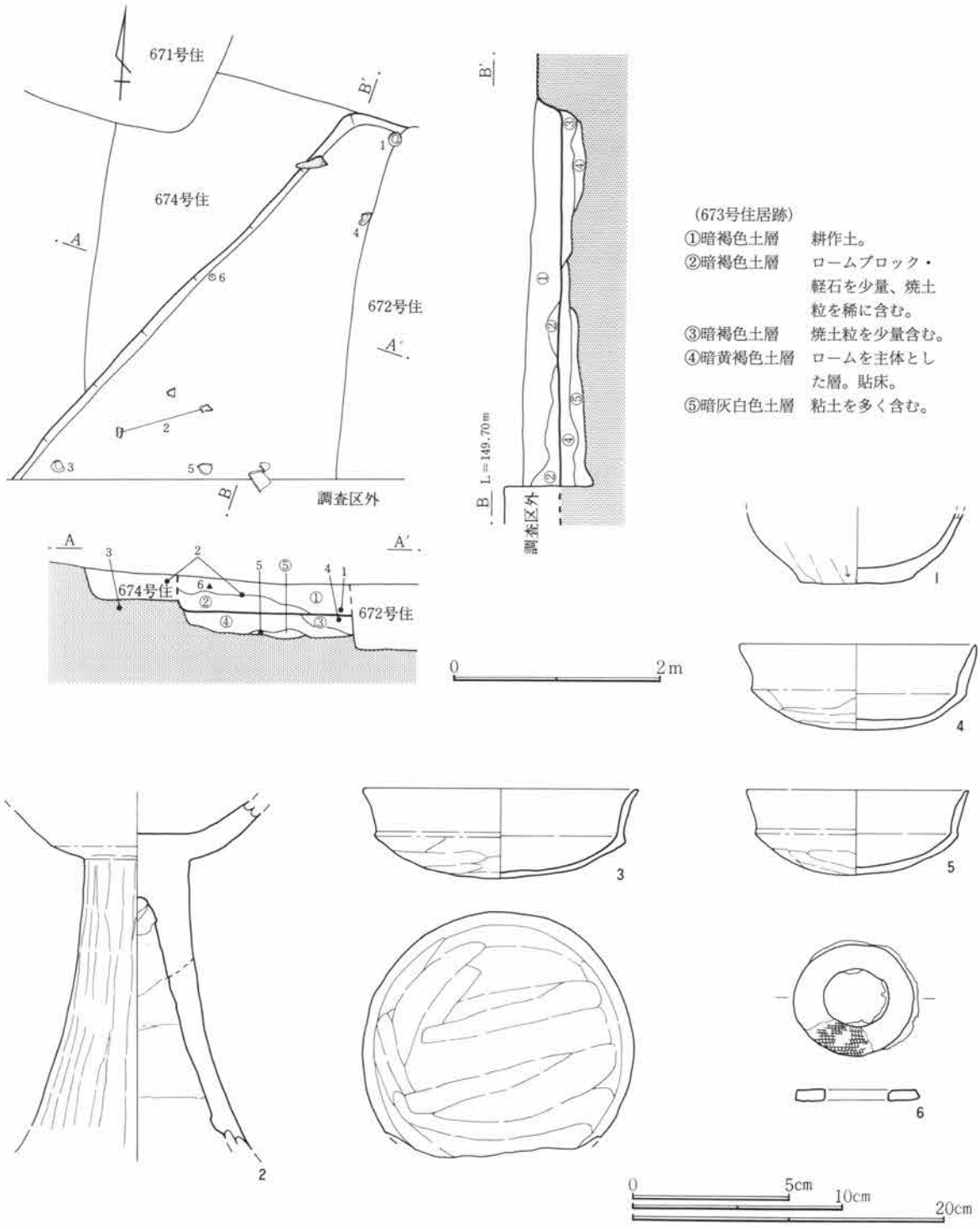
本住居跡は、第８次調査区北東寄りの緩斜面にあり、67―43グリッドに位置する。674号住居跡（古墳）を切って構築されるが、671号住居跡（奈良）と672号住居跡（古墳）に破壊される。東側には南北方向の支谷が所在する。

大部分が破壊されているため、詳細な規模は不明であるが、北壁と西壁から想定される主軸方向はN-41°-Eを示す。確認面からの壁高は最大で33cmを測る。床面にはロームを主とした貼床が厚く施されていた。特に住居中央部と思われる位置が顕著であった。床下からは多量の粘土が確認されているが、その性格等につ

いては不明である。

竈・貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設については確認されていない。

遺物は散漫に分布する。土師器の坏類の出土が目立つが残存率は低い。土器以外では、布が付着した鉄製品の出土が注意される程度である。(関口功)



第167図　673号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第68表　673号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
167－1 54	土師器 壺　？	床面＋4 破片	口　－ 高　－ 底　7.2	①粗、白色・褐色鉱物粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い黄橙色	外面　胴部下半ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
167－2 54	土師器 高　坏	床面＋19 坏体部～脚部破片	口　－ 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、やや軟質 ③鈍い橙色	外面　坏体～脚部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
167－3 54	土師器 坏	床面＋6 ¾残存	口　13.0 高　4.2 底　丸底	①普、石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
167－4 54	土師器 坏	床面－4 ⅔残存	口　11.1 高　4.0 底　丸底	①粗、褐色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
167－5 54	土師器 坏	床面－17 ほぼ完形	口　10.5 高　4.0 底　丸底	①粗、褐色鉱物粒 ②酸化焔、軟質 ③橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
167－6 56	鉄製品	床面＋26	外径　3.8　内径　2.1 厚　0.4　重　12.3			環状鉄製品 外面に布付着

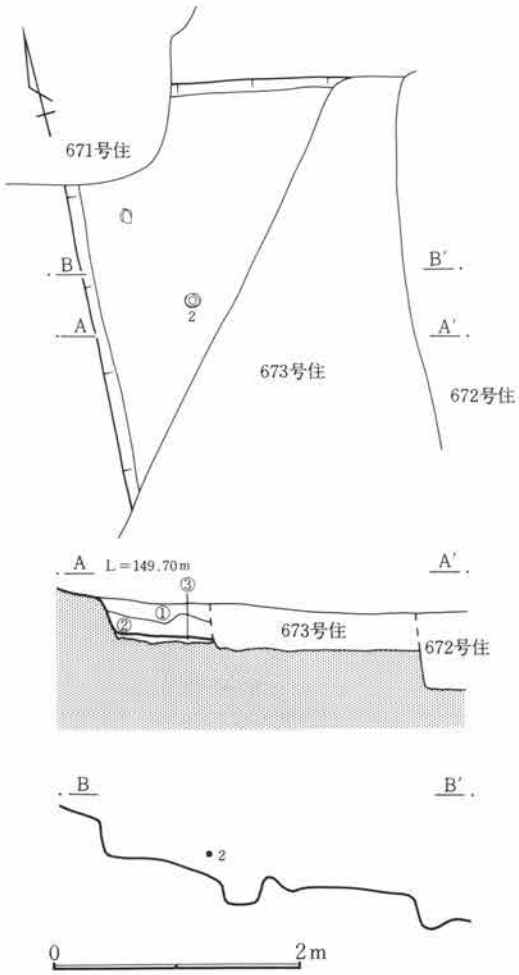
674号住居跡（第168・169図、第69表、図版34・54）

本住居跡は、第8次調査区北東寄りの緩斜面にあり、67—43グリッドに位置する。671号住居跡（奈良）・673号住居跡(古墳)に破壊され、残存状況は不良であった。東側には南北方向の支谷が所在する。

平面形は不明であるが、北壁と西壁から想定される主軸方向はN—3°—Eを示す。確認面からの壁高は最大で33cmを測る。床面は、ロームブロックを主として構築されていたと思われるが、破壊が著しいため、その全容は明らかではない。掘り方調査時に柱穴状のピットが一基確認されているが、掘り込みも浅く不明瞭であった。あるいは673号住居跡にかかわるものかも知れない。

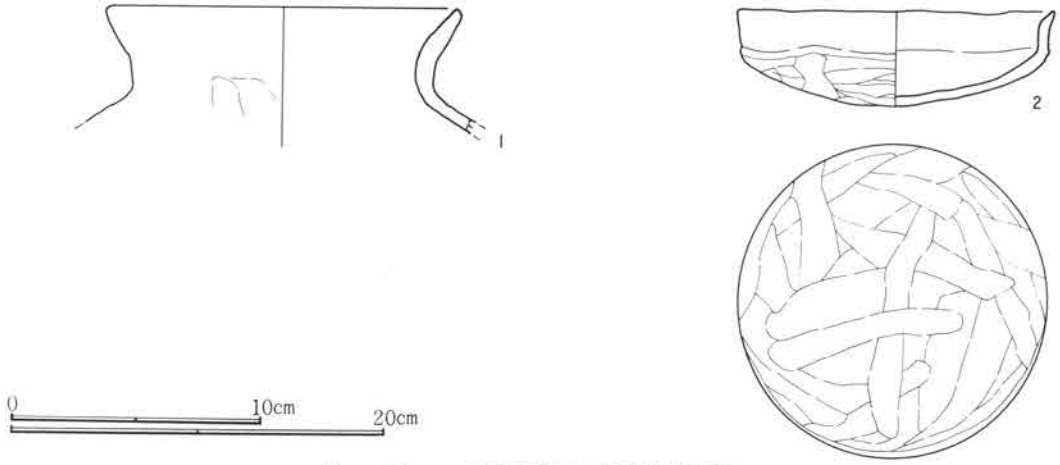
竈・貯蔵穴・壁溝等の付属施設についは、確認されていない。

遺物は極めて少なく、散漫に分布する。直立気味の短い口縁部を有する土師器坏2が床面直上より出土している。(関口功)



(674号住居跡)
①暗褐色土層　耕作土。
②暗褐色土層　ロームブロック・軽石を少量、焼土粒を稀に含む。
③暗褐色土層　ロームを主体とした層。

第168図　674号住居跡実測図



第169図　674号住居跡出土遺物実測図

第69表　674号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
169— 1	土師器 甕	覆土 破片	口 (18.6) 高　— 底　—	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	
169— 2 54	土師器 坏	床面直上 完形	口　12.6 高　3.8 底　丸底	①粗、パミス・石英粒 ②酸化焔、軟質 ③鈍い橙色	外面　口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

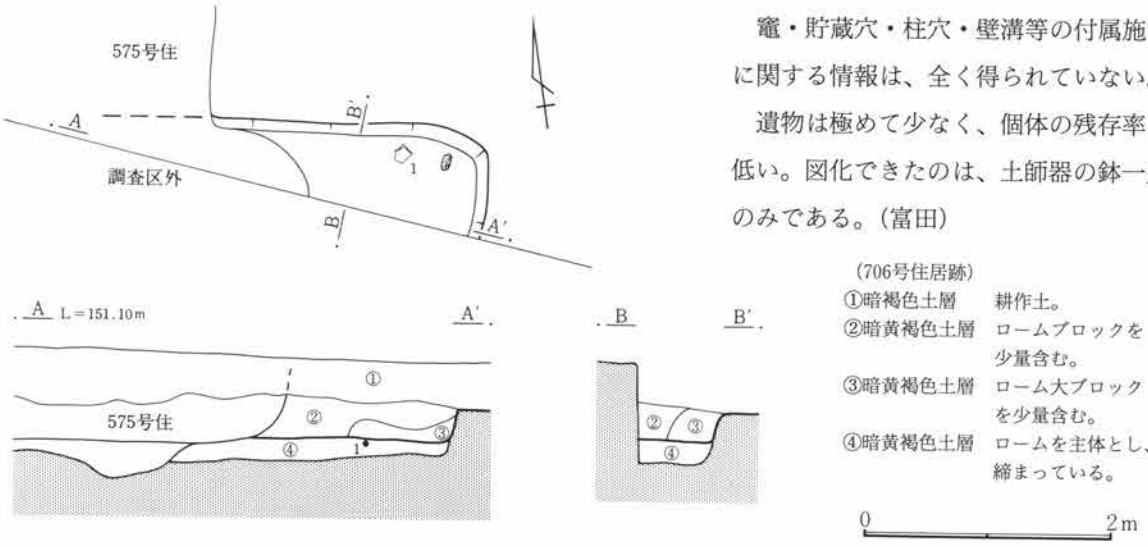
706号住居跡（第171図、第70表、図版34・54）

本住居跡は、第８次調査区北端の平坦面にあり、77—42グリッドに位置する。575号住居跡（古墳）に破壊される。

大部分が調査区外にかかるため、平面形は不明である。僅かに残る北壁と西壁から想定される主軸方向はN—10°—Eを示す。確認面からの壁高は最大で25cmを測る。床面には、ロームを主とした貼床が厚く施されていたものと思われる。

竈・貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設に関する情報は、全く得られていない。

遺物は極めて少なく、個体の残存率も低い。図化できたのは、土師器の鉢一点のみである。（富田）



第170図　706号住居跡実測図

第171図　706号住居跡出土遺物実測図

第70表　706号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
171－1 54	土師器 鉢	床面直上 ¼残存	口 (18.9) 高　－ 底　－	①粗、砂粒 ②酸化焔、軟質 ③浅黄色	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ。	

595・660号住居跡（第172図、第71表、図版56）

595号住居跡は『矢田遺跡III』で報告済みであるが、整理終了後、新たに墨書土器が発見されたので今回報告する。釈文は「名」である。660号住居跡は今回報告対象であるが、時期が異なることや、墨書土器という文字資料であることから別に掲載した。本来は660号住居跡と重複する平安時代の住居跡（651・653・654・657号住居跡）のいずれかに伴うものであろう。釈文は不明である。

今回の２点を加え、矢田遺跡で出土した墨書土器は合計44点となる。

第172図　595・660号住居跡出土遺物実測図

第71表　595/660号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴	備　考
172－9 56	須恵器 高台付埦	竈覆土 破片	口　－ 高　－ 底 (6.8)	①普、黒色鉱物粒 ②還元焔、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部糸切り高台貼付。	墨書土器
172－25 56	須恵器 坏	覆土 ¼残存	口 (11.8) 高 3.9 底 (5.8)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焔、やや軟質 ③浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	墨書土器

Ⅵ まとめ

「甘楽の谷」あるいは「かぶらの谷」と呼ばれる鏑川流域に発達した河岸段丘上、殊に矢田遺跡の立地する上位段丘上は県内でも有数の遺跡地帯とされていた。今回の関越道上越線（正式名称は上信越自動車道）の建設に伴う発掘調査は、その遺跡地帯に長大なトレンチが設定されたと言え、考古学的資料に関する情報量を飛躍的に増大させ、多くの成果が報告されつつある。

矢田遺跡の調査対象面積は約90,000㎡におよび、発掘調査は昭和61年度より開始され、平成３年度まで一時中断はあるものの、都合六年度にわたって行われた。その間、『矢田遺跡』『矢田遺跡Ⅱ』『矢田遺跡Ⅲ』として平安時代に属すると思われる合計271軒の住居跡の報告が終了した。740軒以上の住居跡が確認されている本遺跡においては、整理作業は緒についたばかりといえよう。したがって、集落全体の時期的展開を含めたより総合的な分析については、掘立柱建物跡、溝、土壙、井戸等の全ての遺構・遺物の整理が終了した段階で検討する予定である。

本報告では、旧石器時代・縄文時代の諸遺構と古墳時代の住居跡を対象としているが、以下、時代別に整理してまとめとしたい。

旧石器時代

今回の上越線関連の発掘調査によって、鏑川流域の多くの遺跡で旧石器が確認されたが、矢田遺跡でも第11次調査区のＡＴ層下から１号ブロックと１号礫群が各１箇所で出土した。石器の形態分類や編年はもとより、集団構造の把握に際しての基礎資料の蓄積がなされたものと思われる。

縄文時代

確認された遺構は、住居跡３軒、埋甕７基、土壙３基であるが、所属年代はいずれも中期後半の加曽利Ｅ３式期に比定される。本遺跡のように時期の限定された、いわゆる小規模集落の位置づけは今後の研究課題であろう。

古墳時代

今年度から古墳時代の住居跡の整理に着手したわけであるが、その内訳は前期４軒、中期２軒、後期48軒の合計54軒である。前期古墳の形成に密接な関係を有するものと思われる石田川式土器を伴う住居跡に関しては、今後の資料の増加を期待したい。鏑川流域の地域展開の特徴として、後期段階以降において集落規模の飛躍的な拡大傾向が指摘できるが、西隣の多胡蛇黒遺跡でも同様な所見が得られており、墓域と考えられる多胡古墳群も含め、周辺諸遺跡の内容をあわせて検討する必要があろう。後期に関しては、顕著な遺構・遺物は確認されていないが、462号住居跡では、住居廃絶時の状況が最終的に推定できる良好な遺物の出土状態が確認された。一方、須恵器の出土例が少ないことは、本地域の地域的特色と言える。

これらの事は、既に指摘されていることばかりであり、今後の整理にあたっては、より慎重な遺構・遺物の分析は勿論、蓄積された資料をもとに当時の地域の様相と、広大な台地上で生活した人々の姿を正しく導き出して行く必要があると考える。

最後に、関係各機関はもとより、酷暑や極寒の中で実際の調査に従事した発掘作業員及び、遺構・遺物の整理作業に携わった整理補助員等多くの方々の協力に謝意を表し、まとめとしたい。

発掘報告書抄録

フリガナ	ヤタイセキ
書名	矢田遺跡Ⅳ
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第17集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第152集
編著者名	富田一仁
編集機関	群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2
発行年月日	西暦1993年3月26日

フリガナ 所収遺路	フリガナ 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
矢田（ヤタ）	タノグン ヨシイマチ オオアザヤタ 多野郡 吉井町 大字矢田	103632	10005— 00124	361427	1385945	19860401— 19900827 19911105— 19911126	90,000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢田	石器ブロック	旧石器時代	石器ブロック1	台形様石器 石核　剝片	古墳時代後期～奈良・平安時代を中心とした集落址 今回は旧石器・縄文・古墳時代の遺構、遺物を報告
	礫群	旧石器時代	礫群1		
	集落	縄文時代中期	竪穴住居跡3軒 埋甕7基 土壙3基	加曽利E3式期土器	
	集落	古墳時代前期 古墳時代中期 古墳時代後期	竪穴住居跡4 竪穴住居跡2 竪穴住居跡48	S字状口縁台付甕 土師器高坏 土師器甕・土師器坏	

写　真　図　版

矢田遺跡全景航空写真（上が東）

第 8 次調査区航空写真（上が東）

第 7 次調査区航空写真（上が東）

遺跡遠景（南から）

遺跡遠景（北から）

遺跡遠景（南から）

調査風景

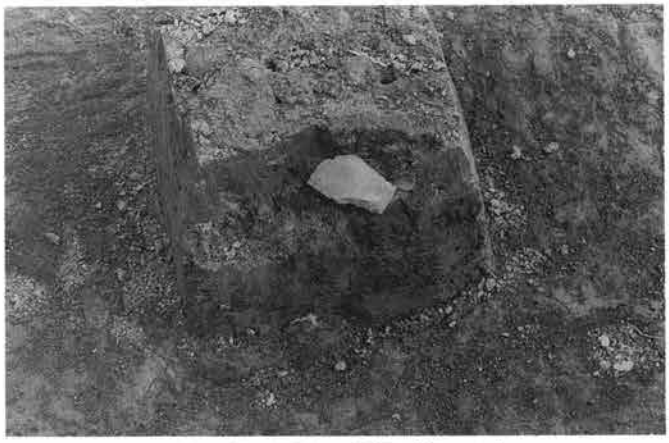
多胡蛇黒遺跡遠景（東から）

旧石器時代調査区全景（南から）

旧石器時代調査区遠景（南から）

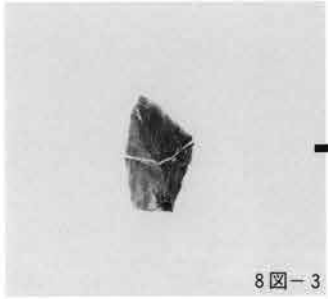
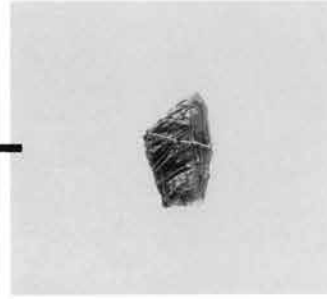
旧石器時代調査状況（南から）

台形様石器出土状況（南から）

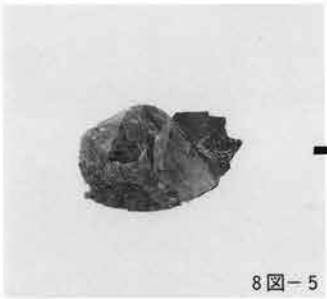
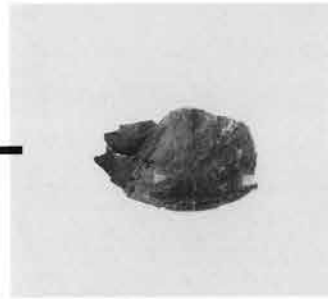


台形様石器出土状況（北から）

8図－1

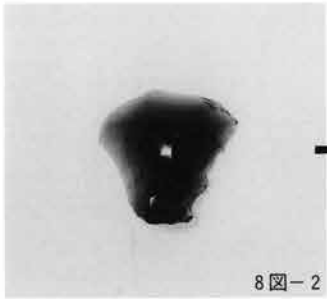
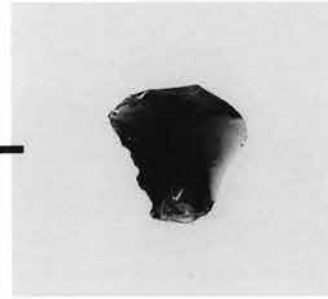



8図－3

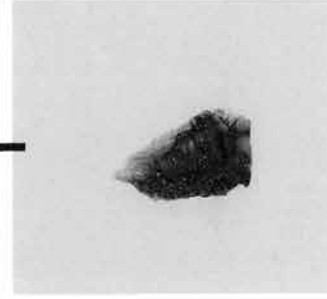



8図－5

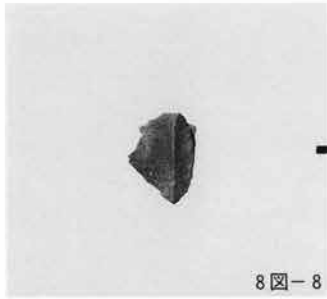
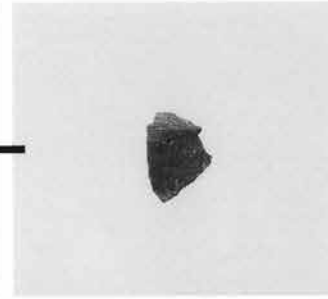
8図－4

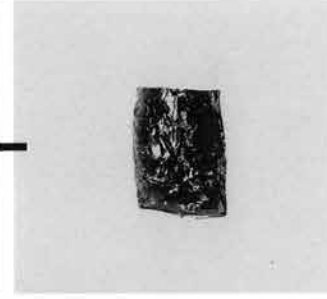
8図－2



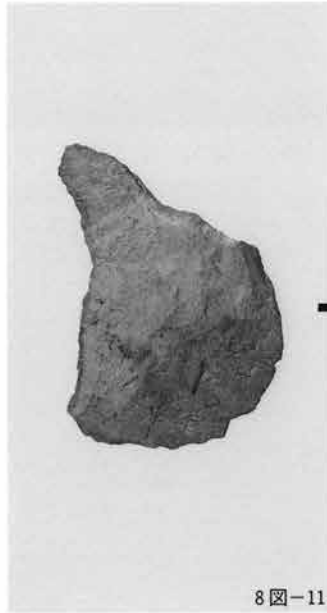
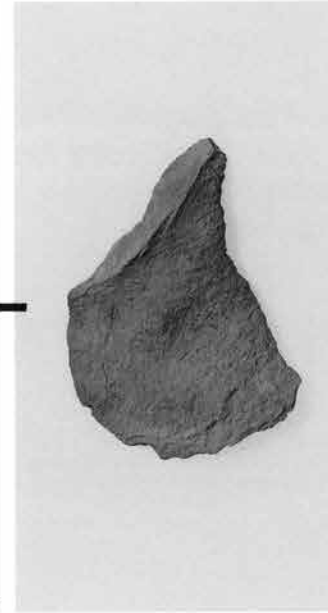
8図－6

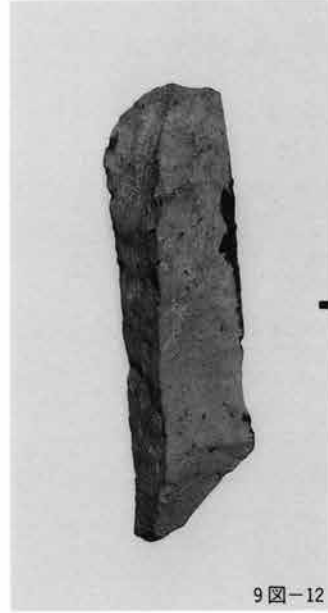
8図－8



40図－1

8図－11



9図－12

541号住居跡全景（南から）

541号住居セクション（南から）

541号住居跡遺物出土状況（東から）

541号住居跡遺物出土状況（南から）

541号住居跡遺物出土状況（北から）

541号住居跡遺物出土状況（北から）

541号住居跡炉跡（北から）

541号住居跡掘り方全景（南から）

574号住居跡全景（北西から）

574号住居跡全景（東から）

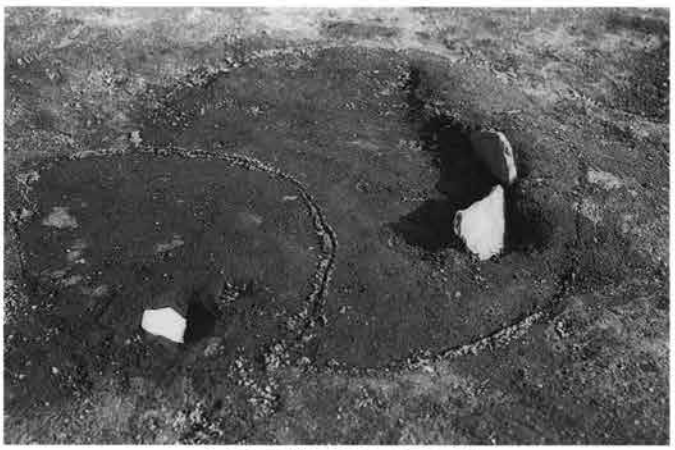
574号住居跡炉全景（南東から）

578号住居跡全景（西から）

578号住居跡遺物出土状況（東から）

1号埋甕（西から）

1号埋甕（北から）



2号埋甕確認状況（西から）

2号埋甕遺物出土状況（北から）

2号埋甕遺物出土状況（南から）

3号埋甕（東から）

4号埋甕全景（南から）

5号埋甕（東から）

6号埋甕全景（西から）

7号埋甕セクション（南から）

1号土壙（南から）

2号土壙（東から）

3号土壙（南から）

図版　10

541住－3

541住－1

541住－4

541住－7

541住－2

541住－14

574住－1

541住－8

541住－18

574住－2

541住－16

574住－3

574住－23

574住－19

574住－11

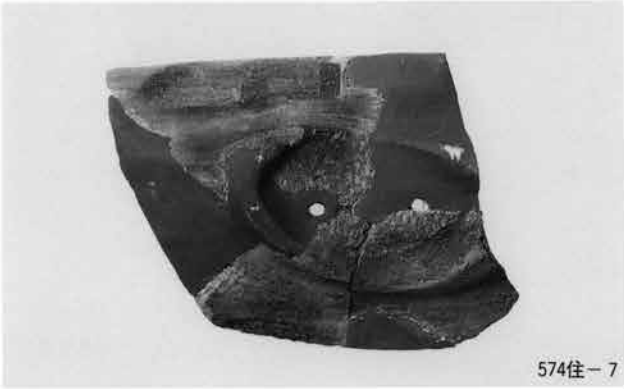
574住－8

574住－4

574住－12

574住－6

574住－20


574住－7

574住－9

574住－18

574住－17

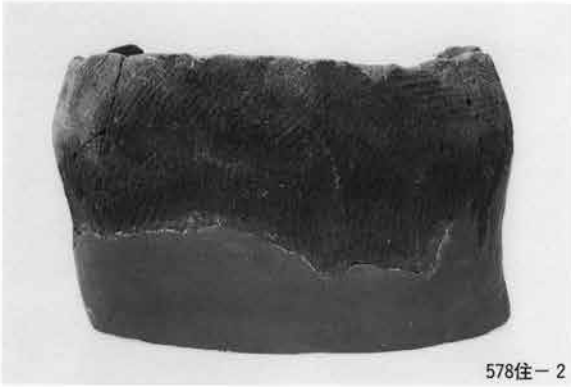
574住－27

574住－13

574住－21

574住－26

574住－22


578住－2

578住－1

578住－4

578住－3

578住－5

578住－13

1号埋甕－1

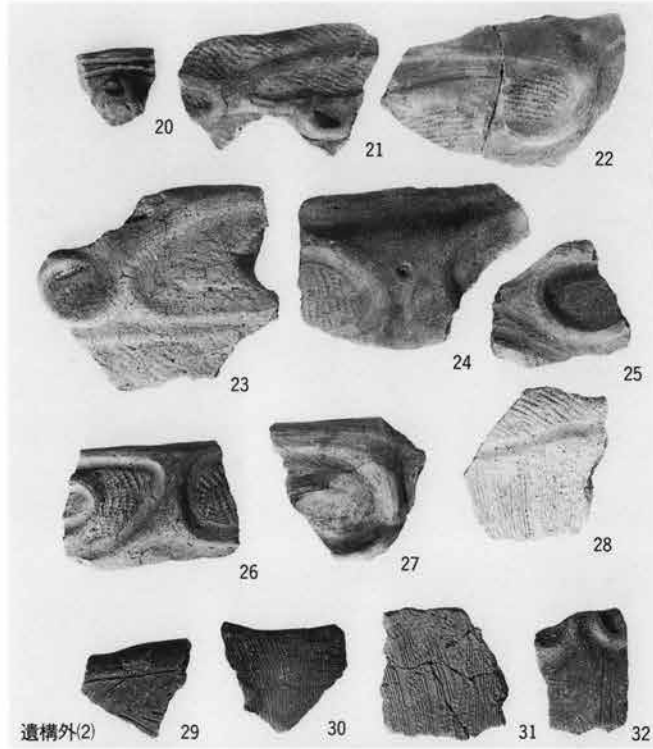
2号埋甕－1

5号埋甕－1

7号埋甕－2

7号埋甕－1

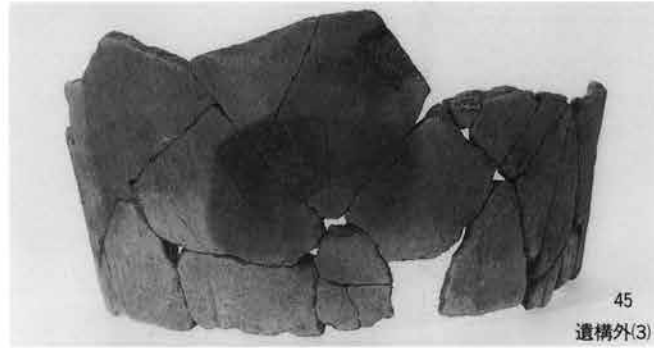
3号埋甕－1

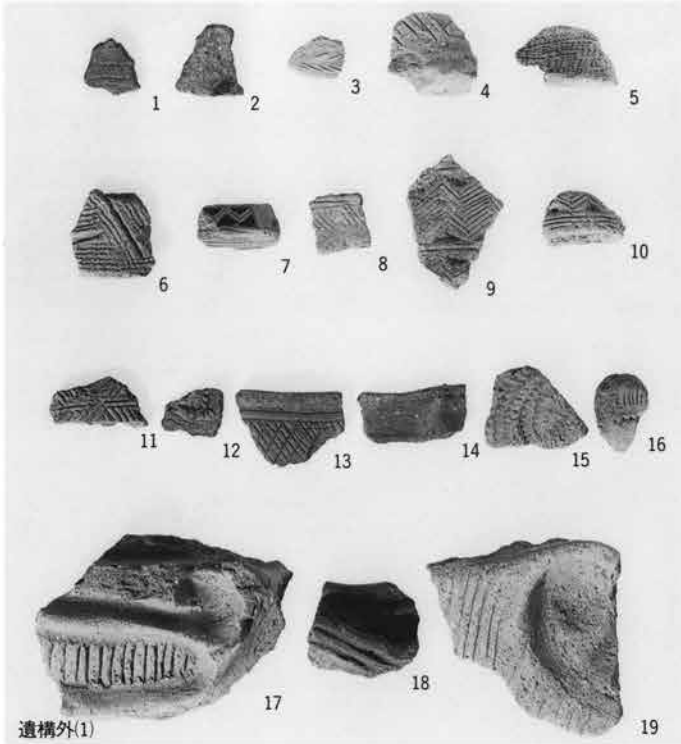


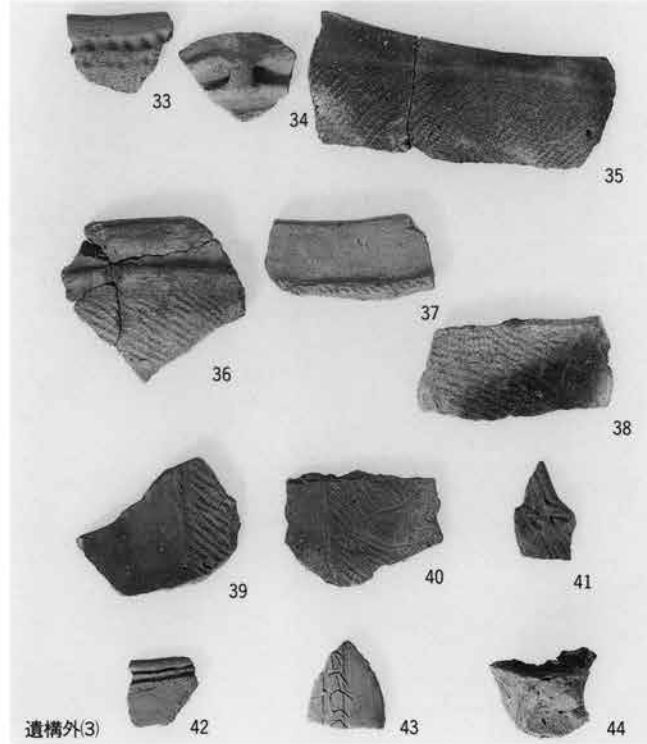
1号土壙－1

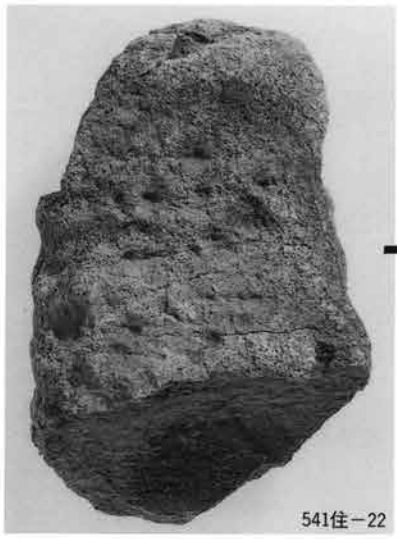
1号土壙－2

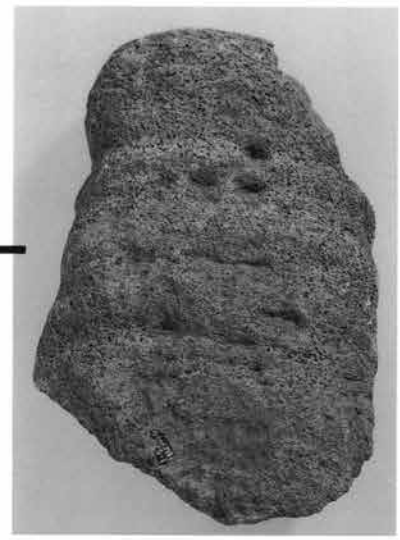
1号土壙－4








541住－22

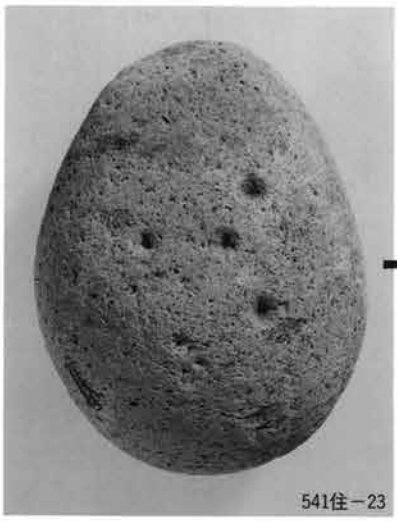


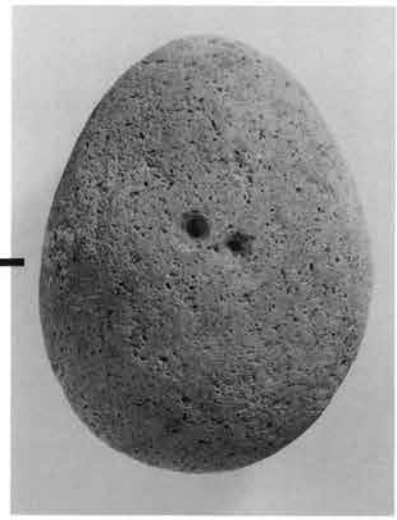
541住－21

541住－20

574住－31

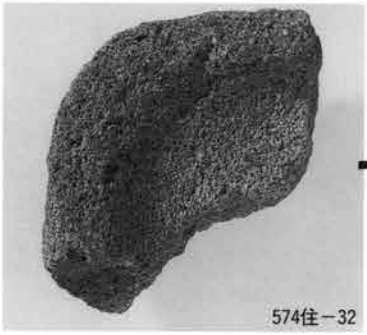
574住－30

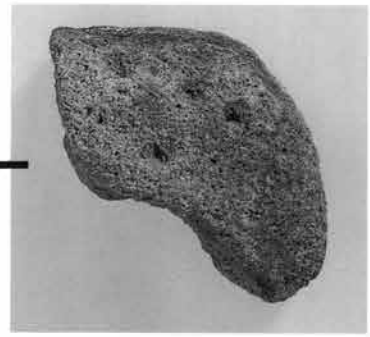

541住－23



578住－15

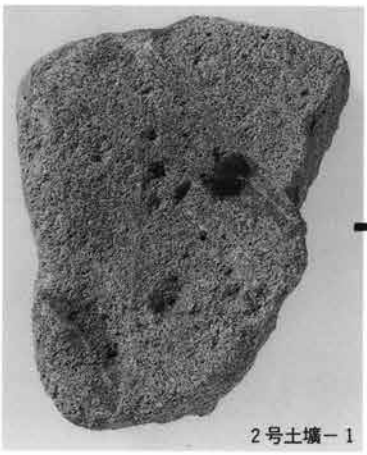
574住－28

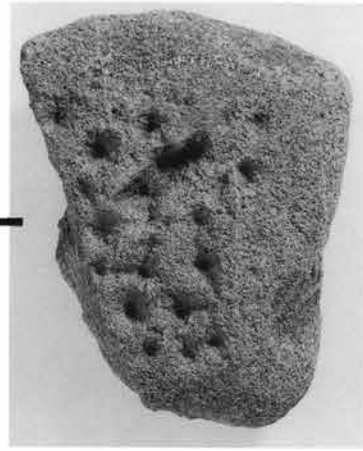

574住－32



574住－29

3号埋甕－2


2号土壙－1



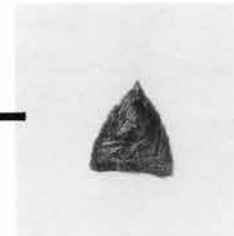
578住－16

1号土壙－5

遺外石－2

遺外石－4

遺外石－5

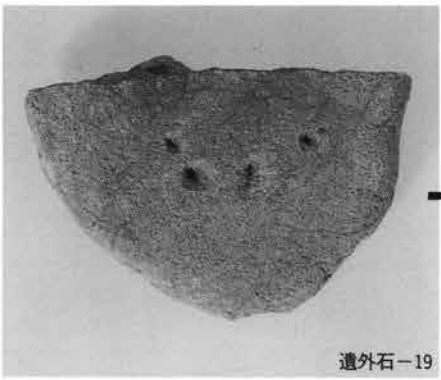


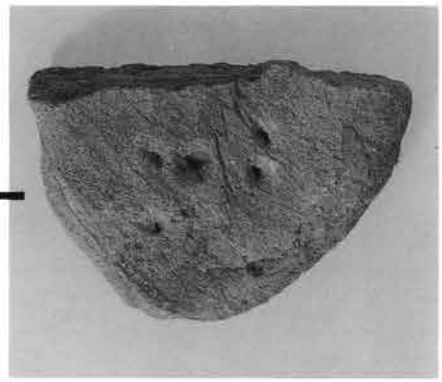
541住－19

遺外石－3

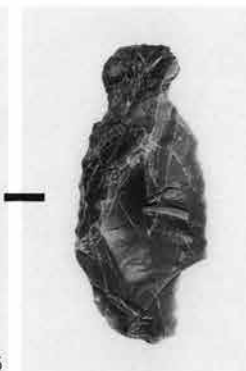
578住－14

遺外石－13


遺外石－19



遺外石－6



遺外石－17

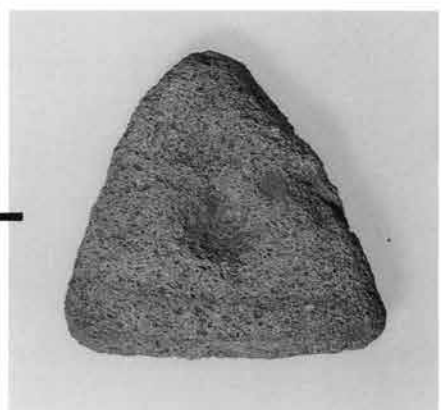
遺外石－7

遺外石－8

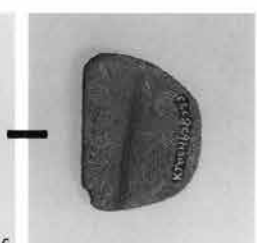
遺外石－10

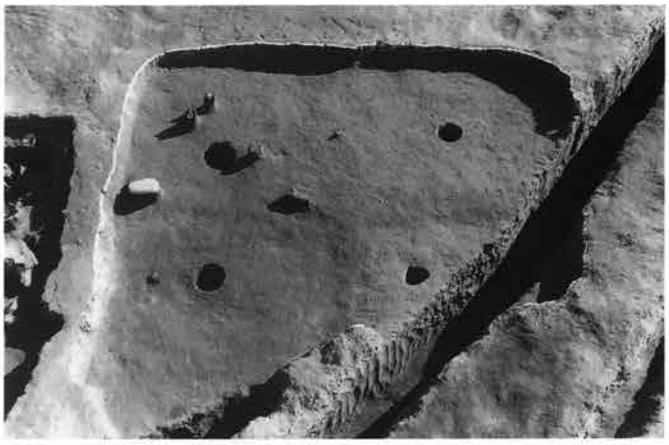
遺外石－9

遺外石－18

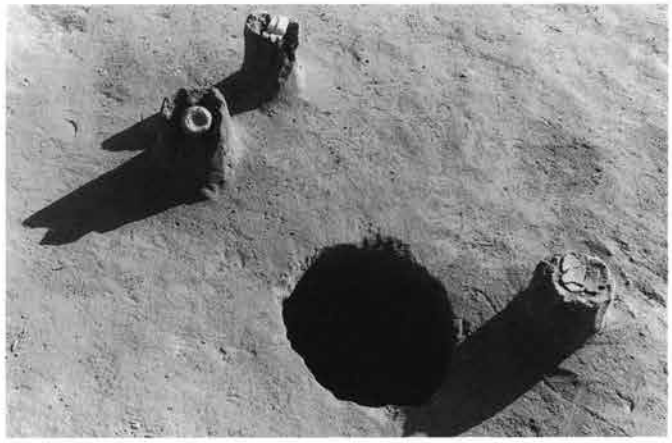


遺外石－16



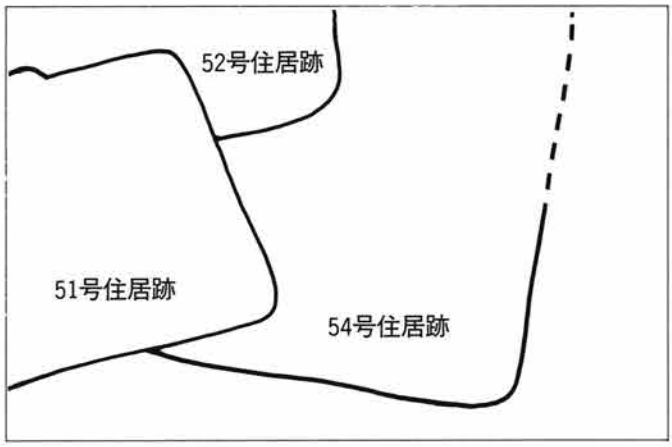


43号住居跡全景（西から）



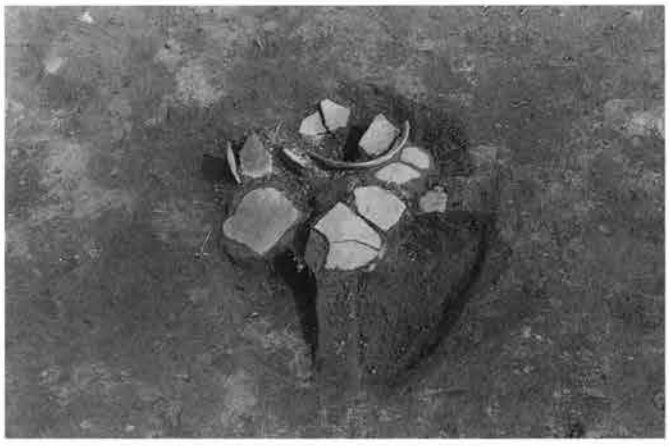
43号住居跡遺物出土状況（西から）

54号住居跡全景（西から）



591号住居跡全景（西から）

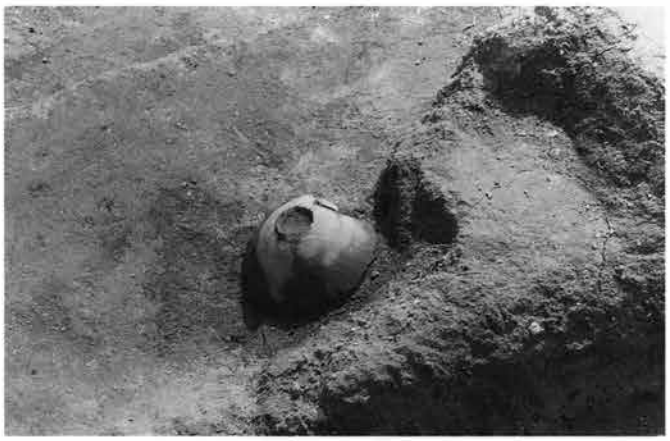
591号住居跡遺物出土状況（西から）



591号住居跡炉立割状況（西から）

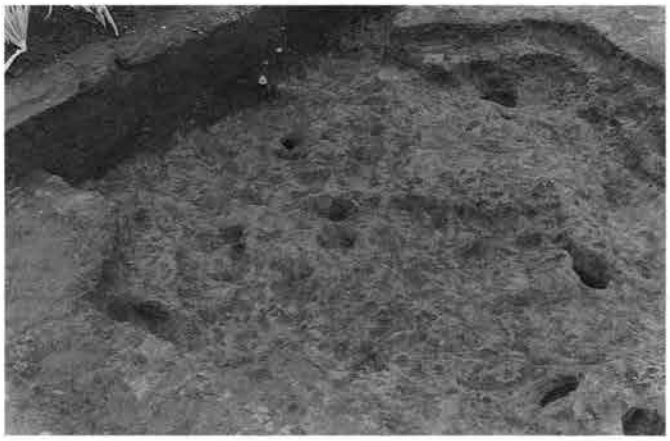
591号住居跡掘り方全景（西から）

643号住居跡全景（北から）



643号住居跡遺物出土状況（北から）

643号住居跡遺物出土状況（北から）



643号住居跡掘り方全景（北から）

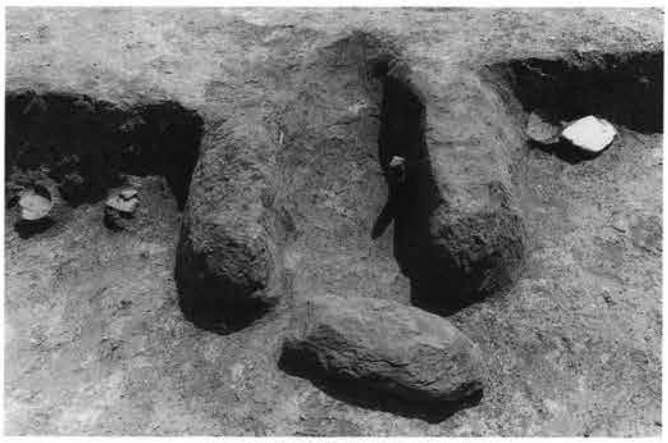
359号住居跡全景（南から）

359号住居跡貯蔵穴セクション（南から）

359号住居跡貯蔵穴（北から）

633号住居跡全景（西から）

419号住居跡全景（西から）



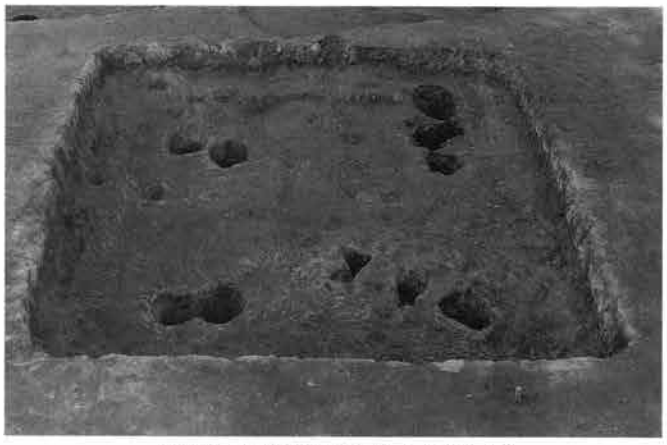
419号住居跡竈（西から）

419号住居跡掘り方全景（西から）

450号住居跡全景（南から）

450号住居跡遺物出土状況（東から）

450号住居跡竈（南から）



450号住居跡掘り方全景（南から）

453号住居跡全景（南から）

453号住居跡竈（南から）

453号住居跡掘り方全景（南から）

462号住居跡全景（西から）

462号住居跡遺物出土状況（北から）

462号住居跡竈（南から）

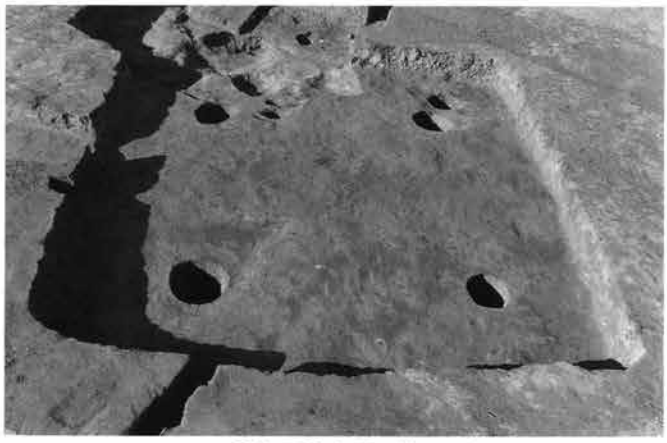
462号住居跡竈（西から）

462号住居跡竈（西から）

462号住居跡貯蔵穴（南から）

462号住居跡掘り方全景（西から）

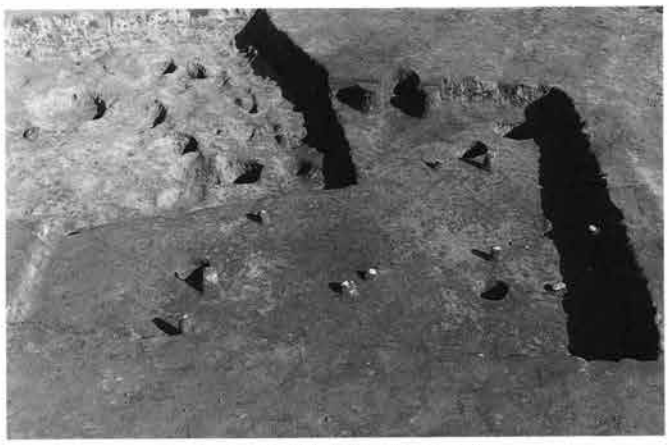
466号住居跡全景（南から）



466号住居跡全景（南から）

466号住居跡遺物出土状況（南から）

466号住居跡掘り方全景（西から）

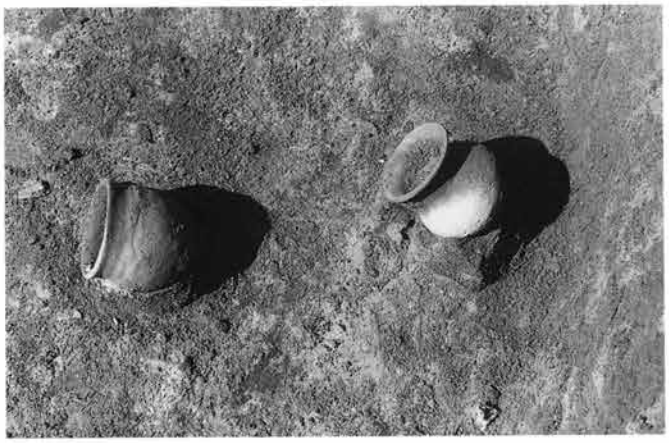


467号住居跡全景（西から）

467号住居跡掘り方全景（西から）

469号住居跡全景（西から）

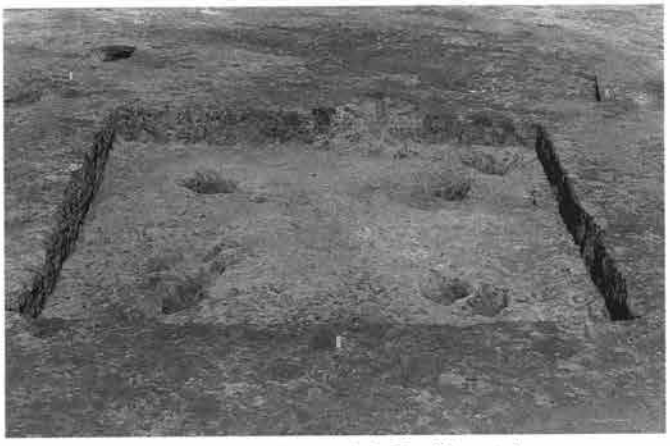
469号住居跡遺物出土状況（南から）



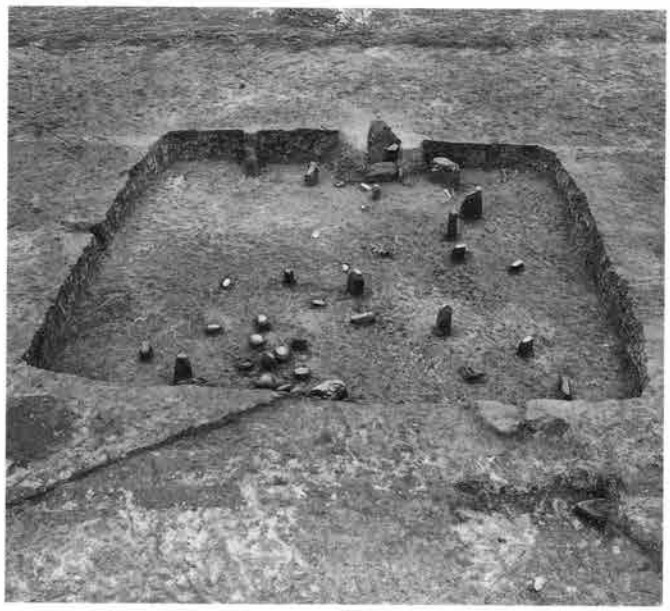
469号住居跡遺物出土状況（東から）

469号住居跡紡錘車出土状況（西から）

478号住居跡全景（南から）



478号住居跡掘り方全景（南から）



481号住居跡全景（南から）

481号住居跡遺物出土状況（西から）

481号住居跡竈（南から）

481号住居跡掘り方全景（南から）

498号住居跡全景（南から）

498号住居跡竈（西から）

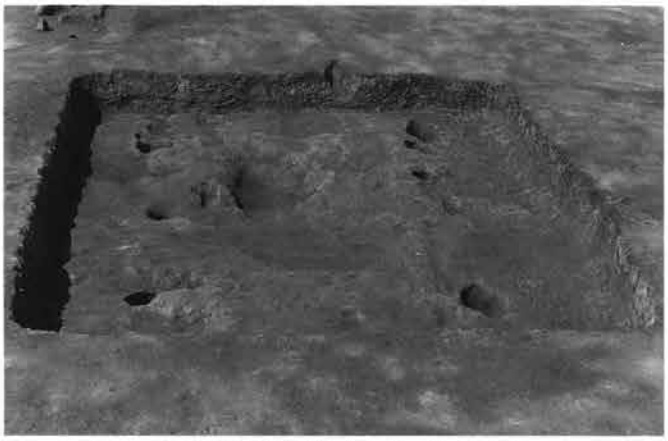
498号住居跡遺物出土状況（東から）

498号住居跡紡錘車出土状況（東から）

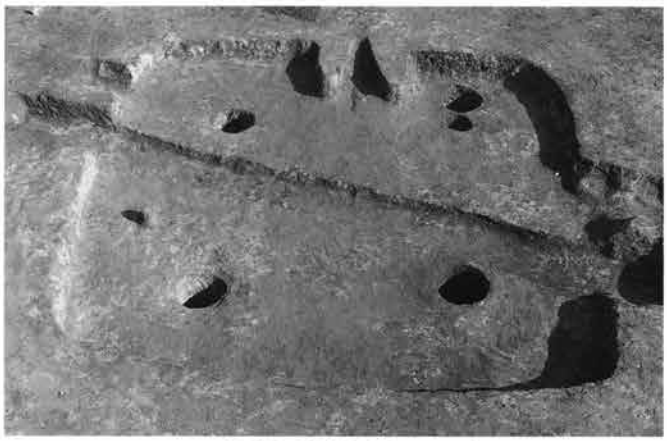
498号住居跡竈（南から）

498号住居跡竈（南から）

498号住居跡竈（南から）



498号住居跡掘り方全景（南から）



499号住居跡全景（西から）

499号住居跡掘り方全景（西から）

505号住居跡セクション（南から）

505号住居跡竈セクション（西から）

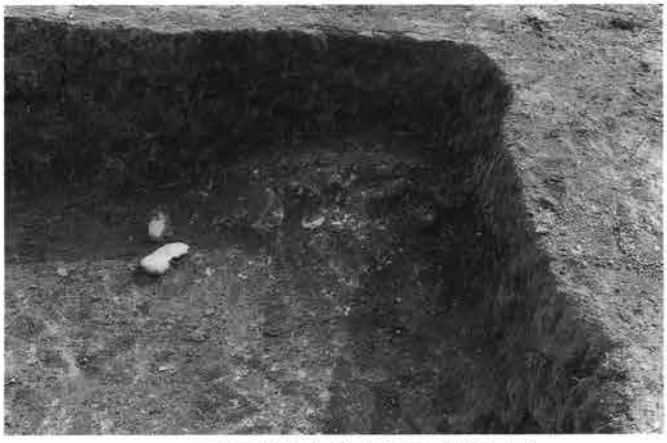
505号住居跡貯蔵穴セクション（南から）

505号住居跡掘り方全景（南から）

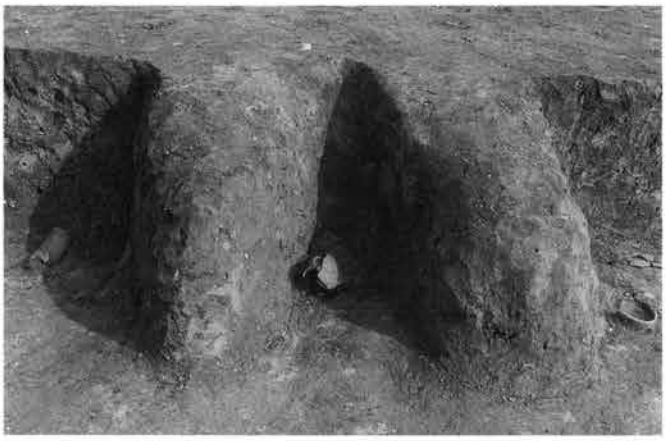
511号住居跡遺物出土状況（西から）

536号住居跡全景（西から）

540住居跡全景（南から）



540号住居跡粘土出土状況（北から）



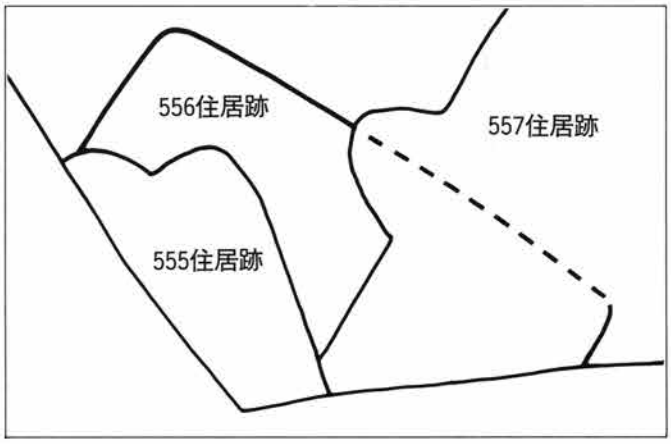
540号住居跡竈（西から）

533号住居跡全景（西から）

553号住居跡遺物出土状況（北から）

553号住居跡掘り方全景（西から）

556号住居跡全景（西から）



558号住居跡全景（西から）

558号住居跡竈遺物出土状況（南から）

561号住居跡全景（西から）

561号住居住竈セクション（西から）

561号住居跡掘り方全景（西から）

562号住居跡掘り方全景（西から）

562号住居跡、10号・11号井戸跡全景（西から）

564号住居跡全景（西から）

564号住居跡遺物出土状況（西から）

564号住居跡掘り方全景（西から）

566号住居跡掘り方全景（南から）

567号住居跡掘り方全景（西から）

575号住居跡全景（西から）

575号住居住竈（西から）

575号住居跡掘り方全景（西から）

576号住居跡全景（東から）

576号住居跡竈（東から）

576号住居跡竈（東から）

576号住居跡掘り方全景（東から）

592号住居跡全景（南から）

592号住居跡竈付近遺物出土状況（南から）

592号住居跡遺物出土状況（西から）

592号住居跡掘り方全景（南から）

609号住居跡掘り方全景（北から）

610号住居跡全景（南から）

610号住居跡竈（南から）

610号住居跡掘り方全景（南から）

612号住居跡全景（東から）

613号住居跡全景（東から）

615号住居跡掘り方全景（南から）

615号住居跡竈セクション（東から）

619号住居跡全景（東から）

619号住居跡竈（東から）

620号住居跡掘り方セクション（南から）

619・620号住居跡掘り方全景（東から）

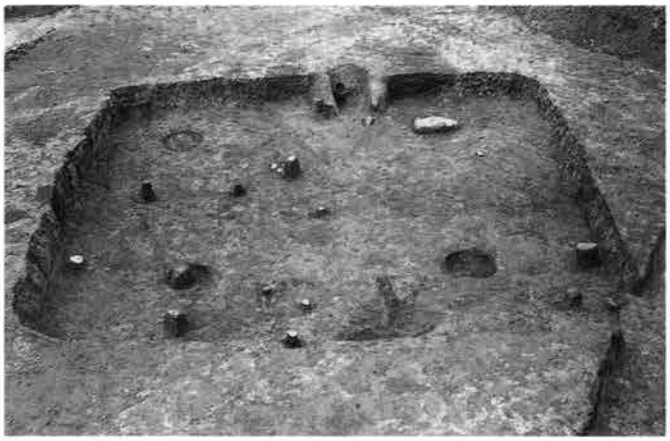
623号住居跡全景（東から）

623号住居跡竈付近遺物出土状況（東から）

623号住居跡掘り方全景（東から）

625号住居跡全景（西から）

625号住居跡掘り方全景（西から）



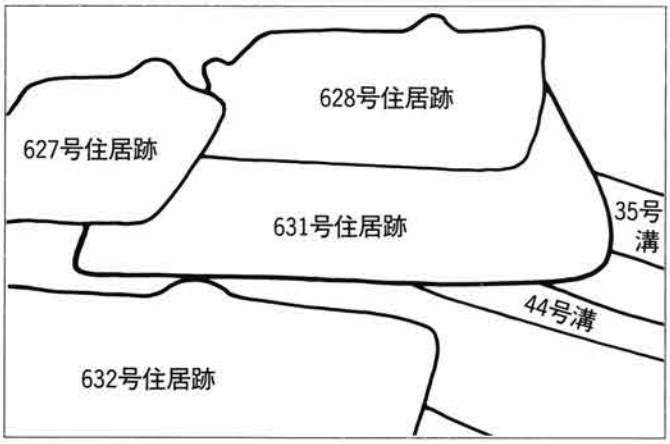
626号住居跡全景（東から）

626号住居跡竈セクション（東から）

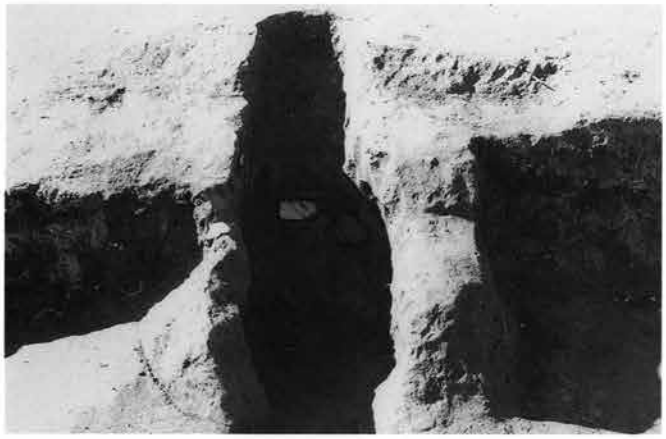
626号住居跡掘り方竈セクション（南から）

626号住居跡掘り方全景（東から）

631号住居跡全景（西から）



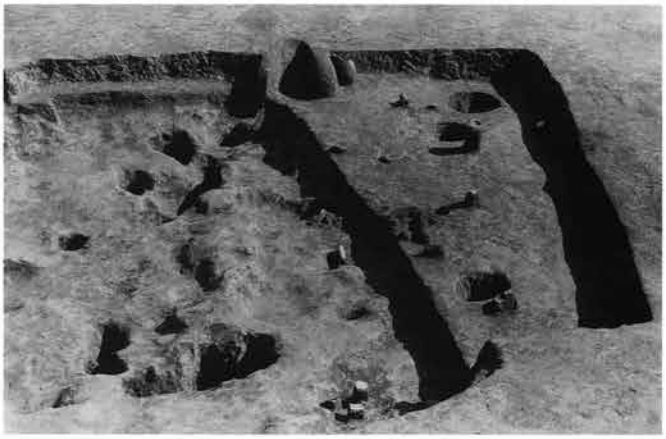
632号住居跡掘り方全景（東から）



632号住居跡竈（東から）

632号住居跡掘り方竈（東から）

632号住居跡掘り方全景（東から）



635号住居跡全景（西から）

635号住居跡竈セクション（西から）

635号住居跡掘り方全景（西から）

642号住居跡全景（西から）

642号住居跡遺物出土状況（南から）

642号住居跡竈（西から）

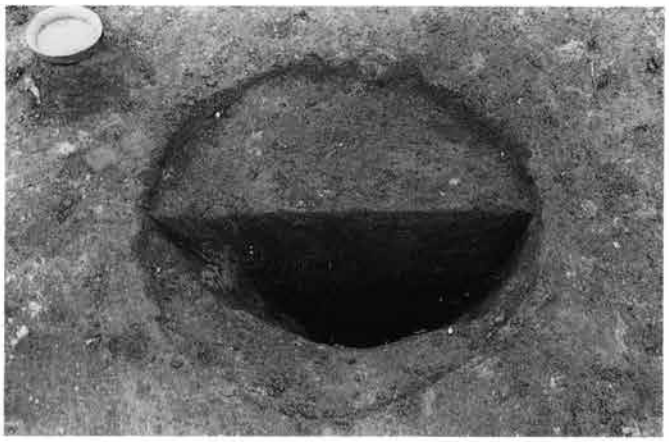
642号住居跡掘り方全景（西から）

644号住居跡全景（北から）

658号住居跡全景（西から）

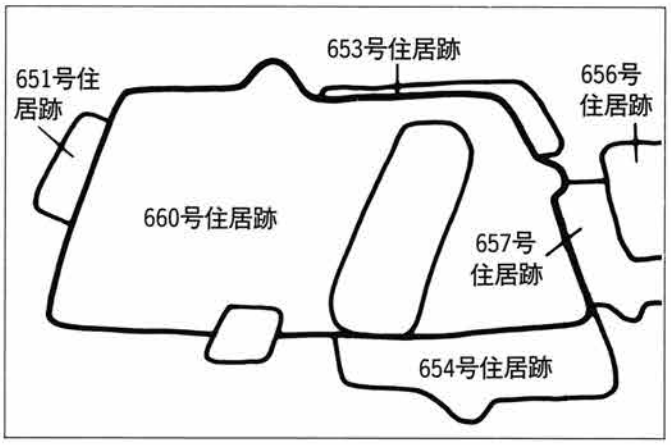
658号住居跡竈（西から）

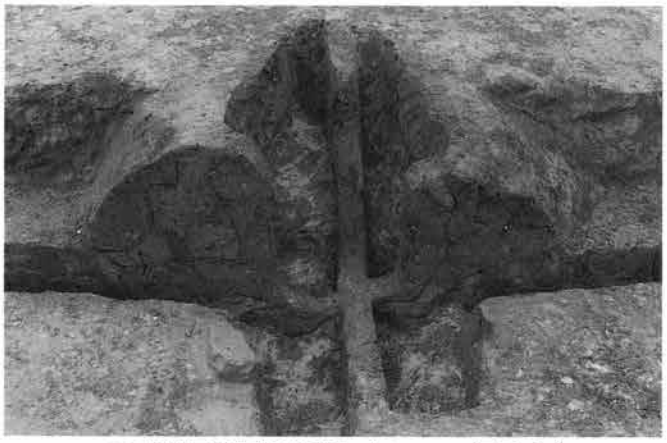
658号住居跡掘り方竈セクション（西から）



658号住居跡貯蔵穴（西から）

660号住居跡全景（東から）





660号住居跡掘り方竈セクション（東から）

672・673・674号住居跡全景（西から）

672・673・674号住居跡遺物出土状況（東から）

706号住居跡セクション（東から）

43住－1

43住－2

54住－1

591住－1

643住－1

643住－3

359住－2

359住－1

359住－3

359住－6

633住－1

633住－2

633住－6

633住－3

633住－7

633住－9

419住－1

419住－2

419住－3

419住－4

419住－5

450住－1

450住－6

450住－5

450住－7

450住－8

450住－9

450住－10

450住－11

450住－12

453住－1

453住－2

453住－3

462住－1

462住－2

462住－6

462住－8

462住－12

462住－14

462住－3

462住－4

462住－5

462住－10

462住－11

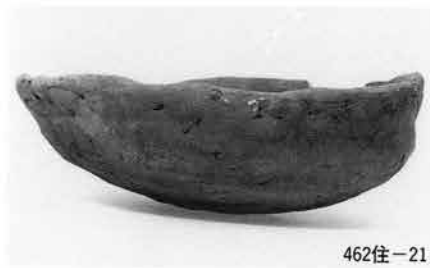
462住－7

462住－15

462住－18

462住－9

462住－19


462住－21

462住－20

462住－16

462住－17

462住－22

462住－23

462住－24

462住－25

466住－1

466住－3

466住－26

466住－5

466住－7

466住－2

466住－6

466住－4

466住－8

466住－12

466住－13

466住－14

466住－15

466住－16

466住－17

466住－18

466住－11

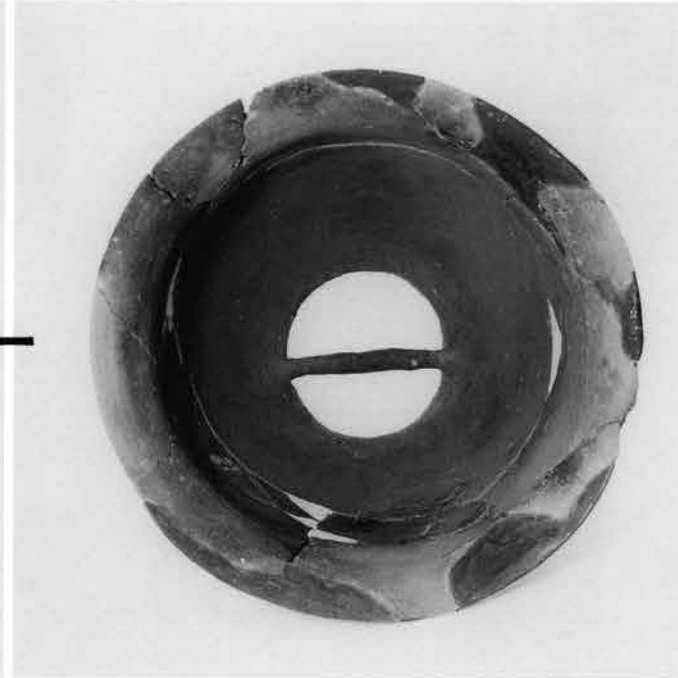
466住－22

467住－1

467住－3

467住－2

469住－2



469住－1

469住－3

469住－4

469住－6

469住－20

469住－10

469住－8

469住－9

469住－15

469住－11

469住－14

469住－7

469住－17

469住－16

469住－18

469住－19

469住－21

478住－1

478住－3

478住－4

478住－5

478住－6

478住－9

478住－10

478住－7

478住－8

478住－11

478住－13

478住－14

478住－15

478住－16

478住－17

478住－19

478住－20

481住－1

481住－3

481住－2

481住－4

481住－6

481住－5

481住－11

481住－7

481住－8

481住－9

481住－10

481住－12

481住－13

481住－14

481住－15

481住－16

481住－17

481住－20

481住－18

481住－21

481住－19

481住－23

481住－22

481住－24

481住－25

481住－26

481住－28

498住－2

498住－1

498住－3

498住－25

498住－19

498住－20

498住－18

498住－17

498住－16

498住－22

498住－30

498住－29

498住－28

498住－31

498住－33

498住－34

498住－35

498住－36

498住－37

498住－38

498住－39

498住－40

498住－41

498住－42

498住－43

499住－1

505住－1

505住－2

511住－2

511住－1

511住－6

511住－4

511住－7

536住－1

536住－2

536住－3

536住－4

536住－5

540住－1

540住－2

540住－3

540住－4

540住－6

540住－5

553住－1

553住－2

553住－3

553住－4

553住－5

553住－7

553住－8

553住－9

553住－10

553住－11

553住－6

556住－1

558住－3

558住－2

558住－4

561住－1

561住－2

561住－5

561住－11

561住－8

561住－13

561住－12

564住－1

561住－7

561住－14

564住－3

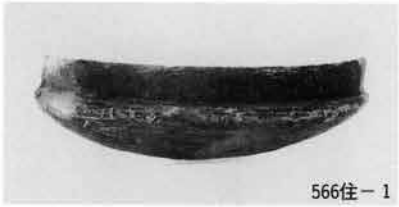
564住－7

564住－2

564住－4

564住－6

564住－8


566住－1

567住－1

567住－2

575住－1

576住－1

576住－6

592住－1

576住－8

592住－2

576住－4

576住－7

592住－6

592住－5

592住－10

592住－7

592住－11

592住－8

609住－1

592住－15

609住－3

610住－1

610住－2

610住－3

615住－1

615住－6

610住－4

615住－4

619住－5

613住－2

619住－2

619住－6

619住－1

619住－4

619住－14

619住－7

620住－1

619住－8

623住－1

623住－4

623住－7

632住－6

623住－8

625住－2

626住－3

626住－4

626住－5

632住－3

635住－4

642住－1

642住－2

635住－3

642住－9

642住－7

642住－11

642住－8

642住－12

658住－2

658住－1

658住－4

658住－9

658住－10

658住－3

658住－8

658住－12

658住－6

659住－1

659住－4

660住－12

659住－5

659住－2

660住－18

660住－2

659住－3

660住－1

660住－3

660住－4

660住－5

660住－6

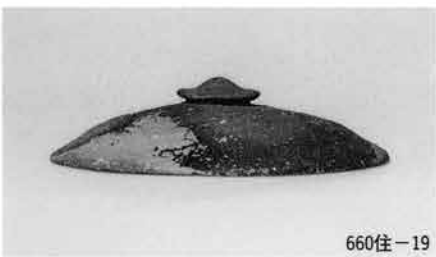
660住－7

660住－8

660住－9

660住－10

660住－11


660住－19

672住－1

672住－2

672住－3

673住－2

673住－3

673住－1

673住－4

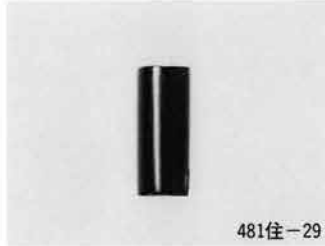
673住－5

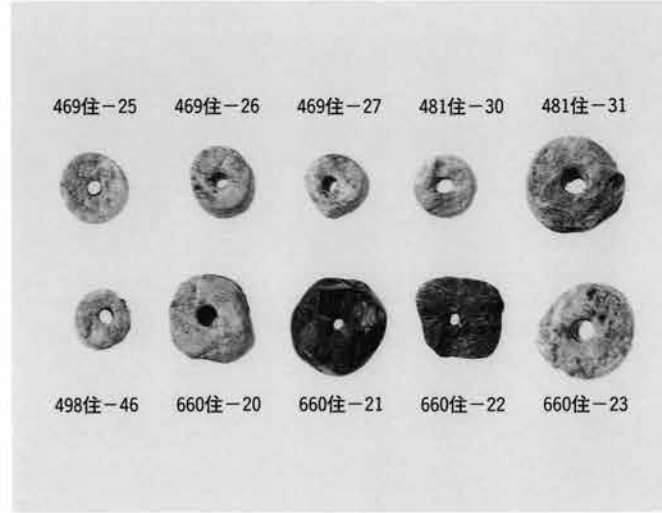
674住－2

706住－1

540住－7

505住－3


481住－29

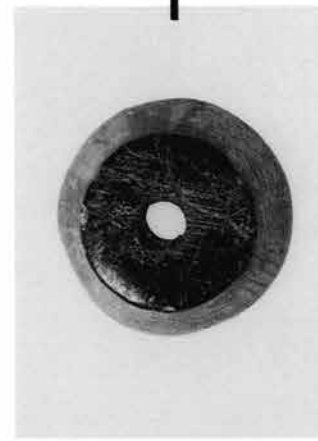


469住－23

469住－24

478住－21

498住－45



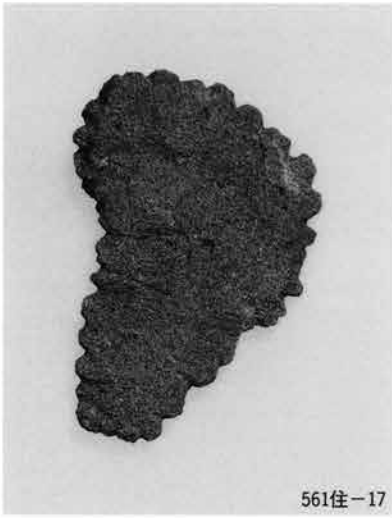
467住－4

558住－8

562住－2

642住－13

658住－13

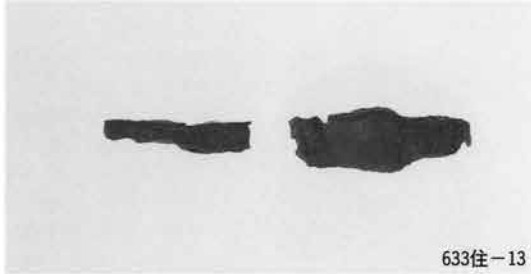

561住－17

536住－8

613住－3

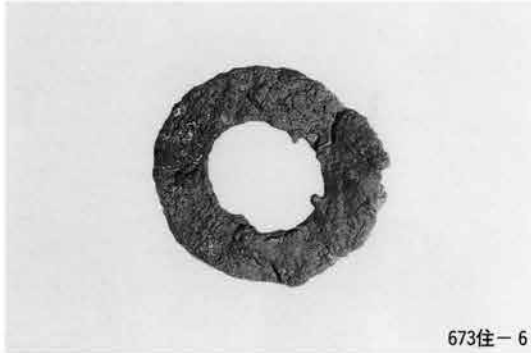
623住－10

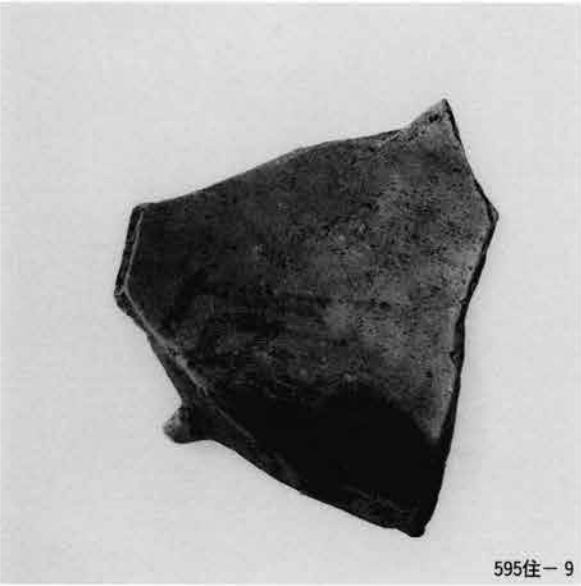
592住－16

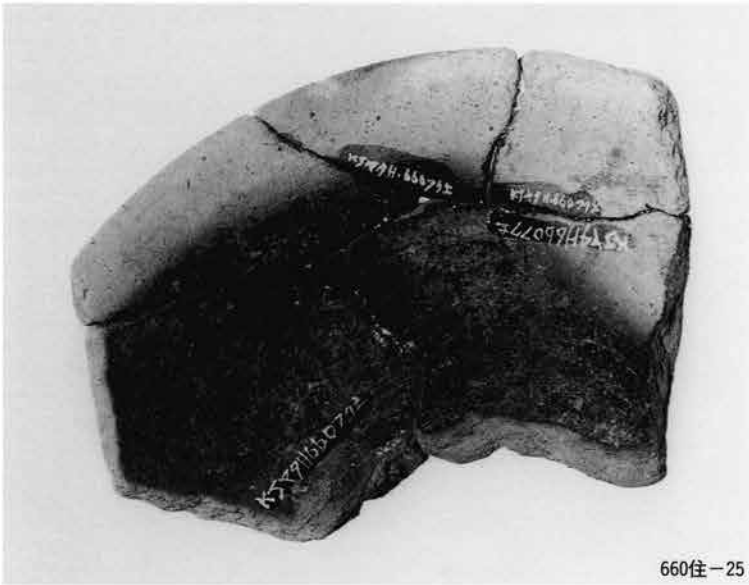

633住－13

642住－14

660住－24


673住－6


595住－9


660住－25

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
調 査 報 告 第 152 集

矢 田 遺 跡 Ⅳ

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第17集

平成5年3月19日　印刷
平成5年3月26日　発行

編集／㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784－2
電話 (0279) 52－2511(代表)

発行／群 馬 県 考 古 資 料 普 及 会
勢多郡北橘村大字下箱田784－2
電話 (0279) 52－2511(代表)

印刷／朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社

矢田遺跡遺構分布図(1／1000)平成４年12月末現在